

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236

史跡 鬼城山 2

「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査

2013

岡山県教育委員会



Ⅱ-12区 礎石建物7 (南から)



1 II-9区 礎石建物2 (南から)



2 II-2区 礎石建物6 (東から)



1 IV-1区 土手状遺構1 (北東から)



2 IV-2区 土手状遺構2 (南東から)

巻頭図版 4



1 II-12区 礎石建物7礎石8柱痕跡(南東から)



2 II-2区 礎石建物6礎石13と土坑22(東から)



3 II-9区 土坑37(東から)



4 V-2区 土坑59(南から)



5 III-2区 鍛冶炉2(南から)



6 III-3区 鍛冶炉4(南西から)



7 III-3区 鍛冶炉6(南から)

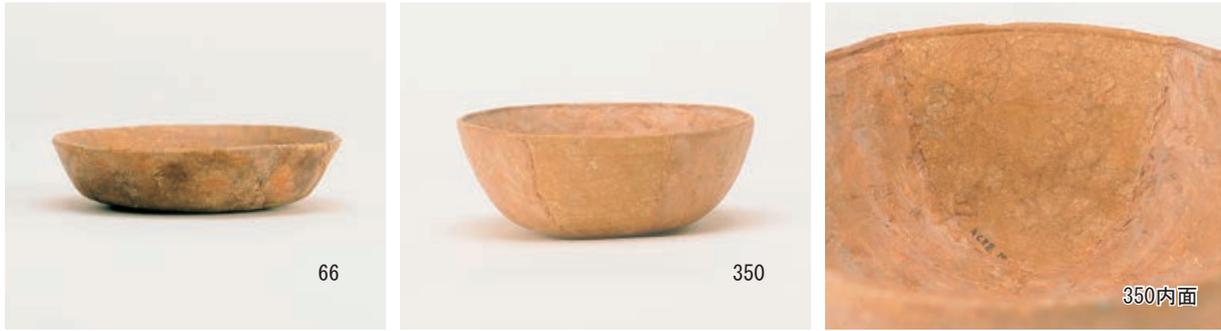


8 III-3区 鍛冶炉8(南西から)

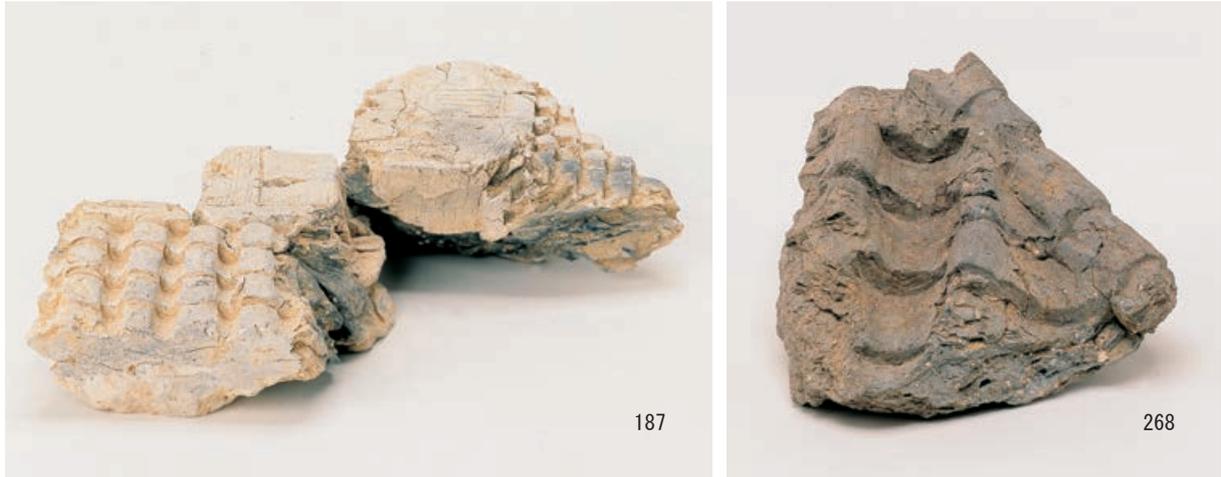


I 区出土土器群

卷頭図版 6



1 I区・V区出土畿内産土師器



2 II区出土瓦塔



3 III区出土鉄滓・韃羽口・砥石（県報告203-S4）

序

史跡鬼城山は、標高400～600m級の山々が連なる吉備高原の南端に位置し、山頂からは遠く瀬戸内海や四国の山々を、眼下には肥沃な総社平野を望むことができます。

この鬼城山は、通称「鬼ノ城」と呼ばれ、古くから温羅^{うら}伝承の舞台として人々に親しまれてきましたが、昭和46年に古代山城の一つとして報告され全国的に注目されることになりました。その後、昭和53年に鬼ノ城学術調査委員会による調査がはじめて実施され、城壁線や水門の構造などが確認されました。さらに、平成6年からは総社市教育委員会が、各城門や角楼を含む古代山城の具体的な様相を明らかにするとともに、それらの成果をもとに西門・角楼などが復元・整備され、現在では岡山県を代表する史跡となっています。

一方、城内については県有地が大半を占めることから、平成11年度に岡山県教育委員会が城内確認調査を実施し、須恵器が多く出土する地点や礎石建物、鍛冶工房、土手状遺構の確認など鬼城山の城内利用について多くの所見を得ることができました。

この確認調査の成果を受け、岡山県教育委員会では「新世紀おかやま夢づくりプラン」の一環として「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査を計画し、平成18年度から6年間にわたり発掘調査を行いました。

その結果、新たな礎石建物や全国的にも調査例の少ない鍛冶工房、土手状遺構の存在が明らかとなったほか、山城の年代を推定する根拠となる土器群の検出など貴重な成果をあげることができました。

これらの発掘成果を収載した本書が、今後の鬼城山の保護・保存に活用されるとともに、わが国や地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施、報告書の作成にあたりましては、総社市教育委員会及び鬼城山整備委員会をはじめ多くの方々から有益な御指導・御教示を賜りました。また、地域の皆様をはじめ、北の吉備路保全協会、岡山県備中県民局からは多大な御理解と御協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成25年1月

岡山県古代吉備文化財センター

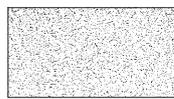
所長 平井 泰 男

例 言

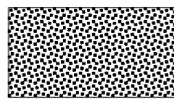
- 1 本書は、岡山県教育委員会の「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査事業により、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した史跡鬼城山（通称「鬼ノ城」）の発掘調査報告書である。
- 2 鬼城山は、総社市奥坂1763-1ほかに所在し、史跡全域が公有化されている。調査地はⅠ～Ⅴ区で、平成18年度から平成23年度にかけて発掘調査を実施した。調査面積は、各年度1,350㎡（平成19年度は1,050㎡）で、合計7,800㎡である。調査地の地番、発掘調査の担当者及び旧調査区名等は第1章第3節の表1に示すとおりである。
- 3 発掘調査にあたっては、埋蔵文化財専門委員から御指導をいただいた。また、総社市教育委員会による鬼城山整備委員会の各委員より有益な御指導、御助言を賜った。記して謝意を表する。
埋蔵文化財専門委員 稲田孝司（元岡山大学）（平成19年度から）
狩野 久（元岡山大学）（平成20年度まで）
高橋 護（元ノートルダム清心女子大学）（平成18年度まで）
- 4 発掘調査に先立つ現地の植生調査については、北の吉備路保全協会（会長 宮本邦男）に調査を依頼した。また、調査にあたっては次の諸氏の協力を得た。
北の吉備路保全協会 萱原 潤・堀 公典
岡山大学資源植物科学研究所 榎本 敬・山下 純
- 5 本報告書の作成は、平成18年度から平成24年度にかけて実施した。
- 6 本文の執筆は、発掘担当者及び整理担当者あたり、それぞれ文末に文責を記した。また、全体の編集は金田善敬・岡本泰典が行った。
- 7 本報告書に関する遺構・遺物については、次の諸氏から有益な御教示を賜った。記して厚く御礼申し上げる（順不同）。
鍛冶遺構・鉄滓についての所見 村上恭通（愛媛大学）
土手状遺構についての所見 小山田宏一（大阪府立狭山池博物館）
土器の胎土分析 白石 純（岡山理科大学）
須恵器の時期についての所見 玉田芳英（奈良文化財研究所）
佐藤 隆（大阪文化財研究所）
- 8 本報告書を作成するにあたり、次の機関に分析を依頼した。
放射性炭素年代測定 (株)古環境研究所
鍛冶関連遺物の分析 (株)九州テクノリサーチ
- 9 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 10 本報告書に関連する出土遺物及び図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高である。調査に用いたグリッドは日本測地系に準拠しており、平面直角座標第V系による。図面に用いた方位は方眼北で表示している。収載遺跡付近の磁北は西偏6°40′を測る。
- 2 掲載遺構及び遺物の縮尺は、次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を明記している。
遺構 礎石建物・掘立柱建物：1/80 土坑・土器溜まり：1/30 土手状遺構：1/40・1/50
遺物 土器：1/4 瓦：1/4 石製品：1/2・1/3 土製品・金属製品：1/3 銭貨：1/2
- 3 全体図等では遺構名について、次のような略称を用いている。 礎石建物：礎 掘立柱建物：掘
土坑：土 鍛冶炉：炉 土器溜まり：溜 火処：火 柱穴：P
- 4 平成11年度に行った確認調査による遺構名はかぎ括弧をつけて表記している。
- 5 遺物は、土器、石製品、金属製品、土製品、ガラス製品に分け、通し番号を付している。土器以外は次の略号を番号の前に付けている。
石製品：S 金属製品：M 土製品：C ガラス製品：G
- 6 掲載した土器のうち、中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。
- 7 掲載した遺構上のスクリーントーンは以下の範囲を示すものである。なお、遺構によりこれ以外のスクリーントーンを使用しているものがあるが、それについては別に表記している。



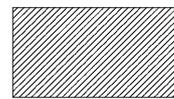
被熱範囲（赤化）
褐色発泡部（羽口）



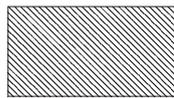
炭分布範囲



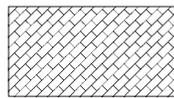
被熱範囲（還元）、柱痕跡
黒色ガラス滓化（羽口）



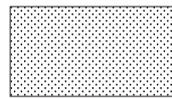
加工の可能性がある地山（岩盤）
土層における断面
遺物断面（金属製品・土製品等）



土層における断面
遺物断面（石製品）



地山



盛土
被熱変色（羽口）

- 8 土層断面図の土色や土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。また、礎石や石垣等の材質は調査担当者の所見による。
- 9 第3図の地図は、国土地理院発行1/50,000地形図の「高梁」「玉島」「岡山北部」「岡山南部」を複製し、加筆したものである。
- 10 本書の時代・時期区分については、一般的な文化史・政治史区分に準拠し、世紀等を併用している。
- 11 過去に刊行された鬼城山に関する報告については、次の例のとおり略して記述している。

報告書等	略称
『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 1980	学術報告
『総社市埋蔵文化財調査年報4』（平成5年度）総社市教育委員会 1994	市年報4
「国指定史跡 鬼城山」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』203 岡山県教育委員会 2006	県報告203
「古代山城 鬼ノ城－鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査－」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』18 総社市教育委員会 2005	市報告18
「古代山城 鬼ノ城2－鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査 東門、第1水門貯水池ほか－」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』19 総社市教育委員会 2006	市報告19
『鬼城山』国指定史跡鬼城山環境整備事業報告 総社市教育委員会 2011	市整備報告

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 調査の体制 2

第3節 調査の経過 3

第4節 日誌抄 6

第2章 地理的・歴史的環境 11

第3章 発掘調査の概要 15

第1節 I区の調査 15

第2節 II区の調査 42

第3節 III区の調査 80

第4節 IV区の調査 102

第5節 V区の調査 130

第4章 総括 141

第1節 調査成果 141

第2節 礎石建物について 142

第3節 鍛冶工房について 146

第4節 土手状遺構について 152

第5節 鬼城山から出土した土器について 158

第6節 出土瓦塔について 165

第7節 山岳寺院について 169

第8節 鬼城山の変遷と歴史的意義 172

付載

付載1 鬼城山出土土器の胎土分析 178

付載2 鬼城山における放射性炭素年代測定 182

付載3 鬼城山出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 184

遺構一覧表 199

遺物観察表 201

遺構名称新旧対照表 215

図版

報告書抄録

目 次

第1図	鬼城山調査区配置図 (1/3,000) ……………	9・10	第45図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	40
第2図	遺跡位置図 ……………	11	第46図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3) ……………	41
第3図	周辺遺跡分布図 (1/50,000) ……………	12	第47図	Ⅱ区調査区位置図 (1/2,000) ……………	42
第4図	Ⅰ区調査区位置図 (1/2,000) ……………	15	第48図	Ⅱ区遺構配置図 (1/400) ……………	43・44
第5図	Ⅰ-1区遺構配置図 (1/300) ……………	16	第49図	Ⅱ区土層断面図① (1/80) ……………	45
第6図	Ⅰ-2区遺構配置図 (1/300) ……………	17	第50図	Ⅱ区土層断面図② (1/80) ……………	46
第7図	Ⅰ区土層断面図① (1/80・1/40) ……………	18	第51図	Ⅱ区土層断面図③ (1/100) ……………	47
第8図	Ⅰ区土層断面図② (1/120) ……………	19	第52図	Ⅱ区土層断面図④ (1/80) ……………	48
第9図	基壇状遺構 (1/150・1/80) ……………	20	第53図	Ⅱ区土層断面図⑤ (1/80) ……………	49
第10図	基壇状遺構 石列・溝 (1/30) ……………	21	第54図	Ⅱ区土層断面図⑥ (1/80) ……………	50
第11図	柱穴1～5 (1/30) ……………	22	第55図	礎石建物2 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	51・52
第12図	柱穴6～9 (1/30) ……………	23	第56図	礎石建物5 (1/80) ……………	53・54
第13図	土坑1 (1/30) ……………	24	第57図	礎石建物5平安期造成土・礎石抜き取り穴 出土遺物 (1/4) ……………	56
第14図	土坑2 (1/30) ……………	24	第58図	礎石建物6出土遺物 (1/4・1/3) ……………	57
第15図	土坑3 (1/30) ……………	24	第59図	礎石建物6 (1/80) ……………	59・60
第16図	土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	24	第60図	礎石建物7 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	61・62
第17図	土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	25	第61図	掘立柱建物1 (1/80) ……………	64
第18図	土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	25	第62図	掘立柱建物1土層断面図 (1/80)・出土遺物 (1/4・ 1/3・1/2) ……………	65
第19図	土坑7 (1/30) ……………	26	第63図	礎石列1 (1/60) ……………	66
第20図	土坑8 (1/30) ……………	26	第64図	柱穴列1 (1/60) ……………	66
第21図	土坑9 (1/60) ……………	27	第65図	土坑21 (1/30) ……………	66
第22図	土坑10 (1/30) ……………	27	第66図	土坑22 (1/30) ……………	66
第23図	土坑11 (1/30) ……………	27	第67図	土坑23・24 (1/60) ……………	67
第24図	土坑12 (1/30) ……………	28	第68図	土坑25 (1/30) ……………	67
第25図	土坑13 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	28	第69図	土坑26 (1/30) ……………	67
第26図	土坑14・15 (1/30) ……………	28	第70図	土坑27 (1/30) ……………	67
第27図	土坑16 (1/30) ……………	29	第71図	土坑28 (1/30) ……………	68
第28図	土坑17 (1/30) ……………	29	第72図	土坑29 (1/30) ……………	68
第29図	土坑18 (1/30) ……………	29	第73図	土坑30・31 (1/30) ……………	68
第30図	土坑19 (1/30) ……………	29	第74図	土坑32 (1/30) ……………	68
第31図	土坑20 (1/30) ……………	29	第75図	土坑33 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	69
第32図	石列1 (1/30) ……………	30	第76図	土坑34 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	69
第33図	溝1 (1/30) ……………	30	第77図	土坑35 (1/30) ……………	69
第34図	溝2 (1/30) ……………	30	第78図	土坑36 (1/30) ……………	69
第35図	火処1～5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	31	第79図	土坑37 (1/30) ……………	70
第36図	火処6 (1/30) ……………	32	第80図	土坑38 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	70
第37図	火処7 (1/30) ……………	32	第81図	土坑39 (1/30) ……………	70
第38図	土器溜まり1 (1/30) ……………	33	第82図	溝3 (1/30) ……………	71
第39図	土器溜まり1出土遺物① (1/4) ……………	34	第83図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	72
第40図	土器溜まり1出土遺物② (1/4) ……………	35	第84図	遺構に伴わない遺物② (1/4) ……………	73
第41図	土器溜まり1出土遺物③ (1/4) ……………	36	第85図	遺構に伴わない遺物③ (1/4) ……………	74
第42図	土器溜まり1出土遺物④ (1/4) ……………	37	第86図	遺構に伴わない遺物④ (1/4・1/3) ……………	75
第43図	土器溜まり1出土遺物⑤ (1/4) ……………	38			
第44図	土器溜まり2出土遺物 (1/4) ……………	39			

第87図	遺構に伴わない遺物⑤ (1/4) ……………	76	第137図	土手状遺構 1 断面図④ (1/40) ……………	115
第88図	遺構に伴わない遺物⑥ (1/4) ……………	77	第138図	土手状遺構 1 断面図⑤ (1/40) ……………	116
第89図	遺構に伴わない遺物⑦ (1/4) ……………	78	第139図	土手状遺構 1 ビット断面図 (1/30) ……………	116
第90図	遺構に伴わない遺物⑧ (1/4・1/3) ……………	79	第140図	土坑49 (1/30) ……………	117
第91図	Ⅲ区調査区位置図 (1/2,000) ……………	80	第141図	土坑50 (1/30) ……………	117
第92図	Ⅲ-1区遺構配置図 (1/200) ……………	81	第142図	土坑51 (1/30) ……………	117
第93図	Ⅲ-1区土層断面図 (1/80) ……………	82	第143図	土坑52 (1/30) ……………	117
第94図	鍛冶炉 1 (1/30) ……………	82	第144図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3) ……………	118
第95図	鍛冶炉 1 周辺鍛造剥片出土状況 (1/40) ……………	82	第145図	Ⅳ-2区遺構配置図 (1/200) ……………	120
第96図	鍛冶関連遺物① (1/4) ……………	83	第146図	土手状遺構 2 T 1 平面図 (1/100) ……………	121
第97図	鍛冶関連遺物② (1/3) ……………	84	第147図	土手状遺構 2 T 1 土層断面図 (1/50) ……………	122
第98図	土坑40 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	84	第148図	土手状遺構 2 (1/50) ……………	123・124
第99図	石列 2 土層断面図 (1/60) ……………	85	第149図	土手状遺構 2 前面石垣立面図 (1/50) ……………	125
第100図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2) ……………	85	第150図	土手状遺構 2 背面石垣立面図 (1/50) ……………	125
第101図	Ⅲ-2区遺構配置図 (1/150) ……………	86	第151図	土手状遺構 2 T 2 土層断面図 (1/50) ……………	126
第102図	Ⅲ-2区土層断面図 (1/100・1/80) ……………	87	第152図	土手状遺構 2 T 3 土層断面図 (1/50) ……………	128
第103図	鍛冶炉 2 (1/20) ……………	88	第153図	T 4 土層断面図 (1/50) ……………	128
第104図	鍛冶炉 3 (1/20)・出土遺物 (1/3) ……………	88	第154図	河道内石垣立面図 (1/50) ……………	128
第105図	鍛冶炉 3 周辺鍛造剥片等出土状況 (1/40) ……………	88	第155図	Ⅳ-2区出土遺物 (1/4・1/3) ……………	129
第106図	鍛冶関連遺物① (1/3) ……………	89	第156図	V区調査区位置図 (1/1,500) ……………	130
第107図	鍛冶関連遺物② (1/3) ……………	90	第157図	V-1区遺構配置図 (1/200) ……………	131
第108図	鍛冶関連遺物③ (1/4) ……………	91	第158図	V-1区土層断面図 (1/80) ……………	132
第109図	土坑41 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	92	第159図	集石遺構 (1/60) ……………	132
第110図	土坑42 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	93	第160図	土坑53 (1/30) ……………	132
第111図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	93	第161図	土坑54 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	133
第112図	Ⅲ-3区遺構配置図 (1/150) ……………	94	第162図	土坑55 (1/30) ……………	133
第113図	鍛冶工房 (1/100) ……………	95	第163図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	133
第114図	鍛冶炉 4～7 (1/20) ……………	96	第164図	遺構に伴わない遺物② (1/4) ……………	134
第115図	鍛冶炉 8～12 (1/20) ……………	97	第165図	ガラス製品 (1/3) ……………	134
第116図	鍛冶工房内 土坑43～46 (1/30) ……………	98	第166図	V-2～4区遺構配置図 (1/300) ……………	135
第117図	鍛冶工房出土遺物 (1/4) ……………	98	第167図	V-2区土層断面図 (1/80) ……………	136
第118図	鍛冶関連遺物① (1/3) ……………	99	第168図	V-3区土層断面図 (1/80) ……………	136
第119図	鍛冶関連遺物② (1/3・1/4) ……………	100	第169図	V-4区土層断面図 (1/80) ……………	136
第120図	土坑47 (1/30) ……………	101	第170図	掘立柱建物 2 (1/80) ……………	137
第121図	土坑48 (1/30) ……………	101	第171図	土坑56 (1/60) ……………	138
第122図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2) ……………	101	第172図	土坑57 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	138
第123図	Ⅳ区調査区位置図 (1/2,000) ……………	102	第173図	土坑58 (1/30) ……………	138
第124図	Ⅳ-1区周辺地形測量図 (1/300) ……………	103	第174図	土坑59 (1/30) ……………	138
第125図	Ⅳ-1区遺構配置図 (1/200) ……………	104	第175図	土坑60 (1/30) ……………	139
第126図	T 1 土層断面図 (1/80) ……………	105	第176図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	139
第127図	T 2 北土層断面図 (1/80) ……………	106	第177図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3) ……………	140
第128図	土手状遺構 1 土層断面図 (1/80) ……………	106	第178図	礎石建物の配置 (1/800) ……………	142
第129図	土手状遺構 1 崩落石材平面図 (1/80) ……………	108	第179図	古代の鍛冶工房の例 (1/200) ……………	147
第130図	土手状遺構 1 崩落石材立面図 (1/40) ……………	108	第180図	土手状遺構の復元 (1/300・1/100) ……………	153
第131図	土手状遺構 1 (1/50) ……………	109・110	第181図	須恵器杯の分類 ……………	158
第132図	土手状遺構 1 前面石垣立面図 (1/40) ……………	111	第182図	鬼城山出土土器一覧 (1/8・1/10) ……………	161・162
第133図	土手状遺構 1 背面石垣立面図 (1/40) ……………	112	第183図	鬼城山出土瓦塔の復元 (1/6) ……………	166
第134図	土手状遺構 1 断面図① (1/50) ……………	113	第184図	岡山県内出土の瓦塔 (1/6) ……………	168
第135図	土手状遺構 1 断面図② (1/50) ……………	114	第185図	鬼城山城内各地区の消長 ……………	174
第136図	土手状遺構 1 断面図③ (1/30) ……………	114	第186図	鬼城山における時期別変遷 ……………	174

表 目 次

表1 調査一覧	5	表4 古代山城検出の鍛冶関連資料	151
表2 文化財保護法に基づく文書一覧	8	表5 土手状遺構の概要	152
表3 城内礎石建物一覧	143	表6 土手状遺構における基準尺の検討	156

写 真 目 次

写真1 I区作業風景(南から)	23	写真8 III-2区鉄滓等出土状況(南東から)	90
写真2 土器溜まり1遺物出土状況(南東から)	37	写真9 III-3区作業風景(南から)	97
写真3 礎石建物2作業風景(南から)	55	写真10 土手状遺構1作業風景(北から)	106
写真4 礎石建物7作業風景(南から)	58	写真11 土手状遺構2作業風景(東から)	127
写真5 掘立柱建物1作業風景(南東から)	63	写真12 集石遺構作業風景(南から)	134
写真6 II区出土瓦塔	79	写真13 鬼の釜(総社市黒尾新山地区)	170
写真7 石列2作業風景(北から)	84		

巻頭図版目次

巻頭図版1 II-12区 礎石建物7(南から)		4 V-2区 土坑59(南から)	
巻頭図版2 1 II-9区 礎石建物2(南から)		5 III-2区 鍛冶炉2(南から)	
2 II-2区 礎石建物6(東から)		6 III-3区 鍛冶炉4(南西から)	
巻頭図版3 1 IV-1区 土手状遺構1(北東から)		7 III-3区 鍛冶炉6(南から)	
2 IV-2区 土手状遺構2(南東から)		8 III-3区 鍛冶炉8(南西から)	
巻頭図版4 1 II-12区 礎石建物7礎石8柱痕跡 (南東から)		巻頭図版5 I区出土土器群	
2 II-2区 礎石建物6礎石13と土坑22 (東から)		巻頭図版6 1 I区・V区出土畿内産土師器	
3 II-9区 土坑37(東から)		2 II区出土瓦塔	
		3 III区出土鉄滓・鞆羽口・砥石(県報告203-S4)	

図 版 目 次

図版1 1 I-2区 北半部全景(南から)		図版2 1 I-2区 土坑16(西から)	
2 I-1区 西部全景(北西から)		2 I-2区 石列1(北東から)	
3 I-1区 南部全景(北東から)		3 I-1区 火処1~5(南東から)	
4 I-2区 南部全景(北西から)		図版3 1 I-2区 土器溜まり1(西から)	
5 I-2区 南部全景(北から)		2 I-2区 土器溜まり1(南東から)	

	3	I-2区	土器溜まり1 (北から)			8	II-12区	土坑38 (南西から)
	4	I-2区	土器溜まり1 (南東から)	図版13	1	II-2区	調査前 (東から)	
図版4	1	I-2区	柱穴1 (南西から)		2	II-4区	調査前 (東から)	
	2	I-2区	柱穴4 (南から)		3	II-9区	調査前 (南東から)	
	3	I-2区	柱穴5 (南東から)		4	II-12区	調査前 (西から)	
	4	I-1区	土坑1 (南から)		5	II-1区	土層断面 (北西から)	
	5	I-1区	土坑3 (北西から)		6	II-2区	土層断面 (北西から)	
	6	I-1区	土坑4 (南西から)		7	II-2区	土層断面 (北東から)	
	7	I-2区	土坑5 (南から)		8	II-5区	土層断面 (南東から)	
	8	I-2区	土坑6 (南から)	図版14	1	II-4区	土層断面 (南東から)	
図版5	1	I-2区	土坑7 (南西から)		2	II-10区	土層断面 (東から)	
	2	I-2区	土坑8 (西から)		3	II-11区	土層断面 (北東から)	
	3	I-2区	土坑10 (西から)		4	II-12区	土層断面 (西から)	
	4	I-2区	土坑11 (南東から)		5	II-13区	土層断面 (礎石建物7裏) (南西から)	
	5	I-2区	土坑12 (南東から)		6	II-3区	全景 (南西から)	
	6	I-2区	土坑13 (南西から)		7	II-8区	全景 (南西から)	
	7	I-2区	土坑14 (左)・15 (右) (東から)		8	II-13区	全景 (東から)	
	8	I-2区	土坑18 (西から)	図版15	1	III-1区	全景 (東から)	
図版6	1	II-9区	礎石建物2 (北から)		2	III-1区	鍛冶炉1 (東から)	
	2	II-9区	礎石建物2 礎石8 (南から)		3	III-1区	鍛冶炉1平面断面 (南東から)	
	3	II-9区	礎石建物2 礎石10 (南から)	図版16	1	III-1区	石列2 (北から)	
	4	II-9区	礎石建物2 礎石11 (東から)		2	III-1区	石列2土層断面 (東から)	
	5	II-9区	礎石建物2 雨仕舞い溝 (東から)		3	III-2区	全景 (南東から)	
図版7	1	II-4区	礎石建物5 (西から)	図版17	1	III-3区	全景 (北から)	
	2	II-4区	礎石建物5 西半部 (東から)		2	III-3区	鍛冶工房 (東から)	
図版8	1	II-4区	礎石建物5 石列 (南東から)		3	III-3区	鍛冶工房 (南から)	
	2	II-4区	礎石建物5 礎石1 (南から)	図版18	1	III-1区	土坑40 (西から)	
	3	II-4区	礎石建物5 礎石3 (東から)		2	III-2区	鍛冶炉3 (南から)	
	4	II-4区	礎石建物5 礎石16 (南西から)		3	III-2区	鞆羽口出土状況 (南東から)	
	5	II-4区	礎石建物5 雨仕舞い溝 (南東から)		4	III-2区	土坑41 土器出土状況 (東から)	
図版9	1	II-2区	礎石建物6 (北西から)		5	III-3区	鍛冶炉10 (西から)	
	2	II-2区	礎石建物6 礎石11 (北から)		6	III-3区	鍛冶炉11・12 (西から)	
	3	II-2区	礎石建物6 礎石12 (北から)		7	III-3区	土坑43 (南東から)	
	4	II-2区	礎石建物6 礎石14 (北東から)		8	III-3区	土坑48 (北西から)	
	5	II-2区	礎石建物6 礎石15 (東から)	図版19	1	IV-1区	調査前 (北東から)	
図版10	1	II-12区	礎石建物7 (北西から)		2	IV-1区	土手状遺構1 崩落石材 (東から)	
	2	II-12区	礎石建物7 礎石5 (北西から)		3	IV-1区	土手状遺構1 (東から)	
	3	II-12区	礎石建物7 礎石9 (東から)	図版20	1	IV-1区	土手状遺構1 上段石垣 (北東から)	
	4	II-12区	礎石建物7 礎石12 (北東から)		2	IV-1区	土手状遺構1 敷石 (北から)	
	5	II-12区	礎石建物7 雨仕舞い溝 (北西から)		3	IV-1区	土手状遺構1 下段石垣 (北東から)	
図版11	1	II-5区	掘立柱建物1 基壇と石列 (東から)	図版21	1	IV-1区	土手状遺構1 前面石垣 (東から)	
	2	II-5区	掘立柱建物1 (北東から)		2	IV-1区	土手状遺構1 背面石垣 (西から)	
図版12	1	II-5区	礎石列1 (北西から)		3	IV-1区	土手状遺構1 背面石垣 (西から)	
	2	II-2区	土坑21 (南から)	図版22	1	IV-1区	土手状遺構1 T2南 土層断面 (北東から)	
	3	II-2区	土坑25 (南から)		2	IV-1区	土手状遺構1 T2南 南端土層断面 (東から)	
	4	II-3区	土坑26 (南東から)		3	IV-1区	土手状遺構1 T2西 土層断面 (西から)	
	5	II-3区	土坑27 (手前)・28 (奥) (南西から)		4	IV-1区	土手状遺構1 全景 (南東から)	
	6	II-4区	土坑30 (西から)					
	7	II-9区	土坑36 (南から)					

- 図版23 1 IV-1区 T1全景(南から)
 2 IV-1区 T1北半部(南西から)
 3 IV-1区 T1南半部(北西から)
 4 IV-1区 土坑49(北から)
 5 IV-1区 土坑50(南から)
- 図版24 1 IV-2区 調査前(南東から)
 2 IV-2区 土手状遺構2 調査前(東から)
 3 IV-2区 河道内石垣(東から)
- 図版25 1 IV-2区 土手状遺構2 前面石垣(北東から)
 2 IV-2区 土手状遺構2 前面石垣(東から)
 3 IV-2区 土手状遺構2 前面石垣(南東から)
- 図版26 1 IV-2区 土手状遺構2 前面石垣(東から)
 2 IV-2区 土手状遺構2 前面石垣(東から)
 3 IV-2区 土手状遺構2 前面石垣(東から)
- 図版27 1 IV-2区 土手状遺構2 背面石垣(西から)
 2 IV-2区 土手状遺構2 背面石垣(南西から)
 3 IV-2区 土手状遺構2 被熱痕跡(北東から)
- 図版28 1 IV-2区 土手状遺構2 溝(南から)
 2 IV-2区 土手状遺構2 T1土層断面
 (北東から)
 3 IV-2区 土手状遺構2 T2土層断面
 (北東から)
- 図版29 1 V-1区 全景(南から)
 2 V-1区 全景(北西から)
 3 V-1区 集石遺構(南から)
- 図版30 1 V-2区 全景(東から)
- 2 V-2区 掘立柱建物2(北東から)
 3 V-4区 全景(東から)
- 図版31 I-2区 土器溜まり1出土遺物①
 図版32 I-2区 土器溜まり1出土遺物②
 図版33 1 I-2区 土器溜まり1出土遺物③
 2 I-2区 土器溜まり2出土遺物
 3 I区 遺構に伴わない遺物
- 図版34 1 II-9区 礎石建物2出土遺物
 2 II-4区 礎石建物5平安期造成土・礎石抜き
 取り穴出土遺物
 3 II-2区 礎石建物6出土遺物
 4 II-12区 礎石建物7出土遺物
 5 II-5区 掘立柱建物1出土遺物
- 図版35 1 II-4区 土坑34出土遺物
 2 II区 遺構に伴わない遺物①
- 図版36 II区 遺構に伴わない遺物②
- 図版37 1 I・II区 転用硯
 2 II・V区 煤付着土器
- 図版38 1 III区 出土遺物
 2 IV区 出土遺物
 3 V区 出土遺物
- 図版39 III区 鞆羽口
- 図版40 1 金属製品
 2 石製品
 3 ガラス製品

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

鬼城山は文献に登場せず築城年代も諸説ある謎に包まれた古代山城である。古くから吉備津彦命による温羅退治の伝承地として知られていたが、昭和46年に高橋護氏が神籠石系山城と発表して以来、古代山城として周知されることとなった。昭和53年に古代山城の構造解明を目的として、鬼ノ城学術調査委員会（調査団長：坪井清足）による初の考古学的な調査が実施され、城壁、水門、城門跡の調査が行われた。その結果、鬼城山は城壁の全長約2.8km、城内面積約30haの規模をもつ古代山城であることが判明した。これらの成果は、『鬼ノ城』（鬼ノ城学術調査委員会 1980）として報告され、当時としては画期的な報告書であり、今日においても高い評価を得ている。

これらの調査成果をうけ、鬼城山は古代の城郭研究に欠かせない重要な遺跡として、昭和61年3月25日に国史跡に指定された。指定範囲は鬼城山全域におよび、その後、外郭線から下方の山裾部に至る私有地が総社市によって公有地化された。

公有地化終了後の平成5年に総社市教育委員会は鬼城山整備委員会（委員長：坪井清足）を設置し、総社市有地となった城壁や城門を中心に発掘調査を開始した。平成6年度の東門の発見を端緒に、西門や角楼を含む鬼城山山頂周辺区域や南門、北門等が調査された。また、これまで不明であった城壁線部分や城外施設についても調査が行われ、外郭線を中心に鬼城山の城郭構造が明らかとなってきた。これらの調査成果は、鬼城山整備委員会の指導・助言のもと整備事業に反映され、平成23年度までに西門や角楼、高石垣、北門、南門等が復元されている。

他方、鬼城山の城内部分は、昭和40年代にオートバイサーキット場として利用されていたが、昭和50年に岡山県が当該地区を吉備史跡県立自然公園内の自然保護用地として公有地化を実施した。以来、鬼城山の城内約70%が県有地として管理されることとなった。城内では、昭和58年に礎石建物が発見されるなどいくつかの遺構の存在が知られてはいたものの、考古学的な調査には至っていなかった。専門家の間では、城内における発掘調査の重要性が指摘されていた。

これをうけ、岡山県教育委員会では、県有地部分を中心とした城内の実態を解明するため、礎石建物群が発見された範囲も含め、平成11年度に122か所の調査区を設定し確認調査を行った。その結果、城内には検出された遺構や遺物から大きく3つの特徴的な機能・性格をもつ区域が存在することが明らかとなり、城内に礎石建物群のほかに、鍛冶工房や土手状遺構、拠点的な生活痕跡などが存在している可能性が高くなった。この確認調査の成果をもとに、岡山県教育委員会は、鬼城山の全容を解明するためにはさらなる面的な調査が必要と判断し、平成18年度から7年間計画で鬼城山の発掘調査を、県の「新世紀おかやま夢づくりプラン」の一環とする「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査事業で実施することになった。（金田）

第2節 調査の体制

調査の体制

平成18年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 神田 益穂

文化財課

課長 高畑 知功

参事 小林 勝

参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

主任 光永 真一

主任 小林 利晴

主任 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本 和男

次長（総務課長） 安西 正則

参事 岡田 博

副参事 中島 謙次

<総務課>

総括副参事（総務班長）

若林 一憲

主任 小川 紀久

<調査第一課>

課長 中野 雅美

総括主幹（第一班長）

大橋雅也（調査担当）

副参事 尾崎光徳（調査担当）

主事 飯田浩光（調査担当）

平成19年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 神田 益穂

文化財課

課長 藤井 守雄

参事 木山 潤郎

参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

主任 光永 真一

主任 小嶋 善邦

主任 金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 高畑 知功

次長（総務課長） 小林 勝

参事 岡田 博

副参事 中島 謙次

<総務課>

総括副参事（総務班長）

若林 一憲

主任 福池 光修

<調査第一課>

課長 中野 雅美

総括主幹（第一班長）

大橋雅也（調査担当）

主任 岡本泰典（調査担当）

主事 石田爲成（調査担当）

平成20年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 岡野 健一

文化財課

課長 三村 修

参事 木山 潤郎

参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

主任 光永 真一

主任 小嶋 善邦

岡山県古代吉備文化財センター

所長 藤川 洋二

次長（総務課長） 小林 勝

参事 岡田 博

<総務課>

総括副参事（総務班長）

若林 一憲

主任 福池 光修

主任 中島 忍

<調査第一課>

課長 中野 雅美

総括主幹（第二班長）

大橋雅也（調査担当）

主任 岡本泰典（調査担当）

主事 石田爲成（調査担当）

平成21年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 増本 好孝

文化財課

課長 三村 修

参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

光永 真一

主任 米田 克彦

主任 平井 利尚

岡山県古代吉備文化財センター

所長 児仁井克一

次長（総務課長） 小林 勝

参事 中野 雅美

<総務課>

総括副参事（総務班長）

上田 利弘

主任 中島 忍

<調査第一課>

課長 江見 正己

総括主任（第二班長）

尾上元規（調査担当）

主任 岡本泰典（調査担当）

主事 石田爲成（調査担当）

平成22年度

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 増本 好孝

文化財課

課長 田村 啓介

参事 光永 真一

総括副参事（埋蔵文化財班長）

宇垣 匡雅

主任 米田 克彦

岡山県古代吉備文化財センター

所長 児仁井克一

次長（総務課長） 片山 淳司

参事 中野 雅美

<総務課>

総括副参事（総務班長）

主任 上田 利弘

主任 植木寿美子

主任 越野 忍

主任 行守 智和

<調査第一課>

課長 江見 正己

総括主任（第二班長）

金田善敬（調査担当）

主任 岡本泰典（調査担当）

主任 上梶 武（調査担当）

平成23年度

岡山県教育委員会

教育長 竹井 千庫

岡山県教育庁

教育次長 阿部 淳二

文化財課

課長 村木 生久

参事 光永 真一

総括副参事（埋蔵文化財班長）

宇垣 匡雅

主任 石田 爲成

主任 一色 武

岡山県古代吉備文化財センター

所長 平井 泰男

次長（総務課長） 片山 淳司

参事 中野 雅美

<総務課>

総括副参事（総務班長）

主任 上田 利弘

主任 植木寿美子

主任 行守 智和

<調査第一課>

課長 江見 正己

総括主任（第二班長）

金田善敬（調査担当）

主任 河合 忍（調査担当）

主事 三輪宜生（調査担当）

平成24年度

岡山県教育委員会

教育長 竹井 千庫

岡山県教育庁

教育次長 松尾 茂樹

文化財課

課長 光永 真一

参事 嶋田健一郎

総括副参事（埋蔵文化財班長）

宇垣 匡雅

主任 石田 爲成

主任 河野 但彰

岡山県古代吉備文化財センター

所長 平井 泰男

次長（総務課長） 大崎 智浩

総括参事（調査第一課長）

中野 雅美

<総務課>

総括主幹（総務班長）

岡部 一

主任 行守 智和

主任 岡村 涼平

<調査第一課>

総括主幹（第二班長）

金田善敬（報告書担当）

主任 岡本泰典（報告書担当）

主事 中原香織（報告書担当）

第3節 調査の経過

鬼城山の発掘調査は、平成11年度の確認調査で遺構・遺物の存在が明らかとなったAゾーン（本報告I区）、礎石建物群のあるBゾーン（II区）、鍛冶工房推定地区のCゾーン（III区）のほか、土木工事に関わる遺構のある地区（IV・V区）で実施した。調査区の地番や面積、調査担当者等については表1に掲げたとおりである。

発掘調査年度の4月から6月にかけては調査準備期間とした。事前準備として、鬼城山が国史跡であることから、文化財保護法第125条による史跡現状変更許可申請を行い、調査着手前までに許可を得た。また、鬼城山は全域にわたり保安林（土砂の流出の防備、公衆の保健）や吉備史跡県立自然公

第1章 調査の経緯と経過

園特別地域に指定されていることから、備中県民局等と調査方法や調査後の保全について協議を行い、事前に保安林内立木伐採及び作業許可、吉備史跡県立自然公園特別地域内土地の形状変更許可を得た。

調査区の設定にあたっては、平成11年度に高梁川流域の水と緑をまもる会（当時）や地元有志と交わした自然保護等に関する合意に基づき、事前に北の吉備路保全協会に調査予定地の植生調査を依頼するとともに調査に関する指導を得た。

現地での発掘調査は各調査年度の7月から12月まで実施した。調査にあたっては、自然保護の観点から立木の伐採を必要最小限としたため、立木を現地保存した箇所については発掘調査を行っていない。また、遺構保存のため遺構の掘り下げは必要最低限とした。具体的には、遺構の掘り下げにあたっては全掘を行わず、半截までにとどめた。調査後は遺構の保全に配慮しながら、もとの土で埋め戻した。調査中は、夏休み少年少女鬼ノ城教室、城内調査大公開、鬼ノ城フォーラム等を開催し、発掘現場の公開や成果の公表につとめた。これらの公開事業では延べ約5,700名にもおよぶ参加者を得た。

年度ごとの主な成果は次のとおりである。平成18年度はⅠ－2区を調査したが、ここでは、掘立柱建物を推測させる柱穴や基壇状遺構、土器溜まり等を検出した。特に土器溜まり1では多くの土器が出土し、鬼城山の存続時期を考える上で貴重な資料となった。平成19・20年度はⅡ区の礎石建物群等を主な対象とした。ここでは、これまでよく分かっていなかった礎石建物を中心に調査を行い、鬼城山の礎石建物全棟の規模や構造を明らかにした。また、これまで礎石建物の前身と考えられていた掘立柱建物が平安期の建物であることが判明し、この周辺が平安期に山岳寺院として利用されていたことが分かった。平成21年度は鍛冶工房地区と推定されていたⅢ区を対象とした。これまで城内で鉄滓や鞆羽口等の鍛冶関連遺物の存在は確認されていたが、この調査で初めて鍛冶炉を検出した。古代山城における鍛冶炉の発見は全国初であり注目を集めた。平成22年度は城内の土木関連施設の解明を目的に、Ⅳ－1区とⅤ－2～4区を調査した。このうち、第5水門背後のⅣ－1区で調査された土手状遺構1は前面に2段の石垣と敷石を備えていた。調査最終年度となる平成23年度は補足調査と位置付けていたため、前年度後半期から調査候補地の検討を行い、次の3か所の調査を実施した。Ⅰ－1区は、初年度に調査したⅠ－2区の北側に位置し、Ⅰ－2区で見られた遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。Ⅳ－2区は、前年度に調査した土手状遺構に関連して、第3水門上流で確認されている土手状遺構2の調査を実施した。Ⅴ－1区は北門背後の丘陵上に位置する。ここでは前年度に丘陵南斜面のⅤ－2～4区を調査したが、そこで7世紀後半期に属する須恵器や土師器が流土中から出土したことから、関連遺構の存在を予測した。調査の結果、7世紀代の遺構は存在しなかったが、平安時代の集石遺構が検出された。

調査後の1月から3月はセンターにおいて整理作業を行った。また、この間に埋め戻した調査区の原因復旧のため、備中県民局等の指導を得ながら現地で植樹を実施した。植樹は、一般公募により行ったもの、あるいは地元小学校の環境学習として実施したものもある。

調査全般にわたって、埋蔵文化財専門委員の指導を得た。また、総社市教育委員会の設置した鬼城山整備委員会（委員長 坪井清足）では調査成果報告の機会を得、その都度、各委員から有益な指導、助言をいただいた。また、遺構や遺物については、当該分野に詳しい有識者に意見を求めた。その他、調査現場等において様々な立場の方から数多くの助言をいただいた。（金田）

表1 調査一覧

報告書記載 調査区名	旧調査区名	調査年度	面積	地番	調査担当者
I-1区	A1-2区	H23	675㎡	総社市奥坂1763-1	金田善敬・河合 忍・三輪宜生
I-2区	A1区	H18	1,350㎡		大橋雅也・尾崎光徳・飯田浩光
II-1区	A2-6区	H20	75㎡	総社市奥坂1763-1	大橋雅也・岡本泰典・石田爲成
II-2区	A2-2区	H19	250㎡		
II-3区	A2-8区	H20	125㎡		
II-4区	A2-9区	H20	400㎡		
II-5区	A2-3区	H19	200㎡		
II-6区	A2-4区	H19	100㎡		
II-7区	A2-1区	H19	200㎡		
II-8区	A2-7区	H20	150㎡		
II-9区	A2-10区	H20	200㎡		
II-10区	A2-11区	H20	150㎡		
II-11区	A2-12区	H20	150㎡		
II-12区	A2-5区	H19	300㎡		
II-13区	A2-13区	H20	100㎡		
III-1区	B1区	H21	600㎡	総社市奥坂1763-1・ 1762-6	尾上元規・岡本泰典・石田爲成
III-2区	B2区	H21	300㎡		
III-3区	B3区	H21	450㎡		
IV-1区	C1区	H22	650㎡	総社市奥坂1772・1774	金田善敬・岡本泰典・上梶 武
IV-2区	D区	H23	300㎡	総社市奥坂1763-1	金田善敬・河合 忍・三輪宜生
V-1区	C5区	H23	375㎡	総社市奥坂1763-1・ 1772	金田善敬・河合 忍・三輪宜生
V-2区	C2区	H22	350㎡	総社市奥坂1763-1	金田善敬・岡本泰典・上梶 武
V-3区	C3区	H22	150㎡		
V-4区	C4区	H22	200㎡		

第4節 日誌抄

平成18年度

4月3日(月) 調査準備開始
 5月29日(月) 第26回鬼城山整備委員会(報告)
 植生調査
 7月3日(月) I-2区調査開始
 8月7日(月) ~12日(土) 城内調査大公開開催
 8月19日(土)・20日(日)
 夏休み少年少女鬼ノ城教室開催
 10月16日(月) ~22日(日) 城内調査大公開開催
 10月26日(木) 第27回鬼城山整備委員会(報告)
 10月27日(金) 総社市立阿曾小学校鬼ノ城教室
 12月4日(月) ~15日(金) 城内調査大公開開催
 12月27日(水) I-2区調査終了
 発掘調査作業終了
 1月4日(木) 整理作業開始
 1月30日(火) 植樹作業
 2月14日(水) 植樹作業
 3月30日(金) 整理作業終了

平成19年度

4月2日(月) 調査準備開始
 4月26日(木) 第28回鬼城山整備委員会(報告)
 5月21日(月) 植生調査
 7月3日(火) 資材搬入
 7月4日(水) II-7区調査開始
 7月6日(金) II-2区、II-5区調査開始
 7月19日(木) 第29回鬼城山整備委員会(報告)
 8月18日(土) 夏休み少年少女鬼ノ城教室開催
 9月10日(月) ~16日(日) 城内調査大公開開催
 9月13日(木) II-7区調査終了
 9月19日(水) II-6区調査開始
 10月19日(金) 総社市立阿曾小学校鬼ノ城教室
 10月24日(水) II-12区調査開始
 10月27日(土) 鬼ノ城うおーく開催
 11月28日(水) II-6区調査終了
 11月29日(木) 埋蔵文化財専門委員会開催
 II-5区調査終了
 12月3日(月) ~14日(金) 城内調査大公開開催
 12月6日(木) 鬼城山整備委員会委員視察
 12月7日(金) II-2区調査終了
 12月26日(水) II-12区調査終了
 12月27日(木) 発掘調査作業終了
 1月4日(金) 整理作業開始
 1月20日(日) 倉敷スポーツ少年団植樹
 2月21日(木) 総社市立池田小学校植樹
 3月15日(土) 鬼ノ城植樹開催
 3月31日(月) 整理作業終了

平成20年度

4月1日(火) 調査準備開始
 5月12日(月) 植生調査
 5月20日(火) 第30回鬼城山整備委員会(報告)

7月1日(火) 資材搬入
 7月7日(月) II-9・10区調査開始
 7月18日(金) II-11区調査開始
 7月26日(土) 夏休み少年少女鬼ノ城教室開催
 8月6日(水) II-13区調査開始
 8月27日(水) II-8区調査開始
 9月8日(月) ~14日(日) 城内調査大公開開催
 9月30日(火) II-10・11・13区調査終了
 10月8日(水) II-3区調査開始
 10月9日(木) II-4区調査開始
 10月17日(金) 総社市立阿曾小学校鬼ノ城教室
 10月25日(土) 鬼ノ城うおーく開催
 11月14日(金) II-1区調査開始
 12月1日(月) ~7日(日) 城内調査大公開開催
 12月24日(水) II-1・3・4・8・9区調査終了
 12月25日(木) 発掘調査作業終了
 1月5日(月) 整理作業開始
 2月13日(金) 総社市立池田小学校植樹
 3月4日(水) 植樹作業
 3月31日(火) 整理作業終了

平成21年度

4月1日(水) 調査準備開始
 4月15日(水) 第31回鬼城山整備委員会(報告)
 4月28日(火) 植生調査
 7月1日(水) 資材搬入、III-1区調査開始
 7月25日(土) 夏休み少年少女鬼ノ城教室開催
 9月7日(月) ~13日(日) 城内調査大公開開催
 9月18日(金) III-1区調査終了
 III-2区調査開始
 10月27日(火) III-3区調査開始
 11月4日(水) III-2区調査終了
 11月16日(月) 総社市立阿曾小学校鬼ノ城教室
 11月19日(木) 第32回鬼城山整備委員会(報告)
 11月24日(火) 愛媛大学村上恭通教授現地指導
 12月1日(火) ~7日(月) 城内調査大公開開催
 12月11日(金) 九州テクノリサーチ大澤正己氏鉄滓等鑑定
 12月24日(木) III-3区調査終了
 12月28日(月) 発掘調査作業終了
 1月4日(月) 整理作業開始
 2月16日(火) 総社市立池田小学校植樹
 2月17日(水) 植樹作業
 3月31日(水) 整理作業終了

平成22年度

4月1日(木) 調査準備開始
 5月25日(火) 植生調査
 5月26日(水) 第33回鬼城山整備委員会(報告)
 7月1日(木) 資材搬入、IV-1区調査開始
 7月24日(土) 夏休み少年少女鬼ノ城教室開催
 9月6日(月) V-2区調査開始

9月6日(月)～12日(日) 城内調査大公開開催	7月23日(土) 夏休み少年少女鬼ノ城教室開催
9月13日(月) V-3区調査開始	8月17日(水) I-1区調査開始
9月14日(火) V-4区調査開始	9月1日(木) IV-2区調査開始
9月25日(土) 鬼ノ城フォーラム開催	10月7日(金) V-1区調査終了
10月22日(金) 総社市立阿曾小学校鬼ノ城教室	11月28日(月)～12月4日(日) 城内調査大公開開催
11月26日(金) 大阪府立狭山池博物館小山田宏一 氏現地指導	12月16日(金) I-1区調査終了
11月30日(火) V-3区調査終了	12月22日(木) IV-2区調査終了
12月1日(水)～7日(火) 城内調査大公開開催	12月28日(水) 発掘調査作業終了
12月14日(火) V-4区調査終了	1月4日(水) 整理作業開始
12月21日(火) 第34回鬼城山整備委員会(報告)	2月22日(水) 総社市立池田小学校植樹
12月24日(金) IV-1区調査終了	2月26日(日) 大阪文化財研究所佐藤隆氏 須恵器鑑定
12月27日(月) V-2区調査終了	3月1日(木) 奈良文化財研究所玉田芳英氏 須恵器鑑定
12月28日(火) 発掘調査作業終了	3月19日(月) 第35回鬼城山整備委員会 (報告・現地視察)
1月4日(火) 整理作業開始	3月30日(金) 整理作業終了
2月22日(火) 総社市立池田小学校植樹	
3月31日(木) 整理作業終了	
平成23年度	平成24年度
4月1日(金) 調査準備開始	4月2日(月) 報告書作成作業開始
5月9日(月) 植生調査	1月25日(金) 第36回鬼城山整備委員会(報告)
6月20日(月) 植生調査	1月31日(木) 報告書刊行
7月1日(金) 資材搬入	
7月4日(月) V-1区調査開始	

発掘調査及び報告書作成にあたっては、総社市教育委員会職員の方々の方々の多大なる援助を得た。また、以下の方々に御教示、御協力をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略・五十音順、名称当時)

浅口市教育委員会、飯塚市教育委員会、宇治市、岡山市教育委員会、熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館、久留米市、上毛町教育委員会、西条市教育委員会、埼玉県立歴史と民俗の博物館、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター、高松市教育委員会、武雄市教育委員会、たつの市教育委員会、筑紫野市教育委員会、対馬市教育委員会、とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、鳥取県埋蔵文化財センター、光市教育委員会、福岡県教育委員会、府中市教育委員会、八尾市教育委員会、行橋市教育委員会
赤松伸咲、池田敏宏、今井 宏、大田幸博、小川秀樹、小澤太郎、小澤佳憲、尾野善裕、勝部智明、亀田修一、河原 剛、木村龍生、草場啓一、高 正龍、笹澤泰史、佐藤 信、末永浩一、杉本 宏、鈴木靖民、須原 緑、田中淳也、津野 仁、出浦 崇、土井基司、永井邦仁、西川 徹、乗岡 実、萩本 勝、原田保則、平尾政幸、藤井淳弘、水田貴士、向井一雄、村上幸雄、矢野裕介、山口裕平、山中敏史、山元敏裕、義則敏彦、渡邊 誠、渡邊芳貴

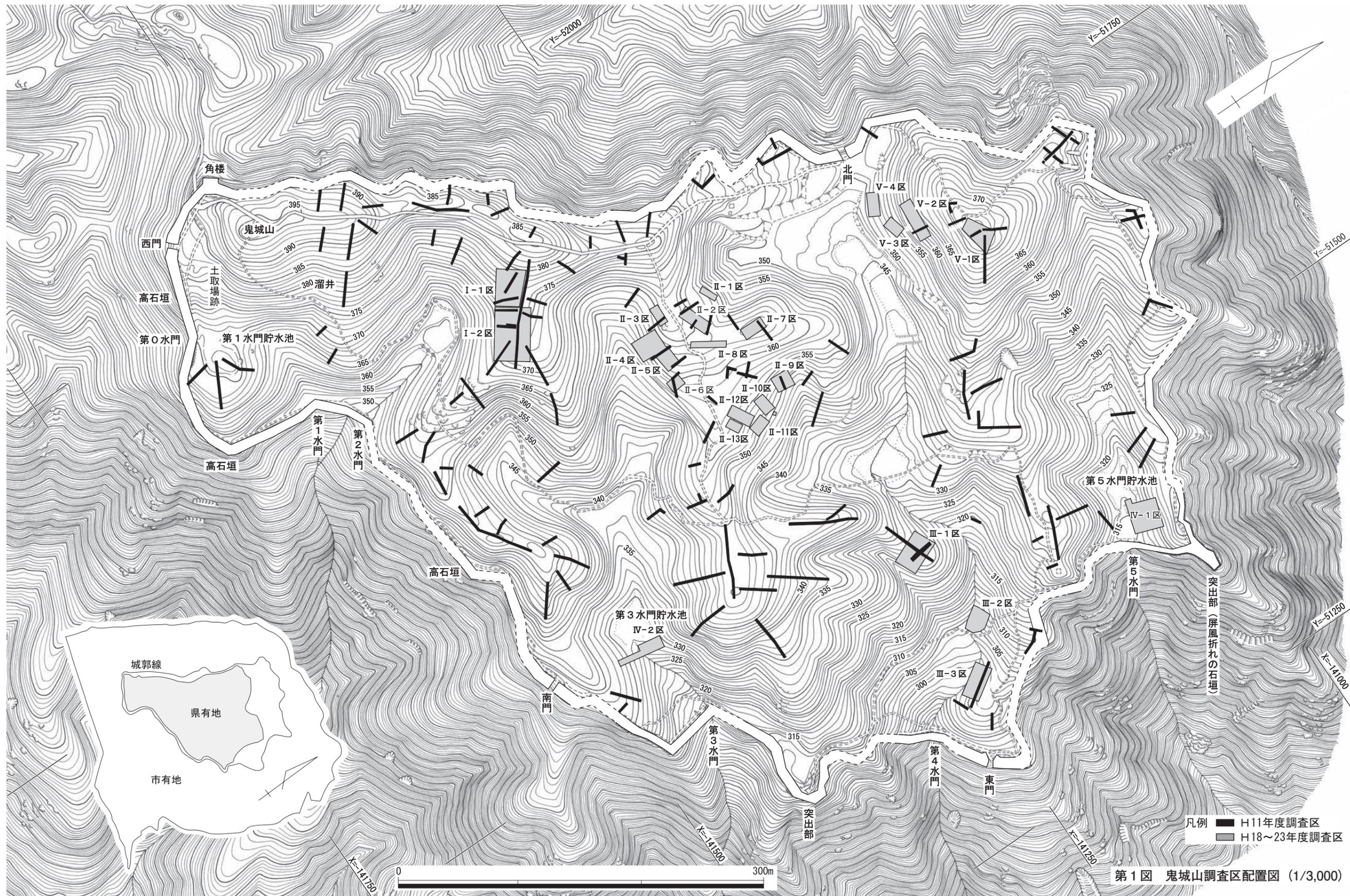
表2 文化財保護法に基づく文書一覧

国指定史跡の現状変更許可申請（第125条）

番号	文書番号 日付	種類及 び名称	所在地	目的	申請者	期間	許可条件	許可文書 番号 日付
1	岡吉調 第13号 H18.5.8	史跡 鬼城山	総社市奥坂 1763-1ほか	発掘 調査	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 松本和男	許可日～ H19.3.31	実施に当たっては、岡山県教育 委員会の指示を受ける。	18 委庁財 第4の370号 H18.6.16
2	岡吉調 第10号 H19.5.1	史跡 鬼城山	総社市奥坂 1763-1ほか	発掘 調査	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 高畑知功	許可日～ H20.3.31	実施に当たっては、岡山県教育 委員会の指示を受ける。	19 委庁財 第4の320号 H19.6.7
3	岡吉調 第5号 H20.4.22	史跡 鬼城山	総社市奥坂 1763-1ほか	発掘 調査	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 藤川洋二	許可日～ H21.3.31	実施に当たっては、岡山県教育 委員会の指示を受ける。	20 委庁財 第4の276号 H20.6.12
4	岡吉調 第63号 H20.10.15	史跡 鬼城山	総社市奥坂 1763-1ほか	樹木 植替	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 藤川洋二	許可日～ H21.3.31	実施に当たり岡山県教育委員会 の指示を受ける。	20 委庁財 第4の1430号 H20.11.21
5	岡吉調 第37号 H21.4.14	史跡 鬼城山	総社市黒尾 1141 総社市奥坂 1763-1ほか	発掘 調査	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 兎仁井克一	許可日～ H22.3.31	実施に当たっては、岡山県教育 委員会の指示を受ける。	21 委庁財 第4の6142号 H21.5.29
6	岡吉調 第15号 H22.5.10	史跡 鬼城山	総社市黒尾 1141 総社市奥坂 1763-1ほか	発掘 調査	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 兎仁井克一	許可日～ H23.3.31	実施に当たっては、岡山県教育 委員会の指示を受ける。	22 受庁財 第4号の359 H22.6.18
7	岡吉調 第90号 H22.11.16	史跡 鬼城山	総社市黒尾 1141 総社市奥坂 1763-1ほか	下草刈 りと枝 葉の切 除	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 兎仁井克一	許可日～ H22.12.25		総社市教育委員 会指令文財第63 号 H22.11.17
8	岡吉調 第11号 H23.4.25	史跡 鬼城山	総社市黒尾 1141 総社市奥坂 1763-1ほか	発掘調 査及び 仮設天 幕設置	岡山県古代吉備 文化財センター 所長 平井泰男	許可日～ H24.3.31	実施に当たっては、岡山県教育 委員会の指示を受ける。	23 受庁財 第4号の305 H23.6.17

埋蔵文化財発見通知（第100条）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土 年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第1064号 H18.12.28	須恵器・土師器・鉄器 計整理箱20箱	総社市奥坂 1763-1 史跡鬼城山	H18.7.1～ H18.12.27	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備 文化財センター
2	教文埋 第1108号 H19.12.28	須恵器・土師器・瓦・ 瓦塔・銅銭等 計整理箱5箱	総社市奥坂 1763-1 史跡鬼城山	H19.7.1～ H19.12.27	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備 文化財センター
3	教文埋 第1091号 H20.12.25	須恵器・土師器・瓦等 計整理箱5箱	総社市奥坂 1763-1 史跡鬼城山	H20.7.1～ H20.12.25	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備 文化財センター
4	教文埋 第1030号 H21.12.28	土器類（須恵器・ 土師器等）、石器 （石鏃等）、土製品 （輪羽口）、鉄器（釘等）、 鉄滓等 計整理箱20箱	総社市奥坂 1762-6、1763-1 史跡鬼城山	H21.7.1～ H21.12.28	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県知事 石井正弘 総社市長 片岡聡一	岡山県古代吉備 文化財センター
5	教文埋 第1077号 H22.12.28	土器類（須恵器・土師器・ 弥生土器）、 石器（砥石）、鉄滓等 計整理箱3箱	総社市奥坂 1763-1、1772、 1774 史跡鬼城山	H22.7.1～ H22.12.28	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	岡山県知事 石井正弘 総社市長 片岡聡一	岡山県古代吉備 文化財センター
6	教文埋 第1066号 H23.12.28	土器類（須恵器・土師器）、 鉄器等 計整理箱5箱	総社市奥坂 1763-1、1772 史跡鬼城山	H23.7.1～ H23.12.28	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	岡山県知事 石井正弘 総社市長 片岡聡一	岡山県古代吉備 文化財センター



第1図 鬼城山調査区配置図 (1/3,000)

第2章 地理的・歴史的環境

史跡鬼城山（第3図1、以下同じ）は、岡山県総社市奥坂・黒尾に所在する鬼城山の山頂付近に築かれた古代山城である。

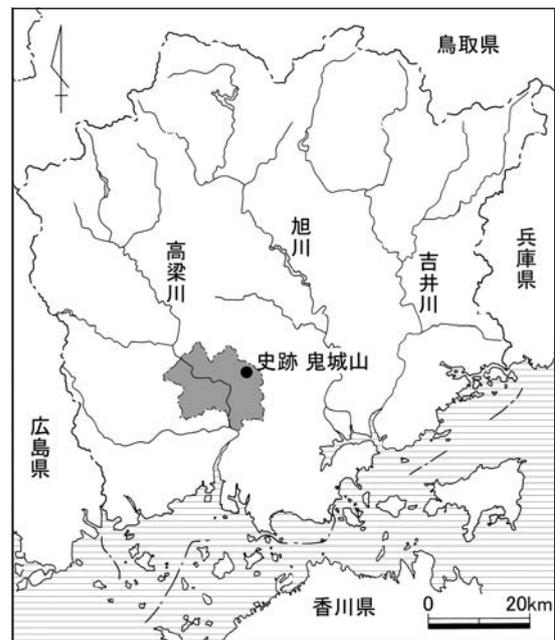
鬼城山は吉備高原の南端部に位置する標高396.3mの山岳であり、標高311mの高丸山や372mの経山などを介して総社平野に面している。吉備高原は岡山県中部の大部分を占める高原地帯であり、標高400～600mの比較的起伏の小さい丘陵群が連なっている。この吉備高原の南端に位置する鬼城山は、頂部は比較的平坦な地形をなしている一方で、平野に望む南側は急斜面となっており、まさに天然の要害というべき地形を現出している。そして山上からは備中の中核地域である総社平野のみならず、広く岡山平野から児島半島、瀬戸内海の島々、さらに四国の古代山城である屋嶋城や讃岐城山城までも遠望することができる。

鬼城山とその周辺の地質については、ほぼ全域が中生代白亜紀末に形成された花崗岩からなり、一部には相対的に細粒のアプライトないし流紋岩の露頭が散見される。硬質な花崗岩は、構造物に適した石材として採取され、城壁や門礎などの構築に利用されている。

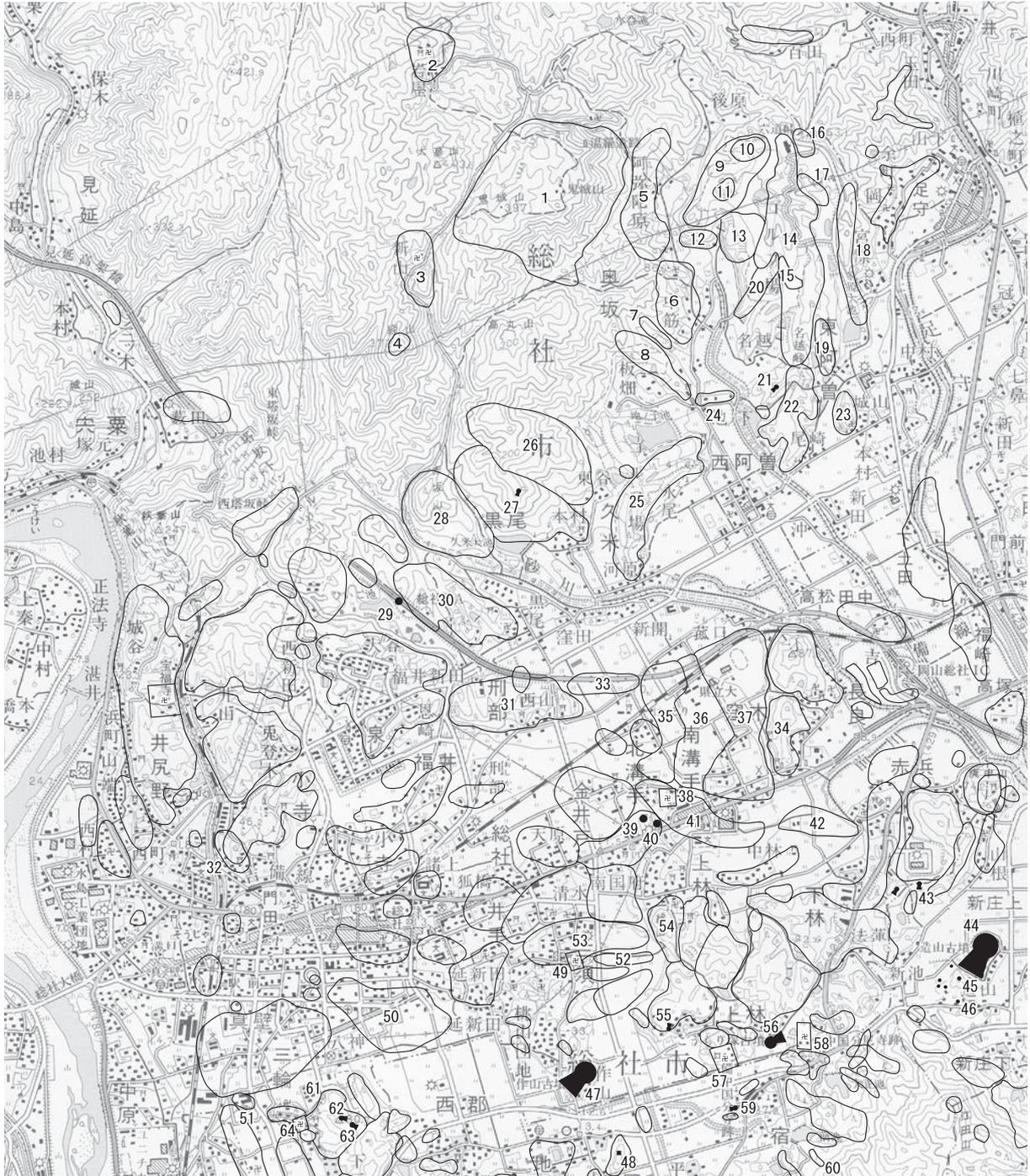
鬼城山の眼下に広がる総社平野は、高梁川の沖積作用によって形成された平野である。高梁川は岡山県三大河川の一つであり、中国山地の新見市花見山に源を発する。中小河川を合流させながら吉備高原を南流し、総社平野に至り倉敷市南部で水島灘に注いでいる。縄文時代以前には総社市井尻野付近より下流の平野部は形成されていなかったが、高梁川の沖積作用により次第に陸地化されていった。この過程において井尻野付近より東側に分流が生じ、これらの河川の働きによって総社平野には多くの微高地が形成されていった。

総社平野における人々の営みは、浅尾遺跡（32）等、周辺の丘陵で石器が採集されていることから旧石器時代にさかのぼる。縄文時代には、長良山遺跡（34）、真壁遺跡（50）、樋本遺跡（51）等で土器片が散見されるものの、中期以前には定住の証拠となるような遺構は確認されておらず、一時的な生活の場に過ぎなかったようである。後期になると沖積作用が進展し、新たに形成された平野部に集落が営まれるようになる。代表的な遺跡として真壁遺跡、南溝手遺跡（36）、窪木遺跡（37）があげられる。南溝手遺跡では、後期中葉の土器胎土中からイネのプラントオパールが検出されているほか、靱圧痕のある土器が出土しており、縄文時代の農耕を考える上で重要な資料である。

弥生時代の代表的な遺跡としては北溝手遺跡（35）、南溝手遺跡、窪木遺跡があげられる。前期には小規模な集落が営まれていたが、中期後半から



第2図 遺跡位置図



- | | | | |
|-------------------|----------------|-----------------|-----------------|
| 1. 鬼城山 | 17. 宮原谷遺跡 | 33. 服部遺跡 | 49. 三須廃寺 |
| 2. 岩屋寺跡 | 18. 宮原古墳群 | 34. 長良山遺跡・長良山城 | 50. 真壁遺跡 |
| 3. 新山廃寺 | 19. 牛神古墳群・牛神砦 | 35. 北溝手遺跡 | 51. 樋本遺跡 |
| 4. 経山城跡 | 20. 林崎遺跡・林崎古墳群 | 36. 南溝手遺跡 | 52. 三須河原遺跡 |
| 5. 阿弥陀原古墳群 | 21. 随庵古墳 | 37. 窪木遺跡・窪木宮後遺跡 | 53. 三須畠田遺跡・中所遺跡 |
| 6. 穴観音古墳群 | 22. 尾崎古墳群・尾崎城跡 | 38. 栢寺廃寺跡 | 54. 緑山古墳群 |
| 7. 畑古墳群 | 23. 鳥越山城跡 | 39. 伝備中国府跡 | 55. 江崎古墳 |
| 8. 板畑古墳群 | 24. 池ノ下散布地 | 40. 御所遺跡 | 56. こうもり塚古墳 |
| 9. 千引古墳群 | 25. 久米古墳群 | 41. 大文字遺跡 | 57. 備中国分寺跡 |
| 10. 千引遺跡 | 26. 赤坂山古墳群 | 42. 窪木薬師遺跡 | 58. 備中国分尼寺跡 |
| 11. 千引カナクロ谷製鉄遺跡 | 27. 久米大池古墳群 | 43. 小造山古墳 | 59. 宿寺山古墳 |
| 12. かむろ古墳群 | 28. 黒尾古墳群 | 44. 造山古墳 | 60. 末ノ奥窠跡群 |
| 13. くもんめふ遺跡 | 29. 奥ヶ谷窠跡 | 45. 榊山古墳 | 61. 宮山墳墓群 |
| 14. 名越古墳群・名越1～4号砦 | 30. 中山古墳群 | 46. 千足古墳 | 62. 天望台古墳 |
| 15. 名越遺跡 | 31. 西山遺跡・西山古墳群 | 47. 作山古墳 | 63. 三笠山古墳 |
| 16. 新池奥遺跡 | 32. 浅尾遺跡 | 48. 角力取山古墳 | 64. 三輪廃寺 |

第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

後期前半にかけて遺構数が急増するとともに集住性の高まりがみられ、集落の最盛期を迎えている。この時期には各地で集落の形成や拡大が認められる。このような集落の盛行を背景に、近隣の丘陵上には前山遺跡、鋳物師谷遺跡、宮山墳墓群（61）のような集団墓が営まれ、やがてその中から卓越した首長墓として墳丘墓が出現することとなる。

古墳時代前期には、弥生時代後期以来の系譜を継ぐ首長墓として前方後円墳が現れ、三輪山山塊では天望台古墳（62）や三笠山古墳（63）が築かれた。また、高梁川右岸の丘陵尾根上に築かれた一丁塊1号墳は、近年行われた測量調査や確認調査の結果から、墳長約75mの前方後方墳であることが確認されている。中期には、造山古墳（44）、作山古墳（47）のような全国的にみても大規模な前方後円墳が築かれた。後期には周辺の丘陵上に盛んに群集墳が築かれるとともに、県内でも有数の大形横穴式石室を有するようもり塚古墳（56）や江崎古墳（55）が築かれた。以上のことから当地域が吉備において卓越した地域であったことがうかがえる。この背景には、須恵器生産や鉄器製作のような先進的な技術の導入に象徴される朝鮮半島との密接な関係が想定される。5世紀前半には奥ヶ谷窯跡（29）において初期須恵器生産、窪木薬師遺跡（42）において本格的な鍛冶集落が営まれている。

7世紀後半、日本列島では対外的な緊張の高まりや国内の政治的転換が相次いで生じている。663年の白村江の戦いにおいて、唐・新羅の連合軍に敗戦して以降、西日本各地には防衛のための山城が築かれた。また672年には天智天皇死後の皇位をめぐる壬申の乱が起き、大友皇子を破った大海人皇子が天武天皇として即位した。このような列島の動向と吉備も無関係ではない。壬申の乱のさいには、吉備を治めていた当摩公広嶋が大海人皇子の軍に加担することを危惧した近江方によって謀殺されている。また、『日本書紀』の「吉備大宰石川王、病之薨於吉備」の記事から、壬申の乱の功臣である石川王が吉備大宰に任じられ、任地の吉備で没したことが推察される。大宰は総領とも呼ばれ、国政上重要な地域を統括する官職である。700年には上毛野朝臣小足が総領に任じられている。

このころ、備中の経済的基盤を支える代表的な産業として、製鉄と窯業が重要な位置を占めていたと考えられる。鬼城山と阿弥陀原の谷を隔てて東側の尾根及び谷筋に位置する奥坂遺跡群では、6世紀後半に操業が開始される千引カナクロ谷製鉄遺跡（11）に続き、宮原谷遺跡（17）、くもんめふ遺跡（13）、林崎遺跡（20）、千引遺跡（10）、新池奥遺跡（16）において8世紀前半まで連続と製鉄が行われた。高梁川西岸地域でも、沖田奥遺跡、大ノ奥遺跡、板井砂遺跡、古池奥遺跡、藤原遺跡において7～8世紀代にかけて作業場を移しながら連続的に製鉄が行われた。この時期の備中最大の窯跡群は倉敷市玉島陶窯跡群である。約30基の窯が確認されており、6世紀末から8世紀にかけて操業されていた。これ以外には2～5基程度からなる小規模な窯跡群が各地に点在しており、くもんめふ遺跡においても2基の須恵器窯が確認されている。末ノ奥窯跡群（60）は7世紀前半から8世紀初頭の須恵器のほか、瓦や鴟尾、鬼瓦板が出土している。角端点珠瓦が見られることから大和豊浦寺の供給瓦窯と想定されており、蘇我氏との関係性がうかがえる。また末ノ奥窯跡群のほど近くに立地する道金山窯跡では「官」の逆字を押印した須恵器片が採集されている。浅口市上竹西の坊遺跡は玉島陶窯跡群の西方約5kmの地点に立地しており、須恵器窯が確認されている。製品中には円面硯も含まれることから、官衙への供給が想定される。これらの窯跡は小規模ではあるものの、総社平野に集中する官衙施設との関係を考える上で示唆に富む資料といえる。

古代の備中国は九郡を置く上国であり、総社平野には高梁川以西に下道郡、高梁川以東の北側に賀夜郡、東流する旧河道を挟んで南側に窪屋郡が位置していた。当該期の備中国府は『和名抄』の記述

で賀夜郡に置かれていたとあるものの、詳細な場所は明らかになっていない。「国府」・「北国府」・「御所」などの小字名の残る金井戸地区周辺がその有力な候補地のひとつである。また、7世紀後半に建立された栢寺廃寺(38)は賀陽氏の氏寺であり、近年の発掘調査により東西1町、南北1町半の寺域が確認されている。窪屋郡にあたる三須丘陵の南側には古代山陽道が整備され、備中国分寺(57)、備中国分尼寺(58)が造立された。三須河原遺跡(52)では規則的な配置の掘立柱建物が確認されたほか、「郡殿」墨書土器や畿内産土師器が出土していることから、窪屋郡衙の一部とされている。このように総社平野一帯には官衙に関連する施設が濃密に配置されており、それらを眼下に配する山上に古代山城の鬼城山は築かれているのである。

平安時代には、金井戸地区に所在する御所遺跡(40)が11世紀から12世紀の間、備中国府として機能していた。発掘調査により、大溝で囲われた方形居館やその内部の特殊な構造の井戸、梵鐘鑄造土坑などが検出され、供膳具を中心とした土器片も大量に出土している。西側は未調査であるものの、全体で1町四方あったものと想定されている。また、鎌倉時代に作成された『備中国賀陽郡服部郷図』の記載から、この一帯が条里に区画された田畠であり、備中国の国衙領であったと推定されている。

古代山城の廃城後、鬼城山を含めた一帯は、山岳仏教の拠点として利用されるようになった。新山廃寺(3)周辺に散布する瓦には都で使用された意匠が施されたものもあり、都との関わりを深さを示している。『成尋阿闍梨母集』の記載によると、11世紀後半に京の高僧成尋が入山し修行したとされており、平安中期ごろには都にも名高い霊場であったことがうかがえる。岩屋寺(2)は新山寺に属していたが、後に独立した寺院となっている。現在も巨石や「岩屋の皇の墓」と呼ばれる無縫塔が残されており霊場の趣をとどめている。室町期には新山寺、岩屋寺とともに多数の塔頭によって構成されていたが、戦国時代の戦乱によってほとんどが焼失あるいは移転し廃絶した。現在も「大門」・「本堂の池」・「宝堂」等、寺院に由来する小字名が周辺に数多く残されており、往時の隆盛をしのぼせる。

戦国時代には備前と備中の国境にあたるこの地はしばしば戦場となり、総社平野を臨む丘陵上に城砦が築かれた。鬼城山の西側に位置する経山の山頂には、大内義隆築城と伝わる経山城(4)が築かれた。経山城は北を除く三方が切り立った地形に立地し、要所には石垣・土塁を配し空堀を設けている。非常に堅固なつくりのこの城は織田方の二度の攻撃に耐えた。このほかにも数多くの城砦が残されており、この地で幾度となく合戦が繰り返されたことを示唆している。しかし1582年、備中高松城の水攻めにより、織田方の羽柴秀吉と毛利氏との間に和議が成立したことで、この地における戦乱は終結した。(中原)

主要参考文献

- 『岡山県史』原始・古代Ⅰ 岡山県 1991
- 『岡山県史』古代Ⅱ 岡山県 1989
- 『岡山県史』考古資料 岡山県 1986
- 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31・69・86・100・107・120・121・124・203・214・235 岡山県教育委員会 1979・1988・1993・1995～1998・2006・2008・2012
- 『金光町史』本編 金光町 2003
- 『総社市史』考古資料編 総社市 1987
- 『総社市史』通史編 総社市 1998
- 『総社市埋蔵文化財調査報告』1～20 総社市教育委員会 1984～2009
- 『総社市埋蔵文化財調査年報』1～21 総社市教育委員会 1991～2012
- 『日本城郭体系』13 広島・岡山 新人物往来社 1980
- 『山手村史』本編 山手村 2004

第3章 発掘調査の概要

第1節 I区の調査

1 調査区の概要

I区は県報告203でAゾーンとした区域で、鬼城山西よりの北西から南東にのびる尾根上に位置する。平成11年度の確認調査で多くの土器が出土し、土坑や柱穴等の遺構も検出されたことから、築城工事に伴う作業拠点あるいは築城後の兵士の駐屯地としての利用が想定された地区である。

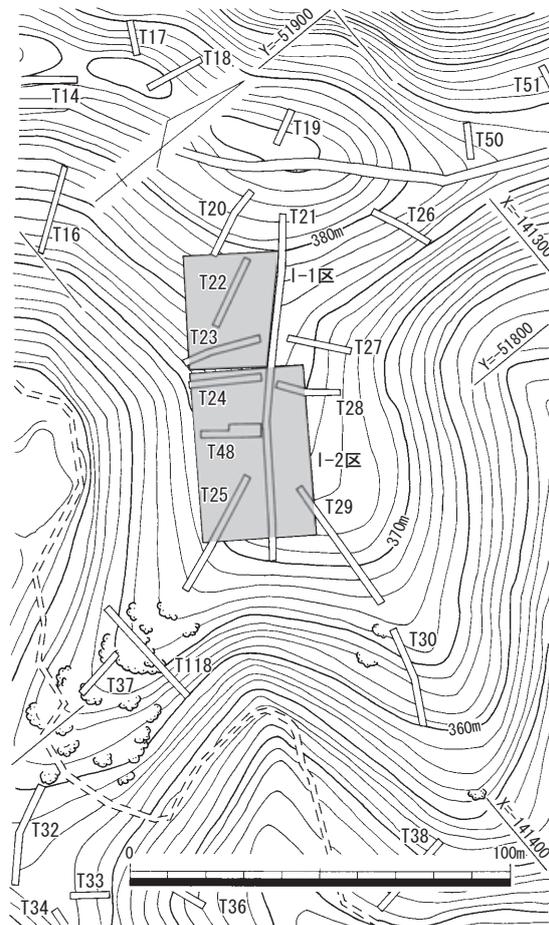
I区は北半部のI-1区と南半部のI-2区に分かれる。I-2区は平成18年度に実施した調査区で、後述するように多くの遺構・遺物が検出された。そのため、平成23年度にI-2区の遺構・遺物の広がりを追究するためI-1区の調査を実施した。

I区の主な調査成果であるが、基壇状遺構、土坑、柱穴、土器溜まり、火処等を検出した。基壇状遺構は確認できた範囲で約14×7m以上を測り、周縁に石列や溝が巡らされていた。基壇状遺構の上面では柱穴がいくつか検出され、中には柱痕跡を確認することができるものもあった。掘立柱建物の特定までは至らなかったが、I区に掘立柱建物が存在した可能性は高いといえる。

土器溜まり1は南側斜面に位置し、およそ4.5×1.5mの範囲に広がっていた。須恵器・土師器数十個体分が出土した。須恵器では杯・高杯・甕・長頸壺・円面硯等が出土し、土師器では甕などの煮沸具に加え、畿内産土師器が1点出土している。これらの土器は、出土状況から片付けにより廃棄されたものと推定される。この土器溜まり1を含む土器の編年上の位置付けについては第4章第5節で検討するが、その中心となる時期は7世紀末から8世紀初頭と考えられ、鬼城山の存続期間や変遷を考える上で貴重な資料となった。

このように、I区では基壇状遺構の発見のほかに、鬼城山の中で最もまとまった土器資料が出土するなど成果があった。このことは、I区が城内において中枢的な役割を担っていたことをうかがわせる。

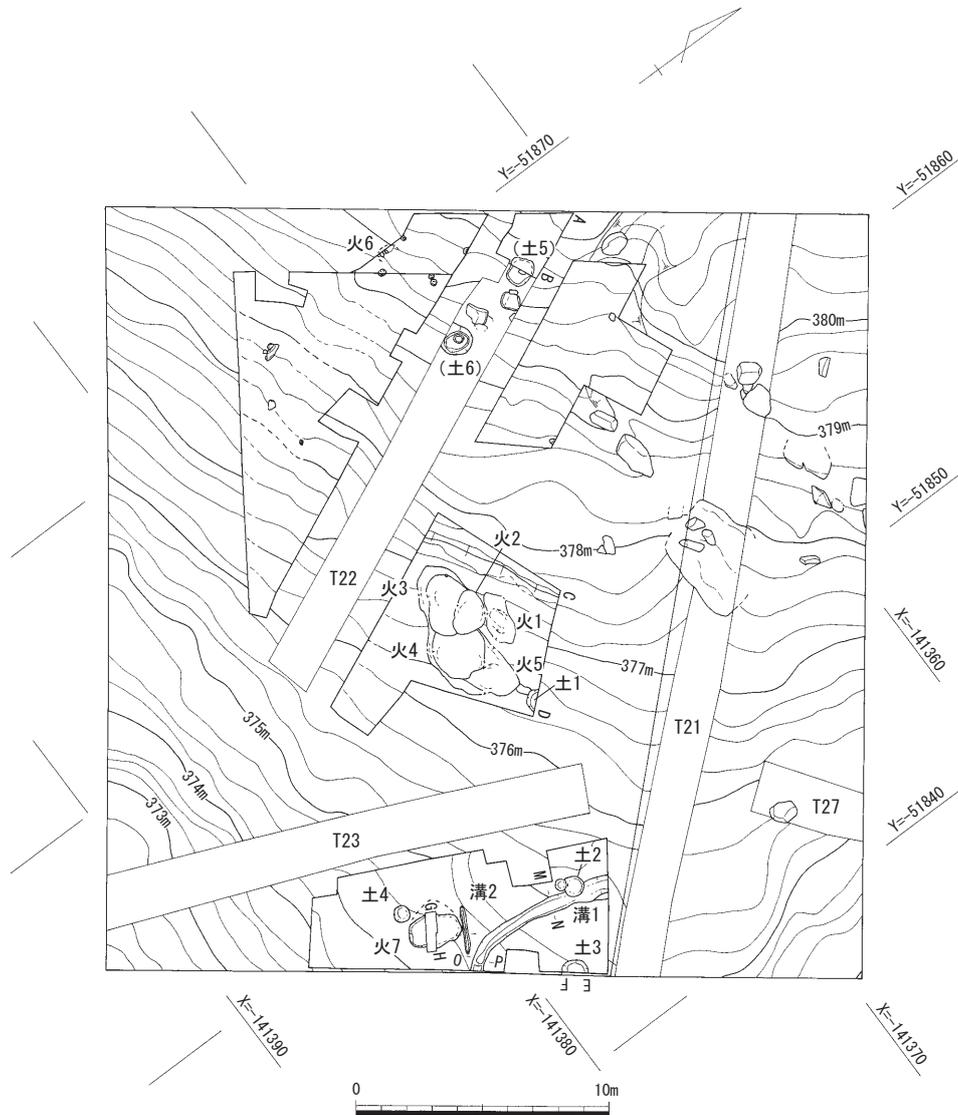
(金田)



第4図 I区調査区位置図 (1/2,000)

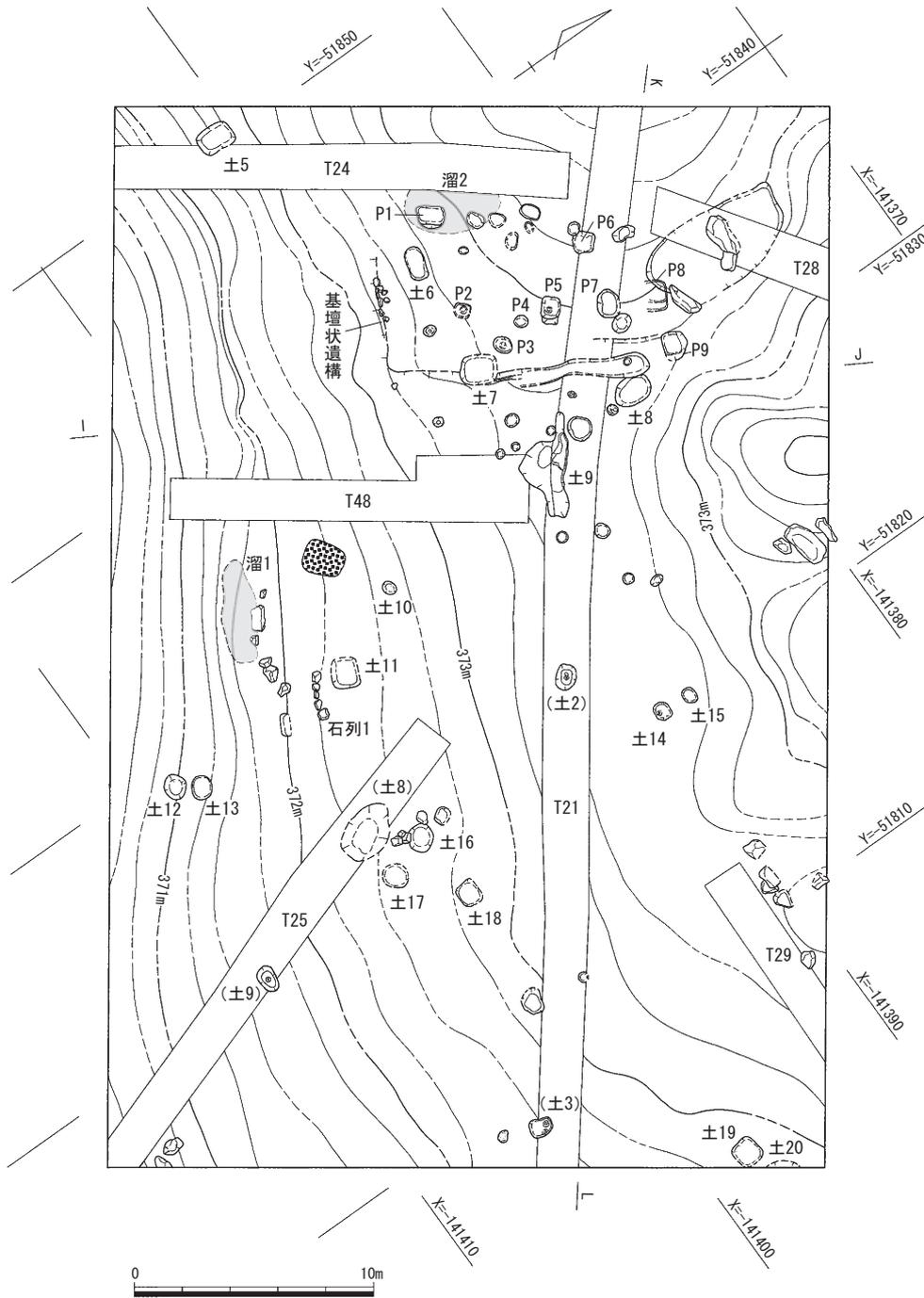
次に各調査区の概要を述べる。I-1区は尾根筋の付け根付近にあたり、上方斜面から下方のI-2区へ続く傾斜変換部に位置しているため、傾斜はやや急になっている。調査区内には尾根上から流れ込んだ岩盤の風化土とみられる黄褐色土が堆積している（第7図）。I-1区内の遺構は岩盤ではなく、その上面に自然堆積している黄褐色土上面から切り込まれている場合が多い。

調査の結果、土坑・柱穴・溝・火処等の遺構が検出された。土坑や柱穴はI-2区との境界に近い南端部を中心に分布し、I-2区に分布する遺構群はこのあたりまで広がりをもっていたものと思われる。調査区中央部では、斜面を削平した平坦面上に重複する火処1～5が検出され、これらも7世紀後半ごろのものと考えられる。北端部では、平成11年度調査時のトレンチT22で、「土壙5・6」の2基が検出されている。これらの土坑について、調査担当者は落とし穴の可能性を指摘しつつも、古代の建物（柱穴）の可能性を残し、周辺精査の必要性について言及していた。そこでT22周辺に調査区を設定して調査したが、これらの土坑に対応する柱穴を検出することはできなかった。したがって、I-1区北端部には掘立柱建物は存在していなかったと考えられる。



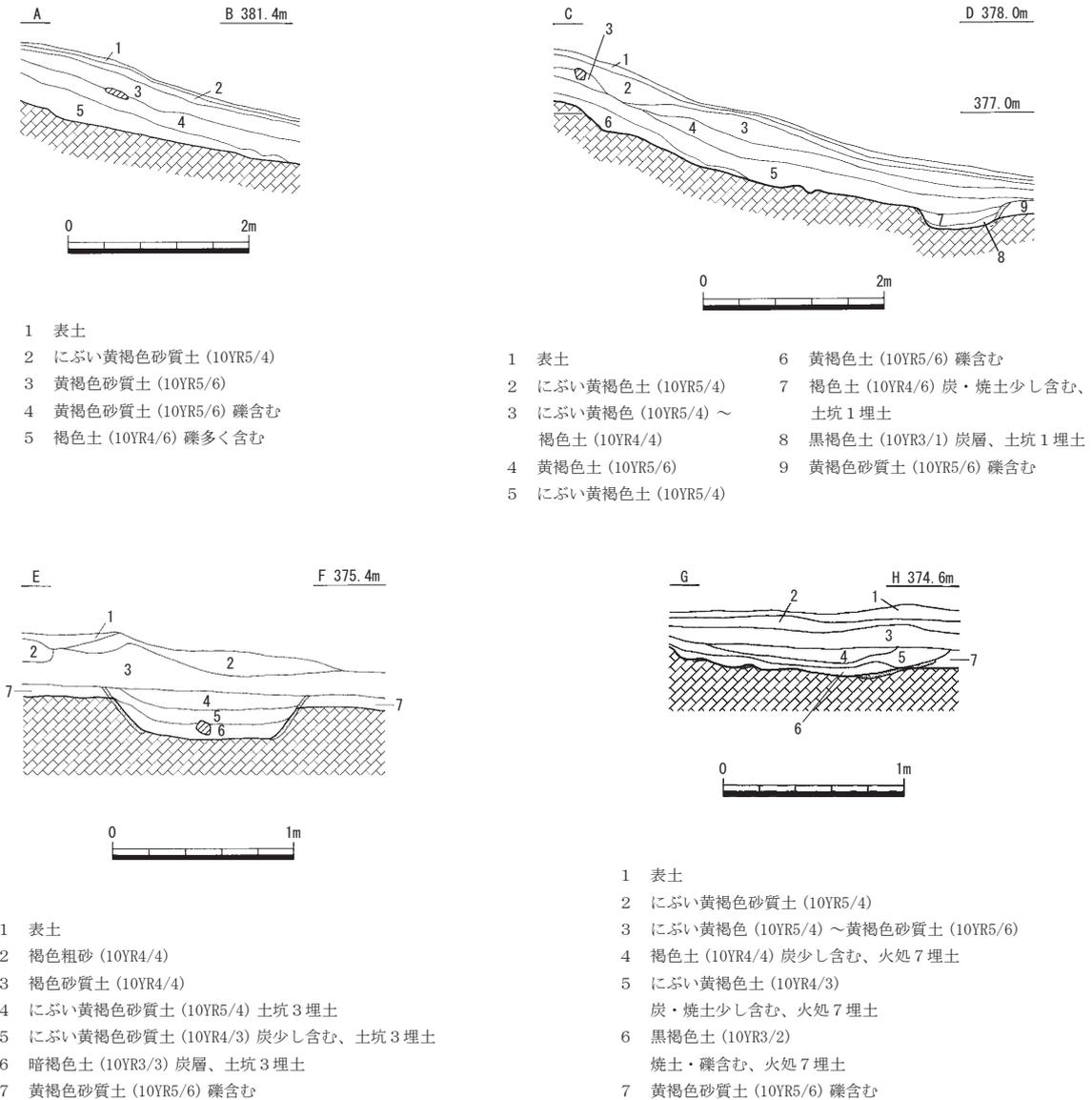
第5図 I-1区遺構配置図 (1/300)

I-2区は、南東にのびる尾根上に位置する調査区である。この地点では、確認調査時に尾根を縦断及び横断する複数のトレンチによって多数の土坑・柱穴が確認され、城内における作業拠点や兵士の駐屯地の存在が想定されていた。調査区の位置する尾根は若干の起伏があるものの、おおむねならからかで、長さ約40m、幅約20mほどの平坦面が広がる。調査区の断面図として、尾根を横断する地形断面（第8図I-J断面）と、確認調査時に尾根筋に沿って設定されたT21の土層断面のうちI-2区に相当する部分（第8図K-L断面）を示している。確認調査時の断面図であるので、本調査の成果と一部整合しない部分がある。



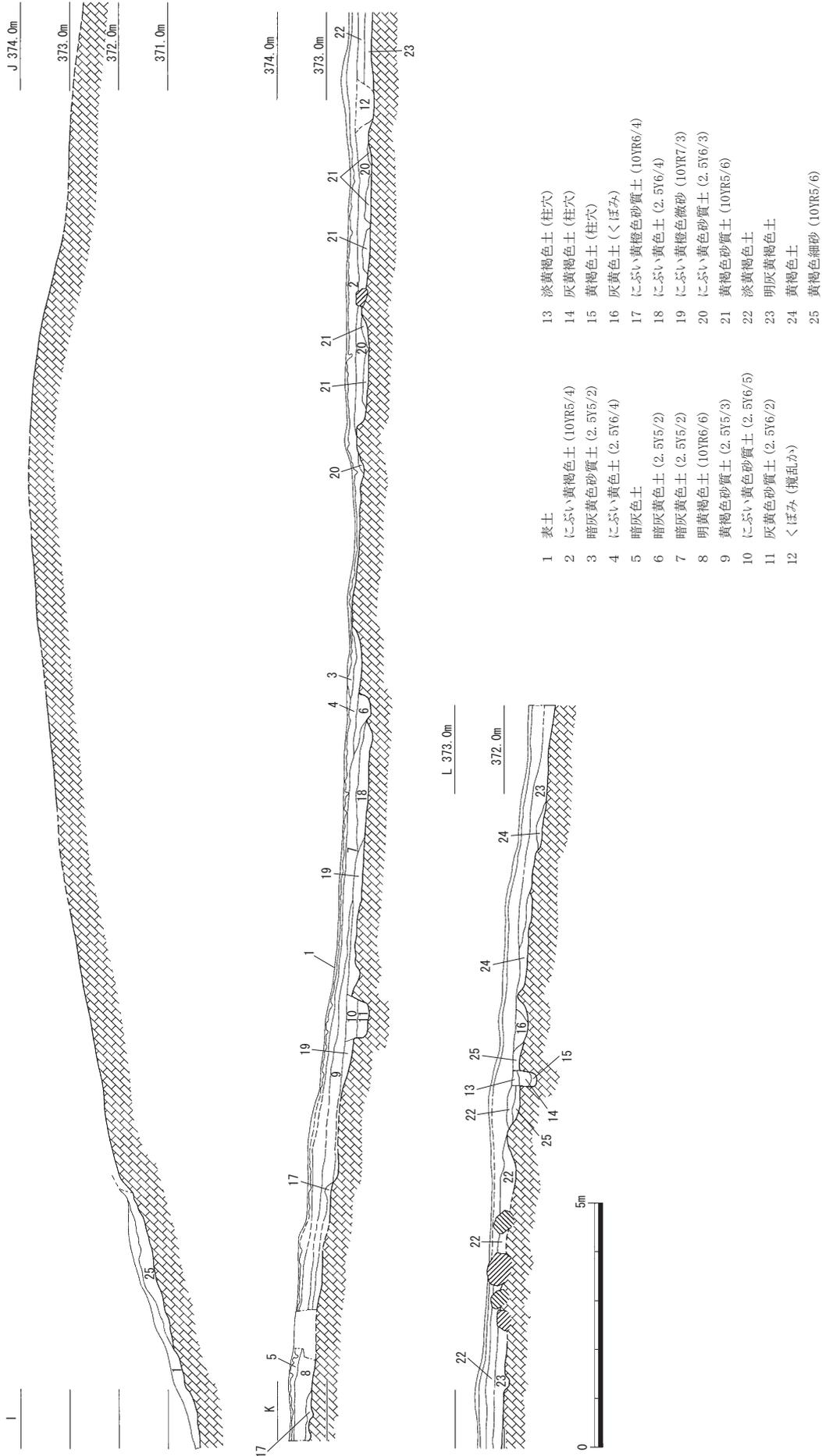
第6図 I-2区遺構配置図 (1/300)

第3章 発掘調査の概要



第7図 I区土層断面図① (1/80・1/40)

この調査区では、ほぼ全域から土坑・柱穴・土器溜まり・溝など各種の遺構を検出した。特に北端部では、周囲に石列や溝を伴う長方形の基壇状遺構が検出された。遺構内部には検出面からの深さが65cmを測る比較的大きな柱穴と、円形で径50cm程度の小形の柱穴等がみられた。中には柱痕跡が確認できるものもあり、基壇上面を全面的に発掘したわけではないが、柱穴の配列状況は建物の存在を示唆するものであり、この場所に掘立柱建物が存在した可能性は高いといえる。また、南西斜面上に形成された土器溜まり1からは多数の須恵器のほか、円面硯や畿内産土師器など官人層の存在を示唆する遺物も出土し、本地点の重要性を物語っている。一方、調査区内で多数検出された被熱土坑は、出土遺物が少なく年代の特定が難しいが、古代山城期のほか平安時代のもも多いと考えられ、廃城後もこの場所で何らかの行為がなされていたことをうかがわせる。(岡本)

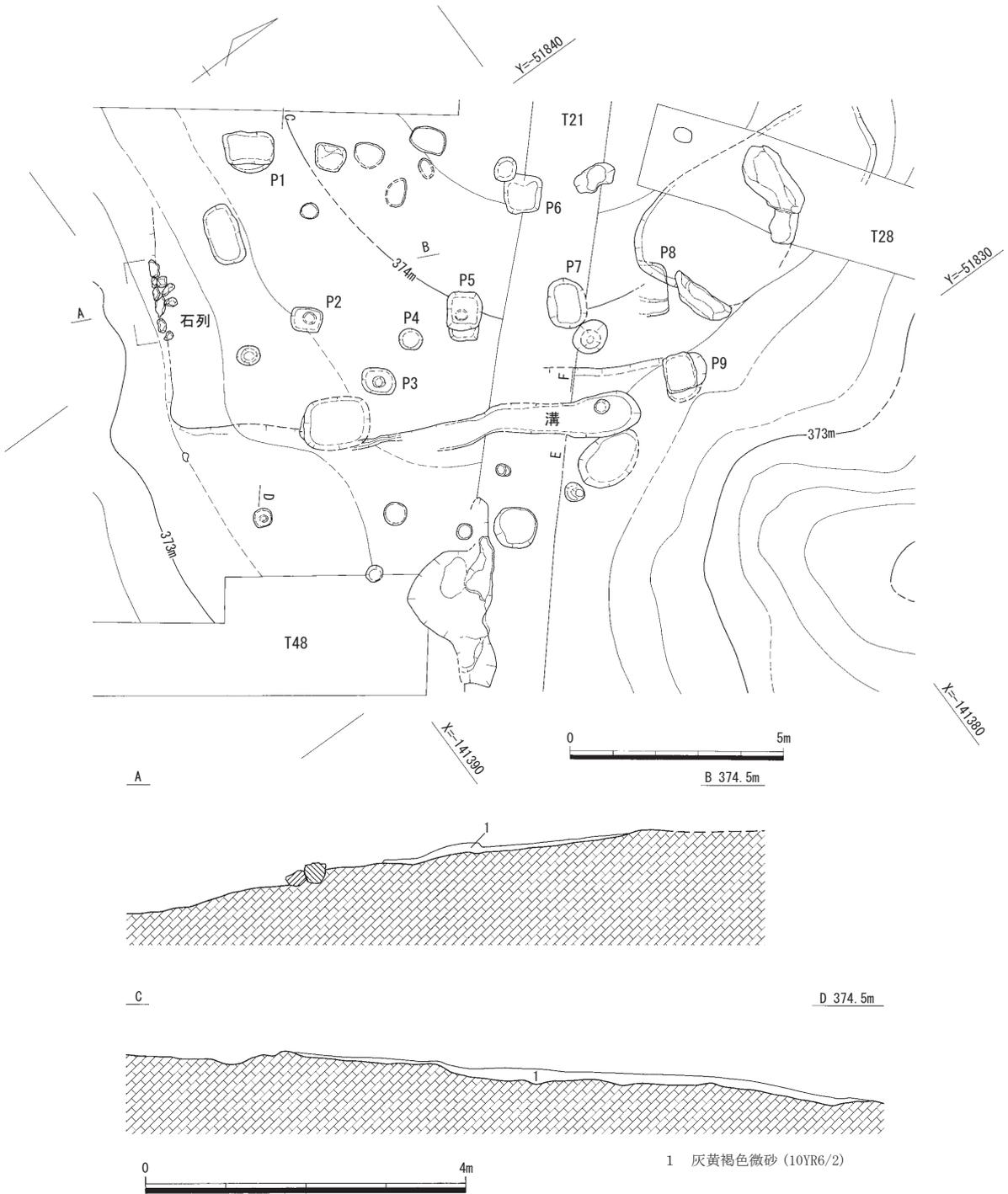


第8図 I区土層断面図② (1/120)

2 I区

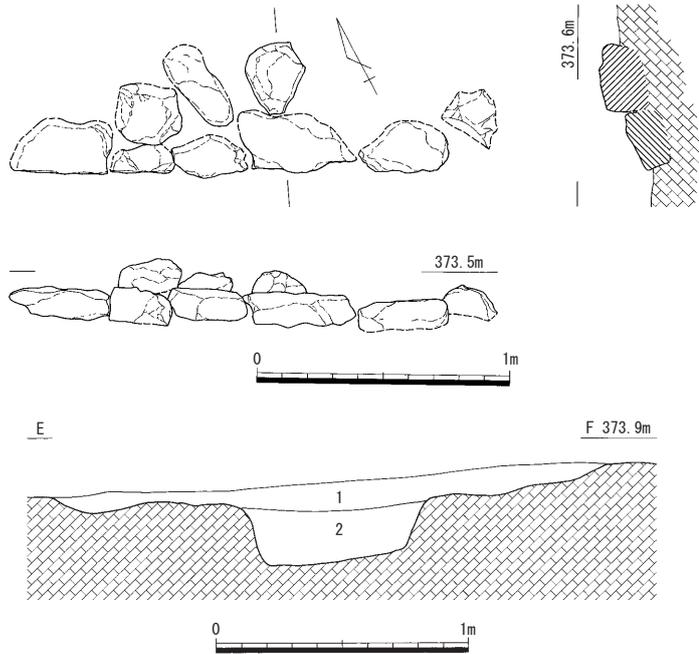
基壇状遺構（第6・9・10図、図版1、写真1）

I区中央で確認された。南東にのびる尾根を利用しながら南西辺を石列、南東辺を溝によって方形高まりの区画を造作している。尾根の高い側の北西辺と北東辺を画する施設は確認されていないが、北東辺については地形の現況から、約14m×7m以上の範囲で高まりが復元できる。基壇状遺構最頂部の標高は374.25mを測り、南西辺の石列下部からの比高は約1mを測る。南西辺を区画する石列は



第9図 基壇状遺構 (1/150・1/80)

5石が長さ170cmにわたって30~40cmほどの平滑な長側辺をほぼ外面にそろえて配置され、内側に3石が積まれている状況で残存している。斜面下方にも石材が多数崩落しており、遺構平坦面との比高も考慮すると構築当初は南西辺全体に2~3段程度積み上げられていた可能性がある。この石列は基壇化粧的な要素を持たせつつ、土砂流出防止を意図して設けられたと思われる。なお、石の配置については特に掘り方や背後の裏込め石などは観察されなかったことから、整地土を盛るさいに同時に配置されたものと判断される。南東辺の溝は、中央部では比較的明瞭で幅約70cm、深さ20cmほど確認できたが、両隅に向かって流出しているためか全体像は不明瞭である。この区画内の高まりは地山由来の花崗岩風化土の黄褐色細砂で整地、構築されているが、版築や互層状の堆積は特に認められない。また、確実な整地盛土内出土遺物はなく、確認時の表土層掘削時に7世紀後半~8世紀初頭段階の須恵器等が出土している。このことから、基壇状遺構の構築時期はこの段階であると判断している。



1 明黄褐色細砂 (10YR6/6) 2 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)

第10図 基壇状遺構 石列・溝 (1/30)

I区では、この基壇状遺構内にほぼ限定されるように、後述する50cmを超える規模の比較的大きな柱穴群を検出しており、掘立柱建物の基壇として利用されていたと評価している。(大橋)

柱穴群 (第6・9・11・12図、図版4)

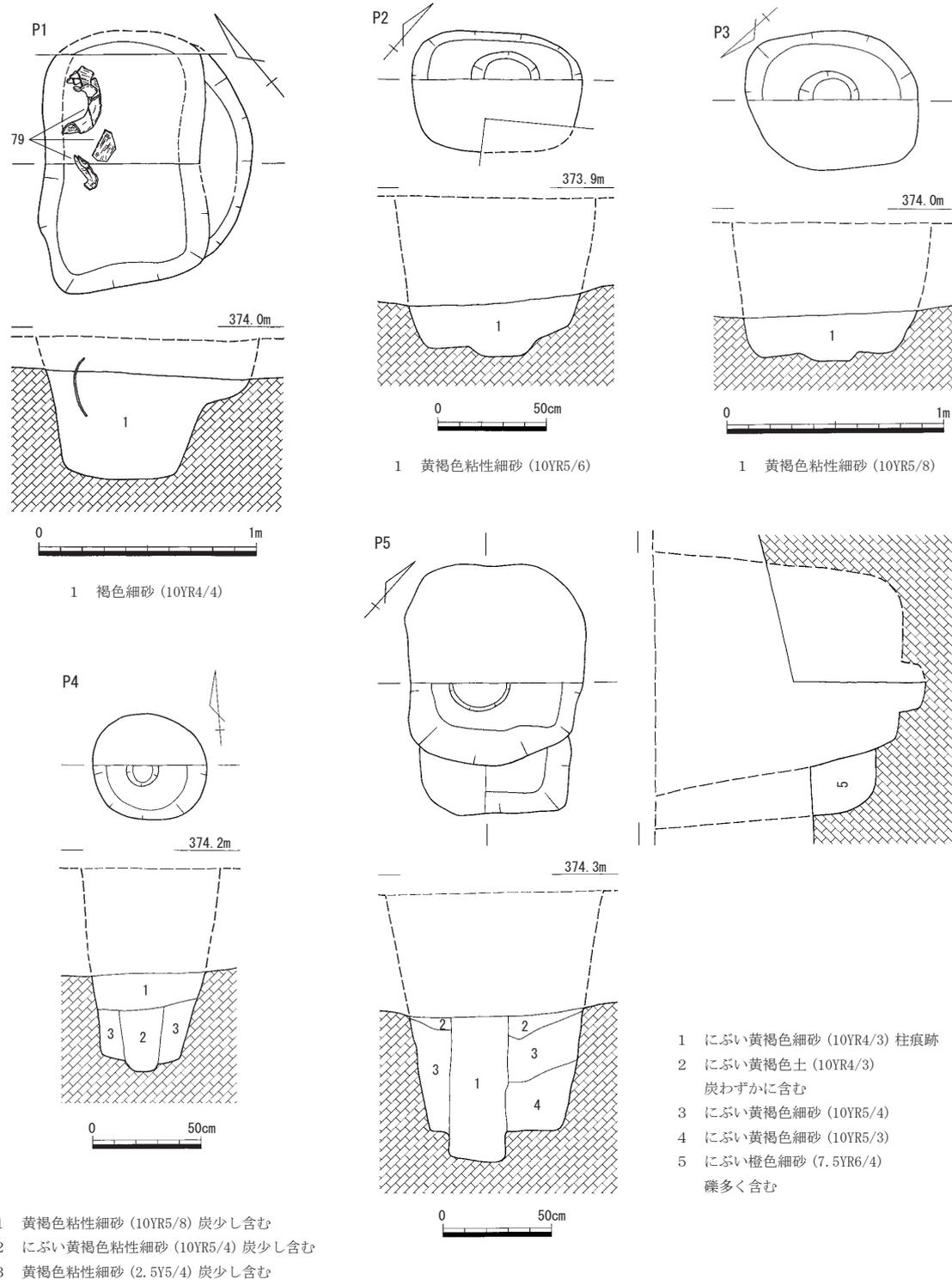
基壇状遺構内で確認された柱穴群についてここで説明する。平成11年度の確認調査で、T21において平面長方形を呈する柱穴状の遺構を検出した。そのため、I区では掘立柱建物の把握に主眼を置いて調査を進め、そのさいに前述した石列などで区画された方形基壇状遺構の存在を確認し、柱穴を検出するために整地盛土層を部分的に掘り下げ、複数の柱穴を検出した。以下個別に記載する。なお、柱穴個別図の破線で示す上面は、現況での基壇状遺構の復元面であり、推定される本来の柱穴の深さの表現を意図したものである。

柱穴1は基壇状遺構内の北西部にあり、検出面で長さ118cm、幅90cm、深さ50cmを測る。南東辺が2段になっており、断面観察でも柱痕跡が確認されないことも考え合わせると、南東側から柱を抜き取った可能性がある。柱穴内からは須恵器甕79が出土している。この79は小破片となって柱穴1の周辺にも散在しており、土器溜まり2出土遺物として第44図に示した。柱が抜き取られたくぼみに、周辺に廃棄された甕の一部が落ち込んだものと理解している。柱穴2は基壇状遺構内の南東に位置する。長辺80cm、短辺55cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは25cm、復元される基壇上面からは70cmを測る。底面には径35cmほどの柱あたりが認められる。柱穴3は柱穴2の東側で検出した。長径80cm、短径65cmほどのやや楕円形を呈する。検出面からの深さは20cm、復元される深さは60cmを測る。底面に柱穴2同様、柱あたり痕跡が認められる。

柱穴4は径50cmの円形を呈し、検出面からの深さ46cm、復元される深さは90cm程度と思われる。断

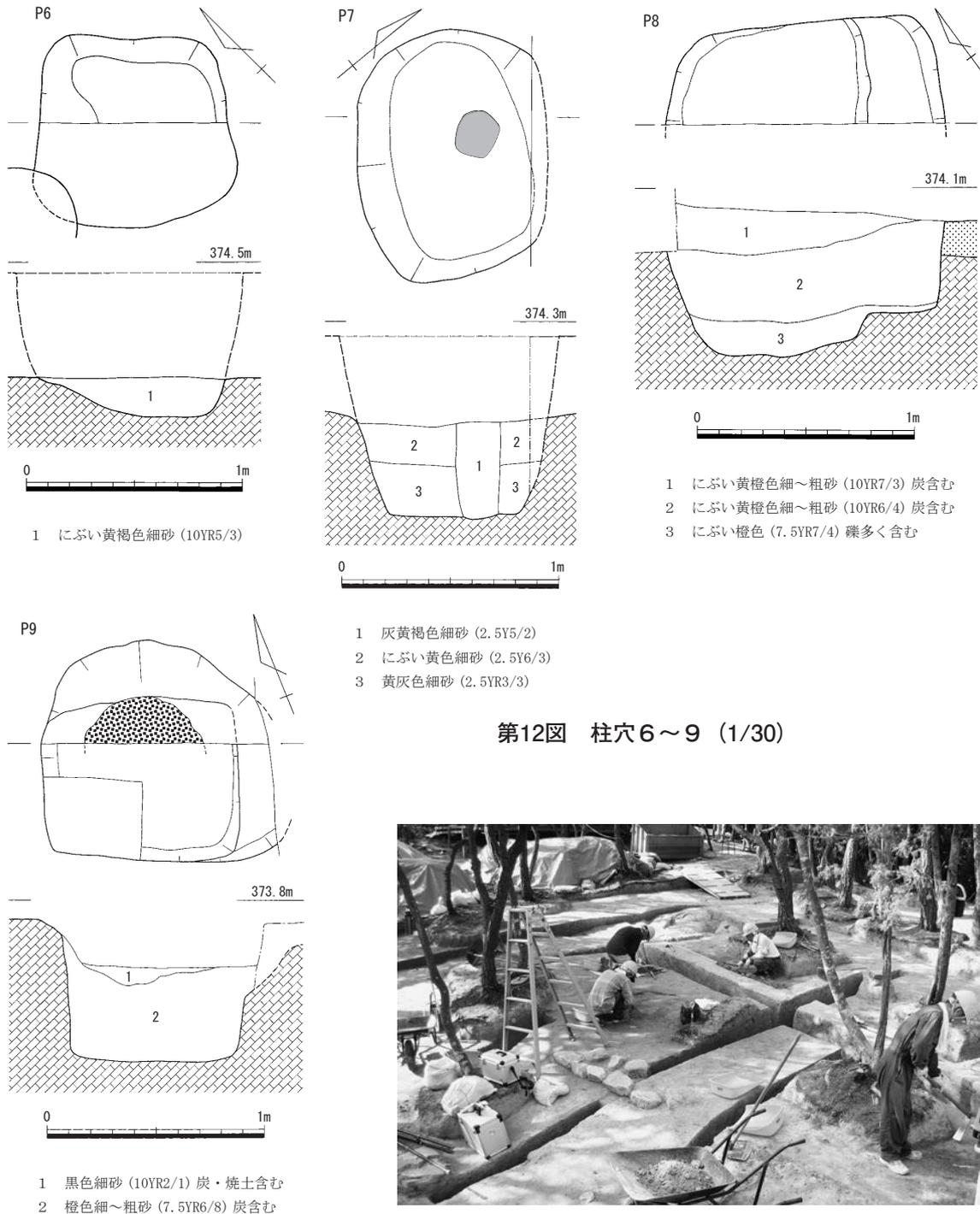
第3章 発掘調査の概要

面観察で柱痕跡を確認している。柱穴5は90cm×80cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さ68cm、復元される深さ120cmを測る。断面観察では径25cmほどの柱痕跡を確認し、底面でもこの柱部分が一段深くなっている。また、南東側に重複する柱穴も確認でき、掘り替えと判断した。柱穴6は一辺90cmほどの隅丸方形を呈する。柱穴7は長軸110cm、短軸88cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡を確認している。柱穴8は長軸で128cm、深さ68cmを測る方形で2段の掘り方をもつ。柱穴9は、検出面はいびつなもの底面は90cm×75cmの方形を呈する。



第11図 柱穴1～5 (1/30)

このうちの大部分は掘立柱建物を構成する柱穴と考えているが、その組み合わせや建物規模、棟数については遺構の保全と自然環境保護に関わる樹木の伐採制限により、基壇状遺構全体を確認面まで掘り下げなかったこともあり、不明である。ただし、柱穴2・5・7・8が基壇状遺構の方位とほぼ同じ向きに直線的に並ぶことから、柱間距離にばらつきがあるものの一連の建物を構成する可能性は指摘できるかもしれない。なお、これらの柱穴には柱穴4のような円形を呈するものと、方形を指向するものの2種類があるが、これが時間差なのか機能面での差なのかは不明である。いずれにせよ、山城存続時期にこの基壇状遺構内に掘立柱建物が存在したことは想像に難くない。(大橋)



土坑1 (第5・13図、図版4)

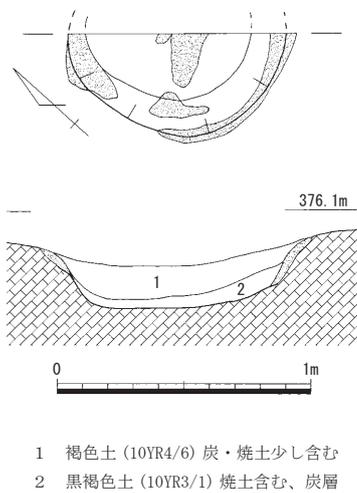
I-1区中央に設定した調査区の東端で検出された遺構。約半分の検出を行った。現状で、長辺86cm、深さ17cmを測る。被熱土坑であり、埋土は炭を多く含む。側辺は被熱の影響で赤変し、硬く焼け締まる。後述する火処5とは溝状の遺構でつながり、有機的な関係をもつ可能性がある。出土遺物はないが、埋土の特徴から飛鳥時代と考える。(河合)

土坑2 (第5・14図)

I-1区南東に設定した調査区で検出した。溝1を切って形成される。長辺80cm、短辺77cm、深さ12cmを測る。出土遺物はないが、埋土の特徴から飛鳥時代と考える。(河合)

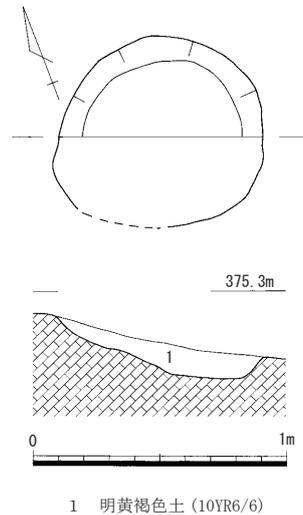
土坑3 (第5・15図、図版4)

I-1区南東に設定した調査区の東端で検出された遺構。約半分の検出を行った。長辺101cm、深さ33cmを測る。被熱土坑であり、埋土は炭を多く含む。側辺は被熱の影響で赤変し、硬く焼け締まる。



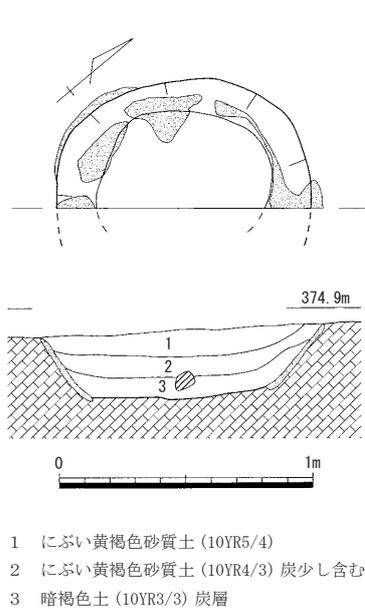
- 1 褐色土 (10YR4/6) 炭・焼土少し含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土含む、炭層

第13図 土坑1 (1/30)



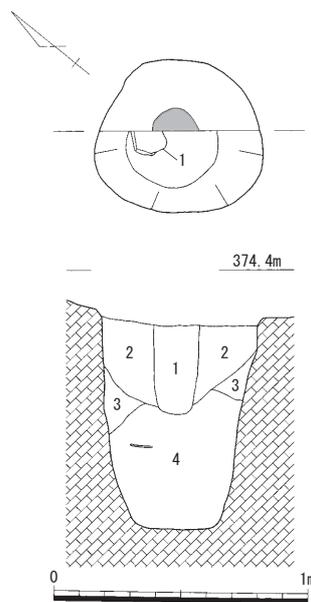
- 1 明黄褐色土 (10YR6/6)

第14図 土坑2 (1/30)



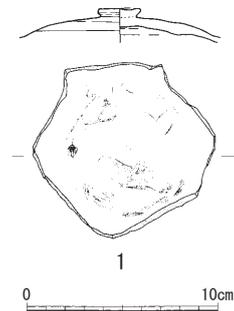
- 1 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
- 2 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 炭少し含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 炭層

第15図 土坑3 (1/30)



- 1 褐色土 (10YR4/4) 柱痕跡?
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
- 3 褐色土 (10YR4/4) 礫含む
- 4 明褐色土 (7.5YR5/6) 地山掘り返し土

第16図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



出土遺物はないが、埋土の特徴から飛鳥時代と考える。

(河合)

土坑4 (第5・16図、図版4・37)

I-1区南東に設定した調査区の中央やや南側で検出された遺構。火処7に隣接する。長辺64cm、短辺61cm、深さ81cmを測り、ほぼ正円形を呈する。堅い地山を深く掘り込んで形成されている。埋土は上層と下層に大別される。下層は地山質の土で半分程度埋められており、転用碗の須恵器杯蓋1が内面を上に向けて埋められていた。上層は中央に丸柱状の埋土が認められ、柱痕跡の可能性はある。柱穴の可能性が高いが、周囲に関連する柱穴がなく、遺構の詳細な性格は不明である。遺物から7世紀末に比定できる。

(河合)

土坑5 (第6・17図、図版4)

I-2区西端で検出した。県報告203で「土壙7」として報告したものと同一の遺構である。長軸155cm、短軸102cmを測る隅丸方形を呈し、検出面からの深さ26cmを測る。壁面の一部が被熱し赤化しており、底部近くの埋土に炭化物を多く含む。このことから木炭焼成土坑と判断している。出土遺物に須恵器高台付杯2がある。7世紀末から8世紀初頭の時期の可能性を考えておく。

(大橋)

土坑6 (第6・18図、図版4)

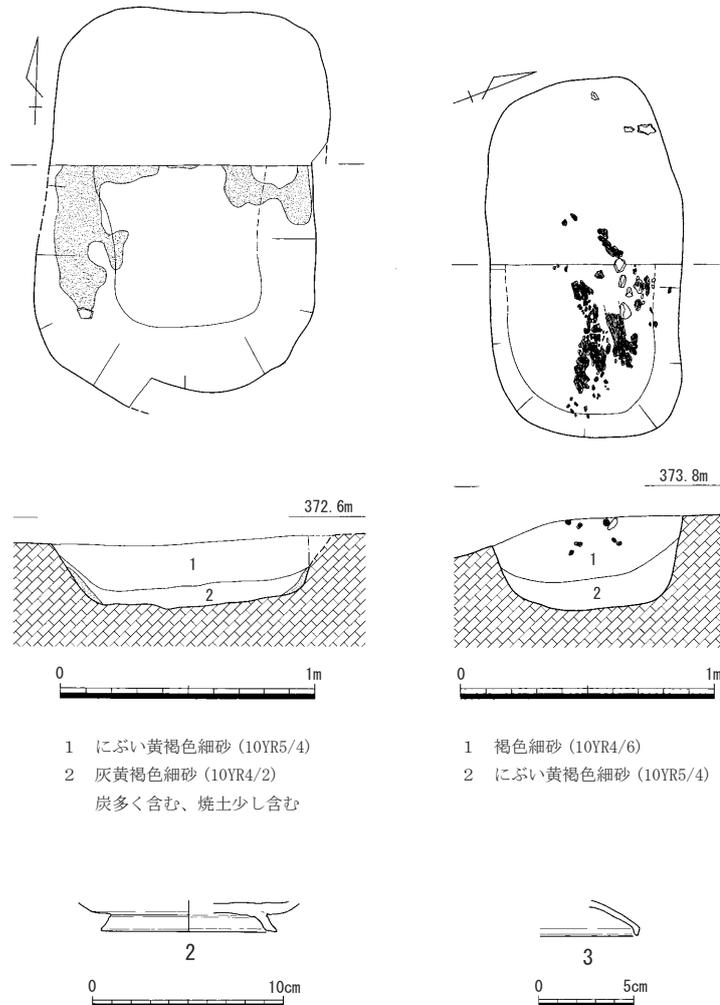
基壇状遺構上で確認した。長さ142cm、幅75cm、深さ35cmを測る隅丸長方形の土坑である。残存状態は悪いものの炭化材が数本、土坑の長軸方向に並んだような状態で出土した。明瞭な被熱痕跡が認められず、木炭焼成土坑かどうか断定できない。出土遺物に須恵器蓋3がある。

(大橋)

土坑7 (第6・19図、図版5)

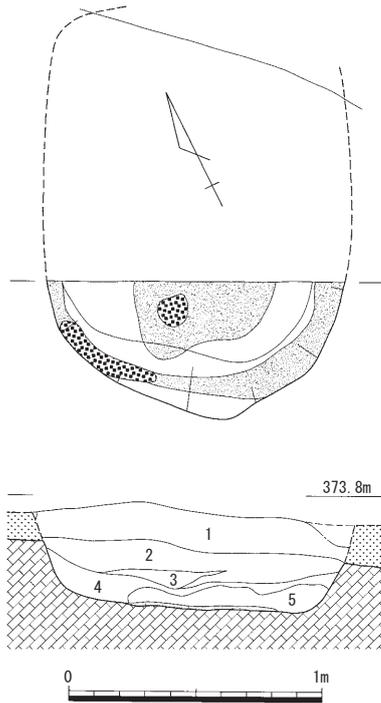
基壇状遺構上の南東辺に位置する。長軸方向で推定160cm、短軸方向で120cm、深さ52cmを測る隅丸方形を呈する。土坑壁面と底面の一部が被熱して赤化している。堆積土下半に多く炭化物を含み、一部炭層を形成している。木炭焼成土坑の可能性はあるがここでは断定を避けたい。基壇状遺構構築以降ではあるが、詳細な時期を判断する出土遺物はない。なお、AMS法による放射性炭素年代測定を実施し、その結果は付載2に掲載している。

(大橋)



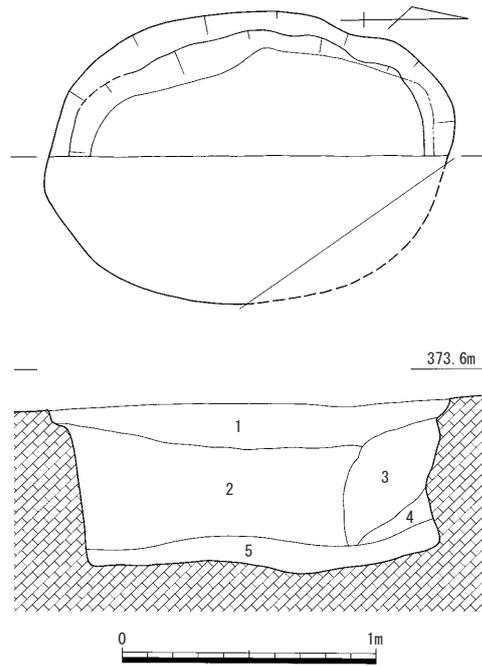
第17図 土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第18図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 黄褐色細砂 (10YR5/8) 炭含む
- 2 褐色細砂 (10YR4/6)
- 3 黒色土 (10YR2/1) 炭層
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) 炭含む
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) 炭多く含む

第19図 土坑7 (1/30)



- 1 にぶい黄褐色粘性細砂 (10YR5/3)
- 2 黄褐色粘性細砂 (2.5Y5/3)
- 3 にぶい黄褐色粘性細砂 (10YR5/4)
- 4 黄褐色粘性細砂 (10YR5/6)
- 5 にぶい黄褐色粘性細砂 (10YR5/4)

第20図 土坑8 (1/30)

土坑8 (第6・20図、図版5)

基壇状遺構の南東辺外側に隣接する。長さ158cm、幅116cm、深さ67cmを測る。楕円形の平面掘り方で、断面は矩形を呈する。最下層は自然堆積層であるが、その上位は人為的に埋め戻されている可能性がある。基壇状遺構の南東辺の溝と一部重複し、これに先行すると思われ、形状から縄文期の落とし穴の可能性を考えたが、時期を判断できる出土遺物はない。(大橋)

土坑9 (第6・21図)

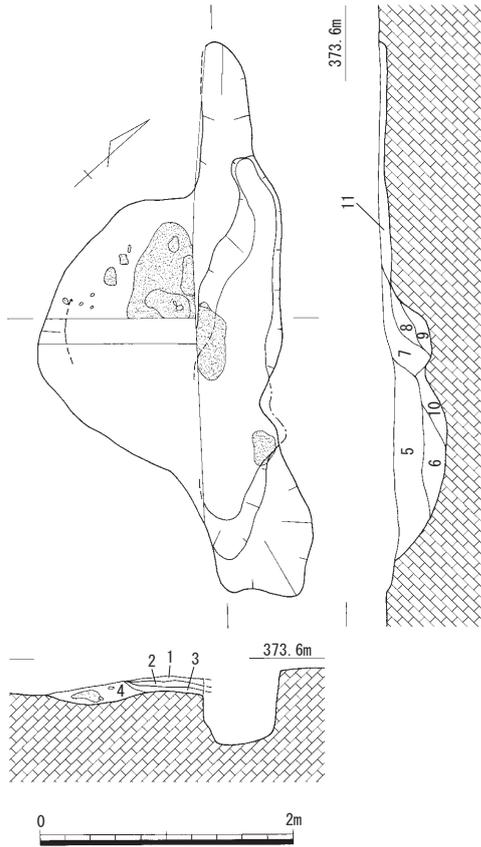
県報告203でT21「土壇1」と報告したものと同一の遺構である。今回の調査では北西部分を拡張して遺構の全容の解明に努めた。最大長約220cmを測る不定形な土坑であり、拡張調査部分は皿状に浅く、焼土、炭が堆積し、底面及び壁面の一部が被熱している。機能について言及できる証拠を得ることはできなかったが、何らかの炉的な機能を果たした可能性を考えたい。前回の調査で7世紀後半の須恵器高杯(県報告203-10)が出土している。(大橋)

土坑10 (第6・22図、図版5)

I-2区中央南斜面部に位置する。長径92cm、深さ12cmを測る楕円形の土坑である。底面に1段くぼむ部分を確認している。埋積土に炭化物を多く含み、壁面の一部に被熱痕跡を確認している。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)

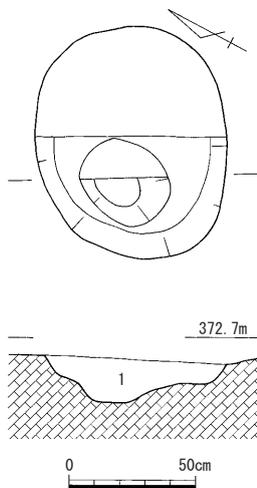
土坑11 (第6・23図、図版5)

土坑10の南東約5m、南斜面に位置する。幅約110cm、深さ27cmを測る方形の土坑である。壁面の



- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 炭多く含む
- 2 明赤色微砂 (5YR5/8) 焼土層
- 3 にぶい赤褐色細砂 (5YR4/4) 焼土層
- 4 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4) 炭含む
- 5 灰黄色土 (2.5Y6/2)
- 6 にぶい黄色土 (2.5Y6/4)
- 7 黒色土 (10YR2/1) 炭層
- 8 黄褐色土 (2.5Y5/6)
- 9 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 壁面被熱
- 10 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)
- 11 灰オリーブ色微砂 (5Y4/2)

第21図 土坑9 (1/60)



- 1 暗褐色細砂 (10YR3/4) 炭含む

第22図 土坑10 (1/30)

一部が被熱している。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)

土坑12 (第6・24図、図版5)

南斜面部下方で確認した長径107cmの楕円形の掘り方を持つ土坑である。この土坑も壁面が一部被熱し、堆積土中にも焼土を含んでいる。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)

土坑13 (第6・25図、図版5)

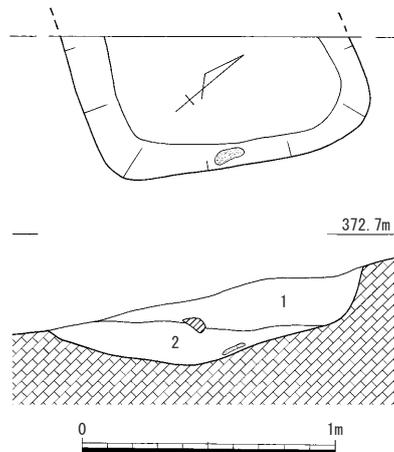
土坑12の北東隣で検出した。土坑12とほぼ同じ規模で長径105cmを測る楕円形の土坑である。埋土下層に炭を多く含み、壁面の一部で被熱痕跡が認められた。出土遺物に須恵器蓋4がある。(大橋)

土坑14・15 (第6・26図、図版5)

尾根線頂部から北斜面側に並ぶ2基の円形の土坑である。土坑14が長径76cm、土坑15が長径70cmと土坑14がやや一回り大きな規模を持つ。いずれも埋積土は炭を多量に含み被熱している。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)

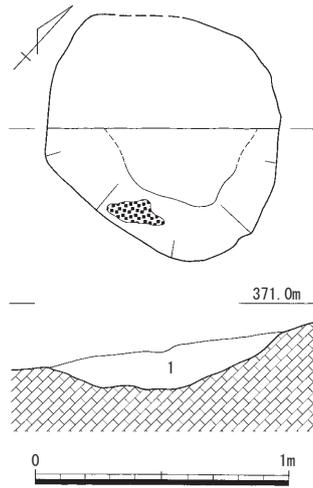
土坑16 (第6・27図、図版2)

土坑12・13の斜面上方に位置する。長径で120cm、深さ29cmを測る楕円形の土坑である。岩盤の隙間に掘られており、岩盤と一連に土坑壁面が被熱しており、継続的な火の利用が想定される。埋積土も炭を多く含んでいる。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)



- 1 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4)
- 2 にぶい黄褐色細砂 (10YR4/3) 炭含む

第23図 土坑11 (1/30)



1 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/3) 炭・焼土少し含む

第24図 土坑12 (1/30)

土坑17 (第6・28図)

土坑16の南隣に位置する。長径106cmに復元される隅丸方形を呈する土坑である。埋積土の下部に炭層を確認した。またその上位層にも炭や焼土を多く含んでおり、さらに壁面に被熱痕跡が観察できた。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)

土坑18 (第6・29図、図版5)

土坑16の東側に位置する。平面形は不整形を呈し、壁面が被熱している。底面付近に炭層が観察され、木炭焼成土坑の可能性を考えている。しかしながら、この土坑からも出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)

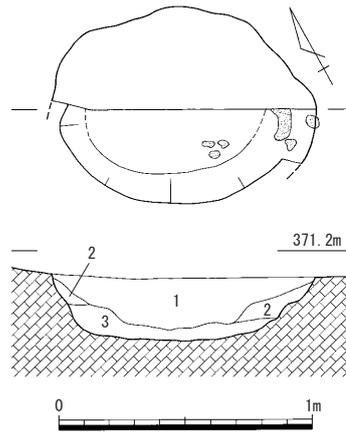
土坑19 (第6・30図)

I - 2区南東端で検出した、一辺115cm、深さ20cmの規模をもつ隅丸方形の土坑である。壁面は緩やかに傾斜して一部で被熱痕跡を確認している。この土坑からも出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。(大橋)

土坑20 (第6・31図)

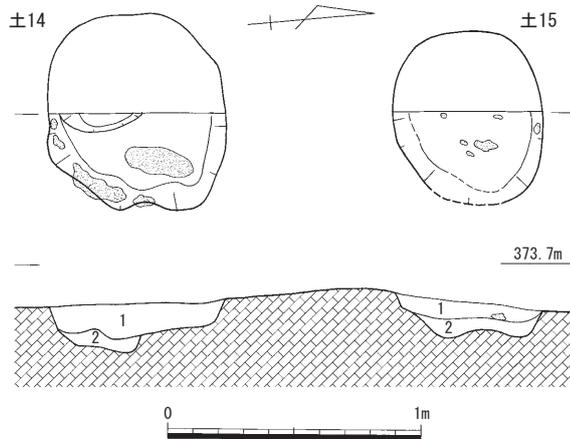
土坑19の東隣に位置し、その大部分が調査区外にあり、調査区壁面の土層断面観察によって確認した土坑である。埋積土に焼土を多く含んでおり、他の土坑と同様、被熱土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

以上のI区で確認された土坑のほとんどが被熱しており、その規模・形状によって規模の大きい方



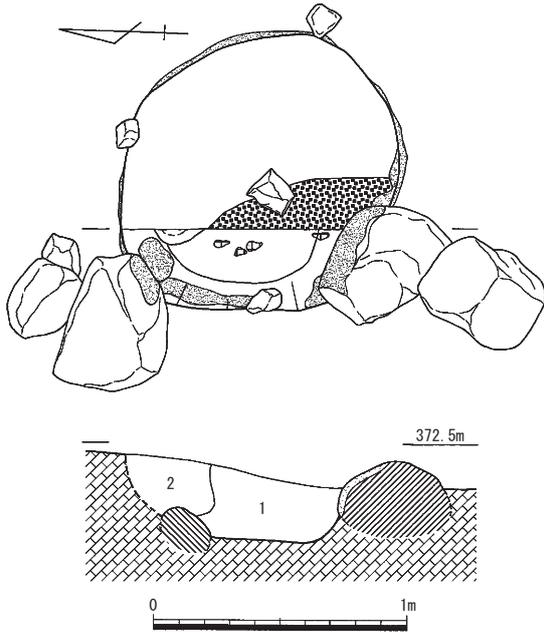
- 1 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4) 炭少し含む
- 2 にぶい黄褐色細砂 (2.5YR4/3) 炭含む
- 3 暗褐色細砂 (10YR3/3) 炭多く含む

第25図 土坑13 (1/30)・出土遺物 (1/4)



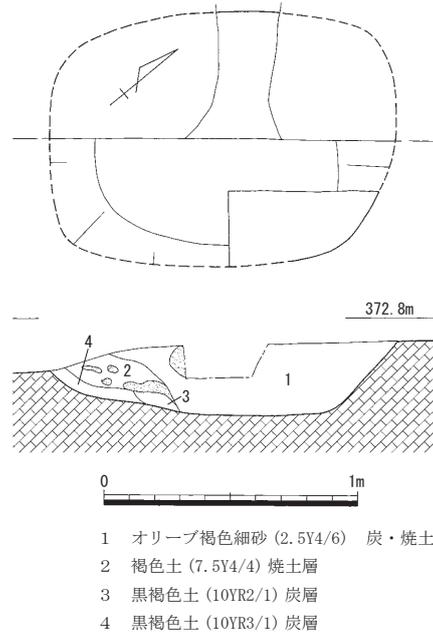
- 1 褐灰色細砂 (10YR4/1) 炭多く含む
- 2 黄褐色粘性細砂 (2.5Y5/3) 炭・焼土含む

第26図 土坑14・15 (1/30)



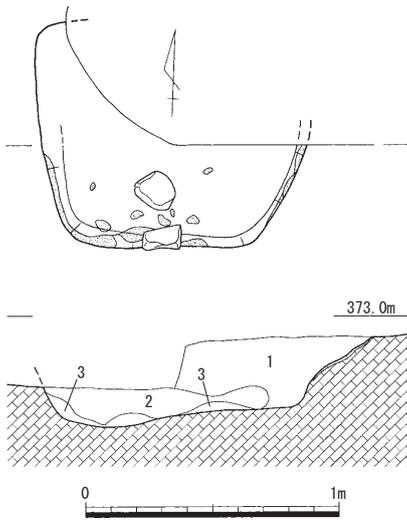
1 黒褐色土 (10YR3/1) 炭層 2 暗褐色細砂 (10YR3/4) 炭含む

第27図 土坑16 (1/30)



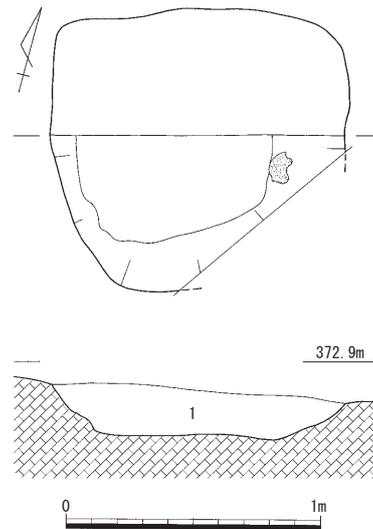
1 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/6) 炭・焼土含む
2 褐色土 (7.5Y4/4) 焼土層
3 黒褐色土 (10YR2/1) 炭層
4 黒褐色土 (10YR3/1) 炭層

第28図 土坑17 (1/30)



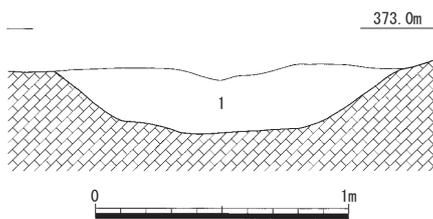
1 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/6) 炭含む
2 黒褐色土 (10YR3/1) 炭層
3 黒褐色土 (10YR2/1) 炭層

第29図 土坑18 (1/30)



1 暗灰黄色細砂 (2.5Y4/2) 炭少し含む

第30図 土坑19 (1/30)



1 にぶい黄褐色細砂 (10YR5/4) 焼土含む

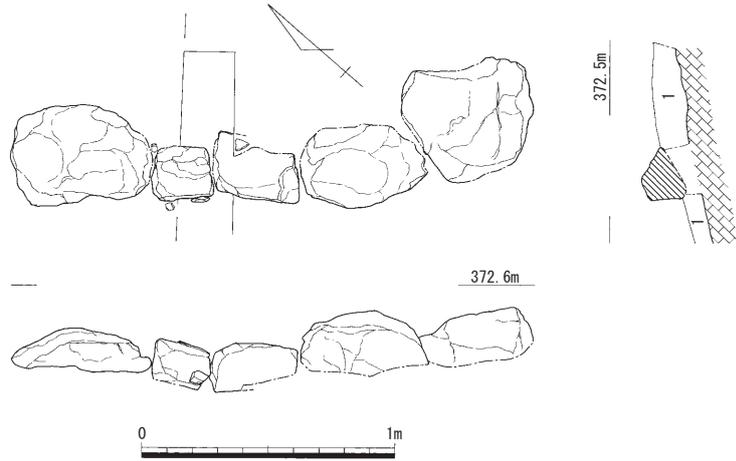
第31図 土坑20 (1/30)

形を指向するものと、やや小ぶりの円形を呈するものに分類できる。これが時期差や機能差を反映している可能性は高く、うち方形の土坑の一部は木炭焼成土坑と考えられる。また、時期についても山城機能時期のほか、遺物はないものの平安期及び中世に下るものもあると推測している。

(大橋)

石列1 (第6・32図、図版2)

土坑11の斜面下方で確認した5石が長さ2mに並ぶ石列である。西側の4石が比較的直線的に配され、東端の1石はやや弧を描くように置かれている。基壇状遺構の石列の石材よりもやや大ぶりで粗雑な印象が否めない。この石列の斜面上方には特に柱穴などは確認されなかった。時期についても不明といわざるを得ない。(大橋)

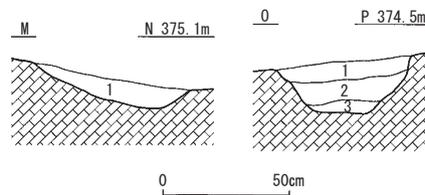


1 にぶい褐色細砂 (7.5Y5/3)

第32図 石列1 (1/30)

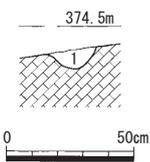
溝1 (第5・33図)

I-1区南東に設定した調査区から検出された遺構。最大幅82cm、深さ20cmを測り、断面逆台形を呈する。性格の特定は難しいが、位置的にはこの南にある基壇状遺構と関係した遺構(雨水よけ)の可能性が考えられる。(河合)



- 1 褐色土 (10YR4/6) 礫含む
- 2 黄褐色土 (10YR5/6) 礫多く含む
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) 炭・焼土含む

第33図 溝1 (1/30)



- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 炭・礫含む

第34図 溝2 (1/30)

溝2 (第5・34図)

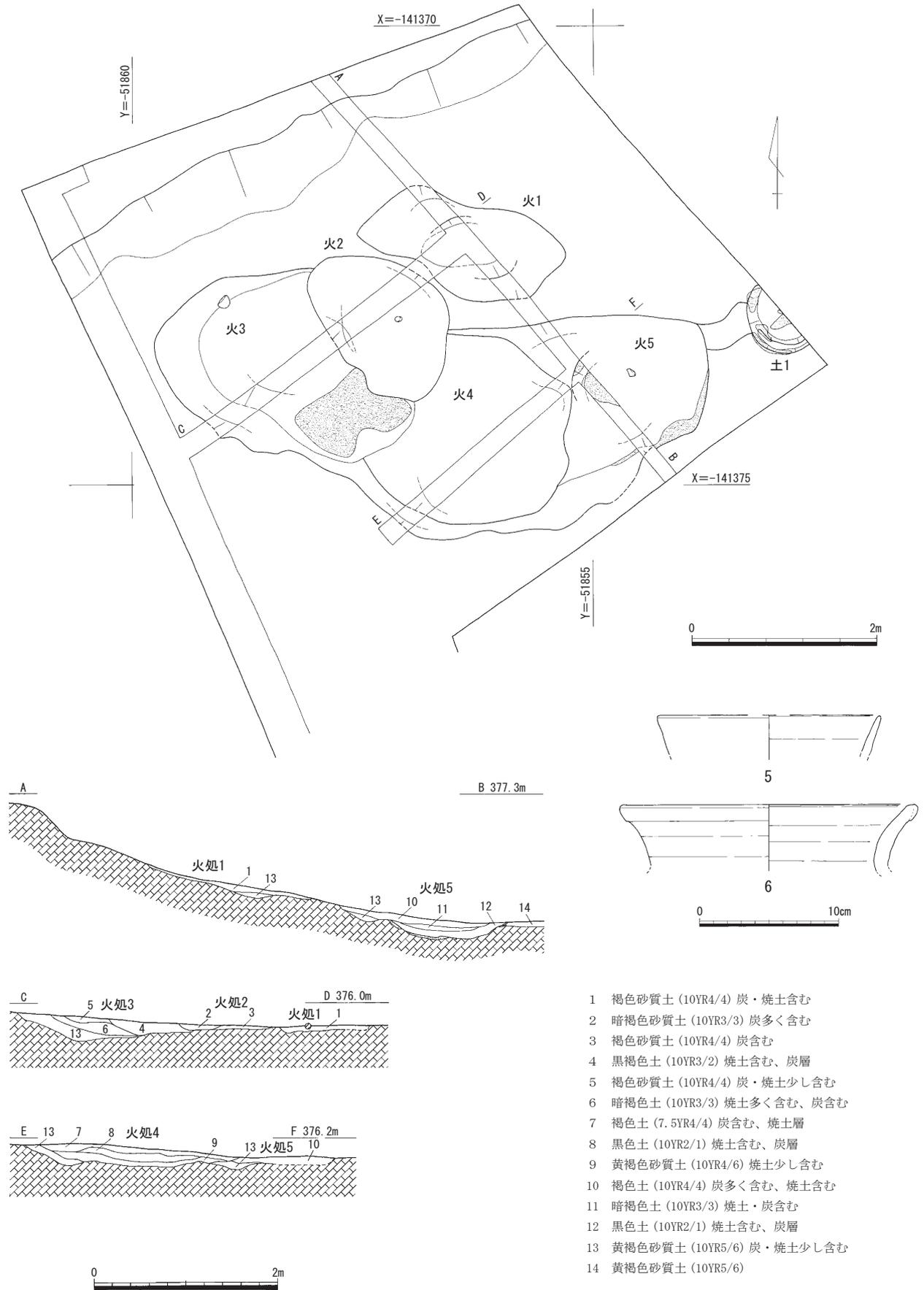
I-1区南東に設定した調査区から検出された遺構。火処7に隣接する。最大幅21cm、深さ8cmを測り、断面碗形を呈する。位置的には火処7に伴う遺構の可能性が高く、排水の機能を想定できる。(河合)

火処1～5 (第5・35図、図版2)

I-1区中央に設定した調査区の中央で検出された遺構。山の斜面を掘削し、やや平坦な面を造成しており、そこに火処1～5が重複して形成されていた。火処の周囲(下部)には、それよりも一回り大きい掘り方の存在(第13層)を確認できる。その埋土は砂質の強いものであり、湿気対策を行っている可能性がある。

火処の形成順については、その切り合い関係から火処5→4→3→2が想定され、徐々に標高の高い方に移動していることが分かる。火処1については切り合いの関係を明確にできなかったが、その位置から火処2と前後する可能性が考えられる。

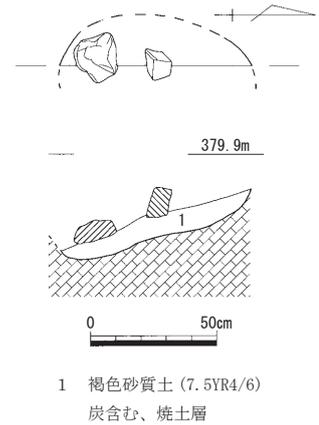
火処1は、長さ225cm、最大幅112cm、検出面からの最大の深さ10cmを測る。埋土には炭・焼土が多く含まれる。火処2は、長さ183cm、最大幅127cm、検出面からの最大の深さ6cmを測る。埋土には炭が多く含まれる。火処3は、長さ245cm、最大幅110cm以上、検出面からの最大の深さ18cmを測る。埋土には焼土を多く含む層と炭層が認められる。検出面の南東部には、硬く焼け締まった箇所を確認できる。飛鳥時代に属する須恵器杯5が埋土中に含まれていた。火処4は、長さ175cm以上、最大幅210



第35図 火処 1～5 (1/60)・出土遺物 (1/4)

cm、検出面からの最大の深さ21cmを測る。埋土には焼土を多く含む層と炭層が認められる。火処5は、長さ275cm以上、最大幅170cm、検出面からの最大の深さ20cmを測る大形のもので、底面及び南東縁は強い被熱により硬く焼け縮まっている。埋土には焼土を多く含む層と炭層が認められる。飛鳥時代に属する須恵器甕6が埋土中に含まれていた。

遺構の性格については、詳細不明であるが、現状の遺構検出面より約20cm上層から遺構埋土内にかけて太さ4cm前後の木炭が多く検出されたことや斜面部に築かれていることに特徴があり、平地で単独で存在する火処と違った用途が想定される。遺構の年代は、遺物や埋土の特徴から飛鳥時代と考える。



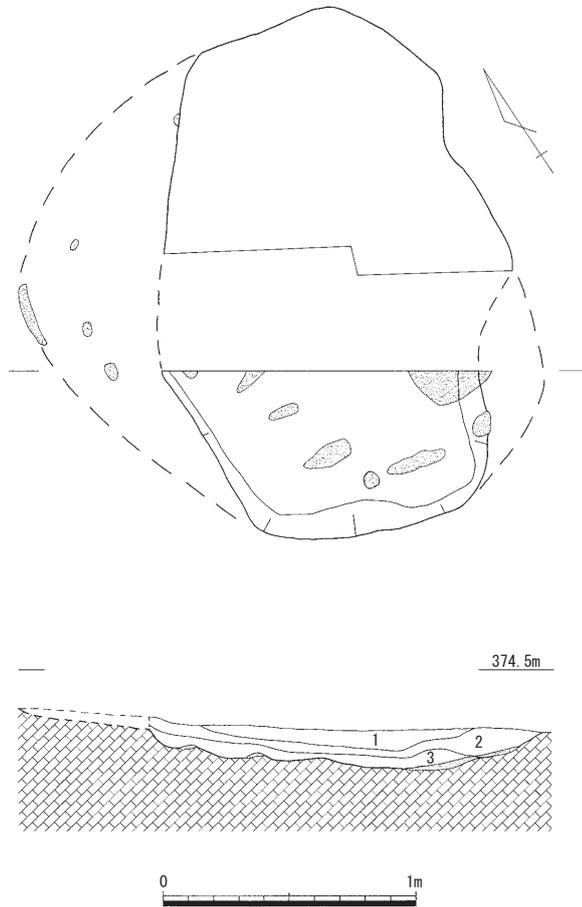
(河合) 第36図 火処6 (1/30)

火処6 (第5・36図)

I-1区北西に設定した調査区の北端付近で検出された遺構。平面では確認が困難で、断面でかろうじて被熱面を確認できたため、平面形態等の詳細は不明である。付近からは飛鳥時代の遺物が多く見ついているため、当該期の遺構と考えられる。(河合)

火処7 (第5・37図)

I-1区南東に設定した調査区から検出された遺構。溝2や土坑4に隣接する。長さ212cm、最大幅は推定で204cm、深さは16cmを測り、平面はほぼ円形を呈する。床面の所々が強く被熱しており、埋土には炭・焼土を多く含むが、性格は不明である。遺構の年代は、遺物や埋土の特徴から飛鳥時代と考えられる。(河合)



第37図 火処7 (1/30)

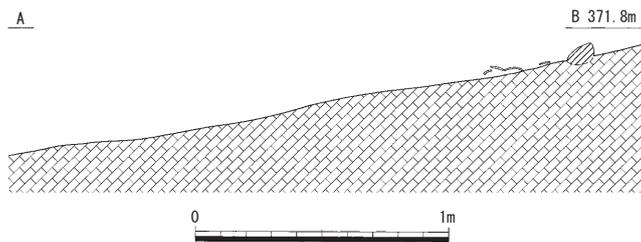
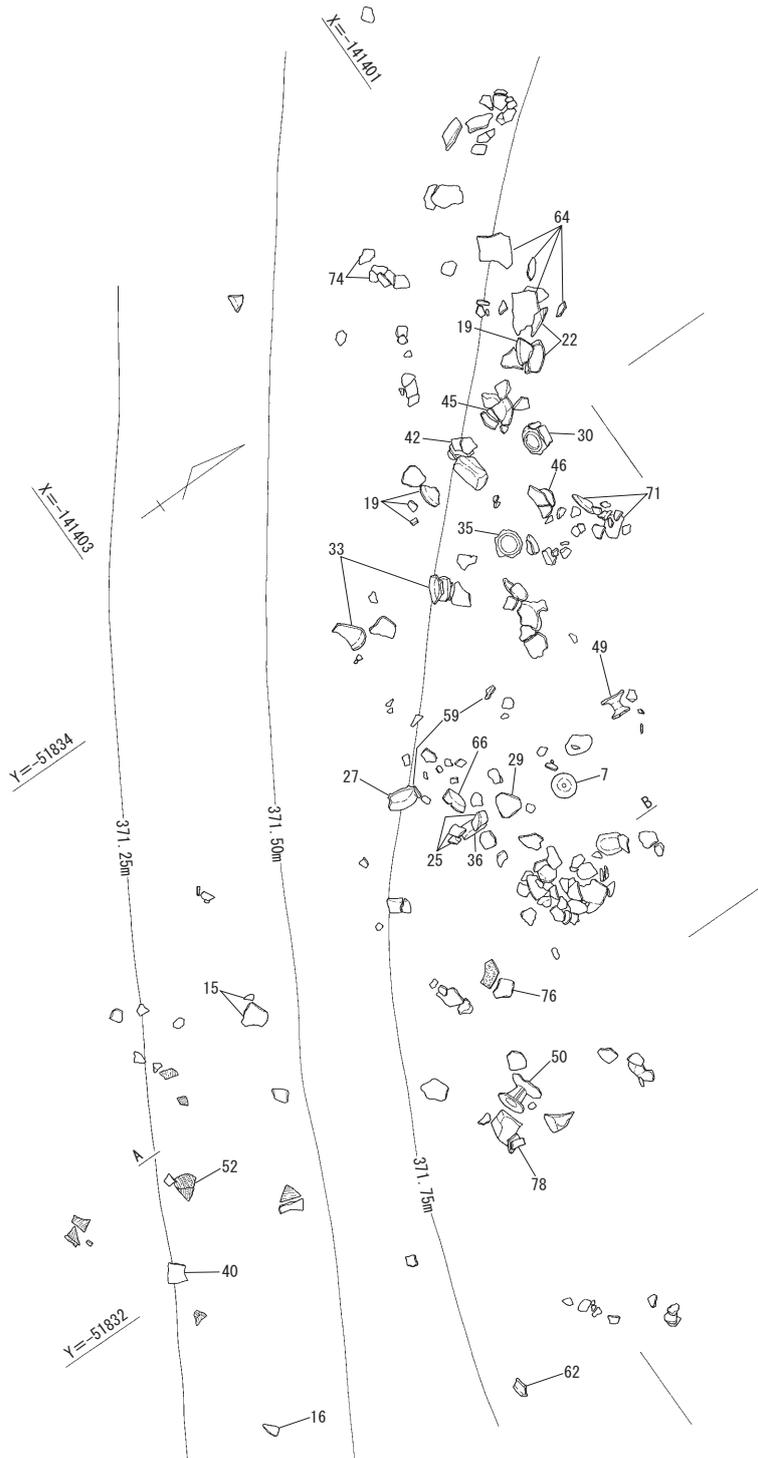
土器溜まり1 (第6・38~43図、巻頭図版5・6、図版3・31~33・37、写真2)

I-2区の尾根南西斜面部において、表土除去後に、遺物がまとまった範囲で出土した。出土した土器は須恵器や土師器で、第38図に示すように、およそ4.5×1.5mの範囲、標高371.75~372mに比較的集中していた。また、この範囲外でも下方を中心に土器が広

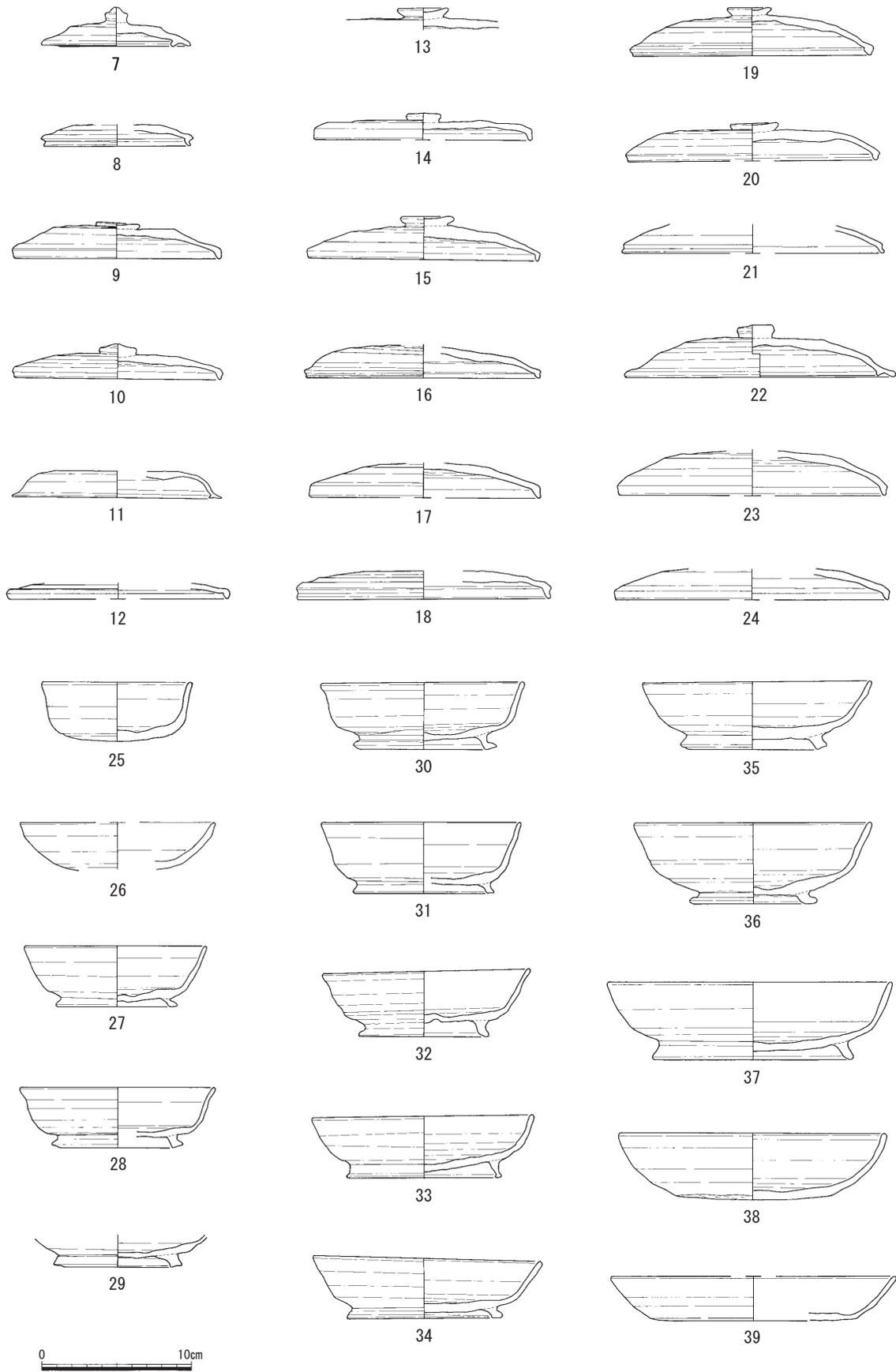
がっていたが、土器の密度は薄くなっていく。出土状況から、土器は上方からまとめて廃棄されたものと推定した。これらの土器には、完形品、あるいは完形に近いものも多くあることから、不要になった時点での片付け、廃棄行為を示唆するものと考えている。

出土遺物を第39～43図に示した。7～24は須恵器杯の蓋である。7は宝珠状のつまみをもち、口縁内部にかえりを有する。7・8はともに口径10cm以下と小さいが、その他は口径13～18cmを測る。蓋には内面にかえりのあるもの(11・22)とないものが認められるが、かえりのないものが大多数を占める。10・13・14・19・20は転用硯であり、使用により内面が摩滅している。

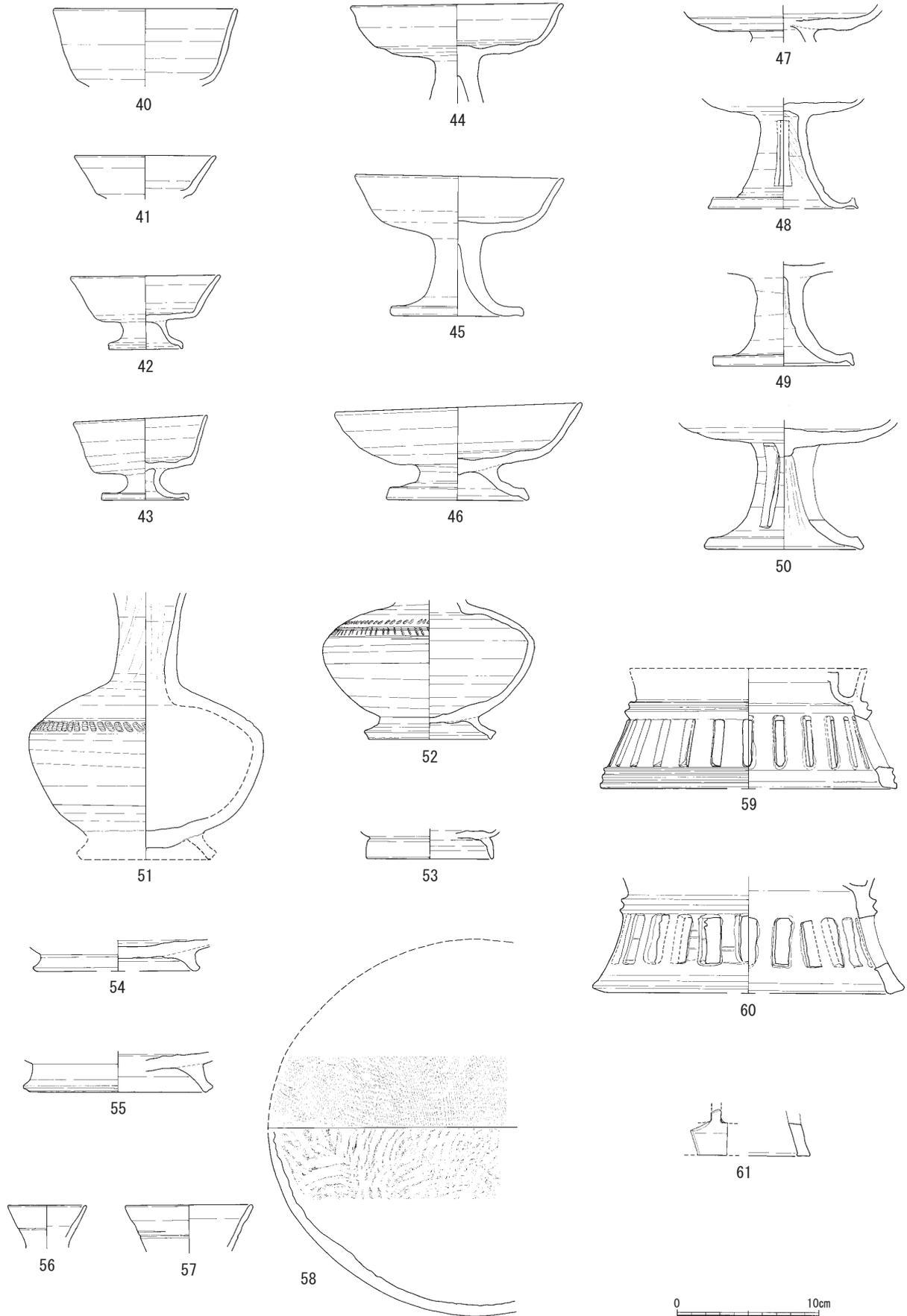
25～38は須恵器杯である。杯は高台の有無により二分される。25は口径10cmを測る小形の杯である。27～37は高台付杯である。32・36は外面の屈曲部やや上方に金属器模倣の痕跡とみられる凹線を施している。32～35は内面が平滑で、硯に転用されたと考えられる。33には墨痕がわずかに残っている。39は皿、40は椀と考えられる。41～50は高杯である。48には2か所、50には3か所の透かし孔が見られる。当該期の高杯に透かし孔を設ける例はほとんどなく、古い伝統を遺存



第38図 土器溜まり1 (1/30)



第39図 土器溜まり1出土遺物① (1/4)

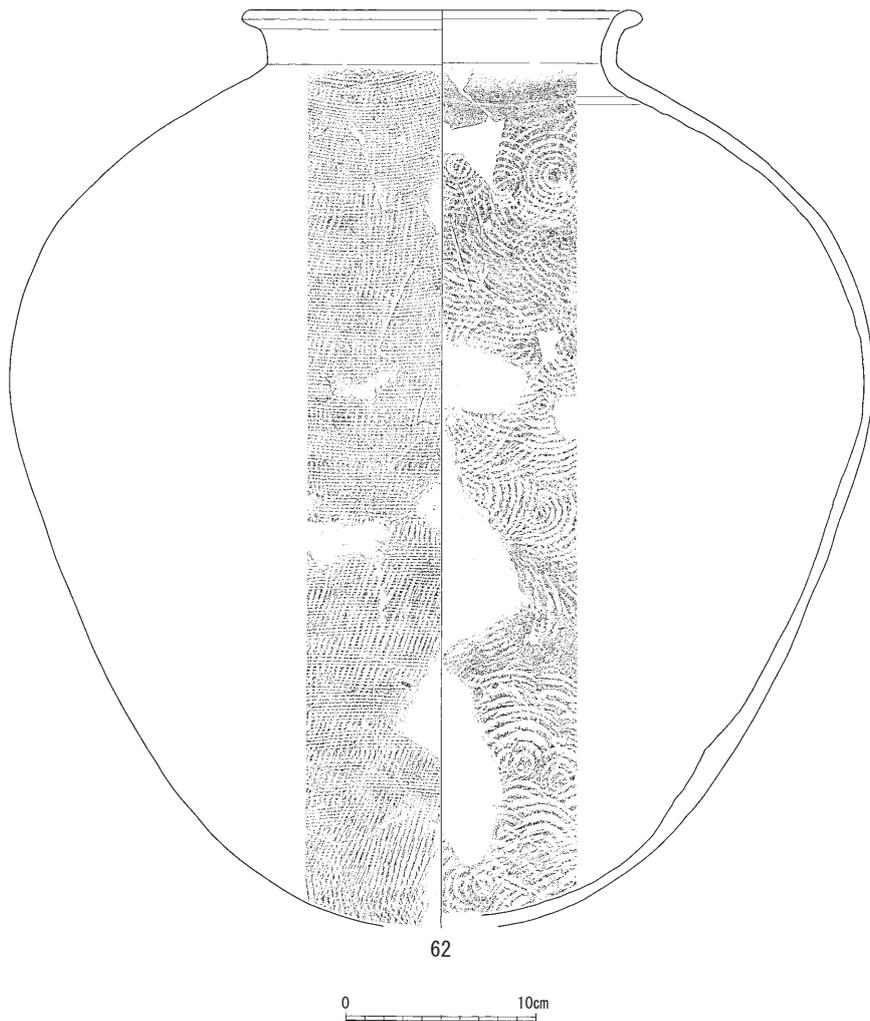


第40図 土器溜まり1出土遺物② (1/4)

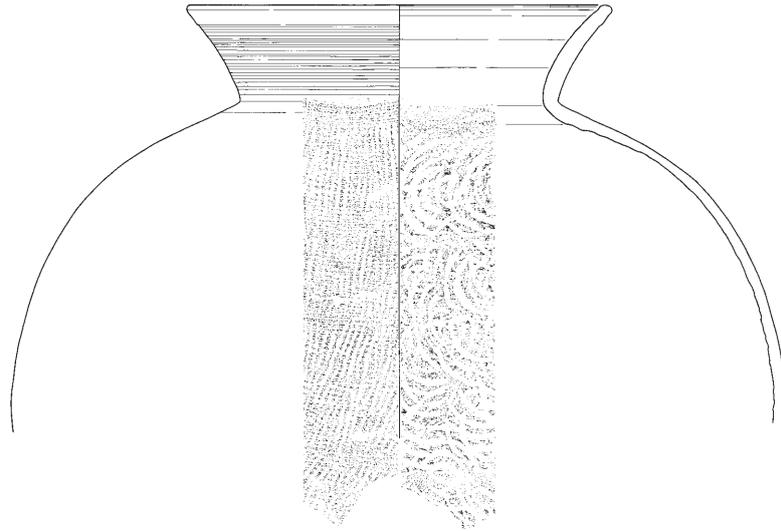
している。51・52は長頸壺、53～55は壺脚部である。54は転用硯の可能性ある。56・57は平瓶、58は横瓶である。59～61は円面硯である。59は推定26個、60は推定24個の長方形透かしを持つ。62～64は甕である。65～78は土師器である。65は椀、66は杯である。66は外面に細かいヘラミガキ、内面に放射状暗文が2段施された精緻なつくりである。畿内出土の土器との比較は行っていないが畿内産土師器の可能性も考えられる。67～73は甕、74～76は把手付甕、77・78は把手である。

図示した土器は総計72個体で、須恵器58個体、土師器14個体を掲載しているが、出土量も須恵器の方が多い。須恵器の器種は蓋、高台付杯、高杯といった食膳具もあるが、甕、長頸壺、横瓶、平瓶の貯蔵用の器種も見られる。しかし、先述したように杯には硯に転用されたものがあり、すべてを食膳具と位置付けることはできないであろう。土師器は甕などの煮沸具が主に見られる。また、数は少ないが、官衙関連遺跡で見られる円面硯や饗応的要素の強い畿内産土師器が出土していることから、この場所が単に居住拠点だけではなく、官人による城内の運営や管理といった役割も兼ね備えていた可能性がある。なお、出土した土器の編年的な位置付けは総括で述べているが、7世紀後半から8世紀初頭のもものが中心とみられる。

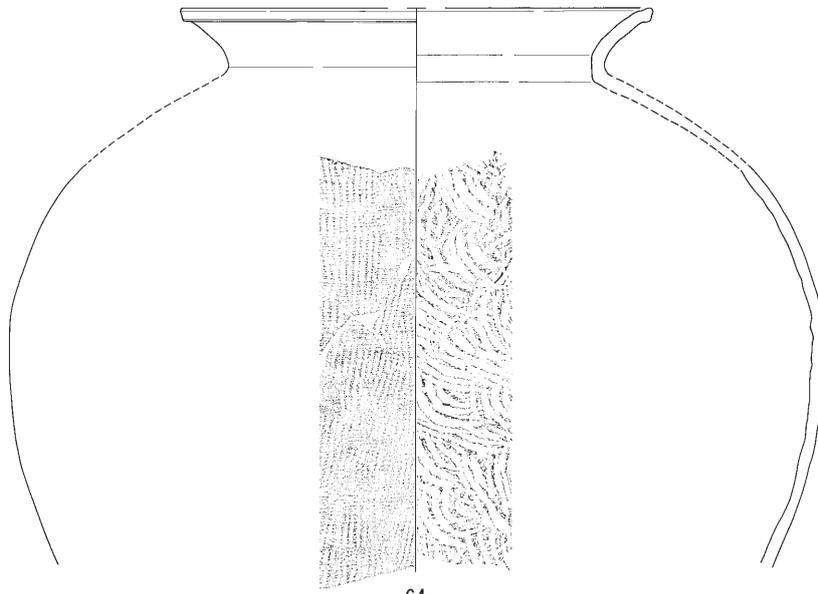
これまでの西日本各地での古代山城調査で、このような狭い範囲で土器廃棄行為を示す成果はなく、かつ個体数についても多く、鬼城山の機能時期を考える上で非常に良好な材料となった。(大橋・中原)



第41図 土器溜まり1出土遺物③ (1/4)



63



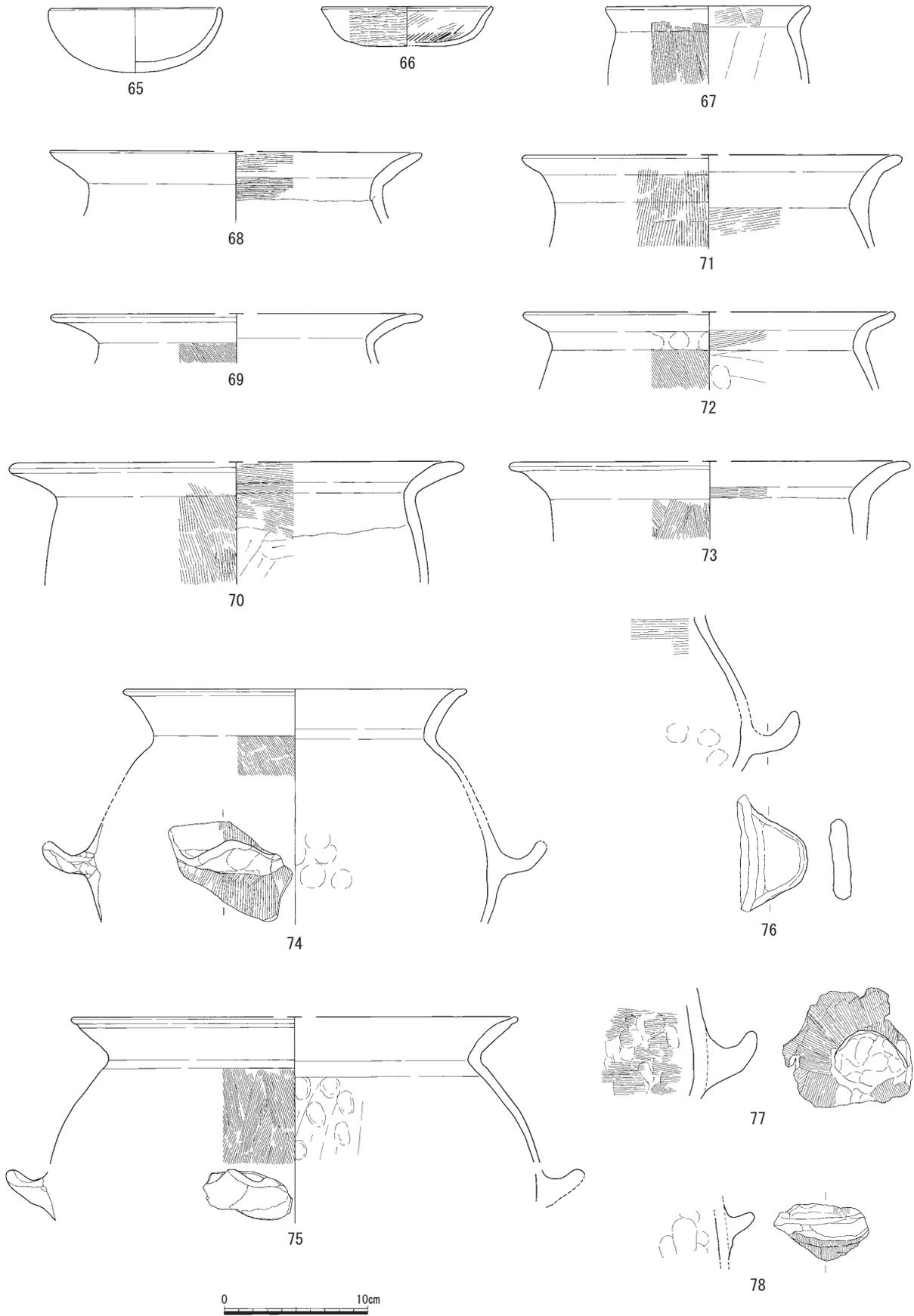
64



第42図 土器溜まり1出土遺物④ (1/4)



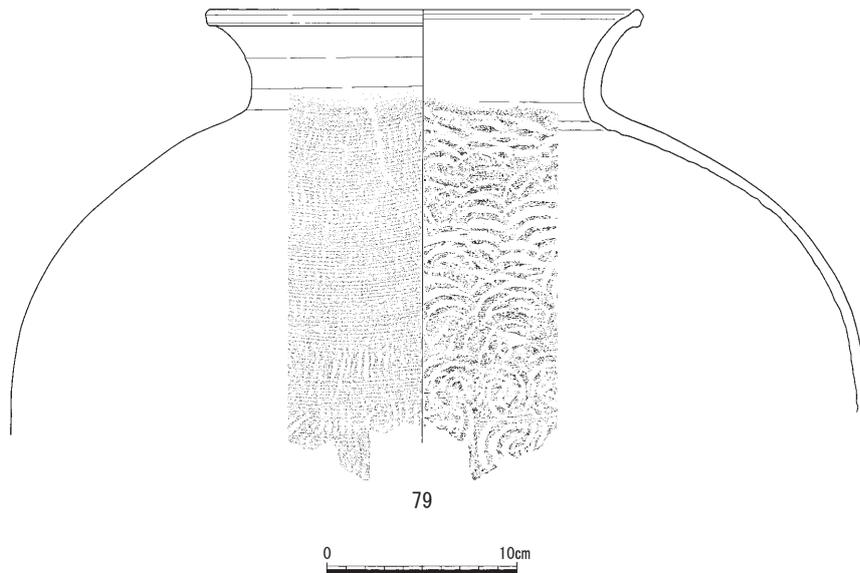
写真2 土器溜まり1遺物出土状況 (南東から)



第43図 土器溜まり1出土遺物⑤ (1/4)

土器溜まり2 (第6・44図、図版33)

ここで土器溜まりとしたのは、I-2区の北西部、標高373.75m付近で須恵器小片が散在している箇所である。県報告203でもT24の成果として須恵器片の集中を報告している。これらの破片はほぼ同一個体として考えられ、79の須恵器甕に復元される。なお、この79は基壇状遺構内の柱穴1の柱抜き取り後のくぼみに落ち込んだような状態で、口縁部破片が出土している。ここで出土した須恵器片は小破片も多く、意図的な破碎行為があった可能性も捨てきれない。(大橋)

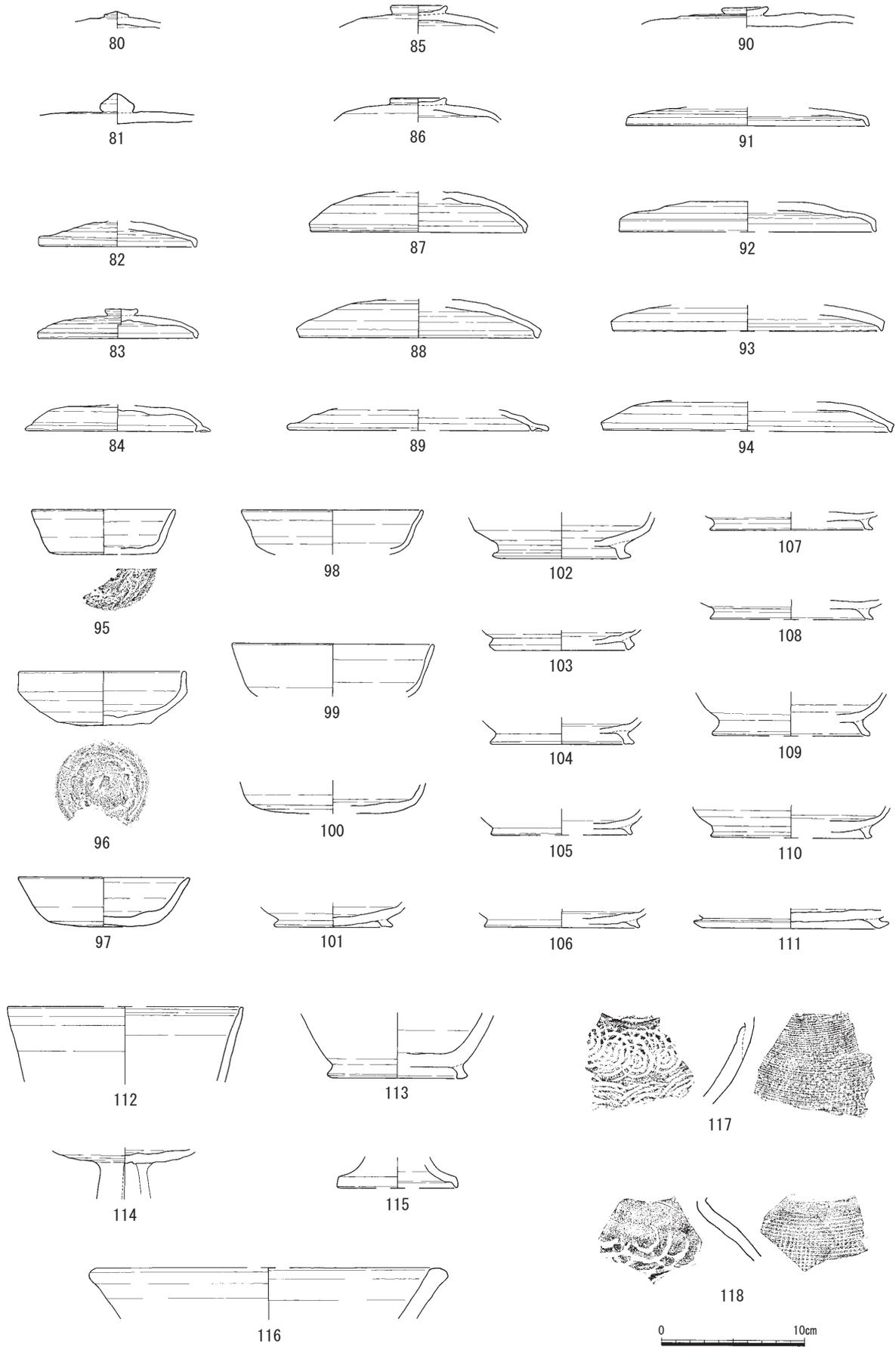


第44図 土器溜まり2出土遺物 (1/4)

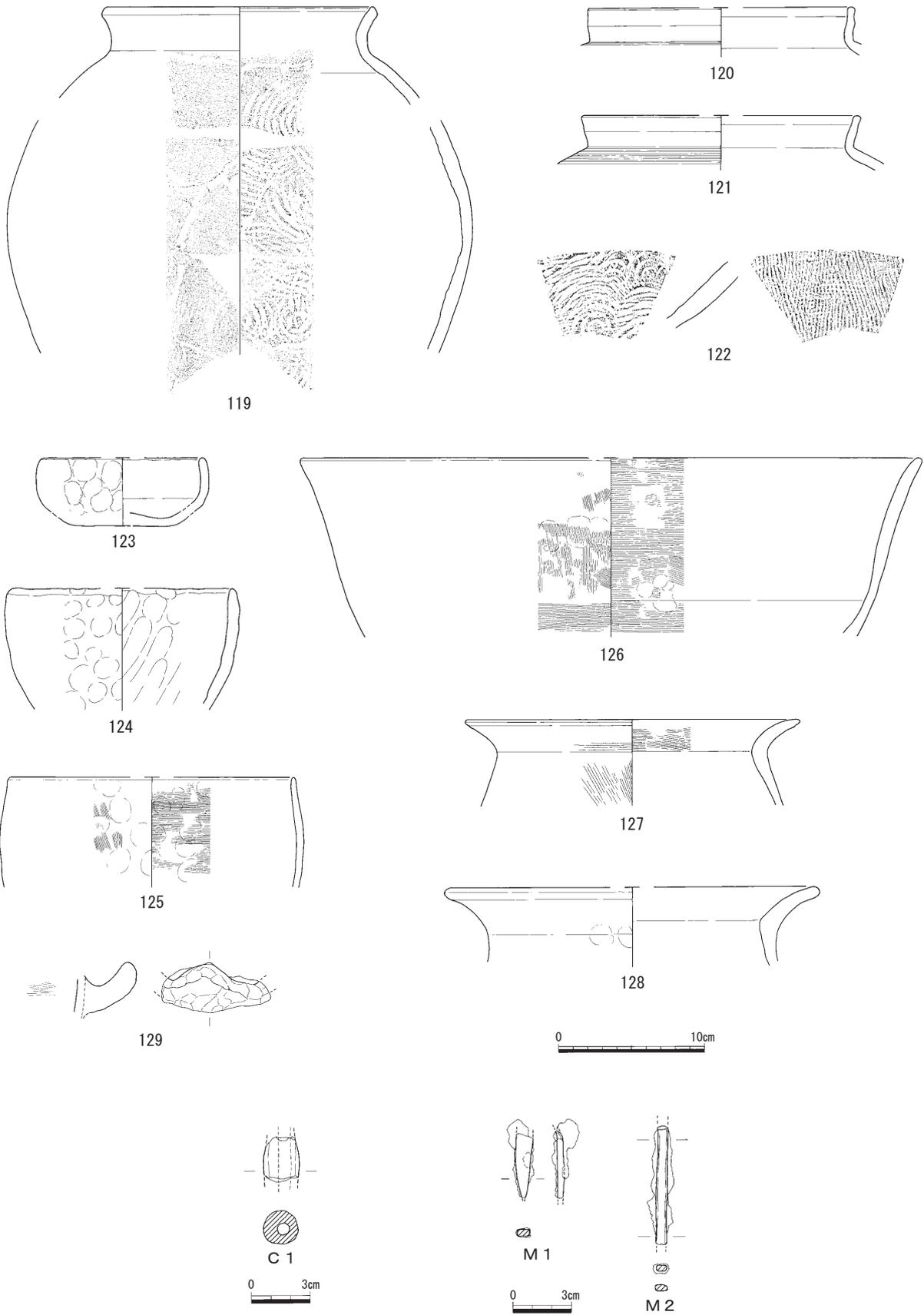
遺構に伴わない遺物 (第45・46図、図版33)

I区では須恵器や土師器など、遺構に伴わない遺物が出土している。

80~94は須恵器杯の蓋で、天井部が平らで扁平なものや丸い笠状のものがみられる。80・81にはやや扁平な宝珠状つまみ、それ以外には頂部のくぼんだつまみが付く。84・89はわずかにかえりがあるが、それ以外のものはかえりがなく口縁端部が屈曲する。81・88・92は転用硯であり、使用により内面が摩滅しており、81には墨痕も残っている。95~104・106~112は須恵器杯である。95~97は底部ヘラ切り後、未調整である。95・97は底部から口縁端部まで直線的に外傾するのに対し、96は下半が椀状に開き、口縁で屈曲し上方に立ち上がる。101~104・106~111は高台付杯であり、底部のやや内寄りに高台を有するものがある。断面長方形かやや外側に張り出す高台が「ハ」の字状に付く。105は土師器杯である。113は壺の底部である。114・115は高杯であり、114の脚部には透かし孔が2か所見られる。117は横瓶の体部で、内面に同心円タタキ、外面に平行タタキの後カキ目が施される。116・118・119・122は須恵器甕、120・121は短頸壺の口縁である。123~129は土師器である。123は椀、124は製塩土器で内外面にユビオサエが施される。127・128は甕であり、口縁が「く」の字状に外反する。125は甌、129は把手である。以上の土器は土器溜まりで出土したものとおおむね同様の器種構成であり、大部分は7世紀後半から8世紀初頭を中心とする時期にかけてのものとみられる。C1は土錘であり、両端が欠損し全体の1/3程度が残存している。M1・M2は鉄釘としているが、棒状の製品の破片である。(中原)



第45図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第46図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3)

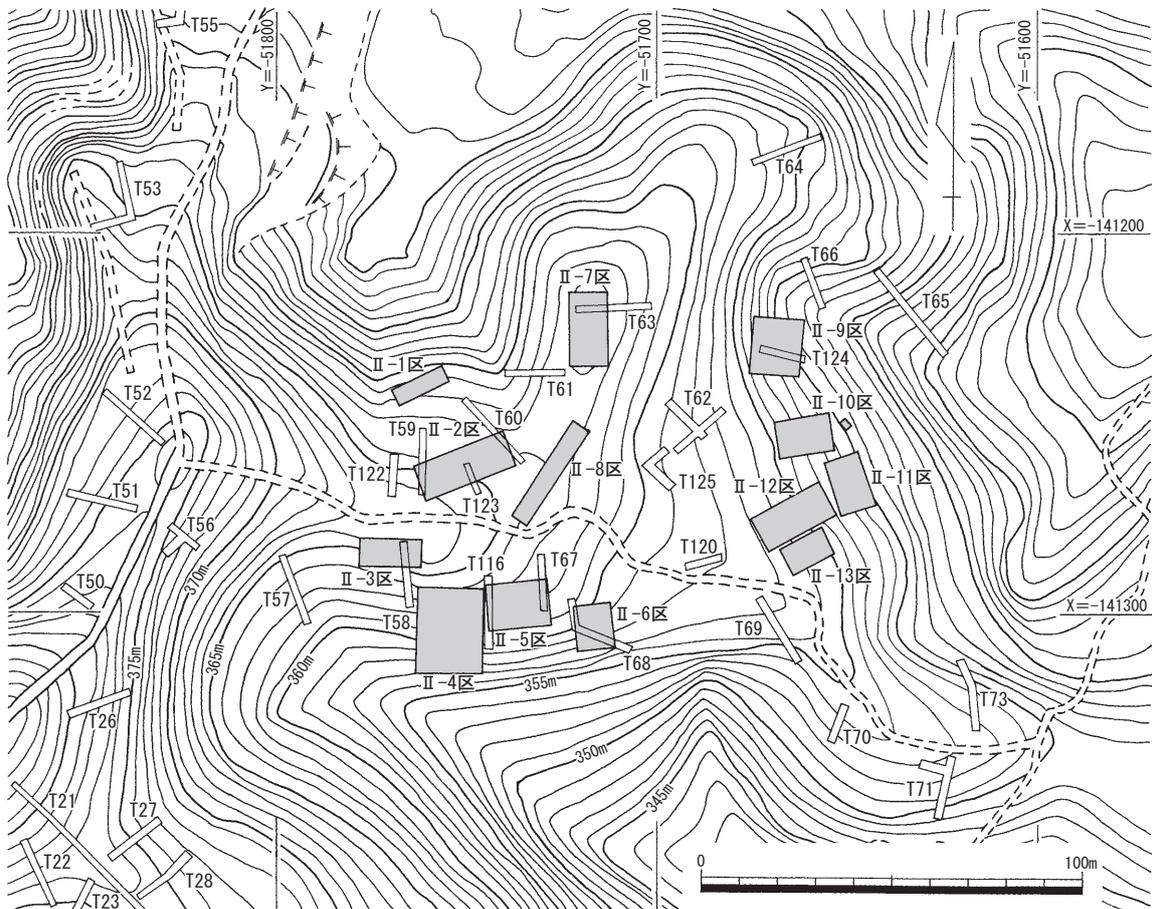
第2節 II区の調査

1 調査区の概要

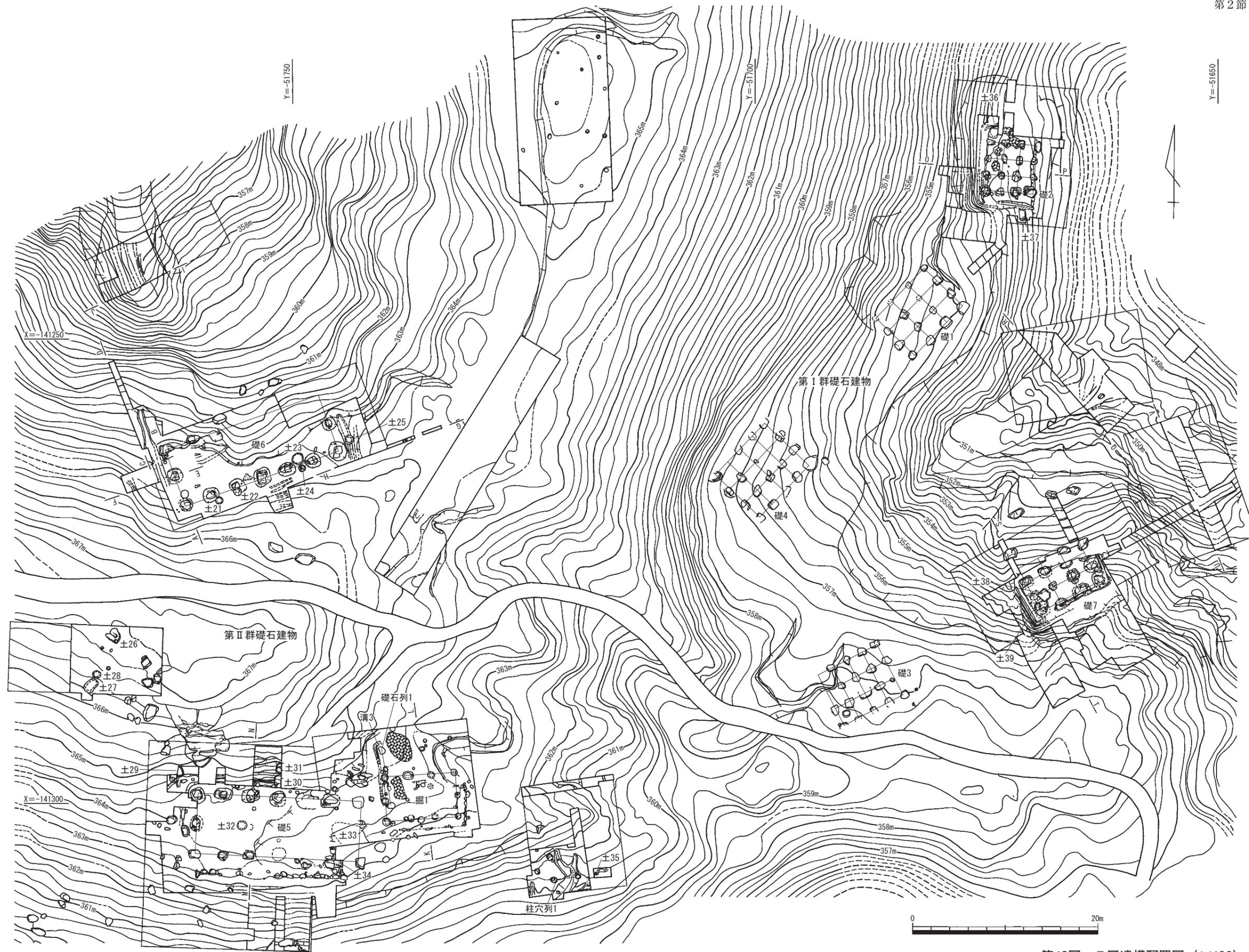
II区は城内のほぼ中心部にあたる。昭和58年に礎石建物が発見されて以来、城内の中心的施設として注目されてきた区域である。平成11年度の調査では、トレンチ調査や地表面観察で礎石建物7棟、掘立柱建物1棟の存在が明らかとなっていたが、部分的な調査にとどまっていたため、その全容解明までには至らなかった。

今回の調査では、これまでに全容がつかめていなかった建物を中心に調査区を設定し、あわせて周辺にも調査区を設け、建物群や関連する遺構の広がりを確認した。その結果、それまで詳細なデータを得られていなかった礎石建物4棟（建物2・5・6・7）について、その全容を明らかにすることができた。また、平成11年度調査で礎石建物に先行する建物と考えられた掘立柱建物1については、調査の結果、礎石建物群廃絶後の平安時代の建物と判明し、鬼城山廃城後の城内利用のあり方を示す貴重な成果となった。

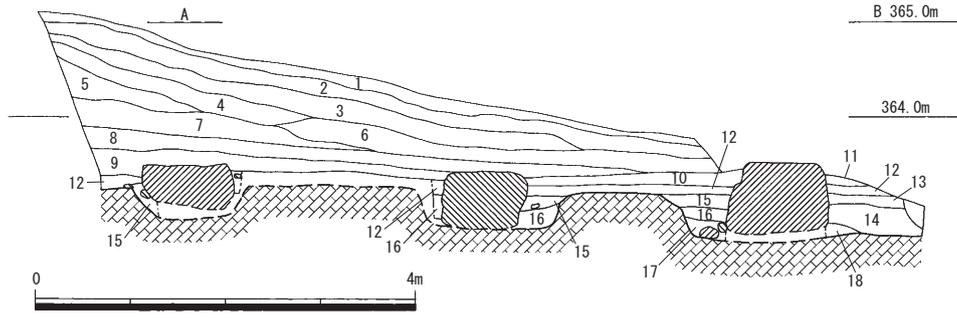
II区では、須恵器や土師器のほか、転用硯や瓦塔が出土しており、これらの施設の性格を考える上で貴重な遺物といえる。（金田）



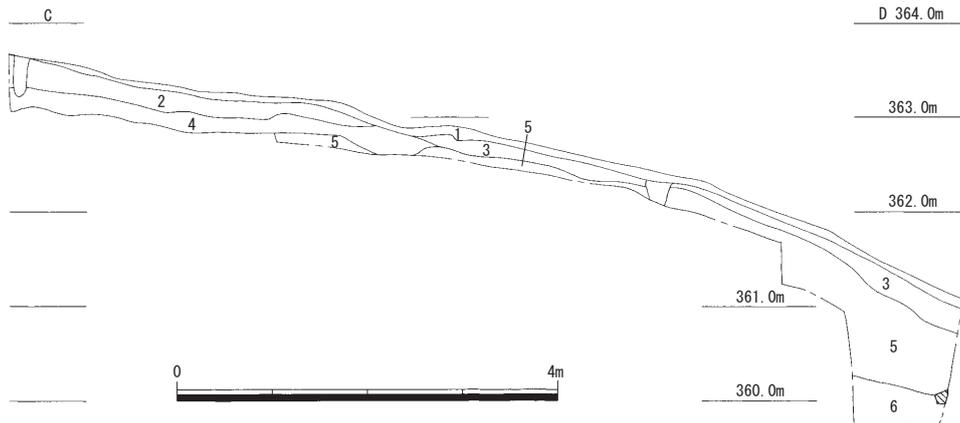
第47図 II区調査区位置図 (1/2,000)



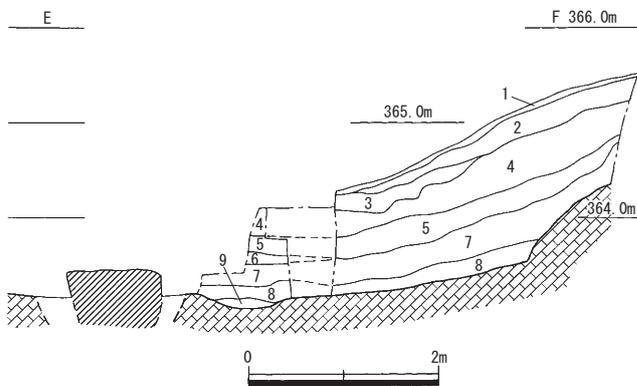
第48図 II区遺構配置図 (1/400) — 43 · 44 —



- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 表土 | 10 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) |
| 2 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) | 11 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) |
| 3 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 12 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 整地土 |
| 4 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 13 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) |
| 5 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 14 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) 礫多く含む |
| 6 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 礫含む | 15 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 礎石掘り方 |
| 7 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) | 16 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) 礎石掘り方 |
| 8 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 17 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) 礎石掘り方 |
| 9 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1) 炭多く含む | 18 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) 礎石掘り方 |



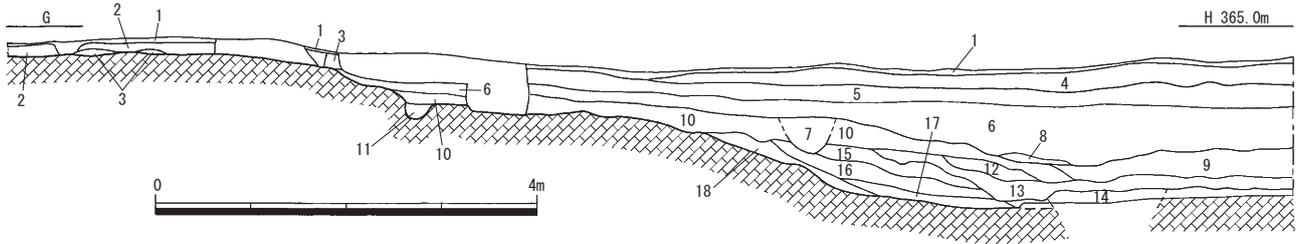
- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 表土 | 4 にぶい黄色土 (2.5Y6/4) |
| 2 橙色土 (7.5Y6/8) | 5 橙色土 (7.5YR6/6) 造成土 |
| 3 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) | 6 黄褐色土 (2.5Y5/3) 旧地表土 |



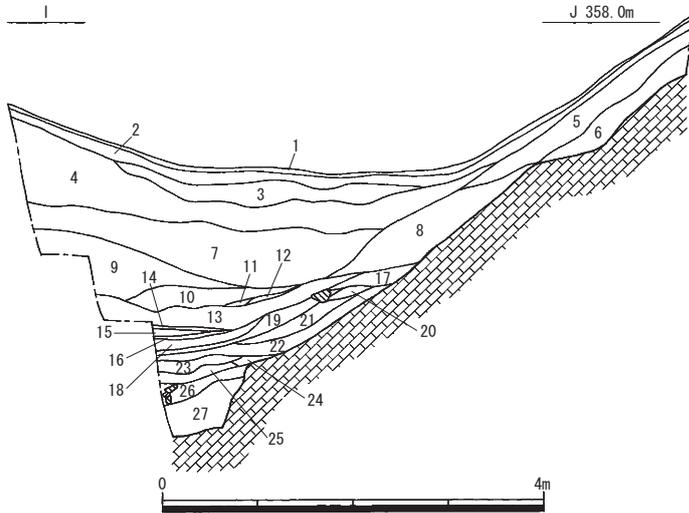
- | |
|-----------------------------|
| 1 表土 |
| 2 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) 礫多く含む |
| 3 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) 礫多く含む |
| 4 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) 礫多く含む |
| 5 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 礫多く含む |
| 6 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) |
| 7 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) |
| 8 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) |
| 9 黄褐色砂質土 (10YR5/8) 雨仕舞い溝 |

第49図 II区土層断面図① (1/80)

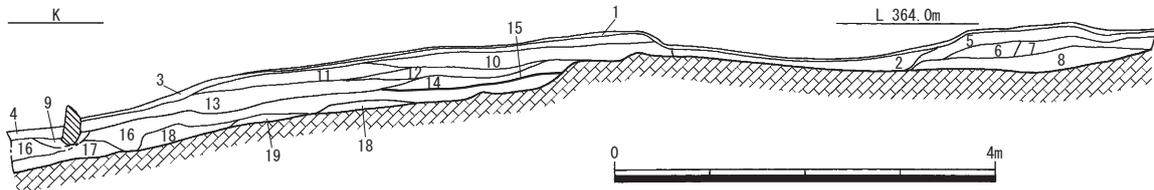
第3章 発掘調査の概要



- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 表土 | 10 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) 炭少し含む |
| 2 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) 現代造成土 | 11 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) |
| 3 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 12 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) 炭含む |
| 4 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) 礫含む | 13 灰黄色砂質土 (2.5YR6/2) 炭少し含む |
| 5 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 14 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) |
| 6 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 15 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) |
| 7 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 16 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 礫多く含む |
| 8 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) | 17 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 礫含む |
| 9 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 18 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) |



- | | | |
|-----------------------------|---------------------------|-------------------------------------|
| 1 表土 | 19 灰白色粘土 (N7/) | 24 褐灰色砂質土 (10YR5/1) 炭含む |
| 2 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) 礫多く含む | 20 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) | 25 褐灰色細砂 (10YR6/1) 炭含む |
| 3 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 21 灰黄色砂質土 (2.5Y5/1) | 26 褐灰色細砂 (10YR5/1) |
| 4 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) | 22 黄灰色粘性砂質土 (2.5Y6/1) 炭含む | 27 褐灰色粘質土 (7.5YR3/1) 炭・木片含む、最下層は泥炭化 |
| 5 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 23 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1) 炭含む | |
| 6 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 炭含む | | |
| 7 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | | |
| 8 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) | | |
| 9 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | | |
| 10 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | | |
| 11 にぶい黄褐色粘質土 (10YR6/4) | | |
| 12 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) | | |
| 13 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) | | |
| 14 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) | | |
| 15 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3) 鉄分沈着 | | |
| 16 褐灰色粘質土 (10YR6/1) | | |
| 17 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) 炭含む | | |
| 18 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) 鉄分沈着 | | |



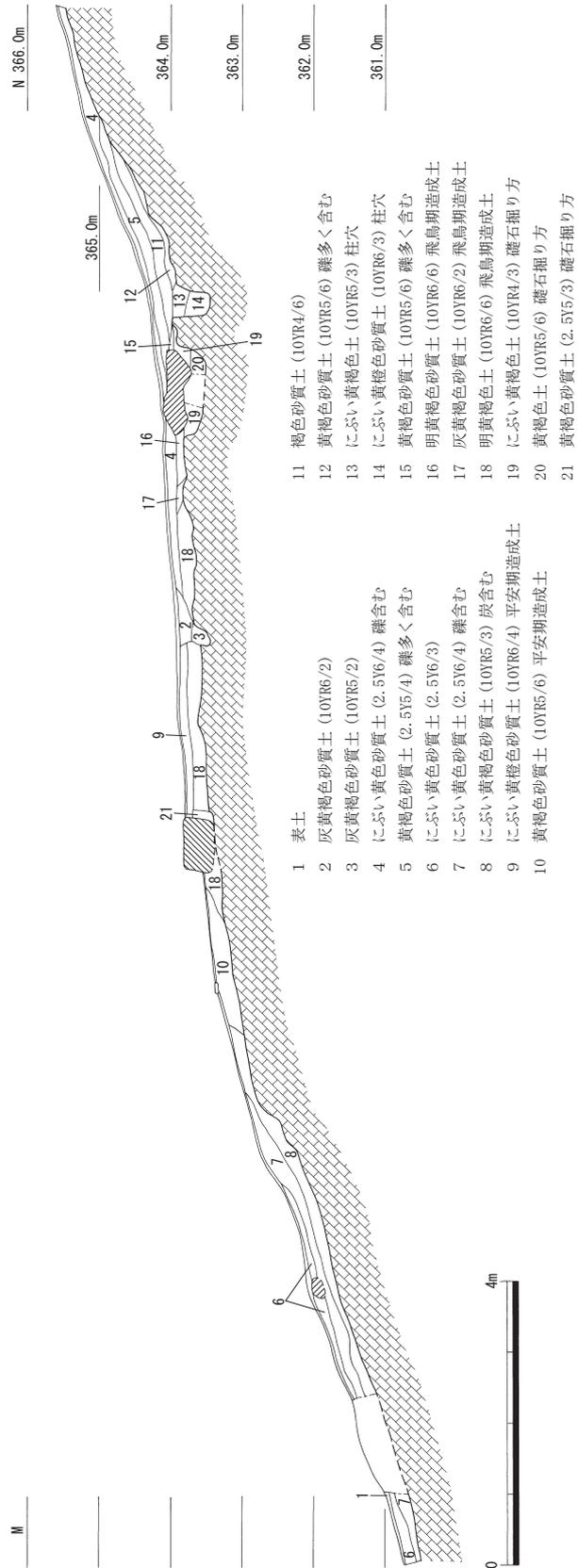
- | | |
|---------------------------|---------------------------------|
| 1 表土 | 11 橙色土 (5YR6/6) 基壇造成土 |
| 2 灰黄褐色土 (10YR5/2) | 12 にぶい黄色土 (2.5Y6/3) 基壇造成土 |
| 3 にぶい黄褐色土 (10YR7/3) | 13 にぶい橙色土 (7.5YR6/4) 基壇造成土 |
| 4 にぶい橙色土 (7.5YR6/4) | 14 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 基壇造成土 |
| 5 にぶい黄褐色土 (10YR7/3) | 15 にぶい黄褐色粗砂 (10YR6/4) 基壇造成土 |
| 6 明黄褐色土 (10YR6/8) | 16 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 基壇造成土 |
| 7 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) | 17 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 基壇造成土 |
| 8 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | 18 灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭・焼土含む、基壇造成土 |
| 9 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 石列掘り方 | 19 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 基壇造成土 |
| 10 橙色土 (5YR6/6) 須弥壇造成土? | |

第50図 II区土層断面図② (1/80)

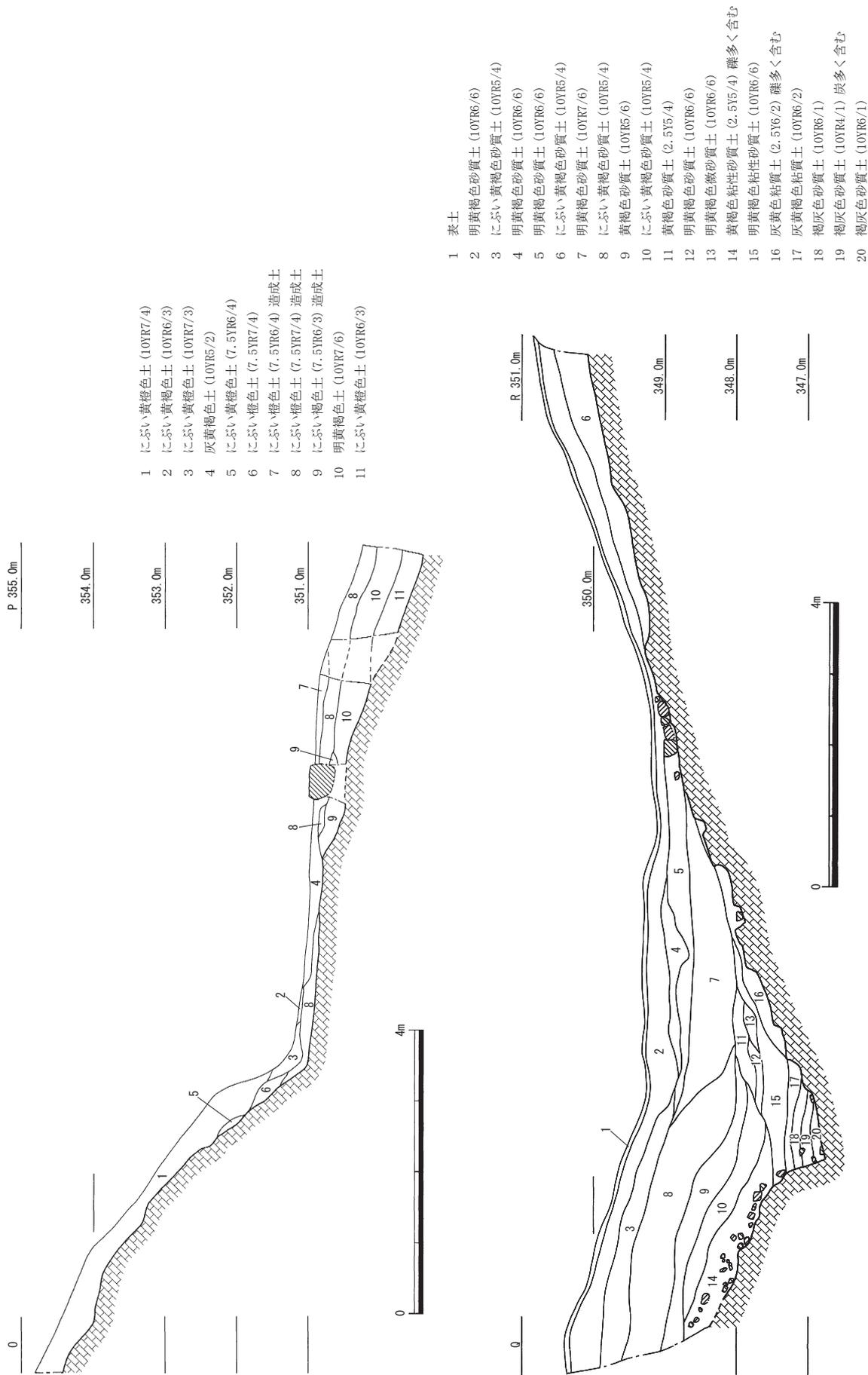
次に、礎石建物群や掘立柱建物が存在する地区周辺に設けた調査区を中心に、その土層堆積状況（第49～54図、図版13・14）について、その概要を簡単に述べる。

堆積土は概して尾根筋や緩斜面に位置する調査区では薄く、建物築造に伴う地形改変がなされた箇所や谷底では厚くなる傾向がある。特に谷底にあたるII-1・10区では堆積土の厚さが最大で3m近くに及び、最下層は植物遺体を含み黒色を呈する。また礎石建物が存在するII-2・12区も、建物廃絶後の土砂流入が著しく、堆積土の厚さも礎石面から最大で約2mになり、建物築造時の平坦面がほとんど埋没していた。

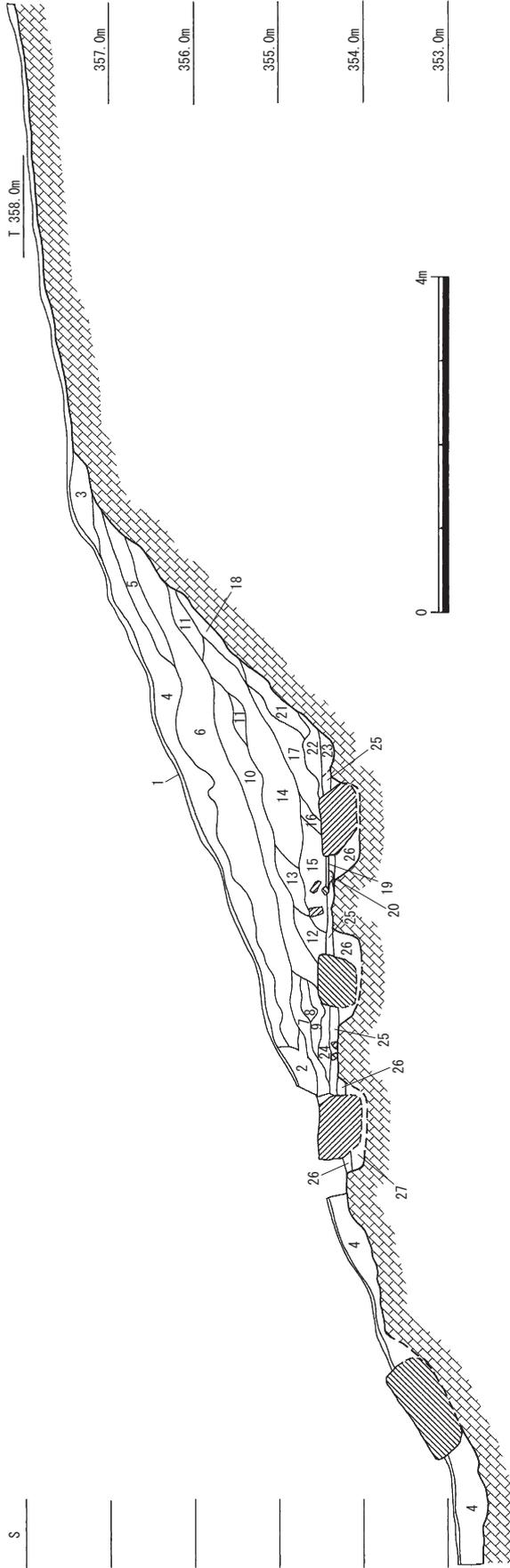
II-1区では、礎石建物6と北門を結ぶ通路の存在を想定したが、人為的な地形改変は確認できなかった。II-3区は、礎石建物6の存在するII-2区で瓦や瓦塔が出土したことから、本来それらを使用していた建物等の確認を目的として南側上方に設定したが、結果的には被熱土坑を3基検出したのみである。II-6区では柱穴列のほか小規模な被熱土坑を検出した。北側へ派生する尾根筋上に設定したII-7・8区は、城内の通路や新たな建物の確認を目的としたが、時期不明の土坑と柱穴を若干検出したのみである。II-10区は総柱建物群に挟まれた谷部に位置し、最下層から土師器小片が出土したことから、谷底が地表に露出していた時期があったことが確認できた。しかし、周辺の総柱建物群の収蔵品を推測させる出土遺物は見つからなかった。II-11区は礎石建物7より一段低い平坦面であるが、調査によりこの平坦面は明治以降の地形改変によるものと判明し、建物の有無については確証が得られなかった。礎石建物7上方のII-13区でも新たな遺構の検出はなかった。（岡本）



第51図 II区土層断面図③ (1/100)

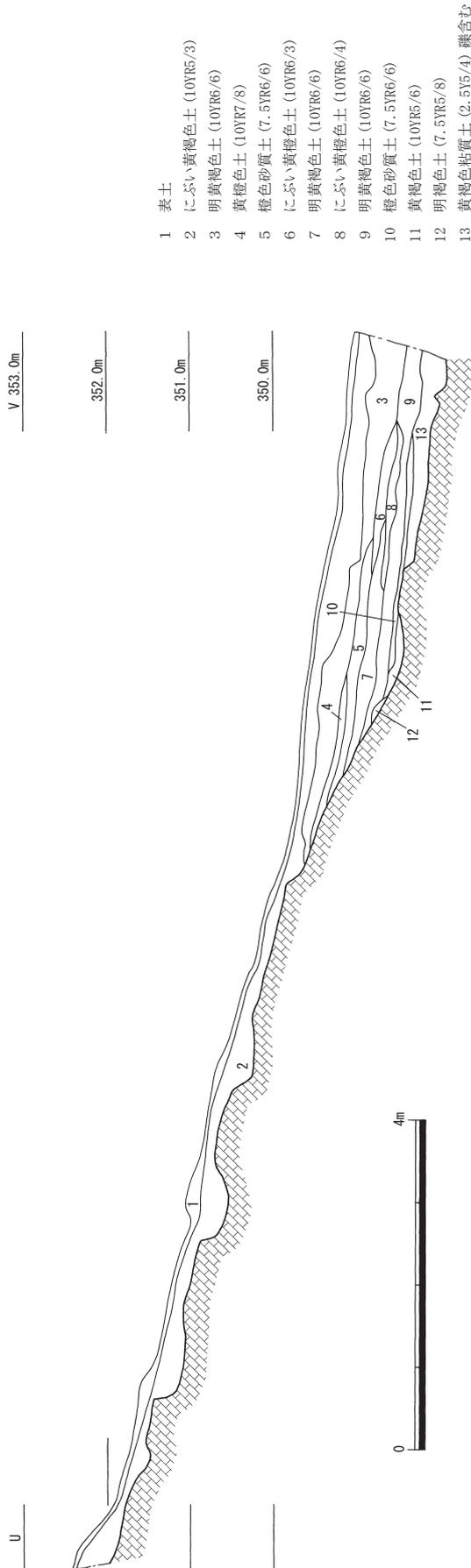


第52図 II 区土層断面図④ (1/80)



- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|---------------------------------|
| 1 表土 | 10 明黄褐色土 (10YR6/6) | 19 黒褐色土 (7.5YR3/1) 炭多く含む、土坑39埋土 |
| 2 攪乱 | 11 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | 20 赤褐色土 (2.5YR4/6) 土坑39埋土 |
| 3 黄褐色細砂 (10YR7/8) | 12 灰黄褐色土 (10YR6/2) 炭・焼土含む | 21 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 造成土 |
| 4 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | 13 灰黄褐色土 (10YR5/2) 炭含む | 22 橙色土 (5YR6/6) 造成土 |
| 5 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | 14 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) | 23 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 雨仕舞い溝 |
| 6 橙色土 (7.5YR6/8) | 15 灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭・焼土多く含む | 24 橙色土 (5YR6/8) 造成土 |
| 7 灰黄褐色土 (10YR6/2) 炭・焼土含む | 16 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) | 25 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 造成土 |
| 8 褐灰色土 (10YR5/1) 炭多く含む、焼土含む | 17 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) | 26 明黄褐色土 (10YR6/6) 礎石掘り方 |
| 9 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 炭少し含む | 18 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) | 27 明黄褐色土 (10YR6/8) 礎石掘り方 |

第53図 II区土層断面図⑤ (1/80)



第54図 II区土層断面図⑥ (1/80)

2 II区

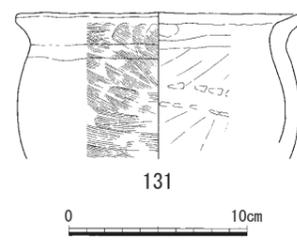
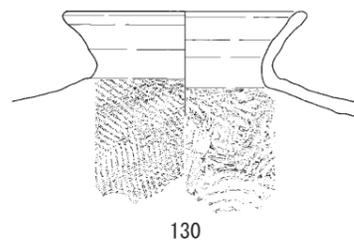
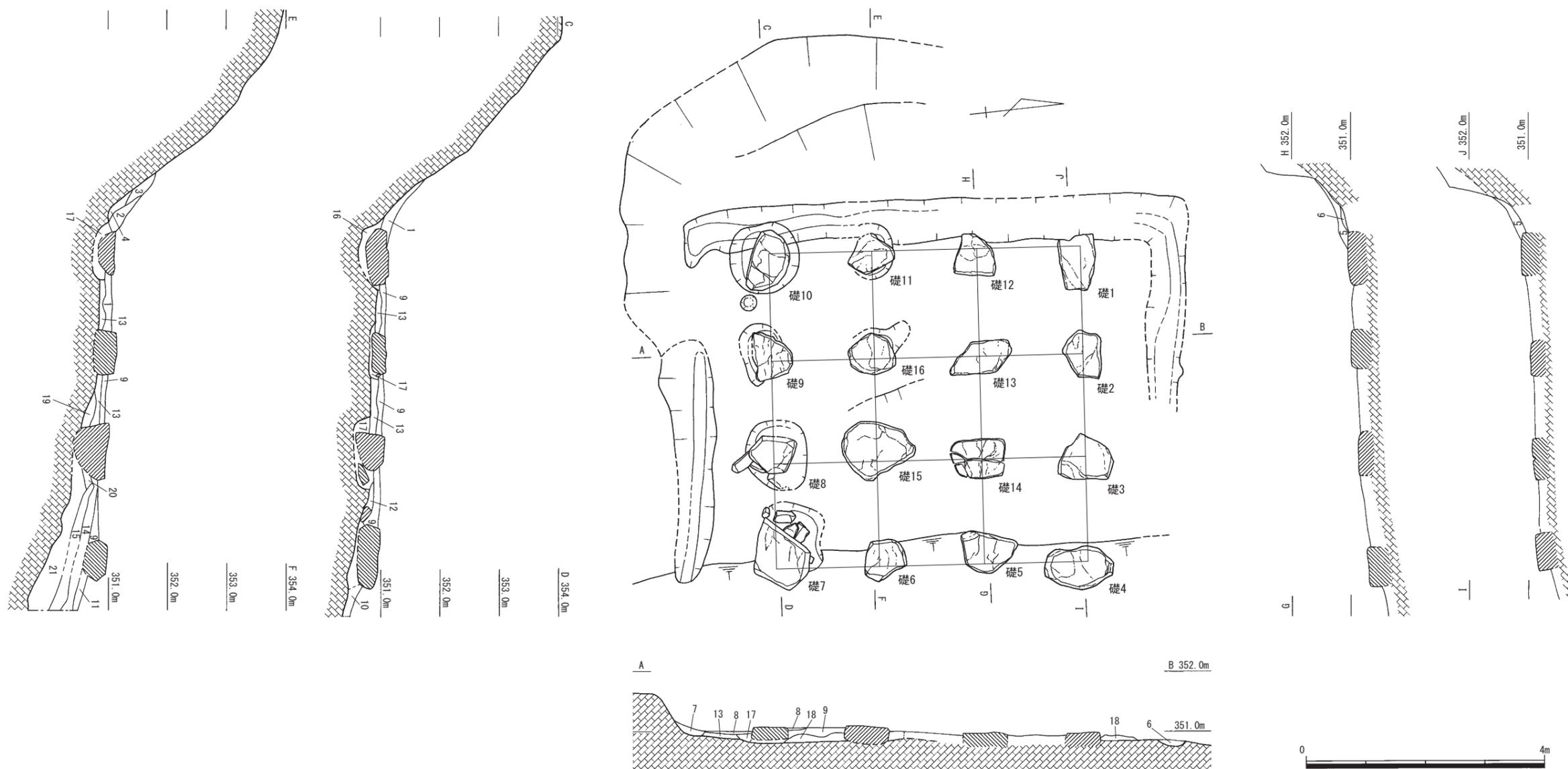
礎石建物2 (第48・55図、巻頭図版2、図版6・34、写真3)

II-9区、礎石建物群の中では最も北端に位置する。第I群礎石建物に含まれ、礎石が地表に一部露出していたことから、礎石建物1・3・4とともに初期に発見されている。平成11年度の確認調査ではT124を設定し、一部についてトレンチ調査を行っているが、今回の調査では背後の造作も含め、建物の全容について把握することを目的とした。

建物は桁行3間、梁行3間の、ほぼ正方形を呈する総柱礎石建物である。規模は桁行5.25m、梁行5.25m、面積27.5㎡を測るが、礎石建物としては、城内で最も小さい。柱間距離を推定すると桁行、梁行ともに175cmで6尺等間になる。棟方向はN-9°-Eの南北棟であるが、元地形の影響を受けたものと考えられる。

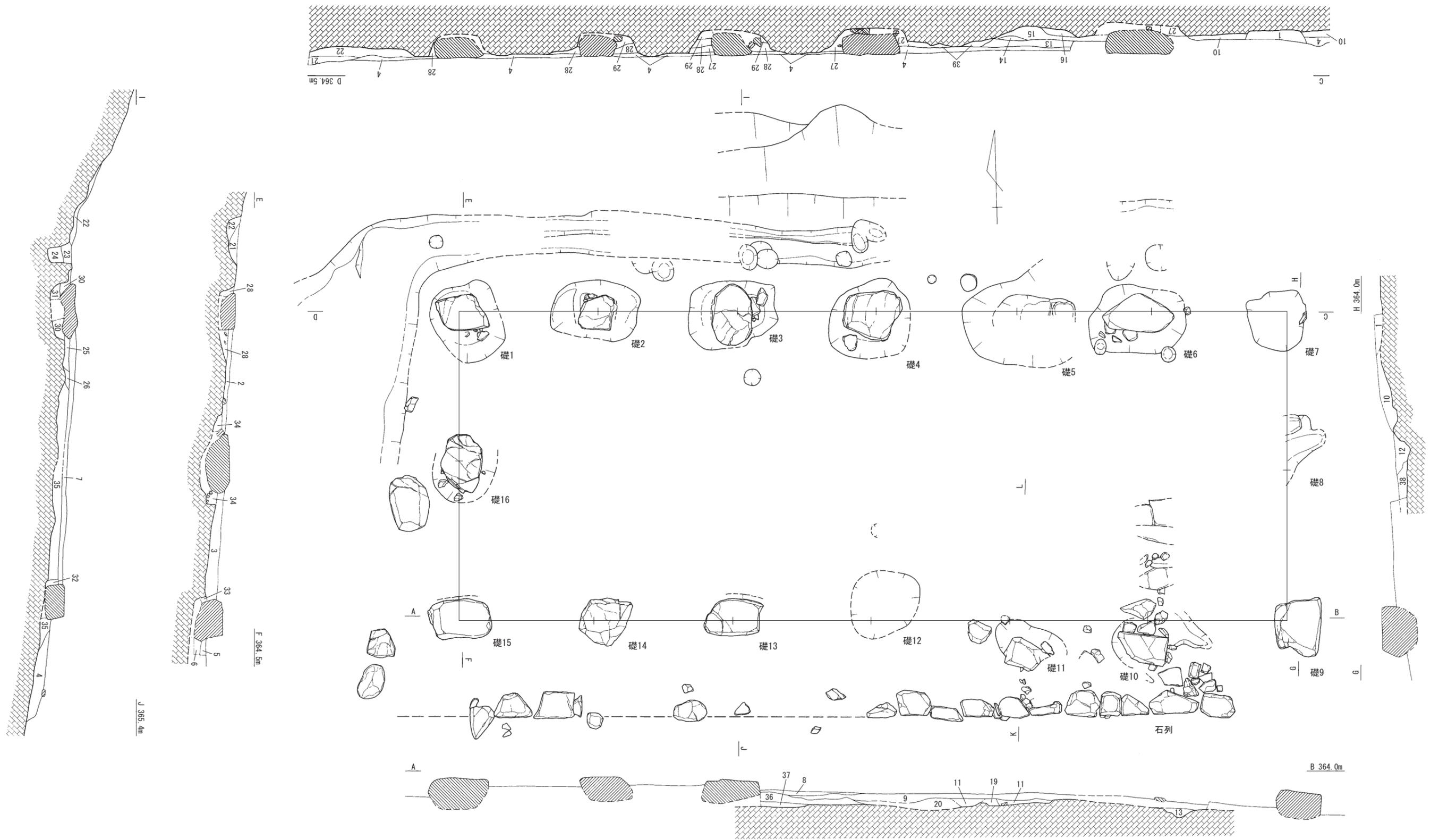
建物の構築にあたっては、他の礎石建物と同様に、斜面部を掘削し下方に盛土することで、平坦面を造成している。建物の西側及び南側で背後の地山整形の状況を確認しているが、西背面の法面の角度は約45度余りと急になっている。建物周囲では三方に溝を検出しているが、南西隅が途切れている。建物背後にあたる西側の溝は、礎石と重複するように近接しており、背後からの流水を処理するための雨仕舞いの機能をもつと考えられる。南側及び北側で検出した溝についても、柱の中心の推定位置から溝の心々距離は約1.2~1.6mと「軒の出」を想定するには、一部短い部分も存在するため、雨仕舞いの溝として、背後の斜面部からの流水処理を意図したものと考えられる。

礎石は16石すべてが残存していた。東端の桁行の礎石については、基盤が盛土上にあつた



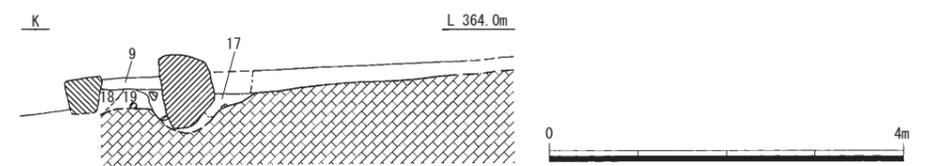
- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3) | 12 灰黄褐色土 (10YR4/2) |
| 2 にぶい黄褐色土 (10YR7/3) | 13 にぶい橙色土 (7.5YR6/4) 整地土 |
| 3 にぶい橙色土 (7.5YR7/4) | 14 にぶい褐色土 (7.5YR7/4) 造成土 |
| 4 にぶい橙色土 (7.5YR6/4) 雨仕舞い溝 | 15 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 造成土 |
| 5 明黄褐色土 (10YR6/8) | 16 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 礎石掘り方 |
| 6 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 雨仕舞い溝 | 17 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 礎石掘り方 |
| 7 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 雨仕舞い溝 | 18 にぶい橙色土 (7.5YR7/4) 整地土 |
| 8 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) | 19 にぶい橙色土 (7.5YR6/4) 造成土 |
| 9 灰黄褐色土 (10YR5/2) 平安期攪乱土 | 20 にぶい褐色土 (7.5YR6/3) 造成土 |
| 10 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | 21 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 造成土 |
| 11 灰黄褐色土 (10YR6/2) | |

第55図 礎石建物2 (1/80)・出土遺物 (1/4)



- | | | |
|------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 1 にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/4) | 11 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) | 21 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) 雨仕舞い溝 |
| 2 にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) | 12 礎石8掘り方 | 22 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 雨仕舞い溝 |
| 3 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) | 13 にぶい黄橙色砂質土 (2.5YR6/3) | 23 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3) 柱穴 |
| 4 黄褐色砂質土 (10YR5/6) | 14 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | 24 灰黄褐色砂質土 (10YR6/6) 柱穴 |
| 5 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 15 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 25 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 整地層 |
| 6 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) | 16 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) | 26 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 整地層 |
| 7 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) 平安期造成土 | 17 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) | 27 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) 礎石掘り方 |
| 8 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3) 平安期造成土 | 18 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) 石列掘り方 | 28 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) 礎石掘り方 |
| 9 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) 平安期造成土 | 19 黄褐色砂質土 (2.5YR5/3) | 29 明褐色砂質土 (10YR6/6) 礎石掘り方 |
| 10 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) | 20 褐色砂質土 (10YR4/4) | 30 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 礎石掘り方 |

- | |
|------------------------------|
| 31 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 礎石掘り方 |
| 32 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) 礎石掘り方 |
| 33 褐色砂質土 (10YR4/4) 礎石掘り方 |
| 34 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 礎石掘り方 |
| 35 明黄褐色土 (10YR6/6) 造成土 |
| 36 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 造成土 |
| 37 褐色砂質土 (10YR4/4) |
| 38 明黄褐色土 (10YR6/6) |



第56図 礎石建物5 (1/80)

るため若干動いているが、他の礎石については原位置を保っている。礎石はいずれも花崗岩を粗割りしたもので、長辺約80～120cmの上面が平らな石を使用している。礎石の据え付け掘り方は、造成のさいに削り出した地山の上で整地を行った後に掘削されている。据え付け掘り方の規模は、礎石よりも一回りほど大きいもので、深さも30cm程度と浅く、側柱建物の礎石建物5・6の礎石の据え付けに比べると簡易な印象を受ける。なお、平成11年度の確認調査時には、礎石4で円形の柱痕跡を確認したとの報告があるが、今回の調査では現認できなかった。

建物廃絶後は、平安時代ごろまで礎石の一部が露出し、平坦面が明瞭に残る状況が続いたようである。建物範囲内でも一部の礎石が被熱しているほか、第48図に示すように炭の散布や掘り込みが顕著に認められるなど、攪乱を受けている。建物に近接した位置に平安期と考えられる土坑36・37も掘削されており、建物一帯の平坦面が再利用されている状況を確認した。

建物に伴う遺物として、須恵器横瓶130・土師器甕131を示したが、いずれも礎石の検出中に出土したものである。須恵器横瓶は、今回の調査で城内各所からの出土が目立つ器種であり、飲用水等の貯蔵容器として山城内で利用されていたものと推定される。

時期については、出土遺物や建物の造作の特徴から判断して、7世紀末には建てられ、8世紀を中心に機能していたものと考えられる。建物の機能については、他の総柱礎石建物と同様に、高床倉庫と考えられる。(石田)



写真3 礎石建物2作業風景(南から)

礎石建物5(第48・56・57図、図版7・8・34・37)

II-4区で検出された南向きの緩斜面上に立地する礎石側柱建物である。この場所では、以前から礎石の一部が地表に露出しており、平成11年度の確認調査では6×2間の側柱建物の存在が想定されていた。今回の調査では全体の規模や構造、築造年代の解明を目指した。なお建物の北側には、遊歩道が通る東西方向の尾根筋を挟んで礎石建物6が位置し、両者で第II群礎石建物を構成する。

今回の調査によって、建物の規格は想定通り6×2間であることが確認され、規模は桁行が17.6m、梁行が6.5m、面積約114㎡であることが判明した。規模は礎石建物6を若干上回るが、ほぼ同一規格とみてよいであろう。棟方向はN-87°-Wであり、長軸をほぼ東西に向けている。柱間距離の平均は、桁行では293cm、梁行では325cmであり、それぞれ10尺及び11尺程度となる。

建物の背後では、部分的なトレンチ調査により、他の礎石建物と同様に斜面を掘削し平坦面を造成した様子が確認できた。ただ、もともと斜面の傾斜が緩いため背面の造成はさほど顕著ではなく、法面上端と平坦面との高低差は1m前後である。建物の北西側では雨仕舞い溝が確認された。

礎石はいずれも花崗岩を使用し、風化した岩盤を掘り抜いた掘り方内に据えられている。ただし礎石5・7・8・12は後世に移動され、掘り方みの検出である。また南東部の礎石10・11は掘り起こされ、本来の位置から若干南側に埋め直されている。南東隅の礎石9も本来の位置から若干ずれていると思われる。礎石9・14以外の掘り方について半截ないし断ち割りを行った結果、地山面からの深

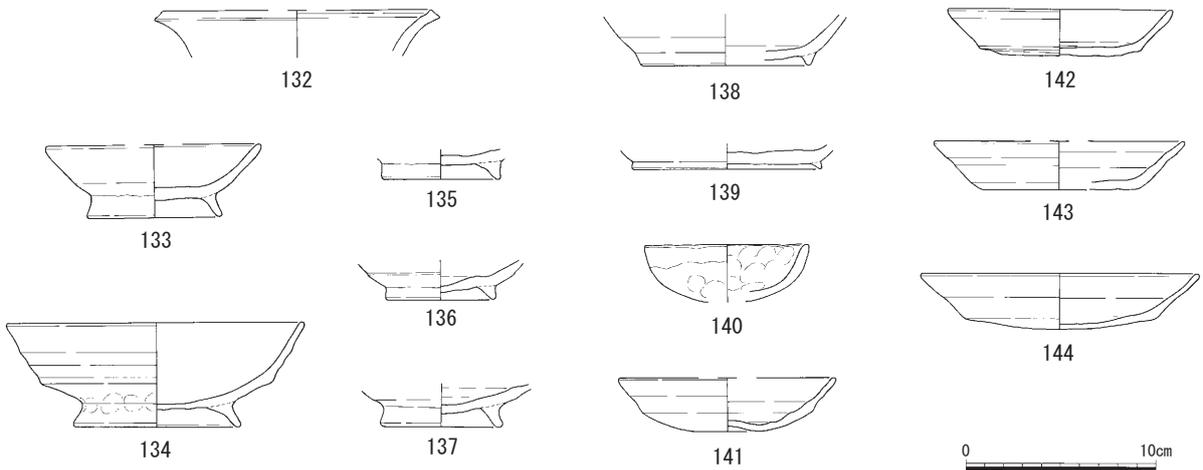
さはおおむね40cm前後であり、礎石の下や側面に根石を詰めていることも判明した。掘り方の埋土からは図示可能な遺物は出土していない。なお、北側の礎石2から礎石6周辺には、直径20cm程度の小さな柱穴が散在している。これらの柱穴の機能は判然としないが、もし建物に関連するものであれば、建築作業に伴う足場の柱穴といった可能性が考えられる。

さらにトレンチ調査の結果、斜面下方にあたる建物の南半では、建設にさいして盛土による造成（第35・36層）がなされていることが確認できた。また、平安時代の遺物を含む造成土層（第7～9層）が広範囲にわたって検出され、平安期においてこの建物が何らかのかたちで再利用されたことも判明した。建物東半部の礎石の多くが移動されているのは、再利用時に規模が縮小され、西半部の礎石のみが使用されたことを意味するのかもしれない。

建物の南側では、長さが最大で1mほどの花崗岩を一行に並べた石列が約16.2mにわたって検出された。東半部の礎石10～12の南側では石がよく残っているが、西半部の礎石12～15南側ではかなりの石が流失してしまっている。石列の方向は建物主軸と一致し、平らな面を南に向けてそろえていることから、建物の装飾と土砂の流出防止が目的であることは間違いない。隣接する平安期の掘立柱建物1に同様の石列が伴うことから、この石列も平安期に付加されたものの可能性もある。

遺物は、平安期造成土及び礎石抜き取り後の埋土から出土している。132の壺以外はすべて土師器である。土師器には椀133～139、手捏土器140、杯141～144があり、おおむね10世紀を中心とする時期と考えられる。138は黒色土器である。これら平安期の遺物は建物の再利用に伴うものであろう。

以上のことから、この建物は当初は古代山城に伴う施設として創建され、平安時代に至って改めて造成、再利用された可能性が高い。平安期の利用形態については、東に隣接する掘立柱建物1と同様に、当時この一帯に展開した山岳寺院の堂宇の一つという可能性が考えられる。（岡本）



第57図 礎石建物5 平安期造成土・礎石抜き取り穴出土遺物（1/4）

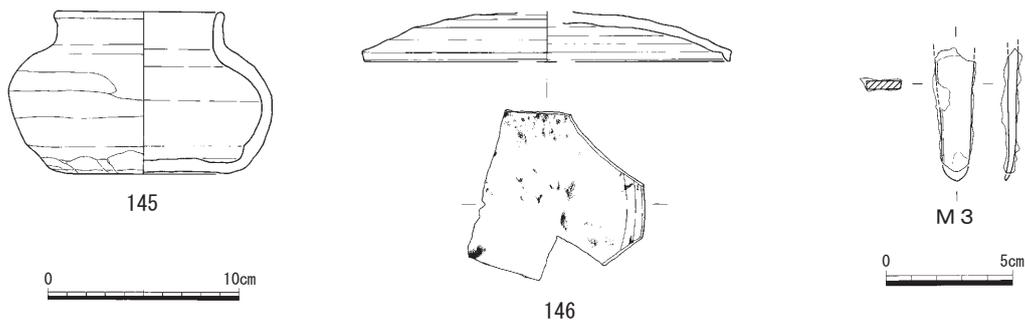
礎石建物6（第48・58・59図、巻頭図版2・4、図版9・34・37）

Ⅱ-2区、第Ⅱ群礎石建物内に位置する側柱礎石建物である。平成11年の確認調査時に、北側の礎石の一部が地表に露出していたことから、新たに発見された建物である。トレンチ調査の結果から5×2間の規模の礎石建物の存在が推定されていたが、今回の調査により礎石建物6は6×2間の側柱建物で、桁行は17.52m、梁行は6.42m、面積112㎡を測り、調査前の想定よりも長大な建物であるこ

とが判明した。南側のⅡ-4区に位置する礎石建物5の規模をわずかに下回るが、同一の規格で建築されたと推定される。棟方向はN-70°-Eで、旧地形に制約されてか正方位にはそろっていない。柱間距離は桁行で292cmの10尺等間、梁行で321cmの11尺等間である。建物の東・西側及び南側では溝を検出しており、三方に「コ」の字状に巡る。柱の中心の推定位置と溝の心々距離を計測すると建物妻側で約1.3m、平側で1.4mと「軒の出」を想定するにはやや短くなるため、建物背後の斜面から集まる水を排水する雨仕舞い溝と考えられる。なお、建物の構築にあたっては、尾根上の平坦部を選ばず斜面部分を大幅に掘削することで平坦面を造成しており、南側の建物背後には明瞭な地山整形の痕跡が残る。

礎石はいずれも花崗岩を粗割りした石で、長辺で80~170cmを測る。建物の隅（礎石1・9・15）と中央の礎石（礎石12）については、大きめの石を選んで使用している。建物北東側については、基盤が盛土である上に、近代の砂防工事による土取り作業のため現状では大きく崩れて流失している。建物を構成する16石の礎石のうち5石が下方に転落して移動しており、1石については所在も不明である。調査で確認できた礎石の据え付け掘り方は、いずれも風化した岩盤の地山を掘削している。根石で礎石を固定して埋め戻し、礎石据え付け後には厚さ10cm程度の整地を建物範囲全体に行っている。二つの礎石には丸柱の円形の痕跡が残っており、礎石11の柱痕跡は径50cm、礎石12は径45cmを測る。礎石に残っていた痕跡は柱痕跡のみであることから、建物の床と地表の間に空間があったと考えられる。ただし、桁行が17mを越すほど長い上に、床束柱の痕跡も確認されていないことから、高床は構造的に難しく、床束を簡単にした低床構造の建物が想定される。

建物の南半側では、現地表面から礎石の検出面まで2m近くの堆積土があった。堆積土中からは主に平安時代の土師器片のほか、第84図に示した瓦塔187~190も出土している。礎石横で検出した平安時代の被熱土坑（土坑22）では、礎石自体も被熱しており、この時点までは礎石のほとんどが地表に露出していた状況が想定される。建物周辺から瓦片も数点出土しているが量は少なく、礎石建物自体は瓦葺きとは考え難い。出土した瓦については、建物上方に存在が推定される平安時代の建物からの流れ込みであろう。建物に関連する遺物として、須恵器145・146や鉈と考えられる鉄器M3があり第58図に示した。短頸壺145は礎石11の北側の整地面上で検出され、平成11年度の確認調査時に出土したものと接合している。須恵器蓋の転用硯146は、建物西側の雨仕舞い溝埋土から出土しており、内面には墨の痕跡が残る。図化できなかったが礎石据え付け掘り方の埋土中からも須恵器片を検出しており、建物は7世紀末には建造され、8世紀にかけて機能していたと考えられる。建物の性格としては、側柱の長大な建物であることや、雨仕舞い溝埋土からの転用硯の出土など、官人層の存在が推定されることから、礎石建物5とともに城内の管理棟的な機能をもった官舎を想定している。（石田）



第58図 礎石建物6出土遺物（1/4・1/3）

礎石建物7（第48・60図、巻頭図版1・4、図版10・34、写真4）

II-12区で検出された城内礎石建物群の東端に位置する建物である。北東方向に流下する谷筋を挟んで分布する総柱建物の一つで、他の4棟とともに第I群礎石建物を構成する。礎石建物6と同様に、地表面に礎石の一部が露出していたことから存在が予測されていたが、これまで発掘調査の対象になっておらず、その規模や規格は不明であった。

この建物は後世の土砂流出による損壊が著しく、北端桁行の礎石が4石とも谷の下方に転落していたが、いずれも地表で確認することができた（第48図）。調査区内で検出された12石（礎石1～12）と合わせると、桁行・梁行とも3間の総柱建物であることが判明した。建物の規模は、桁行が7.08m、梁行が復元で5.25mを測り、想定される面積は38㎡で、城内では2番目に小さい礎石建物である。柱間距離は桁行が236cm、梁行が175cmを測り、それぞれ8尺と6尺に相当する。建物の棟方向はN-62°-Eであり、南西側に位置する礎石建物3とほぼ同一で、両者が計画的に配置されたことは確実といえる。また、礎石建物1とは谷筋を挟んで対峙する位置にある。

建物の構築にさいしては、斜面を方形に掘削し、その土を斜面下方に盛土することで平坦面を造成している。建物背面の法面の傾斜は30～45度を測る。建物の周囲では、南・東・西の三方を巡る溝が検出された。この溝は、東側と西側の一部で二重に巡っていることから新旧の2段階が想定され、西側での切り合い関係から考えて、内側の溝のほうが新しいと考えられる。いずれも、いわゆる雨落溝としては建物本体に近すぎるため、斜面からの流水を排出するための雨仕舞い溝の役割を果たしたものであろう。また、第60図のK-L断面では、背後の法面下部に雨仕舞い溝（第9層）を埋め立てた造成土（第1・2層）が確認され、少なくとも1回の再造成がなされたことが確認できる。

礎石はいずれも花崗岩であり、岩盤に穿った掘り方に据えられていた。一部の掘り方では、礎石下面に詰められた根石も確認されている。礎石の据え付け後には、建物全体にわたって第11・12層とした整地がなされている。礎石に関して特筆すべき事象としては、礎石8・9に残存していた円形の柱痕跡があげられる。柱痕跡は他の部分に比べて色調が薄い、特に礎石8のものははっきりと視認することができた。礎石8の柱痕跡は直径45cm、礎石9のものは50cmを測る。これらは建物に丸柱が使用された証拠であり、建物の構造を推測するための重要な手がかりになるものである。

なお、礎石5・12には焼土面、礎石9には平安期の被熱土坑（土坑39）がそれぞれ接しており、建物の

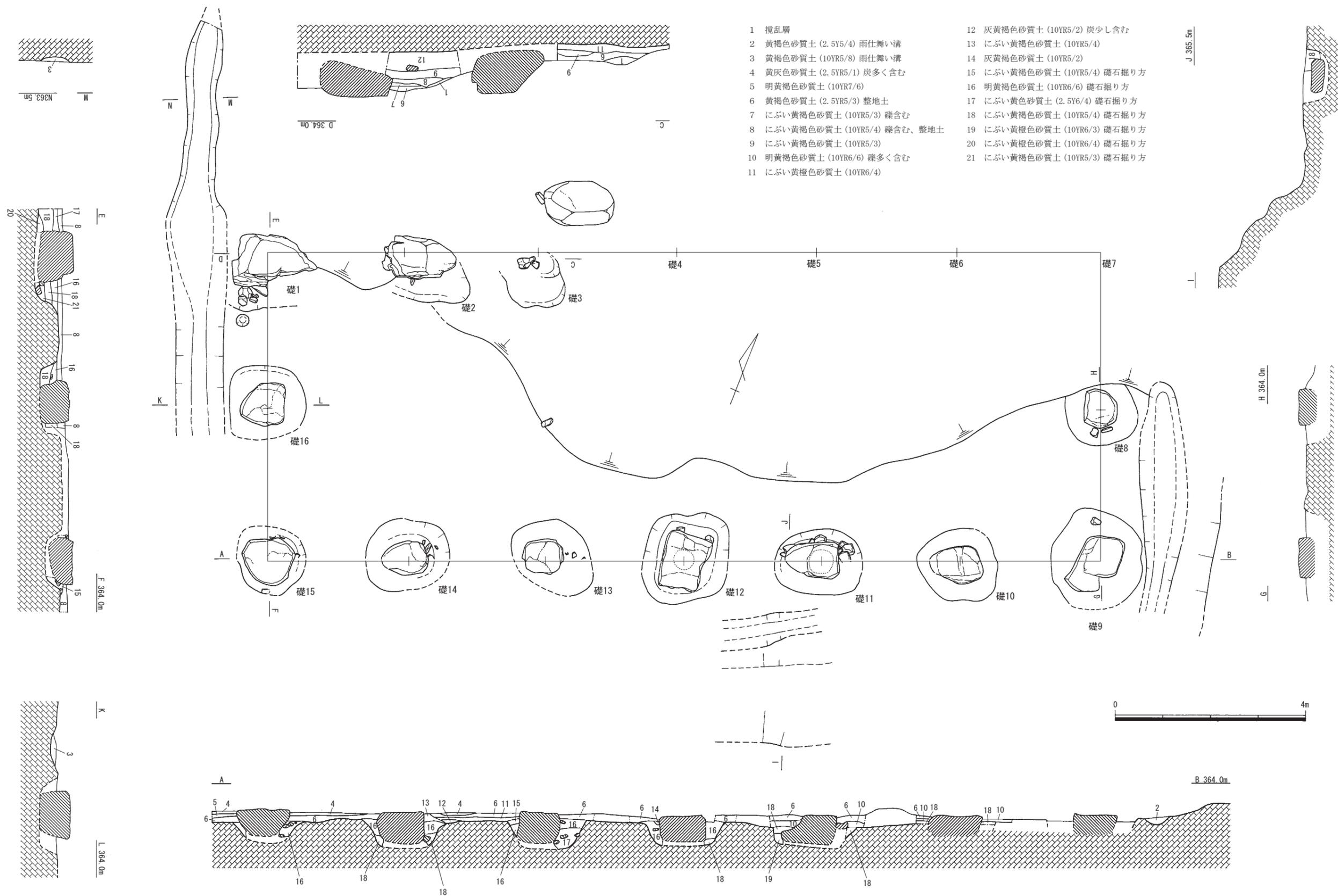
廃絶後にも礎石が地表に露出し、この場所で何らかの活動があったことが推測される。

出土遺物として図示した土師器椀147は、礎石の直上から出土したもので、必ずしもこの建物に伴うというものではない。

建物の機能は、総柱という構造からみて高床倉庫であり、時期については、他の礎石総柱建物と同じく、7世紀末から8世紀にかけて機能したものと考えられる。（岡本）

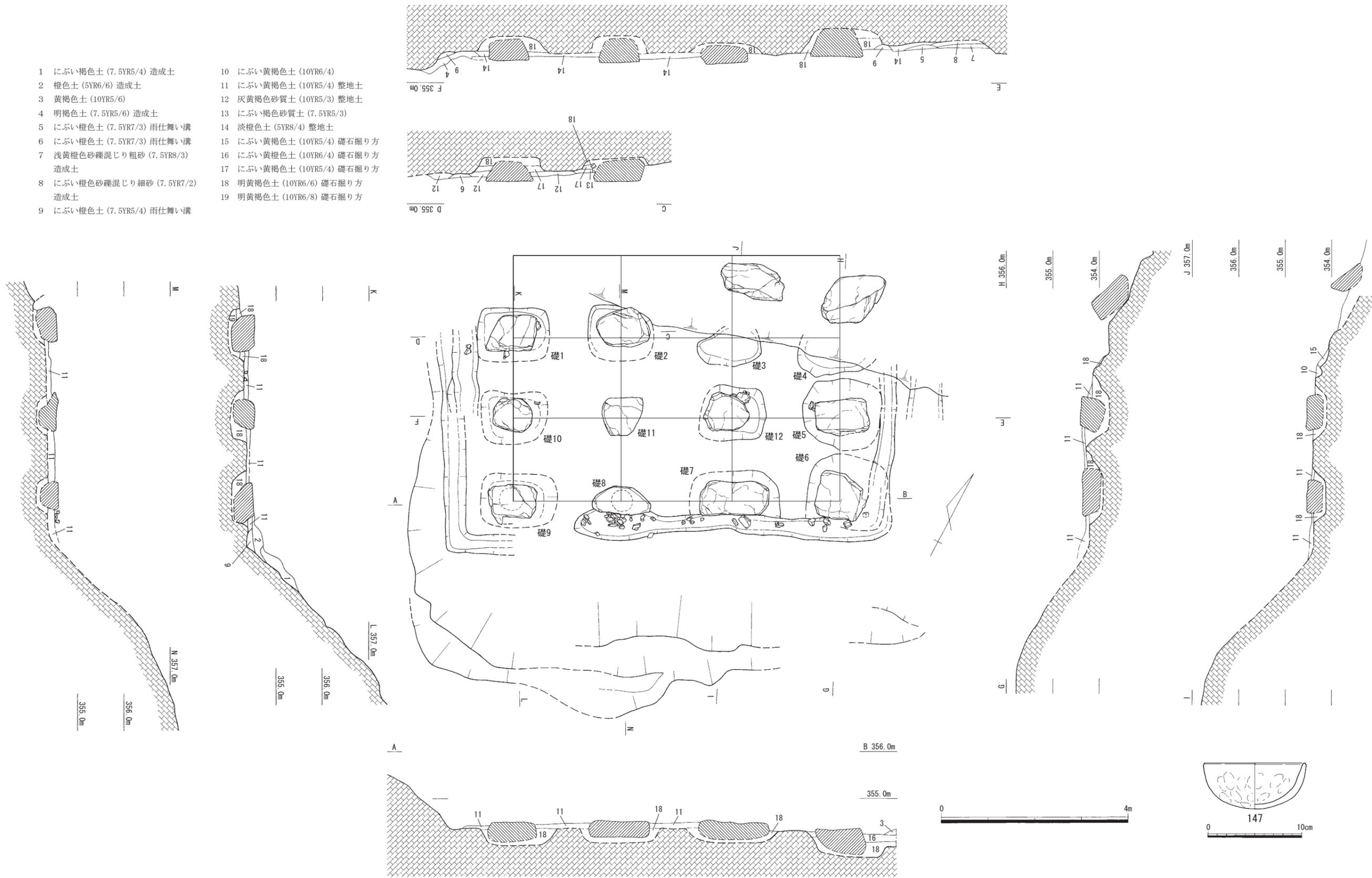


写真4 礎石建物7作業風景（南から）



第59図 礎石建物6 (1/80)

- 1 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 造成土
- 2 橙色土 (5YR6/6) 造成土
- 3 黄褐色土 (10YR5/6)
- 4 明褐色土 (7.5YR5/6) 造成土
- 5 にぶい橙色土 (7.5YR7/3) 雨仕舞い溝
- 6 にぶい橙色土 (7.5YR7/3) 雨仕舞い溝
- 7 浅黄橙色砂礫混じり粗砂 (7.5YR8/3) 造成土
- 8 にぶい橙色砂礫混じり細砂 (7.5YR7/2) 造成土
- 9 にぶい橙色土 (7.5YR5/4) 雨仕舞い溝
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR6/4)
- 11 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 整地土
- 12 灰黄褐色砂質土 (10YR5/3) 整地土
- 13 にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3)
- 14 淡橙色土 (5YR8/4) 整地土
- 15 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 礎石掘り方
- 16 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 礎石掘り方
- 17 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 礎石掘り方
- 18 明黄褐色土 (10YR6/6) 礎石掘り方
- 19 明黄褐色土 (10YR6/8) 礎石掘り方



第60図 礎石建物7 (1/80)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物1（第48・61・62図、図版11・34・40、写真5）

基壇を有する掘立柱建物でII-5区に位置する。平成11年度の確認調査ではT67を設定し、石列と柱穴を確認したことから、西に隣接する礎石建物5の前身建物で、時期も飛鳥時代にさかのぼる可能性が指摘されていた。今回は、建物の全容や詳細な時期を明らかにすることを目的に範囲を広げて調査を行った。

検出した掘立柱建物1は桁行3間、梁行2間の側柱建物で、桁行7.7m、梁行4.8mを測り、面積は約37㎡である。棟方向はN-85°-Eを示す東西棟の平入りの建物で、ほぼ南面している。建物を構成する柱穴は円形を呈し、規模は長径で60~110cm、最も根入れの深いもので深さ90cmを測る。いずれの柱穴も基壇造成後に掘削されていた。また、P2・8・9・10の周囲では、小規模で根入れの浅い柱穴を検出しており、建物構築時の足場穴であった可能性も考えられる。

建物は、南側と東側に石列を巡らした小規模な基壇上に設けられている。基壇は若干の地山整形の後、大半を盛土によって構築しているが、北半部については地山が高く、盛土部分は当初から少なかったものと推定される。基壇の大部分は流失しており、北西側の範囲の確定は困難であるが、石列の状況から推定して、南北約4.7m、東西約9mの規模をもち、基壇の高さは南前面で80cm余りと推定される。

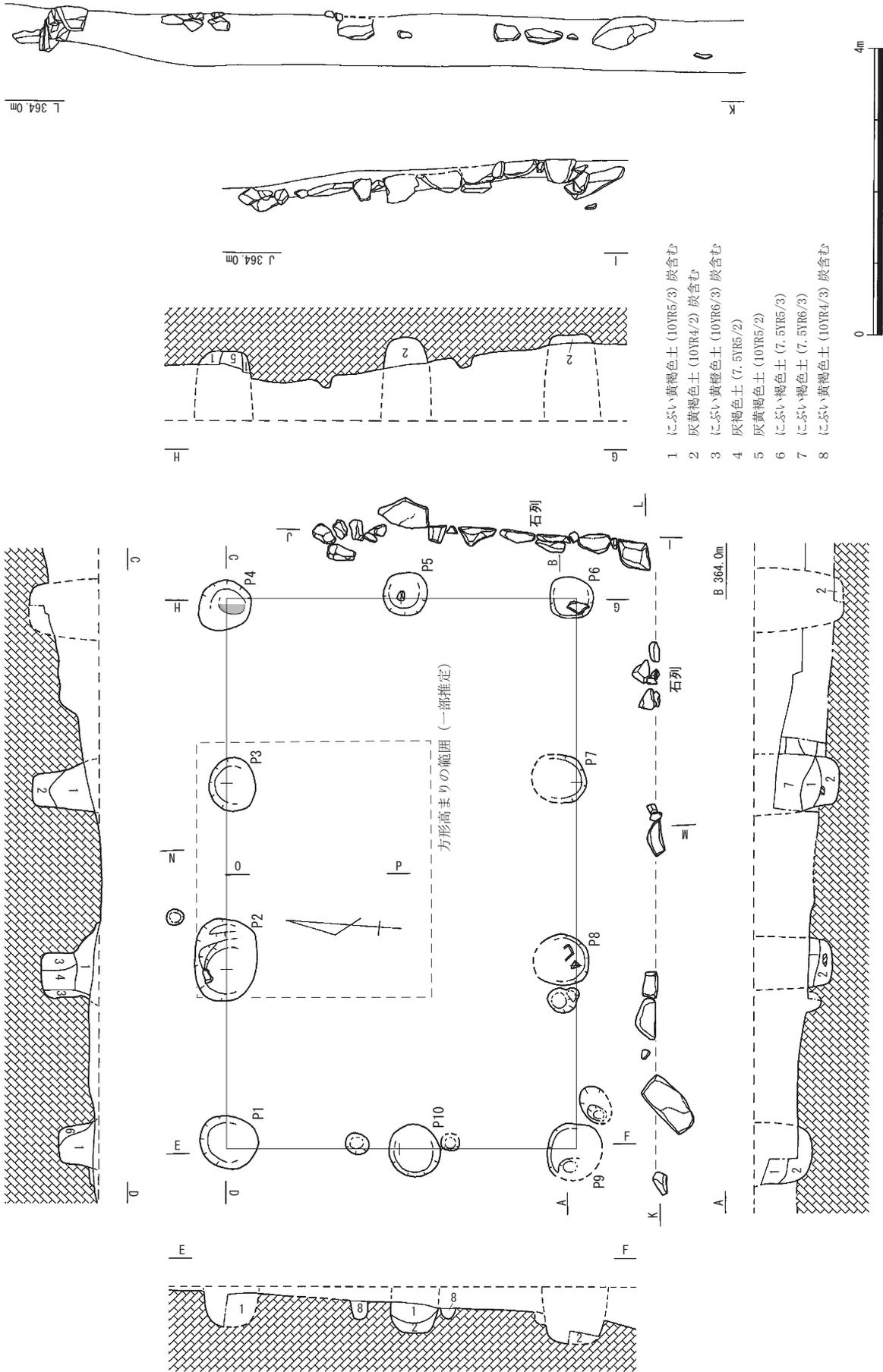
建物北側中央部では、基壇の上部で方形の高まりを部分的に検出している。第62図の第2層にあたるが、橙色の均質な土を使用し、厚さ15~20cm程度に整地されていた。規模は長辺約3.5m、短辺約3.2mを測り、平面形は正方形に近い。寺院の仏堂であれば須弥壇の基礎部分にあたるだろう。なお、方形高まりの下部についても精査したが、鎮壇具の埋納坑等の遺構は検出されなかった。

出土遺物については、図化できたものを第62図に示した。須恵器148~153は7世紀末から8世紀にかけてのもので、主に基壇造成土中から出土している。153は蓋を再利用した転用硯である。これらの須恵器は建物の時期を直接示すものではないが、近接する位置に掘立柱建物1より古い段階の礎石列1や溝3を検出しており、付近に重複して古代山城期の遺構が存在していた可能性がある。建物の時期を示す遺物としては、基壇造成土や基壇上の堆積土中から出土した土師器154~159や銅銭M4がある。158の口縁部付近には煤の付着が認められる。銅銭M4は初鑄796年の隆平永寶で、P1の埋土中から出土している。その他の遺物として鉄釘M5・M6や平瓦片160がある。平瓦片は基壇造成土中から出土したもので、瓦葺きの別建物からのまぎれ込みであろう。掘立柱建物1の周辺では瓦の出土はほとんどなく、瓦葺きの建物であった可能性は低いと思われる。

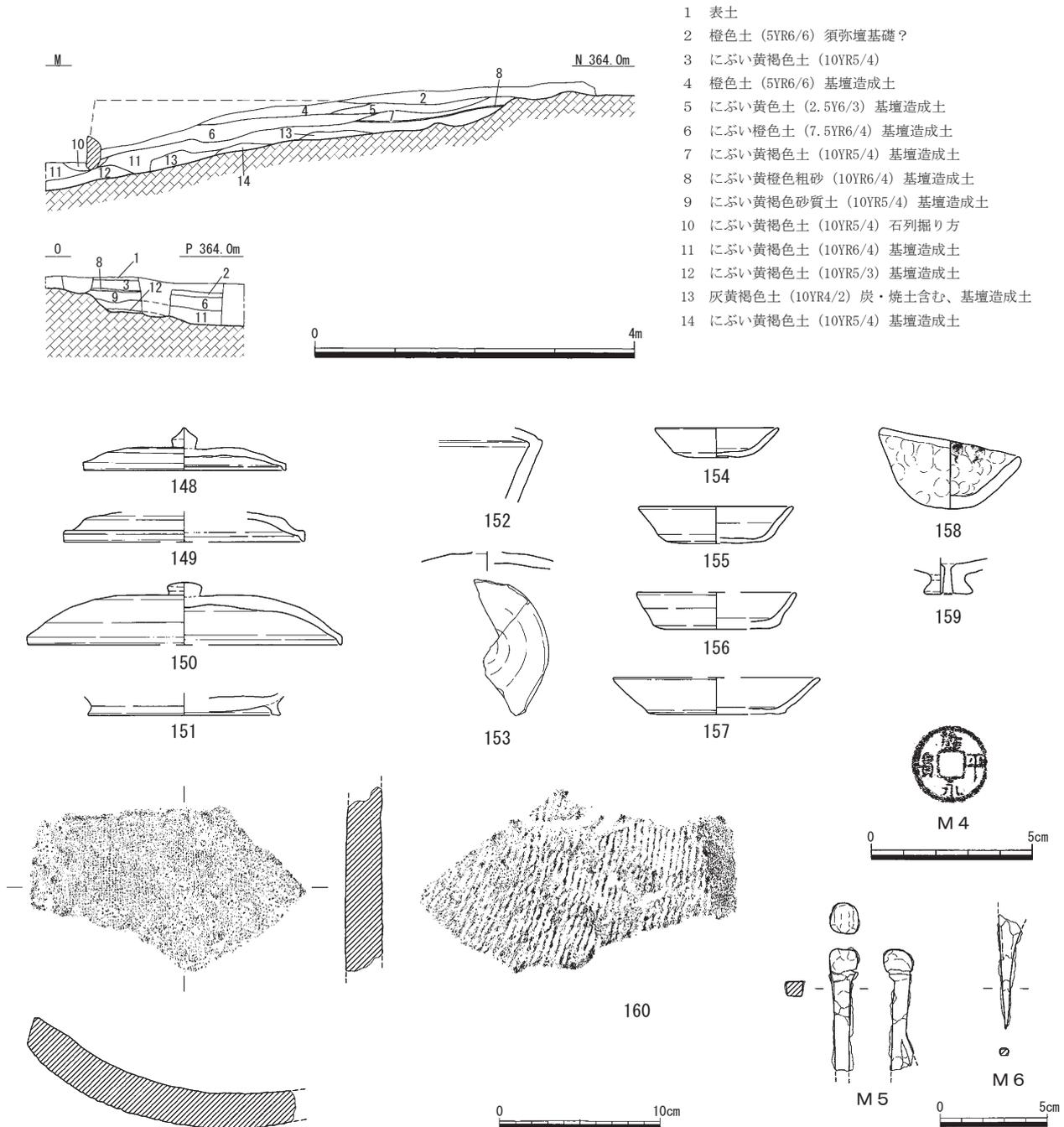
この建物の時期は、出土遺物から判断して9~10世紀に比定される。また、基壇を有し南面する建物の構造や、須弥壇を推定させる方形の高まりが存在すること等から、鬼城山廃城後の平安時代に建立された山岳仏教寺院の堂宇の一つで、小規模な仏堂としての性格が想定される。（石田）



写真5 掘立柱建物1作業風景（南東から）



第61図 掘立柱建物 1 (1/80)



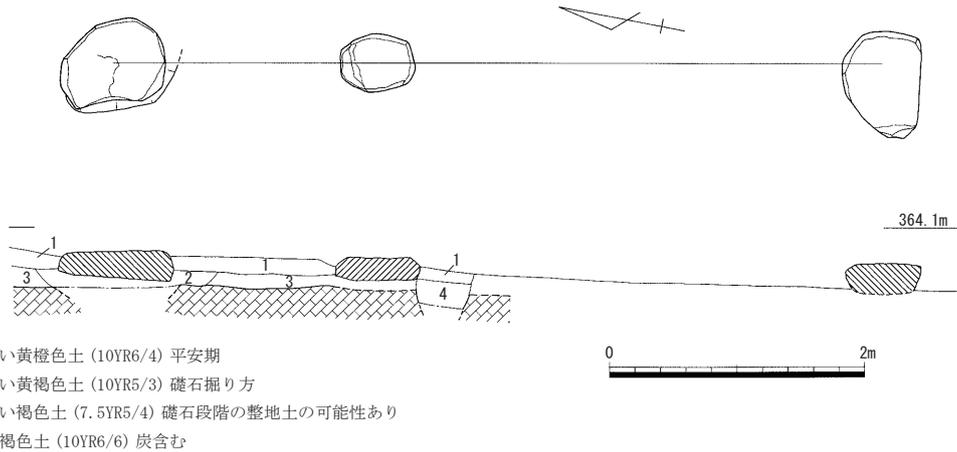
第62図 掘立柱建物1土層断面図 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

礎石列1 (第48・63図、図版12)

II-5区に位置する。南北方向に3石を検出したが、1石を途中で欠いている。礎石は小振りで、柱間の一つは205cm (7尺)を測る。平行して検出した溝3とともに礎石建物の一部になることも考えられる。時期は、平安時代の掘立柱建物1より古く7~8世紀にさかのぼる可能性もある。(石田)

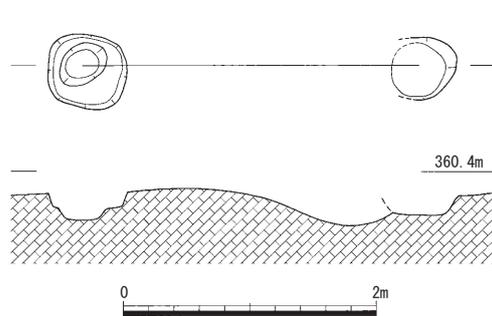
柱穴列1 (第48・64図)

II-6区に位置する。確認調査時に西側の柱穴が見つかり、今回の調査で周囲を精査したところ東側にもう1基の柱穴を検出したため、柱穴列として扱う。西側の柱穴は若干隅丸方形を呈し、底面に柱痕跡が観察できる。柱穴の心々距離は266cmである。出土遺物はなく時期は不明である。(岡本)



- 1 にぶい黄橙色土 (10YR6/4) 平安期
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 礎石掘り方
- 3 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 礎石段階の整地土の可能性あり
- 4 明黄褐色土 (10YR6/6) 炭含む

第63図 礎石列 1 (1/60)



第64図 柱穴列 1 (1/60)

土坑21 (第48・65図、図版12)

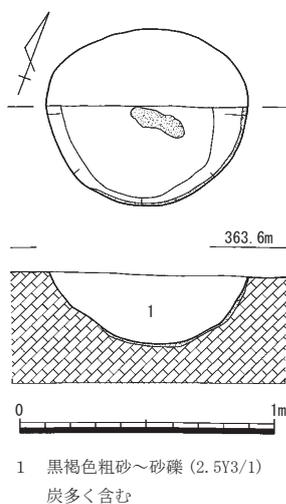
Ⅱ-2区に所在する、礎石建物6の礎石14の南東に接する位置で検出された不整形の土坑である。壁面及び底面の一部が熱を受けて赤変している。出土遺物はないが、平安時代の遺構と考えられる。(岡本)

土坑22 (第48・66図、巻頭図版4)

礎石建物6の礎石13の南に接する被熱土坑である。建物の廃絶後に、礎石の脇を掘りくぼめてその内部で火を使っただけでなく礎石の側面も被熱で赤変している。出土遺物はないが、他の被熱土坑と同様に平安時代の遺構と考えられる。(岡本)

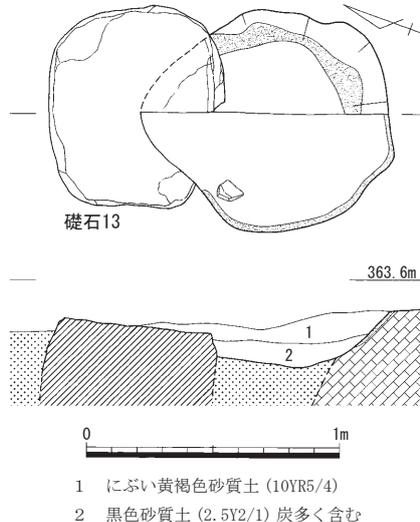
土坑23・24 (第48・67図)

礎石建物6の礎石10・11間に南北に並んで位置する土坑で、検出当初は焼土面として扱っていた。北側の土坑23は長径124cm、南側の土坑24は長径73cmでいずれも不整な円形である。両土坑とも、建物廃絶後の堆積層を切り込んでおり、位置関係からみても同時に機能していた可能性が高い。検出層位から判断して時期は平安時代であろう。(岡本)



第65図 土坑21 (1/30)

- 1 黒褐色粗砂～砂礫 (2.5Y3/1) 炭多く含む



第66図 土坑22 (1/30)

- 1 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
- 2 黒色砂質土 (2.5Y2/1) 炭多く含む

礎石建物6の東側に位置し、雨仕舞い溝の埋土を切り込んでいる隅丸方形の土坑である。被熱土坑ではな

いが、埋土に大量の木炭を含み、火を使う作業に伴う遺構であることは確かである。遺物はないが、雨仕舞い溝との関係からみて建物より新しく、他の被熱土坑と同じく平安時代のもと考えられる。(岡本)
土坑26 (第48・69図、図版12)

II-3区北端で検出した被熱土坑である。形状は不定形で、削平された土坑の底部付近が残存したものかもしれない。規模は、長さ157cm、幅142cm、深さ12cmを測る。底面と壁面に柱穴状のくぼみが見られる。底面の一部に被熱痕跡が認められた。遺物は出土していない。(岡本)

土坑27 (第48・70図、図版12)

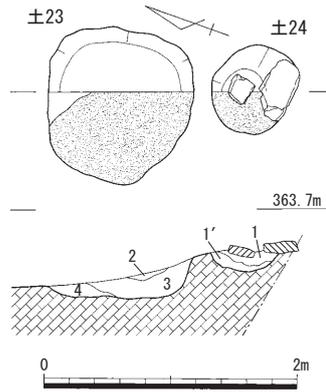
II-3区南西隅に位置する楕円形の被熱土坑である。長さ166cm、幅110cm、深さは19cmを測る。中央部にサブトレンチを入れたのみで、大部分は未掘である。壁面上端に沿って数か所の被熱痕が認められるが、トレンチの範囲内では底面には被熱がみられなかった。遺物は出土していない。(岡本)

土坑28 (第48・71図、図版12)

土坑27の北側に隣接する被熱土坑である。形状は不整な円形で、長さ85cm、幅77cmを測り、深さは6cmと浅く断面形は皿状を呈する。底面と壁面の一部に、被熱による赤変が認められた。遺物は出土していない。II-3区にあるこれら3基の被熱土坑は、いずれも平安時代のものであろう。(岡本)

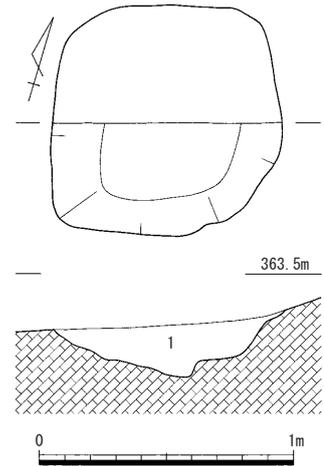
土坑29 (第48・72図)

II-4区の北西隅に位置する、不整な楕円形と思われる土坑である。検出部分での長さ113cm、幅56cm、深さ10cmを測る。遺物は出土していないが、埋土の特徴等から



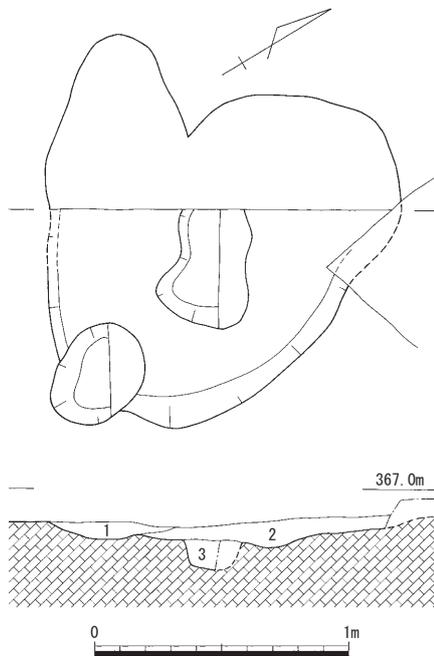
- 1 明黄褐色細砂 (10YR7/6)
- 1' 明赤褐色細～粗砂 (2.5YR5/8) 炭含む
- 2 にぶい黄橙色細～粗砂 (10YR6/4)
- 3 明赤褐色細～粗砂 (5YR5/6) 焼土多く含む
- 4 にぶい黄橙色土 (10YR5/4) 炭多く含む

第67図 土坑23・24 (1/60)



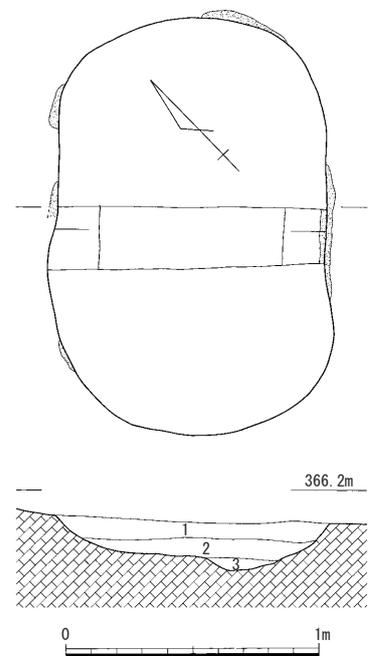
- 1 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1) 炭多く含む

第68図 土坑25 (1/30)



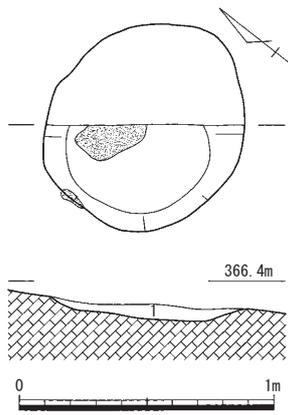
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 炭多く含む
- 2 にぶい褐色土 (7.5YR5/4)
- 3 明赤褐色土 (5YR5/6) 焼土含む

第69図 土坑26 (1/30)



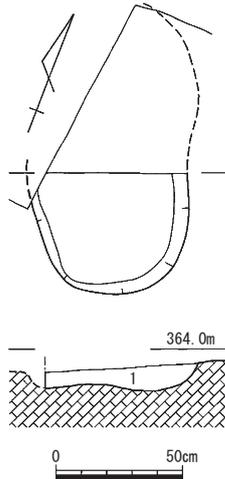
- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 炭少し含む
- 2 黒色砂質土 (10YR2/1) 炭多く含む
- 3 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 炭多く含む

第70図 土坑27 (1/30)



1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)
炭少し含む

第71図 土坑28 (1/30)



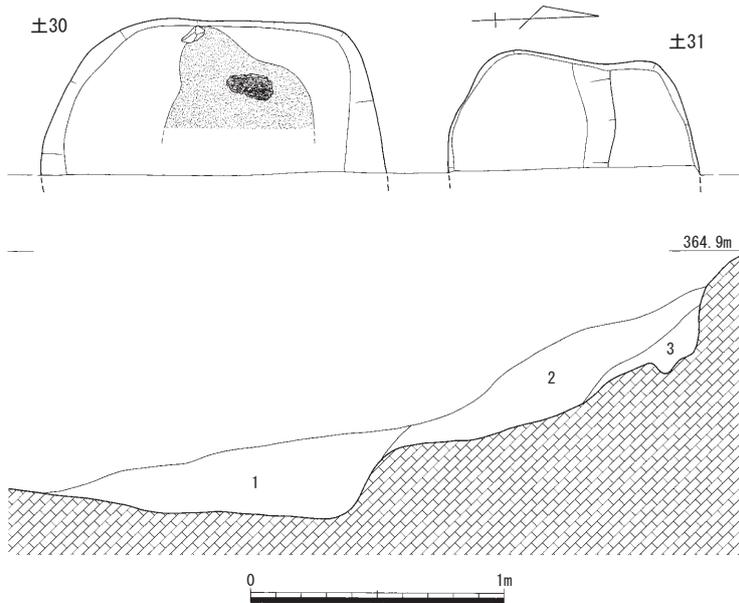
1 灰褐色細砂～粗砂 (7.5YR4/2)
炭多く含む

第72図 土坑29 (1/30)

礎石建物5の内部に位置する円形の土坑で、長径97cm、短径90cm、深さ30cmを測る。埋土に焼土や木炭を含み、底面に被熱痕がみられた。遺物はないが、礎石建物5の平安期造成土を切り込むことから、平安時代の遺構とみられる。(岡本)

土坑33 (第48図、第75図)

II-5区、掘立柱建物1の南西約2mに位置する。北半部だけの検出であるが、推定で長辺4m以上、短辺約2.8m、深さは約16cmを測る大形の土坑である。埋土には炭や焼土を多く含み、土師器椀161、土師器杯162・163が出土した。土坑の埋没した時期は10世紀以後と考えられる。(石田)



1 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 炭多く含む
2 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4)
3 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3) 炭多く含む

第73図 土坑30・31 (1/30)

礎石建物5よりも新しく、平安時代の土坑と考えられる。(岡本)

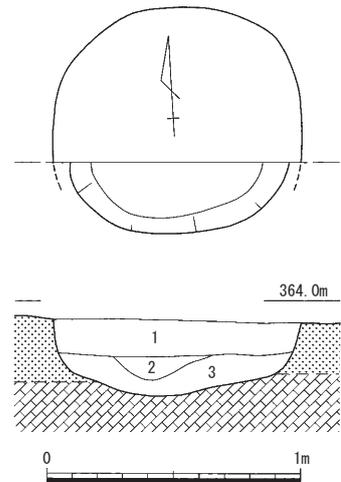
土坑30・31 (第48・73図、図版12)

礎石建物5の背後に南北に並んで位置する2基の土坑で、土坑30のほうが新しい。いずれも西半部だけの検出にとどまり、全体の規模や形状は不明である。いずれも建物北側の雨仕舞い溝の埋没後に掘削されており、建物とは無関係の遺構である。両土坑とも内部に被熱痕がみられ、埋土に木炭を含む。土坑30から土器小片が出土し、時期は平安時代と考えられる。(岡本)

土坑32 (第48・74図)

土坑34 (第48・76図、図版35)

礎石建物5の礎石10の東側に接して検出された不定形の

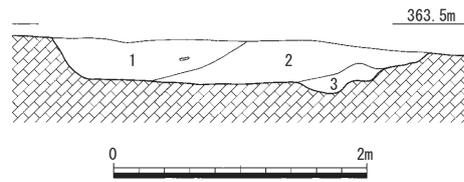


1 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
2 にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/4) 焼土含む
3 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 炭多く含む

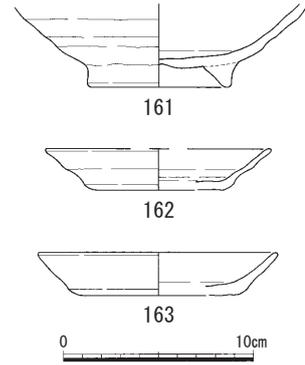
第74図 土坑32 (1/30)

土坑である。隣接する礎石10は、建物廃絶後に本来の位置から若干南側へずれた場所へ埋め直されており、この土坑もそのさいに掘られた穴の一部かもしれない。出土した土師器の碗164により、土坑の時期は10世紀と考えられる。

(岡本)



- 1 にぶい黄橙色土 (10YR7/3) 炭含む
- 2 灰黄褐色土 (10YR6/2) 炭・焼土多く含む
- 3 明黄褐色土 (10YR6/6) 炭含む

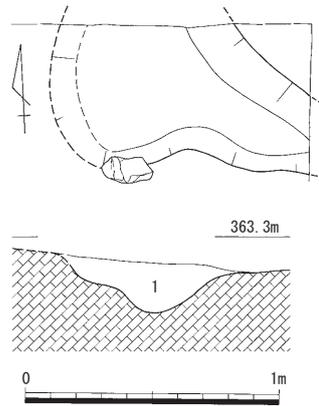


第75図 土坑33 (1/60)・出土遺物 (1/4)

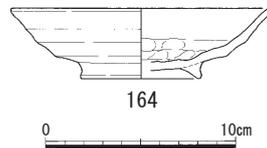
土坑35 (第48・77図)

II-6区南東部で検出した被熱土坑である。ここでは土坑として掲載しているが、長径33cm、短径31cmと小さく、規模的には柱穴に近いものである。埋土下層に木炭や焼土を多く含むほか、底面が全体的に被熱により赤く変色している。出土遺物はないが、他の被熱土坑と同様に平安時代の遺構と考えられる。

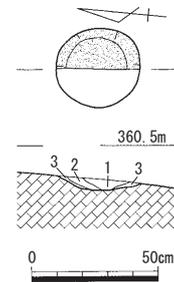
(岡本)



- 1 にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/3) 炭・焼土含む



第76図 土坑34 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 炭含む
- 2 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)
- 3 明褐色砂質土 (7.5YR5/6) 焼土含む

第77図 土坑35 (1/30)

土坑36 (第48・78図、図版12)

II-9区、礎石建物2の北西端で検出した隅丸方形を呈する土坑である。建物廃絶後、礎石が堆積土に被覆されてから掘削されており、礎石建物より新しい。一部の壁面に被熱痕跡が認められ、埋土中には炭や焼土を含む。遺物はなかったが、他の被熱土坑と同様に平安時代の遺構と考えられる。

(石田)

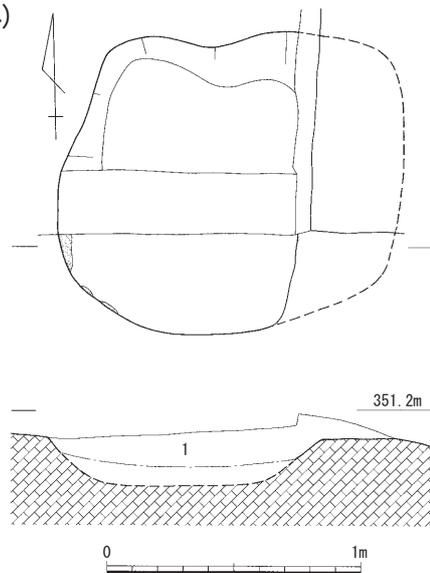
土坑37 (第48・79図、巻頭図版4)

II-9区、礎石建物2南東端の雨仕舞い溝を切るかたちで検出した隅丸長方形の土坑である。長辺140cm、短辺75cm、深さ38cmを測る。粘土を貼り付けた壁体を持ち、床から壁面は赤色から橙色に強く被熱し、一部は灰色に還元するなど、他の被熱土坑の様相とは異なる。規模の大きさや強い被熱の状況、還元部の存在から、木炭を焼成した土坑と想定され、時期は平安時代に属すると考えられる。

(石田)

土坑38 (第48・80図、図版12)

II-12区において礎石建物7の内側で検出した土坑であ



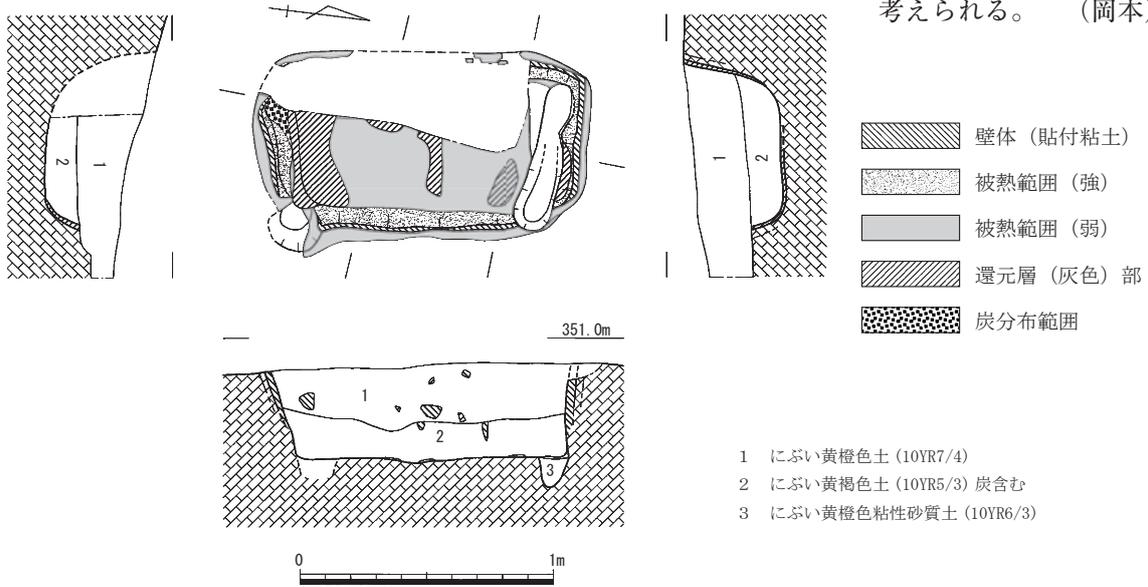
- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭・焼土含む

第78図 土坑36 (1/30)

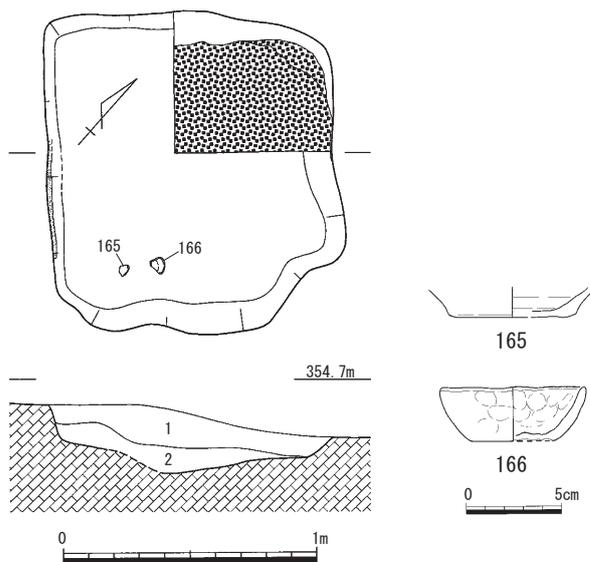
り、建物よりも新しい。形状は不整な隅丸方形で、最大径128cm、深さ27cmを測る。南側の壁面の一部に被熱痕跡が見られたほか、埋土上層に多量の木炭を含んでいた。埋土中から土師器165・166が出土しており、土坑の時期は平安時代と考えられる。 (岡本)

土坑39 (第48・81図)

礎石建物7の廃絶後、礎石9に接して作られた土坑である。形状は長径147cmの不整な楕円形であるが、検出状況からみると大小2基の土坑が重複しているのかもしれない。埋土中には木炭や礫を含み、壁面の一部に被熱痕跡が見られる。埋土中から土器小片が少量出土した。この土坑は検出層位等からみて平安時代のものと考えられる。 (岡本)

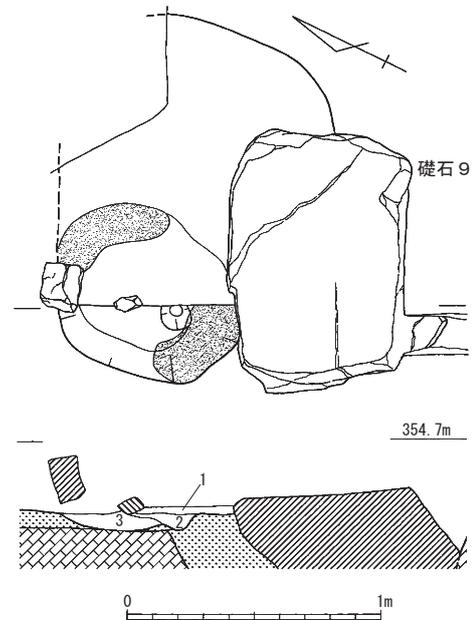


第79図 土坑37 (1/30)



- 1 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) 炭多く含む
- 2 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)

第80図 土坑38 (1/30)・出土遺物 (1/4)

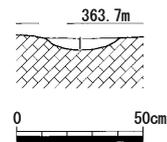


- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 炭多く含む
- 2 赤褐色土 (2.5YR4/6)
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)

第81図 土坑39 (1/30)

溝3 (第48・82図)

II-5区で南北方向に約7mにわたって検出した溝で、北端で東に屈曲して続いている。幅は約30cm、上部が削平されているため検出面からの深さは4cmと浅いが、地山を掘り込んでいる。礎石列1に平行しており、これに伴って掘削された溝の一部とも考えられる。出土遺物はなかったが、平安期の掘立柱建物1の柱穴に切られており、時期は平安時代以前で、7～8世紀代の山城期に属する可能性もある。(石田)



1 褐色砂質土 (10YR4/4)

第82図 溝3 (1/30)

遺構に伴わない遺物 (第83～90図、巻頭図版6、図版35・36・37・40、写真6)

II区においては、各調査区の包含層などから比較的まとまった量の遺物が出土している。ここでは、現在の遊歩道が通る東西方向の尾根筋を境界として、II区全体を北側と南側に二分して掲載する。

第83～86図には尾根の北側にあたるII-1・2・7～9・12区の出土遺物を掲載した。うち最多を占めるのはII-2区の遺物であり、他の調査区からの遺物は少ない。

167～170は須恵器で、杯蓋168は8世紀前半から半ばの時期であろう。170は高杯脚部である。171～186は土師器である。171～176は高台付椀で、うち174・175は黒色土器である。177～179は小皿、180～184は杯と考えられる。180の口縁部にはわずかに煤の付着が認められる。これらの時期はおおむね10世紀代を中心とするものと考えられる。185・186は土師器甕である。

187はII-2区から出土した瓦塔で、礎石建物6廃絶後の堆積土から出土した3点の破片が接合した。出土したのは屋蓋の部分で、屋根上に丸瓦と平瓦が葺かれた様子が表現されている。厚さは中心部側で最大6.9cmと重厚な作りであり、また全体に占める屋根の割合がかなり低い点でも、一般的な瓦塔の形態とは異なると思われる。上面の中央部は未調整のままであるが、ここは軸部によって隠される部分であろう。中央に正方形の穴が貫通するほか、周囲3か所に長方形の貫通しない穴があり、これらは軸部と組み合わせるための柄穴であろう。下面は残存状況が悪いが、垂木などの表現は認められず、製作時の痕跡が残るなど粗雑な印象もある。188～190は瓦塔の小片と考えられるもので、同じくII-2区出土である。188・189は187と同一個体の可能性が高い。平成11年度調査時にT123から出土したものである。

191～199は丸瓦で、うち191～195は玉縁部である。玉縁部は縦方向のヘラケズリで仕上げられる。凸面は工具によるナデないしヘラケズリ、内面には糸切り痕と布目が残る。198・199は、凸面に工具によるヨコハケ状の痕跡が顕著に残る。200・201は平瓦で、どちらも凹面と側面とは鋭角をなし、凸面に縄目タタキ、凹面に糸切り痕と布目を残す。色調は灰黄色を呈し焼成良好である。

鉄器2点はいずれもII-2区出土で、M7は釘、M8は不明だが鉄滓の破片かもしれない。

第87～90図には、尾根よりも南側にあたるII-3～6区の出土遺物を掲載した。そのほとんどは礎石建物5と掘立柱建物1が位置するII-4・5区からの出土である。

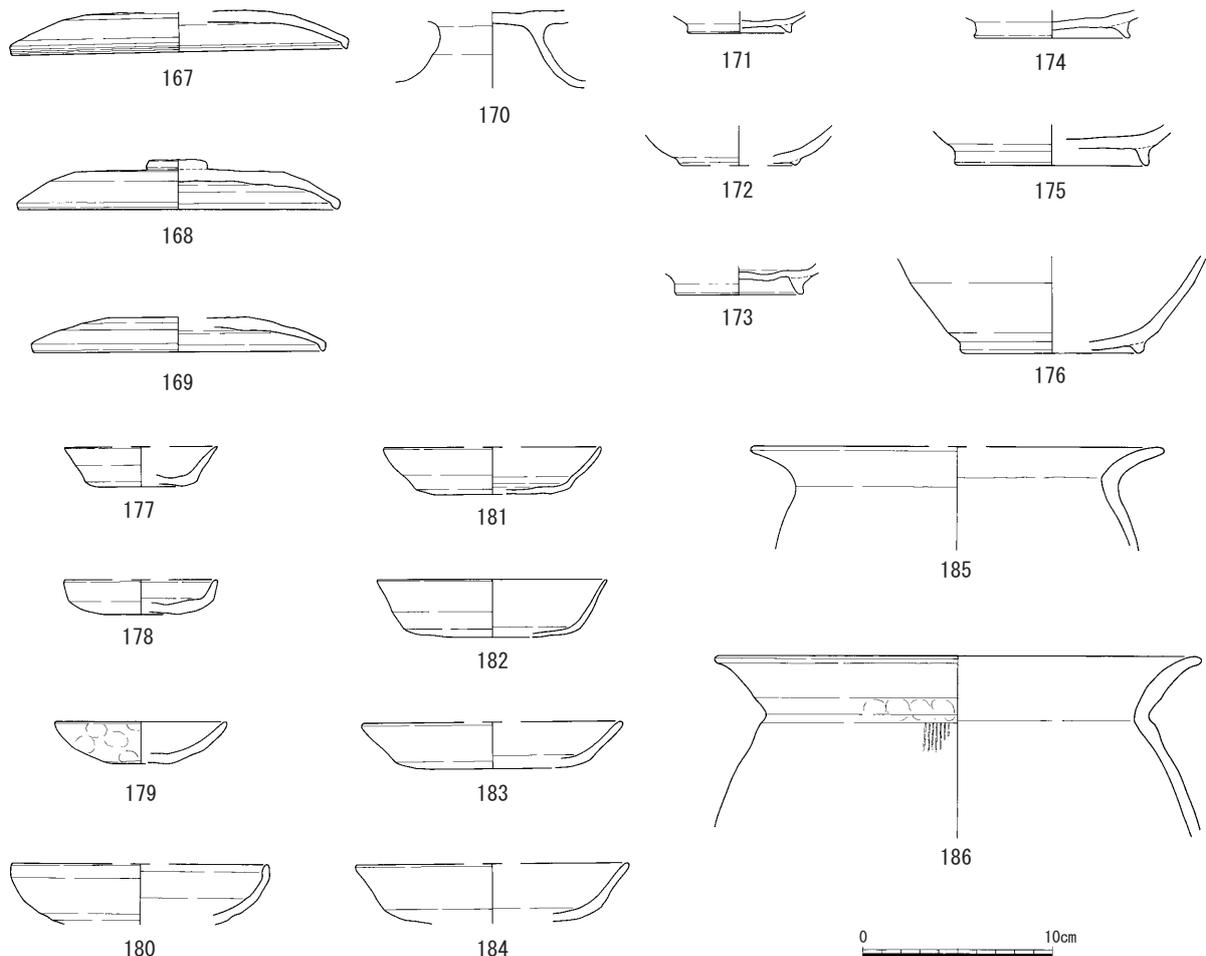
202～224は須恵器である。つまみを持たない蓋204は奈良時代末以降の可能性がある。207・208は杯蓋を再利用した転用硯で、内面は使用により平滑化してにぶい光沢を有し、墨の痕跡がかすかに残存している。なお204も転用硯である。209～215は杯である。高台を有する209は8世紀後半、210は8世紀前半と考えられる。211～215は高台を持たない杯である。216の水瓶は礎石建物の南側斜面からの出土で、平安時代の9～10世紀代に属すると思われる。その他に、壺217・218・220・221・223、甕224、平瓶と思われる219がみられる。225～267は土師器である。225～236は椀で、

底部に高台を有するものである。231・235は黒色土器と思われる。237～243は小形の椀、皿、ないし杯と思われるもので、明確な区分は難しい。244～254は杯と考えられる。244の底部にはいわゆる「底部押圧技法」が明瞭に認められる。246の底部はヘラ切り後軽い押圧が認められる。237・239・240・245・249・253には、内面の口縁部付近に煤が付着しており、照明に使用されたことが明らかである。255～260は皿で、257の内面及び259・260の内外面には丹塗りが残る。261～265は甕、266・267は把手の破片である。これらの土器器の時期は、おおむね平安時代の9・10世紀代が中心であると考えられる。

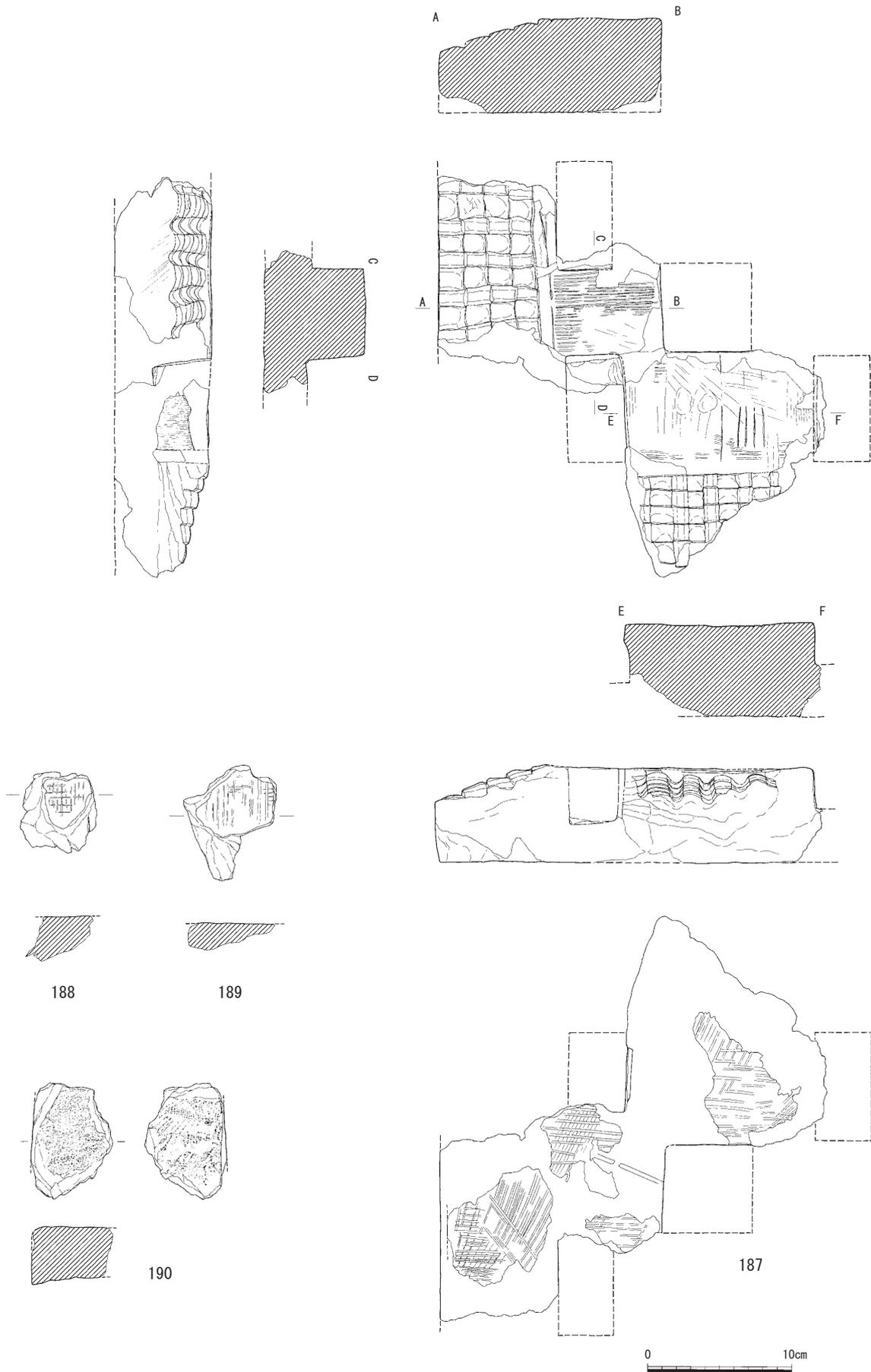
268はⅡ-5区の表土から出土した須恵質の瓦塔片である。Ⅱ-2区出土の187よりも個々の瓦が大きく表現され立体感に富んでいる。図の右端にあたる1列の丸瓦列は隅降棟を表現したものである。この瓦塔は、確認調査時に礎石建物1の東側で表面採集された瓦塔(県報告203-60)と特徴が類似し、同一個体の可能性が高い(写真6)。269・270もⅡ-5区出土で、同じく瓦塔の小片と考えられるが268とは別個体であり、むしろⅡ-2区出土の187と特徴が類似している。

271は丸瓦、272～275は平瓦で、うち272・274はそれぞれ掘立柱建物1の基壇の前面及び上面から出土した。

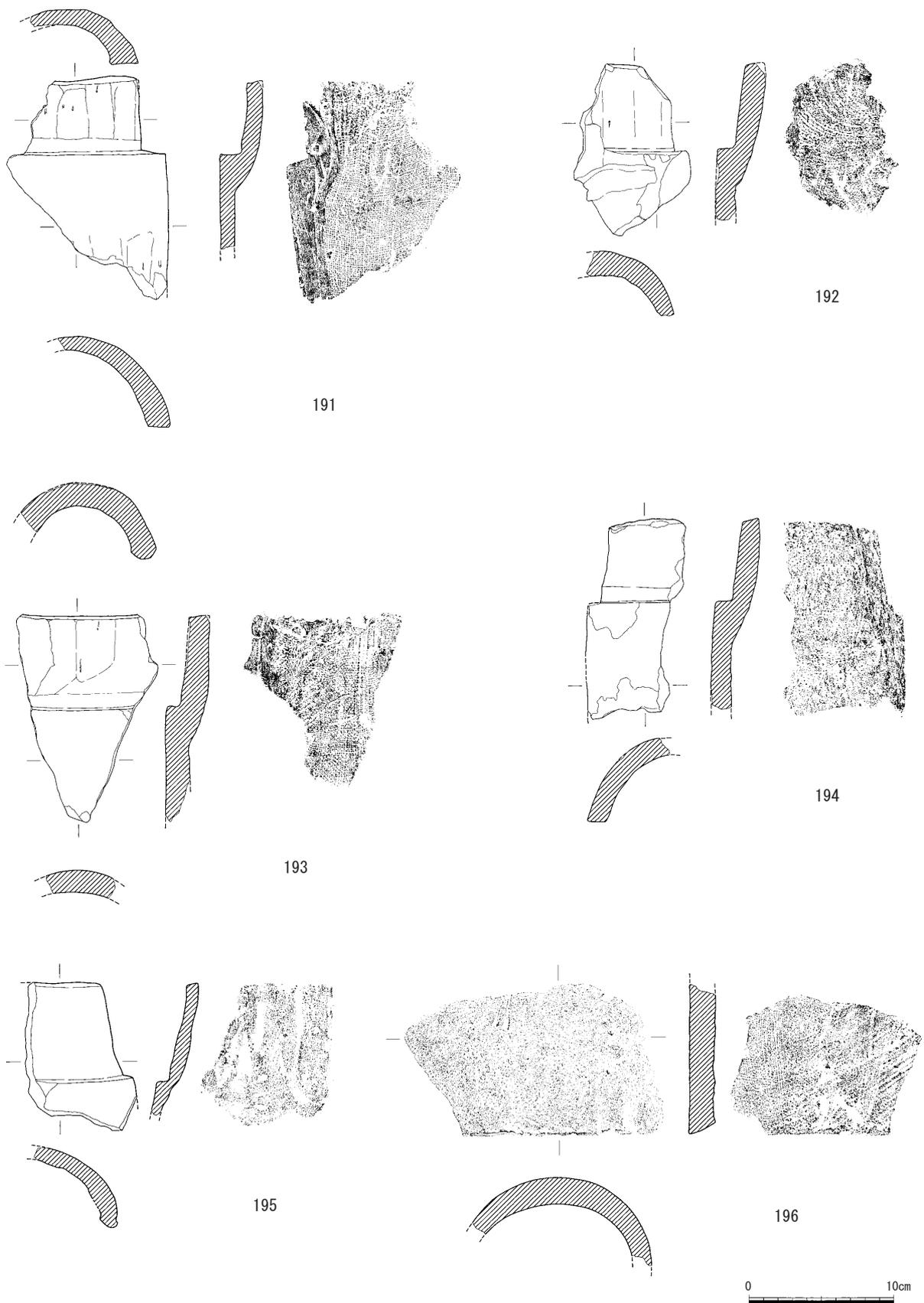
M9～M11はいずれもⅡ-4・5区から出土した鉄器で、M9は釘、M10は確証はないが山形の火打金と思われる。M11は鉤状を呈する用途不明の製品で、掘立柱建物1に伴う石列の前面に堆積した土の中から出土した。



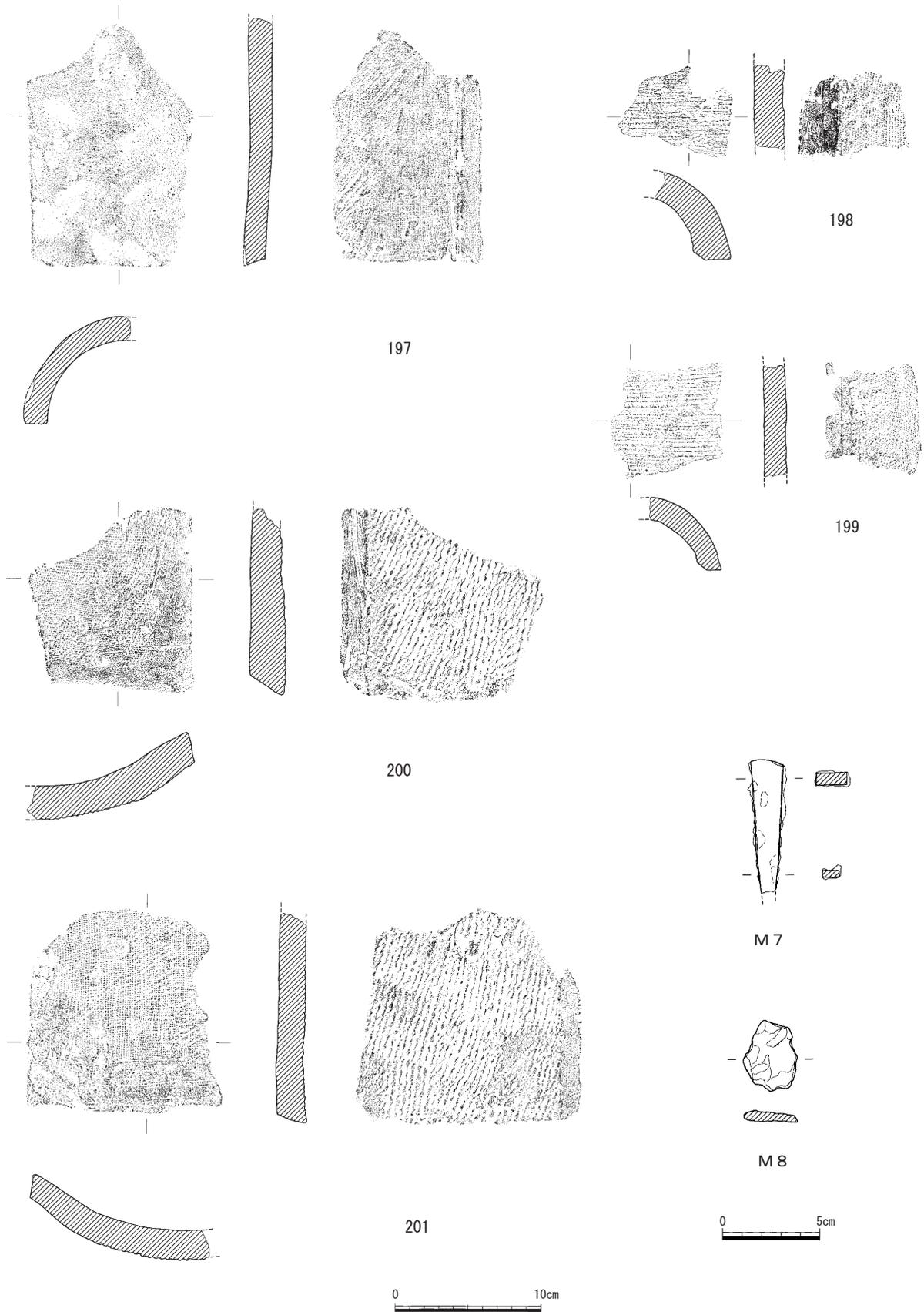
第83図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



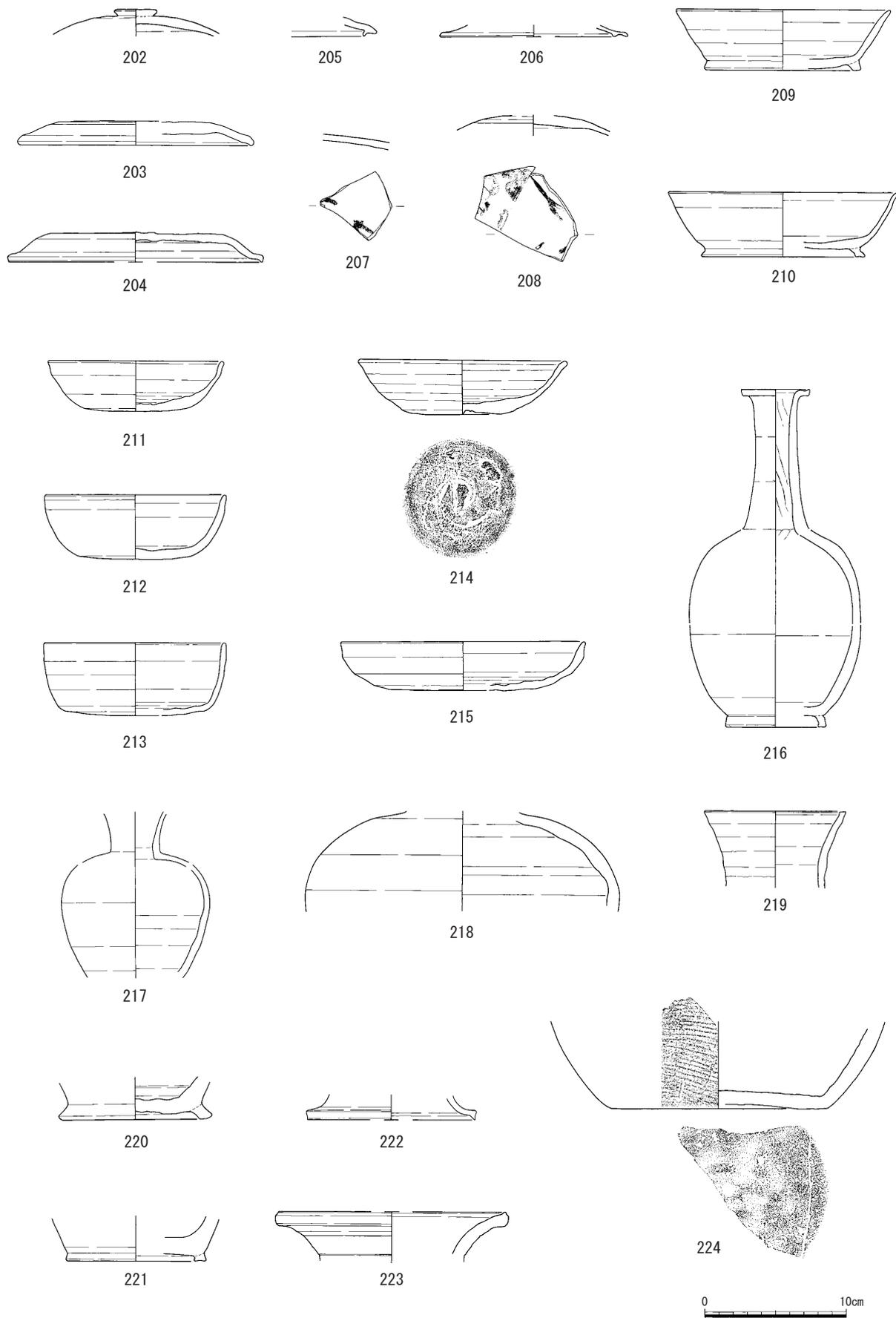
第84図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



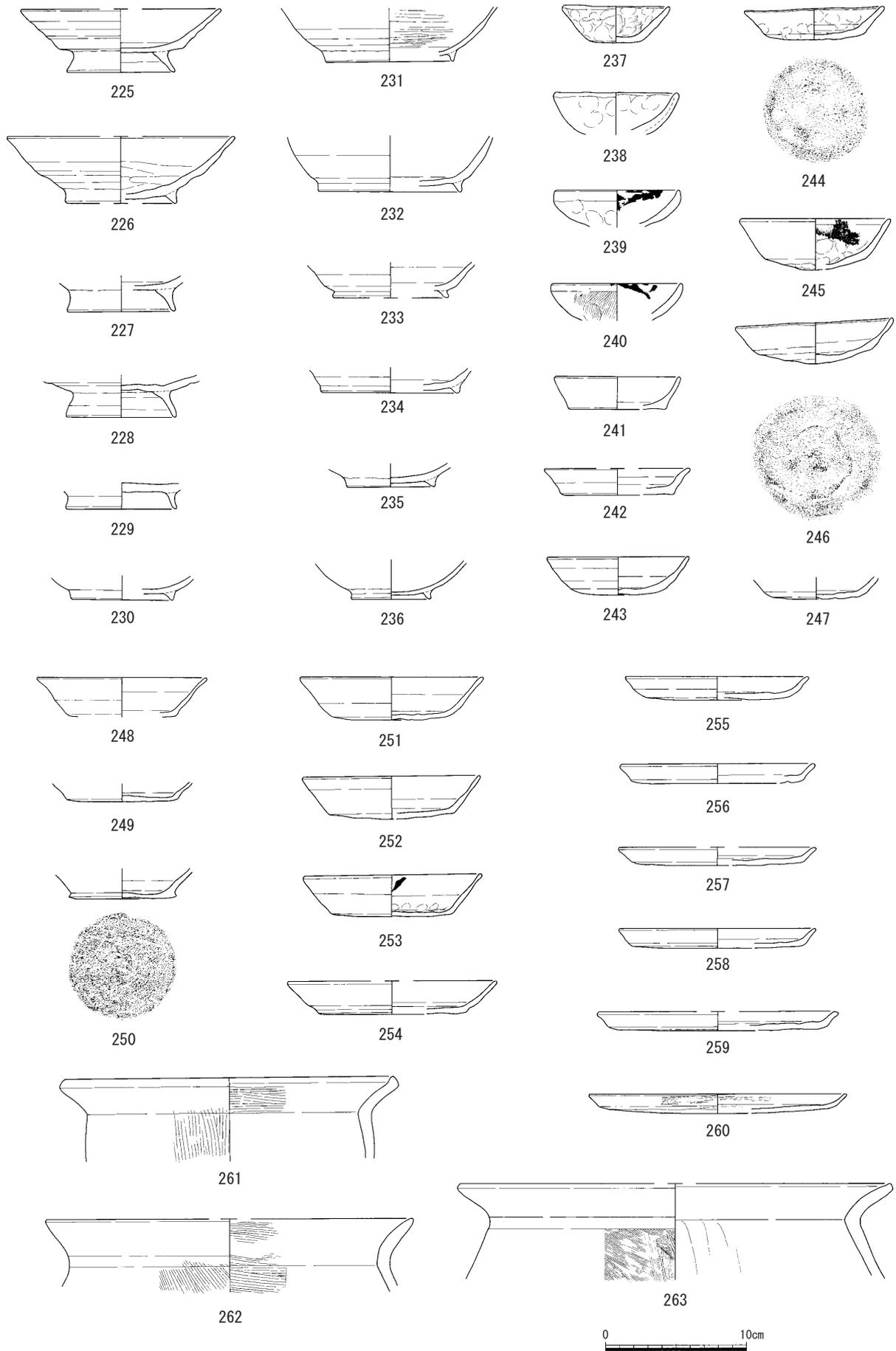
第85図 遺構に伴わない遺物③ (1/4)



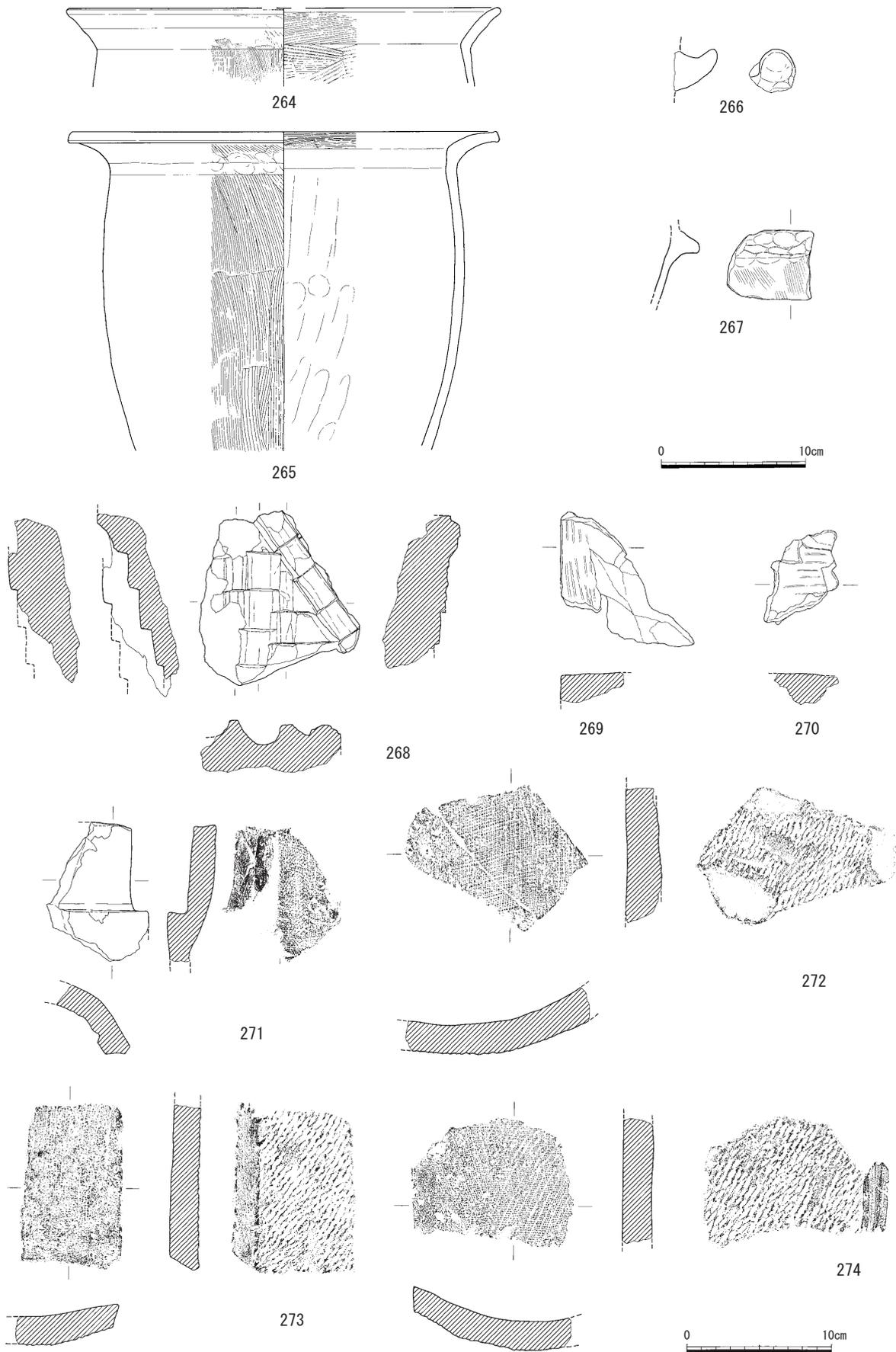
第86図 遺構に伴わない遺物④ (1/4・1/3)



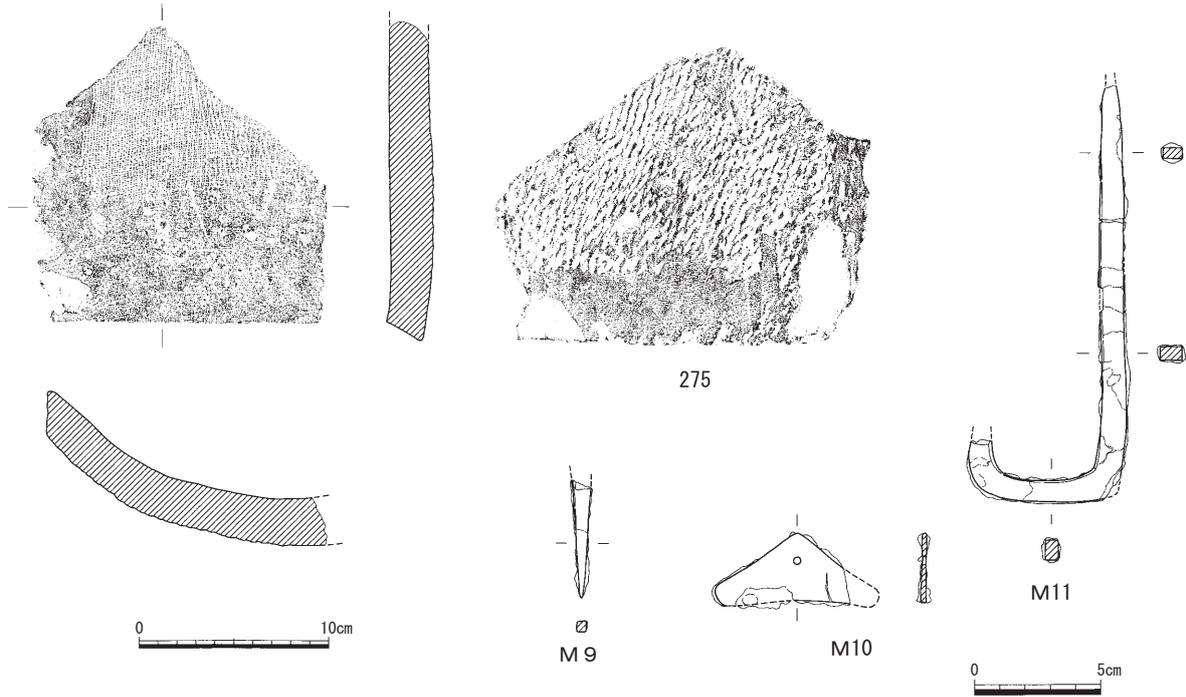
第87図 遺構に伴わない遺物⑤ (1/4)



第88図 遺構に伴わない遺物⑥ (1/4)



第89図 遺構に伴わない遺物⑦ (1/4)



第90図 遺構に伴わない遺物⑧ (1/4・1/3)

以上の包含層等出土遺物には、一部には鬼城山が古代山城として機能したと考えられる7世紀末から8世紀初頭のものも含まれるが、全体的にはそれよりも時期の降る奈良時代から平安時代のものが多く見られる。その中でも10世紀を中心とする時期のものが多く、この時期に鬼城山で何らかの活動が活発化したものと推測できる。特に、建物が所在する南向き緩斜面のⅡ-4・5区では平安期の掘立柱建物1が検出されていることに加え、出土遺物も多く、中には仏具としての性格も想定される須恵器の水甕、屋内で灯明皿として使用されたと考えられる土師器なども含まれている。瓦については、実際にどの建物にどの程度使用されていたのかは明らかでないが、鬼城山のような山岳においては寺院建築への使用と考えるのが妥当である。

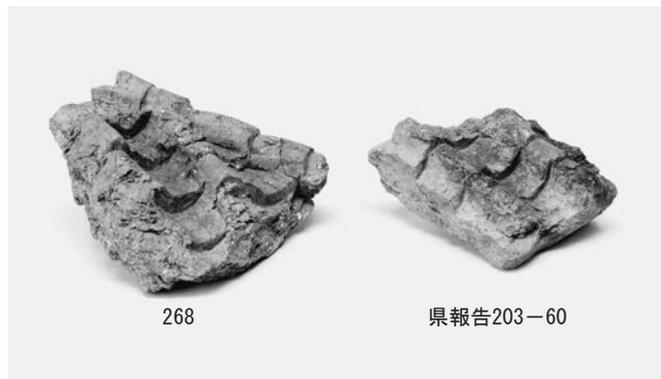


写真6 II区出土瓦塔

以上のことから、これら平安期の遺物は、古代山城の廃絶後に当地に建立された仏教寺院の建物と、そこで行われた宗教活動に由来するものと考えられる。なお瓦塔については、時期的な問題も含めて第4章第6節で詳述する。(岡本)

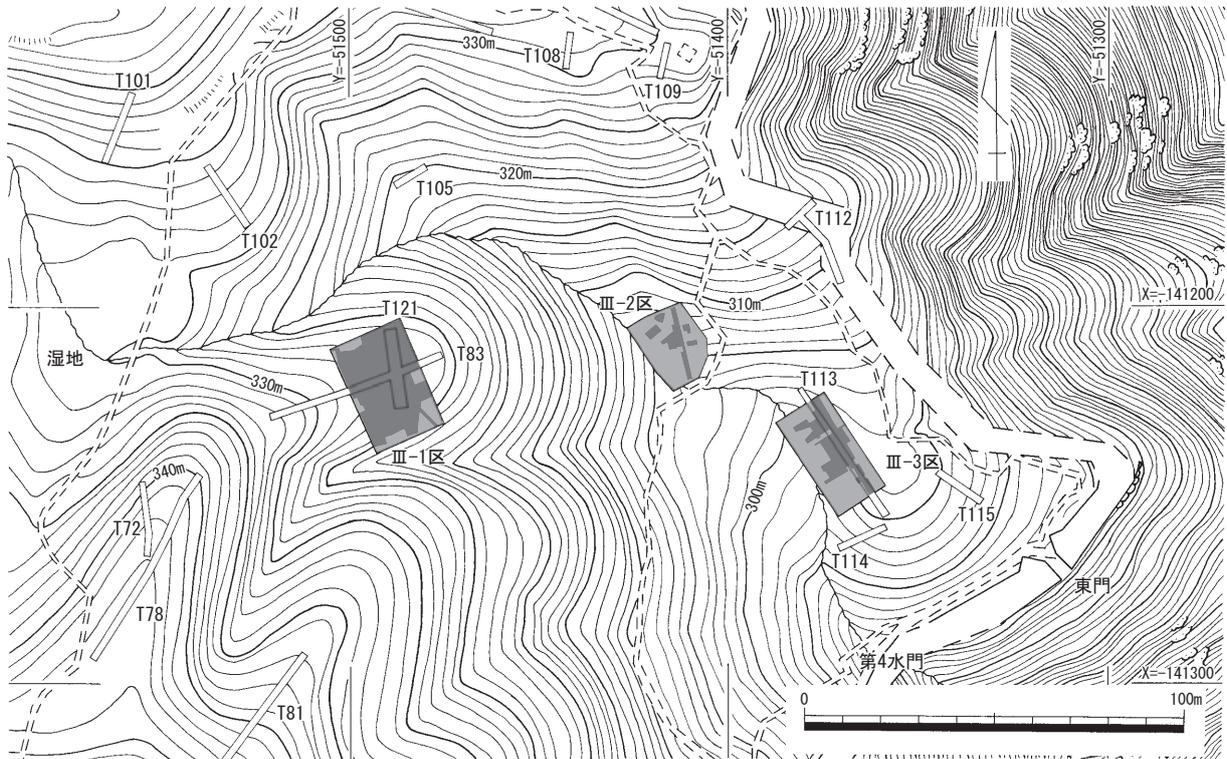
第3節 Ⅲ区の調査

1 調査区の概要

Ⅲ区は第4水門に注ぐ谷川縁辺部を中心とした範囲に設定した。以前から鉄滓等が採取されていたが（市報告19）、平成11年度の確認調査では、鍛冶炉こそ検出されなかったものの、炉底滓や鞆羽口が出土し、この一帯で鍛冶が行われていたことが確実となっていた。この鍛冶関連遺構の検出を目的として3つの調査区（Ⅲ-1～3区）を設定した。

調査の結果、いずれの調査区でも鍛冶作業を行っていた痕跡が確認された。Ⅲ-1区では、鍛冶炉が1基検出され、周辺から鉄滓、鍛造剥片、粒状滓、鉄器等が出土した。Ⅲ-2区でも鍛冶炉2基が検出され、周辺で鍛冶関連遺物が見つかった。調査区西半部では埋没した旧流路が確認され、多量の鉄滓や鞆羽口が出土することから、鍛冶に伴う廃棄物を谷川に捨てていた状況がうかがえた。Ⅲ-3区では柱穴列を伴う長大な段状遺構が検出され、鍛冶炉が並んで見つかったことから、鍛冶工場の存在が明らかとなった。検出された鍛冶炉は重複あるいは近接しているものがあるが、計9基を数えた。ここでは複数の鍛冶炉で鬼城山築城に必要な道具（鉄器）の製作や修繕を行っていたと考えられる。

これらの鍛冶遺構は同じ調査区で出土した須恵器から7世紀後半期に属すると考えられ、鬼城山築城工事に伴い稼働したことが推測される。古代山城に伴う鍛冶関連資料については、第4章第3節の表4にまとめているが、ここで報告する鬼城山の鍛冶工場は全国初の調査事例であった。ここで報告した鍛冶関連遺物については金属学的な分析を行い、付載で報告している。（金田）



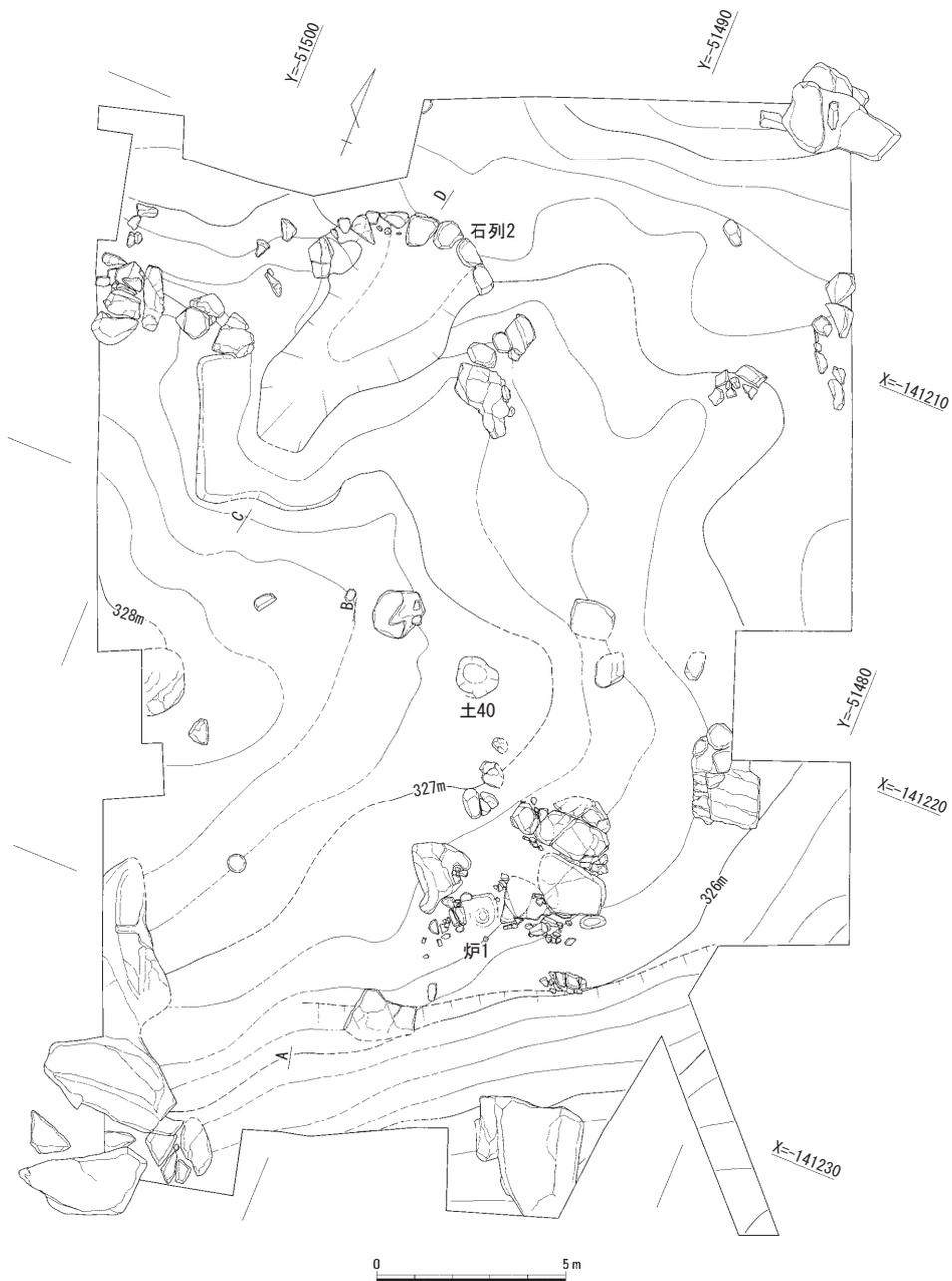
第91図 Ⅲ区調査区位置図 (1/2,000)

2 Ⅲ-1区

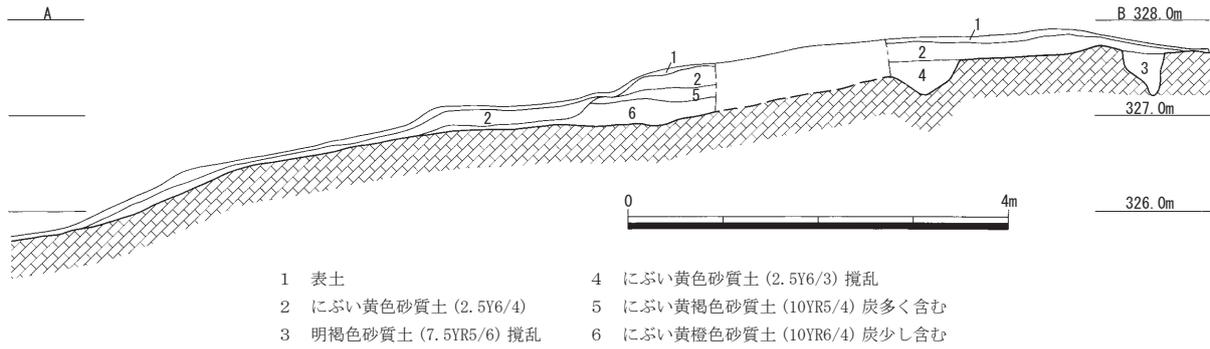
概要（第92・93図、図版15）

Ⅲ-1区を設定した地点は、第4水門水系の湿地の南側から東にのびる尾根筋上で、平成11年度の確認調査時にT83・121の2本のトレンチが設定され、鉄滓など鍛冶関連遺物が出土していた。

今回の調査区は尾根筋を中央とし、北側と南側の斜面を広く取り込んで設定した。遺構密度は低かったが、南斜面上で鍛冶炉を1基検出したほか、周辺からも鉄滓・鍛造剥片等が出土し、この場所で鍛冶作業が行われたことが確実となった。他には土坑・柱穴が各1基と、小規模な石列を検出した。石列は古代山城に伴うものではなく、近代以降の構築物の可能性が高い。（岡本）



第92図 Ⅲ-1区遺構配置図 (1/200)



第93図 III-1区土層断面図 (1/80)

鍛冶炉 1 (第92・94・95図、図版15)

尾根の頂部よりやや南に下がった緩傾斜地で検出された。自然の露岩に囲まれた部分に一边1m弱の掘り込みを行って平坦面をつくり、その中央に径約30cmの被熱面が認められた。強い被熱ではないが、周辺から鉄滓や鍛造剥片が出土することから、鍛冶炉あるいはその痕跡と判断した。他の鍛冶炉と異なり、硬く焼け締まった面がないことから、炉床自体は流失している可能性がある。

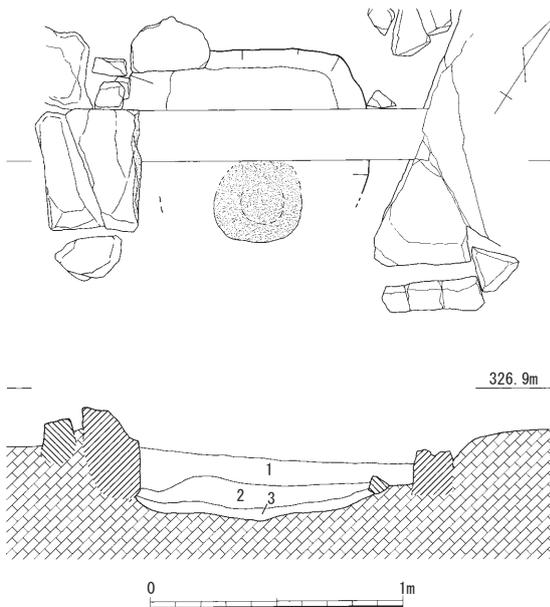
鍛造剥片は、鍛冶炉の南側に集中している。微細な遺物でそのすべてを検出できたわけではなく、斜面地のため流れて移動している可能性もあるが、あるいは金床の位置(方向)を示すかもしれない。

鍛冶炉1の直近から出土した須恵器はないが、周辺での出土状況から判断して7世紀後半代の遺構と考えられる。(尾上)

鍛冶関連遺物 (第96・97図、図版40)

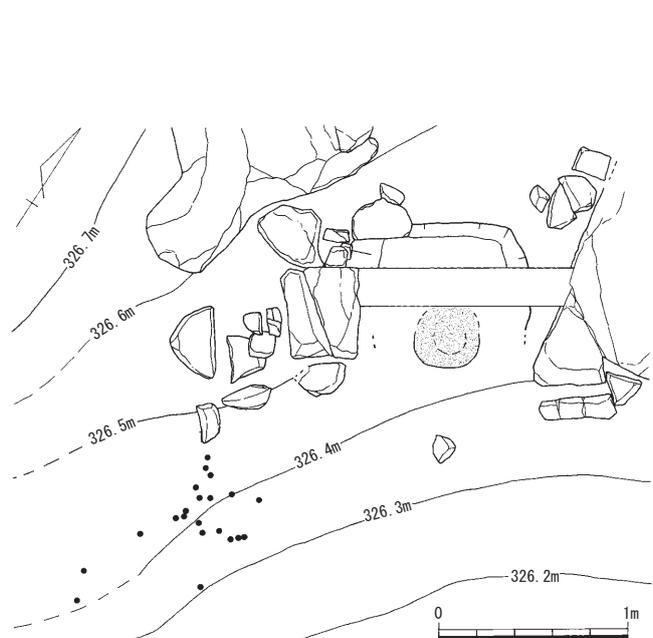
鍛冶に関連する遺物として、鉄滓、鍛造剥片、粒状滓、鞆羽口、鉄器などがある。

鉄滓M12～M38は、おおむね10cm大以下の小形品が多く、後述のIII-2区、III-3区と比べて小



- 1 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 炭少し含む
- 2 褐灰色砂質土 (10YR4/1) 炭多く含む、焼土粒少し含む
- 3 にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/3) 炭少し含む

第94図 鍛冶炉 1 (1/30)

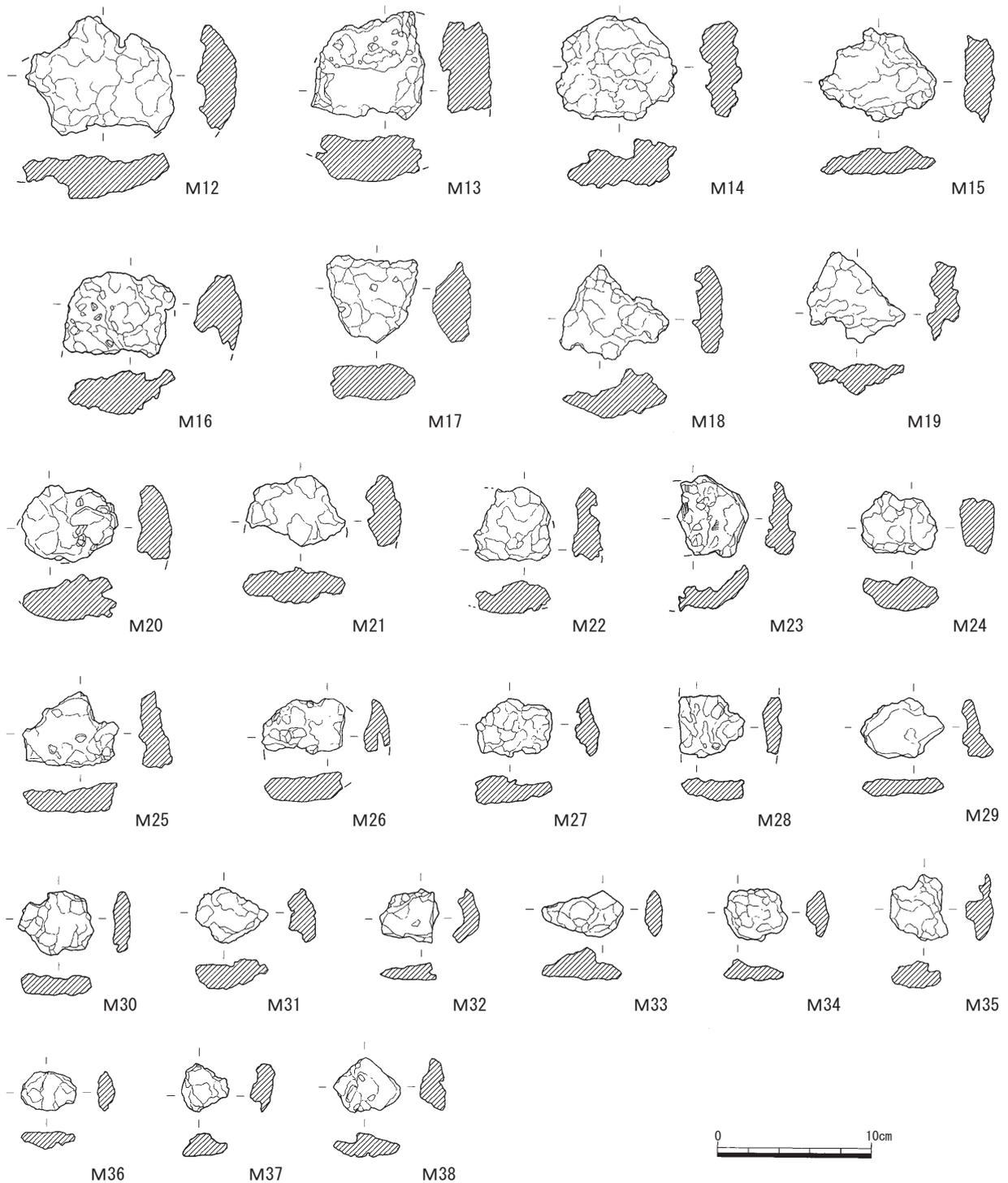


●鍛造剥片出土地点

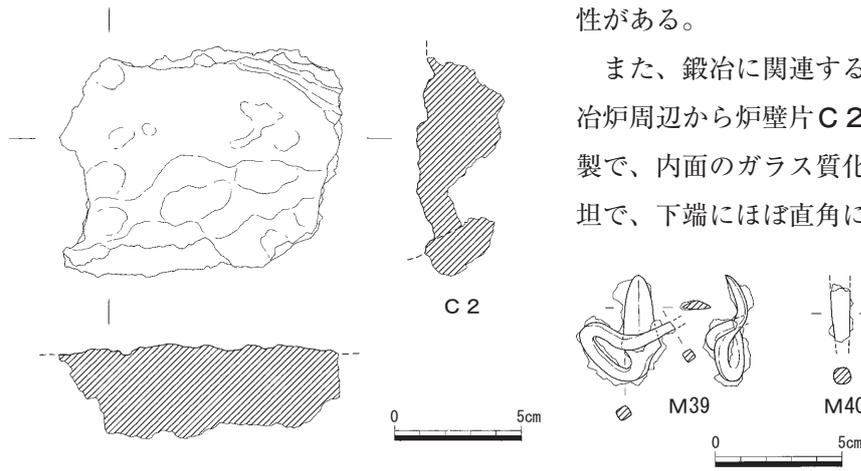
第95図 鍛冶炉 1 周辺鍛造剥片出土状況 (1/40)

さい。鍛造剥片は、最大で1.2cm程度のものがあり、粒状滓は径5mmを超えるものがある。これらのうち、鉄滓4点（M12・M14・M15・M27）、鍛造剥片6点、粒状滓5点については金属学的分析を行っている（付載3）。鞆羽口はわずかな小片が数点出土したにとどまり、図示していない。

鉄器は、鍛冶炉周辺から鉈及び釘が出土している。鉈M39は、身の長さ約4cm、茎を欠損しているもので、意図的に折り曲げられ、小さくたたまれたような形状をなす。鍛冶の原料として再利用する目的で持ち込まれたものと考えられる。釘M40はわずかな小片であるが、これも鍛冶原料の可能



第96図 鍛冶関連遺物① (1/4)

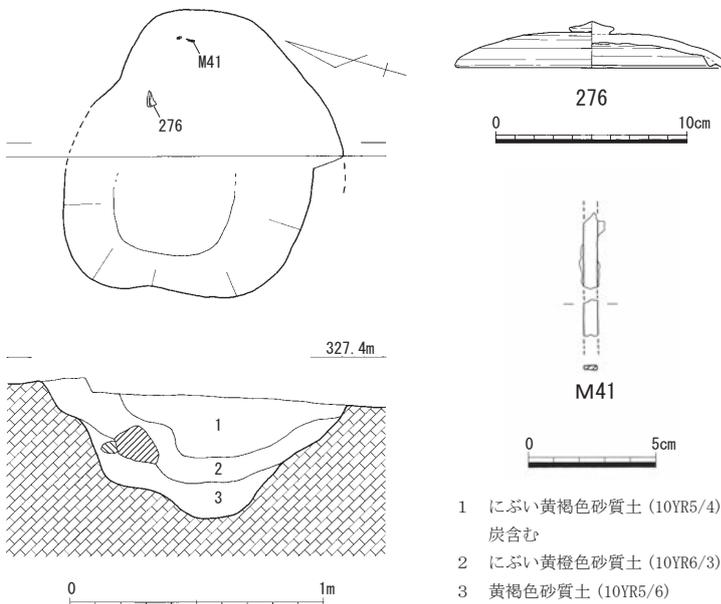


第97図 鍛冶関連遺物② (1/3)

性がある。

また、鍛冶に関連するものかどうか不明だが、鍛冶炉周辺から炉壁片C 2が1点出土している。粘土製で、内面のガラス質化が著しい。炉壁の形状は平坦で、下端にほぼ直角に曲がる面を合わせている。

その形状から箱形の炉が想定され、鍛冶炉の形状と合わない。表土層から出土したものであり、時期も不明である。(尾上)



第98図 土坑40 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土坑40 (第92・98図、図版18・38)

調査区ほぼ中央の緩やかな尾根筋上に位置する不整円形の土坑で、確認調査時のT121でも西半部が検出されていた。最大径120cm、深さ56cmを測る。

出土遺物のうち、内面にかえりを有する須恵器杯蓋276は、土坑の検出中に出土した破片と、調査区内から出土した複数の破片が接合したもので、7世紀後半ごろのものと思われる。ただし、同じく検出中に出土した不明鉄器M41も含めて、本来この土坑に伴うものであったかどうかは不明である。(岡本)

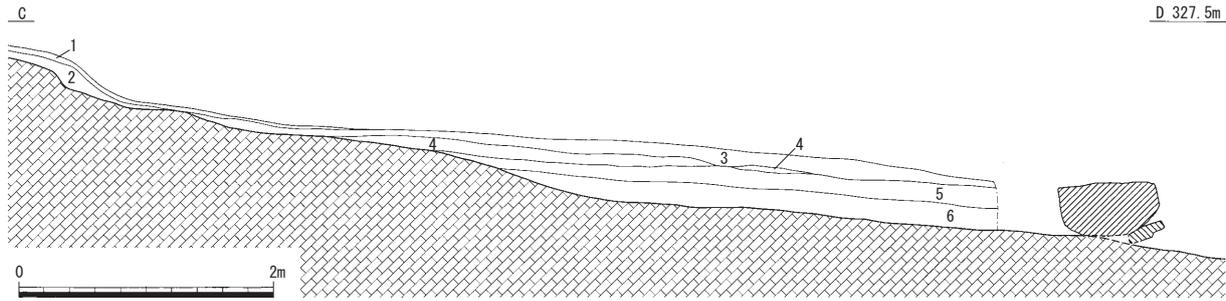
石列2 (第92・99図、図版16、写真7)

Ⅲ-1区北端に位置している。石列は以前から地表に露出しており、平成11年度実施の確認調査ではT121を設定しトレンチ調査を行った結果、古代山城に伴う施設の可能性が指摘されていた。

今回は、周辺部についても範囲を広げ、石列の性格及び時期の把握を目的として調査を行った。石列は小規模であるが、北向きの斜面下方に弧を描くように設けられている。長辺60~80cm、高さ50cm程度の石を主に使用しており、隙間なく一段だけ並べられていた。石列は、建物や何らかの施設の基壇としての性格も想定されたが、石列の周辺や上方におい



写真7 石列2作業風景 (北から)



- | | | |
|----------------------|-----------------------|-----------------------------|
| 1 表土 | 3 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | 5 黄褐色砂質土 (10YR5/6) ラミナ顕著 |
| 2 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | 4 にぶい褐色砂質土 (7.5YR5/4) | 6 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) ラミナ顕著 |

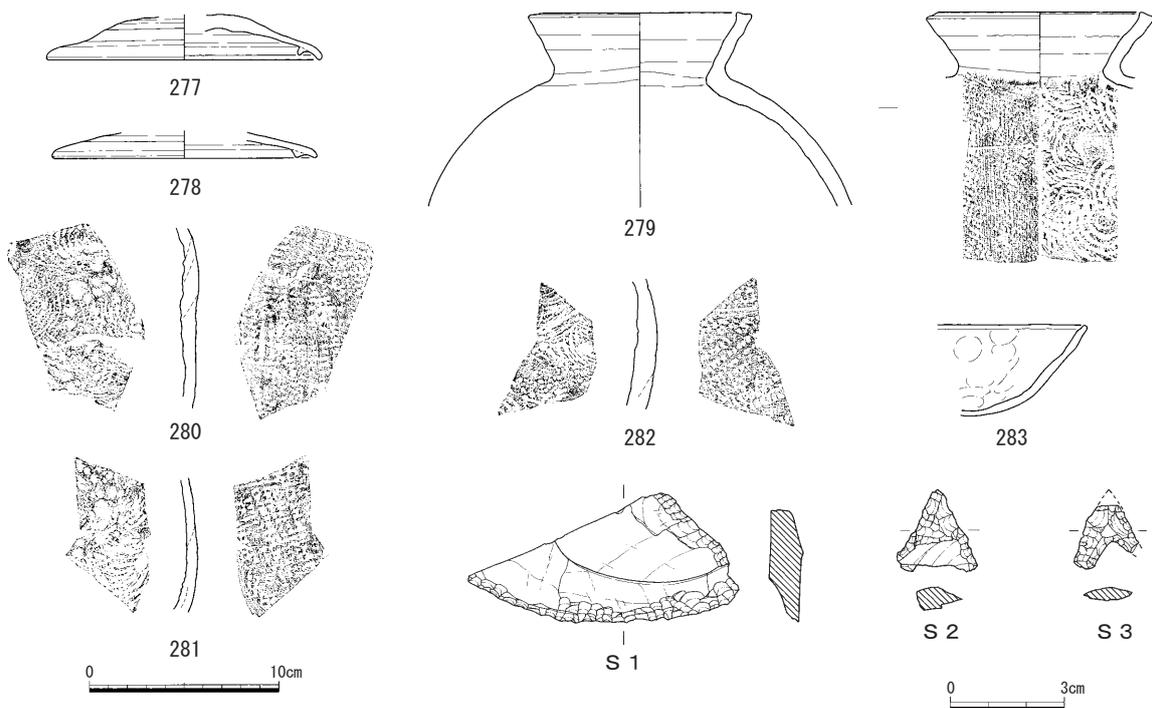
第99図 石列2土層断面図 (1/60)

でも、柱穴等の遺構は認められず、石列のみが単独で存在していることが確認された。

石列内側は、締まりのない砂質土が数層にわたって堆積していた。堆積土の下層はラミナが顕著で、人為的なものではなく自然堆積したものと考えられる。また、堆積土中からは土器片等も含め、遺物は検出されなかった。以上のことから、石列2については古代山城に伴う遺構とは考え難く、近代以降の比較的新しい時期に、砂防等を目的として設置された構築物の可能性が高い。(石田)

遺構に伴わない遺物 (第100図、図版38・40)

いずれも堆積土中から出土した。須恵器杯蓋277・278、須恵器横瓶279～282があり、283は土師器杯である。277・278は平成11年度確認調査のT121で出土し、今回の調査で出土した破片と接合したので再掲している。いずれも7世紀後半段階のもので、付近で検出した鍛冶炉1に関連し、その操業時期を示す遺物と考えられる。なお、第98図に示した276と278、279～282は同一個体の可能性がある。その他には、スクレイパーS1、石鏃S2・S3が出土している。いずれもサヌカイト製で縄文時代のものであろう。(石田)



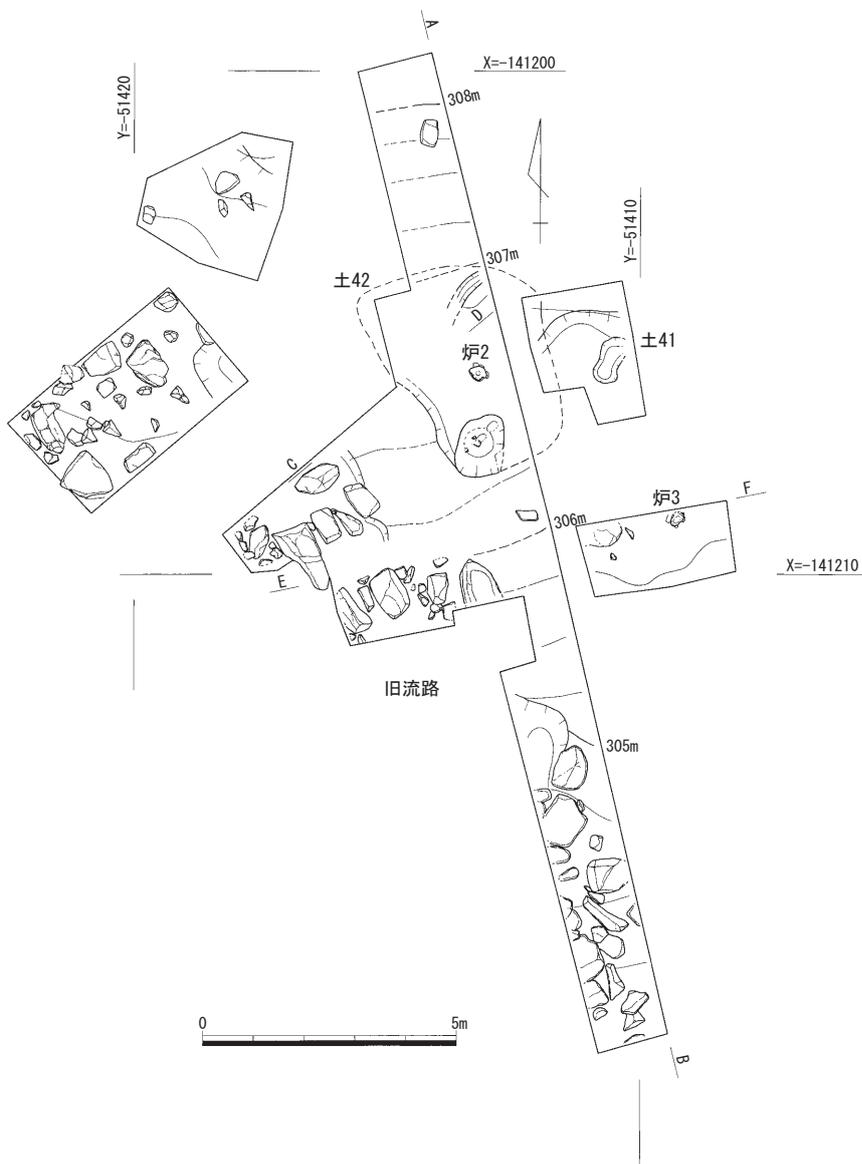
第100図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

3 III-2区

概要（第101・102図、図版16）

III-2区は、城内の湿地から第4水門へ向かって流下する谷川と、城内遊歩道との交点の北側に位置する調査区で、現在の地形は南向きの緩斜面である。この地点での確認調査は未実施であるが、平成20年度に鞆羽口1点が表面採集されたことから鍛冶関連遺構の存在を想定し調査対象とした。調査ではまず南北方向に細長いトレンチを設定し、その後は遺構の検出状況や地形等を考慮しながら必要に応じてトレンチの拡張や追加を行った。

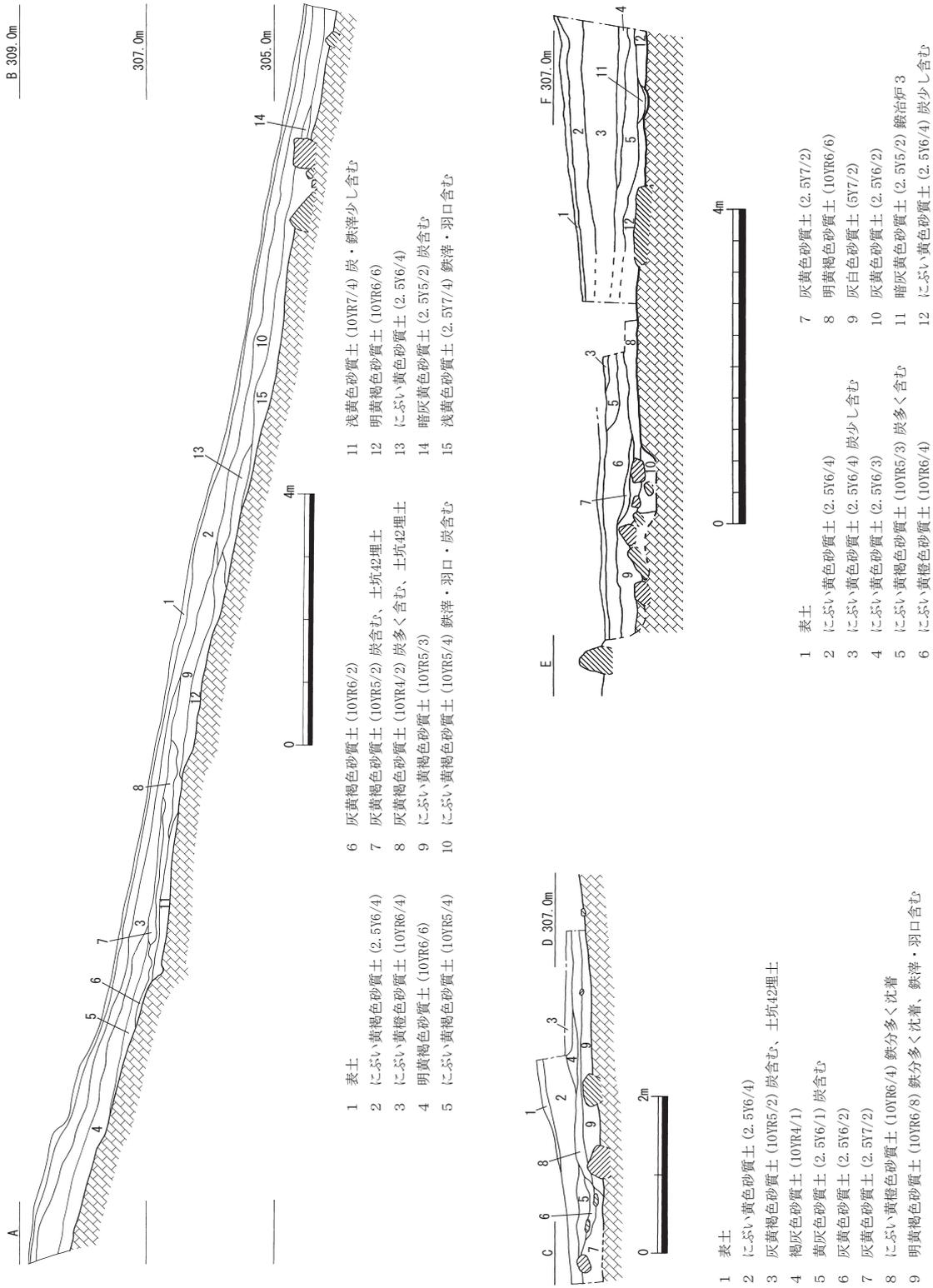
調査の結果、鍛冶関連遺構としては鍛冶炉2基を検出したほか、炉の周辺からは鉄滓・鍛造剥片・鞆羽口片などが多量に出土している。鍛冶炉に伴う上屋の柱穴は確認できなかったが、いわゆる鍛冶工房の存在を想定できる。また、これらの鍛冶炉より上方の位置でも、包含層内から鉄滓等が出土していることから、鍛冶炉は調査区外にも存在することが予想される。



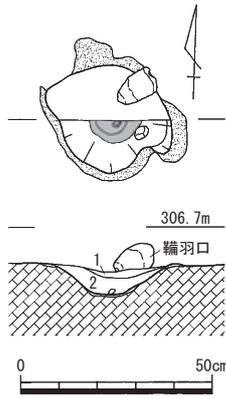
第101図 III-2区遺構配置図 (1/150)

一方、調査区西半部では、現在の谷川よりも東側にずれた位置で、北西から南東に向かって下がる浅い谷状の地形を確認し、埋没した旧流路と判断した。この旧流路の埋土中には、上流側から流れ込んだ大小の岩塊が多数集積しているが、その間から鉄滓や鞆羽口片などが多量に出土した。このことから、鍛冶作業に伴う廃棄物を谷川へ廃棄していた状況がうかがえる。

その他の遺構として、調査区北東部で土師器甕を伴う土坑1基を検出した。また、鍛冶炉埋没後の面では木炭の充満した大形土坑が1基検出されている。この土坑は出土した土器などから鍛冶炉より新しい中世のものと考えられる。（岡本）



第102図 Ⅲ-2区土層断面図 (1/100・1/80)



- 1 褐灰色砂質土 (10YR6/1)
炭・鉄滓含む
- 2 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
炭・鉄滓含む

第103図 鍛冶炉2 (1/20)

鍛冶炉2 (第101・103図、巻頭図版4)

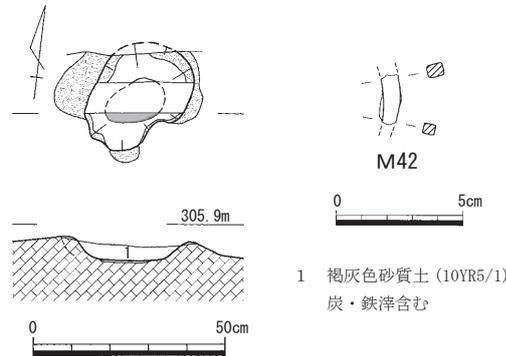
南に向かって傾斜する斜面に位置し、土坑42の下層から検出された。炉の北側約2mの位置で斜面をL字形にカットして平坦面を造成しており、カットした部分には細い溝が伴っている。

炉の形状は、径約30cm、深さ約8cmの椀形をなし、内面が強い被熱によって硬化している。底面付近が最も高熱を受けたらしく青灰色を呈し、周辺は赤化している。また、炉の検出面付近で鞍羽口が1点出土した。この羽口は先端を炉内に向けているが、原位置を保っているとは言い難い。(尾上)

鍛冶炉3 (第101・104・105図、図版18)

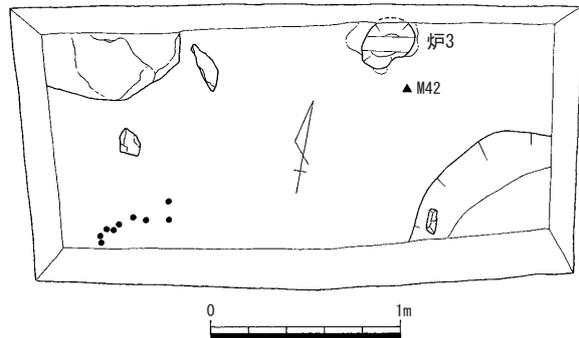
鍛冶炉2の南東に設けたトレンチ内から検出された。トレンチ内は平坦であるが、トレンチ北東の調査区外の地形と比較するとかなり低いレベルにあり、地山を大きく掘削して平坦な作業場を造成している様子がうかがえる。

炉の形状は、径25~30cm、深さ約4cmの椀形をなし、被熱の状況は鍛冶炉2と同様である。炉の近くから鉄器1点M42が出土している。小形の釘の小片とみられるが、ここで製作されたものか、鍛冶原料としたものか明らかでない。また、鍛造剥片がトレンチの南西隅に集中して検出されたが、部分的な発掘調査であるため、鍛冶炉3との関係は不明である。(尾上)



- 1 褐灰色砂質土 (10YR5/1)
炭・鉄滓含む

第104図 鍛冶炉3 (1/20)・出土遺物 (1/3)



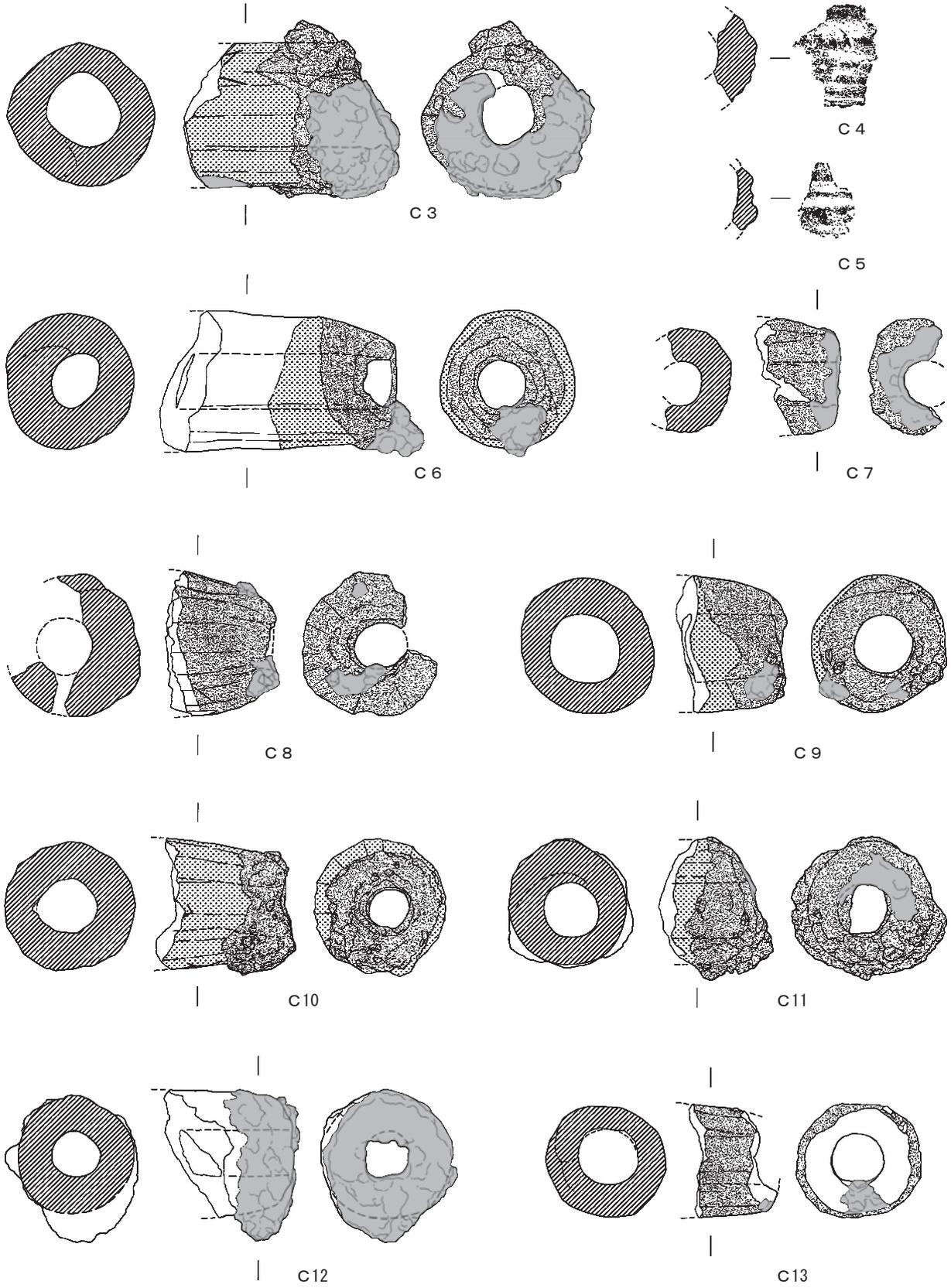
●鍛造剥片出土地点 ▲鉄製品出土地点

第105図 鍛冶炉3周辺鍛造剥片等出土状況(1/40)

鍛冶関連遺物 (第106~108図、図版39、写真8)

鍛冶に関連する遺物として、鞍羽口、鉄滓、鍛造剥片、粒状滓、鉄塊系遺物などがある。調査区の南半は低位部(自然流路)となっており、鞍羽口や鉄滓はそこに大量に廃棄された状況で出土している。

鞍羽口は、かなりの量が出土し総重量は7.8kgに及ぶが、その一部を図示した(C3~C20)。いずれも円筒形で、先端がやや細くなる。外径は6~7.5cm、先端では4.5~5cm程度になり、内径(孔径)は2.3cmから3.8cmまで変化がある。長さは完形品がないため明らかでない。羽口の外面は面取りされた形状をなし、断面が多角形状になるものがほとんどである。飛鳥期の資料によく見受けられる、いわゆる「簀巻状」の羽口である。面数は11面前後で、各面は平坦なものほかに内湾するものも多い。C4・C5は外面を面取りしているというより、波板状を呈するものである。被熱状況は、先端付近がガラス質化及び発泡状になり、鉄滓が付着するものも多い。基部付近はほとんど熱を受けておらず、もともとの焼成があまいこともあって、残存状況が非常に悪い。また、胎土中にスサを混入するもの



第106図 鍛冶関連遺物① (1/3)

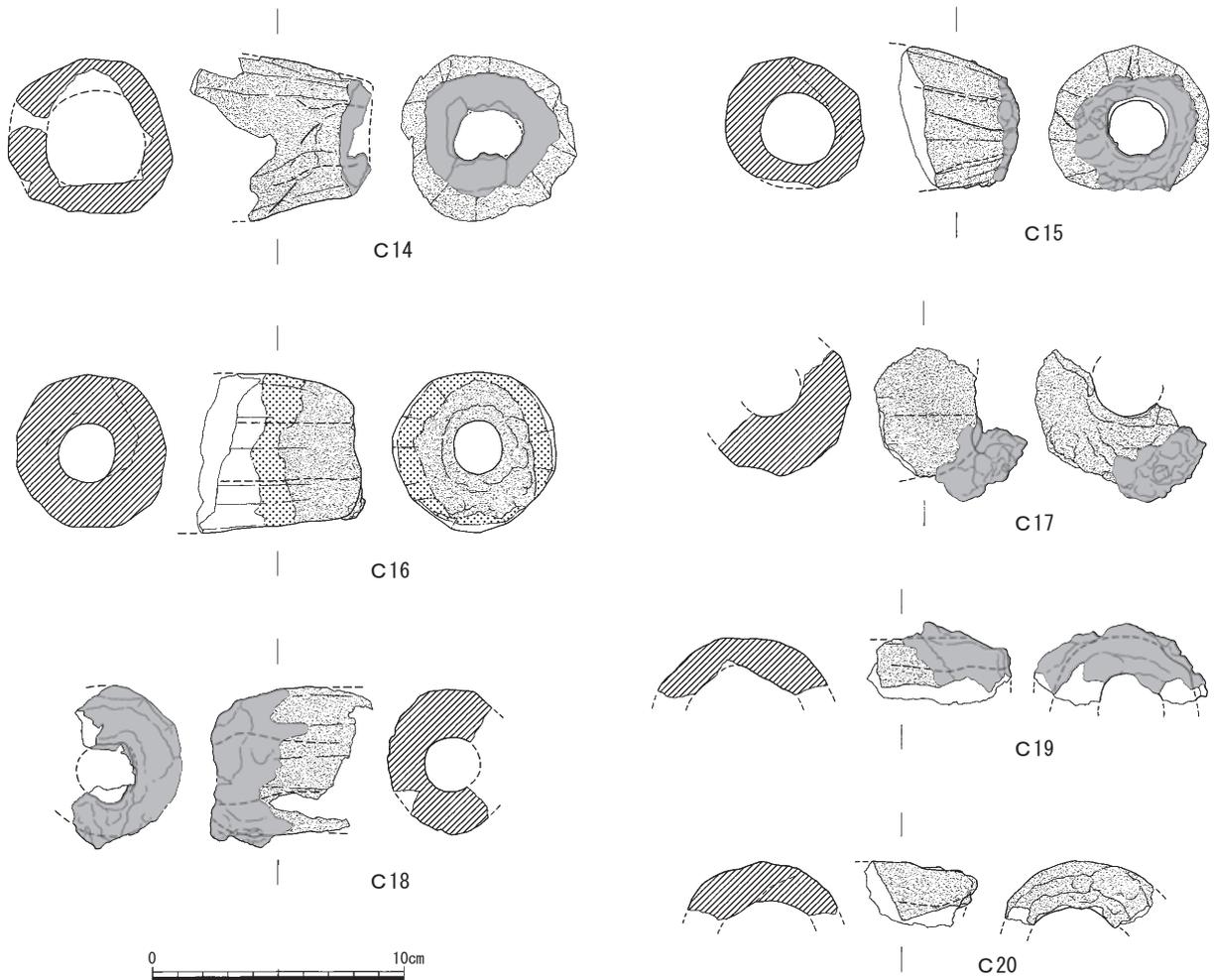
はそれほど多くないが、少数見られる（C3など）。

鉄滓M43～M61は、先述のⅢ-1区と比べて大形品が多く、量もかなり多い。出土総重量は25.2kgである。Ⅲ-2区については廃滓場の一部を発掘したため、出土量が多くなっていることが考えられるが、Ⅲ-1区との差は顕著であり、操業形態の違いをうかがわせる。Ⅲ-2区の鉄滓の特徴は、

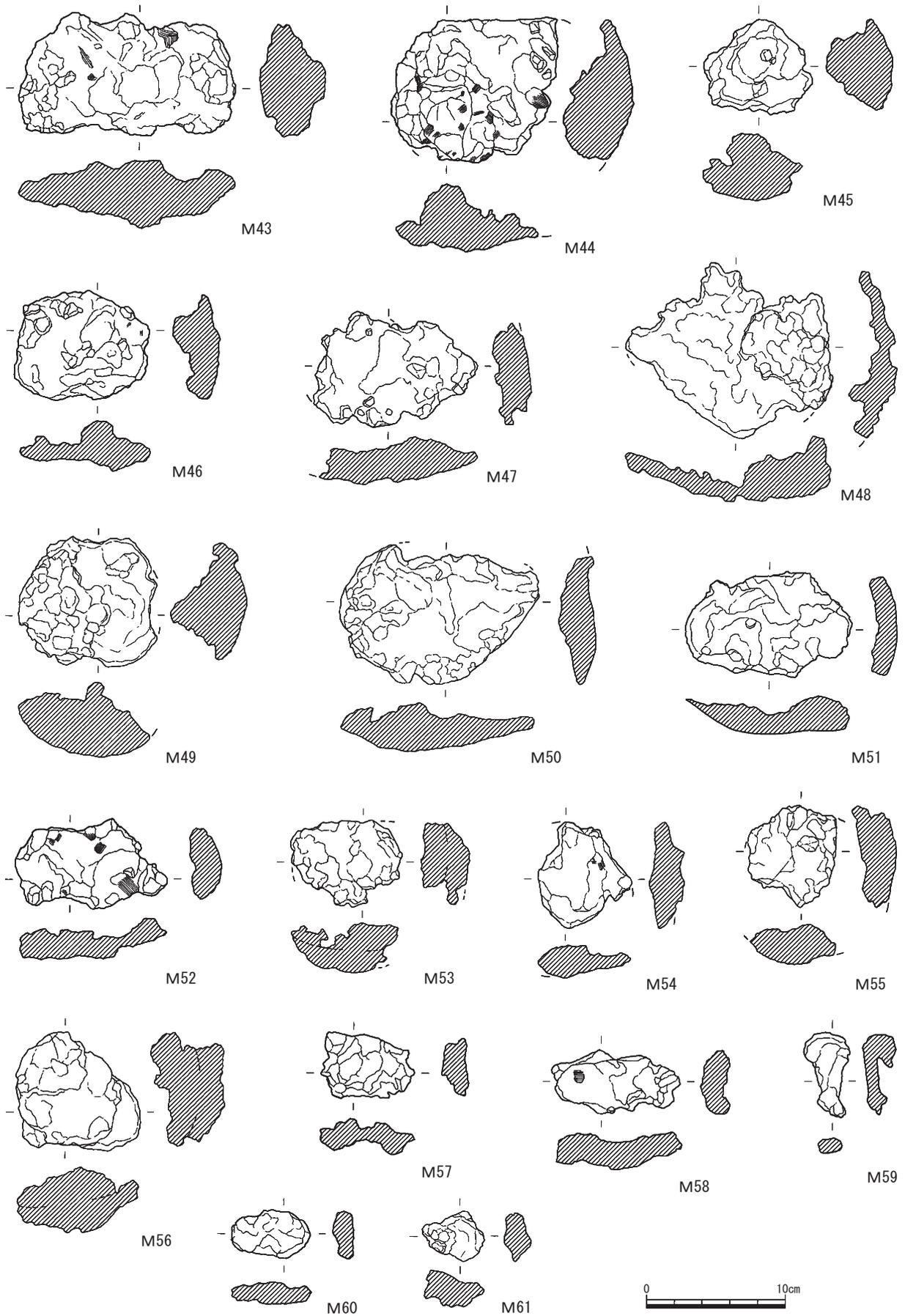
磁着するものが少ないことであり、全体のわずか4%ほどである。最も大きい鉄滓は長辺が15cm程度で、湾曲する下面には炉床の砂が付着するものもあり、鍛冶炉の形状を反映した資料といえる。下面（炉床面）の湾曲が強いもの（M49）や湾曲が緩やかなもの（M50）など変化がある。M53・M56は2段になって形成されており、炉底滓を排出しないまま次の操業を行った結



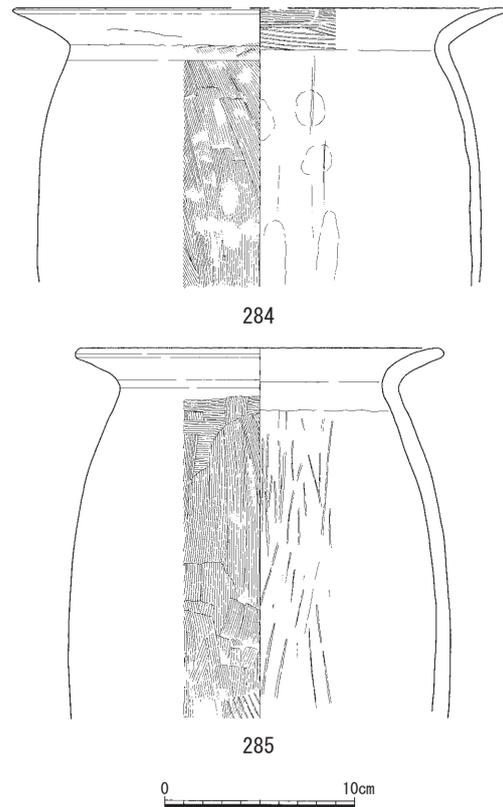
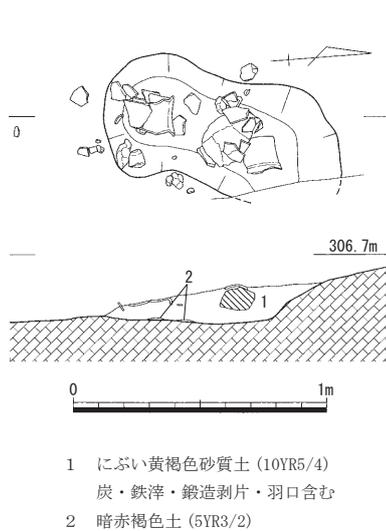
写真8 Ⅲ-2区鉄滓等出土状況（南東から）



第107図 鍛冶関連遺物② (1/3)



第108図 鍛冶関連遺物③ (1/4)



第109図 土坑41 (1/30)・出土遺物 (1/4)

果と思われる。

鍛造剥片は、最大で5mm程度のものであり、粒状滓は径2mm程度である。これらのうち、鉄滓10点 (M43～M46・M51・M52・M57～M60)、鍛造剥片2点、粒状滓2点について金属学的分析を行っている (付載3)。

強い磁着を示す鉄塊系遺物は、計19点、199gが出土している。2～5cm程度の大きさで、球状のものや棒状のものがある。そのうち3点の金属学的分析を行っている (付載3)。

土坑41 (第101・109図、図版18・38)

鍛冶炉2の東側のトレンチで検出した。平面形は不整楕円形で長軸を南北に向け、深さは約20cmが残存している。埋土には、木炭、鉄滓、鍛造剥片、轆羽口片など鍛冶関連遺物が多く含まれている。また、土師器の甕2個体(284・285)の破片が出土しているが、完形に復元できるようなものではない。土坑の底面には、赤く焼けたような土がわずかに薄く貼り付くように認められた。

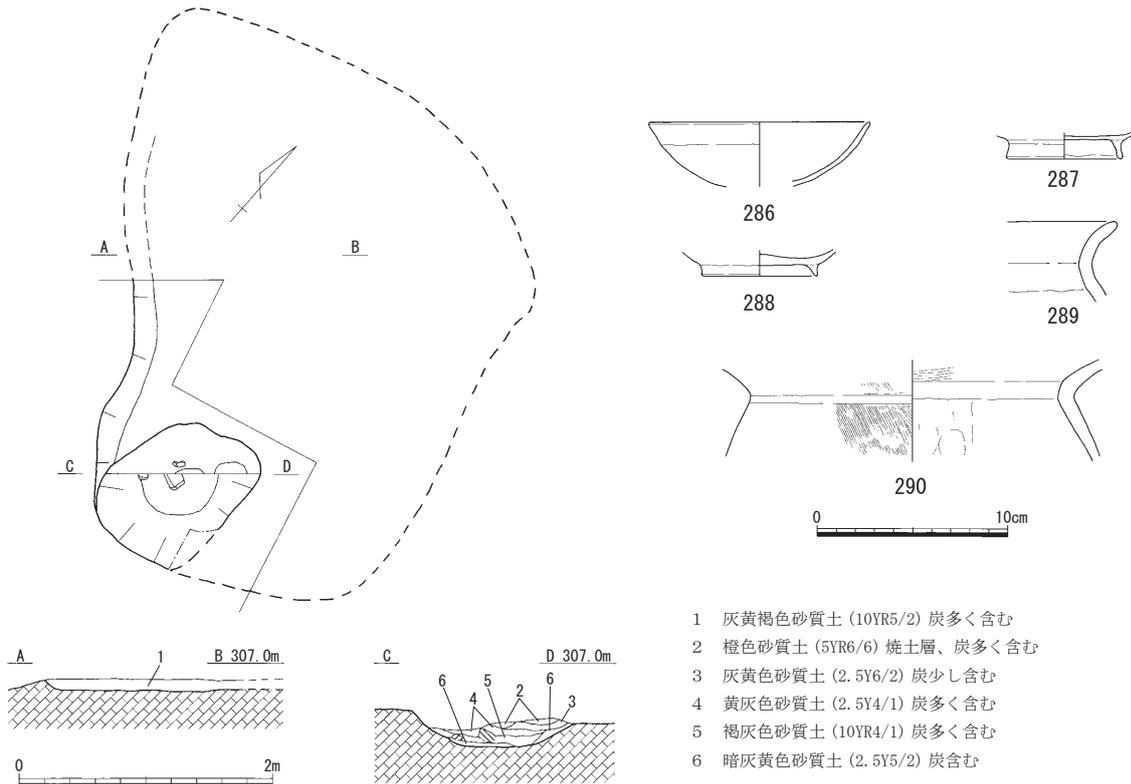
この土坑41と鍛冶遺構との関係は不明であるが、地山面で検出される遺構であることや、出土土師器から、鍛冶炉2・3と同様に古代の遺構であると考えられる。

土坑42 (第101・110図)

Ⅲ-2区の中央部に広がる木炭層であり、南北約4m、東西約3mの不整形な平面形をなす。この木炭層に伴う掘り方は明確ではなく、その平面形、範囲も概略を把握したにとどまる。深さは最大で20cm程度である。

木炭層を除去すると、その南端部において楕円形の浅い土坑が検出された。南北1.2m、東西0.9m、深さ20cmの浅い土坑であり、この中にも同様に木炭が多く検出されたことから、上部の木炭層と一連の遺構と想定した。

土坑42の検出当初は古代の鍛冶炉との関係を想定したが、埋土には鉄滓の含有量が少なく、鍛冶炉2の上層に位置することや、土師器の高台付椀(286～288)などが出土していることから、鍛冶炉より新しい中世の遺構と考えられる。遺構の機能は不明である。



第110図 土坑42 (1/60)・出土遺物 (1/4)

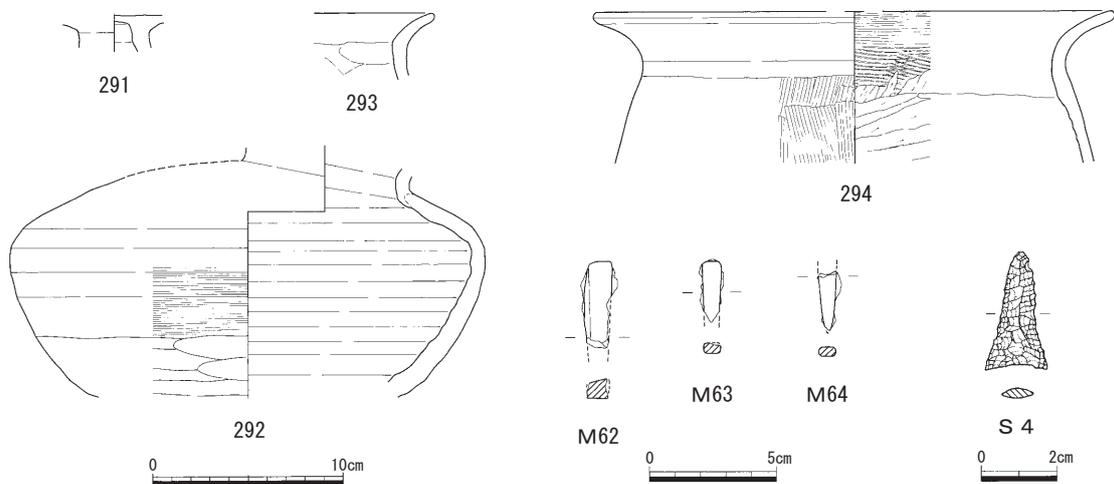
遺構に伴わない遺物 (第111図、図版38・40)

本調査区では、包含層などの掘り下げ過程で出土した遺物は少なく、そのほとんどは細片で図示可能なものはわずかであった。

291・292は、それぞれ須恵器の高杯と平瓶でいずれも焼成は不良である。291は旧流路の埋土中から出土している。293・294は土師器の甕である。

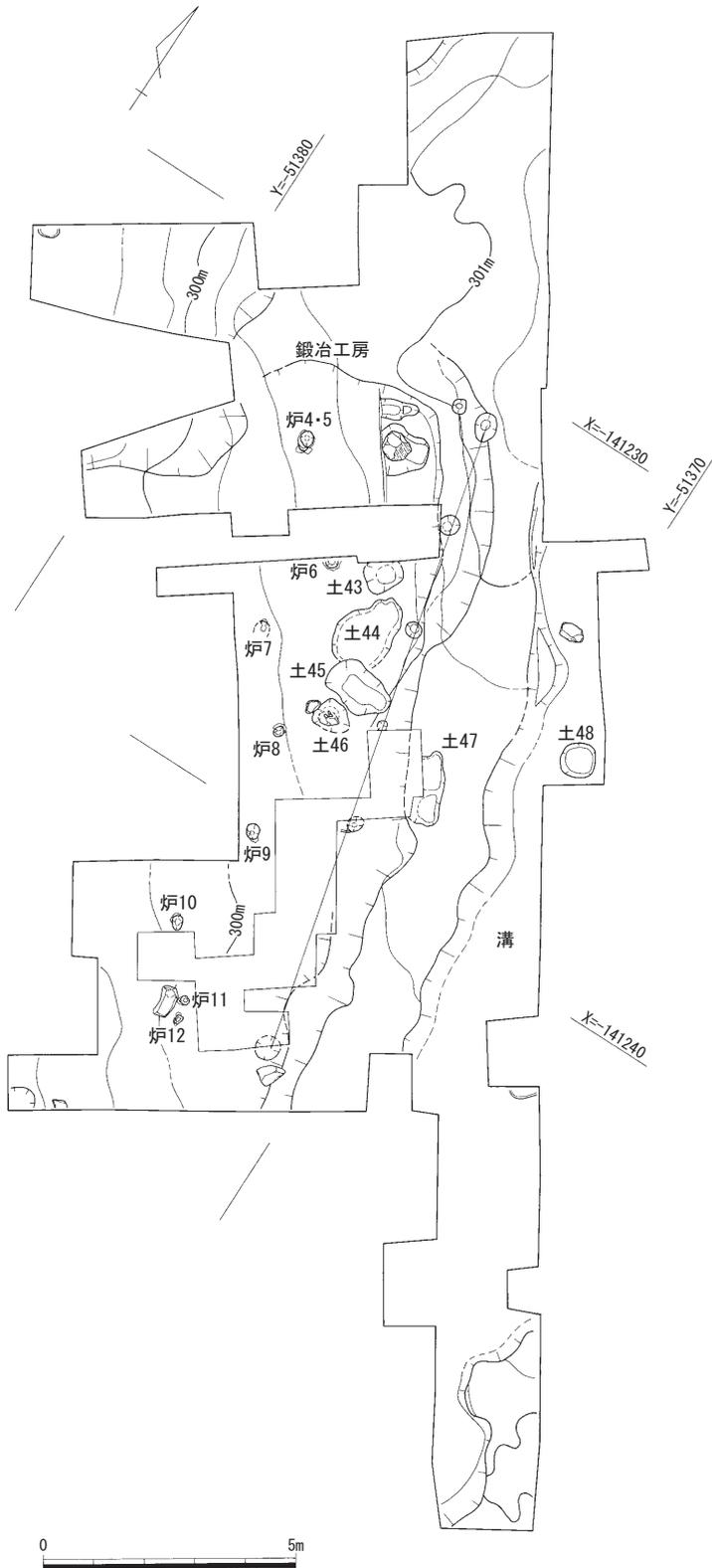
鉄器M62～M64は欠損しているが、いずれも釘と考えられる。調査区西半部の旧流路周辺を掘り下げる過程で出土したもので、鍛冶炉に関連する遺物の可能性もある。

S 4はサヌカイト製の石鏃で、縄文時代のものと考えられる。(岡本)



第111図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2)

4 III-3区



第112図 III-3区遺構配置図 (1/150)

概要 (第112図、図版17)

III-3区は東門の北側に位置し、南北方向にのびるなだらかな尾根筋上に設定した調査区である。この場所では平成11年度に確認調査(T113)が行われ、復元径約6mの竪穴遺構とされた遺構の埋積土や周辺部から多数の鉄滓、鑄羽口片が出土した。この時点の調査では鍛冶炉自体は検出されなかったものの、竪穴遺構あるいはその周辺で鍛冶が行われていた可能性が強く示される結果となった。今回の調査では、その竪穴遺構の平面的な広がりや機能を解明するため調査を実施した。

調査の結果、確認調査時に竪穴遺構とした遺構は、むしろ段状遺構とすべき形状であることが判明した。段状遺構東側の壁面沿いには柱穴列が検出され、対応する西側の柱穴列は未検出であるが、少なくとも桁行6間以上の長大な掘立柱建物の存在を裏付けるものである。その内部から合計9基の鍛冶炉を検出したが、これらの鍛冶炉は一部重複したり近接して設置されたりしたものも含まれる。しかし、おおむね南北方向に並ぶことから、鍛冶炉の設置が計画的に行われたことが推測される。炉の周囲からは大量の鉄滓や鍛造剥片のほか、若干の土器片と工具や建築材と思われる鉄製品も出土した。

この鍛冶工房は、山城を築城するさいに必要な工具等の鉄製品の製作や修繕を行ったものと考えられ、数は少ないが相伴土器もあり、鬼城山築城のあり方を考える上で貴重な事例を提示したといえる。(岡本)

鍛冶工房（第112～117図、図版17）

北西から南東に向かったのびる尾根線からやや西に下がった位置に検出された。斜面を断面L字形に掘削して長大な平坦面を造成しており、段状遺構の形態をとる。その掘削面に沿って南北に柱穴が並ぶ。南側は未調査であるため全体の規模は不明だが、桁行6間以上の掘立柱建物が想定される。この柱穴列に対応する西辺の柱穴列は検出されておらず、斜面地のため流失した可能性がある。

また、背後（東側）には工房に平行して溝が掘削されている。幅4～5m、深さ50cm程度の溝で、上方からの雨水を遮断し、防湿の役割を担ったものと考えられる。溝は砂で埋設しており、雨水がか



第113図 鍛冶工房 (1/100) ●鍛造剥片出土地点 ▲鉄製品出土地点

なり流入したことがうかがえる。

建物内と考えられる平坦部には、鍛冶炉が2～2.5mの間隔をとりながら、並ぶように7か所で検出された。鍛冶炉は重複あるいは近接しているものがあり、炉の基数としては計9基が認められる。鍛冶炉を作り替えたものと考えられる。また、工房内床面の北東部には、後述する不整形な土坑が多数認められるが、その機能は不明である。

工房の西側、調査区外は地形が大きく下がり、現在は湿地状になる場所で、当時は廃滓場として使用されたことが想定される。

鍛冶関連遺物は工房内全域から出土しているが、柱穴列の中央付近から鍛造剥片が集中して出土し、鍛打作業の痕跡を示している。また、鍛冶炉4・5の西側からは鍛造剥片に加えて比較的多くの鉄器片が出土しているが、斜面に流れた状況である。

工房の操業時期を示す遺物は多くないが、須恵器の杯295～299・高杯300・甕301などの破片が出土している。これらの遺物から、7世紀後半ごろの時期が想定される。(尾上)

鍛冶炉4・5 (第112～114図、巻頭図版4)

工房内最北部で検出された。2基の鍛冶炉が重複しており、新しい方を鍛冶炉4、古い方を鍛冶炉5とする。鍛冶炉4は、長径32cm、短径24cmの楕円形を呈し、深さは8cmで椀形をなす。炉内の約3/4を発掘した。底面中央部が青灰色、周辺は赤化しており、いずれも硬く焼き締まっている。炉内には、炉底滓と轆羽口C24が原位置で残存している。羽口C26も原位置に近いとすれば2方向からの送風ということになるが、C26は炉から若干浮いており角度も急で、原位置とは言い難い。

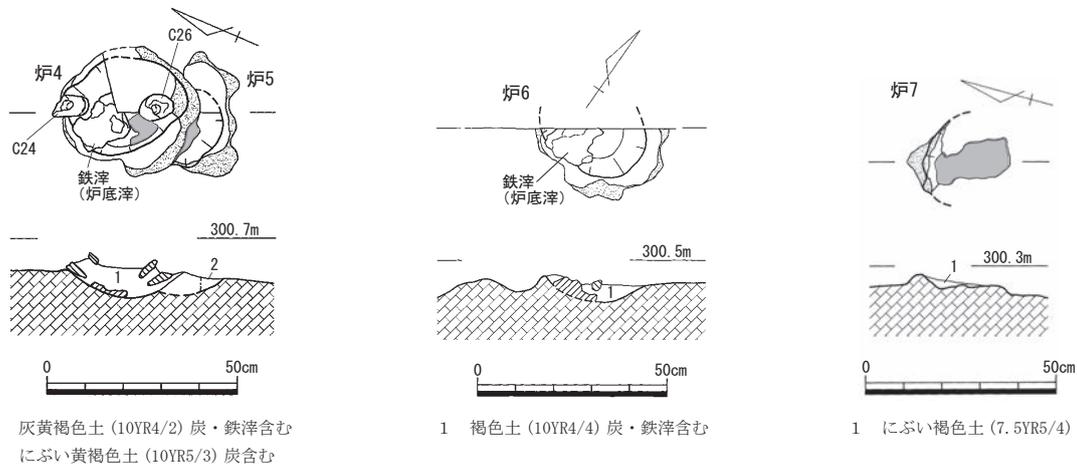
鍛冶炉5は、鍛冶炉4を保存しているため詳細不明であるが、鍛冶炉4に切られる関係にあることは明らかである。(尾上)

鍛冶炉6 (第112～114図、巻頭図版4)

鍛冶炉4・5の南東側約2.5mの位置にある。半截にとどめているが、径は約30cmと推定され、深さは約8cmで椀形をなす。炉内には炉底滓が原位置で残存している。被熱の具合、色調は鍛冶炉4と同様である。(尾上)

鍛冶炉7 (第112～114図)

鍛冶炉6の南約2mの位置にある。残存状態が悪く、炉底の一部及び北側の立ち上がりが残存しているのみである。規模は不明であるが、被熱の具合、色調は他の鍛冶炉と同様である。(尾上)



第114図 鍛冶炉4～7 (1/20)

鍛冶炉8 (第112・113・115図、巻頭図版4)

鍛冶炉7の南東約2.2mの位置にある。半截にとどめているが、径20数cmで、自然石に接しているためややいびつな形状となっている。深さは約8cmで碗形をなすが、やはり不整形である。被熱の具合、色調は他の鍛冶炉と同様である。(尾上)

鍛冶炉9 (第112・113・115図)

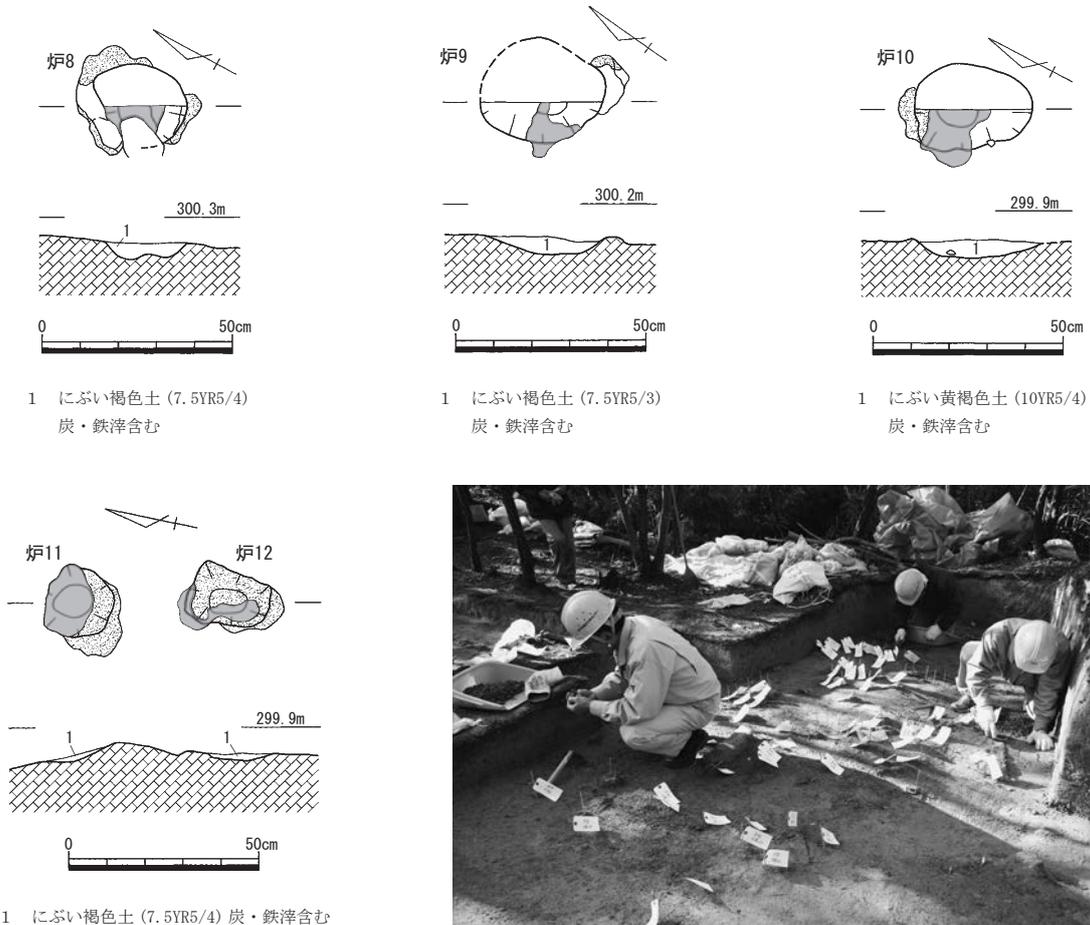
鍛冶炉8の南東約2.1mの位置にある。半截にとどめているが、径約30cmと推定され、深さ約8cmで緩やかな碗形をなす。炉の西壁部分が強い熱を受けたようで青灰色をなす。(尾上)

鍛冶炉10 (第112・113・115図、図版18)

鍛冶炉9の南約2.3mの位置にある。半截にとどめているが、長径30cm、短径22cmの楕円形と推定され、深さ約9cmで緩やかな碗形をなす。炉内には炉底滓が原位置で残存している。炉の底部から西壁にかけて強い熱を受けたようで青灰色をなす。(尾上)

鍛冶炉11・12 (第112・113・115図、図版18)

鍛冶炉10の南東約1.8mの位置にある、近接した2基の鍛冶炉である。近接しているため同時に使用されたとは考えにくく、少し場所を変えて鍛冶炉を作り替えたものと推定される。いずれも残存状態が悪く規模は不明であるが、被熱の具合、色調は他の鍛冶炉と同様である。また、鍛冶炉11・12の西に接して大形の石材が認められるが、鍛冶炉との関係は不明である。なお、鍛冶炉12の近くから小鉄片M90が出土している。(尾上)



第115図 鍛冶炉8～12 (1/20)

写真9 III-3区作業風景 (南から)

土坑43 (第112・113・116図、図版18)

鍛冶工房北半部の床面で、南北に連なって検出された土坑群のうち北端に位置する。一部が調査区外になるが、平面形は隅丸方形で、最大径76cm、深さ16cmを測る。埋土中には木炭を多く含むほか、鉄滓や鍛造剥片が出土している。 (岡本)

土坑44 (第112・113・116図)

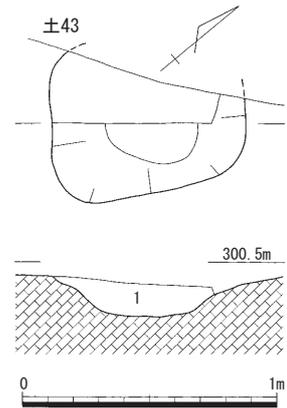
土坑43の南に近接する。平面形は不整形で、南北約1.6m、東西約1.1m、深さ10cm、埋土に木炭や焼土、鉄滓、鍛造剥片を含む。一部のみを発掘にとどめており、全体の形状は明らかでない。 (尾上)

土坑45 (第112・113・116図)

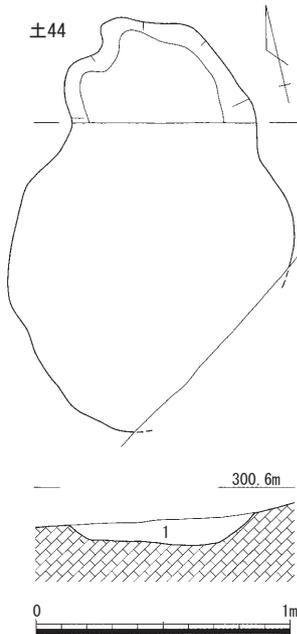
土坑44の南に接する土坑である。平面形は、検出面では不整楕円形、底面では南北35cm、東西90cmの長方形を呈する。深さは約20cmで、埋土に木炭や焼土、鉄滓、鍛造剥片、鞆羽口片C21を含む。 (尾上)

土坑46 (第112・113・116図)

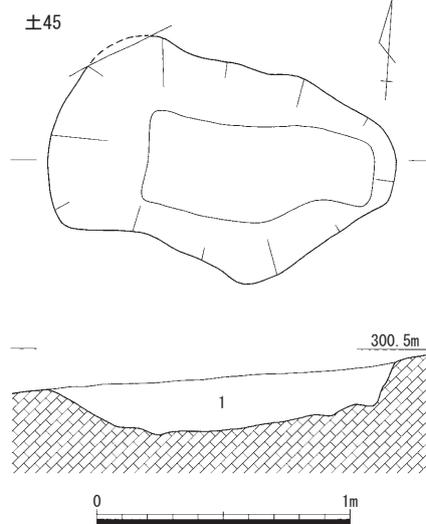
土坑45の南に近接する土坑である。平面形は不整円形で、南北60cm、東西75cmで、中に角礫が認められる。埋土には木炭や鉄滓M74を含む。半截に留めており、詳細は不明である。 (尾上)



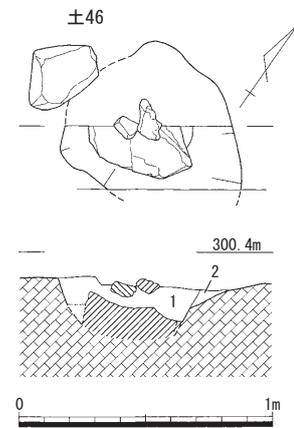
1 黄褐色砂質土 (10YR6/6)
炭・鉄滓多く含む



1 褐色砂質土 (10YR4/6)
炭・焼土・鉄滓等含む

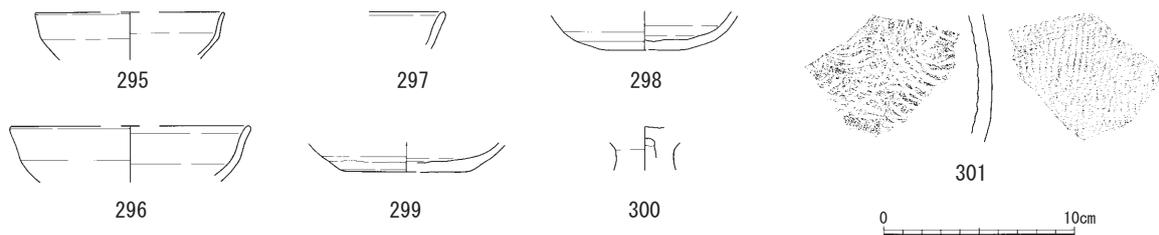


1 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
炭・鉄滓・鍛造剥片・羽口含む



1 褐色砂質土 (10YR4/4) 炭・鉄滓含む
2 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)

第116図 鍛冶工房内 土坑43~46 (1/30)



第117図 鍛冶工房出土遺物 (1/4)

鍛冶関連遺物（第118・119図、図版39・40）

鍛冶に関連する遺物として、鑪羽口、鉄滓、鍛造剥片、粒状滓、鉄塊系遺物、鉄器などがある。

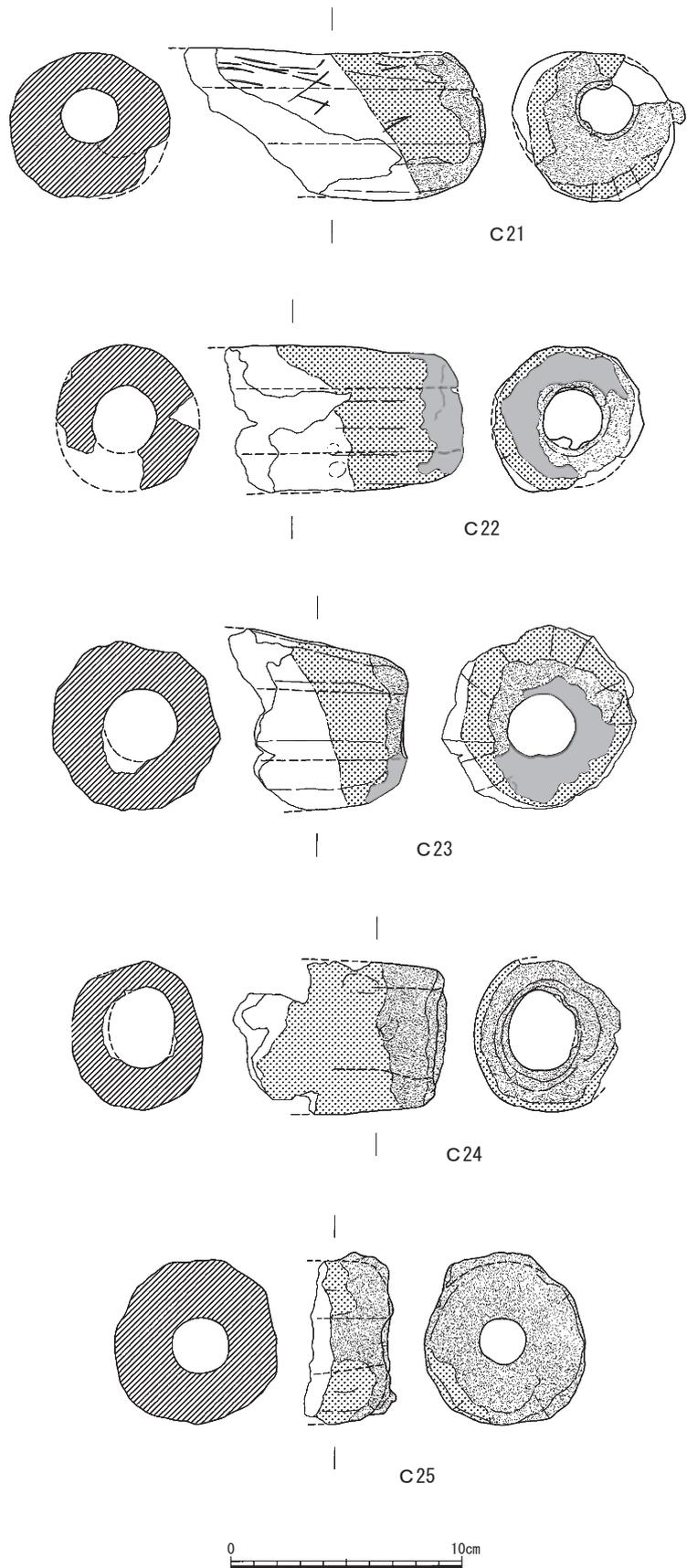
鑪羽口は多量に出土しており、総重量は4.7kgに及ぶが、その一部を図示した（C21～C27）。孔径の小さなもの（C21・C25・C27）と大きなもの（C22～C24・C26）とがあり、いずれも外面が面取りされた形状をなすなど、大きさや形態、被熱の特徴等、Ⅲ-2区出土のものと同様である。基部まですべてが残存するものはない。C21はスサの混入が顕著に見られるもので、鬼城山では少数派である。なお、C24は鍛冶炉4において原位置を保って出土したものである。

鉄滓の出土総重量は15.4kgに及ぶ。Ⅲ-2区と比べて少ないのは、廃滓場を発掘していないためであろう。Ⅲ-3区の鉄滓は、Ⅲ-2区に比べて磁着するものが非常に多く、全体の41%を占める。最も大きい鉄滓は長辺が15cm程度で、湾曲する下面には炉床の砂が付着するものもあり、鍛冶炉の形状を反映した資料である。

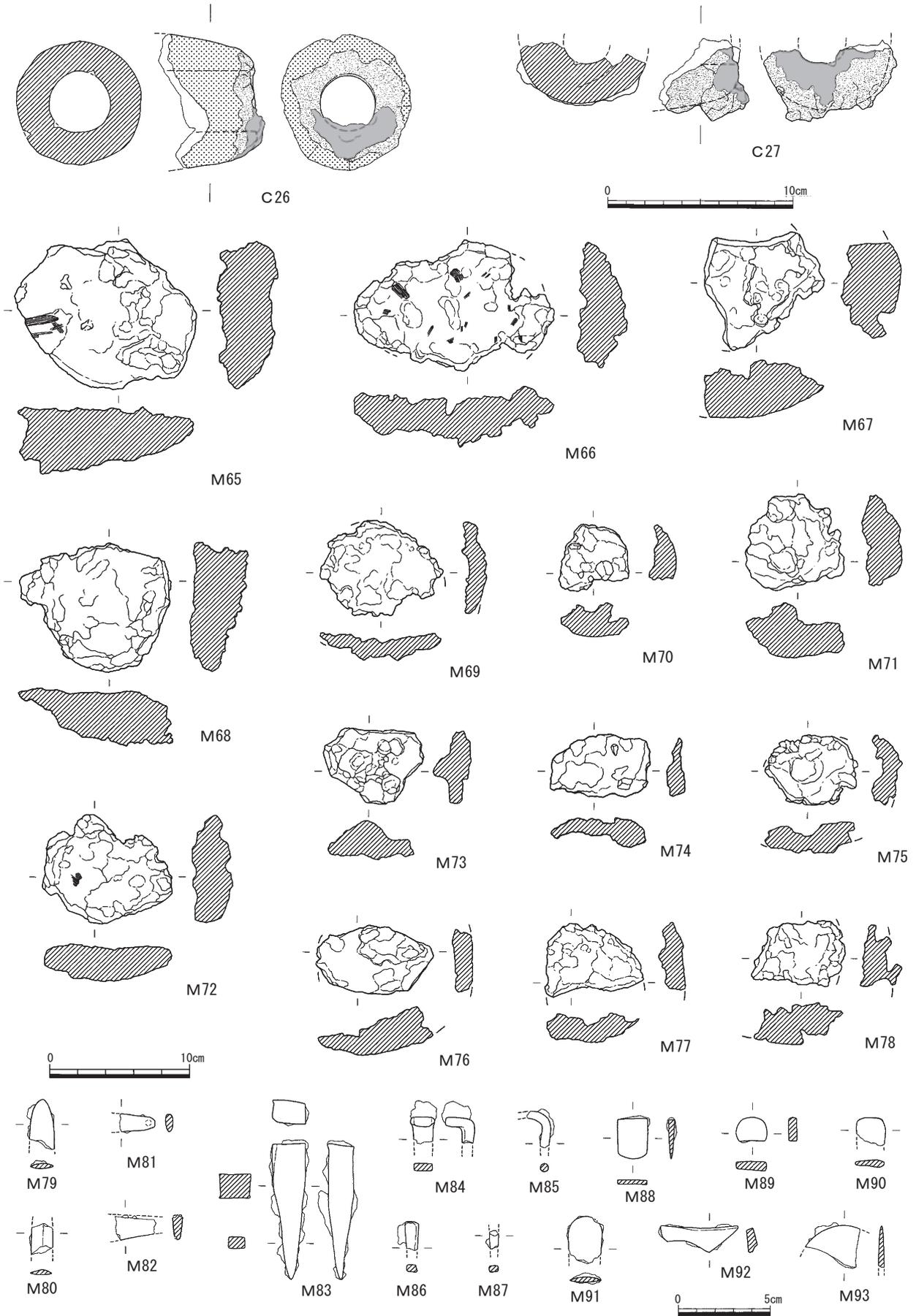
鍛造剥片は、最大で7mm程度のものであり、粒状滓は径2mm程度である。これらのうち、鉄滓4点（M65・M68・M74ほか）、鍛造剥片1点、粒状滓2点について金属学的分析を行っている（付載3）。

強い磁着を示す鉄塊系遺物は、計118点、832gが出土しており、Ⅲ-2区に比べて非常に多い。

Ⅲ-3区では、鉄器が比較的多く出土している。M79・M80は鉈の



第118図 鍛冶関連遺物① (1/3)



第119図 鍛冶関連遺物② (1/3・1/4)

身部と考えられる破片である。M81・M82は小形の刀子の茎と考えられるものである。M81は茎尻に不明瞭ながら目釘孔が認められる。

M83は、長さ7.4cm、幅1.8cmを測る鉄器で、上端から1/3付近から先細りになり、先端は尖るがやや丸味をもつ。このような特徴は、近世の石切の矢に類似するものがあり、築城に伴う採石に使用された可能性がある。また、断面は長方形をなすが、その角にはめくれが認められることから、この鍛冶工房で修繕等を行っていたことも考えられる。石切の道具は一日使えば役に立たなくなることから、石切と鍛冶は密接な関係をもっていたとされる。

M84～M87は鉄釘と考えられる棒状の鉄器である。M84・M86には頭部が認められる。M88は薄い楔形の鉄器で、長さ2.1cmの小さなものである。木工に使用されたか、あるいは鍛冶に伴う小形の鑿の可能性も否定できない。M89・M90は小鉄片である。M89は爪形をなすが用途不明である。M91は平たく周縁に刃をもつ鉄器片で、鉄鋸の可能性もある。M92は不整鉄片、M93は周縁が円弧を描く鉄片である。

以上の鉄器は、わずかに鉄鋸の可能性をもつものがあるが、大部分は工具、建築材であり、築城に伴って必要になる鉄製品の製作や修繕を行ったと考えられる。(尾上)

土坑47 (第112・120図)

段状遺構の東側に隣接する土坑で、平面形は不整な長方形を呈している。西側部分は未掘だが、長辺147cm、短辺は検出長で51cmを測る。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは17cmと浅い。埋土中には木炭片や焼土、鉄滓を含んでおり、鍛冶工房に関連する遺構と考えられるが、その性格や詳細な時期については不明である。(石田)

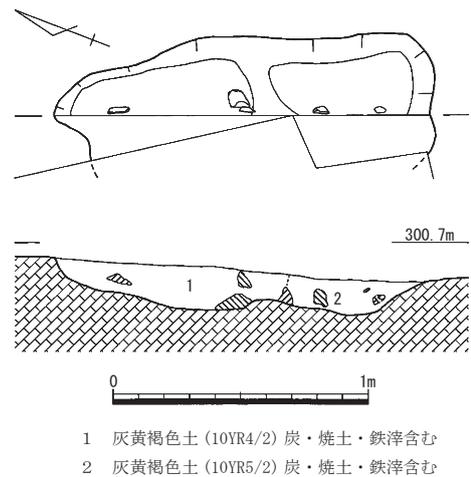
土坑48 (第112・121図、図版18)

調査区東壁沿いに位置する円形の土坑で、段状遺構の東側に掘削された溝の埋没後に掘り込まれている。最大径71cm、深さは11cmを測る。壁面上端付近と底面の一部は被熱により赤化している。他の被熱土坑との類似性から、平安時代の遺構と考えられる。(岡本)

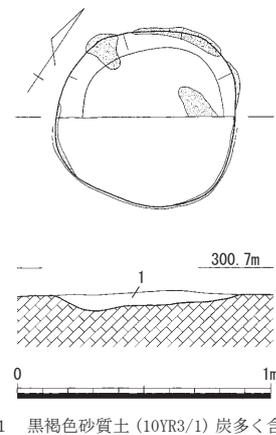
遺構に伴わない遺物 (第122図、図版40)

堆積土の掘り下げ中に若干の遺物が出土しているが、図示可能なものは少ない。

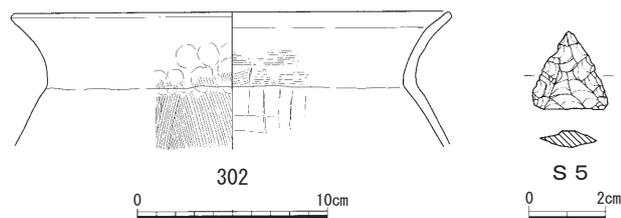
302は土師器甕であり、飛鳥時代のもと考えられる。S5はサヌカイト製の石鋸で、全長2.05cmを測り、縄文時代に属すと推測される。(岡本)



第120図 土坑47 (1/30)



第121図 土坑48 (1/30)



第122図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2)

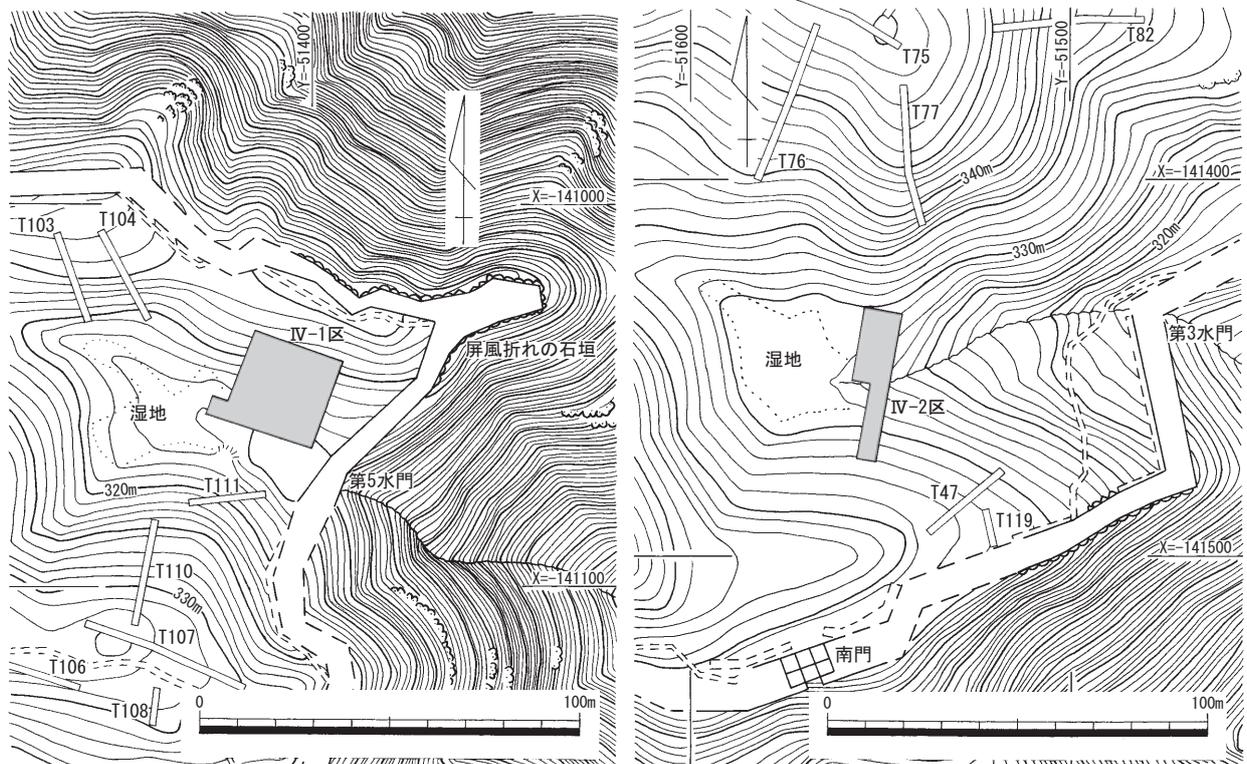
第4節 IV区の調査

1 調査区の概要

鬼城山を流れる谷川には、その流れを堰き止める土手状構造物のあることが調査以前から知られており、土手状遺構と呼ばれている。IV区は、この土手状遺構の中でも特に良好な状態で残存している二つの土手状遺構の構造解明を目的に設定した。このうち第5水門背後の土手状遺構は、平成11年度に確認調査が行われ、前面に高さ1mほどの石垣と敷石をもつ施設であることが判明した（県報告203）。一方、第3水門上流の土手状遺構は、調査歴はないが、河床の石積みの形状等から古代山城に伴う施設ではないかと推測されていた（市年報8）。今回の調査では、前者を土手状遺構1、後者を土手状遺構2とし、それぞれに調査区（IV-1区、IV-2区）を設定した。

調査の結果、土手状遺構1は推定全長26.5m、基底部幅8mで、前面と背面に石垣をもつ堰堤であることが分かった。前面石垣は上下2段で、1段目上面には敷石が設けられていた。堤体は盛土で、土を薄く積み上げながら造成している様子が観察できたが、盛土の硬度はなく、突き固められた様子は見られなかった。土手状遺構2も前面と背面に石垣を持つ堰堤で、推定全長31~35m、基底部幅約6mを測った。堤体は盛土で、石垣は1段のみであるが、石垣の上面にも盛土が施されていた。

これらの土手状遺構の築造年代であるが、構造や出土遺物から古代山城に伴う7世紀後半ごろの遺構と推測している。その築造目的は、上流からの大量の土砂や水流による城壁や水門の保護あるいは城内で必要な水の確保であったと考えられる。鬼城山の土手状遺構の調査は本調査が初めてで、全国的にも調査例が少なく、古代山城の構造や機能を考える上で貴重な事例を提示できた。（金田）

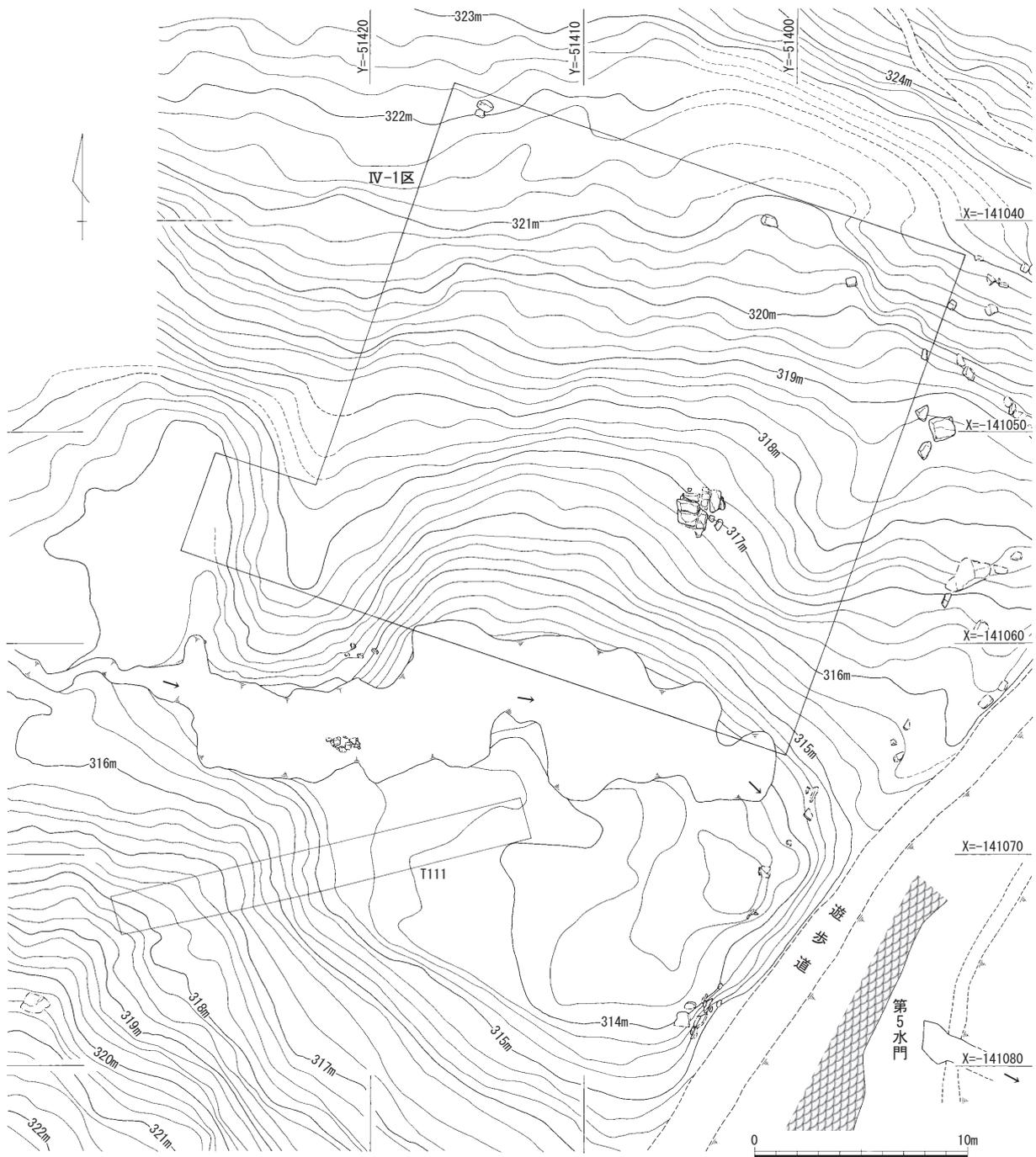


第123図 IV区調査区位置図 (1/2,000)

2 IV-1区

概要（第124～128図、図版19・23）

IV-1区は第5水門に流れ込む谷川の北岸に位置する。この谷川を堰き止めるように土手状遺構1が存在する。その背後には湿地が存在し、かつて貯水池があったことを想起させる。土手状遺構1は、学術報告で土手状遺構と呼称され、平成11年度の確認調査（T111）で高さ1mほどの石垣とその前面に敷石を確認している。石垣背後の控積みから須恵器甕片（県報告203-104）が出土しており、古代I～II期（7世紀中葉前後から7世紀末～8世紀代）と報告されている。今回の調査は、T111



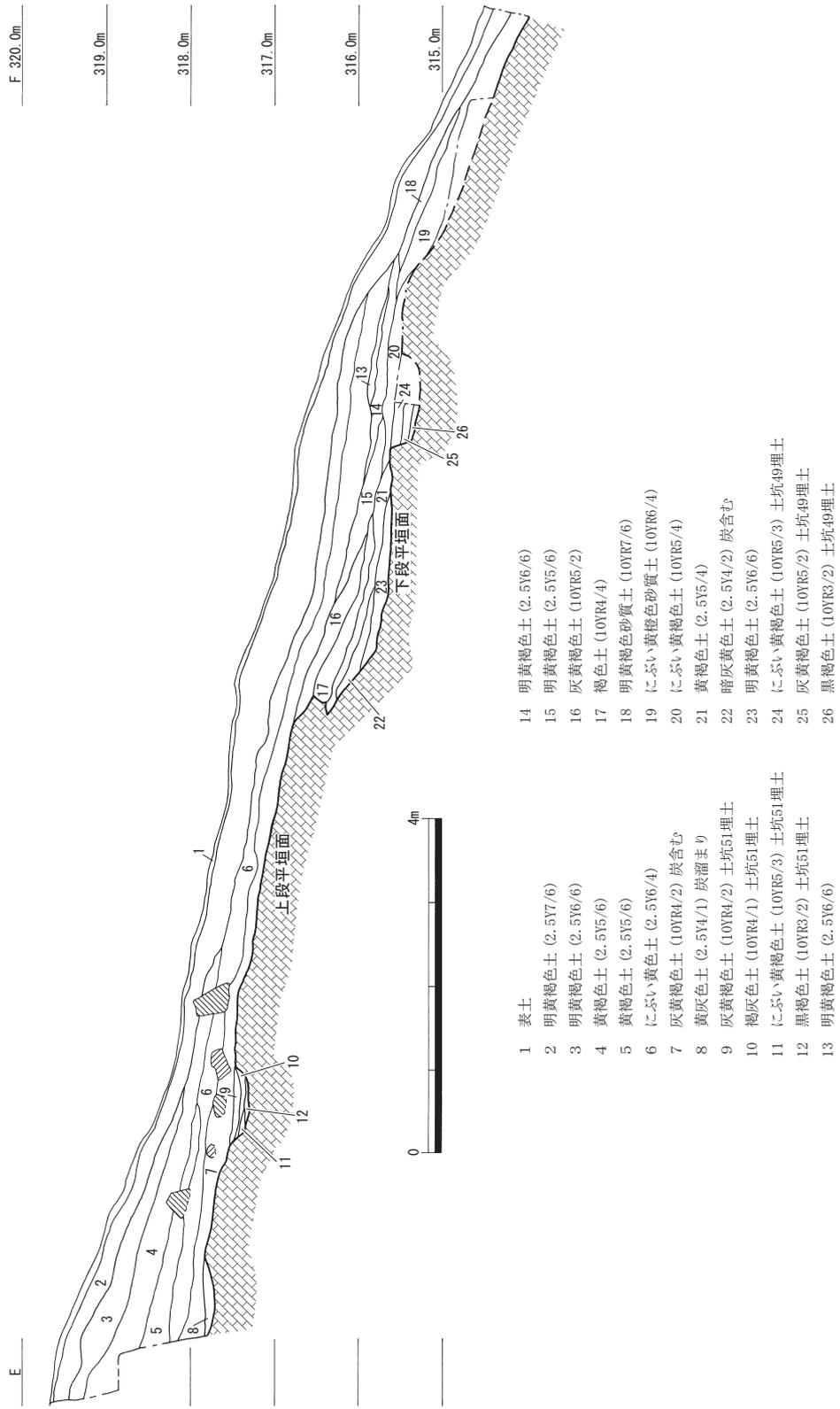
第124図 IV-1区周辺地形測量図（1/300）

と谷川を挟んだIV-1区にある土手状遺構1の構造解明及び周辺遺構の確認を目的とし、まず、IV-1区の南斜面に設定した2本のトレンチ(T1、T2)から調査を開始した。

T1(第125・126図)では人為的に掘削された上段と下段の平坦面2か所を確認し、土坑3基(ともに被熱土坑)と炭溜まりを検出した。上段平坦面は地山を削平しており、上層流土中で須恵器片307がみられたことから、平安時代ごろに造成されたものと推測できる。平坦面上には約2mの流土が堆積しており、上方の城壁等に利用されていた真砂土が流れ込んでいる。下段平坦面は、上段平坦面から約80cm下に位置する。土層断面観察から下段平坦面埋没後に上段平坦面が形成されていることが分かる。ここで土坑1基(被熱土坑)、焼土面1か所、炭溜まり2か所が見つかった。下段平坦面堆積土中から須恵器壺片306が検出されたことから、鬼城山築城時に掘削された平坦面の可能性が考



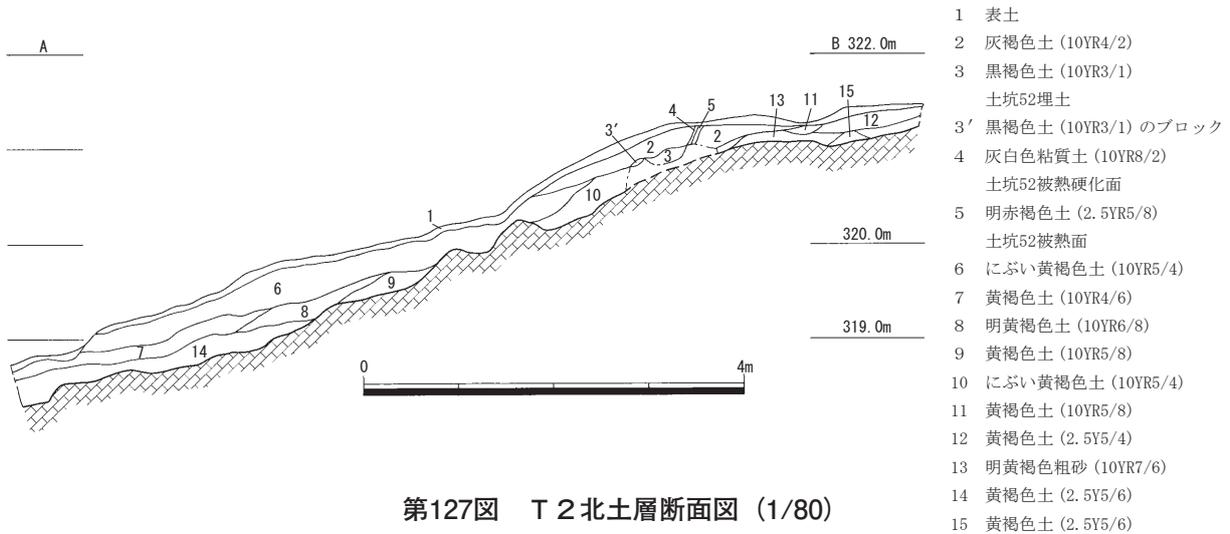
第125図 IV-1区遺構配置図(1/200)



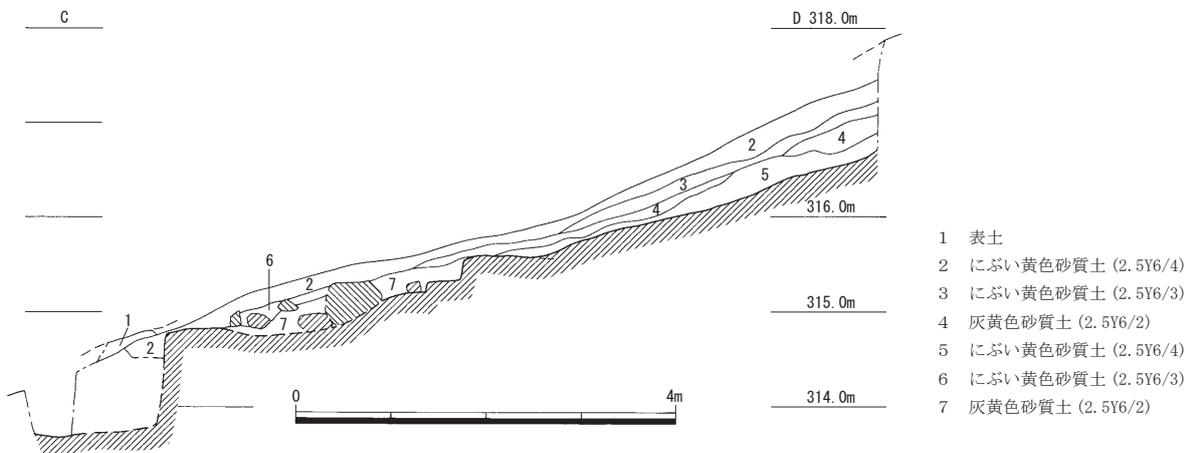
第126図 T1土層断面図 (1/80)

えられる。なお、学術報告では第5水門の背後に長方形の窪地があり、両側の尾根斜面を整形加工している様子が見えたとの記述があるが、T1下端ではその記述に相当する痕跡を確認することはできなかった。

T2は、土手状遺構1の中央を縦断 (T2北・南) あるいは横断 (T2東・西) するように設定し



第127図 T 2北土層断面図 (1/80)



第128図 土手状遺構1土層断面図 (1/80)

た。T 2北 (第127図) は土手状遺構1の上方に位置するが、起伏をなす地山面を検出した。この地山の凹凸は自然地形を反映していると考えられ、ここまでは人為的な地形改変が及んでいなかったと推定できる。トレンチ上方で土坑 (被熱土坑) 1基を検出した。T 2南・東・西では土手状遺構1の構造が観察できた。詳細については土手状遺構1で説明する。

土手状遺構1の前面C-D断面 (第128図) ではトレンチ下端を中心に花崗岩の岩盤が検出された。

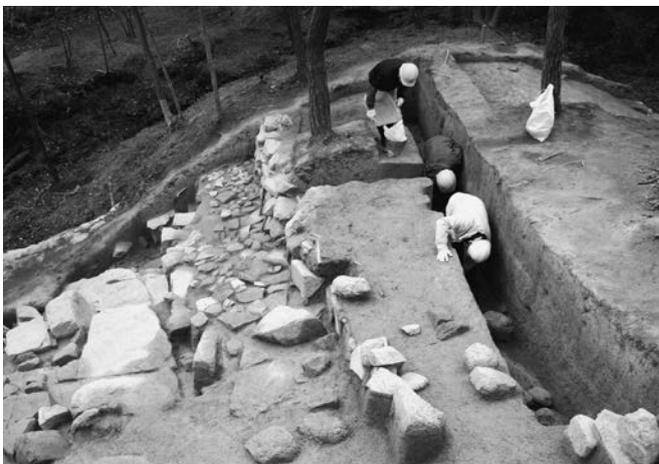


写真10 土手状遺構1作業風景 (北から)

岩盤はT 1下端では見られず、局所的なものであるが、土手状遺構1の構築に伴い段状に加工された形跡がうかがえる。

このようにIV-1区では、土手状遺構1に加え、T 1では平坦面が形成されていたことが分かった。鬼城山完成時には、第5水門あるいは屏風折れの石垣 (突出部) 背後に相当するこの場所に一定の空間があったことをうかがわせる。

(上村・金田)

土手状遺構1（第125・128～139図、巻頭図版3、図版19～22、写真10）

第5水門の上流約30mにある土手状遺構1は、第5水門に流れ込む谷川により中央部分が浸食され、南北に二分された状態で遺存している。そのうち南側は平成11年度に確認調査がなされ、T111で石垣と敷石が検出されている。今回の調査対象は北側で、調査前の地形観察で長さ約15m、幅約10m、高さ約3m程度の遺構の存在が想定できた。調査前から石材が散見され、確認調査の所見を考慮するとT111と同様の石垣等の存在が予測できた。土手状遺構1の背後はほとんど埋没し湿地を呈しているが、かつて貯水池であったことは想像に難くない。

調査は、土手状遺構1のトレンチから開始した（T2東・西・南）。T2東（第135図）では、土手状遺構1の構造解明を目的に掘削したが、上面流土（第2層）でまとまった石材が検出されたことから、これらの石材の平面調査も並行して実施した。その結果、これらの石材はあたかも石垣が倒壊したかのような状況で集積していたため、土手状遺構1のかつての石垣が崩落したものと考えた（第129・130図）。崩落状況から、これらの石材はこの位置からやや北より上方の①-④付近（第131・132図）から崩れたものと推定され、もともとその箇所に石垣が構築されていたことを示す証拠といえる。

これらの崩落石材を除去し、土手状遺構1上面の堆積土を掘り進めると、平成11年度調査（T111）で検出されたものと同様の石垣と敷石が出現した。さらに、敷石の下部でも、残存状況は良くないが、石垣状の構造物を検出することができた。このことから、土手状遺構1の東側は2段築成で、1段目上面の平坦面に敷石を設けていることが分かった。以下、土手状遺構1の東側を前面とし、敷石より上部の石垣を上段石垣、下部の石垣を下段石垣として説明する。

上段石垣は約6.5m分を検出した。上段石垣はT2東（第135図）の土層断面の掘り方から、盛土造成後に築かれていることが分かる。上段石垣は、石積みの特徴や構造から次の部位に分けることができる（第131・132図）。

①-①間は上段石垣が良好に残存している区間である。まず、上段石垣の基底部に方形の石材を縦置きに一列に並べ、その上面に扁平な石材を3～4段積み上げている。石垣の残存高は最高で93cmである。石垣上部は横目地を意識した積み方、いわゆる布積みで、幅約40～60cm、高さ10～15cm程度の石材を使用している。石垣の裏込めは、調査していないので不明であるが、T2東の土層断面などから、裏込めはあまりなされていないようである。上段石垣の勾配は約90度、①で折れをもち、内角170度で西に屈折する。

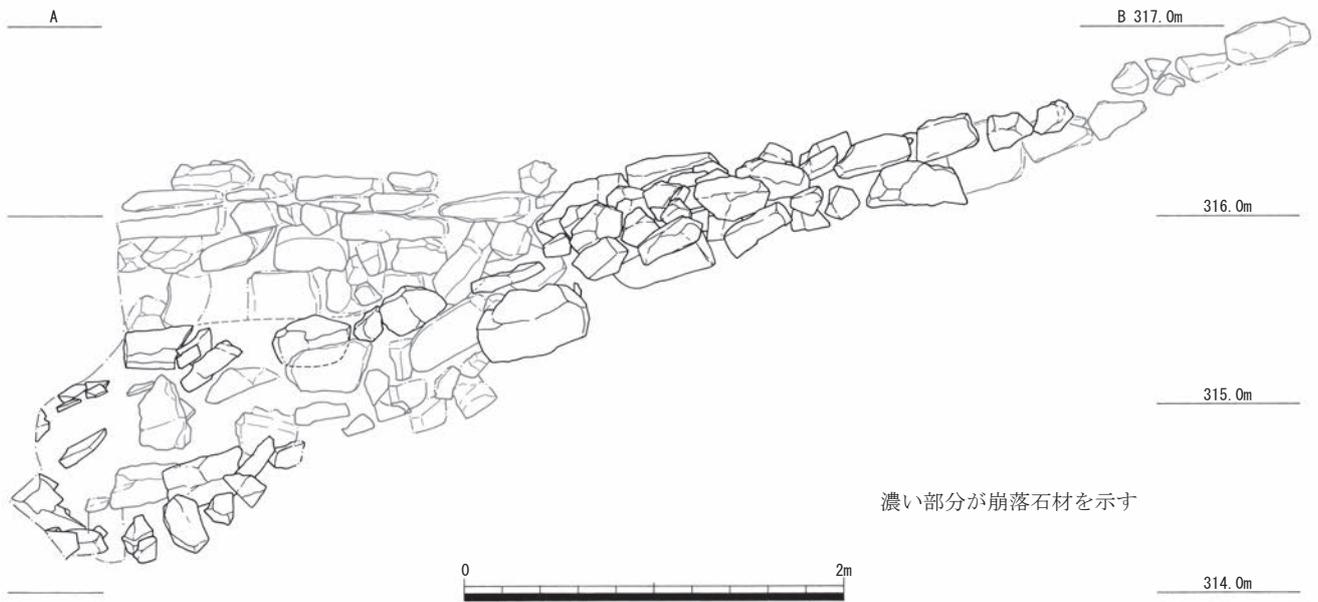
①-②間の石垣の残存状況は良くない。下半の石材は前方に傾斜しており、本来の形状を残していないものと思われる。石材の大きさは小口部分で幅40cm、高さ20～30cmのものが目立つ。基底石は石材1段分を横置きに並べたような状況で、その上面に数段分の積石がのる。最上部は平たい石材を用いており、前面が水平であることから、①-①間のような布積みであった可能性が高い。崩落した石材を考慮すると、さらに数段の石積みがあったと考えることができる。

②-③間は、幅40～50cm、高さ20～30cmのやや大きめの割石を一列に並べている。上面の石材は数石を残し欠失している。この部分の大半の石材は崩落し、下方へ転落したと考えられる。先述の崩落石材の大部分はこの区間の石垣であったと思われる。

③-④間は石材も小さくなり、石列状をなす。石材の大きさは幅30～40cm、高さ10～20cmのものが目立つが、それより小さい石材も見られる。上段石垣の基底石の傾斜は、①地点から徐々に上がっているが、この③地点から傾斜が変わり、22度とやや急になる。



第129図 土手状遺構1崩落石材平面図 (1/80)



第130図 土手状遺構1崩落石材立面図 (1/40)



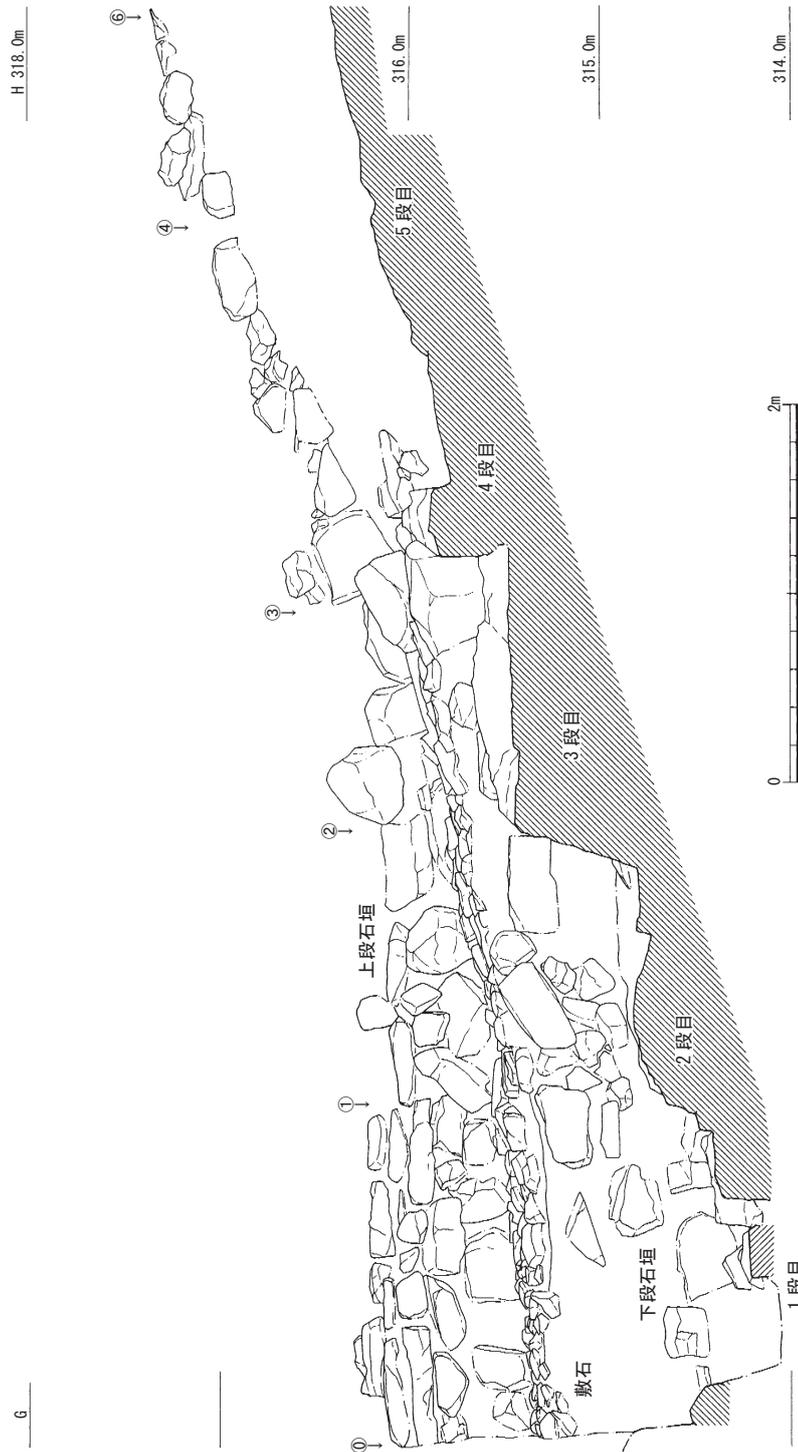
第131図 土手状遺構 1 (1/50)

⑤-⑥間は上段石垣の前面から内側に80cmほど入ったところで検出された石列で、その位置から石垣掘り方の中に埋置されたものと考えられる(第136図)。石列には幅20~40cmほどの石材が利用され、一部で3段の石積み状を呈している。石列は部分的に途切れながらも、上段石垣に平行するように設置されている。この石列は、盛土補強あるいは石垣構築のための必要性から補助的に埋置されたものと考えられる。

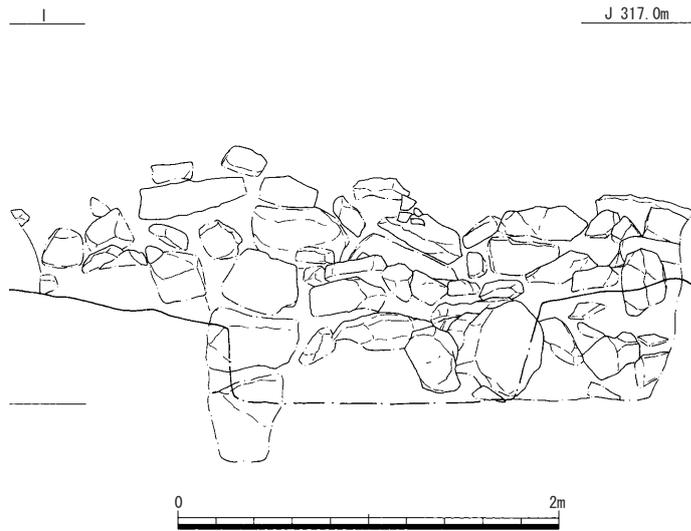
下段石垣は、①-②間を中心に約3.3m分が検出された。下段石垣は土手状遺構1前面の岩盤に取り付いているが、その岩盤は節理面を利用して階段状に整形されている様子がうかがえた。この整形による段を下から1段目、2段目と順に呼称すると(第132図)、下段石垣は岩盤の1段目と2段目を埋めるかたちで構築されていることが分かる。

下段石垣は残存状況が悪く、大部分が欠落したものであるが、基底石の一部や、根入りの深い石材等一部が残存していた。石垣の高さは、調査区内の最も高い部位で約1mを測るが、河床に近づくにつれ、石垣の高さも増していくものと推測される。石材は、小口部で40×30cmのものを最大に、幅20~30cm、高さ約30cmのものが使用されている。欠落している石材が多いため、石垣の積み上げ方等は不明な部分が多い。

敷石は、上下段石垣の間に犬走り状に敷設されている。敷石は、①-①間では東よりの下段石垣上面付近で残存状況が悪くなっているが、その他については全体的に良好で、土手状遺構1が尾根に取



第132図 土手状遺構1 前面石垣立面図 (1/40)



第133図 土手状遺構1 背面石垣立面図 (1/40)

さは標高約315.4mを測るが、その高さは3段目の岩盤の天端に近い。このことから、下段石垣や敷石を築くにあたっては、この岩盤の段が施工上の一つの基準となっていた可能性が考えられる。土手状遺構1の折れについては、上段石垣で触れたが、敷石も①で屈折している。単に屈折しているだけでなく、この①を境に敷石に使用されている石材にも違いが見られる。①-①間では長さ10cm前後の石材を多用しているのに対し、折れに相当する①以北では10~40cmとやや大きめの石材を使用している。このように折れが認められる①も、土手状遺構1を構築するさいの基準点の一つであったと考えられる。なお、上段石垣や敷石が①で屈折する理由であるが、①-①間の方向を保ったまま、まっすぐ延長した場合、岩盤に妨げられ十分な敷石幅を確保できないなど支障があったことから、岩盤をうまく取り込むために折れを設けたと推測できる。

敷石は下段石垣構築後に設置されたことに間違いはないが、敷石と上段石垣との構築順序については、これを明確に証明できる箇所が少ない。T2東の土層断面図(第135図)には、上段石垣構築後に敷石を設けたような図を掲載しているが、ここは上段石垣が崩落し地面にめり込んでいるようにも見えるため、適切な断面とはいえない。唯一、上段石垣の下に敷石が入っている部分(第134図下)があり、敷石の後に上段石垣を設置したと推定できる。当該箇所も上段石垣基底石が敷石の上にせり出している可能性も否定はできないものの、現段階では敷石と上段石垣の構築順序については、敷石のほうが先行すると考えておく。

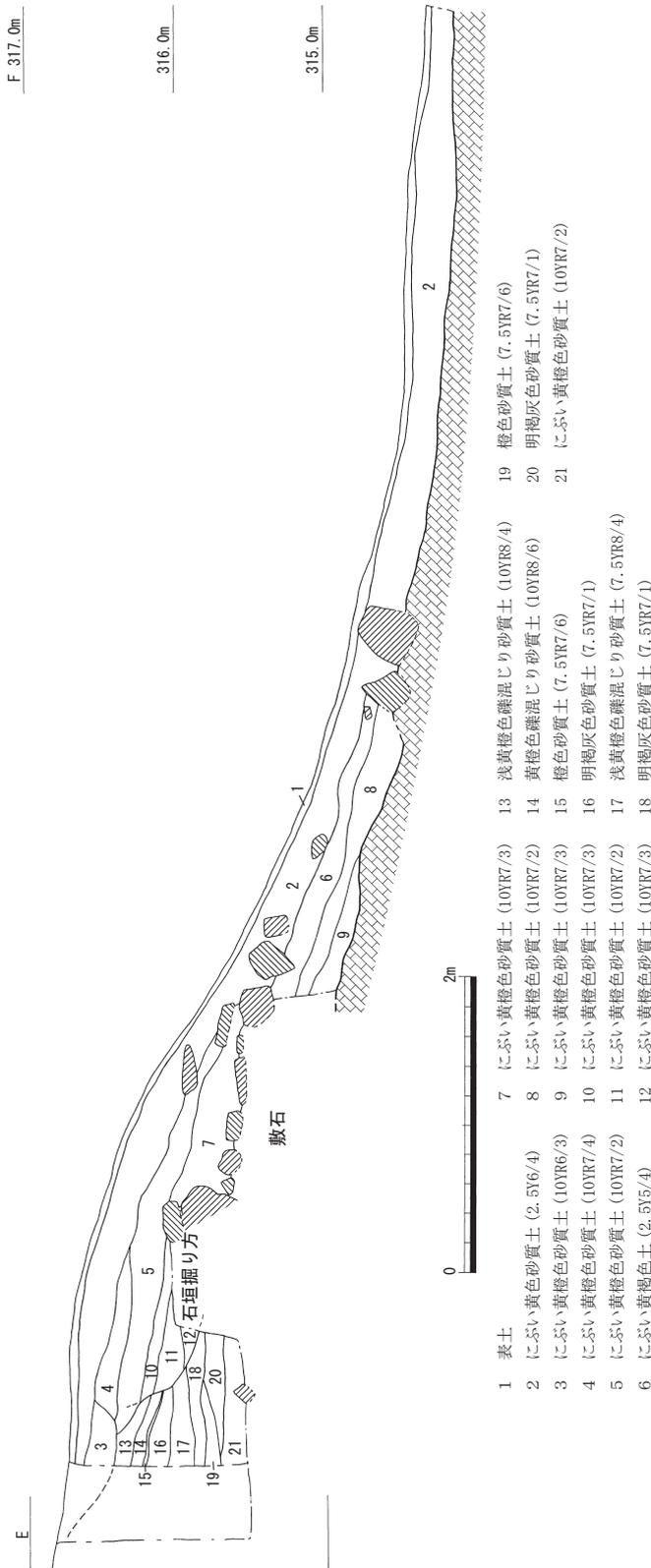
土手状遺構1では背面でも約3.5m分の石垣を検出することができた。土手状遺構1の背面は湿地のため、湧水や軟弱な堆積土により調査は困難を極めた。そのため、背面石垣を覆う転落石をすべて除去することができなかった。よって、今回掲載した背面石垣の平面図・立面図(第131・133図)は、崩落した石材の大半を残した状態での図面である。しかし、T2西の断面部分だけは崩落した石材を撤去し、本来の石垣の形状を記録することにつとめた。その結果、石垣の基底部までは調査できなかったが、上から5石分(約1.7m分)の石垣を検出することができた。背面石垣は、小口面で幅40~80cm、高さ30~40cmの大きな石材を使用している。貯水池の水圧に耐えることを想定してか、前面石垣の石材と比較すると、背面石垣のほうが一回り大きい。石垣の勾配は垂直に近い。背面側には前面石垣で見られたような敷石は検出されていない。敷石の標高315.4m付近にもそのような施設は見られ

り付く③付近にまで残っていた。敷石の幅は計測箇所で異なるが、①-④では幅約150cm、①-①間では約135cmを測る。敷石は水平ではなく、山側(北)にむけて上がっている。その傾斜は、①-①間では約5度と緩やかであるが、①を境にやや急になり12度の傾斜を測る。敷石は短軸方向でも傾斜がみられ、前面(東)にむけて10~20度下がる。敷石は4あるいは5段目の岩盤に取り付き、岩盤を通路として利用しながら、東に折れ曲がるものと推測できる。ところで、①-①間の敷石の高さ



第134図 土手状遺構 1 断面図① (1/50)

- 1 表土
- 2 明黄褐色土 (10YR6/6)
- 3 浅黄色土 (2.5Y7/4)
- 4 こぶい黄色土 (2.5Y6/3)
- 5 黄褐色土 (2.5Y5/4)
- 6 明黄褐色土 (10YR6/6)
- 7 こぶい黄橙色土 (10YR7/4)
- 8 こぶい黄褐色土 (10YR5/4)
- 9 明黄褐色土 (10YR7/6)
- 10 明赤褐色土 (5YR5/8)
- 11 こぶい黄橙色土 (10YR7/4)
- 12 明黄褐色土 (10YR6/8)
- 13 こぶい黄橙色土 (10YR6/4)
- 14 黄橙色土 (10YR5/8)
- 15 こぶい黄橙色土 (10YR6/4)
- 16 黄灰色細砂 (2.5Y6/1)
- 17 灰白色粘質土 (2.5Y8/2)
- 18 褐灰色細砂 (10YR5/1)
- 19 黄灰色粗砂 (2.5Y6/1)
- 20 灰白色粘質土 (2.5Y7/1)



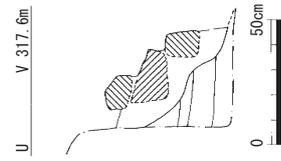
第135図 土手状遺構 1 断面図② (1/50)

砂や礫が比較的少ない層。④は花崗岩風化土と③にみられる灰色土が混ざり合う層。⑤は地表面に近く、土壌の影響もあるが、それでも①や②ほど花崗岩風化土を含まない層。⑥はT2西の下層部にみられるもので、礫や大きな石材が混入され、埋土も均質感に欠ける層。また、類似した土層のまとまりを工程区分としてとらえ、I～VIと表記する。以下、これらの分類に基づき説明する。

ないことから、背面側には元来敷石はなかったと判断できる。また、土層観察から、背面石垣は盛土造成後に盛土を掘り込んで構築していることが分かる(第138図)。なお、背面石垣はT2西付近で屈折しているように見える。前面石垣の①に対応する折れが背面石垣側にも存在している可能性が高い。

第134図は土手状遺構 1 の断面図である。背面石垣の基底部をどこに求めるかなど不確実な点もあるが、土手状遺構 1 は、下段石垣と背面石垣との幅800cm、上段石垣と背面石垣との幅650～665cmを測ることができる。

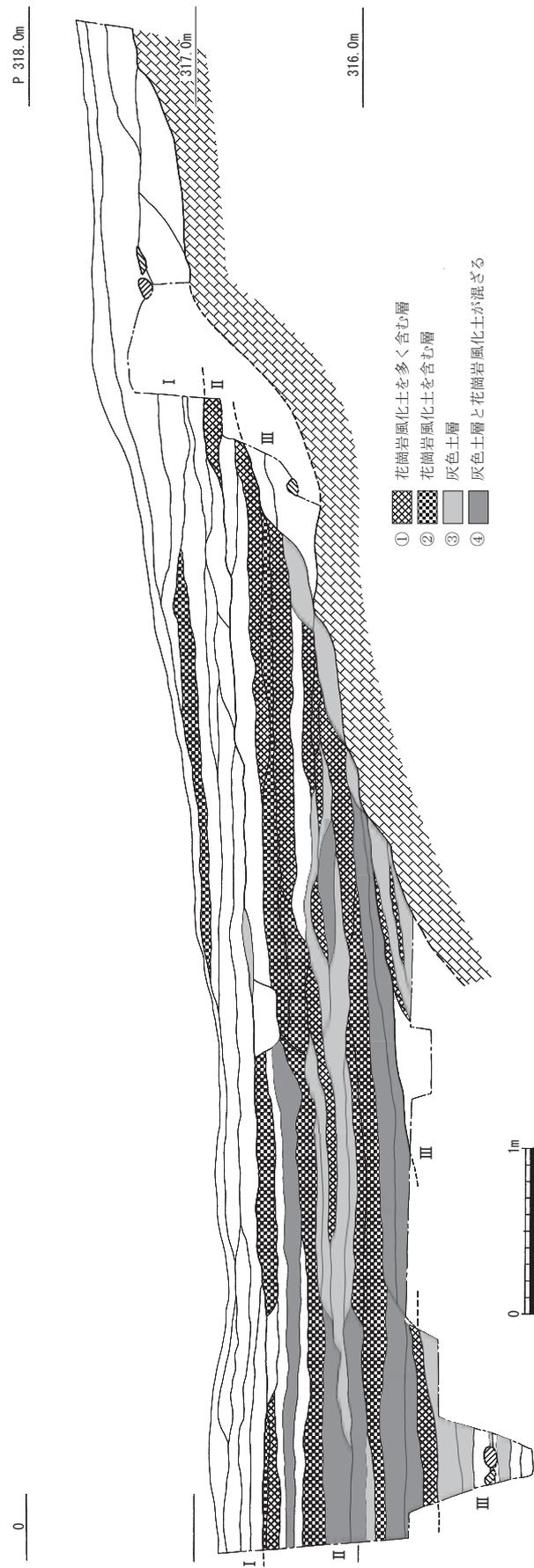
第137図はT2南の土層断面図で土手状遺構 1 の縦断面、第138図はT2西の土層断面図で土手状遺構 1 の横断面である。いずれも厚さ10cm程度の薄層を積み上げている様子が観察できる。これらの土層について、現地で土層の色調や含まれる礫や砂の特徴などを観察し、おおむね次の6層に大別した。①は花崗岩が風化した真砂土を多く含み、橙色を基調とする層。②も花崗岩風化土を含み橙色を基調とする層ではあるが、①より真砂土が少ない層。③は灰色砂質土を基調とする層で、粗



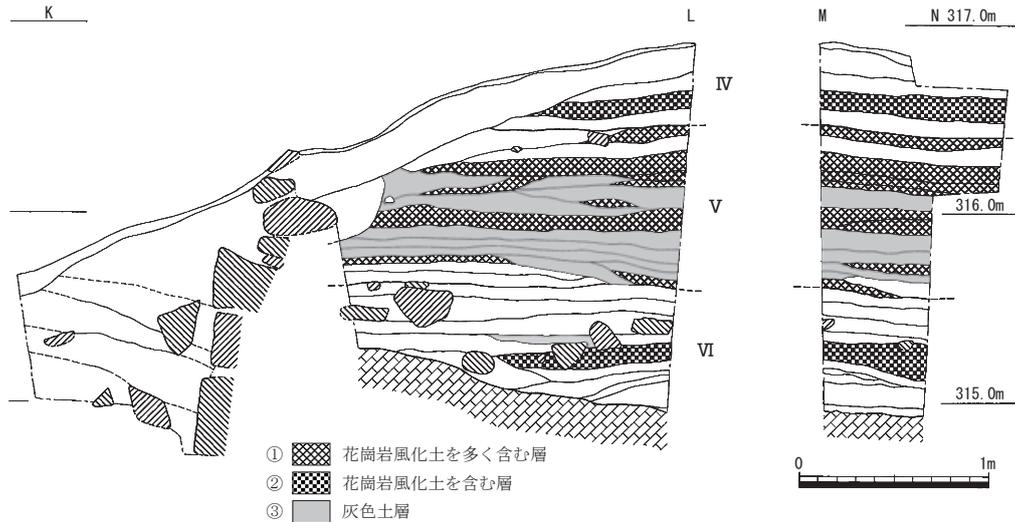
第136図 土手状遺構 1 断面図③ (1/30)

T 2 南 (第137図) では、トレンチの北側から南に向けて傾斜している地山(一部岩盤)層を検出した。土手状遺構 1 の盛土はその上から積み上げられているが、地山の傾斜に合わせているのではなく、水平を意識し造成されている。標高316m以下では③を中心とする灰色土層がみられた (Ⅲ)。盛土は基本的に砂質土で、土の締まりはほとんどない。部分的に径10cm程度の礫を含む。標高316mから316.6m付近では花崗岩風化土を中心とする①・②と灰色土層の③が厚さ10cmほどの薄層となって互層状に積み上げられていた(Ⅱ)。一見、版築を思わせるが土の締まりはあまりない。土層の中にはさらに細かく分層することができるものもある。標高約316.6m以上は地表面に近く、土壤化が進み⑤に相当する土層を中心に構成されている (Ⅰ)。なかには花崗岩風化土の薄層が認められる部分もあり、ここも土手状遺構 1 の盛土の一部であったと考えられる。

T 2 西 (第138図) では、標高315mで地山と考えられる面を検出した。地山は岩盤ではなく粗砂や礫を含む水成の堆積土である。この地山から標高315.6m付近まで黄褐色を基調とする⑥が堆積していた (Ⅵ)。この土層は均質感がなく、大きいものでは30cm近い岩石を含み、雑然と造成したかのような印象を受ける。地山が粘性をおびた軟弱な地盤であったので、工事着手前の地ならしの目的で岩石等を混入しながら埋め立てた可能性が考えられる。標高315.6mから316.5m付近では、①・②と③が互層状に積み上げられていた (Ⅴ)。断面は灰色と橙色の互層で一見版築を思わせるが、盛土に締まりはない。標高316.5m以上は⑤を中心とし、土壤化の影響を受けつつも、部分的に層状の堆積が観察できることから、この部分も盛土の一部と判断できる (Ⅳ)。



第137図 土手状遺構 1 断面図④ (1/40)



第138図 土手状遺構 1 断面図⑤ (1/40)

以上の観察から、土手状遺構 1 は縦断面と横断面でそれぞれ大きく 3 つの工程 (I ~ III と IV ~ VI) に分類でき、一部を除き互層状に土を盛り上げて築造されている。使用した土は、II と V で見られたように花崗岩風化土 (①、②) と灰色土 (③) で、灰色土の起源は不明であるが、花崗岩風化土については、この付近が花崗岩地帯であるので近場で産出したものを使用していると考えられる。敷石近くの盛土 III の上端レベルが標高約 315.5m で、敷石の標高約 315.4m と近いことから、盛土 III を積み上げた段階で、下段石垣や敷石が構築された可能性が考えられる。ただし、下段石垣や敷石の掘り方は、遺構保存のため掘り下げを行っておらず、確認できていない。

ところで、T 2 南調査時に、径 7 ~ 8 cm ほどの柱痕跡を思わせる遺構 2 基を検出し、現地説明会で柵列の可能性があると説明した。しかし、その後の調査で、この柱痕跡の下部に安定した土層を見出すことができず、これらの遺構は柵列ではなく木の根等の自然痕跡であると判断した (第139図)。

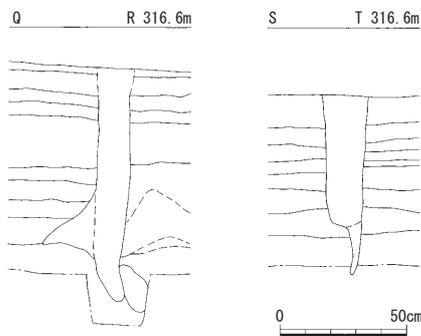
その他、土手状遺構 1 の上面において薄い炭層の広がり (炭溜まり) がみられた。遺物の出土もなく詳細不明であるが、表土直下であり古いものではなさそうである。

なお、今回は谷川部分を調査対象としていないが、河床で石材が数十点露出しているのを発見した。この石材は標高 312.8 ~ 313.8m 付近でみられ、下段石垣の底部より低い。平面的には下段石垣の延長上に位置するなど興味深い。しかし、石材は転石で、原位置を保っているとは考えられないため留意が必要である。しかし、周囲で散見された石材の量はあまり多いとはいえず、土手状遺構 1 で使用

された石材は石垣や敷石など部分的であり、堤体内の大部分は盛土であった可能性が高い。

以上の成果から、土手状遺構 1 は前面に 2 段、背面に 1 段の石垣をもつ堰堤で、基底部幅 800cm、上段部分の幅 650 ~ 665cm の規模をもち、折れや敷石を有することが分かった。なお、石垣や敷石に使用された石材の大部分は花崗岩であった。土手状遺構 1 の復元案の詳細は総括で述べるが、土手状遺構 1 は全長約 26.5m に復元することが可能である。

土手状遺構 1 の築造された時期であるが、調査した



第139図 土手状遺構 1 ピット断面図 (1/30)

盛土中には遺物は含まれていなかった。しかし、T111の石垣背面から須恵器甕片が出土していること、石垣や敷石、折れをもつ構造が鬼城山の城壁等にも共通して見られることから、この土手状遺構1は鬼城山の築城に伴い構築された施設であると考えられる。(金田・上柁)

土坑49 (第125・140図、図版23)

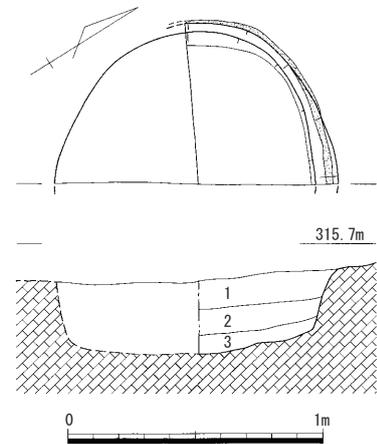
T1の下段平坦面で検出した。T1の南東隅で見つかったため、トレンチを拡張し、平面形を確認した。その結果、やや楕円形を呈する復元長径140cm、短径112cmの被熱土坑であることが判明した。土坑49の壁体には粘土が貼り付けられており、部分的に剥がれ落ちていた。壁面は平たい底部から壁際で垂直近くに立ち上がる。壁面は全面にわたり熱影響を受けていた。下段平坦面周辺に堆積土中から焼土塊が数点出土しており、これらも土坑49に伴う遺物の可能性が高い。粘土貼りの構造、壁体の立ち上がり、被熱度合いといった特徴は、土坑50～52とは様相を異にする。土層堆積状況や出土遺物から土坑50・51より古く、周辺から出土した須恵器306から、7世紀後半ごろに鬼城山築城に関連して掘削されたと考えることもできる。(上柁)

土坑50 (第125・141図、図版23)

T1の中央西端の上段平坦面に位置する。全体を検出するためトレンチを一部拡張した。壁体の一部が弱く被熱し、埋土下層に炭片や焼土粒が混入していることから、内部で火を焚いた可能性がある。径84cm、残存している深さ20cmを測る。上層堆積土出土の須恵器307や土坑51との関わりなどから、平安時代の可能性を考えている。(上柁)

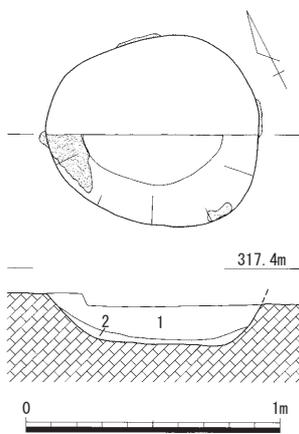
土坑51 (第125・142図)

T1の北より東端に位置する。底部から壁体にかけて一部が弱く被熱し第4層中に炭片や焼土粒が混入していることから、内部で火を焚いた可能性がある。土坑50と同じT1上段平坦面に位置しており、炭溜まりと同様に平安時代ごろの遺構と考えることができる。(上柁)



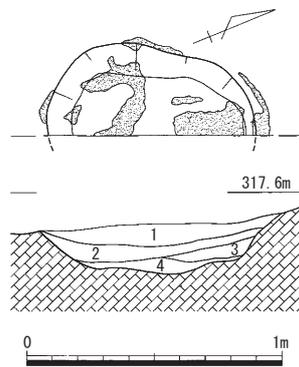
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
- 2 灰黄褐色土 (10YR5/2)
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 炭多く含む

第140図 土坑49 (1/30)



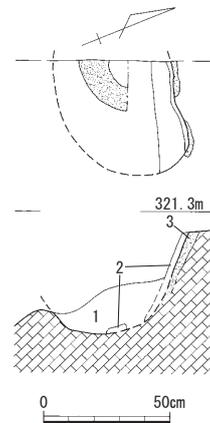
- 1 灰褐色土 (10YR5/2)
- 2 灰色土 (10Y4/1) 炭多く含む

第141図 土坑50 (1/30)



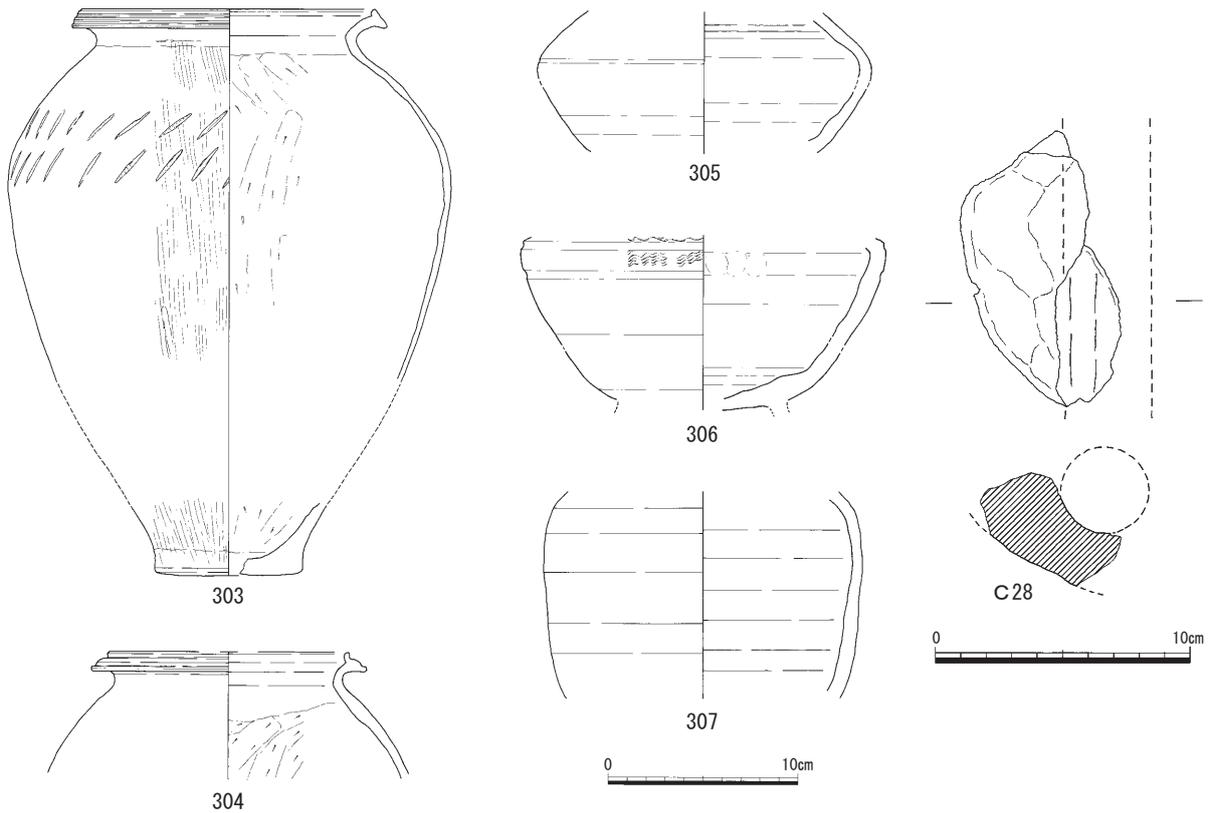
- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2)
- 2 褐灰色土 (10YR4/1) 炭含む
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) 炭・焼土含む

第142図 土坑51 (1/30)



- 1 黒褐色土 (10YR3/1)
- 2 灰白色粘質土 (10YR8/2) 貼り粘土、被熱硬化
- 3 明赤褐色土 (2.5YR5/8)

第143図 土坑52 (1/30)



第144図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3)

土坑52 (第125・143図)

T 2北の北端付近に位置する。南側に下がる傾斜変換点に位置し、南側は流出、欠失していた。北端部の被熱痕跡を検出した段階で東西方向にサブトレンチを入れたところ、底部に粘土を貼っていることが明らかになった。また、粘土は熱影響で硬化しており、その結果、内部で火を焚いた被熱土坑であると判断できた。残存状況は良くないが、長径約80cm、短径50cm程度に復元できる。出土遺物はなく、詳細は不明であるが、表土直下で検出されていることから、他の被熱土坑にくらべ新しい時期の可能性もある。 (上柵)

遺構に伴わない遺物 (第144図、図版38)

土手状遺構 1 東側の岩盤上面付近の流土中から弥生土器が出土した (303・304)。303は口縁と底部の破片であり、全体的に摩滅気味だがほぼ完形に復元できる。口径15.5cm、器高は推定30cm。肩部には2段の刺突文が、底部には焼成後穿孔がある。内面にはヘラケズリが施されており、弥生時代後期前葉のものと考えられる。IV-1区の北西側の尾根では、平成14年度に総社市教育委員会が確認調査を行い、T18で弥生土器を検出している (市報告18)。305~307は須恵器壺小片で、305・307はT1の第6・7層付近から出土、その下層の落ち込み堆積土から306が出土した。305と306は体部の屈曲度合いから、7世紀後半を中心とする時期のものと考えられる。306は底部に脚部が貼り付けられていた痕跡が観察できるほか、肩部に櫛描きによる波状文も見られる。C28は、中央に円筒形の口がつく土製品である。復元口径は約3.5cmで、胎土は粗く、焼成も良くない。いわゆる鞆羽口とは形状が異なり用途不明である。土手状遺構 1 上部より出土した。 (上柵)

3 IV-2区

概要（第123・145図、図版24）

IV-2区は、第3水門の上流約80mに位置する土手状遺構2を調査する目的で設定した。IV-2区の南側の尾根を越えると眼前に南門があり、南門は土手状遺構2と近い位置にある。土手状遺構2の存在する流水域はI区のある尾根の南から礎石建物群が所在するII区の西側までを含み、鬼城山内では第4水門の水系に次ぐ広い流域をもっている。土手状遺構2は北側の尾根がせり出している箇所、谷川を堰き止めるように造られている。土手状遺構2は中央部が失われているが、北側と南側は良好な状態で残存している。背後にはかつて貯水池として利用されていた湿地が存在し、現在も常に絶えることなく水が流れている。

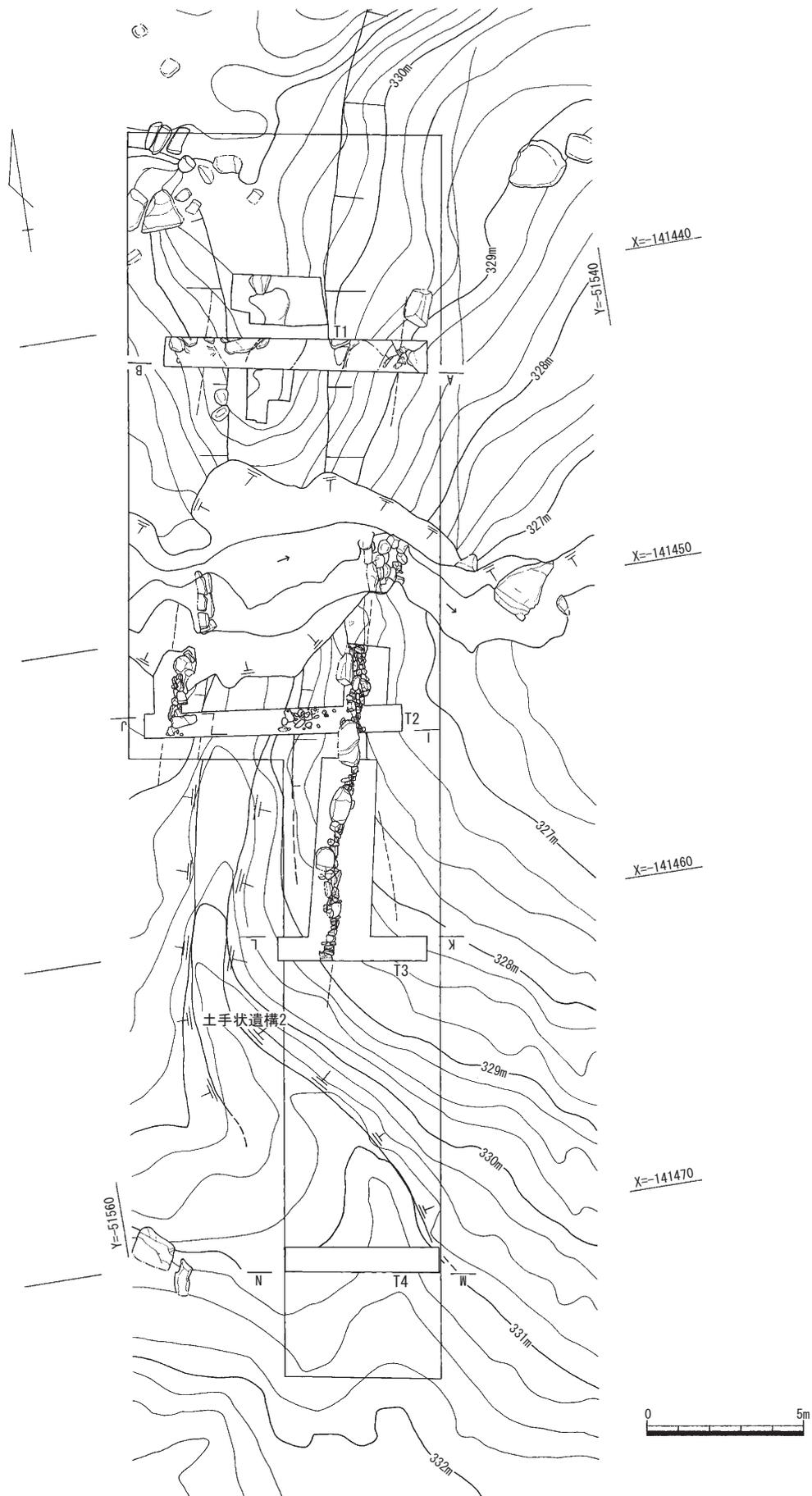
学術報告では第3水門の上流に溜池が現存しており、水門と有機的な関係にあったと報告しているが、土手状遺構2について具体的な記述が見られるのは市年報8が最初である。ここでは土手状遺構について長さ20m、幅3m、高さ1.5m、前面に粗いが3～4段の石組みがあると紹介している。また、土手状高まりが途切れる中央部に2段の石段があり、積み方が城壁と似るので鬼城山築城に伴う遺構と推測している。

今回の調査の結果、土手状遺構2は前面と背面に石垣をもつ、推定全長31～35m、幅約6m、残存高約2.5mの遺構であることが判明した。前面石垣は最大残存高で1.9mを測り、比較的小さい石を積み上げた後に大きな石材を上に乗せるという工法に特徴が見られる。石垣上面には盛土がなされ、盛土の残存高は約1mを測る。堤体頂部には性格不明であるが、溝状の遺構が認められる。土手状遺構2の盛土中からは須恵器が数点出土しており、この遺構が7世紀後半以降に築造されたことは明らかである。また、前面石垣の前面で平安時代と考えられる被熱痕跡が発見され、少なくとも平安時代までは前面石垣が露出した状態で存在していたことが想定できる。土手状遺構2は第3水門との関係などから鬼城山築城に伴い構築された施設と推定できるが、全体的に残存状況が良好であるため、部分的には後世に修築されている可能性も残る。築造目的は、他の類似遺構と同様に上流からの土石流が下流に流れ込むのを防ぐのと同時に、城内に必要な水を確保するためと考えられる。

なお、調査前から古代山城に伴う施設と指摘されていた谷川に存在する2段の石段については、今回の調査で土手状遺構2とは異なる施設で、後世の造作と判断した。（金田）

土手状遺構2（第145～155図、巻頭図版3、図版24～28、写真11）

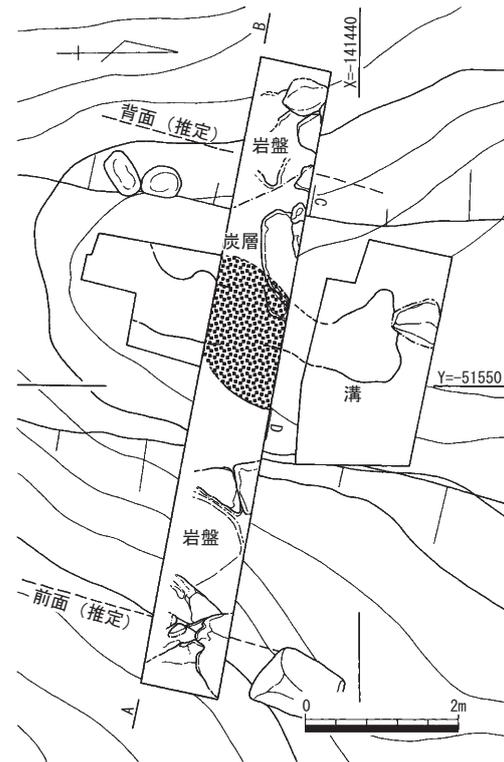
土手状遺構2は第3水門に至る谷川により南北に分断されている。調査前の地形観察では、北側の土手状遺構2の残存長約11m、幅約9.5m、高さ約1.5～2mを測ることができた。周辺には花崗岩の岩石が散見され、そのほとんどは地山に含まれる岩盤か転石であり、石垣等遺構に伴うものは見当たらなかった。他方、南側に遺存する土手状遺構2は長さ約16m、幅約6.5m、高さ約1.5mを測り、南門が築造されている尾根の北面に取り付いていた。土手の前面には、後に前面石垣の天端石と判明する大きな石材2石が地上に露出していた。調査前の所見では、T4付近から北西方向にのびる土手状の高まりが、T3上方で北に方向を変え土手状遺構2につながることから、土手状遺構2はこの土手状の高まりと一体で折れをなしている可能性が考えられた。しかし、後述するように、この土手状の高まりは南側の尾根から湿地へ向かう自然流路により形成された見かけ上の高まりであることが判明した。



第145図 IV-2区遺構配置図 (1/200)

土手状遺構2における調査区の設定は湿地の環境保全に配慮し、特に土手状遺構2の背面側の調査については必要最小限とした。したがって、調査は土手状遺構2の前面を中心とする4本のトレンチ(T1~4)で行ったが、その後、石垣が検出された前面については、調査区を拡張した。

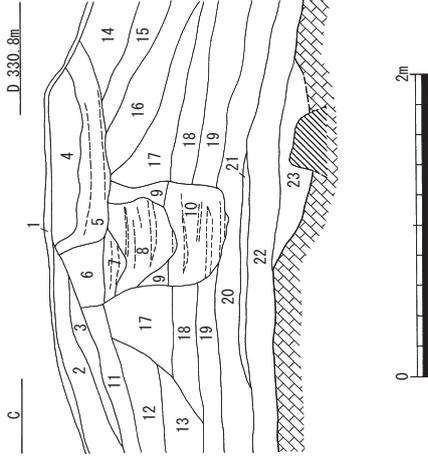
T1は土手状遺構2の北端に設けたトレンチで、土手状遺構2の盛土の構造を解明する目的で設定した(第147図A-B断面)。盛土の上面は流土(第2~19層)に覆われていたが、内面では幅約5.5mにわたり盛土(第20~44層)を検出した。盛土は、一部をのぞき、どの層も似通ったにぶい黄橙色土を基調とし、全体的に均質感があった。このことから、これらの盛土は比較的短期間に盛り上げられたかのような印象を受けた。盛土前面(東側)は、頂部から約40度の傾斜をもって下り、トレンチ下部の岩盤



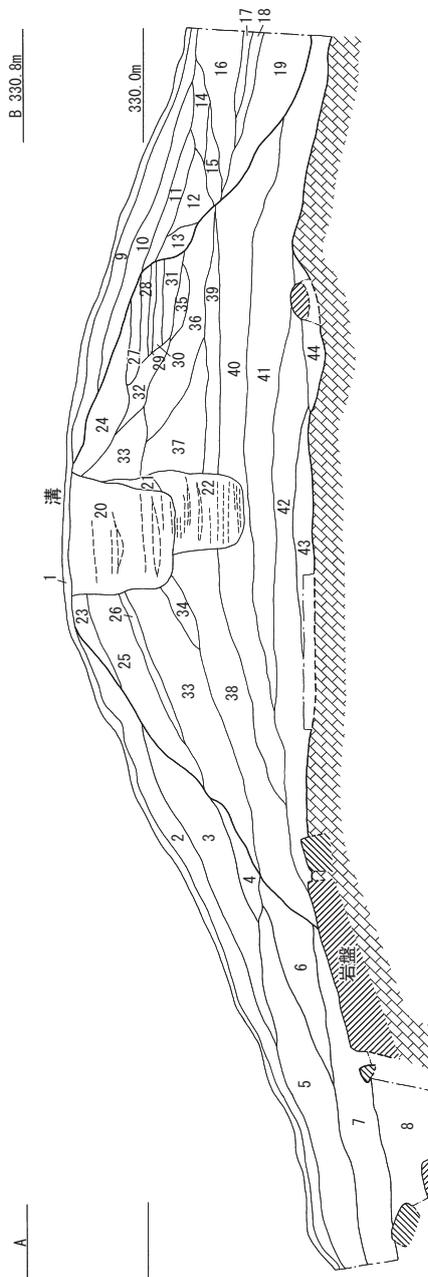
第146図 土手状遺構2 T1平面図(1/100)

特に人為的な加工痕跡は見出せないが、表面には平滑な自然面を残している。この岩盤の前面には60cmほどの段差があり、この付近が後述するT2やT3で検出された前面石垣の前端ライン付近に位置することから、この岩盤を取り込み土手状遺構2が構築されたと考えられる。一方、背面側の盛土は、やや変則的な箇所もあるが、堤体頂部から基底部まで平均して30~35度の傾斜をもつ。盛土の一部(第27~31層)で薄い水平堆積層が検出されたが一部分にとどまる。土手状遺構2の背面側の下端については、明確に検出できなかったが、T2の背面石垣のラインがトレンチ内を通ることから、トレンチ内の西端傾斜変換点付近を背面側の下端に想定したい。トレンチ中央部の地山は岩盤ではなく風化した礫を含む地山層となっている。この地山直上の第43層(A-B断面)、第23層(C-D断面)は炭層で、幅1.5mの楕円形の広がりをもつ。この炭層には被熱痕跡そのものは認められず、土手状遺構2を構築するために整形した地山直上に直接炭を散布したと考えられる。なお、出土遺物であるが、T1の盛土中で須恵器313を検出している。高台を有する杯で、7世紀後半以降のものである。

その他、T1の土層断面で土手状遺構2頂部から掘り込むように、土坑のような断面(第20~22層)が観察できた。そこで、同じトレンチのもう一方の面(C-D断面)についても精査した結果、同様の構造(第4~10層)が確認された。したがって、これは土坑ではなく溝状に広がる遺構と判断した。そこで、T1上面を拡張し平面的な広がり調査した結果、不整形ではあるが溝状の輪郭を確認することができた(第146図T1溝)。当初、この溝が柵列などを構築するさいの布掘痕跡である可能性を考慮し、柱穴などの検出にもつとめたが、今回調査した範囲では柱穴等の遺構は確認できなかった。この溝はトレンチの土層断面で深さ1.2m、少なくとも2回以上の掘り直しが見られる。埋土は厚さ1~3cmほどの薄層で、A-B断面の第22層内でも少なくとも30面以上が、第20層でも10面以上を確認することができる。この薄層は粒径を肉眼でも観察できる1~3mm程度の粗い真砂土が中心で、粘土やシルト分は少なく水が滞留したような土質ではない。また、版築を思わせるが締まりはない。類

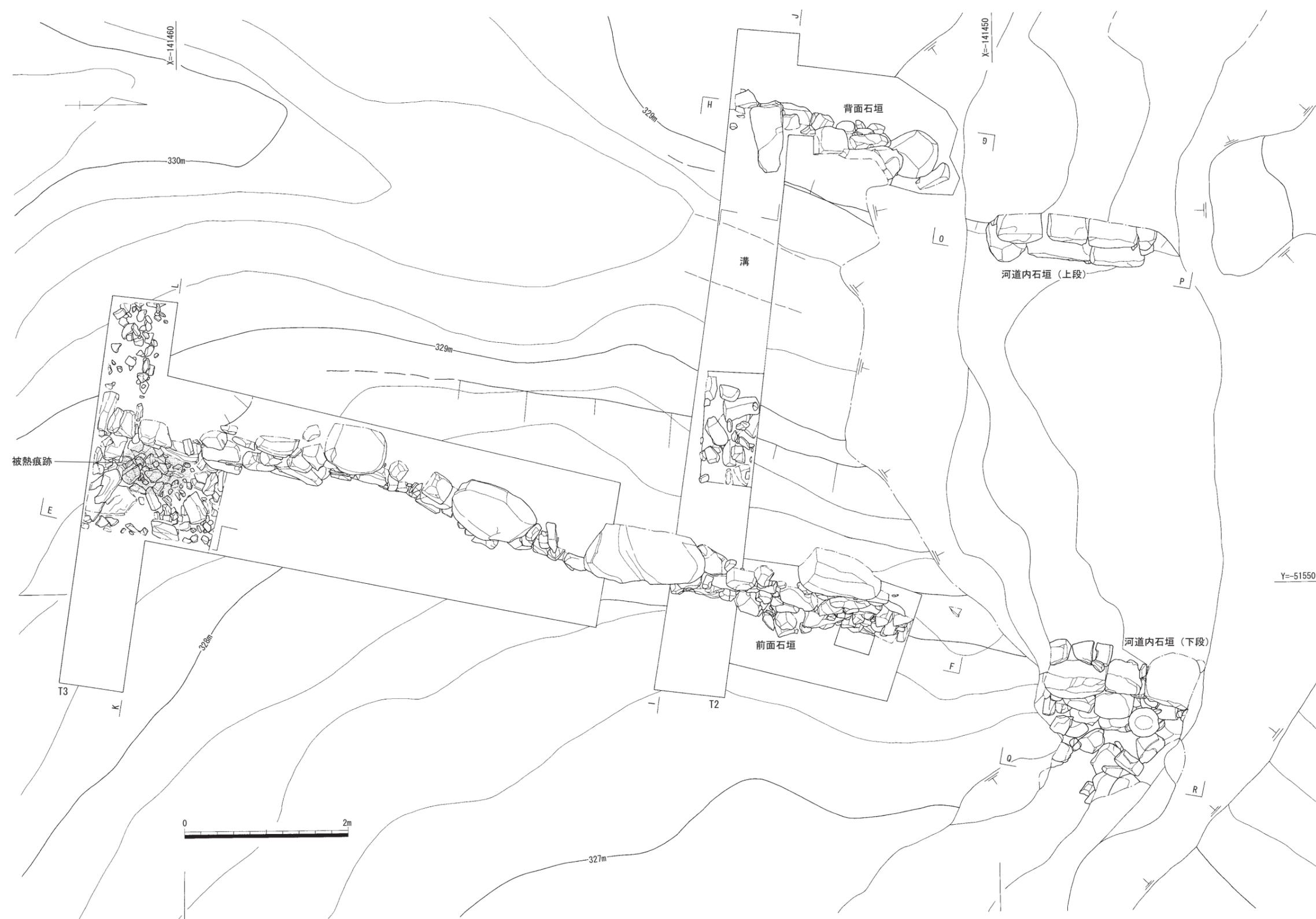


- 1 表土
- 2 黄橙色礫混じり砂質土 (10YR8/6)
- 3 浅黄橙色礫混じり砂質土 (10YR8/4)
- 4 にぶい黄橙色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 5 黄橙色礫混じり砂質土 (10YR8/6)
- 6 明黄褐色粘性砂質土 (10YR7/6)
- 7 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 8 明黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/6)
- 9 厚さ1~3cm程度の薄層含む
- 10 明黄褐色粘性砂質土 (10YR7/6)
- 11 厚さ1~3cm程度の薄層含む
- 12 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 13 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 14 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 15 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 16 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 17 明黄褐色粘性砂質土 (10YR7/6)
- 18 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4)
- 19 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4)
- 20 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4)
- 21 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4)
- 22 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/3)
- 23 褐灰色粘性砂質土 (10YR4/1) 炭含む、左図第43層

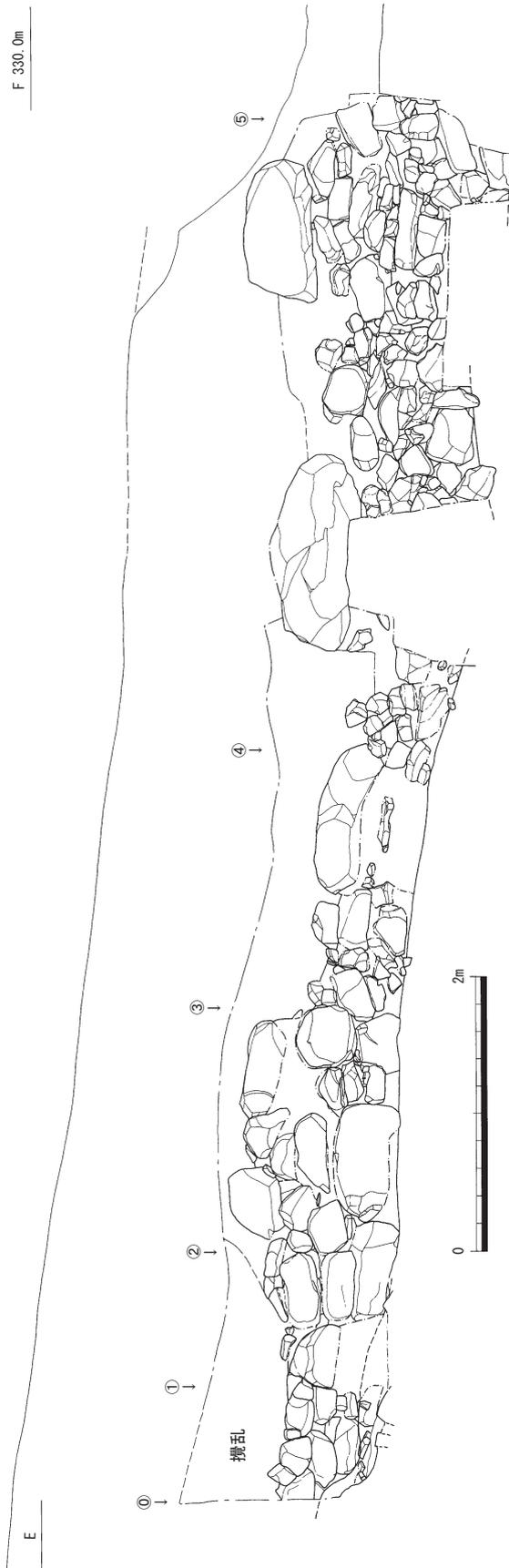


- 1 表土
- 2 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 3 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR6/4)
- 4 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/3)
- 5 灰黄褐色礫混じり砂質土 (10YR6/2)
- 6 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/2)
- 7 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4)
- 8 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR6/4)
- 9 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 10 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/3)
- 11 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 12 浅黄褐色礫混じり砂質土 (10YR8/4)
- 13 浅黄褐色砂質土 (10YR8/3)
- 14 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/3)
- 15 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4)
- 16 明黄褐色粘性砂質土 (10YR7/6)
- 17 浅黄褐色礫混じり砂質土 (10YR8/4)
- 18 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 19 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 20 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 21 厚さ3~5cm程度の薄層含む
- 22 明黄褐色砂質土 (10YR7/6)
- 23 厚さ1cm以上の薄層多く含む
- 24 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 25 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 26 浅黄褐色砂質土 (10YR8/4)
- 27 にぶい黄褐色礫混じり土 (10YR7/4)
- 28 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3)
- 29 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 30 浅黄褐色礫混じり砂質土 (10YR8/4)
- 31 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/3)
- 32 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/2)
- 33 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 34 明黄褐色粘性砂質土 (10YR7/6)
- 35 浅黄褐色礫混じり土 (10YR8/3)
- 36 明黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/6)
- 37 明黄褐色砂質土 (10YR7/6)
- 38 明黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/6)
- 39 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4)
- 40 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4)
- 41 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4)
- 42 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/3)
- 43 褐灰色粘性砂質土 (10YR4/1) 炭含む
- 44 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/3)

第147図 土手状遺構2 T1土層断面図 (1/50)



第148図 土手状遺構2 (1/50)



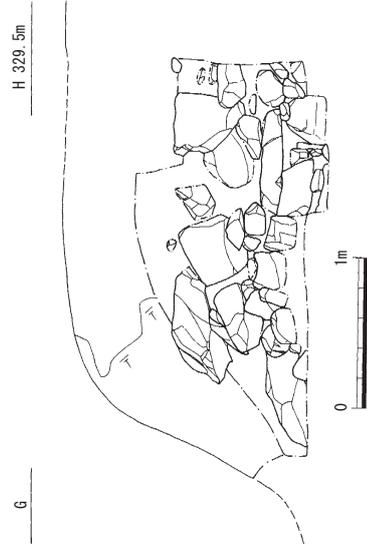
第149図 土手状遺構2前面石垣立面図 (1/50)

例にも乏しく、用途や機能は不明といわざるを得ない。

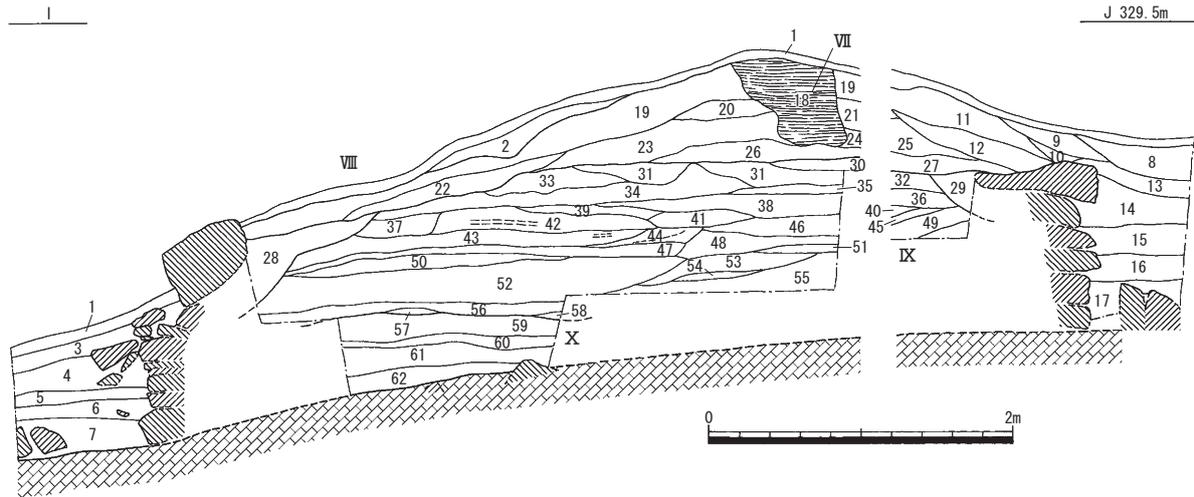
T 2、T 3は谷川から南側に残存する部分に設けたトレンチである。調査前からこの付近には大形の石材2石が露出しており、石垣の存在が想定できた。この大形石材が断面にかかるようにT 2を設け、それから約8m南にT 3を設けた。両トレンチで前面石垣を確認したので、その後、両トレンチをつなぎ石垣を調査した。前面石垣は、北側は谷川近くまで調査したが、谷川部分は欠失しているものと思われる。前面石垣はT 1では確認されていないことから、T 1の手前付近までのびていたと考えられる。また、石垣はT 3でも検出したが、もう少し南までのびて尾根につながるものと思われる。このように前面石垣については、約10m分を検出したが、未調査の部分を含めると、全長20mほどの石垣が前面に設けられていた可能性が高い。

石垣の積み方は詳細に見ていくとそれぞれ特徴がある。以下、第149図の区分により石垣の特徴を記述する。

①-②間は、石材の小口面が幅20~30cm、



第150図 土手状遺構2背面石垣立面図 (1/50)



- | | | |
|---------------------------|------------------------------|----------------------------|
| 1 表土 | 22 明黄褐色粘性砂質土 (10YR7/6) | 44 浅黄褐色砂質土 (10YR8/4) |
| 2 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) | 23 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4) | 45 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) |
| 3 浅黄色粘性砂質土 (2.5Y7/4) | 24 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) | 46 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) |
| 4 浅黄色礫混じり砂質土 (2.5YR7/3) | 25 にぶい黄褐色礫混じり粘性砂質土 (10YR7/4) | 47 黄褐色砂質土 (10YR8/6) |
| 5 橙色礫混じり砂質土 (7.5YR7/6) | 26 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/4) | 48 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) |
| 6 灰黄色粘性砂質土 (2.5Y7/2) | 27 にぶい黄褐色礫混じり粘性砂質土 (10YR7/4) | 49 橙色粘質土 (7.5YR7/6) |
| 7 灰白色粘質土 (2.5Y7/1) | 28 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4) | 50 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) |
| 8 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) | 29 浅黄色粘性砂質土 (2.5Y/4) | 51 明赤褐色礫混じり砂質土 (5YR5/8) |
| 9 黄褐色砂質土 (10YR7/8) | 30 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) | 52 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/3) |
| 10 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4) | 31 浅黄褐色粘性砂質土 (10YR8/4) | 53 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4) |
| 11 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/3) | 32 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) | 54 灰白色砂質土 (10YR7/1) |
| 12 黄褐色礫混じり砂質土 (10YR8/6) | 33 淡黄色砂質土 (2.5Y8/4) | 55 橙色礫混じり砂質土 (7.5YR6/8) |
| 13 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR7/2) | 34 淡黄色砂質土 (2.5Y8/3) | 56 灰白色砂質土 (10YR8/2) |
| 14 灰白色砂質土 (10YR7/1) | 35 淡黄褐色砂質土 (10YR8/3) | 57 灰白色砂質土 (2.5Y8/2) |
| 15 灰白色砂質土 (7.5Y7/1) | 36 浅黄褐色砂質土 (10YR8/4) | 58 灰白色砂質土 (2.5Y7/1) |
| 16 灰色粘性砂質土 (N6/) | 37 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) | 59 にぶい黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/3) |
| 17 灰色礫混じり粘性砂質土 (N6/) | 38 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) | 60 橙色礫混じり砂質土 (5YR6/6) |
| 18 明黄褐色礫混じり砂質土 (2.5Y7/6) | 39 浅黄褐色砂質土 (10YR8/3) | 61 明黄褐色礫混じり砂質土 (10YR7/6) |
| 厚さ0.5～3cm程度の薄層含む | 40 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) | 62 浅黄褐色粘性砂質土 (7.5YR8/6)と |
| 19 黄褐色礫混じり粘性砂質土 (10YR8/6) | 41 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) | 灰白色粘性砂質土 (10YR7/1)が混ざる |
| 20 明黄褐色粘性砂質土 (2.5YR7/6) | 42 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) | |
| 21 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3) | 43 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/3) | |

第151図 土手状遺構2 T2土層断面図 (1/50)

高さ20cmほどの塊石を積み上げ、高さ約60cmが残存している。地山は通称アプライトと呼ばれる岩盤で、整形後に岩盤直上から石材を積み上げている。石垣の上面は後世の攪乱を受けていた。攪乱埋土を除去し、残存石垣の上端部を検出することができたが、上端部の石材の中には、小口の幅が20cm程度と狭いにもかかわらず、奥行きが50cmと長いものがあった。これは、前面の小口面が小さくても根入りの深い石材が存在していることをうかがわせ、一見脆弱に見える石垣も見かけ以上に強固に積み上げられている可能性が高い。①-③間の石材は幅30～90cm、高さ20～50cmを測り、前面石垣の中では中規模程度の大きさである。石垣の裏面まで調査していないが、これらの石材は先ほどの①-②間のような深い根入りをもち、平たい石材の最大面を前面に向けて立てかけているかのようにであった。良好に残存している部分で4段分が残る。石垣に横目地を見てとれる部分もあるが、②の部分では縦目地も認められる。③-④間であるが、幅10cm程度の小さいものから50cm前後のもの、特に上端の石材は長さ110cmを測る巨大なものや大小様々な石材で構築されている。上端の大形石材は現状では本来の位置を保っておらず、前に傾き危険であったので下半部については十分な調査ができていない。観察できた範囲ではあるが、石の積み方は全体として雑然とした印象を受けた。④-⑤間は、土手状遺構2の中で石垣がもっとも良好に残存している箇所であり、最大残存高は190cmを測る。上端に設置している大形石材は長さ110～140cm、その他については小口幅が50～60cmの扁平な石材、幅30～40

cmの塊石があるが、幅20cm程度の小形石材も多い。石材の積み上げ方は乱雑で、最終段階で大形石材を最上部にのせている。⑤付近がこの谷で推定される最深部であるが、排水口など特別な施設は確認できなかった。前面石垣に使用されている石材は、最上部の大形石材は花崗岩、その他の石材も基本的には花崗岩であるが、通称アプライトとよばれる石材も若干利用されていた。

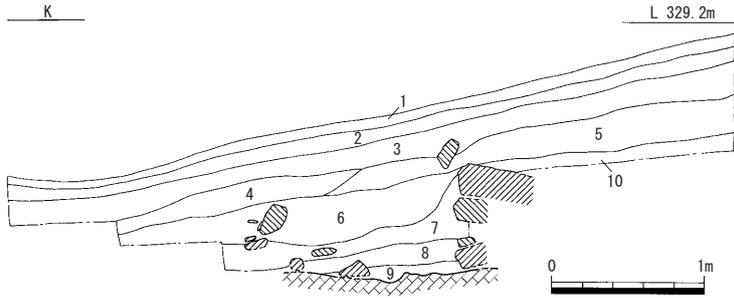
背面石垣（第150図）は調査区内で約2m分を検出した。石材の大きさは大きなもので幅60cm程度、小さいもので10cm程度と大小様々な石材が使用されている。残存高は約1m、石材の積み上げ方は若干崩れ気味とはいえ雑然とした印象を受ける。しかし、土層断面図（第151図）の最上部に示された石材は奥行き80cmを測り、根入りを深くとるなど石垣の強度に配慮した工夫がなされている。石材の大半は花崗岩で、わずかにアプライト等の石材が使用されている。

土手状遺構2は断面図（第151図）にみられるように、前面と背面石垣以外はすべて盛土である。遺構の基盤はアプライトなどの塊石を含む粘質土で、土手状遺構2着工前に、この場所を整地したさいに生じた岩や礫を含み込んだ層と考えられる。第148図T2平面の中央付近に一部その包含状況を図示している。土手状遺構2に伴う盛土は第18～62層で、その特徴から大きく4つの工程に分類することができる。一つめは第18層で、0.5～3cm程度の薄層により構成されている（Ⅶ）。花崗岩由来の真砂土と灰白色砂質土が混ざる。この層だけでさらに40層ほど細分が可能である。土手状遺構2の中ではよく締まっているが、締まりは強いものではない。堤体頂部から掘り込まれており、様相はやや異なるものの、T1で検出した溝に関連する遺構と考えられる。二つめは石垣上の盛土第19～27層（Ⅷ）である。明黄褐色土を基調とするシルト質の盛土で、真砂土の含有量は全体的に少ない。前面と背面石垣の上面から造成されており、この土手状遺構2が土塁状の構造物を石垣上に設けていたことが分かる。三つめは第30～58層（Ⅸ）である。斜行する土層もあるが、全体として水平を意識して盛り上げている印象を受ける。全体的に灰白色土層が目立つが、中には真砂土を多く含む層もあり、特に47層は土層断面で橙色がよく目立ち、容易に認識できる。他方、灰白色土を多く含む層として第41層などがある。また、第33・39・46・48層も多少の相違はあれ、真砂土や灰白色土を含んでいる。この灰白色土の起源であるが、アプライトなどの非花崗岩系の岩石の風化土と考えられる。四つめは第59～62層（Ⅹ）である。全体的に真砂土を多く含む。第60層は鉄分が沈着する橙色土であるが、それ以下の層になると土層の粒子が粗くなり、水の浸み出しも多くなる。第62層から須恵器甕片315が出土している。外面は細かい格子目タタキ、内面は同心円当て具痕跡が残る。焼成は悪い。

土手状遺構2の石垣の構築過程であるが、第28・29層が石垣の掘り方であることから、まず盛土Ⅹ・Ⅹが積み上がった後に、前面と背面の石垣を構築したものと思われる。十分に調査ができていないが、石垣の裏込めに使用された石材は少ないようである。石垣の勾配は前面石垣でおおむね80～90度、背面石垣で約90度を測る。石垣を築いた後は再び盛土Ⅷを積み上げたものと考えられる。盛土ⅧはT1でみられた盛土に対応するが、残存状況が良好であるため、この部分は後世の修築が及んでいる可能性がある。

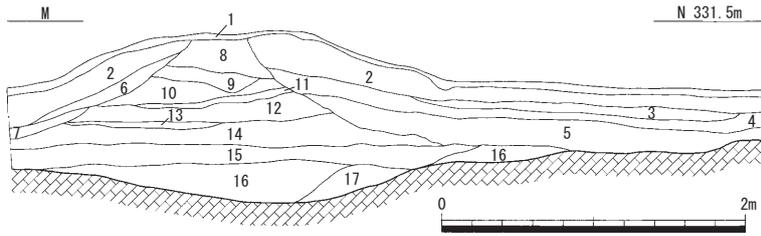


写真11 土手状遺構2作業風景（東から）



- 1 表土
- 2 明黄褐色砂質土 (2.5Y7/6)
- 3 黄色砂質土 (2.5Y7/8)
- 4 浅黄色粘性砂質土 (2.5Y7/4)
- 5 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) 炭少し含む
- 6 黄灰色砂質土 (2.5Y6/1) 炭含む
- 7 浅黄色粘性砂質土 (2.5Y7/3)
- 8 灰黄色粘性砂質土 (2.5Y7/2)
- 9 浅黄橙色粘性砂質土 (7.5Y8/6)
- 10 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR6/4)

第152図 土手状遺構2 T3土層断面図 (1/50)

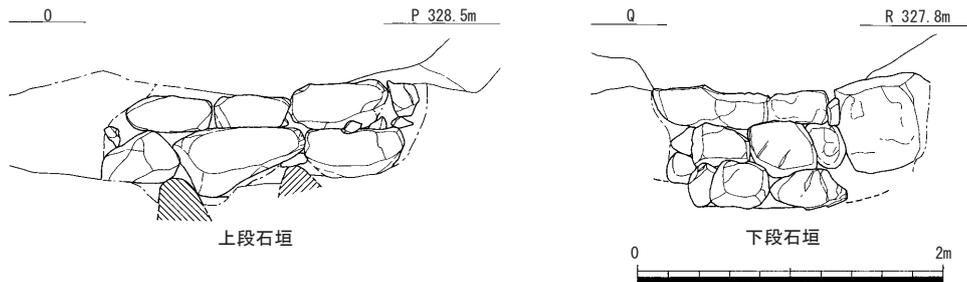


第153図 T4土層断面図 (1/50)

- 1 表土
- 2 明黄褐色砂質土 (2.5Y7/6)
- 3 淡黄色砂質土 (2.5Y8/4)
- 4 黄色砂質土 (2.5Y8/6)
- 5 淡黄色砂質土 (2.5Y8/4)
- 6 黄色砂質土 (2.5Y8/6)
- 7 淡黄色砂質土 (2.5Y8/4)
- 8 淡黄色砂質土 (2.5Y8/4)
- 9 淡黄色砂質土 (2.5Y8/3)
- 10 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)
- 11 浅黄色砂質土 (2.5Y7/3)
- 12 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4)
- 13 明黄褐色砂質土 (10YR7/6)
- 14 浅黄橙色砂質土 (10YR8/4)
- 15 浅黄橙色砂質土 (10YR8/3)
- 16 にぶい黄橙色礫混じり砂質土 (10YR7/4)
- 17 にぶい黄橙色砂質土 (10YR7/4)

なお、T3では前面石垣前面の堆積土に炭を含んだ層（第152図第6層）があり、さらに掘り進めたところ、前面石垣及び地山面に被熱痕跡が見られた（第148図）。部分的ではあるが、石材が赤色化したり、タール状の黒色物質が石垣や地山に付着したりしていた。石垣前面の埋土中には炭に混じって土師器碗317が出土したことから、平安時代中ごろにこの付近で火が焚かれていたことが推測できる。火を焚くさいに、石垣前面の埋土を幾分除去した可能性はあるが、少なくともこの時期までは土手状遺構2の前面石垣が地上に露出していたことを想起させる。

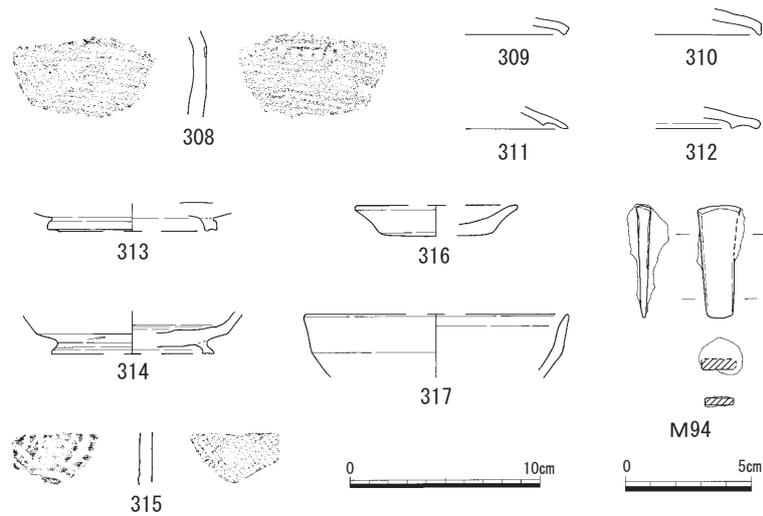
土手状遺構2の南側の基部であるが、現状の地形では、土手状遺構2はT3上方付近で南東方向に折れ曲がり、土手状の高まりとなってT4方向に向かっている。T4はこの土手状の高まりの構造解明を目的に設置した。調査の結果、この土塁状の高まりは人為的なものではなく、自然地形であることが分かった（第153図）。T4の第2～5層は流土であり、その下に第8～17層で構成される土手状の高まりが見て取れた。この第8～17層を構成する土は粒子の細かい砂質土で、小礫をとろとろに含んでいる。土層には水成作用により形成された薄層が確認される部分もあり、基本的にこれらは流水による自然堆積土であると判断した。T4付近は、上方からの流水が土手状遺構2背後の湿地あるいは前面の谷に流れ込む分岐点に相当し、その結果、流水の影響を受けずに取り残された部分が土手状の高まりとなって残存したものと推測できる。したがって、土手状遺構2は本体からまっすぐ南



第154図 河道内石垣立面図 (1/50)

側の尾根に取り付いているものと推定できる。

このように、土手状遺構2は前面と背面に石垣をもち、さらに石垣上に盛土を有する堰堤であることが判明した。詳細な復元については総括でふれるが、全長31~35m、幅約6mの規模を想定できる。築造時期は、盛土内から出土した須恵器から7世紀後半以降と考えられ、鬼城山築城を契機に築造された可能性が高いが、石垣上の盛土につ



第155図 IV-2区出土遺物 (1/4 · 1/3)

いては、一部後世に修築された可能性が残る。

ところで、IV-2区では、現在、谷川（河道）に上下2段の石垣が残存している（第148・154図）。上段石垣は2段で、下の石垣は上の石垣より20cm前に出ている。石材は幅50~90cm、高さ30~50cmほどで、すべて花崗岩である。下段石垣については、現状では3段が認められる。北側の幅約70cmを測る大形石材や同じく幅70cmを測る扁平な石材をのぞき、幅40cmほどの比較的そろった塊石を積み上げている。構築にあたっては横目地の意識が見られる。これらの河道内石垣と土手状遺構2の石垣を比べると、土手状遺構2が特に④-⑤区間において大小様々な石材を利用しているのに対して、河道内石垣は比較的大きさのそろった石を選択している点で相違が見られる。また、土手状遺構2の主軸がN-15°-Eであるのに対し、河道内石垣は上段がN-8°-E、下段がN-6°-Eで主軸方向も一致しない。そして、何より上段の石垣は土手状遺構2の背面の復元ラインから外れている。したがって、この河道内石垣は後世の造作と判断し、土手状遺構2とは別に築造されたものと判断した。これらの河道内石垣の評価について、市年報8では、石材の積み方が城壁と似るので古代山城に伴う遺構と推測していたが、上記の理由で、今回の調査では鬼城山築城に伴うものではないと判断した。（金田）
遺構に伴わない遺物（第155図、図版38・40）

土手状遺構2及び周辺から、数は少ないものの土器・鉄器が出土した。308は破片のうえ残存状況も良好でないが縄文土器と思われる。内外面に条痕のような調整が見られ、外面には刺突文が施されている。T2の土手状遺構2盛土から出土した。309~312は須恵器杯蓋である。309・310は蓋の内面にかえりが見られないが、311・312はわずかであるがかえりが認められる。314は高台付杯であり、土手状遺構2の周辺で出土した。高台は外方に踏ん張り、杯底部のやや内よりに貼り付けられている。316は土師器小皿でT1上面の表土中から出土した。317は前面石垣の前に位置するT3の第7層付近から出土した土師器碗の口縁部である。内面に弱い炭素吸着がみられる。M94は楔である。全長4.5cm、幅1.7cmを測る。前面石垣の前面の表土下で出土した。頭部は敲打により変形している。その他、IV-2区に関連して、総社市教育委員会が周辺で須恵器甕片を採集している（市年報8）。また、調査中に背後の湿地周辺でも須恵器甕片等が表採されている。（金田）

第5節 V区の調査

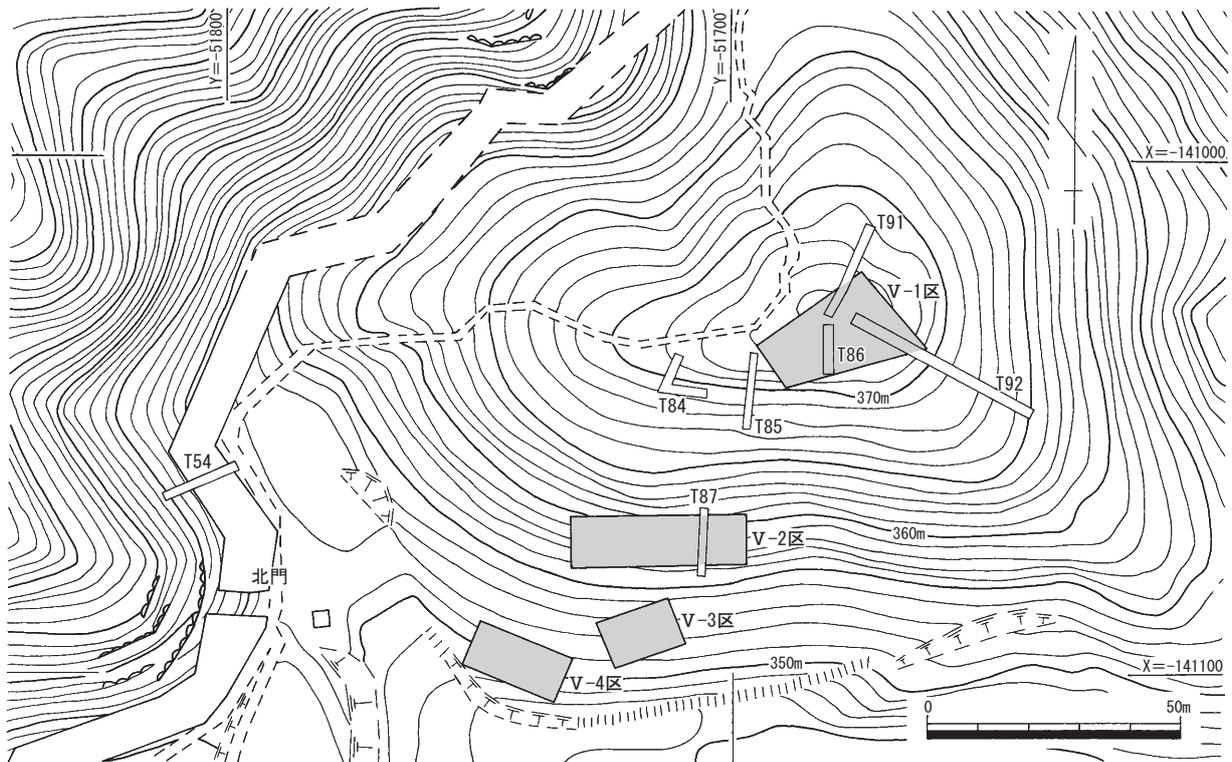
1 調査区の概要

V区は北門背後の丘陵に設けた調査区である。ここは西門背後の鬼城山に次ぐ城内で2番目に高い丘陵で、標高374mを測る。この丘陵の南麓には、現在は使用されていないが岩屋の集落から北門・東門を抜け奥坂に至る道があった。北門及びこの丘陵付近は、昭和40年代に造成されたモトクロスコース設置のため改変を受けており、学術報告には昭和50年ごろにモトクロス場付近で採集された須恵器や土師器が掲載されている。

平成11年度の調査では丘陵山頂と南麓を中心に調査区が設けられ、山頂のT91では縄文時代の落とし穴、T85では土師器杯の入った土坑が検出されている。また、南麓ではT87で地山斜面を人為的に削平した痕跡が見つかるなどの成果が報告されている。この痕跡について調査担当者は北門から谷裾を経て東門に通じる幹線道路等が造成された可能性を指摘している。

今回は、城内における土木工事の痕跡を明らかにする目的で、平成22年度に丘陵南麓のV-2～4区を調査した。その結果、V-2区で、平安時代ごろの掘立柱建物1棟が検出され、T87で確認された削平はこの建物に伴う造成であることが分かった。また、V-2区では流土中から7世紀後半代の土器が出土し、中には畿内産土師器と考えられる土器も含まれていたことから、翌年度、丘陵頂部にV-1区を設け、関連する遺構の調査を行った。その結果、鬼城山に伴う7世紀代の遺構は検出されなかったが、平安時代以降の遺構・遺物が出土し、鬼城山廃城後の城内利用を考える上で貴重な資料を得ることができた。

(金田)



第156図 V区調査区位置図 (1/1,500)

2 V-1区

概要 (第157図、図版29)

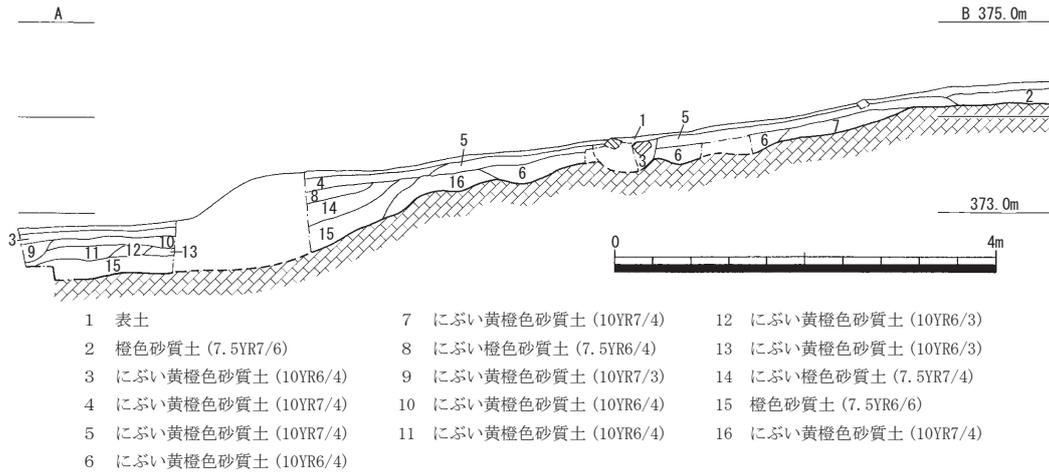
調査区は標高374mの山頂から南側のなだらかな平坦面に位置する。前年度に丘陵南斜面に設けたV-2～4区で7世紀後半代の須恵器や土師器が出土したことから、この丘陵頂部に古代山城に関連する遺構が存在する可能性が考えられたためV-1区を設定した。平成11年度の確認調査ではT86・T91・T92で調査が行われ、T86・T92では顕著な遺構は検出されなかったものの土師器が出土し、T91では縄文時代の落とし穴が検出されている。

調査区の周辺はかつて設けられたモトクロスのコースにより削平を受けているので、調査区は現地確認のうえ旧地形を保っていると考えられる場所に設定した。調査前の所見であるが、現地では自然石が点在するものの目立った遺構は認められなかったが、山頂から15mほど南東に高さ1mほどの花崗岩の露頭があり、磐座の存在を感じさせた。現地では、調査前から平安時代の土師器片を表採することができ、当該期の遺構の存在が予測できた。

調査は、T86・T91・T92の調査成果を参考にしながら行った。その結果、平安時代の集石遺構、時期は不明であるが被熱土坑等を検出した。集石遺構は山頂南側にあり、30～40石で構成される遺構である。遺構は平安時代の土器を含む包含層上に位置していることから、平安時代以降の遺構であることは確かである。周辺からは平安時代の土師器が出土し、この時代にこの場所で何らかの活動が行われていたことが分かる。また、磐座を思わせる露岩付近も精査したが、遺物が若干出土したものの、



第157図 V-1区遺構配置図 (1/200)



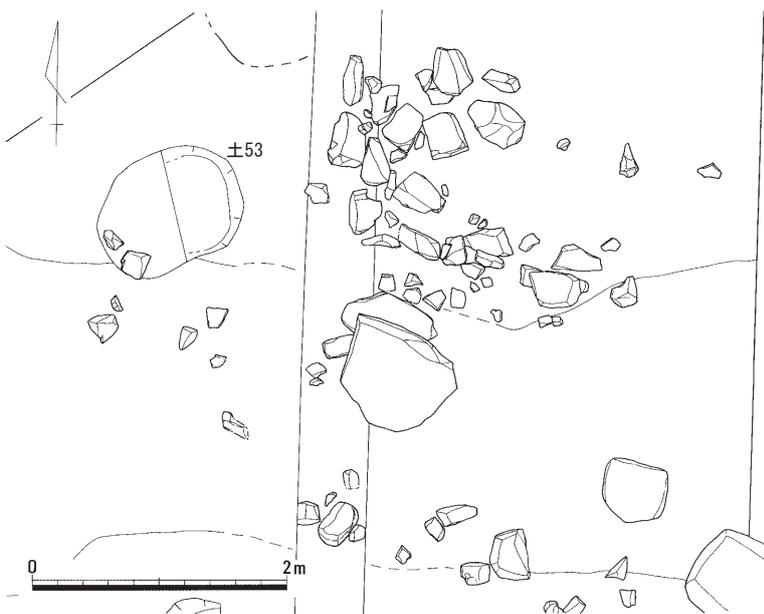
第158図 V-1区土層断面図 (1/80)

それ以外に人為的な痕跡を見つけることはできなかった。

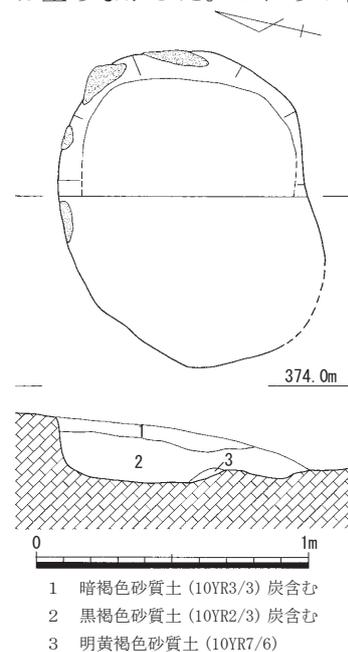
このようにV-1区では、古代山城の時代と考えられる7世紀後半を中心とする遺構は検出されなかったが、平安時代を中心とする遺構を確認することができた。この時期、鬼城山はⅡ区を中心に山岳寺院として利用されており、V-1区も同様の宗教的な活動が想定できる。(金田)

集石遺構 (第157~159図、図版29、写真12)

V-1区の西半部では、調査前から花崗岩の石材が散見されていたが、表土を除去するとおよそ4m四方に石材の集中する箇所(集石遺構)が見られた。この集石遺構の頂部に位置する最大の石材は長さ1m、幅約80cmを測る扁平な花崗岩であり、その下にも一回り小さい長さ80cmほどの石材が置かれていた。その他の石材は40cm前後を中心とし、さらに小さい石材も散乱していた。使用された石材は30~40石を数え、大部分が花崗岩であるが、一部流紋岩を含む。どの石材も明瞭な加工痕跡は確認できず、自然石あるいは割石が中心となっている。建物の基壇等様々な可能性を想定し石材の配列や高さ等の観察を行った。その結果、集石遺構の西側及び南側では石材の側面や前端がそろそろような箇所も見受けられるものの、全体として明確な意図を特定するまでには至らなかった。これらの石材



第159図 集石遺構 (1/60)



第160図 土坑53 (1/30)

は第2層あるいは第5層上（第158図）に位置している。特に第2層は細かい粒子の細砂であり、T86の西端付近まで広がりをもち、集石遺構を造成する目的で搬入されたものとも考えられる。第5層も集石遺構の下部に広がり、第2層とあわせ集石遺構に伴う整地土と考えられる。第2層あるいは第5層から土師器片（320・323・331）が出土している。その大きさや特徴からみて、平安時代中ごろを中心とする時期に属すると考えられる。したがって、集石遺構はこの時期以降に何らかの目的でつくられたものといえる。この時期、V-1区の南に位置するV-2区でも平安時代中ごろの掘立柱建物2が検出されている。また、城内ではⅡ区で平安時代の遺物がまとまって検出されており、特に掘立柱建物1では、須弥壇の基礎と考えられる部分に、均質な橙色土が使用されており、集石遺構の第2層との関連も考慮する必要がある。これらを踏まえるならば、この北門背後の丘陵でもⅡ区と同様に何らかの宗教活動が行われていた可能性がある。（金田）

土坑53（第157・159・160図）

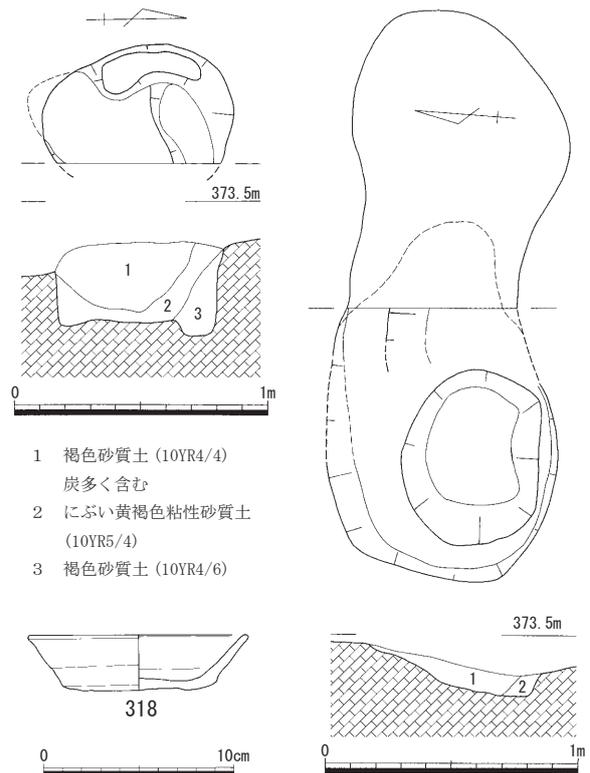
山頂部の近く、集石遺構の西側に位置する。長径116cm、短径92cmの楕円形で、東側を半截したのみであるが断面形態は浅い椀形、深さは21cmを測る。被熱による赤変がみられ、埋土には炭を多く含む。遺構面が集石遺構の整地土よりも下位の層で検出されたため、集石遺構に先行する遺構と考えられる。遺物の出土はなく、詳細な時期等は不明であるが、平安時代以前の遺構と推定できる。（三輪）

土坑54（第157・161図、図版38）

集石遺構や土坑53からやや南に下った緩斜面に位置する。規模は長軸76cm、短軸47cm以上、深さは36cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面は箱形に近いが、両脇が少し深くなる。第1層には炭を多く含む。掘り始めてすぐに平安時代ごろの土師器杯**318**が出土している。橙色を呈し、底部は切り離し後に押圧している。時期は出土遺物から平安時代中ごろと考えられる。（三輪）

土坑55（第157・162図）

調査区南東の露岩の北西に位置する。規模は長軸227cm、短軸92cm、深さ21cmを測る。検出当初の平面形は楕円形のもの二つつながったような不定形を呈していたが、掘り下げると西半部にまとまり、径約70cmの土坑となった。この土坑の埋土が周辺に拡散していたため、検出面が不定形になったものと考えられる。半截した西側

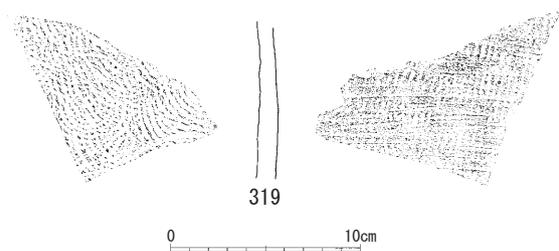


- 1 褐色砂質土 (10YR4/4)
炭多く含む
- 2 にぶい黄褐色粘性砂質土 (10YR5/4)
- 3 褐色砂質土 (10YR4/6)

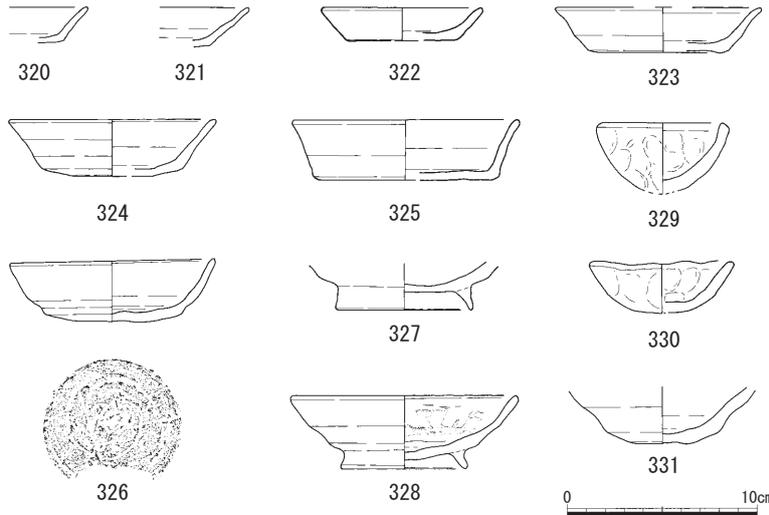
第161図 土坑54
(1/30)・出土遺物
(1/4)

- 1 褐色砂質土 (10YR4/6) 炭含む
- 2 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)

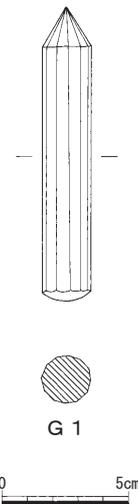
第162図 土坑55
(1/30)



第163図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第164図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



第165図 ガラス製品 (1/3)

では、一段低くなった部分が見られ、そこに炭の混じった土が入っていた。平面図中の点線で示した部分にも炭混じり土が見られ、掘り直した上での火の使用が考えられる。遺物は出土しておらず、周辺からも遺物の出土はなく、詳細な時期等は不明である。(三輪)

遺構に伴わない遺物 (第163・164・165図、図版37・38・40)

V-1区では遺構に伴わないが土師器を中心とする土器がコンテナ1箱ほど出土した。そのうち、古代山城が営まれた7世紀後半代の遺物としてあげられるのは須恵器甕片319のみである。V-1区の南東に位置する露岩付近で出土した。外面は平行タタキの後ナデ、内面は同心円当て具痕を明瞭に残す。320～323は土師器皿である。320は小破片であるがT86に近い第2層(第158図)で出土した。323は集石遺構付近(第2層あるいは5層)で出土した。324～328は土師器杯及び碗である。324は胎土の粗い橙色の土師器である。底部は摩耗のため切り離し痕跡は明瞭でないが、押圧による凹凸が残る。325は底部をヘラで切り離した後に押圧を施している。口縁部の一部が黒色化しており、灯明皿としての用途が考えられる。326は底部にヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。内面には粗いハケメが残る。

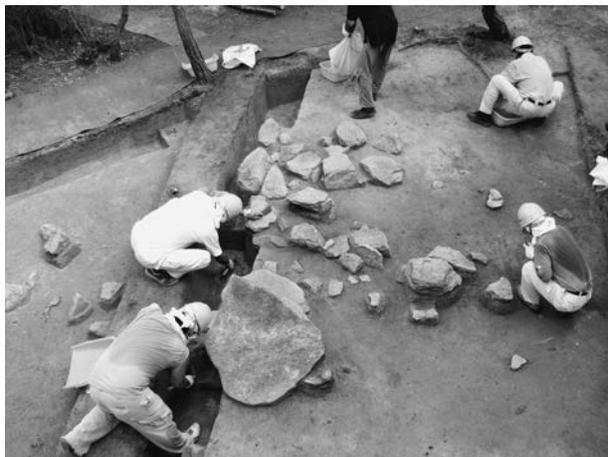


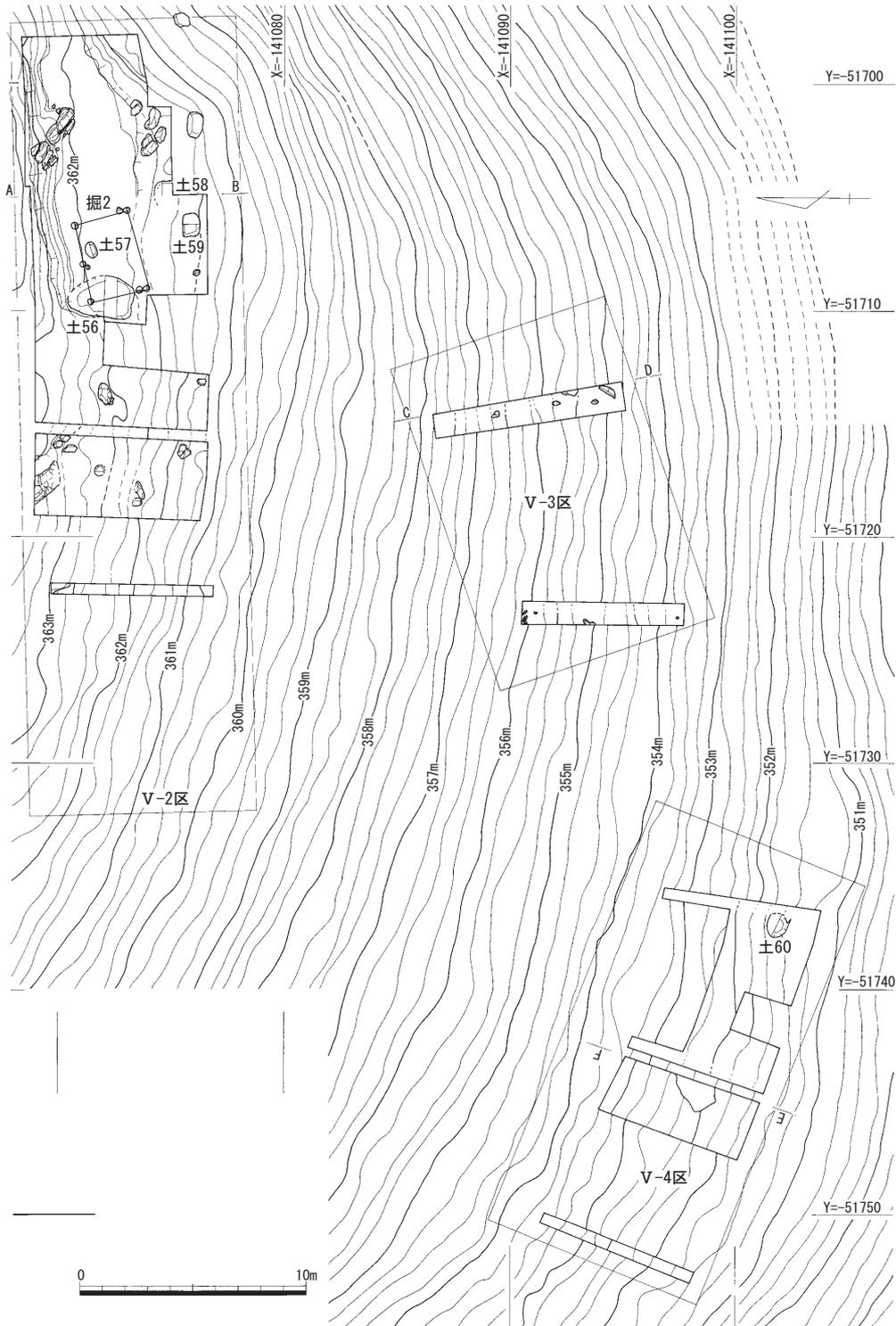
写真12 集石遺構作業風景 (南から)

る。327・328は高台付碗である。327の胎土は精良である。328は内面に煤の痕跡を残す。329～331は手捏土器である。331は集石遺構に伴う第2層あるいは第5層で出土している。G1は調査区南端で直立した状態で出土した。ガラス製品で断面12角形の現代遺物である。この場所が丘陵頂部に近く、磐座のような花崗岩露頭の脇に位置していることから、当地に宗教的な意味をこめて使用されたものと考えられる。(金田)

3 V-2~4区

概要 (第166~169図、図版30)

V-2~4区は北門の東側で第4水門の最上流部に面する南向き斜面にある。この地点では、平成11年度の確認調査によって人為的な地山カット部分を確認されており、新たな城内施設や、北門と



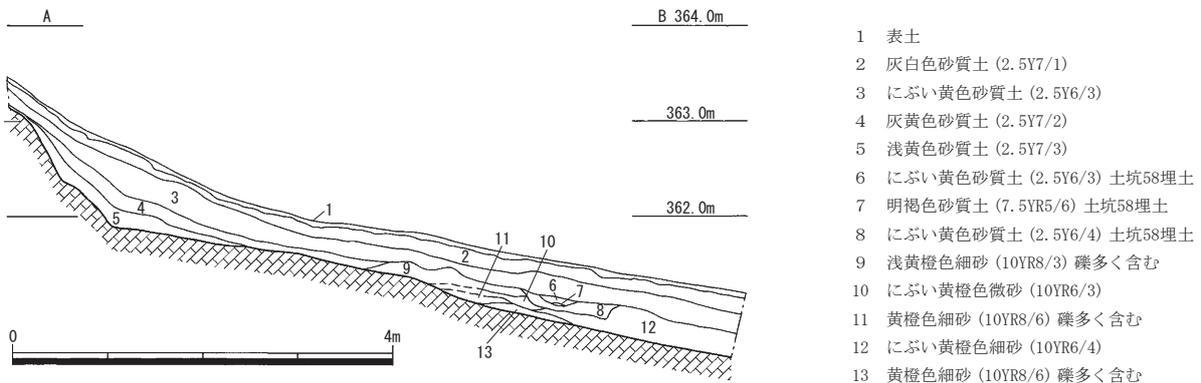
第166図 V-2~4区遺構配置図 (1/300)

城内とを結ぶ通路等の存在が想定されたことから、その検証が調査の主要な目的となった。

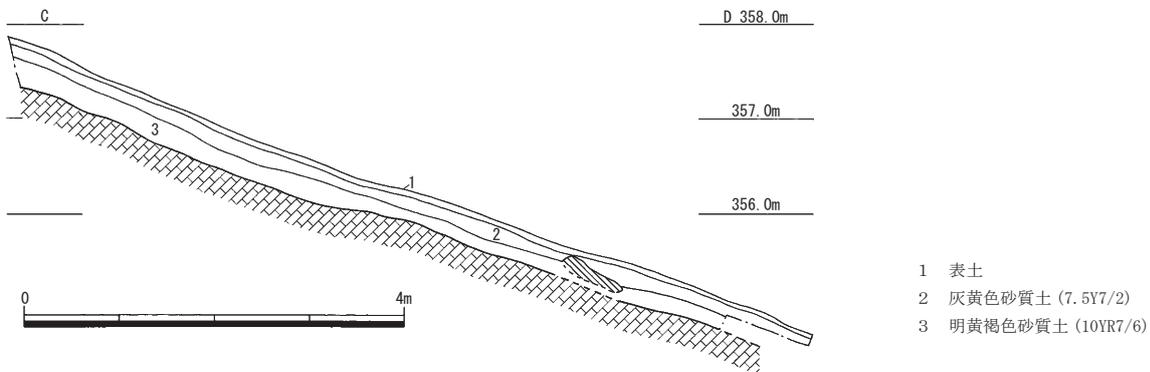
V-2区は、確認調査のT87で造成工事痕跡が確認された地点にあたるため、予想される造成面の範囲を取り込んで設定した。結果、調査区の東半部で長さ約12mの細長い平坦面を確認したが、西端部は行き止まりで北門へは通じておらず、東端部も先細りとなり城内側へ続かないことから、通路の存在は考えがたい。平坦面上の北半部では掘立柱建物1棟と土坑4基を検出した。調査区の西半部では明瞭な地形の変更は確認できず、検出遺構は柱穴1個のみであった。

V-3・4区はV-2区の南側及び南西側に設定した調査区である。いずれの調査区でも平坦面等は確認できず、堆積土も自然の流入土のみであった。V-4区において被熱土坑1基を検出した。

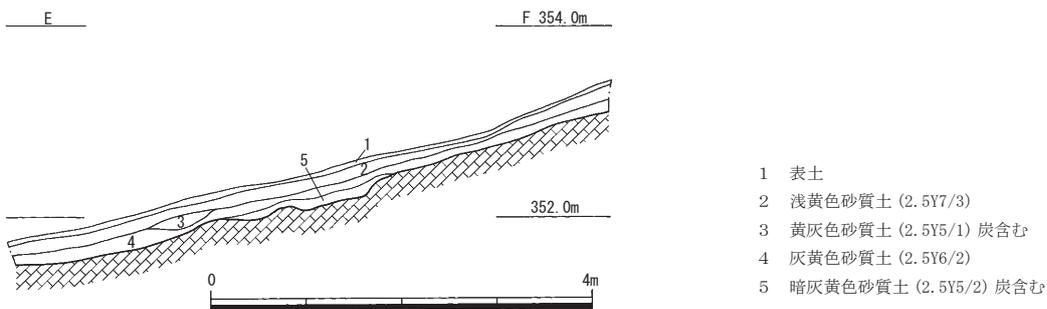
以上のように、この3調査区での検出遺構は少なく、またその時期についても確実に古代山城に伴うものとは断定できず、むしろ廃城以後の平安時代ごろに属する可能性が高いものであった。（岡本）



第167図 V-2区土層断面図 (1/80)



第168図 V-3区土層断面図 (1/80)

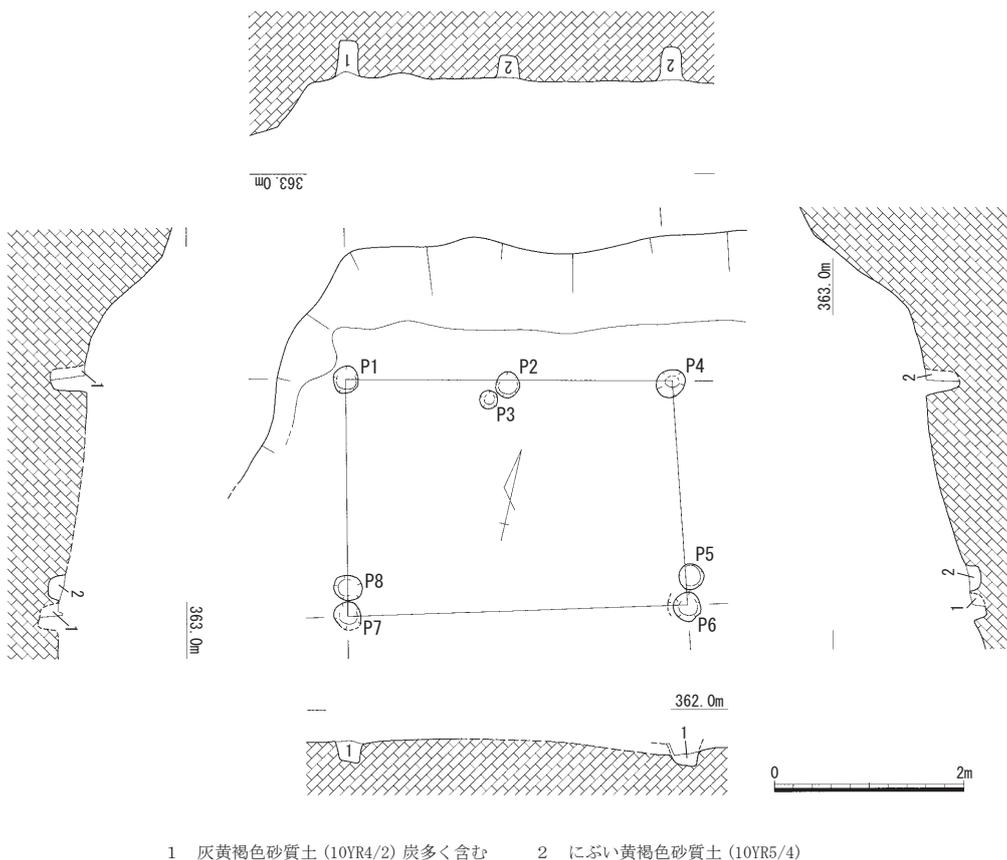


第169図 V-4区土層断面図 (1/80)

掘立柱建物2 (第166・170図、図版30)

V-2区の平坦面の西端近くに位置する2×1間の掘立柱建物である。規模は桁行358cm、梁行251cm、面積8.6㎡である。建物の背後は斜面をカットして造成され、雨落溝は伴っていない。建物の平面形はややいびつな長方形を呈し、南側桁行では中央の柱穴を欠く。南側の柱穴は両方とも2本の柱穴が接して検出されたことや、北側中央のP2の南西にやや小さいP3が接して存在することは、具体的な構造は不明ながら柱の建て替えや補助的な柱の存在等を示唆するものであろう。各柱穴は地山面上で検出されたが、南東端の柱穴P6では地山より上位の層を切り込んでいることがろうじて観察できたので、構築にさいしては盛土による造成を行っていた可能性が高い。各柱穴では平・断面とも柱痕は確認されていないが、柱穴の大きさから柱は掘り方いっばいに建てられたと考えられる。建物の東側にも平坦面が続くことから、この建物がさらに東側にのびる、あるいは別の建物が存在する可能性を考え精査したが検出できなかった。

建物の時期は、柱穴から遺物が出土していないため明確でない。ただ、建物検出面の直上の堆積土から平安時代の土器353が出土していることや、II-5区で平安時代の掘立柱建物の検出例があることなどを参考にすれば、平安時代の可能性が考えられる。(岡本)



第170図 掘立柱建物2 (1/80)

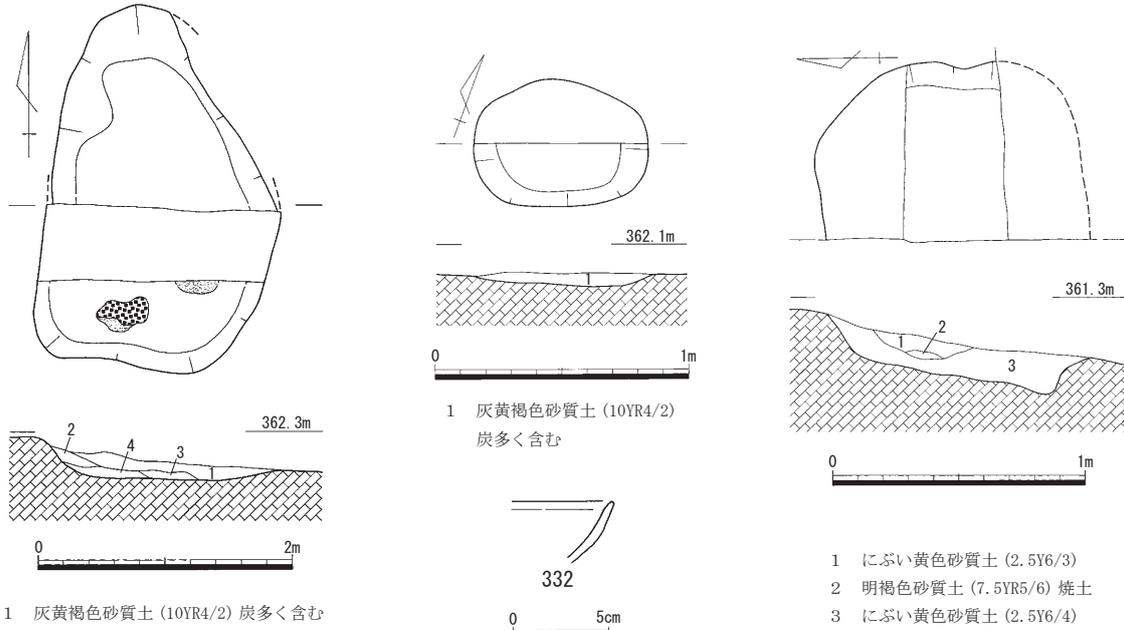
土坑56 (第166・171図)

V-2区の平坦面西端部で検出された長さ296cm、幅184cmの不整楕円形の土坑である。位置が掘立柱建物と一部重なるが、土層断面の観察等に基づいて建物より新しい時期の遺構と判断した。土坑の底面に赤褐色を呈する被熱面と木炭の集中部がみられたが、他のいわゆる被熱土坑に比べると被熱範

罎は狭い。埋土中から平安時代に属する土師器片が少量出土しており、この土坑の時期を示すものと考えられる。(岡本)

土坑57 (第166・172図)

掘立柱建物2の内部に位置する土坑であるが、建物よりも新しいものと考えられる。長さ69cm、幅51cmの楕円形を呈し、深さはわずか5cmである。埋土には大量の木炭が含まれるが、いわゆる被熱土坑と異なり内面に被熱痕跡は認められなかった。埋土中から出土した土師器碗の破片332の特徴からみて土坑の時期は平安時代であろう。(岡本)



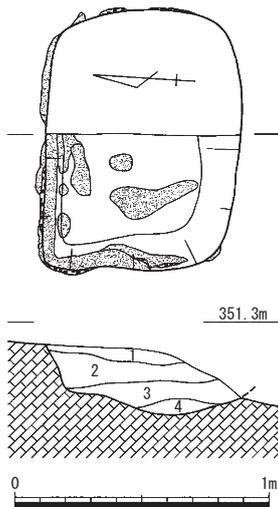
- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 炭多く含む
- 2 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) 炭含む
- 3 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 炭多く含む
- 4 褐灰色砂質土 (10YR4/1) 炭含む

第172図 土坑57 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

第173図 土坑58 (1/30)

- 1 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)
- 2 明褐色砂質土 (7.5YR5/6) 焼土
- 3 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4)

第171図 土坑56 (1/60)



- 1 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) 炭含む
- 2 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) 炭含む
- 3 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) 炭多く含む
- 4 にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3)

第174図 土坑59 (1/30)

土坑58 (第166・173図)

平成11年度確認調査時に、T87の東側壁面において断面のみが確認されていた被熱土坑で、西半分はそのさいの掘削により失われている。今回の調査でも一部の検出にとどまったため、本来の形状や規模は不明であるが、不整な楕円形ないし隅丸方形の可能性が考えられる。埋土中から土器小片が出土している。時期は平安時代と思われる。(岡本)

土坑59 (第166・174図、巻頭図版4)

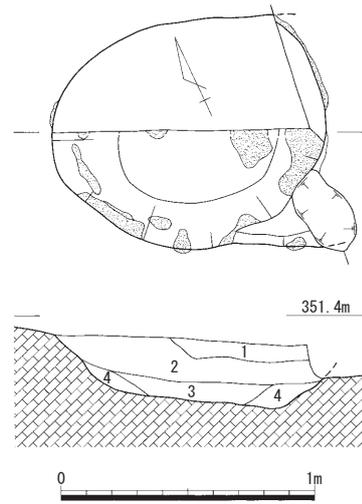
掘立柱建物2の南側で検出された長さ103cm、幅76cm、深さ25cmを測る隅丸長方形の土坑である。検出面は地山上に盛土された造成土の上面である。土坑の壁面には顕著な被熱痕が認められ、特に北側から西側にかけての壁面は高温によって硬化し、黄灰色を呈するまでに至っていた。底面にも赤褐色を呈する被熱痕が斑状に認められる。出土遺物は土器小片のみである。土坑の時期は平安時代と思われる。(岡本)

土坑60 (第166・175図)

V-4区の東端で検出された。東端部を壁際のトレンチで欠損するが、本来は楕円形と推測される土坑で、残存長108cm、幅92cm、深さ25cmを測る。東端部の壁面にはテラス状の段が一部残っている。埋土各層には木炭や焼土を多く含み、底面及び壁面には顕著な赤色の被熱痕が断続的に認められる、いわゆる被熱土坑の一つである。埋土中から遺物は出土していないが、平安時代の遺構と考えられる。(岡本)

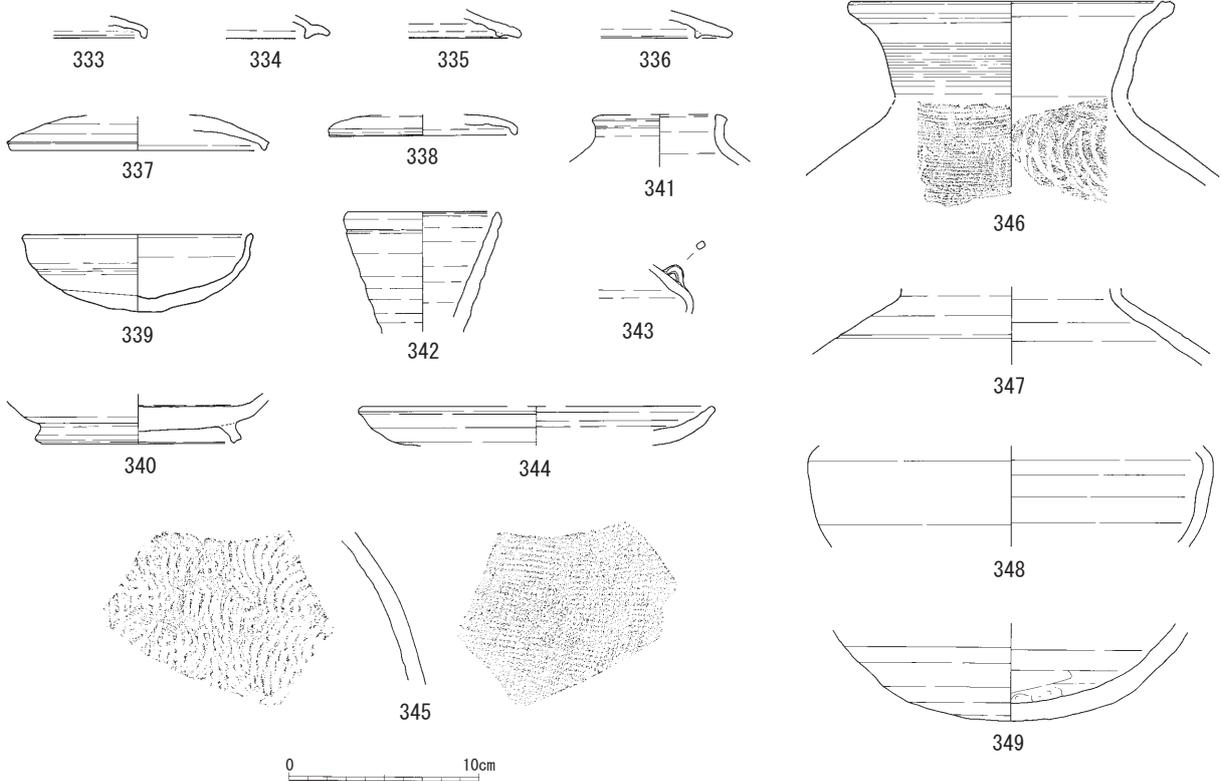
遺構に伴わない遺物 (第176・177図、巻頭図版6、図版38・40)

各調査区の堆積土内から少量の遺物が出土している。333~349は須恵器で、大部分は7世紀後半~8世紀初頭の時期に属するものである。333~336は杯蓋である。内面にかえりを有するもの(334~336)、かえりのないもの(333・337・338)がある。339はV-2区の流土中から出土した。底面が丸く、形態は古墳時代から続く杯(杯H)の蓋に似ているが、鬼城山城内では杯Hが出土していないこと、また、県内では同様の杯が碗形杯等とも称され類例も存在することから、339を身として報告する。口径11.9cm、器高4.1cmを測る。手ズレにより表面が磨滅している。340は壺の底部、341は短頸壺、342は平瓶、343は小型の壺、344は皿と考えられる。345は甕の体部、346~349の壺はいずれも小片でそれぞれ別個体である。

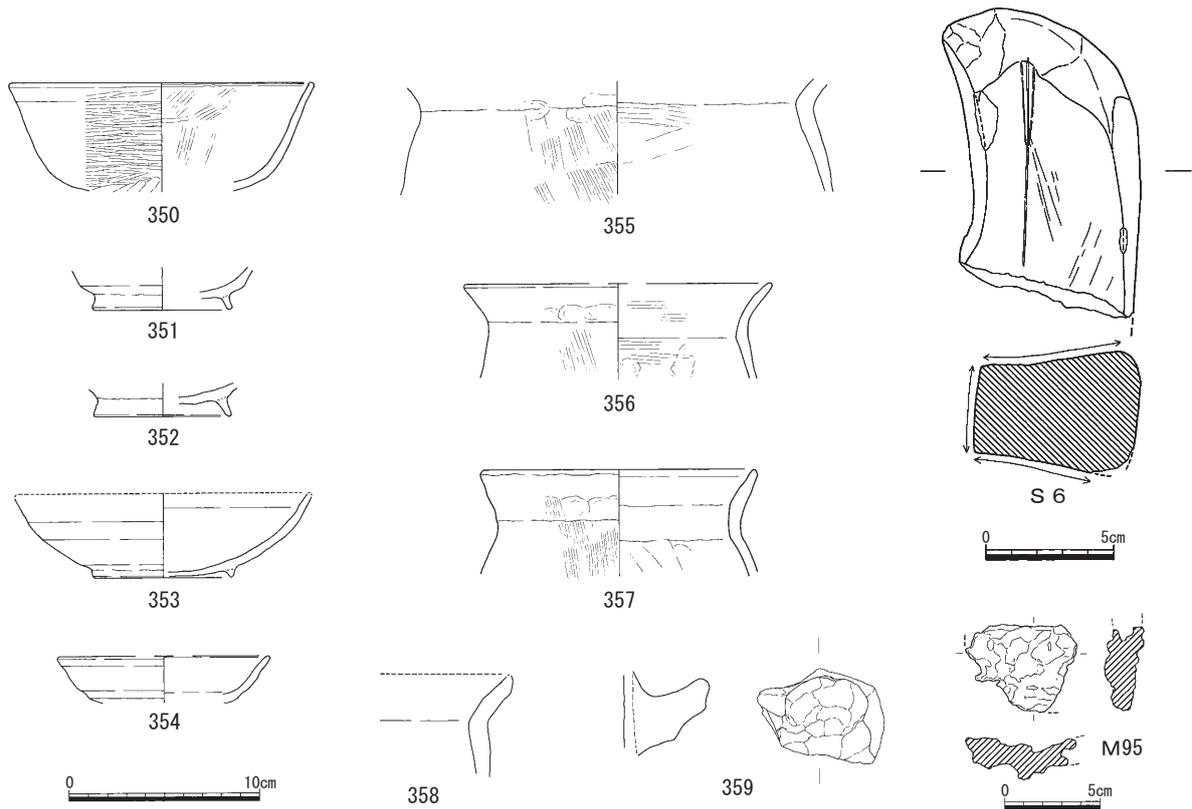


- 1 褐灰色砂質土 (10YR6/1) 炭多く含む
- 2 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)
- 3 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) 炭多く含む
- 4 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2) 炭・焼土多く含む

第175図 土坑60 (1/30)



第176図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第177図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3)

350～359は土師器である。350の杯は胎土や器形の特徴から畿内産土師器と考えられる。内外面にミガキを施し、特に内面は上下二段に暗文が施されている。畿内から当地に搬入されたとも考えられ、鬼城山の性格を考える上で重要な遺物といえる。351・352は土師器碗である。高台部のみであるがにぶい黄橙色を呈す。353は黒色土器で内面が黒色化している。354は土師器杯である。底部調整は不明である。355～358は甕、359は把手である。

S6は流紋岩製の砥石で、側面のうち3面が使用されている。時期は不明である。

M95は鉄滓であるが、調査区内で1点のみ表面採集されたものであるため、この地点での鍛冶は考えにくい。(岡本)

第4章 総括

第1節 調査成果

平成18～24年度まで7年次におよぶ「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査事業は、平成11年度に行われた城内確認調査の成果をうけて実施されたもので、今までよく分かっていなかった城内遺構を対象としたものであった。これまでに総社市教育委員会により調査された城壁や城門などの外郭線を中心とする調査成果を含めると、今回の調査で鬼城山の全容がおおよそ明らかになったといえるのではなかろうか。ここでは、これまでの調査成果をふまえ、各担当者間で合議してきたことをもとに、中でも特筆すべき事例について次のとおり考察を加える。

今回の城内調査では鬼城山の礎石建物7棟（総柱建物5棟、側柱建物2棟）の規模や構造について明らかにすることができた。これについては第2節で検証するが、その中で、鬼城山の総柱建物は郡衙正倉に共通した規模をもち、側柱建物についても県内最大級で国・郡衙政庁クラスの規模をもっていることが報告されている。

Ⅲ区における鍛冶炉の検出は、全国の古代山城の中でも初めての事例となった。特にⅢ-3区の鍛冶工房では長大な掘立柱建物の中に鍛冶炉9基が検出された。このような鍛冶工房の事例は官衙あるいは有力寺院に伴う工房で報告されており、古代山城にこのような官営工房的な施設が設けられていたことは重要である。これについては第3節で述べる。

鬼城山城内の水利施設である土手状遺構は、城内における水の確保とともに、土石流等から城壁を守る役割も担っていたと考えられる。第4節では土手状遺構の復元作業を通してその特徴を検討する。

第5節・第6節は、鬼城山の出土遺物に着目する。第5節では、城内から出土した土器について検討する。これらは、これまでも古代山城の存続時期等を考える上で貴重な資料であったが、今回の調査で、特に土器溜まり1でまとまった資料が出土したことで、より詳細な検討が可能となった。ここでは、城内で出土した土器の編年的な位置付けを明らかにするとともに、県内の資料を援用しながら、その年代観にふれる。第6節で述べる瓦塔は、礎石建物群が所在するⅡ区で出土している。鬼城山の瓦塔の特徴を検討し、瓦塔が鬼城山に設置された理由について考える。

第7節では山岳寺院について言及する。鬼城山では平安時代の遺物が出土することから、山岳宗教施設の存在が推測されていた。これを裏付けるかのようにⅡ区やⅤ区を中心に平安時代の遺構や遺物が見つかった。鬼城山周辺には、かつて「備中新山」と呼ばれる名高い寺院が存在していた。古代山城廃城後の城内利用の一端をうかがうことのできる事例である。

第8節では、鬼城山の歴史的意義について総括する。これまでの調査で出土した遺構や遺物から鬼城山の変遷を時期区分し、各時期の内容をまとめる。その中で、これまでの検討で明らかになった成果をもとに、古代山城の築城時期や存続時期あるいは廃城時期について言及する。そして、最後に、これまで謎とされてきた築城の主体者とその目的に関する所見をまとめる。

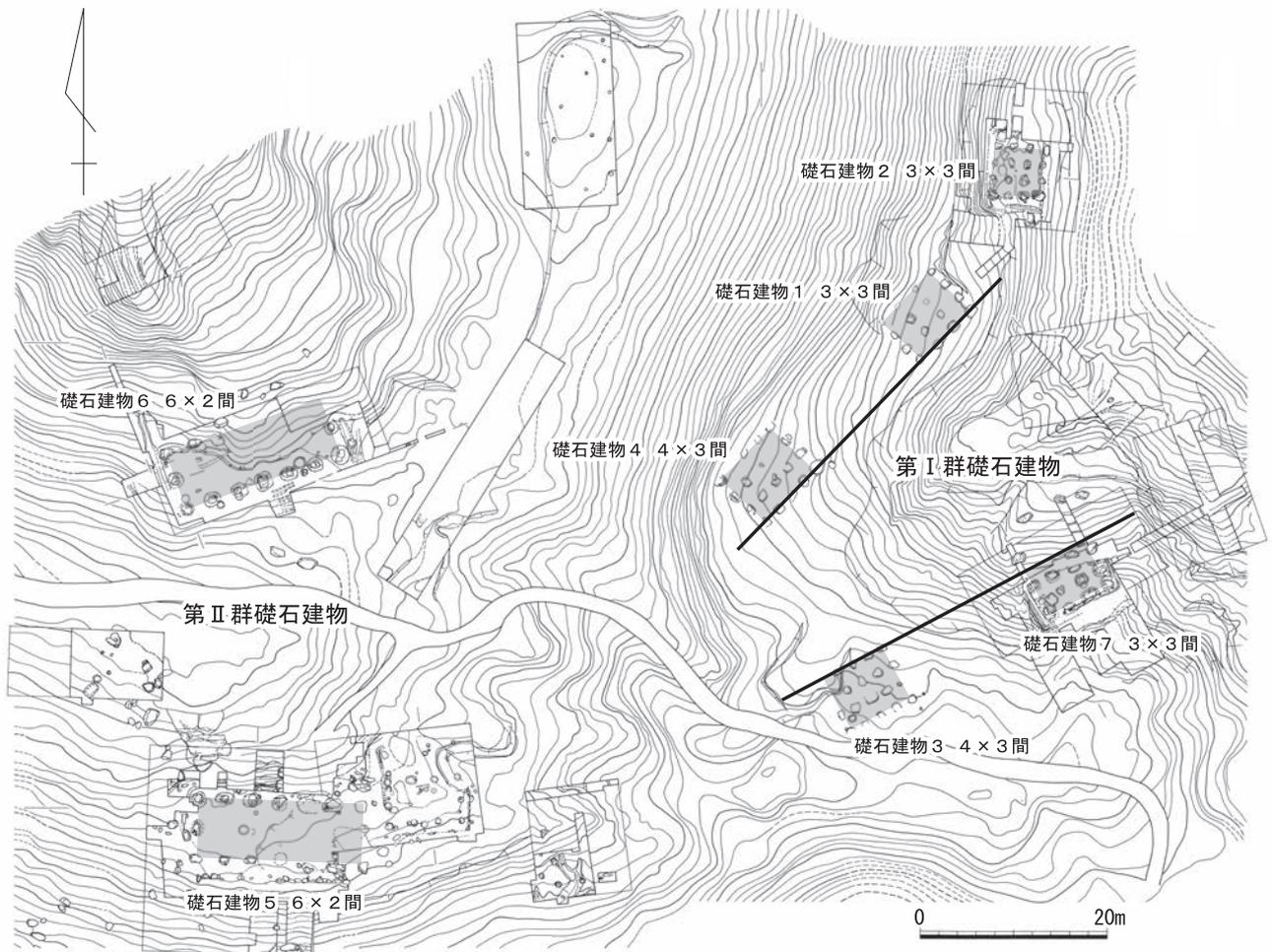
(金田)

第2節 礎石建物について

1 建物の配置

鬼城山の城内では、総柱建物が5棟、側柱建物が2棟の合計7棟の礎石建物が確認されている⁽¹⁾。建物は、いずれも城内中央部の限られた範囲に集中して配置されているが、尾根上の平坦部をそのまま利用するのではなく、山の斜面部を削り出し、平坦部を設ける造成工事を行って、建物を建築していることが大きな特徴である⁽²⁾。北にのびる尾根を境にして、東西の大きく二群に分かれ、東側の総柱建物からなる第Ⅰ群礎石建物と西側の側柱建物からなる第Ⅱ群礎石建物がある。

第Ⅰ群礎石建物は総柱礎石建物で構成されている。計画的に建物配置が行われており、さらに北側に派生するグループ（建物4・1・2）と南側に派生するグループ（建物3・7）に分かれる。各グループ内でも高低差を利用した段構造になっており、最も規模の大きな4×3間の建物3・4が最上段に、3×3間で中規模の建物1・7が中段に、最も小さな3×3間の建物2が最下段に位置する。また、中段の建物1・7は谷を挟んで対置されているが、礎石上面の標高が354.50m付近でそろっており、意識的に高さを合わせていると考えられる。また、建物4－建物1、建物3－建物7がそれぞれ



第178図 礎石建物の配置 (1/800)

れ建物前面を軸に直線的にそろえられている。第Ⅱ群礎石建物についても東西方向の尾根部を境に北側に建物6、南側に建物5を配置しているが、礎石上面の高さが標高363～364mの範囲でそろっており、計画的な配置が行われている。建物5・6は6×2間の側柱建物で、規模もほぼ同じであり、同一の規格で建築されたと考えられる。

2 建物の構造

建物の上屋部分の構造について検討する材料として、建物6で2か所、建物7で2か所の礎石で確認された柱痕跡がある。総柱建物、側柱建物の両方で丸柱を利用しており、直径は45～50cm程度と大きなものである。建物造営時の基準尺については、表3に示した。数値にはばらつきがあるが、今回の調査で全容が判明した建物で、なおかつ柱痕跡から柱間寸法を計測できる建物については、29.2～29.5cmの範囲でそろっている。総柱建物は高床倉庫と考えられ、平面形式や30mを超える規模から板材を壁体にした「板倉」であった可能性が高い⁽³⁾。側柱建物の床構造としては、低床や土間等があげられる。礎石に柱以外の痕跡が残っていないことから、礎石には地覆等が接していなかったと推定され、建物の床は地表との間に空間を持つ構造であった可能性が高い。建物身舎部分については、床束柱や土間の存在を示す痕跡は調査では確認されなかったため、遺構が残りにくい簡易な方法で床を支えた低床の構造を持っていたと推定される⁽⁴⁾。また、各建物の周囲には溝が掘削されているが、建物の「軒の出」を示す雨落溝にあたるものではなく、背後の斜面からの流水や雨水を排水するための雨仕舞い溝としての機能が考えられる。なお、礎石建物周辺においては瓦片も出土しているが、その数は少ない。これらの瓦片は後の平安時代の山岳寺院施設に関連するもので、礎石建物自体は瓦葺きでなかったと考えられる。

3 建物の時期

それぞれの建物の建築順序については、周辺の造作も含め建物同士の切り合い関係等がないので、今回の調査でも明らかにはなっていない。しかし、礎石建物群の建設時期は、第Ⅰ・Ⅱ群ともにその

表3 城内礎石建物一覧

建物名	調査区	群	規模 (間)	桁行 (cm)	梁行 (cm)	柱間距離 (cm)		柱間尺 (尺)		桁基準尺 (cm)	梁基準尺 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱配置	礎石上面の標高 (m)	時期	機能 (推定)
						桁	梁	桁	梁								
建物1	-	I群	3×3	745	580	248	193	8	6	31.0	32.2	43	N-44°-E	総柱	354.00 ～ 355.00	飛鳥～ 奈良	高床倉庫
建物2	Ⅱ-9区	I群	3×3	525	525	175	175	6	6	29.2	29.2	27.5	N-9°-E	総柱	350.90 ～ 351.15	飛鳥～ 奈良	高床倉庫
建物3	-	I群	4×3	715	610	178	203	6	7	29.6	29.0	44	N-63°-E	総柱	357.80 ～ 357.90	飛鳥～ 奈良	高床倉庫
建物4	-	I群	4×3	767	660	191	220	6	7	31.8	31.4	51	N-46°-E	総柱	356.20 ～ 356.70	飛鳥～ 奈良	高床倉庫
建物5	Ⅱ-4区	Ⅱ群	6×2	1760	650	293	325	10	11	29.3	29.5	114	N-87°-W	側柱	363.80 ～ 364.05	飛鳥～ 奈良	管理棟
建物6	Ⅱ-2区	Ⅱ群	6×2	1752	642	292	321	10	11	29.2	29.2	112	N-70°-E	側柱	363.30 ～ 363.50	飛鳥～ 奈良	管理棟
建物7	Ⅱ-12区	I群	3×3	708	(525)	236	175	8	6	29.5	29.2	38	N-62°-E	総柱	354.40 ～ 354.55	飛鳥～ 奈良	高床倉庫

配置の規格性や計画性、構造等からほぼ同時期に整備されたものと考えられる。礎石建物群周辺から出土している土器は、本章第5節の出土土器のまとめで示したように、7世紀末葉から8世紀前半ごろのものが見られ、奈良時代後半の土器も存在する。出土した土器の様相から礎石建物群が機能していた時期の中心は8世紀前半と考えられるが、今回の調査で柱痕跡から柱間を計測した建物6や建物7は、造営尺が29.2～29.5cm付近と古い傾向を示しており、礎石建物群の建設は7世紀後半代にさかのぼる可能性も十分ある⁽⁵⁾。礎石建物群は廃絶後、平安時代までは地表に露出していたようで、礎石や平坦面を再利用している状況が今回の調査により確認されている。一例として建物5では、平安期に基壇外装を整備するかたちで、一部の礎石を再利用して山岳仏教寺院の施設を設けているようである。このような状況から山城の廃絶から再利用までの期間はあまり長くないものと推定される。

4 建物の機能と規模

総柱建物1～4・7については、前述したとおり、その構造や規模から高床倉庫で「板倉」であったと考えられる。側柱建物は桁行17mを越す長大な建物であり、転用硯の出土から官人層の存在が推定され、実用的な用途が考えられる。側柱建物5・6については、城内の管理を担う官舎（管理棟）としての機能を想定している⁽⁶⁾。

建物の平面形式や規模を整理すると、総柱建物は、3×3間、4×3間で、面積は27.5～51㎡を測る。側柱建物は6×2間で、面積は112～114㎡と長大なものである。一般的に郡衙正倉の平面形式は3×2間、3×3間、4×3間が主体になり、中でも4×3間の倉は正倉の代表的な形式である⁽⁷⁾。岡山県内の古代建物を整理した小林利晴によると、鬼城山と同規模以上の30㎡を超える総柱建物で、主に奈良時代に属するものは、備中の岡山市津寺遺跡、美作では津山市宮尾遺跡・真庭市郡遺跡で検出されており、いずれも郡衙正倉かそれに類する施設と考えられる。側柱建物で、鬼城山と同様の100㎡を超える建物が判明しているのは、備中では小田駅家に比定される矢掛町毎戸遺跡で例があるのみで、美作では津山市に所在する美作国府と久米郡衙に比定される宮尾遺跡で検出例があり、それぞれ国・郡衙政庁の一部と考えられる⁽⁸⁾。鬼城山の総柱建物（高床倉庫）は、郡衙正倉に共通した規模をもち、側柱建物（管理棟）については、県内でも最大級で国・郡衙政庁クラスの規模であることと、鬼城山の建物はいずれも礎石建ちであることが注目される。

他の古代山城で建物の調査例を参考にすると、福岡県大野城では約70棟余りの建物跡が確認されている。そのほとんどは桁行4～5間、梁行3間の高床倉庫と考えられる総柱建物で、柱間も7尺（約2.1m）でそろっており、配置についても規格性が認められるほか、掘立柱建物から礎石建物に変遷していることが分かっている⁽⁹⁾。熊本県鞠智城では、城内で72棟の建物が見つまっている。八角形建物など特異な建物も存在するが、建物の主体は倉庫群で7世紀後半の築城時には掘立柱建物の倉庫が築かれ、8世紀の前半で掘立柱建物から礎石建物に置き換えられている。鞠智城では8世紀末には、軍事施設としての機能から食料の備蓄施設としての機能が主体になってくるなど、大きな変化が明らかになっている⁽¹⁰⁾。

また、古代山城での建物に関連する文献記録をあげると、大阪府高安城について、『日本書紀』天智九（670）年二月条に「又高安城を修りて、穀と塩とを積む」との記載があり、城内の倉庫で稲穀と塩を備蓄していたことが推測される。大野城においては『類聚三代格』貞観十八（876）年の太政官符の記載から、糧米が城内に収納されていたことや、大宰府出土の木簡から佐賀県基肆城の稲穀が

筑前・筑後・肥国に支出されていることが分かっている。鞠智城においては『日本文徳天皇実録』天安二（858）年条に「菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。同城不動倉十一宇火」との記載があり、9世紀後半の不動倉や兵庫の存在が知られている。また、周防・長門の正税帳を検討した中西康裕によると、正税帳記載の稲穀や楠は軍事施設である山城の倉庫群に備蓄され、国司の管轄下での稲穀等の備蓄が山城の倉庫で行われていたとの指摘もある⁽¹¹⁾。このように、山城内の倉庫には、非常時や軍事行動を行うさいの食料を備蓄した穀倉や武器等を収めた兵庫が存在していたことが分かる。鬼城山においても築城当初は、非常時や軍事行動用の食料備蓄や武器の保管が城内の倉庫等の施設で行われていたと推測される。また、8世紀後半段階まで建物群が存続していたと考えられるため、他の古代山城の事例と同様に、8世紀の段階で、国衙あるいは郡衙の管轄下において、城内の高床倉庫が「不動倉」として使用されていた可能性もある。

5 まとめ

鬼城山で検出した礎石建物群は、総柱建物の高床倉庫と側柱建物の管理棟で構成されていた。建物群は7世紀末の飛鳥時代に整備され、8世紀前半を中心に機能し、8世紀後半まで存続していたと考えられる。建物の規模はいずれも大きく、規格性や配置に計画性が認められるほか、高床倉庫と考えられる総柱建物は、郡衙正倉に共通した特徴があり、単に軍事施設の倉庫としてだけでなく、備蓄施設としての役割も担っていたと考えられる。8世紀後半段階で山城全体としての機能がどの程度維持されていたかは不明であるが、当初の「城」としての姿から礎石建物群を中心とした「倉」へとその主要な機能の変化も想定され、最終的に鬼城山は、礎石建物群の廃絶をもって、その役割を終えたものと考えられる。

（石田）

註

- (1) II-5区で検出された礎石列1、溝3については、平安時代の掘立柱建物1の建築時に大部分が改変された礎石建物の一部の可能性がある。伴う遺物がなく、詳細な時期については不明であるが、掘立柱建物1の基壇造成土中や周辺から7世紀末～8世紀前半にかけての須恵器が出土しており、掘立柱建物1以前に飛鳥時代の施設が存在していた可能性もある。
- (2) 直接建物が見えないように遮蔽効果を狙ったのか、冬期の強風など尾根上部の過酷な自然環境によるためか、意識的に斜面を背負うように建物を配置していることが大きな特徴である。このように斜面地に建物が立地しているので、城内には未発見で埋もれた建物が他にも存在する可能性が十分考えられる。
- (3) 桁行20尺を超える大形の倉は、主に穀倉として使用された板倉が主体になる。（松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三十周年記念論文集 1983）
- (4) 床を支える構造としては転ばし根太や小振りの石等の利用が想定されるが、調査ではこれらの痕跡は確認されていない。
- (5) 造営尺については、前期難波宮で29.2～29.3cm、藤原宮や平城宮で29.5～29.6cm、平安宮では29.8cm程度の値が得られている。造営尺の違いが、直ちに時期差を示すものではないが、短いものは時期的に古い傾向が認められる。（山中敏史「Ⅶ-3 造営尺」『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』奈良文化財研究所 2003）
- (6) 鬼城山の側柱礎石建物については穎稻を納める「屋」の可能性があると指摘を山中敏史氏（奈良文化財研究所：当時）から受けている。しかし、規模の大きさや配置の状況から城内でも中心的な役割を担っていた建物であったと推測されるので、管理棟（官舎）として機能を想定している。
- (7) 松村恵司「古代稲倉をめぐる諸問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三十周年記念論文集 1983
- (8) 小林利晴「備前・備中・美作の古代集落」『吉備のムラと役所』考古学研究会 2010
毎戸遺跡の建物は推定規模。美作国府と宮尾遺跡では建物全体の規模が判明している。
- (9) 石松好雄「第二章 朝鮮式山城 大野城」『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書第十巻 名著出版 1983
横田義章「大野城の建物」『大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館 1983
- (10) 西住欣一郎ほか編『鞠智城跡Ⅱ-鞠智城跡第8～32次調査報告-』熊本県教育委員会 2012
- (11) 中西康裕「律令制下の西瀬戸内海地域-周防・長門国正税帳を中心に-」『古代王権と交流6 瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版 1995

第3節 鍛冶工房について

1 鬼城山鍛冶工房の性格

このたびの城内確認調査で、Ⅲ－1区、Ⅲ－2区、Ⅲ－3区の計3地点において、古代の鍛冶遺構が確認された。いずれも城内から第4水門に流れ出る水系に沿って立地している。最も上流にあるのがⅢ－1区で、鍛冶炉1基のみが検出され、遺構・遺物の量から判断して小規模な操業が推定される。Ⅲ－2区とⅢ－3区は近接しており、第4水門に近い下流部にあたる。Ⅲ－2区では2基の鍛冶炉を検出したが、他にも未検出の鍛冶炉が数基存在する可能性が高い。廃滓場となる流路跡を調査したため、鉄滓や鞆羽口の出土量は3地点で最大となっている。ただし、地形から見れば、Ⅲ－3区よりも小規模な工房であったと想定される。Ⅲ－3区では、建物（覆屋）を伴う長大な鍛冶工房の存在が明らかになった。建物内に9基の鍛冶炉が確認されており、城内で最も中心的な工房であったと思われる。本稿では、鬼城山鍛冶工房の中で最も特徴的なⅢ－3区の遺構について検討し、いまだ十分に明らかになっていない古代山城の鍛冶について考えてみたい。

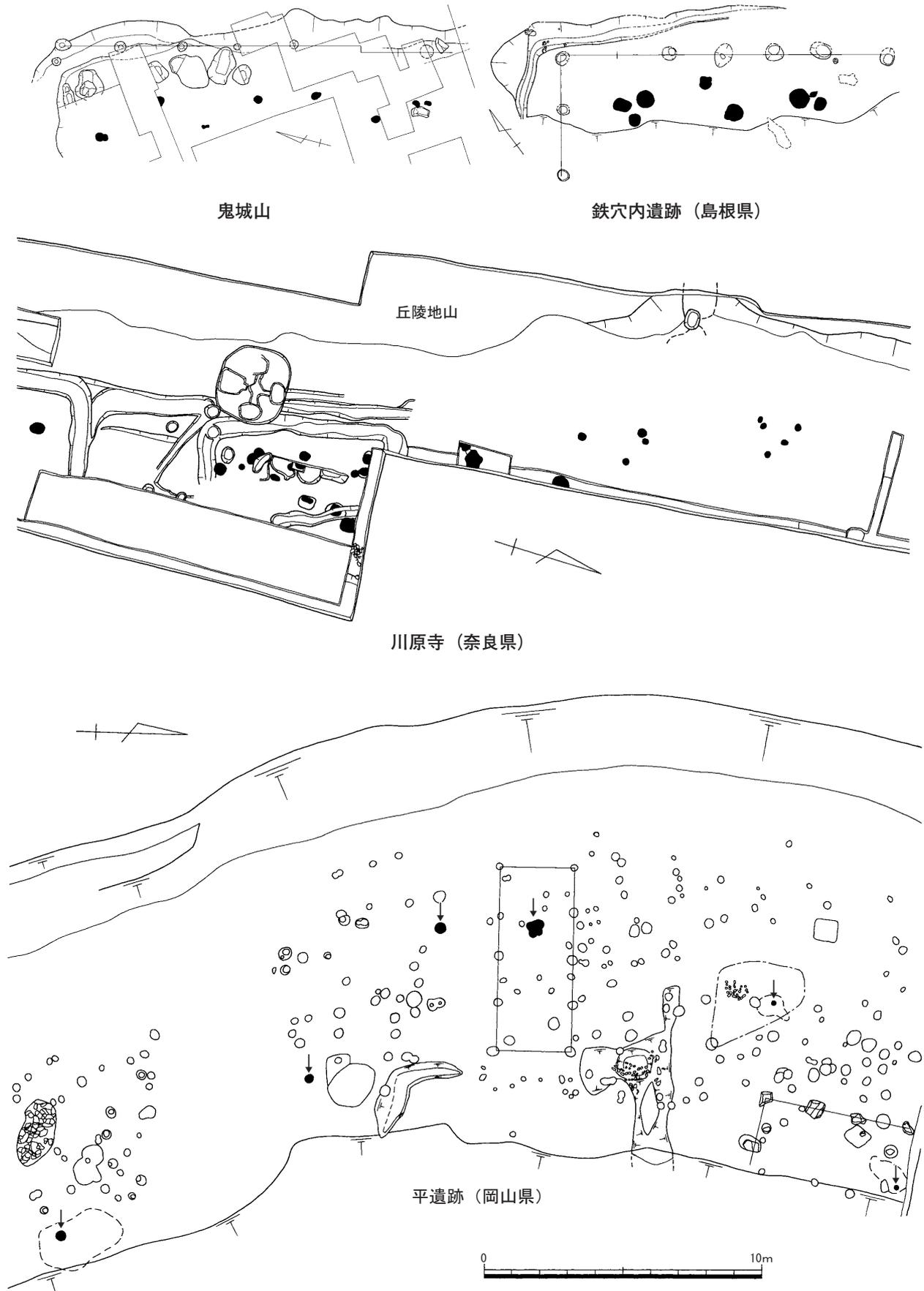
Ⅲ－3区の鍛冶工房は、桁行（南北）6間以上（13m以上）の長大な建物を伴うものと推定され、屋内に7か所以上の鍛冶炉が列状に配されている。周辺の地形から判断すれば、さらに南側に規模が広がる可能性が高い。建物の梁間（東西）規模は明らかでないが、周辺の地形や、鍛冶炉列をほぼ中軸付近と想定すれば、2間程度と思われる。鍛冶炉列は一直線上に並ぶのではなく、ジグザグに配されているように見える。

複数の鍛冶炉が列状に配置される鬼城山Ⅲ－3区と類似する工房の例として、島根県鉄穴内遺跡⁽¹⁾がある。鬼城山よりやや規模が小さいが、桁行6間（10.7m）、梁間2間（3.9m）の建物内に計8基の鍛冶炉が列状に配されている。同時に操業した鍛冶炉は3基と推定されており、近接する位置に鍛冶炉を作り直している点も鬼城山と共通する。ただし、時期は8世紀後半から9世紀初頭で、鬼城山より新しい。鉄穴内遺跡は、公的機関、飯石郡による関与、管理が想定されており、官営の鍛冶工房といえる。

奈良県川原寺⁽²⁾では、寺域の北限域において、大規模な鍛冶工房が営まれている。丘陵裾部において、幅（南北）約30mにわたって多数の鍛冶炉が検出されている。コの字形の工房区画溝が複数検出されていることから、単一の工房ではなく、時期の異なる複数の工房があったと推定される。飛鳥の大寺院に伴う鍛冶工房の例として重要である。川原寺創建期の遺構が多く、寺院の建立及び維持管理に必要な鉄製工具の修繕、釘などの建築材の製作を行ったものかと思われる。

岡山県内では、勝田郡衙と推定されている平遺跡⁽³⁾の例がある。地形に沿って緩く曲線を描くように、計6基の鍛冶炉が分布している。上記の例と比べると散漫な分布状況であるが、計画的に列状に配置されている可能性がある。ただし鍛冶炉に伴う建物（覆屋）については不明である。

以上のように、多数の鍛冶炉を列状に配した建物（覆屋）をもつ事例は、鬼城山以外にも類例があり、いずれも官衙あるいは有力寺院に伴う工房と推測される。鬼城山の場合も、築城自体がそうであるように、官営⁽⁴⁾の事業として操業されたものであろう。このような、官営鍛冶工房と呼びうる本格的な工房が、古代山城の城内に発見されたことは重要である。鍛冶関連遺物の金属学的分析（付載



第179図 古代の鍛冶工房の例 (1/200)

※黒塗りは鍛冶炉、各報告書から一部改変

3) からも、築城に使用された鉄製工具等の修繕のみならず、鉄原料を城外から搬入し鉄器への加工まで行っていたことが示されている。築城に必要な工具や、釘等の建築材を城内で製作したと考えられる。標高400mの山上に鉄原料を運び上げることは容易ではなく、あらかじめ加工された鉄器を搬入した方が合理的にも思えるが、そうではなく、原料から鉄器への加工まで、一連の生産体制が城内に整えられていたことになる。他の古代山城ではここまで本格的な鍛冶工房は発見されておらず、あるいは、同時期の製鉄遺跡（総社市奥坂遺跡群）が至近距離にある鬼城山の特性なのかもしれない。

(尾上)

2 鍛冶関連遺物と生産内容

鉄滓 Ⅲ-1区で出土した鉄滓は5.0kgである。小形鉄滓が多く、磁着度が高い資料が50%を占める。分析の結果（4点 0.44kg）、75%が低温成型鍛冶滓という結果が出た。鉄塊系遺物は31g出土した。

Ⅲ-2区の鉄滓出土量は25.2kgで、磁着度の強いものは4%を占める。Ⅲ-2区は流路跡の一部の調査を行ったが、ここが廃滓場にあたると思う。一部とはいえ廃滓場の発掘を行ったことが、Ⅲ-2区での鉄滓出土量の多さにつながった。分析の結果（鉄滓：10点 1.75kg）、8割が低温素延べ・火造り鍛錬鍛冶が想定可能で、2割は下げ脱炭鍛冶滓の可能性が指摘された。ただⅢ-2区の椀形滓のうちサイズが明確な資料では、沸かし鍛錬の可能性が示唆される鉄滓も含まれ、Ⅲ-1区で出土した鉄滓と雰囲気異なる。古瀬清秀は鍛冶実験により生成された鉄滓と工程との対比を行い、精錬鍛冶滓、沸かし鍛錬鍛冶滓、火造り鍛錬鍛冶滓のおおよそのサイズ差を示した⁽⁵⁾。古瀬によると火造り鍛錬鍛冶滓は長軸、短軸ともに約5cm以下、沸かし鍛錬鍛冶滓は長軸5~12cm、短軸5~10cm、精錬鍛冶滓は長軸13~18cm、短軸10~12cmで、この基準と比較すると長短軸いずれかでも大きさが判明した資料のほとんどが沸かし鍛錬鍛冶滓の領域に入る。鉄塊系遺物は199gを確認した。

Ⅲ-3区出土の鉄滓は15.4kgで、磁着度の強いものが40%を占める。分析の結果（4点 1.18kg）、Ⅲ-3区では高温沸かし鍛錬鍛冶が実施されたと推測された。椀形滓は割れた状態のものが大半であったが、長短いずれかのサイズが明らかな資料のいずれもが古瀬が示した沸かし鍛錬鍛冶滓の範疇に入る。調査区の西側には谷川が第4水門へと流れており、その南西側には湿地が広がる。Ⅲ-3区では湿地から谷川にかけて廃滓場として利用したと考える。形状をとどめる椀形滓の大半は廃滓場に投棄されたため、調査区内での出土数は廃棄量のごく一部と考える。鉄塊系遺物は832gを確認した。

上記で試みた鉄滓の考古学的検討から、Ⅲ-2・3区では沸かし鍛錬鍛冶が主体で、素延べ・火造り鍛冶も併用しながら鉄器製作を実施していたと考える。Ⅲ-2・3区では精錬鍛冶滓が出土しておらず、精錬鍛冶工程を経た素材が持ち込まれたと推測する。さらに、鉄塊系遺物の出土から精製鉄塊の搬入も想定できる。金属学的分析によると素材鉄の始発原料は磁鉄鉱（微量 Ti、V、Zr 系）である。さらにⅢ-2区では釘の残欠（M62~64）が、Ⅲ-3区では鉤（M79・80）、刀子（M81・82）、釘（M84~87）の残欠や小鉄片が出土しており、廃鉄器も素材として回収された。またⅢ-2・3区の鉄滓に共通する特徴として礫の付着がある。礫は1~2cm大で、鉄滓の上面に付着するものと礫に滓が絡みついた状態のものが見られた。Ⅲ-3区では鉄滓302点（4,413.6g）中、礫が付着した鉄滓は111点（1,670.8g）確認できる。また、熱で発泡した礫のような遺物も1点認められた。このような礫が付着した鉄滓について大澤正己は、作業時間短縮のため急速冷却を目的としての礫投入と評価した（付載3、186頁）。

Ⅲ-1区では小形鉄滓が多く、金属学的分析の結果からⅢ-2・3区のような高温沸かし鍛錬鍛冶が主体ではなく、低温素延べ鍛錬鍛冶や補修を主体とした操業で、工房域から離れた臨時対応の場と考える。さらに、折り曲げられた鉤（M39）の存在から廃鉄器のリサイクルも実施したことが判明した。鍛冶炉はⅢ-2・3区とは異なる構造で、操業内容の差が反映する。

羽口 鬼城山の工房地区では羽口も多く出土している。羽口はⅢ-2区の廃滓場（流路跡）からの出土が多いが、Ⅲ-2区の鍛冶炉2とⅢ-3区の鍛冶炉4では使用直後に放置されたような状況で羽口が見つかった。鍛冶炉2の羽口は炉内堆積土の直上にあり、操業時の設置状況ではない。鍛冶炉4では羽口2点が炉の傾斜に沿うような状況で出土した。2点の羽口はおおよそ対面した位置関係で出土しており、2方向からの送風の可能性が示唆されるが、複数方向からの送風について安間拓己は否定的見解を述べている⁽⁶⁾。安間は炉付属の溝状遺構に1方向、2方向、4方向あり、しばしば羽口の装着痕跡とみなされることを述べた後、炉内温度をあげるのみならず、作業内容に応じた温度調節を必要とする鍛冶作業で複数方向から複数軸を使用しての送風は考えがたいとした。鍛冶炉4で出土した羽口についても操業後の廃棄状況を反映しているであろう。

羽口は送風管が炉に直接接しないようにし、さらに造滓成分にもなる。ここでは作りや外観について検討する。羽口は丸棒に粘土を巻き付け、棒から外して焼成し完成するという単純な作りである。粘土は丸棒を一巻きするように包み込み、始点を終点の粘土で覆うように接合する。そのため始点と終点の接合部分が厚く、断面外形はわずかに楕円形状を呈していた。接合痕跡が明瞭に認められる資料もあり（C3・6・8・11・13・15・16・20・21・27）、接合調整を十分に行う意識は低かったようである。羽口の粗雑な仕上げは、消耗品を大量生産する必要性への対応と考える。

焼成前に施した外面調整痕跡には、面取り・縦筋、指押さえ、ナデが認められ、面取り・縦筋が42点（79%）、指押さえが4点（8%）、ナデが7点（13%）という比率である。羽口外面の面取り・縦筋は簀巻き痕跡との理解があり、平城京や川原寺などで出土することから律令政権関与の鉄生産を示唆する遺物と位置付けられている⁽⁷⁾。ただ、外面に面取り・縦筋が確認できる羽口は、岡山県では古墳時代後期後葉以降に認められるため、律令政権との関わりのみを考えることはできない。

胎土は長石などを多く含有する「粗」、水に晒したようなきめ細かい「細」、両者の中間的な「普」に大別する。「粗」は113点（76%）、「普」は26点（18%）、「細」は9点（6%）という比率であった。羽口は消耗品で作りは粗雑でも1回の操業に耐えることができれば十分で、入手しやすく加工に適した粘土が使用された。「細」は谷川に沈殿した粘土を使用したと考えるが、「粗」の羽口と同様の使用、廃棄状況で、特別な存在とは考えられない。同様のきめ細かい胎土の羽口は岡山市津島岡大遺跡などでも出土している⁽⁸⁾。津島岡大遺跡は沖積平野に位置することから、きめ細かな胎土を利用しやすい環境にあり、そのことが羽口の胎土にも反映した可能性を推測する。胎土の差は作成時に入手した土の差で、作成や使用にさいしての何らかの意図や操業への影響は考えられない。

羽口は粘土の始点と終点を合わせた接合痕跡が明瞭な資料が多く、作りは粗い。また、粗い胎土のものが高い比率を占めた。これらの特徴は消耗品という性格を示す。また、面取り・縦筋が見られるいわゆる「簀巻状」羽口⁽⁹⁾が8割近くを占めることも重要である。

鉄器 鍛冶関連遺物から鬼城山には素材鉄もしくは製品の状態で鉄が持ち込まれていたことが分かった。さらに廃鉄器を再利用していたことも出土遺物からうかがえた。

鬼城山の発掘調査は、まず木々の伐採や下草刈りから着手した。その築城では、人手がほとんど加

わっていない山林を対象とするため、発掘調査の着手時以上に伐採と下草刈りに多くの労力が割かれたと考える。そのさい、袋状鉄斧が主力と推測する。また、鬼城山では出土していないが、鉄鎌の存在も推測できよう。なお、木々の伐採や草刈りは山城を維持管理する上でも不可欠な作業である。

必要箇所の伐採などが終了した後、諸施設の建築となる。城内では掘立柱建物式の城門が4か所、角楼1か所、礎石建物7棟が見つかった。その建築部材をすべて城内で確保したという確証はないが、建築部材の加工を城内で行った可能性は鉈（M39・79・80）の存在からうかがえる。鉄斧は手斧として使用することもある。鬼城山で出土した袋状鉄斧（市報告19-12）は長さ12.6cm、刃幅4.6cmで、重量175.6gで、サイズからは手斧の範疇に入る⁽¹⁰⁾。釘を建築で使用することはいうまでもない。

門礎は石材表面を整える仕上げ加工が施されており、鑿が使用されたと推測する。鑿は鍛冶具としても使用すると考えるが、石工具としての働きが重要であろう。鬼城山の城門門礎は、表面に残る痕跡から鑿による加工が推測されている。門礎の加工痕は径1cm前後の円形で、軸摺穴の底部や方立、蹴放しの側面際に顕著に残る。痕跡から門礎の加工は「ノミ小叩き技法」によると指摘されている（市報告19）。ノミ小叩き技法は鑿や鑿による連続敲打で、石材の表面を整える仕上げ加工技術を指す⁽¹¹⁾。M83は近世の石切の矢に形状が類似し、築城時に使用された可能性があり、注目される。石の加工は鉄の消耗が著しい作業で、加工具は修理、リサイクルが頻繁に行われたと考える。

門で使用した鉄器としては釘と饅頭金物（市年報20-18）がある。さらに福岡県太宰府市・大野城市・糟屋郡宇美町大野城の北石垣城門で見つかった門扉の軸受金具が重要である⁽¹²⁾。日本の古代山城で軸受金具が出土した事例は大野城が唯一であるが、軸受穴に鉄錆が付着している状況は、鬼城山の東門、佐賀県三養基郡基山町・福岡県筑紫野市基肆城の東北門⁽¹³⁾、熊本県山鹿市・菊池市鞠智城跡の堀切門と池ノ内門⁽¹⁴⁾で確認されており、同様の軸受金具の使用が推測できる。大野城の軸受金具では理化学的分析が試みられており、鑄鉄製ということが判明している⁽¹⁵⁾。他の古代山城でも軸受金具を使用した場合、鑄鉄製品の可能性が高い。鑄鉄製の場合、城内の鍛冶工房での製作は不可能で、外部からの搬入を想定するべきであろう。

鬼城山で出土した鉄器は鉈や斧といった工具が中心で、武器と断言できる遺物は出土していない（M91は鎌の可能性もある）。いずれも鍛造品であり、城内で製作できる。補修を繰り返しながらの使用の結果、使用に耐えられなくなった鉄器は回収して素材として再利用したことが折り曲げられた鉈（M39）から判明した。また、Ⅲ-2・3区でも鉈（M79・80）、刀子（M81・82）、釘（M62~64、84~87）の残欠や小鉄片が出土しており、これらを素材として転用する意図がうかがえる。ただ、鉄滓などの鍛冶関連遺物の出土量から考えると、鉄器の出土数が少ない印象がある。廃鉄器のリサイクルが頻繁に行われた可能性もあるが、廃城に伴い外部に持ち出した鉄器も相当量存在したと推測する。

3 古代山城で見つかった鍛冶関連資料

古代山城の鍛冶工房は鬼城山が初出で、古代山城間での比較検討は困難である。ただ、鬼城山以外の古代山城でも鍛冶関連資料は散発的ながらも見つかっており、留意しなければならない。そこで鬼城山を含め古代山城で見つかった鍛冶関連資料を簡単にまとめておきたい（表4）。

表4 古代山城検出の鍛冶関連資料

遺跡名	所在地	遺構・調査区名	鍛冶炉	羽口	鉄滓	その他	時期	文献
鬼城山	岡山県総社市	Ⅲ-1区	1基	○	○	廃鉄器	7世紀末～8世紀初頭	本書
		Ⅲ-2区	2基	○	○	-	7世紀末～8世紀初頭	
		Ⅲ-3区	9基	○	○	砥石	7世紀末～8世紀初頭	
		第4水門下流の谷部	-	○	○	-	-	市報告19
大廻小廻山城	岡山県岡山市	北谷頭部 土壘2	-	-	○	-	-	『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教委1989
永納山城	愛媛県西条市・今治市	鍛冶炉	1基	○	○	金床石・炭置場	古代	『史跡 永納山城跡Ⅱ』西条市教委2012
怡土城	福岡県前原市	第4望楼遺構	-	○	-	-	古代～中世	『国指定史跡 怡土城跡』前原市教委2006
		大門地区土塁崩落地点	-	○	-	-	-	
鹿毛馬神籠石	福岡県飯塚市	城壁内外採取	-	-	○	-	-	『国指定史跡 鹿毛馬神籠石』穎田町教委1998
大野城	福岡県太宰府市 福岡県大野城市 糟屋郡宇美町	四王寺集落北側の水田の沢	-	-	○	-	-	『特別史跡大野城跡整備事業』V福岡県教委2010
		-	-	○	-	-	-	
金田城	長崎県対馬市	ビングシ山 SE2区	-	○	○	-	7世紀第3四半期か	『金田城跡』長崎県美津島町教委2000
鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	池跡トレンチ28①層	-	○	-	-	7世紀後半～9世紀後半	『鞠智城跡-第21次調査報告-』熊本県教委2000 『鞠智城跡-第22次調査報告-』熊本県教委2002
		池跡F区⑤層	-	-	○	-	7世紀後半～9世紀後半	

愛媛県永納山城では鬼城山に次いで2例目となる鍛冶炉1基が見つかった。鍛冶炉は直径約25cmの平面円形である。地面を掘りくぼめる単純な構造であるが、周辺に低い土堤を巡らせていた可能性が指摘された。鍛冶炉周辺からは椀形滓を含む鍛冶滓や鍛造剥片、粒状滓、羽口片が出土している。時期は築城段階か築城後という2つの可能性が示されているが、そのいずれに該当するかは不明である。

時期が推測された鍛冶関連資料は熊本県鞠智城にとどまるが、それも池跡の堆積土中から出土していることから7世紀後半～9世紀と幅がある。長崎県金田城ではビングシ山南斜面のSE2区の表土から羽口が出土しているが、同調査区では7世紀第3四半期の須恵器や陶質土器が出土しており、羽口も同様の時期の可能性が推測されている。

一覧表のように古代山城で見つかった鍛冶関連資料は限られている。しかし、築城段階の状況や築城後の活動を考えると各古代山城もしくは近隣に鍛冶工房が備えられていた可能性は高い。その場合、鬼城山で見つかったような長大な鍛冶工房で複数の鍛冶炉を同時稼働させる操業形態か、鍛冶炉単独の生産体制が推測される。今後、各古代山城における調査の進展に期待したい。(上柁)

註

- (1) 「鉄穴内遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』16 島根県教育委員会 2009
- (2) 『川原寺寺域北限の調査』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2004
- (3) 「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975
- (4) 「官」には地方の国・郡レベルも含む。
- (5) 古瀬清秀「鉄滓から見た鉄鍛冶技術」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会 2004
- (6) 安間拓己『日本古代鉄器生産の考古学的研究』溪水社 2007
- (7) 村上恭通「日本古代製鉄炉と国家政策」『鉄と古代国家』愛媛大学考古学研究室・今治市・今治市教育委員会 2006
- (8) 「津島岡大遺跡11」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2003
- (9) 前掲註7
- (10) 古瀬清秀「古墳時代鉄製工具の研究」『考古学雑誌』第60巻2号 1974
- (11) 和田晴吾「石工技術」『古墳時代の研究』5 雄山閣 1991
和田晴吾「石造物と石工」『専門技能と技術』(列島の古代史5) 岩波書店 2006
- (12) 『大宰府史跡発掘調査報告書V』九州歴史資料館 2008
- (13) 鏡山 猛『大宰府都城の研究』風間書房 1968
鏡山 猛「基肆城」『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版 1983
- (14) 『鞠智城跡』熊本県教育委員会 1983
『鞠智城跡-第21次調査報告-』熊本県教育委員会 2000
『鞠智城跡-第22次調査報告-』熊本県教育委員会 2002
- (15) 大澤正己「軸受金具の理化学的分析」『大宰府史跡発掘調査報告書V』九州歴史資料館 2008

第4節 土手状遺構について

鬼城山城内には、水門と一体となって機能し、土石流や流水による城壁の保護あるいは城内における水の確保を目的に築造されたと考えられる土手状遺構が存在する。今回の調査では第3・5水門上流の土手状遺構を調査したが、ここでは、その復元を試みるとともに築造過程や構造上の特徴について述べたい（第180図・表5）。

1 土手状遺構の復元

土手状遺構1

土手状遺構1は第5水門背後に位置する。平成11年度に確認調査（T111）が行われ、前面（上段）石垣と敷石が検出されている。今回はⅣ-1区を調査し、土手状遺構1の前面だけでなく背面にも石垣が存在していることを確認した。特に前面は2段築成で、折れ構造も確認できた。

T111で検出された上段石垣と敷石は、Ⅳ-1区で検出されたものとほぼ同レベルであることから、両者が一連の遺構であることに疑いない。Ⅳ-1区で上段石垣に折れが存在することは前述したが、T111でもトレンチ南端の石垣に折れを想起させる屈折部が存在する⁽¹⁾。この箇所を折れとするにはさらなる検証が必要ではあるが、仮にこの部分を折れとした場合、前面上段石垣の折れ間の距離は17.5mを測る。

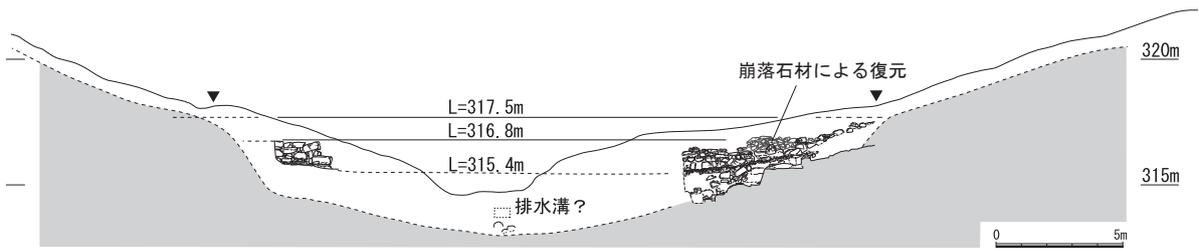
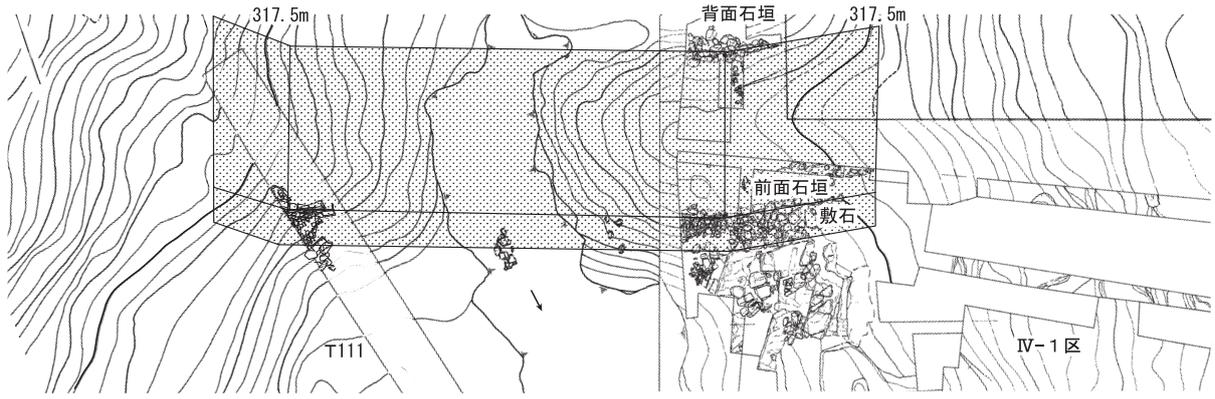
次に、土手状遺構1の高さについて検討する。土手状遺構1の本来の高さを推定する手がかりは少ないが、崩落石材や周辺の地形観察等から推測することができよう。土手状遺構1前面で検出された崩落石材は、本来、土手状遺構1の上段石垣の一部であったと考えられる。崩落石材は最大70cm程度の高さで検出されていることから、第131図①-④間の石垣上に崩落石材の高さを加えた復元が可能であろう。このようにして復元すると、土手状遺構1は少なくとも標高316.8m付近まで上段石垣が構築されていたと考えることができる（第180図1）。

さらに、土手状遺構1の裏込めとして埋設された石材（第131図⑤-⑥間）の高さが標高約317.4mを測ることから、標高317.5m程度の高さを想定することも可能であろう。現地形でも標高317.5m付近から土手状遺構1の地形を示す等高線が観察できる。このことから、土手状遺構1は少なくとも標高317.5mあたりまでの高さがあったと考えられる。石垣の復元高316.8mと70cmほど高低差があるが、上段石垣上面に盛土がなされていた可能性も想定できる（第180図3）。

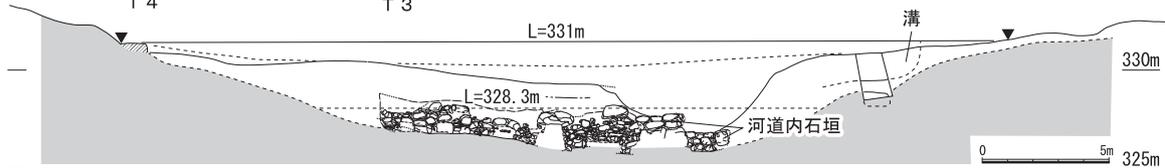
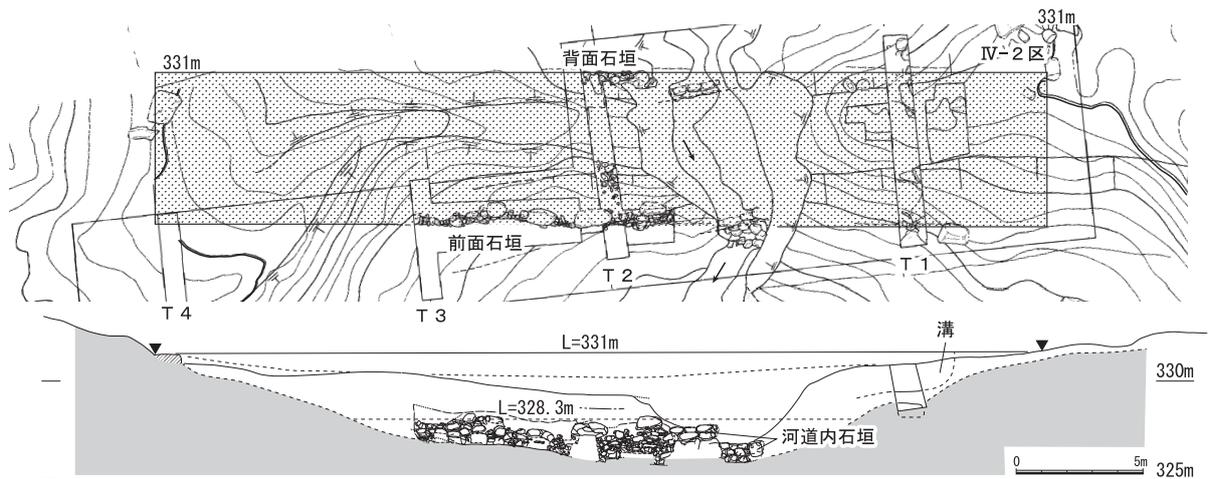
このように、土手状遺構1の高さを標高317.5mとすると、そこから導き出される土手状遺構1の全長は26.5mとなる。

表5 土手状遺構の概要

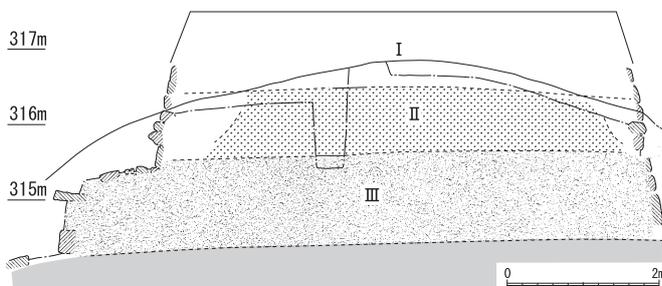
	位置	構造	主軸	使用石材
土手状遺構1	第5水門背後 標高315m	堤体盛土 前面石垣（上段石垣、下段石垣） 背面石垣、敷石 折れ構造あり	N-19°-E	割石 主に花崗岩
土手状遺構2	第3水門から 上流へ80m 標高328m	堤体盛土、堤頂部に溝 前面石垣、背面石垣 直線	N-15°-E	割石 主に花崗岩



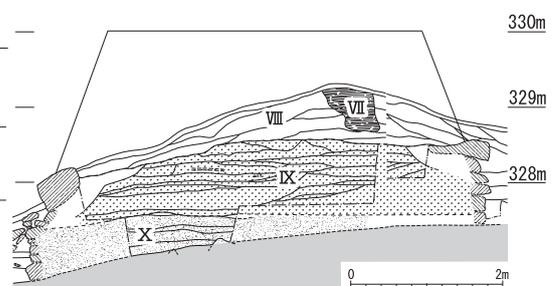
1 土手状遺構 1



2 土手状遺構 2



3 土手状遺構 1 断面模式図



4 土手状遺構 2 断面模式図

第180図 土手状遺構の復元 (1/300・1/100)

土手状遺構2

土手状遺構2は第3水門上流約80mに位置する。現存する土手状遺構2は、中央部を流水による浸食で欠失しているが、調査の結果、前面と背面に石垣をもち、石垣上面には盛土が施されていることが分かった。

土手状遺構2の前面石垣はT2-3間で長さ約10.2m分を検出しているが、T1・T4では石垣が見られない。前面石垣の天端はおよそ標高328.3mであるので、これより下位に石垣を構築したものと考えられる。付近の地山の形状を考慮に入れると、前面石垣は約20mにわたり設けられたと推定される。

土手状遺構2の高さであるが、現存する遺構の高さに加え、周辺の地形から判断するほかない。土手状遺構2は南北とも標高331m付近で土手状遺構の端部を確認することができるので、標高331mを天端と考えることが可能であろう。しかし、標高331mで復元すると、土手の中央部では石垣上に2.5mもの高い盛土を積み上げねばならない。土手状遺構2の盛土は城壁の版築のような硬度はなく、土の締まりも弱いことから、2.5mもの高い盛土は構造上想定しづらい。このことから、土手中央部の盛土は低く抑えられていた可能性が考えられる。第180図2・4では中央付近の天端を標高330mで復元している。

このように、土手状遺構2の高さを標高331mとすると、土手状遺構2の全長は約35mとなる。なお、土手状遺構2の頂部には溝状の遺構がみられ、T1の北で途切れている。ここを起点として土手状遺構2の長さを復元すると31mになる。よって、ここでは土手状遺構2の全長を31~35mと復元する。

2 土手状遺構の築造工程

次に土手状遺構の築造工程を検討する。なお、盛土の区分は本文に記載したI~Xを使用する。

土手状遺構1

まず、土手状遺構1であるが、およそ次のような築造工程が想定できる。

第1工程：整地

第2工程：盛土造成（Ⅲ）

第3工程：下段石垣と敷石の構築（背面石垣の構築）

第4工程：盛土造成（I・II）

第5工程：上段石垣の構築（背面石垣の構築）

第6工程：盛土造成

まず、第1工程であるが、土手状遺構1前面の花崗岩盤には整形された痕跡が見られる。この花崗岩盤には一定方向に節理がみられ、これを利用して岩盤を階段状に加工したと考えられる。敷石の高さが岩盤3段目の高さとおおよそ合致するなど、土手状遺構1とこの岩盤には施工上密接な関係がうかがえる。折れが存在する理由も、折れを設け岩盤の形状に合わせることで、敷石を無理なく地山に取り付けることができるということで説明できる。この工程における地山の整形が土手状遺構1の設計に深く関係していることが分かる。

第2・3工程については、土手状遺構1深部の土層断面観察が十分に行えておらず、不明な点も多い。しかし、盛土Ⅲの上面が敷石の高さに近いことから、ここで工程上の区切りを設けることが可能であろう。下段石垣や敷石の掘り方は未検出であるが、盛土後に下段石垣や敷石を構築したものと

推測できる。背面石垣もこの段階から構築された可能性もある。

第4・5工程では、盛土と上段石垣が設けられたと考えられる。掘り方の存在から盛土（Ⅰ）・Ⅱ造成後、上段石垣を構築、背面石垣も掘り方の存在からこの段階での構築が考えられる。盛土は、薄層を互層状に積み上げて構築されているが、突き固められたような形跡はなく硬度はほとんどない。

第6工程は、土手状遺構1の復元過程で述べたが、土手状遺構1の高さを317.5mに復元した場合に想定される上段石垣上の盛土造成である。あくまでも想定として提示しておきたい。

土手状遺構2

次に土手状遺構2の築造工程であるが、およそ次のように推定する。

第1工程：整地

第2工程：盛土造成（Ⅸ・Ⅹ）

第3工程：前面と背面石垣の構築

第4工程：盛土造成（Ⅷ）

第5工程：堤頂部の溝の掘削（Ⅶ）

第2・3工程であるが、この工程で標高328.3m以下の部分に幅約20mにわたる石垣を構築したものと考えられる。土層断面から、最初に盛土Ⅸ・Ⅹを造成し、次に石垣を構築したものと推定される。盛土Ⅸは灰白色土を部分的に含む層であるが、この灰白色土は非花崗岩系の風化土に由来するものと考えられ、土手状遺構2に使用された土砂の供給先を考える上で興味深い⁽²⁾。

土手状遺構2は、第4工程で再び盛土を施し、第5工程で堤頂部に溝Ⅶを掘削している。この溝は、掘り直しが見られたり、平面形も不整形であったりと性格がはっきりしない。管見がなく、目的や用途は不明である。土手状遺構2の盛土Ⅷは特に北半部で残存状況がよく、鬼城山築城当初の遺構がそのまま残存しているとは思えない部分もあり、この第4・5工程には後世の修築も含まれている可能性が考えられる。

3 排水施設

土手状遺構1・2における排水施設であるが、ともに調査した範囲では検出されていない。土手状遺構1・2が存在する谷川は、年間を通して水の流れが絶えることがないため、土手状遺構には何らかの排水施設があった可能性がある。

土手状遺構1は前面に通路状の敷石が設けられていることから、堤体上部から越流による排水を行った場合、敷石の機能を低下させるばかりではなく、盛土で構成されている堤体本体の浸食を促進することにもなり、想定しづらい。堤体の大部分が盛土と考えられるため、排水のさいに堤体内への漏水を最小限に抑えることのできる施設が想定しやすい。したがって、排水施設として下段石垣あるいは基底部付近に木樋管のような排水構造物を設けていた可能性が高い。

土手状遺構2についても同様であるが、土手状遺構2は基底部まで盛土であることが確認されている。前面石垣の調査中も排水口の検出を試みたが、調査区内では検出できていない。土手状遺構2も土手状遺構1と同様に木樋管のような施設で排水したと考えられる。

4 土手状遺構の特徴

ここまで、土手状遺構1・2の復元や築造工程を検討したが、ここで両者の特徴を比較検討したい

(表5)。土手状遺構1と2は、前面と背面に石垣をもち、堤体は盛土であるなど共通する部分もある。しかし、土手状遺構1の前面は2段築成で、敷石を備え、また、折れ構造を持つという点は、土手状遺構2には見られない。また、土手状遺構1の上段石垣では横目地を意識した石積みが見られるなど丁寧なつくりであるが、土手状遺構2の前面石垣は使用石材の大きさもまばらで雑な印象を受ける。両者には石材の選択や積み方にも相違が見られる。また、盛土の構造も、土手状遺構1は版築のような締めはないが、互層状に土を薄く積み上げているのに対し、土手状遺構2は土手状遺構1のような細かな積み上げ方は見られない。さらに、土手状遺構2には用途等は不明であるが堤頂部に溝状の掘り込みがみられる。同じ土手状遺構でありながら、両者の構造には大きな差が認められる。

土手状遺構の構築方法を比較するにあたり、使用尺度の問題にふれておく。鬼城山築城で使用された尺度については研究史がある。葛原克人は、古代尺度論を検討した新井宏の研究をもとに、南門と西門については古韓尺（1尺=26.8cm）が、東門については唐尺（1尺=29.7cm）が採用されていると考えた⁽³⁾。鬼城山西門などを復元した濱島正士は西門の柱間寸法で完数を得られる数値として27.3cmをあげ、これを北魏の永寧寺九重塔（516年）の使用尺度と近いことを指摘した⁽⁴⁾。また、稲田孝司は城壘築造の基本単位として令大尺（1尺=35.4cm）を使用し、個別の柱などには令小尺を使用する場合があったとしている⁽⁵⁾。これらの使用尺度を用い、今回の土手状遺構の調査や復元で得られた数値と比較してみた（表6）。その結果、土手状遺構1については、調査により得られた信頼度の高い測量値である前面の折れ間、基底部幅、上段石垣と背面石垣間の幅、敷石幅については、いずれも古韓尺で5の倍数に収まった。一方、土手状遺構2については正確なデータが少ないが、基底部の幅については令小尺で切りのよい数字となっている。尺度については、同じ尺設定とみられる柱間等でも個々の寸法にばらつきが認められる例もあり、使用尺度の認定には慎重な手続きが必要である。また、古韓尺については批判的な意見もあり、その採否についてはさらなる議論が必要である。ここでは、土手状遺構を構築するさいに使用された尺度の特定までするつもりはないが、土手状遺構1と2では、使用された尺度が異なっていた可能性が考えられる。両者は同じ城内の土手状遺構でありな

表6 土手状遺構における基準尺の検討

	測定値 A (cm)	古韓尺 (26.8cm)	(27.3cm)	令小尺 (29.6cm)	令大尺 (35.4cm)	
		A/26.8 ⁽¹⁾	A/27.3 ⁽¹⁾	A/29.6 ⁽¹⁾	A/35.4 ⁽¹⁾	
土手状遺構1	復元全長	2,650	99	97	90	75
	前面折れ間	1,750	65	64	59	49
	基底部幅	800	30	29	27	23
	上段石垣～背面石垣幅	650～665	24～25	24	22	18～19
	敷石幅	135	5	5	5	4
	復元による高さ	470	18	17	16	13
土手状遺構2	復元全長	3,500 3,100	116～131	114～128	105～118	88～99
	基底部幅	605	23	22	20	17
	復元による高さ	350	13	13	12	10

註

- (1) 測定値 A をそれぞれの尺で除し、小数点一桁を四捨五入した数値を以下に示す。
- (2) 網掛けは復元による数値をもとに算出している。

がら、異なる規格で築造された可能性が高いことを指摘しておきたい。これは、鬼城山の城門が、西門・南門・北門・東門とそれぞれに特徴が見られるのと同様で、その差異が何に由来するのかについては、鬼城山全体の築城工程を検討する中で解決していく課題であろう。

5 古代山城における土手状遺構

鬼城山の土手状遺構については、今回の調査で第3水門と第5水門に伴う施設を調査した。鬼城山には城の南・東側に大規模な谷が5つあり、それに対応するように5つの大きな水門（第0水門は除く）が設けられ、各水門はそれぞれに対応する流域と貯水池をもつ。第1水門については、流域面積が他の流域とくらべて小さいからか貯水池は存在するが、土手状遺構は確認できていない。第2水門上流には灌漑用の貯水池が存在し、その前面に土手状遺構が存在している。しかし、基底部に新しい時代の樋が設けられているなど大規模な改修を受けている。もともと古代の土手状遺構が存在していたのかどうかは不明である。第4水門については、流域がモトクロス場の建設等により大きな改変を受けていることから、貯水池は確認できるものの、土手状遺構の存在は不明となっている。このように、鬼城山に所在するすべての土手状遺構について明らかにできたわけではないが、鬼城山には築城当初から主要な水系について貯水池と土手状遺構が備えられ、水門と一体となって城内の水が管理されていたと考えることができよう。

鬼城山の土手状遺構のように、古代山城の城内において水利施設が報告されている事例として、熊本県鞠智城跡貯水池跡の堤防状遺構⁽⁶⁾や福岡県御所ヶ谷神籠石の馬立場石塁⁽⁷⁾などがある。しかしながら、発掘調査事例も限られる今日においては、鬼城山の土手状遺構を全国の古代山城の中に位置付けるには情報が不足しているといえる。よって、この点については、今後の資料の増加をまって検討を加えていく必要がある。 (金田)

註

- (1) 写真や実測図で見ると、T111南端の石材1石が屈折しているように見受けられる。ここを折れと認定するには、周辺の平面調査等が必要であることはいままでの調査からはわからない。
- (2) 鬼城山築城に伴う土砂を採取したいわゆる土取り場については十分に解明されているわけではないが、西門跡から30mほど城内に入った場所で土取り場と推定される窪地状の遺構が調査されており（市年報9）、アプライト風化土とみられる灰白色系土が採取されたと考えられている。実見したわけではないが、土手状遺構2の灰白色土も同様の土質のものと考え、土手状遺構2周辺にもこのような土を産出した土取り場が存在した可能性が考えられる。
- (3) 葛原克人「備中鬼ノ城の創築期をめぐって」『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002（『吉備考古論考集』吉備人出版2011に再掲）
- (4) 濱島正士「西門ほかの復元について」『鬼城山 国指定史跡鬼城山環境整備事業報告』2011
- (5) 稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第34号 日本考古学協会 2012
- (6) 『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』熊本県教育委員会 2012
- (7) 小川秀樹「豊前・御所ヶ谷山城」『古代文化』第62巻第2号 財団法人古代学協会 2010

第5節 鬼城山から出土した土器について

鬼城山では、昭和55年刊行の学術報告以来、土器など数多くの資料が城内で発見されてきた⁽¹⁾。これらの資料の時期は縄文時代から中・近世までと幅広いが、特に古代山城に関係する7世紀後半から8世紀にわたる資料が多い。古代山城でこれほどの資料が出土している例は全国的にも数少ない。本節では、鬼城山に関係する飛鳥時代から奈良時代の土器を取り上げ、特に編年研究のすすんでいる須恵器を中心に検討し、その特徴や想定される時期について言及したい。

1 出土須恵器の分類

鬼城山から出土した須恵器や土師器については、奈良文化財研究所で示されている器種分類を参考に記述するが、そのうち杯については地域性を考慮する必要から、近年、瀬戸内市寒風古窯跡群の調査をもとに報告された瀬戸内市編年⁽²⁾を参考に分類する。

須恵器杯の分類（第181図）

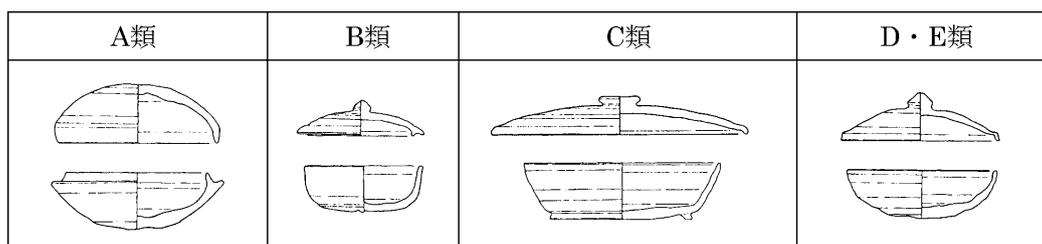
- A類：寒風1 - III号窯跡焼成部床面出土遺物を指標（奈文研分類 杯H）
- B類：寒風1 - II号窯跡焼成部床面出土遺物を指標（奈文研分類 杯G）
- C類：主に寒風1 - I号窯跡の焼成部・灰原、2号窯跡焼成部の一部を指標（奈文研分類：杯B）
- D・E類：2号窯跡焼成部床面、前庭部、灰原の一部を指標とする。これまで、「椀形杯」⁽³⁾や「杯身Hh」⁽⁴⁾と呼称された杯類や、口縁内部にかえりをもたない小形の蓋（おおむね口径12cm以下）を対象とする。

2 城内で出土した土器

第182図は、鬼城山で出土した須恵器や土師器の中で、7世紀後半から8世紀（一部、9世紀のものも含む）に属する代表的な資料を調査区別に掲載したものである。次に各地区の土器の様相を述べる。

1 I区

I区では土器溜まり1を中心にまとまった土器が出土した。土器溜まり1はその出土状況や完形品が含まれることから、土器が片付けにより廃棄された可能性の高い遺構といえる。土器溜まり1では多様な器種が見られ、須恵器では杯、皿、高杯、壺、平瓶、横瓶、甕、円面硯が、土師器では杯、甕が出土している。須恵器杯はB類、C類、D・E類が出土している。B類は蓋7と身25があるが点数は少ない。C類は土器溜まり1での主要器種となっている。杯蓋には内面にかえりのあるタイプと



第181図 須恵器杯の分類⁽²⁾

ないタイプがあり、後者が多数を占める。身は外方に踏ん張った高台が底部から体部にいたる屈曲部分のやや内側に貼付されているものが多い。D・E類は杯蓋**8**（口径9.6cm）が見られるが数は少ない。高杯は長脚と短脚のものが出土している。長脚高杯には透かし孔が施されているものが見られ、この時期の高杯としては古い要素が遺存している。長頸壺（**51・52**）は完形品ではないが、張りのある肩部に踏ん張りのある脚部がつく。円面硯（**59～61**）も出土しているが、土器溜まり1出土の杯等の中には転用硯と考えられるもの少なくとも9点（その他可能性のあるもの7点）が確認されている。土師器は甕を中心とし、杯が少量出土している。**66**の杯は畿内産土師器の可能性が高い。

その他、I区では土器溜まり1以外にも土器が出土しているが、基本的な器種構成は土器溜まり1に近い。

2 II区

II区は礎石建物群が所在する区域である。出土遺物として須恵器、土師器のほか、瓦塔、瓦などがあげられるが、そのほとんどは遺構に伴わない状態で出土している。須恵器は杯、高杯、皿、壺、横瓶が、土師器は椀、甕が出土している。須恵器杯はC類、D・E類が出土している。C類蓋は内面にかえりのないものが大部分である。わずかにかえりを有するものもあるが、小破片のため詳細な形状は不明である。杯蓋には、天井部が丸みをもって笠形を呈するタイプや口縁端部をS字状に屈曲させるタイプなどが見られる。身は完形に復元できるものが2点（**209・210**）あり、**210**は「ハ」の字状にひらく高台にやや曲線気味の体部をもつものに対し、**209**は断面が台形気味の高台にやや直線的な体部が続く。一般的に前者が古く、後者が新しい傾向を示す。

II区の中で平安時代に属する掘立柱建物1の基壇造成土から出土した須恵器の一群（**148～153**）は、掘立柱建物1の基壇を造成するさいにまぎれ込んだものと考えられる。掘立柱建物1は礎石建物群廃絶後に建築されたと考えられ、これらの須恵器は礎石建物群の廃絶時期を考える上で重要な資料である。

3 III区

III区は鍛冶工房として利用された区域である。鍛冶工房は築城工事に必要な鉄製道具の製作や修理を行った場所と考えられることから、ここでの出土資料は、築城中というある程度限定された時期に使用されていた可能性が高い。出土資料の大半は鍛冶関連遺物であるが、須恵器や土師器も発見されている。須恵器では杯、高杯、平瓶、横瓶、甕が、土師器では杯、甕が出土している。杯C類蓋（**276・277**）はともにかえりを有するが、かえりの端部は丸みをおび、退化傾向が認められる。C類身は検出されていないが、杯D・E類はわずかであるが出土している。鬼城山の築城時期を考える上で重要な地区であるが、土器の出土量が少ないのが残念である。

4 IV・V区

IV区では土手状遺構及びその周辺から土器が出土している。土手状遺構1では石垣裏込めで甕片（県報告203-104）が、土手状遺構2では盛土中から須恵器杯C類（**313**）や甕片（**315**）が出土しており、遺構の築造時期を考える上で重要である。遺構周辺から出土した須恵器杯蓋の小片（**309～312**）はC類で、内面にかえりのあるものとなないものがある。

V区では、遺構に伴わない遺物として須恵器杯、壺、平瓶、皿、甕や、土師器杯、甕が出土している。C類蓋では内面にかえりのあるものとなないものが混在する。D・E類身として**339**が出土したが、当初は丸底に近い底部であることから杯A類の可能性も考えたが、鬼城山では確実なA類身が発見さ

れていないこと、また寒風2号窯焼成部床面出土資料などに類例のあることなどから杯D・E類とした。土師器では杯350が出土しており、畿内産土師器と考えられる。

5 その他城内

これまでの学術調査や総社市による調査も含め、今回の調査区以外で出土した土器の主要なものを第182図「その他城内」にまとめている。各土器の詳細は報告書の記述に委ねたいが、須恵器では杯、長頸壺、壺、平瓶、皿、甕、円面硯、土師器では甕、甑等が出土している。須恵器杯ではB類、C類、D・E類が出土している。これらの土器については、葛原克人により詳細な報告と時期的な検討が加えられている⁽⁵⁾。

3 鬼城山出土土器の時期的検討

ここまで鬼城山から出土した土器の概要を述べたが、中でも研究のすすんでいる須恵器杯等を中心に、想定される時期について検討を行う。今回の調査で出土した須恵器のほとんどが備中地域で生産された可能性の高いことが胎土分析(付載1)で明らかとなっている。したがって、須恵器の検討は、まず備中地域を中心とした編年研究をもとにすすめる必要がある。その備中地域における須恵器編年であるが、飛鳥時代から奈良時代にかけて、亀田修一⁽⁶⁾、武田恭彰⁽⁷⁾、平井泰男⁽⁸⁾らの研究があげられる。しかしながら、窯跡の調査事例も少なく、十分な編年が確立できていない部分もある。そこで、必要に応じて同じ県内の備前地域⁽⁹⁾あるいは畿内(都城)編年⁽¹⁰⁾を援用しながら、鬼城山から出土した土器の時期について考えてみたい。

まず、城内から出土した須恵器の特徴の一つに、古墳時代から続く杯のタイプA類が見られないことがあげられる⁽¹¹⁾。杯A類は7世紀中葉ごろまで県内の窯跡で焼成されていたと考えられる⁽¹²⁾。このことから、鬼城山は杯A類の流通がほとんど見られなくなった7世紀中葉以降に営まれた可能性が考えられる。

次に杯B類であるが、鬼城山での出土量は少ない。杯B類は県内の窯跡で主に7世紀第2～3四半期ごろの焼成が確認されている⁽¹³⁾が、杯A類にくらべ出土量も少なく流通も限定された器種であったと考えられる。これまでに出土していた杯B類蓋について、葛原は第182図cを壺蓋の可能性も指摘しつつ、飛鳥皿に収まると考えた⁽¹⁴⁾。また、平井は、鬼城山から出土した杯B類について、奈良県甘樫丘東麓遺跡SX037や水落遺跡出土土器との類例から7世紀中葉前後に位置付けられる可能性を指摘した⁽¹⁵⁾。今回I区で出土した杯蓋7は最大径10.0cmを測るが、天井部に丸みがなく内面のかえりも退化傾向を示すなど、杯B類蓋としては後出の様相を示す。同じく身25は口径10.0cm、器高4.0cmを測り、瀬戸内市編年の土橋式の法量に近い。市編年で土橋式は7世紀第3四半期前半ごろに比定されている⁽¹⁶⁾。この杯B類の存続時期をどのように考えるかについてはさらなる検証が必要であろうが、武田は杯B類の消滅を7世紀末葉(690年ごろ)に想定している⁽¹⁷⁾。

鬼城山から出土する杯で主要器種となっているのは杯C類である。このうち、I区の土器溜まり1では、まとまった杯C類が出土した。土器溜まり1のC類蓋には、内面のかえりがないものがほとんどで、あるものは少ない。また、杯は外側に踏ん張る高台をもち、高台が底部から体部へいたる屈曲点の内側に貼付されているものが多いという特徴を有する。同様の特徴をもつ事例として備中地域では浅口市上竹西の坊窯⁽¹⁸⁾があげられる。上竹西の坊窯跡灰原2から出土するC類は飛鳥IV～V期に位置付けられるが⁽¹⁹⁾、共伴する蓋の内面にかえりのないものが主流を占めていることを考慮すると、

	I 区	II 区	III 区	IV・V区	その他城内			
須 恵 器	<p>7, 83, 84, 9, 10, 11, 14, 15, 18, 19, 20, 23, 22, 89, 203-38, 94, 203-41</p>	<p>25, 96, 27, 28, 203-39, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 203-15, 37, 38, 39, 203-41</p>	<p>42, 43, 203-10, 48, 45, 50, 46, 62*</p>	<p>52, 51, 59, 60</p>	<p>205, 203-50, 148, 206, 203-69, 149, 169, 203-54, 203-61, 203-70, 168, 167, 204, 203-59, 146, 150, 130</p>	<p>276, 277, 295, 203-102, 298, 296, 292, 279</p>	<p>309, 310, 334, 336, 337, 339, 313, 314, 344, 306, 346, 284*, 285*, 350</p>	<p>a, b, g, h, 203-105, 203-103, c, j, n, 203-106, l, o, e, f, m, p, q, r, s, t, u, 203-110*, v*, w*, x, y, z*</p>
	<p>66, 70*, 74*, 75*</p>	<p>70*, 74*, 75*</p>	<p>147, 131, 265*</p>	<p>284*, 285*</p>	<p>284*, 285*</p>	<p>x, y, z*</p>		

_(下線)は土器溜まり1出土

※県報告203掲載の土器は203-○(掲載番号)と表記
第182図 鬼城山出土土器一覧(1/8 *は1/10)

飛鳥編年でいう、かえりのない杯蓋が多くなる飛鳥Ⅴを中心に考えるのが妥当であろう。一方、8世紀初頭の土器群として、「郡殿」と墨書された須恵器が出土した総社市三須河原遺跡 SK03⁽²⁰⁾がある。SK03には備前産とされる須恵器も含まれており単純比較はできないが、高台の位置や踏ん張りの度合いなどから見ると、SK03の一群は土器溜まり1の杯C類より新しい様相を示している。このように考えるならば、土器溜まり1の杯C類は、飛鳥Ⅳ～Ⅴに相当する7世紀第4四半期を中心とするもので、さらに限定すれば7世紀第4四半期でも後半（以下、7世紀末葉）から8世紀初頭を中心とする時期に比定されよう。

Ⅲ区でも杯C類蓋が出土している。内面にかえりのある杯蓋であるが、類似の資料がⅠ区でも見られることから（県報告203-14）、Ⅲ区の土器群をⅠ区の土器群がもつ時間幅の中に含めることもできる。しかし、Ⅲ区では、出土した須恵器が少ないので確証はないが、内面にかえりのない杯蓋が含まれていないので、Ⅲ区の土器群をⅠ区土器溜まり1の土器群よりもやや古く考えることもできよう。

一方、Ⅱ区で出土した杯C類はⅠ区より新しい様相を示すものが見られる。一般的に、C類蓋で天井部が丸みをもって笠形を呈するタイプは7世紀後半から奈良時代前半、口縁端部をS字状に屈曲させるタイプは奈良時代後半に属すると考えられる。また、C類身210は高台が底部と体部の境に近くなるなど、Ⅰ区の杯C類より新相を呈する。209はさらに新しい要素が見られ、体部も直線的で断面台形の高台が底部と体部の屈折部に取り付く。前者は8世紀初頭から奈良時代前半、後者は奈良時代後半に位置付けられよう。また、掘立柱建物1の基壇造成土から出土した須恵器で149は奈良時代後半に属すると考えられることから、このころまでⅡ区に礎石建物群が存在していた可能性が高い。

杯D・E類も城内で散見される。椀形杯ともいわれ、一般的に時期が新しくなるほど口径が広く、器高が低くなり底部が明確になるといわれているが、備中地域において体系的に整理されているわけではない。城内で検出された96、県報告203-102、339は口径11cm台を測り、ともに口縁部のナデ調整が類似するなど共通点も見受けられる。詳細な時期比定は難しいが、瀬戸内市編年などから7世紀第4四半期以降のものと考えることができよう。

その他、畿内産土師器と考えられる杯が出土している。Ⅰ区で出土した杯66は、残存状況は良くないが、内面には2段の放射状暗文が見られる。径高指数25.6、奈良文研分類で杯AⅢに分類できる。Ⅴ-2区で出土した杯350も同様で内外面とも丁寧な調整がみられる。径高指数37、杯AⅠに近い。これらの土器は、その特徴から飛鳥Ⅳ～Ⅴに位置付けることができよう。

このように鬼城山では、杯B類など7世紀第3四半期にさかのぼる可能性のある土器も出土しているものの、全体としてⅡ区以外のⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区では飛鳥Ⅳ～Ⅴに相当する7世紀第4四半期から8世紀初頭を中心とする土器が見られる。中でも土器溜まり1は7世紀末葉から8世紀初頭を中心とする時期に比定できる。一方、Ⅱ区では奈良時代終わりごろまで遺物が継続して見られ、他の地区とは様相が異なっている。

ここで示した年代は、現段階での須恵器編年をもとにしたもので、今後の研究の進展によっては、この年代観が変わる可能性のあることはいうまでもない。また、杯以外の器種については十分な検証が行えておらず、今後の課題といえる。なお、これらの年代観が示す歴史的背景については、第8節で言及する。

（金田）

註

- (1) 鬼城山では、須恵器約400点、土師器約200点の実測図として公表されている。そのほか、実測図になっていないものも加えるとさらに多くの資料が城内で発見されていることになる。
- (2) 馬場昌一「出土遺物」『史跡寒風古窯跡群』瀬戸内市教育委員会 2009
- (3) 武田恭彰「三須河原遺跡出土の古代土器」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 総社市教育委員会 2003
- (4) 平井泰男「岡山県における須恵器の様相－7世紀を中心に－」『研究報告』31 岡山県立博物館 2011
- (5) 葛原克人「備中鬼ノ城の創築期をめぐって」『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002
(『吉備考古論考集』吉備人出版2011に再掲)
- (6) 亀田修一「山陽」『須恵器集成図録』第5巻 西日本編 雄山閣 1996
- (7) 武田恭彰「備中に於ける律令期土器様相の諸問題－地方の律令的土器様式の成立と変質－」『古代吉備』第18集 1996
前掲註3
- (8) 前掲註4
- (9) 前掲註2
- (10) 西 弘海「7世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986
西 弘海「平城宮の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986
林部 均「伝承飛鳥板蓋宮跡出土土器の再検討」『橿原考古学研究所論集』第13 吉川弘文館 1998
佐藤 隆「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年－陶器窯跡編年の再構築に向けて－」
『大阪歴史博物館研究紀要』第2号 2003
佐藤 隆「8世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係－陶器窯跡編年の再構築に向けて・その2」
『大阪歴史博物館研究紀要』第3号 2004
- (11) 鬼城山は城内すべてを調査したわけではないので、今後の調査の進展等で出土する可能性がないわけではない。
- (12) 前掲註4 表1
- (13) 前掲註4 表1
- (14) 前掲註5
- (15) 平井泰男「鬼ノ城～謎の古代山城～」『鬼ノ城～謎の古代山城～』岡山県立博物館 2010
- (16) 前掲註2
- (17) 前掲註3 第180図
- (18) 「上竹西の坊遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』3 岡山県教育委員会 1988
- (19) 前掲註3
- (20) 「三須河原遺跡・三須畠田遺跡・三須美濃田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 総社市教育委員会 2003

第182図「その他城内」掲載土器出典一覧

a 杯蓋：西門『市年報9』第64図2	n 長頸壺：『市報告18』第161図9
b 杯蓋：西門『市年報11』第82図13	o 壺：第95壘状区間『市報告18』第162図25
c 杯蓋：第28壘状区間『学術報告』第37図6	p 壺：角楼付近『市年報11』第82図15
d 杯蓋：南門『市年報8』第67図1	q 甕：角楼『市年報7』第76図1
e 杯蓋：屏風折れの石垣『学術報告』第38図1	r 壺：第45壘状区間『市報告18』第162図29
f 杯蓋：西門『市年報9』第64図1	s 平瓶：第3壘状区間『市年報8』第69図30
g 杯：第4壘状区間『市報告18』第161図1	t 平瓶：第19壘状区間『学術報告』第37図2
h 杯：第4壘状区間『市報告18』第161図4	u 円面碗：南門『市年報8』第67図11
i 杯：西門『市年報9』第64図3	v 甕：南門『市年報8』第67図16
j 杯：南門『市年報8』第67図5	w 甕：第11壘状区間『市報告19』第32図4
k 杯：南門『市年報8』第67図4	x 盤：屏風折れの石垣『学術報告』第37図9
l 杯：第19壘状区間『市年報20』第61図12	y 甕：西門『市報告18』第163図2
m 皿：南門『市年報8』第67図6	z 甗：第5壘状区間『市報告18』第161図24

第6節 出土瓦塔について

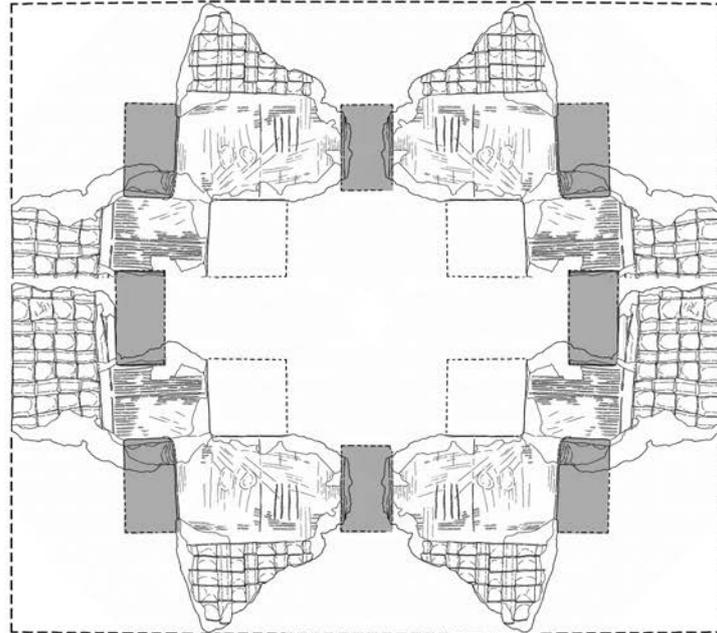
西日本における瓦塔の出土数は約50例と、約400例以上認められる東日本と比較して非常に少ない。吉備出土の瓦塔も20数例で、その多くが多角形ないし円形の瓦塔であり、かつ8世紀代に位置付けうるものも数少なくないとの亀田修一の指摘⁽¹⁾がある。これまで鬼城山では、2基分と思われる瓦塔片が出土している。1つは、県報告203で60として報告したものと同一個体と判断される268である。以下これを瓦塔Aとする。もう一つは3片が接合した187であり、これを瓦塔Bとする。また、188・189・269・270は部位は特定できないが、胎土焼成等の特徴から瓦塔Bの小破片の可能性はある。

瓦塔Aの県報告203-60は礎石建物1の東側で確認調査中に表採されたものであり、268は掘立柱建物1の南側の表土層から出土している。この瓦塔Aの特徴としては、須恵質で硬質に焼成されており、半裁竹管状の工具によって段を設けて1枚1枚の平瓦・丸瓦を忠実に表現している。なお、瓦当表現はなく、垂木表現も認められない。屋根部分の反りは弱く平坦気味で、軒の出もさほど伸びない印象を受ける。また、隅降棟と平・丸瓦の関係から多角形とすることも捨てきれないが、四角形の屋根が復元できるのではないかと推測している。これまでの吉備出土の瓦塔には類似例はない⁽²⁾。

瓦塔Bの187~189は側柱礎石建物6の廃絶後の堆積土下層から出土している。3片が接合した187は瓦塔Aと比較し、きめの細かい粘土を用いており、やや不良な焼成状況である。また、最大厚6.9cmと他の瓦塔例と比較しても重厚な屋蓋である。接合状況から隅降棟は欠損しているものの四角形の屋蓋が復元される。以下、第183図に示した復元案をもとに細部の説明を加える。まず、屋根の丸瓦・平瓦ともに1枚1枚段で表現されているが、瓦塔A同様、瓦当表現はない。また、丸瓦の凸部よりも平瓦の方がより凹部が強調されている。屋根幅は瓦4枚分と推定6枚分で面によって異なるが、いずれも7cm内外で大きな差はなく、屋蓋全体の推定規模からすると非常に短い。上面には荒いハケメ状の調整とともに、等間隔にかきやぶりとも思われる傷が認められ、上にのせる軸部材の安定を図ったとも理解できる。このかきやぶり状の痕跡と瓦葺部との間には直線状の線刻があり、部材組み立ての目安としたのかもしれない。また、貫通しない長方形の柄穴が残存部品で3か所で観察され、上部の軸部材をソケット状に受ける部分と考えた⁽³⁾。さらに一辺6cmほどの方形の貫通する穴があり、これをもとに角柱の4本柱として考えた⁽⁴⁾。下面には荒い工具ナデの痕跡が残り、雑な造作で垂木表現も認められない。なお、復元案にさいしては長方形の柄穴の大きさを全て同じと仮定し、さらに柄穴間隔も均等に配した。その結果、復元案Iでは全体で8か所の柄穴を持ち、屋蓋全体の大きさが56×50cm、復元案IIでは長方形8か所、正方形2か所の計10か所の柄穴とし、屋蓋が65×59cmとなり、いずれも正方形にはならず、やや長方形を呈する形となった⁽⁵⁾。この復元される屋蓋部の規模から推定すると、五層構造をとれば全高2mを超える規模とすることも可能かもしれない。

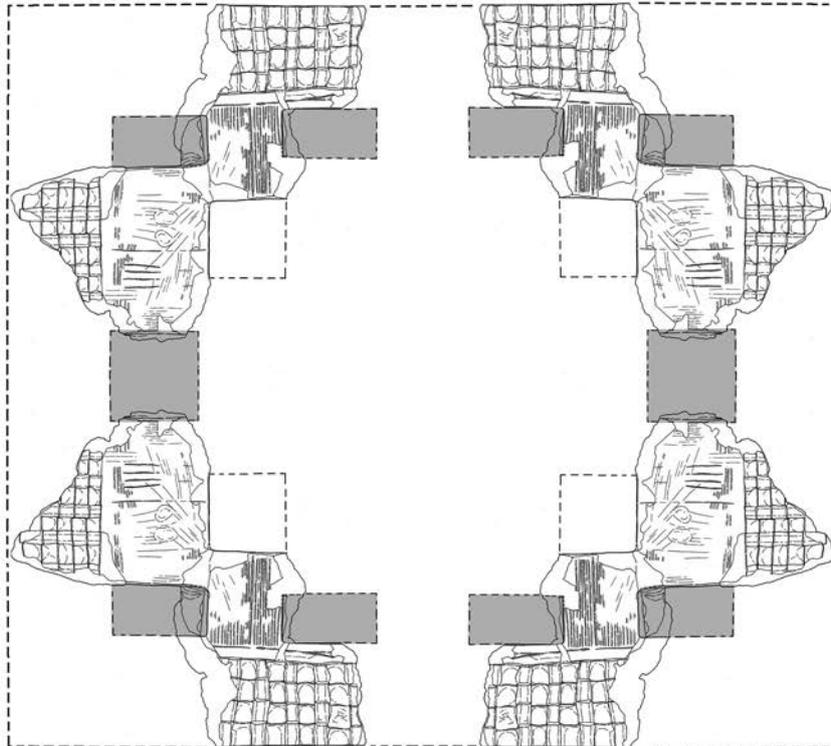
瓦塔A・Bは、一見その形状から大きな差がある印象を受けるが、共通する特徴も多々ある。まず、平瓦・丸瓦ともに1枚1枚丁寧に表現されていること、平瓦の凹面が強調されていること、瓦当文や垂木表現がないことである。さらに瓦塔Bは、木造多層塔と比較し軸部が大きく強調され屋根部分が狭い点も特筆される。これらの特徴を勘案すると、これまでの吉備出土の瓦塔と比較しても古い様相を持つと思われる。ただし、従来知られている吉備の瓦塔が多角形や円形を指向していたのに対し、鬼城山出土の2例はいずれも四角形をなすと思われ、方形の瓦塔系譜の祖形になるのかもしれない。

復元案 I



0 20cm

復元案 II



0 20cm

第183図 鬼城山出土瓦塔の復元 (1/6)

東日本ではあるが池田敏宏の瓦塔編年案⁽⁶⁾に沿うと8世紀前葉以前に位置付けられるのではないか。このような年代観を与えれば、あえて9世紀以降、廃城後にこの場所を利用した平安期の山岳仏教信仰に用いられたとする必要はなく、山城継続期の城内にこの2基の瓦塔が存在したと考えたい。

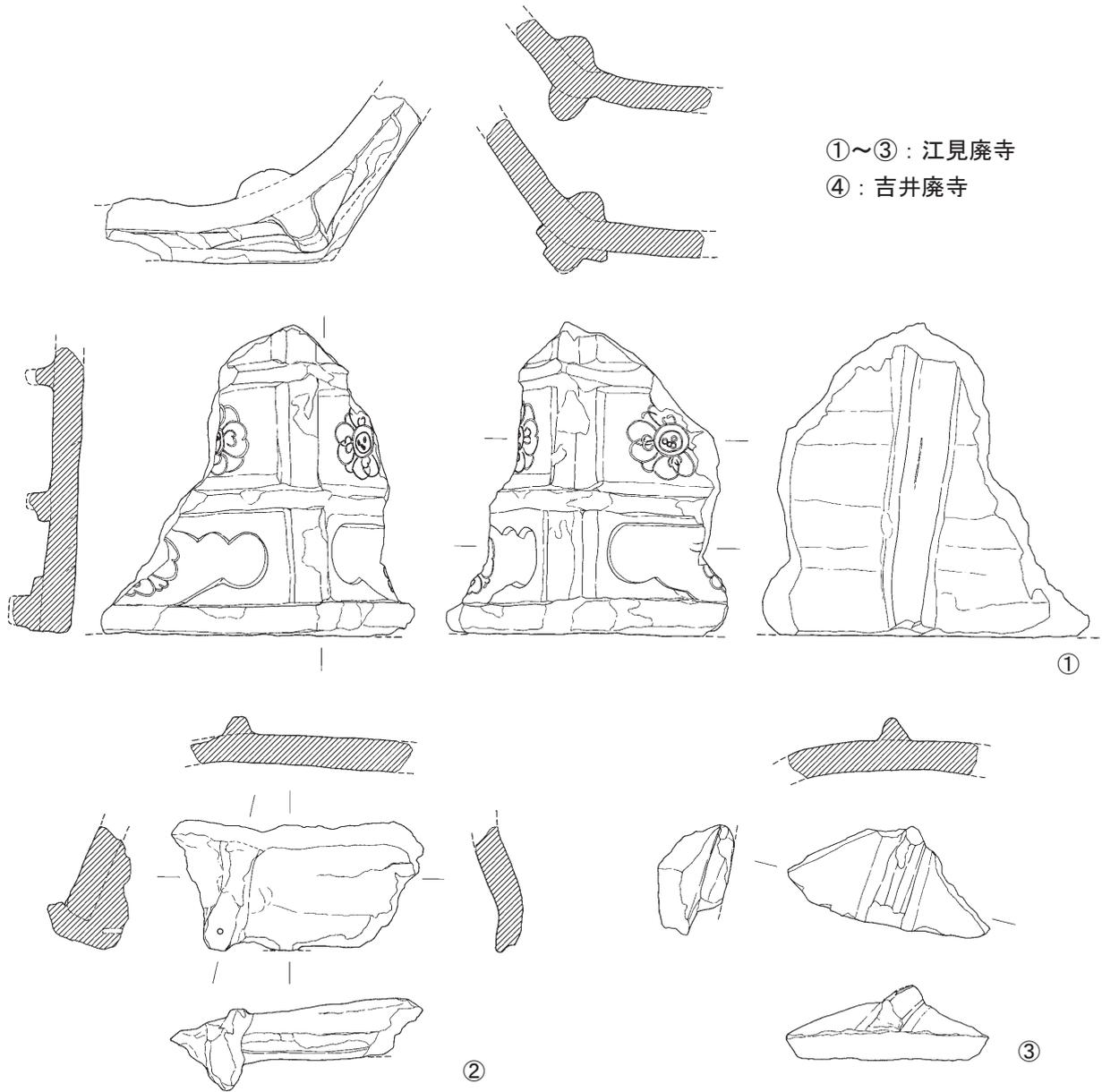
ところで、瓦塔の機能には諸説あるが、初期段階においては木造多層塔の代用・模倣品とする評価が妥当であろう。特に瓦塔Bのように軸部を強調し、その内部空間をあえて大きくすることは、木造多層塔と同様に内部に舍利容器等を入れるなどに用いられたのかもしれない⁽⁷⁾。また、2基の瓦塔の出土箇所から、いずれもⅡ区礎石建物群の中で使用されていたとすることは想像に難くない。礎石建物の時期・機能については第4章第2節に詳しく、両者が密接な関係にあるともいえる。一方、瓦塔は8世紀代には寺院跡とともに官が関与した官衙等付属施設から出土する傾向が指摘されている。鬼城山例も古代山城として造営・維持主体の官が果たした役割を考えれば、この傾向と矛盾しない。礎石建物群の時期と機能の変化を考慮すると、対外問題の打開から律令体制の整備・確立に向けた国内政策への転換の中にごそ城内における瓦塔の存在意味が読み取れ⁽⁸⁾、国内問題解決に官立寺院が建立されたように仏教信仰依存というこの時代の社会背景が看取される。そして、城内の2基の瓦塔は、礎石建物群廃絶時にはその役割を終え、散逸したと理解している。(大橋)

本稿執筆にあたり池田敏宏氏・岡田博氏・亀田修一氏・永井邦仁氏の各氏から多大なご教示を得た。記して感謝したい。

註

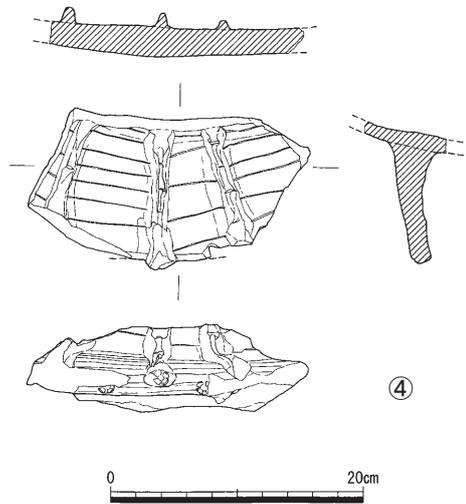
- (1) 亀田修一「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』古代吉備研究会 2002
- (2) 韓国忠清南道千房寺跡瓦塔や全羅北道益山弥勒寺跡瓦塔に瓦表現方法などに類似点があり、この系譜上にある可能性を池田敏宏氏から受けた。
- (3) 京都瀬後谷瓦窯出土瓦塔のように高欄部材を表現するための柄穴とすることも考えられるが、上面の調整が荒く、かきやぶり状の痕跡が認められるなどのことから軸部によって隠れて見えない部分と理解した。
石井清司「3. 木津地区所在遺跡(1) 瀬後谷遺跡」『京都府遺跡調査概報』第51冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992
石井清司「瀬後谷瓦窯出土の土製塔」『京都府埋蔵文化財論集』第3集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996
- (4) この4本柱を塔の四天柱と推測すれば、この瓦塔屋蓋が初層部分である可能性もある。なお、瀬後谷瓦窯出土瓦塔は、丸柱の四天柱の痕跡が屋蓋2・3に残る。
註(3)文献
- (5) 柄穴の大きさ、間隔を同じにしなければ屋蓋部が正方形になる可能性が高いが、四天柱で囲まれる空間をできるだけ正方形にするため、ここではその案を示さなかった。いずれにしても一辺50cmを超える屋蓋部が復元される。
- (6) 池田敏宏「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討」『研究紀要』7(財)財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999
- (7) 池田敏宏「瓦塔初重区間の利用法－8～9世紀における造塔意識の変化に関する考察－」『研究紀要』13(財)財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005
- (8) 対国外対策として、築城当初に戦勝祈願のため城内に仏教信仰対象として持ち込んだとすることは非常に魅惑的な解釈ではあるが、ここでは避けておきたい。

参考として、県内出土の瓦塔資料をあわせてここで紹介しておく(第184図)。①～③は須恵質の瓦塔で美作市江見の7世紀後半創建の江見廃寺から1973年の県道工事に伴う調査で出土した瓦塔である。①は塔の初重軸部の壁であり、基壇部の角度から八(ないし六)角形をなすものである。柱を表現した縦の突帯と水平方向の2本の突帯で区画され、最下段には格座間に四葉蓮華文がへら描きされ、二段目にも格座間はないが四葉蓮華文がへら描きされている。②・③はいずれも屋根部分で棒状粘土を貼り付けて丸瓦が表現され、②の丸瓦表現の先端部には径5mmほどの孔が穿たれている。また裏面には垂木を表現したものか、棒状粘土が



剥落した痕跡が認められる。

④は岡山市東区吉井廃寺で1976年ごろに宇垣匡雅氏が用水路改修時に表採した瓦塔片であり、宇垣氏のご厚意により資料提供を受けた。瓦塔は須恵質であり、中空の軸部から多角形ないし円形をなす屋根部にかけての破片である。丸瓦は棒状粘土を貼りつけ、1枚1枚を半裁竹管状の工具で押し引きして表現している。平瓦も粗雑ではあるが、沈線で1枚1枚が表現されている。また、軒丸部分とともに軒平部分にも同様の瓦当文の表現が施されている。なお、屋根の裏面にも棒状粘土を貼りつけた痕跡があり、垂木を模した可能性がある。資料の年代は平城宮式重式の出土瓦から8世紀後半段階と思われる。



第184図 岡山県内出土の瓦塔 (1/6)

第7節 山岳寺院について

1 鬼城山における寺院関連遺構・遺物

鬼城山城内調査の結果、古代山城の廃絶後と思われる奈良時代後半から平安時代にかけての遺構・遺物も少なからず検出された。これらは古代山城との直接の関連こそないものの、鬼城山一帯が廃城後にその性格を変えつつも、地域社会において何らかの機能を担い続けたことを立証する資料といえる。また、鬼城山に隣接する新山・岩屋の両地区は、古代・中世において山岳寺院として繁栄したことが文献などから確認でき、鬼城山もその一翼を担った可能性が考えられる。本節では、鬼城山において古代山城の廃絶後、その跡地が山岳寺院の施設に転用された可能性を指摘する。

まず当該期の遺構についてみると、Ⅱ区の石列を伴う掘立柱建物1は柱穴からの隆平永寶（初鑄796年）の出土によって平安期の建立はほぼ確実で、内部に須弥壇の可能性も指摘される高まりが認められる。隣接する礎石建物5でも、断面観察などから平安期の再利用が指摘され、他の礎石建物も再利用は十分可能であったはずである。一方、北門北東側の山頂部に位置し、磐座を思わせる巨石が露頭するⅤ-1区でも平安期の土器が比較的まとまって出土し、平安期以降の集石遺構が見られるほか、Ⅴ-2区では同時期と考えられる掘立柱建物2も検出されている。これら以外に注意を要するのが、城内各所で確認された「被熱土坑」である。Ⅰ区で実施した年代測定の結果には7世紀から13世紀までの幅があるが、遺物はⅠ区では主に7世紀末～8世紀初頭、Ⅱ区では主に平安期のものであった。中には木炭焼成土坑と想定されるものもあるが、形態や被熱状況は様々で、特定の用途に限定できるかどうかは不明である。

遺物は調査区のほぼ全域から出土するが、包含層遺物が大部分を占めるため原位置や遺構との対応関係を特定することは困難である。しかし大まかな傾向としては、礎石建物群の存在するⅡ-2・4・5区からの出土量が最多で、奈良～平安期における活動の痕跡がこの地区で最も濃厚であったことは確実である。出土土器には土師器の杯・椀・皿類の割合が高く、須恵器はごくわずかである。硯や墨書土器など宗教施設を特色づける遺物はないが、土師器の杯・皿には口縁部に煤の付着した個体があり、建物内の照明に使われたと推測される。須恵器の水瓶216は仏具としての用途も推定できる遺物であり、またⅡ-4区出土のM10は火打金であれば、発火儀礼に用いる呪術具としての性格を有するものかもしれない⁽¹⁾。さらに、確認調査時には掘立柱建物1の南東にあたるT68で9世紀前半の京都産緑釉陶器（県報告203-84）が出土している。瓦も一般的な寺院跡に比べるとかなり少ないものの、やはりⅡ-2・4・5区からの出土が目立つ。出土した瓦は丸瓦・平瓦のみで軒瓦を含まず、時期や他の寺院との関係を推測するのは困難である。ただ平瓦の凸面の調整は、判明するものについてはすべてが長軸に斜行、ないしは若干斜行する縄目タタキであり、おおむね8世紀後半から9世紀、つまり奈良時代後半から平安時代初期に属するものと考えられる。

以上のごとく断片的な資料ではあるが、鬼城山のような高所で奈良後期～平安初期に創建され、瓦を用いた建物を有し、水瓶や緑釉といった特殊な器種を伴う施設といえば寺院以外には考えにくく、城内にいわゆる山岳寺院の施設が存在したことは確かである。その中でも、遺構・遺物は礎石建物群のあるⅡ区に集中しており、寺院の中心的な施設が存在したことを示唆する。中でも石列を伴う掘立

柱建物1については、内部の高まりが須弥壇であれば、小規模な仏堂の可能性も指摘できる。V区も同様で、集石遺構や巨石の露頭という条件を考慮すると、何らかの祭祀行為の場とも考えられる。

それではなぜ、鬼城山に山岳寺院が創建されたのであろうか。上原真人は、奈良時代における各地の国分寺と山林寺院（山岳寺院）との関係に着目し、国分寺に対応する山林修行の場として山林寺院が整備され、両者が密接なネットワークを形成していたことを指摘し、岡山県の事例として備前国分寺と熊山との関係をあげている⁽²⁾。この図式を鬼城山にあてはめると、麓の平野との比高差は300m以上に達し、人里と隔絶した清浄な環境が整い、僧侶の修行の場として好適である。一方、国分寺との直線距離は7kmで極端に遠くもなく、山上からは国分寺や国府を含む備中国の中枢域を眼下にとらえることができ⁽³⁾、下界と完全に遮断された環境でもない。こうした地理的条件に加え、周辺には巨岩や湧水が点在し、行場としての機能も十分に備わっている。さらに、山城期からさほど年月を経ず、登城道・城内通路・建物の礎石・貯水池などが、改修を要したとしても再利用可能であったことも利点といえる。このように状況証拠のみとはいえ、山岳寺院に必要な諸条件を満足する場として鬼城山が選定された可能性は高い。なお、対応する平地寺院は国分寺に限らず、約5km南側に位置する賀陽氏の氏寺、栢寺廃寺も含まれるかもしれない⁽⁴⁾。

2 鬼城山と新山寺・岩屋寺との関係

さて、鬼城山の山岳寺院を考える上では、隣接する新山・岩屋地区にも注目する必要がある。両地区は古代から中世の山岳寺院、新山寺・岩屋寺の故地であり、鬼城山の寺院施設とは時期的にも重複し、何らかのつながりは当然考えられることである。したがって鬼城山自体からは離れるが、ここで両寺院の概要を少し詳しく見ていきたい。

新山寺は鬼城山の南西側に隣接し、現在の新山集落とその周辺の山林に広がる寺院跡である。いわば鬼城山の玄関口にあたる地点であり、集落周囲の山林には山王神社が現存するほか、本堂や浄土堂などの推定地が点在し、寺院の入り口にあたる水田には「大門」と称される礎石群も残る。これまでに採集された瓦は平安時代初期から鎌倉時代初期の特徴を示すとされる⁽⁵⁾。岩屋寺は、鬼城山よりもさらに奥まった山中に位置し、現在の岩屋集落の周辺に広がる寺院跡である。現存する毘沙門堂のそばにある「鬼の差し上げ岩」をはじめ、周辺の山林内には巨石が点在し、磐座祭祀の痕跡もうかがえる。近辺には「岩屋の皇の墓」と称される南北朝時代の無縫塔（県指定）も残る。

両寺院はいずれも多数の塔頭をかかえ、古代から中世にかけて繁栄したが、特に新山寺は平安時代



写真13 鬼の釜（総社市黒尾新山地区）

後期には中央にまで聞こえた名刹であった。例えば、平安後期に北宋に渡航し、皇帝から善恵大師の称号を下賜された天台宗の高僧成尋は、渡宋前の1071年に新山で修行を行っている。鎌倉時代に至ると、東大寺再建の大命を受け、備前国を造東大寺料国として与えられた俊乗房重源が、備中国においても「備中別所」に常行堂を建立し、丈六阿弥陀如来像を安置したとの記録がある。この「備中別所」は新山地区を指すとされ、同地区に残る巨大な鉄釜（写真13）は、

まさにこの別所において衆生施浴に用いられたものと推定されている⁽⁶⁾。さらに室町時代の15世紀にも、備中吉備津宮（吉備津神社）の遷宮にさいし新山寺の舞童が太平楽を奏し、総社宮の造営に新山寺が関与するといった記録もあり⁽⁷⁾、依然として備中の有力寺院であった。なお吉備津宮の式典では岩屋寺が新山寺を援助している。こうして繁栄を極めた両寺院も、16世紀には幾多の戦乱により衰退し塔頭のほとんどは廃絶した。江戸時代に入り一部の塔頭は再建されたが、現在では完全に無住と化し、遺構の多くは山林に帰している。

さて、鬼城山の寺院施設は新山寺・岩屋寺という有力寺院の近隣にあって、何らかのつながりを有したことは間違いないが、文献や考古資料からの実証となると困難が生じる。新山寺・岩屋寺では考古学的な調査がほとんど進んでおらず、鬼城山と同一条件で比較することができないためである。表採遺物の比較的多い新山寺についてみると、最古の遺物は現在のところ平安時代初期にさかのぼり、鬼城山の寺院施設と創建時期に大幅なずれはなさそうである。鬼城山側の施設が小規模な仏堂などを中心とするものだったとすれば、僧侶の生活の場である僧坊などはむしろ玄関口にあたる新山側にあったとも考えられる。現状では、鬼城山と新山の寺院施設は相前後して創建され、鬼城山側が「仏地」、新山側が「僧地」というような役割分担があったとの仮説を提示しておきたい。岩屋寺については、考古資料にも恵まれないため位置付けが困難だが、地形的条件などからみて、鬼城山・新山寺に比べると修行の場としての性格がより濃厚であったとも推測できる。

さて、今回の城内調査では、平安期の遺物数は10世紀にピークがあり、以後は急減する傾向が認められた。総社市教育委員会による調査でも、古代末～中世の遺物としては吉備系土師器碗（早鳥式土器）が散発的に出土している程度で、明確な遺構もなく、鬼城山の寺院施設が衰退していった様子が見てとれる。それに対して新山寺・岩屋寺はその後も発展を続け、戦国時代まで存続する。その理由は想像の域を出ないが、麓の備中国分寺が平安中期以降に衰退するのに歩調を合わせて、国分寺を指向した鬼城山地区の意義が薄れていったのに対し、本来は居住や修行の場であった新山・岩屋地区の意義が相対的に増大し、成尋の修行にみられるように平安期には密教に組み込まれ、さらに中世には修験道との結びつきを強めることで⁽⁸⁾、一定の勢力を維持できたとの推測も可能であろう。

以上、（1）古代山城の廃絶後、その地理的条件を生かして、国分寺に対応する修行の場としての山岳寺院が創建されたこと、（2）隣接する新山寺・岩屋寺、特に新山寺との密接な関連が想定されること、（3）鬼城山の寺院施設は11世紀後半ごろから衰退していくこと、を述べてきた。しかし、鬼城山を除くと考古学的調査が進んでいない現状では、ほとんどを憶測で埋めるかたちとなり、あくまで仮説の域にとどまるものである。今後の調査研究の進展が望まれる。（岡本）

註

- （1）森下恵介「山岳信仰遺跡の火打金」『山岳信仰と考古学』同成社 2010
- （2）上原真人「古代山林寺院」『仏教芸術』第265号 2002
- （3）正確に言えば、備中国分寺の北側には低丘陵が接しているため、国分寺側から鬼城山を望むには丘陵に登るか、西側へ数百m移動する必要がある。一方、鬼城山側からは現在、江戸期に再建された五重塔のみが見えている。
- （4）鬼城山と栢寺廃寺の関係については、出宮徳尚・葛原克人・河本清「第七章 古代」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987 において既に指摘されている。
- （5）葛原克人「新山廃寺」『総社市史考古資料編』総社市 1986
- （6）藤井駿「俊乗房重源遺蹟の研究」『吉備地方史の研究』法蔵館 1971
- （7）中山薫「第三章第五節 宗教の展開」『総社市史通史編』総社市 1998
- （8）15世紀末には、新山寺の塔頭のひとつである阿弥陀院が平地の山伏寺を支配下に置き、鳥取県の伯耆大山に民衆を案内する大山先達職を統括していたとされる。

第8節 鬼城山の変遷と歴史的意義

鬼城山は昭和46年に神籠石系山城と発表されたのち、昭和53年の鬼ノ城学術調査委員会による調査で古代山城と確認された。平成6年度から総社市教育委員会により城門や城壁など外郭部分の調査が行われたが、城内については県有地が大部分を占めることから、平成11年度に岡山県教育委員会が城内を中心とした確認調査を実施した。この時の調査はトレンチ調査で部分的な確認にとどまったことから、岡山県教育委員会では引き続き城内施設の面的な把握を目的として、本報告書に記載した発掘調査を実施した。

ところで、鬼城山では史跡整備に伴う確認調査をのぞき今後の発掘調査は予定されていないことから、今回の調査及び報告書の刊行をもって、鬼城山の調査はひとまず区切りを迎えることになる。したがって、本節では本報告書に掲載した調査内容に加え、これまでに行われた過去の調査成果もふまえながら、鬼城山の歴史的な意義について検討したい。

1 鬼城山の研究略史

鬼城山は文献に記載が見られないため、その築城時期や目的について、これまで多くの考えが述べられている。それぞれについて詳述しないが、吉備の反乱伝承に関わるとする5世紀説⁽¹⁾、児島の屯倉設置に関連し、吉備地域への支配強化を目的とする6世紀後半から7世紀前半説⁽²⁾、緊迫する朝鮮半島情勢に対応するために築城されたとする7世紀前半説⁽³⁾、白村江敗戦を契機に他の朝鮮式山城とともに国防強化のために築造されたとする説⁽⁴⁾、倭政権が吉備大宰を通して地方支配等を目的に建設したとする説⁽⁵⁾などがあげられる。

その後、平成6年度からの総社市教育委員会による発掘調査で、城門や城壁など主に外郭線の構造が明らかになったことで国内外の山城との比較検証が進展した⁽⁶⁾。また、調査で出土した鬼城山の土器が7世紀第4四半期から8世紀初頭に属するものが多いことから、鬼城山の築城時期をこの期間に考え⁽⁷⁾、その時代背景として大宰・総領制と結びつける説⁽⁸⁾も提唱されている。

2 鬼城山の変遷

鬼城山の変遷を理解するにあたり、出土した資料から城内各調査区の利用状況を時期別に整理する。これまで鬼城山から出土した遺物のうち、実測図として公開されている資料は本報告分も含めて800点を超えるが、ここでは、これらの資料のうち年代が推定可能な資料約230点を抽出し、調査区ごとにその消長を時期別に整理した(第185図)⁽⁹⁾。また、鬼城山全体における時期ごとの様相を明らかにするため、主要遺構や出土遺物の分布を図に示した(第186図)。以下、各時期の特徴を述べる。

【縄文～弥生時代】

鬼城山では、縄文時代の遺構・遺物として落とし穴や石鏃等が検出されていることから、鬼城山周辺が狩猟場として利用されていたことが分かる。弥生時代の遺構・遺物であるが、弥生土器がⅣ-1区周辺で散見されることは注目できる。ここは、眺望のよい通称「屏風折れの石垣」に近いことから、弥生時代後期を中心とした高地性集落の存在が考えられる。

【第Ⅰ期：7世紀後半～8世紀初頭(710)】

第Ⅰ期は鬼城山が古代山城として築城され、継続した時期である。この時期に鬼城山では城門・城壁など各種施設が整備され、山城としての体裁が整えられたと考えられる。今回の調査では、次のとおり、鬼城山の城内施設の様相が明らかとなった。

Ⅰ区では基壇状遺構が検出された。上面から柱痕跡をもつ柱穴が検出され、特定はできなかったが掘立柱建物が存在した可能性が高い。このほか、土器溜まり1で多くの土器がまとまって出土し、中には円面硯や転用硯、畿内産土師器も含まれることから、ここで官人層による城内管理が行われたと推測できる。

Ⅲ区の鍛冶工房は、鬼城山を築城するさいに必要な鉄製品の製作や修理を手掛けた施設と考えられ、併設された鍛冶炉の配置などから官営工房的な性格がうかがえた。

Ⅱ区でもこの時期に礎石建物群が整備されたと考えられるが、これがいつ建築されたのかについては確証が得られていない。礎石建物群が次の第Ⅱ期まで存続していくことを考慮するならば、礎石建物群の整備は、鬼城山築造工程の中でも比較的新しい段階に位置付けることもできよう。また、Ⅱ区で出土した瓦塔は、礎石建物群に伴う遺物と推測され、鬼城山の役割の一端をうかがわせる。

このように、第Ⅰ期は鬼城山が山城として機能した時期であり、城内の主要施設はこの時期に整備されたものと考えられる。鬼城山の築城及び廃絶時期の詳細については後述する。

【第Ⅱ期：8世紀初頭（710）～8世紀後半】

第Ⅱ期に属する遺構・遺物はⅡ区を中心に検出されている。Ⅱ区を除くその他の調査区では、当該期の遺構・遺物は少なく、この時期、Ⅱ区が城内の中心地であったことが推測できる。ここには礎石建物群が存在しており、この建物群を中心に機能していたものと考えられる。礎石建物群は総柱建物5棟、側柱建物2棟で構成されており、倉庫とその管理棟と見られる。Ⅰ期で見られた山城としての施設から、物資の保管・管理のための備蓄施設へと主な役割が移ったと考えられる。礎石建物群は8世紀後半ごろまで存続していたと推定される。

【第Ⅲ期：9～11世紀】

第Ⅲ期においてもⅡ区を中心に遺構・遺物が分布する。Ⅱ区ではこれまでの礎石建物群にかわり、新しく掘立柱建物1が建設され、鬼城山が山岳寺院の一部として利用されたことが推測できる。一方、Ⅴ区周辺でも、集石遺構や掘立柱建物2に見られるように、これに関連する施設が設けられた可能性が高い。第7節でふれているとおり、11世紀には高僧成尋阿闍梨が新山別所で修行したことが文献に見られる。鬼城山は新山寺に隣接していることから、文献からも鬼城山に山岳寺院の関連施設が存在した可能性の高いことが裏付けられる。

【第Ⅳ期：12・13世紀】

城内から出土する遺構・遺物が少なくなる時期である。これまでに見られたⅡ区の中核的役割は終わり、以後、城内に目立った建物などは確認されていない。

3 鬼城山の歴史的意義

1. 鬼城山の築城及び存続時期

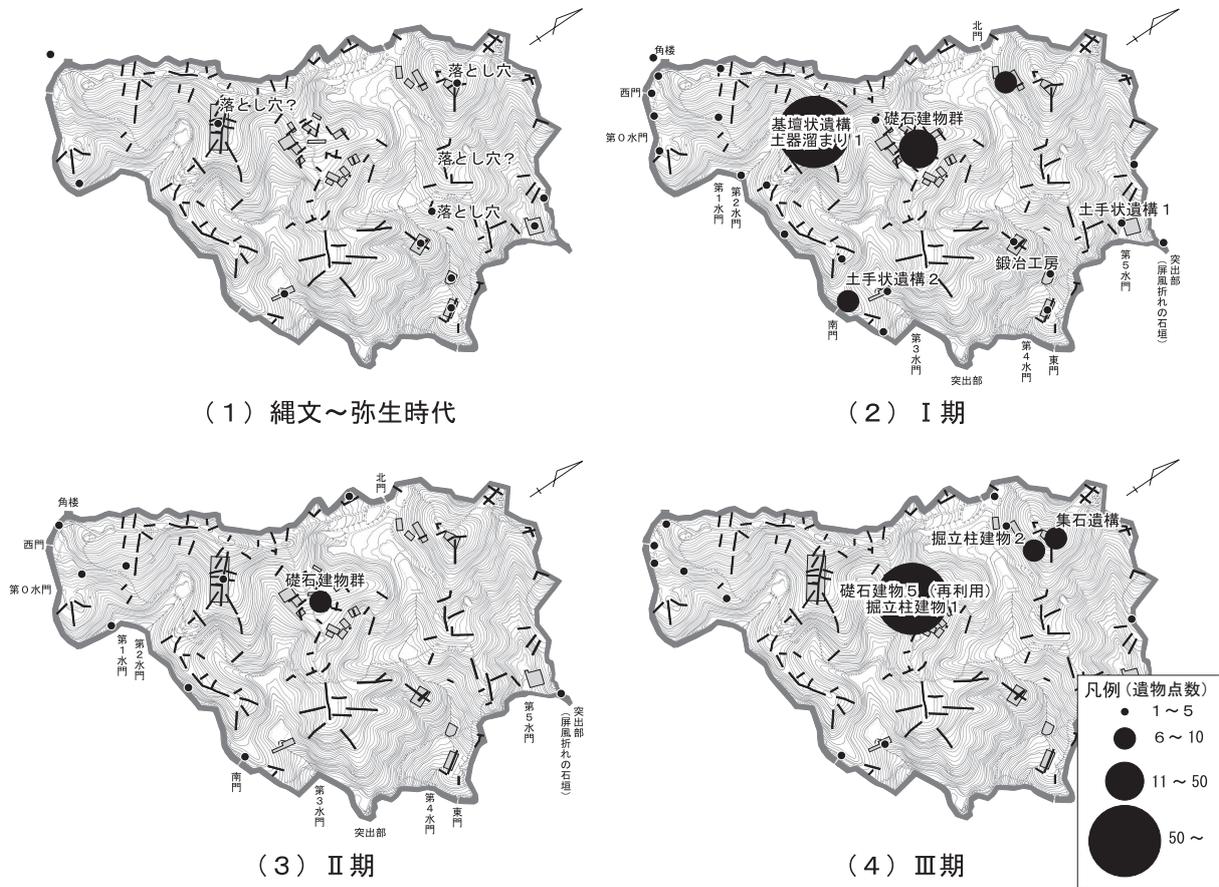
鬼城山の築城及び存続時期については、これまでも様々な視点からの言及があった。ここでは、これを解明する手がかりとして、城内から出土した土器について検討する。

鬼城山から出土した7世紀を中心とする土器の年代観については第5節で述べたが、鬼城山から出

第4章 総括

		I区	II区	III区	IV区	V区	主な出来事
	縄文・弥生						
I期	7世紀後半 ～8世紀初頭	基壇状遺構 土器溜まり1	礎石建物群	鍛冶工房	土手状遺構		663 白村江の戦い 664 水城築堤 665 長門城、大野城、基肆城築城 667 高安城、屋嶋城、金田城築城 672 壬申の乱 679 吉備大率石川王病没 694 藤原京遷都 700 上毛野朝臣小足、吉備総領に任命 701 高安城廃城 710 平城京遷都
	8世紀初頭 ～8世紀前半						719 茨城、常城廃城
II期	8世紀後半						756 怡土城築城開始
	9世紀						794 平安京遷都
III期	10世紀	?	掘立柱建物1	?		集石遺構 掘立柱建物2	
	11世紀		礎石建物5 (再利用)				1071 成尋阿闍梨、備中国新山別所で修行 1076 定秀上人、備中国新山別所で没
	12世紀						1192 源頼朝、征夷大將軍就任
IV期	13世紀						

第185図 鬼城山城内各地区の消長



第186図 鬼城山における時期別変遷

土した土器群は、7世紀第3四半期にさかのぼる可能性のある資料も一部見られるものの、おおむね7世紀第4四半期から8世紀初頭の中に位置付けられる。その中で、土器溜まり1は、一括性の高い土器群で、7世紀第4四半期後半（以下、7世紀末葉）から8世紀初頭ごろのまとまりと評価できる。土器溜まり1の所在するI区では、円面硯のほかに転用硯、畿内産土師器も出土していることから、官人層による城内管理業務が行われていた可能性が高い。I区の様相から鬼城山は7世紀末葉ごろまでには完成し、8世紀初頭ごろまで機能していたことが考えられる。

鬼城山の築城時期であるが、築城中に稼働した鍛冶工房から出土した土器群は、その築城時期を知る手がかりを含んでいる。出土した土器が少なく確実性にやや欠けるものの、内面にかえりのない杯蓋を含まないことなどから、土器溜まり1の土器群よりも古く考えることもできる。したがって、鬼城山の築城時期を7世紀末葉以前に位置付けることができよう。

次に、鬼城山の築城開始時期についてであるが、これについては、鬼城山の築城期間をどの程度に想定するかが問題である。奈良時代に吉備真備が関与した怡土城は完成までに12年かかったとされていることから⁽¹⁰⁾、仮に鬼城山も同様の築城期間を見積もった場合⁽¹¹⁾、築城開始年代を670～680年代に求めることができる⁽¹²⁾。鬼城山の築城開始時期については、鬼城山全体の築城工程をふまえて議論する必要があり、今後の課題の一つである。

鬼城山の築城時期や存続時期については、これまでも文献からの視点や他の山城との比較など様々な角度から論じられてきた。本節では、今回の調査で出土した土器の年代という一つの観点から鬼城山の築城時期や存続時期を推測したにすぎない。ここで示した内容や年代は、今後、様々な角度から検証されることが望ましい。

2. 鬼城山の廃城時期

I区では片付けによる土器の廃棄行為により土器溜まり1が形成されたと考えられている。以後、I区では顕著な遺構が見られなくなることから、この時期に鬼城山の運営に何らかの変化を読み取ることができる。この土器の廃棄時期は8世紀初頭ごろと考えられ、これに関して想起されることは、この時期の文献記事に古代山城の廃城記事が見られることである（701年高安城廃城、719年茨城・常城廃城）。鬼城山もこのような古代山城をめぐる情勢と無縁ではなかったと考えられ、I区の廃絶は、まさにそのような時代の情勢を反映している可能性が高い。

その後、鬼城山は礎石建物群を中心に機能したと考えるが、その役割は、山城としての軍事施設から、倉庫としての備蓄施設へと変化したものと推測される。礎石建物群は8世紀後半ごろまで存続したと思われるが、礎石建物群の廃絶をもって、築城以来続いてきた鬼城山の役割はここで終焉を迎えたと考えられる。

3. 築城の目的

ここまで、鬼城山が7世紀第4四半期を中心とする時期に築城され、8世紀後半に礎石建物群が廃絶するまでの経過について述べたが、最後に鬼城山の築城主体者や築城目的について検討する。

鬼城山の築城主体者としては、この地に多大な労働力を投入することのできた強大な権力の持ち主であったことはいうまでもないが、今回の調査成果から次のような要件も加味される。それは、鍛冶工房でみられたような官営的な生産体制を構築することができた人物であり、また、城内で出土した畿内産土師器から中央とのつながりをもっていた人物である。

このような要件を考慮しながら、鬼城山が営まれた7世紀第4四半期ごろの吉備地方を考えるさい、

古代山城と大宰・総領を結びつけて考える説は興味深い。狩野久は、大宰・総領は国宰の上級官司として地方に派遣され、その任務の一つとして山城築城による防衛網の構築をあげる⁽¹³⁾。狩野は、鬼城山も含む瀬戸内山城群の構築を天智朝の国家事業とするが、鈴木靖民は、西日本の山城の段階的・漸進的な築造を想定し、吉備地域における大宰・総領の初出記事が天武八（679）年（石川王薨去）であることから、文献に記された山城群よりも遅れ、670～680年代の天武・持統朝の築造を想定している⁽¹⁴⁾。一方、稲田孝司は、古代山城の城塁や城門の築造過程を検討し、古代山城の築城開始時期を3段階に分け、鬼城山を第2段階初頭（天武朝期）と位置付けた。そして、その築城責任者が吉備大宰である可能性が高いことにもふれている⁽¹⁵⁾。このように、鬼城山が吉備大宰により築城された可能性は高いと考えられる。

次に、その目的であるが、全国の古代山城の中にはその実用性に疑問が呈されているものもある⁽¹⁶⁾が、鬼城山は城門、城壁、敷石など完成度の高いことが特筆され、白村江敗戦の残映も影響したのか、築城にあたっての強い意志をうかがわせる。したがって、鬼城山は、第一義的には、中央政権によって企画された軍事構想を体現すべく築かれた城で、その実現にあたっては中央からの強い政治的な意図があったものと思われる。鬼城山が築城された7世紀後半期は、中央政権により様々な施策が実施された時代でもあった。鬼城山の築城もこのような施策の一部に位置付けられ、吉備地域においても鬼城山を拠点とした軍事構想が描かれていたに違いない。そうした構想を実現すべく企画され、築造されたのが鬼城山であったといえるだろう。

しかし、鬼城山を造営に導いた軍事構想は、社会情勢や国際情勢の変化に伴う古代山城の必要性和維持管理にかかる負担など様々な矛盾が生じる中で、変容を余儀なくされたものと思われる。城としての機能が短期間で終了し、以後、倉庫に代表される備蓄施設に役割が変化したと考えられるのも、このような構想の変化と無関係ではないだろう。

したがって、鬼城山の築城目的は、まずもって鬼城山を必要とした軍事構想について具体的に検討していく中で議論されるべきものである。残念ながら著者にはこれについて十分な議論を行うだけの力はないが、その中で何が実現し、何が実現しなかったのか、文献史料も参考にしながら、その理想と限界を丹念に紐解いていく作業が今後必要になってくると思われる。

鬼城山は、目まぐるしく変化した国際情勢や国内情勢を背景に、国づくりへと進む中央政権の意図とそれに参画した様々な人々の思惑と現実を色濃く反映した歴史遺産といえるのではなかろうか。

（金田）

註

- (1) 坪井清足「神籠石について」『考古学ジャーナル』117号 ニュー・サイエンス社 1976
- (2) 出宮徳尚「吉備の古代山城試論」『考古学研究』98号 考古学研究会 1978
出宮徳尚「瀬戸内の古代山城」『新版古代の日本4 中国・四国』角川書店 1992
- (3) 葛原克人「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』新人物往来社 1994
葛原克人「鬼ノ城と東アジア」『古代を考える 吉備』吉川弘文館 2005
- (4) 門脇禎二「鬼ノ城をめぐる覚書」『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 1980
乗岡実「古代山城」『吉備の考古学的研究』下 山陽新聞社 1992
- (5) 高橋護「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117号 ニュー・サイエンス社 1976
向井一雄「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論－」『古代学研究』125号 古代学研究会 1991
- (6) 亀田修一「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』167号 考古学研究会 1995

- 亀田修一「朝鮮半島古代山城の見方」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店 2002
- 村上幸雄「各種施設」『古代山城 鬼ノ城』総社市教育委員会 2005
- (7) 村上幸雄「鬼ノ城－城門遺構の調査と出土土器による年代－」『古代文化』579号 古代学協会 2010
- (8) 狩野久「西日本古代山城の歴史的意義」『激動の7世紀と古代山城』考古学研究会 2004
- 狩野久「瀬戸内古代山城の時代－築城から廃止まで－」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざままで－』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会 2010
- 向井一雄「古代山城研究の最前線－近年の調査成果からみた新古代山城像－」『季刊 邪馬台国』第105号 梓書院 2010
- (9) ここでは、鬼城山から出土した遺物で、ある程度年代が推定可能な資料を230個ほど抽出し、これを時期ごとに分類し、グラフ(第185図)を作成した。グラフにおける黒塗りの面積は当該期に所属する遺物数量をおよそ反映しており、他の調査区や時期と相対的な比較が可能ないようにしている。
- 抽出した資料は、時期の推定が可能な須恵器(杯、高杯等)、土師器(杯、椀)を対象とし、詳細な年代推定が困難である須恵器(甕等)・土師器(主に甕)、瓦、鍛冶関連遺物及び小破片は除外した。また、所属時期が複数にまたがる可能性のあるものについては、対象遺物数を対象時期数で除して配分している(例えば10世紀後半から11世紀前半に属する資料が4点ある場合、10世紀の資料として2点、11世紀の資料として2点配分している)。
- 鬼城山は、城内全域を調査しているわけではないので、遺物数については調査面積の広狭などを考慮する必要がある。資料操作にあたっては、現段階の研究成果をふまえ、客観性を期したつもりであるが、著者の主観的な編年観や誤認も含まれていないとはいえない。この点については今後の研究動向をふまえ修正していく必要があるが、鬼城山の変遷を理解する上での大まかな傾向は提示できているものと考えられる。
- (10) 吉備真備の建議でつくられた怡土城は、天平勝宝八(756)年に築城が開始され、完成したのは神護景雲二(768)年であるので、完成までに12年を要している。
- (11) 出宮徳尚は、鬼城山の城壁構築延べ人数を259,500人とし、1日260人の動員で約1000日等の試算を提示している。
- 出宮徳尚「古代山城跡の検証覚書Ⅱ－神籠石系山城の用兵の具観からの検討－」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざままで－』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会 2010
- (12) 鬼城山の築造年代については、放射性炭素測定による年代測定結果がある。鬼城山では第0水門流路下流で木製品(方形材、加工材)が出土している。この木製品は西門の建造に関わった建築部材の一部とも考えられ、炭素14年代測定の結果、木材(OKK-2、OKK-3)の伐採年代をA.D.680年より新しい年代とは考えにくいとし、西門の築造を680年以前と推測している。
- 今村峯雄・小林謙一・新免歳靖・坂本稔・谷山雅彦「炭素14測定からみた鬼城山遺構の築造年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137号 国立歴史民俗博物館 2007
- (13) 前掲註8
- (14) 鈴木靖民「7世紀 日本と東アジアの情勢－山城造営の背景－」『鬼ノ城フォーラム 謎の鬼ノ城～城内を探る～』岡山県古代吉備文化財センター 2010
- (鈴木靖民著『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館 2011年に再掲)
- (15) 稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第34号 日本考古学協会 2012
- (16) 向井一雄「駅路からみた古代山城－見せる山城論序説」『月刊 地図中心』453 2010

付載1 鬼城山出土土器の胎土分析

岡山理科大学 白石 純

1. 分析目的

この分析では蛍光X線分析法による理化学的な胎土分析から鬼城山出土須恵器・土師器が、どこで製作されたものなのか推定した。

2. 分析方法

蛍光X線分析法は、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から胎土の違いについて検討する方法である。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zrの13成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計（エスアイアイ・ナノテクノロジー製SEA5120A）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約15トンの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。測定条件は、管球ターゲット Rh、励起電圧は50kV・15kV・7kV、管電流は4 μ A～1000 μ A、測定時間は300秒、雰囲気は真空中で測定した。

分析した須恵器試料は総計57点である。内訳は杯41点、高杯5点、硯3点、壺3点、甕5点である（第1表参照）。また、畿内産土師器と推定された土器2点も分析した。

胎土の分析結果は、X Y散布図で表示した。なお、分析値より鬼城山出土須恵器のあいだでCa（カルシウム）・K（カリウム）・Ti（チタン）に顕著な差異がみられた。この分析ではCa・K・Tiの3元素で比較した。したがって、以下に報告するX Y散布図はCa-K図・Ti-Ca図である。

3. 分析結果

（1）鬼城山出土畿内産土師器の分析

第1・2図では、鬼城山出土畿内産土師器と岡山市津寺遺跡中屋調査区出土土師器（8世紀）の胎土比較を行った。その結果、鬼城山出土の土師器は、津寺遺跡の在地产土師器とは、Ca成分で胎土が異なっていることがわかった。つまり、Ca量が畿内産とされた土師器には少ない傾向にあった。ただ、津寺遺跡出土の在地产土師器は胎土のバラツキが大きく複数の胎土に分類が可能なのかもしれない。今後、各産地試料を増やして検討する必要がある。

（2）鬼城山出土須恵器の胎土比較

第3・4図は、鬼城山出土須恵器の胎土比較を行った結果である。第3図のK-Ca散布図では、Ca量の違いで3つのグループに分類が可能であった。それは、Ca量が約1.9%～2.3%付近に分布するAグループ、Ca量が約0.5%～1.2%付近に分布するBグループ、Ca量が約0.3%～0.5%付近に分布するCグループである。第4図のTi-Ca散布図では、第3図のB・Cグループが、Ti量の違いで2つのグループに分類された。

第1表は、第3・4図で3つに分類されたグループに属する須恵器の試料一覧表を示している。

（3）鬼城山出土須恵器の産地推定

第5・6図は、鬼城山出土須恵器の生産地を推定した散布図である。比較した生産地の窯跡群は総社市くもんめふ窯跡群、末ノ奥窯跡群、道金山窯跡群、浅口市上竹西の坊窯跡群、瀬戸内市寒風窯跡

群の5つである。

第5図では鬼城山のBグループが末ノ奥とくもんめふに、Cグループが上竹西の坊と末ノ奥の領域と重なっている。またAグループと試料100はどの窯跡にも入らない。

第6図ではBグループのほとんどが末ノ奥に分布し、試料番号11・45・80の3点がどの領域にも入らなかった。また、Cグループの8・17・83・89・105が上竹西の坊に、それ以外が末ノ奥に分布している。またAグループと試料100はどの窯跡にも入らない。

4. まとめ

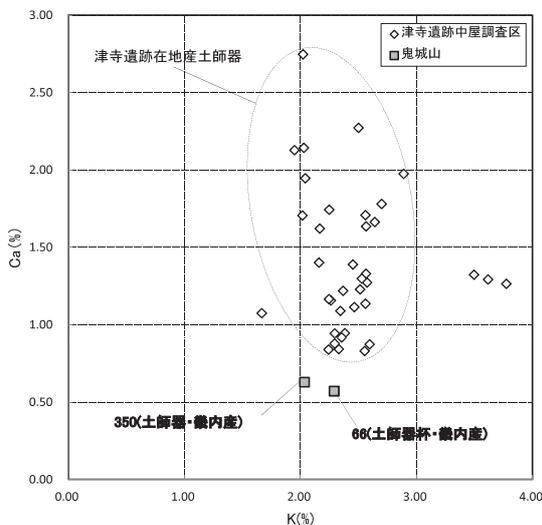
以上の分析結果より以下のことが推定される。

- (1) Aグループの16・34・38・55・90の杯等と100の杯は今回比較した窯跡以外の生産地から供給されていると推定される。
- (2) Bグループの11・45・80以外の須恵器は末ノ奥に推定される。また11・45・80は生産地がはっきりしない。
- (3) Cグループの8・17・83・89・105は上竹西の坊に推定されるが、それ以外は上竹西の坊か末ノ奥の両方の領域に分布し、どちらの産地か判別できない。

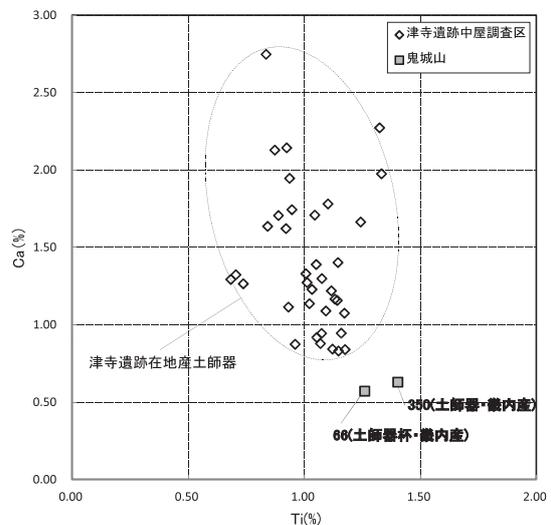
この胎土分析では以下の機関に貴重な試料を提供していただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。岡山県古代吉備文化財センター、浅口市教育委員会、総社市教育委員会（敬称略）

第1表 須恵器のグループ別分類一覧表

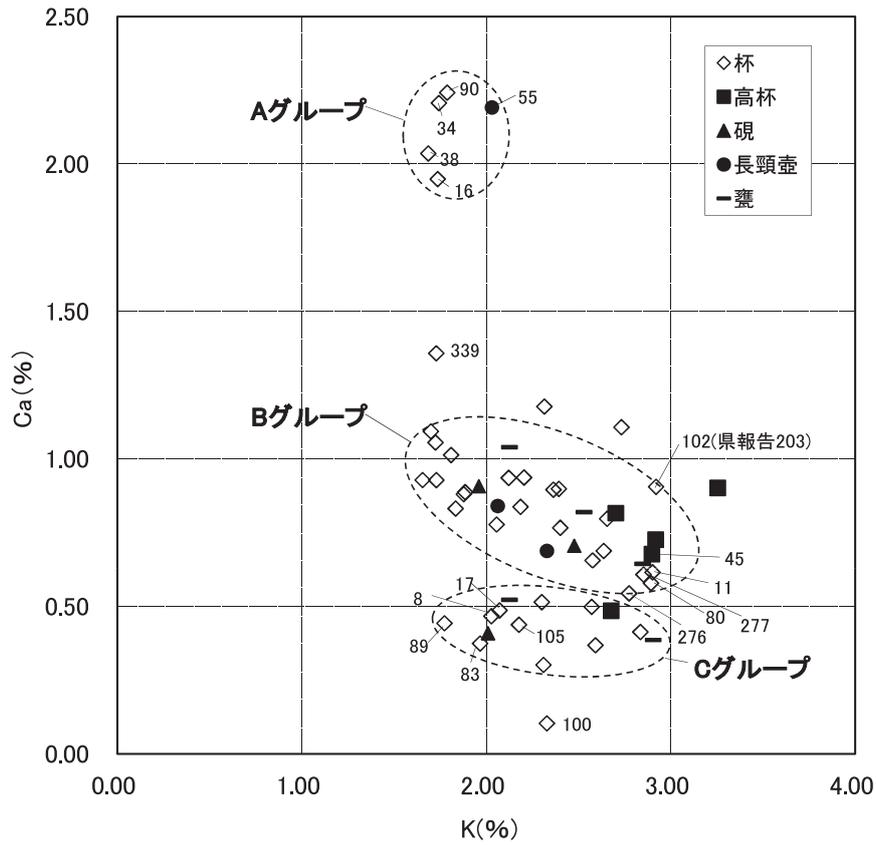
器種	杯蓋・身	高杯	硯	長頸壺	甕	生産地推定
Aグループ	16, 34, 38, 90			55		不明
Bグループ	9, 10, 13, 14, 15, 18, 20, 23, 25, 27, 28, 31, 32, 37, 82, 84, 87, 88, 92, 112, 276, 277, 339, 県報告203-102	42, 47, 49	59, 60	51, 54	62, 63, 79	末ノ奥・道金山
B'グループ	11, 80	45				
Cグループ	30, 35, 36, 96, 110	48	61		64, 119	上竹西の坊、末ノ奥・道金山
C'グループ	8, 17, 83, 89, 105					上竹西の坊
その他	100					不明



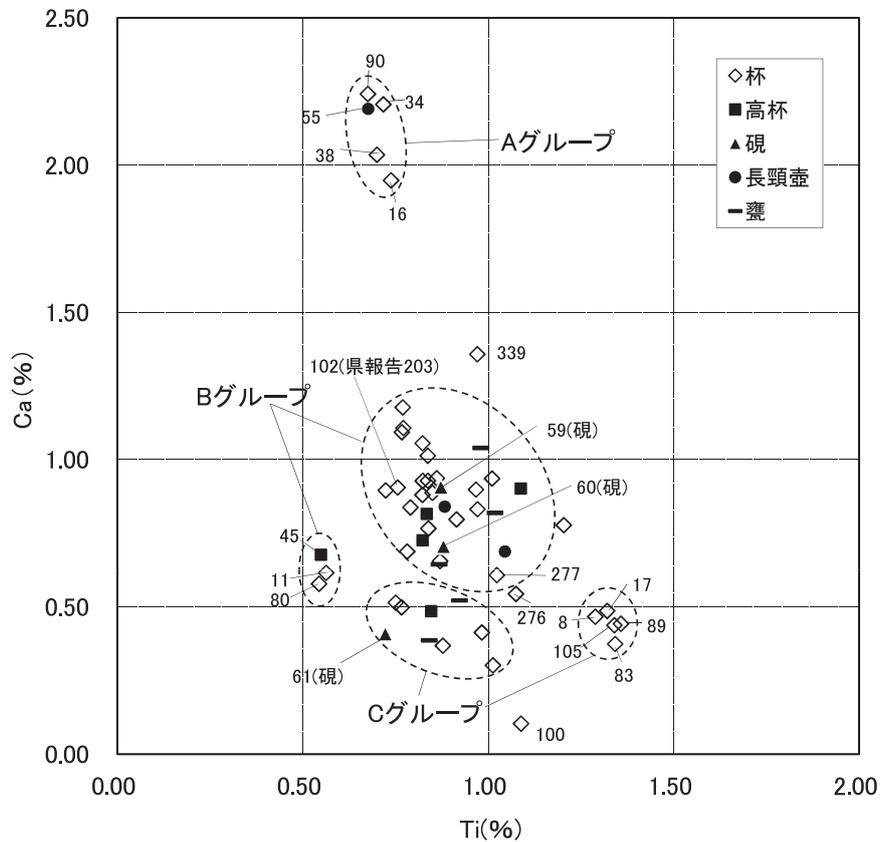
第1図 鬼城山と津寺遺跡出土土師器の胎土比較 (K-Ca 散布図)



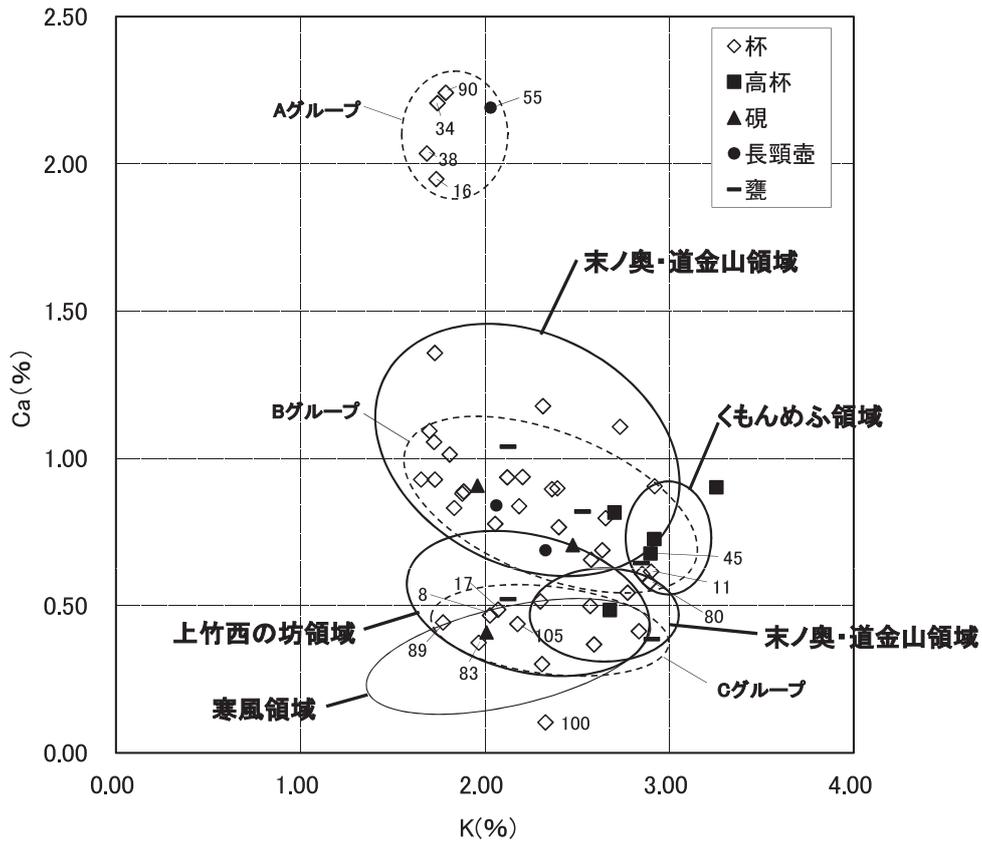
第2図 鬼城山と津寺遺跡出土土師器の比較 (Ti-Ca 散布図)



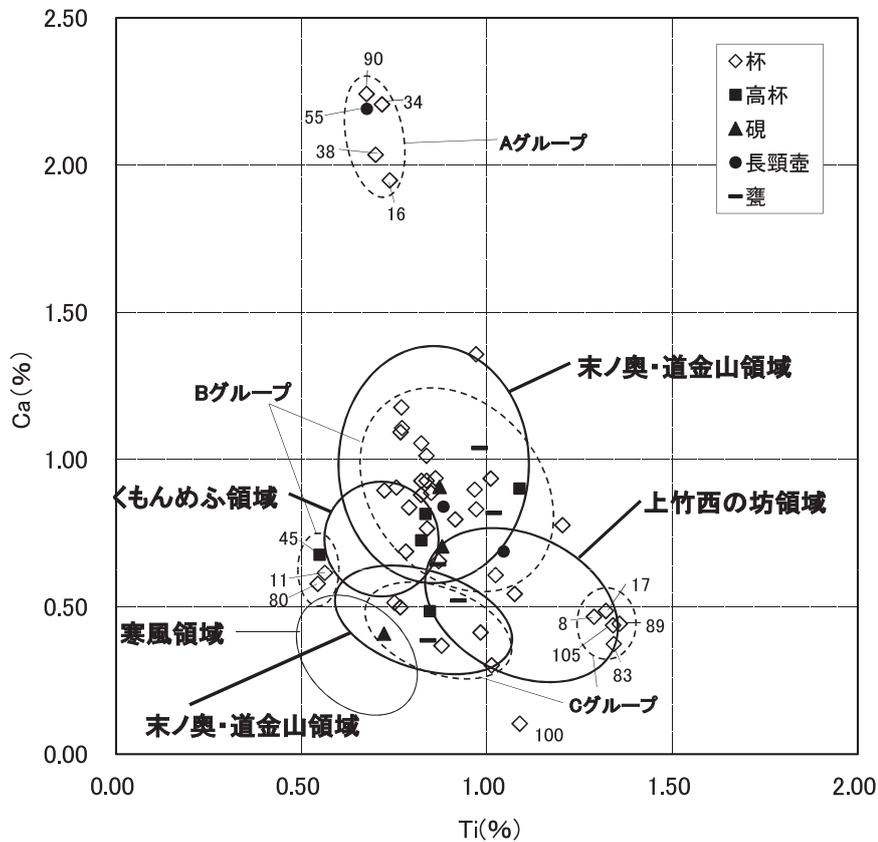
第3図 鬼城山出土須恵器の胎土比較 (K-Ca 散布図)



第4図 鬼城山出土須恵器の胎土比較 (Ti-Ca 散布図)



第5図 鬼城山出土須恵器の産地推定 (K-Ca 散布図)



第6図 鬼城山出土須恵器の産地推定 (Ti-Ca 散布図)

付載2 鬼城山における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	I区, 土坑7	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	I区, 土坑6	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	I区, 土坑14	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	I区, 土坑7	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.5	I区, 柱穴5	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.6	I区, 土坑12	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.7	I区, 土器溜まり1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.8	I区, 土坑16	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.9	池の下散布地, T2	腐植物	酸-アルカリ-酸洗浄	β 線計数法

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

2. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾
No.1	222414	1430 ± 40	-26.3	1410 ± 40	交点: calAD 650 1 σ : calAD 620~660 2 σ : calAD 580~680
No.2	222415	1110 ± 40	-25.8	1100 ± 40	交点: calAD 970 1 σ : calAD 900~990 2 σ : calAD 880~1010
No.3	222416	810 ± 40	-26.7	780 ± 40	交点: calAD 1260 1 σ : calAD 1230~1280 2 σ : calAD 1190~1290
No.4	226064	1490 ± 40	-26.5	1470 ± 40	交点: calAD 600 1 σ : calAD 560~640 2 σ : calAD 540~650
No.5	226065	1530 ± 40	-26.4	1510 ± 40	交点: calAD 560 1 σ : calAD 540~600 2 σ : calAD 430~640
No.6	226066	1220 ± 40	-25.9	1210 ± 40	交点: calAD 780,790,800 1 σ : calAD 730~740 : calAD 770~880 2 σ : calAD 690~900 : calAD 920~940

No. 7	226067	1510 ± 40	-26.4	1490 ± 40	交点 : calAD 580 1 σ : calAD 540~610 2 σ : calAD 440~450 : calAD 460~480 : calAD 530~650
No. 8	226068	760 ± 40	-25.4	750 ± 40	交点 : calAD 1270 1 σ : calAD 1260~1280 2 σ : calAD 1220~1290
No. 9	152890	1660 ± 60	-26.2	1650 ± 5	交点 : calAD 410 1 σ : calAD 340~430 2 σ : calAD 250~540

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えて算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を用いる。今回暦年代較正に使用したプログラムは、CALIB5.0.2である。最新のデータベースでは約19,000年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ（68% 確率）と 2 σ（95% 確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ・2 σ 値が表記される場合もある。

付載 3 鬼城山出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノロジーサーチTACセンター 大澤 正己

概要

7世紀後半に比定される鬼城山の3地区から出土した鍛冶関連遺物（椀形鍛冶滓、鉄塊系遺物、製錬系含鉄滓、粒状滓、鍛造剥片）を調査した。鍛冶操業の主体は、精錬や高温沸し鍛接などの前工程が省略された鉄器製作である。鍛錬鍛冶のうち低温素延べから火造り作業が濃厚で、鉄滓の鉱物相はファヤライト（Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）や非晶質ガラス質が大半を占める。原料鉄は微量 Ti、V、Zr 系の磁鉄鉱（塊状鉄：鉄石）由来で、地元の奥坂遺跡群^(注1)や水島機械金属工業団地共同組合西団地内遺跡群^(注2)に産地を求めても大きな齟齬はなかろう。一方、鍛打加工に際して赤熱凹凸素材由来から粒状滓（前半段階）、平坦面が確保された後半段階で鍛造剥片を派生する。3地区共にこの微細遺物は確認された。律令期の鍛冶工房の操業形態が指摘できる^(注3)。

1. いきさつ

鬼城山は岡山県総社市奥坂に所在する古代山城である。鍛冶遺構は3ヶ所（Ⅲ-1区：鍛冶炉1基、Ⅲ-2区：2基、Ⅲ-3区：9基）に分散し、鉄滓は約2,000点（総重量約50kg）、羽口は内径の判るもの21点（内径1.9~3.8cm、平均2.8cm）が出土した。鉄製品は鉋、クサビ、釘など小物が約20点遺存する。

鬼城山は7世紀後半に西日本に築かれた古代山城の一つである。この山城の鍛冶工房の実態を把握する目的から分析調査の運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table 1 に示す。Ⅲ-1区7点、Ⅲ-2区18点、Ⅲ-3区7点の合計32点の調査である。

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察、紙面の都合で割愛した（別添付）。
- (2) 顕微鏡組織。
- (3) ビッカース断面硬度。
- (4) EPMA調査。
- (5) 化学組成調査。

3. 調査結果

(1) Ⅲ-1区出土品

4点の椀形鍛冶滓と赤熱鉄素材の鍛打に際して表面酸化膜から派生した粒状滓と鍛造剥片を調査した。まず椀形鍛冶滓の鉱物相を Photo. 1 の上から4段目までに示す。鍛錬鍛冶の一連工程が認知できる情報が得られた。KB1-2（2段目）は白色粒状結晶のウスタイト（Wustite： FeO ）を晶出し、高温沸し鍛接時の排出滓である。 $\text{FeO} - \text{SiO}_2$ 状態図^(注4)から、1180℃以下の作業が推定できる。次にKB1-1（1段目）とKB1-3（3段目）は、ファヤライト主体の鉱物相を呈する。高温沸し鍛接後工程に連なる低温素延べ工程からの排出滓である。900℃前後の加熱で酸化防止にたっぷりと粘土汁が塗布された排出滓である^(注5)。最後は成形火造り段階で非晶質ガラス質主体の滓が排出される。KB1-4（4段目）に組織を示す。なお、各鉱物相はビッカース断面硬度値から検証した。白色粒状結晶ウスタイトは447Hvの実績に対して文献硬度値は450~500Hv^(注6)淡灰色長柱状結晶ファヤライトは682Hvに対して文献値600~700Hvなど、いずれも顕微鏡観察結果と矛盾しない。一方、化学組成は Table 2

に示すように鍛冶段階の高温沸し鍛接滓は全鉄分 (Total Fe) が51.51%と高く、工程の進捗により40.39~29.18%、最終的には3.08%まで低下する。造滓成分は逆転し、脈石成分 (Ti、V、Zr、Mn) は微量含有磁鉄鉱なので、砂鉄のような明瞭な低減規則性は認められない。

鍛造剥片の6点の鉱物相を Photo. 1 の5段目から Photo. 2 全体に示す。鍛造剥片とは赤熱鉄面から剥落した酸化膜であり、5mm平方以下で0.25~0.4mm程度の微細遺物である^(注7)。鉱物相は3層に分離されて最表層は白色微厚のヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3)、中間層はマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4)、内層が最も厚いウスタイト (Wüstite: FeO) で構成される。このウスタイトの粒状組織が先行し、仕上最終段階で非晶質となる。当供試材は後者の剥片であり、微細遺物ながら、当調査区での鍛打作業を証明する貴重な遺物といえる。

粒状滓は径3.5mm以下の球状遺物である^(注8)。Photo. 3 の2段目以下に4点の鉱物相を示す。これらは断面が大きく空洞化し、ウスタイトの凝集鉱物相で占められる。時には類似遺物で鉄滓層の球状化 (長径7.4mm) 遺物が混在する。擬似粒状滓とも称するもので、内部空洞化がなく、ウスタイト+ファヤライトの鉄滓組織である。これを Photo. 3 の1段目に示す。粒状滓の存在は、現場での平坦度が保てない素材を処理したことが推定できる。

(2) III - 2区出土品

滓は8点の椀形鍛冶滓、2点の流動滓を調査した。鉱物相を Photo. 4~5 に示す。鉱物相の8割がファヤライト晶出の低温素延べ・火造り工程が想定される鍛錬鍛冶滓であった。こちらは精錬や高温沸し鍛接工程を省略できる半製品確保の官営鍛冶工房の特質を顕著に示す。個々の鉱物相と化学組成、更に硬度値との検証などは、Table 3 のまとめに列記したので参照願いたい。ただし、注目すべきはKB2-5とKB2-9の2点の滓である。前者は斑鑄鉄痕跡をもつ銹化鉄を内蔵し、成長ウスタイト晶出と高鉄分 (50.14% T・Fe) で低マンガン (0.03% MnO) は、銑鉄の下げ脱炭を秘めた組成である。ここでは単純に鍛錬鍛冶にのみ邁進したのではなく、原料鉄の調達具合によつての切替え作業も予測される。後者はマグネタイト (Fe_3O_4) 晶出の0.03% MnO 組成であり、こちらも先述事項を補強する。

次に3点の鉄塊系遺物の金属組織を Photo. 6 の上4段目までに示す。KB2-11は表皮スラグは成長ファヤライトの晶出から磁鉄鉱塊状鉄由来の鉄塊と判定できて、亜共析鋼 (<0.77% C) レベルの金属鉄を残す。同じくKB2-12も亜共析鋼だがKB2-13は炭素量のバラツキをもち、3段目は過共析 (>0.77% C) 域、4段目は純鉄のフェライトを示す。前述KB2-5の滓と連動して下げ脱炭を受けるとKB2-13鉄塊に近似した組織となろう。この発現は下げ脱炭の酸化雰囲気(Photo. 6の4段目右側)に見られるウスタイトと硬度値の413Hvがあった事から傍証される。また、金属鉄の硬度値はフェライトが98.1Hv、亜共析域のベイナイト (bainite) が111~178Hv、球状セメンタイト域で172Hv、過共析域の初析セメンタイトが787Hvと得られた。それぞれの組織に対応した硬度値である。なおKB2-12鉄塊中の非金属介在物をEPMAで調査した。その結果をPhoto.13に示す。鉱物相はウスタイト (FeO) と非晶質珪酸塩ガラスで、これはTi、V、Zrなどを含まず、製鉄原料は磁鉄鉱 (塊状鉄) を裏付ける。

次に羽口胎土の粘土鉱物セリサイトを Photo. 6 の最下段に示す。微細な鱗片状粘土鉱物に石英・長石類が加熱変化を受けなくて非晶質で存在する。該品は鉄分 (Fe_2O_3) 0.38%と少なく軟質化に富み、アルミナ (Al_2O_3) 低値の13.42%なので高耐火性は望めないが、塩基性成分 ($\text{CaO}+\text{MgO}$) が0.27%と極低値で耐火度は1320℃を保つ。地場粘土を使用した羽口が想定できる。

鍛造剥片や粒状滓及び擬似粒状滓は Photo. 7, 8, 9 に、鉍物相の個々の説明は Table 3 のまとめに記述したのでここでは割愛する。ただし KB2-16の擬似粒状滓は、珪酸塩ガラスで長径9.5mmを測る。外観からも粒状滓から外れるものを参考までに提示した。

(3) III - 3 区出土品

III - 3 区出土の供試材は色んな素性を隠見している。KB3-1含鉄鉄滓は片状黒鉛析出のねずみ鑄鉄部分を遺存して、銑鉄からの下げ脱炭の片鱗を覗かせる。これに極軟鉄のフェライト粒も散在し、鉍物相はウスタイトとファヤライトの晶出である。KB3-2と KB3-4鉄滓はウスタイトを晶出し、高温沸し鍛接からの鍛錬鍛冶も想定できる。注目すべきは KB3-3の含鉄滓で表皮スラグに成長ファヤライトをもち、金属組織は初析セメンタイトを析出した過共析鋼 (>0.77% C) の存在である。該品は製鉄遺跡からの直接搬入の様相を呈する。貴重な鋼の供給は、低炭素半製品とは別ルート直送を考慮すべきかも知れぬ。鍛冶原料鉄の調達も単純でないことが垣間見える。なお KB3-3表皮スラグの鉍物相の EPMA 分析を行った。65.8% FeO-31.0% SiO₂組成のファヤライト、93.5% FeO のウスタイトの組成が Photo.14で捉えられた。検鏡鑑定と矛盾はない。鍛造剥片は Photo.11の4段と Photo.12の上2段に示す。厚みが0.25~0.40mmの3層分離型である。内層ウスタイトは完全には非晶質化されずに凝集気味の名残りを留める。III - 1、III - 2 区よりも微かであるが高温鍛打気味となろうか。一方、粒状滓は Photo.12の下側3段に示す。内部は空洞化で、表層ヘマタイト、内層ウスタイトの晶出である。粒径が3.0~6.5mmと大きく、素材肌の凹凸荒れの鍛打を物語る。当工房は半製品からの加工よりも鋼などで平坦面の少ない異材扱いに結び付く可能性が指摘できる。

まとめ

鬼城山鍛冶遺構群は官営工房としての操業形態が濃厚に感知できる。鍛冶原料鉄は微量 Ti、V、Zr 磁鉄鉍（塊状鉍）由来の半製品（棒、板状）が大量に搬入された可能性が高い。排出された鍛冶滓はウスタイト（FeO）晶出の精錬や沸し鍛接などの高温派生物は少なく、目減り酸化防止に粘土汁を塗布したガラス分の高い低温派生滓が多い。これらの鉍物相はファヤライト（FeO・SiO₂）や非晶質珪酸塩のガラスである。潤沢に準備された半製品が確保された背景が窺われる。一方、出土鉄滓全体を見回すと、鉄分の少ない礫混り滓の多さに驚かされる。鍛冶炉内清掃に際して操業時間短縮の目的から礫投入で急速冷却を目論んでいる。このような職癖は、官営工房独特な行為であろう。過去の調査事例として郡衛工房では鳥取県・坂長第6遺跡や島根県雲南市の寺田I遺跡でみられた。最後に鬼城山での主体鍛冶工房の模式図を Fig. 1 に掲げておく。

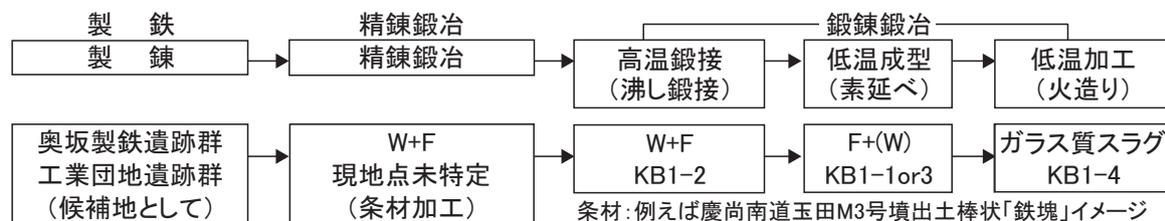


Fig. 1 鬼城山鍛冶工程模式図 (III - 1 区供試材を使っでの代表例)

注

- (1) 大澤正己「奥坂製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『奥坂遺跡群』（総社市埋蔵文化財発掘調査報告書 15）総社市教育委員会 1999

- (2) 大澤正己「総社久代製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群』(総社市埋蔵文化財発掘調査報告書9) 総社市教育委員会 1991
- (3) 大澤正己「三軒屋遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『三軒屋遺跡Ⅱ』-上野国佐位郡衙正倉跡発掘調査概報-(伊勢崎市文化財発掘調査報告書 第97集) 伊勢崎市教育委員会 2010
- (4) 『鉄鋼便覧』第3版 巻1巻(1981) 丸善 P48

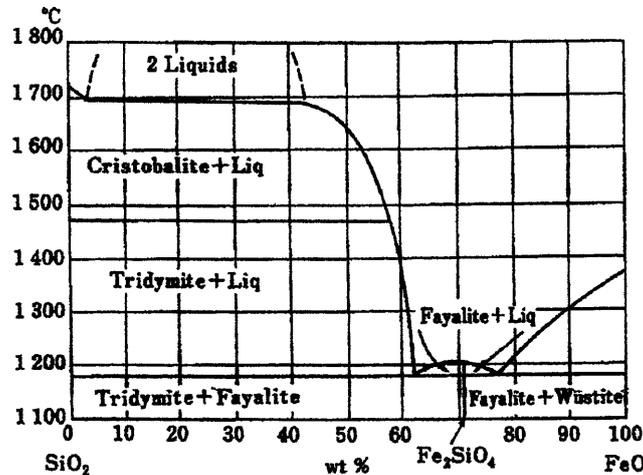


図4・13 FeO - SiO₂

- (5) ファヤライトの低温安定に関する実験論文と筆者(大澤)のホーロー焼成実験から割り出した推定温度である。
- (5) -1 Womes,D.R.and Gilbert.M.C (1969) The fayalite - magnetite - quartz assemblage between 600°C and 800°C American Journal of Science.Schairer Vol.267 - A.p.480 - 488
水熱反応実験で600°Cのファヤライト生成を示す。
- (5) -2 O' Neill, H.Si.C. (1987) Quartz - Fayalite - iron and quartz - fayalite - magnetite equilibria and the force energy of formation of fayalite (Fe₂SiO₄) and magnetite (Fe₃O₄) . American Mineralogist. Vol.72. p.67 - 75.
電気化学反応で1000K (700°C) 前後のファヤライト生成を確認。
- (5) -3 Roedder.E (1952) A reconnaissance of liquidus relations in the system K₂O · 2SiO₂ - FeO - SiO₂. Amer. Jour. Science. Bowen Volume. P435 - 456
金属鉄と平衡する条件で、800°Cまでファヤライト生成が「推定」されている。(カリの存在でファヤライトの生成温度が低下する)
- (6) 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968
ウスタイトは450~500Hv、マグネタイトは500~600Hv、ファヤライトは600~700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ(Al)が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (7) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる^(注9)。

この鍛造剥片や粒状滓は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶址の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当たっては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である^(注10)。

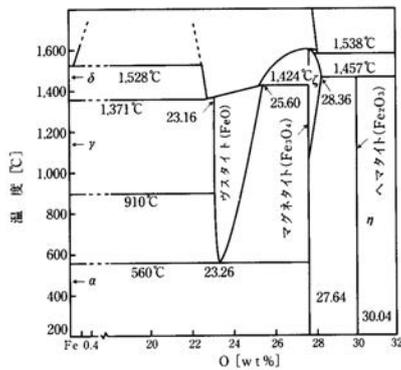
鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite: Fe₂O₃)、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)、大部分は内層ウスタイト(Wustite: FeO)の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450°Cを超えると存在しなく、ウスタイト相は570°C以上で生成されるのはFe - O

系平衡状態図から説明される。^(注11)

鍛造剥片を王水（塩酸3：硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite： Fe_2O_3 ）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite： Fe_3O_4 ）は黄変する。内層のウスタイト（Wustite： FeO ）は黒変する。

鍛打作業前半段階ではウスタイト（Wustite： FeO ）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

- (8) 粒状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。
- (9) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』（平成3年度）千葉県房総風土記の丘 1992
- (10) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書 第13集）福岡県教育委員会 1991
- (11) 森岡進ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975



Fe - O 系平衡状態図

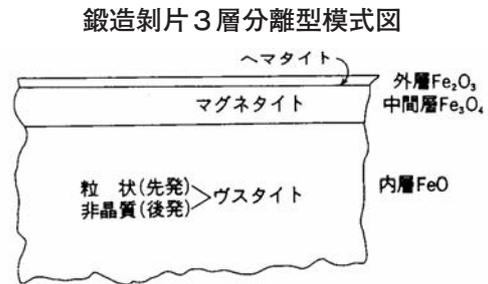


Table 1 供試材の履歴と調査項目

符号	掲載番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値			メタル度	調査項目						備考			
						大きさ (mm)	重量 (g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析		耐火度	カロリー	
KB1-1	M12	鬼城山	Ⅲ-1区	腕形鍛冶滓	7c 後半	97×78×35	190.75	なし		○									
KB1-2	M14			腕形鍛冶滓		78×68×31	166.10	なし		○									
KB1-3	M27			腕形鍛冶滓		50×39×18	29.28	なし		○									
KB1-4	M15			腕形鍛冶滓(ガラス質)		75×62×22	52.18	なし		○									
KB1-5				鍛造剥片		-	-	なし		○									
KB1-6				擬似粒状滓		-	-	なし											
KB1-7				粒状滓		-	-	なし											
KB2-1	M43	Ⅲ-2区		腕形鍛冶滓	7c 後半	156×90×48	573.52	なし		○									
KB2-2	M44			腕形鍛冶滓		120×105×51	392.73	なし		○									
KB2-3	M46			腕形鍛冶滓		97×79×37	224.13	なし		○									
KB2-4	M52			腕形鍛冶滓		109×65×24	126.93	なし		○									
KB2-5	M57			腕形鍛冶滓		67×47×21	64.78	なし		○									
KB2-6	M60			腕形鍛冶滓		57×35×16	32.14	なし		○									
KB2-7	M45			腕形鍛冶滓		72×48×51	208.85	L (●)		○									
KB2-8	M58			流動滓		89×31×23	84.76	なし		○									
KB2-9	M59			流動滓		61×34×25	34.15	なし		○									
KB2-10	M51			腕形鍛冶滓(ガラス質)		119×76×26	195.74	なし		○									
KB2-11		銑塊系遺物	30×27×25	30.00	M (◎)														
KB2-12		銑塊系遺物	54×27×19	56.38	L (●)							○							
KB2-13		銑塊系遺物	35×22×19	17.00	M (◎)														
KB2-14		羽口	65×56×24	68.98	なし									○					
KB2-15		鍛造剥片	-	-	なし					○									
KB2-16		擬似粒状滓	-	-	なし														
KB2-17		粒状滓	-	-	なし														
KB2-18		鍛造剥片	-	-	なし														
KB3-1	M65	Ⅲ-3区		合鉄鉄滓	7c 後半	110×132×48	624.70	M (◎)		○									
KB3-2	M68			腕形鍛冶滓		109×93×42	472.28	なし		○									
KB3-3	M74			製錬系合鉄滓		71×46×26	74.05	L (●)		○									
KB3-4				鍛冶滓		20×16×15	6.91	なし											
KB3-5				鍛造剥片		-	-	なし					○						
KB3-6				粒状滓		-	-	なし											
KB3-7				粒状滓		-	-	なし											

Table 2 供試材の化学組成

符号	掲載番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	V ₂ O ₅ (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	耐火度 (°C)	造滓成分		注			
																										Total Fe	Total Fe				
KB1-1	M12	鬼城山	Ⅲ-1区	楕形鍛冶滓	7c後半	40.39	0.11	40.16	12.96	29.24	6.00	2.87	0.70	2.32	0.40	0.07	0.12	0.02	0.04	0.14	0.30	<0.01	0.01	<0.01		41.53	1.02822	0.00297			
KB1-2	M14			楕形鍛冶滓		51.51	0.10	47.80	20.38	19.76	4.20	1.46	0.44	1.12	0.20	1.12	0.20	0.04	0.10	0.02	0.03	0.07	0.36	<0.01	0.01	<0.01		27.18	0.52766	0.00194	
KB1-3	M27			楕形鍛冶滓		29.18	0.06	27.74	10.81	40.96	7.91	3.32	0.79	2.58	0.62	0.08	0.22	0.02	0.02	0.05	0.17	0.32	<0.01	<0.01	<0.01		56.18	1.92529	0.00754		
KB1-4	M15			楕形鍛冶滓 (ガラス質)		3.08	0.13	1.00	3.11	69.17	11.43	5.39	1.22	4.24	1.14	0.17	0.27	0.02	0.02	0.17	0.15	0.15	<0.01	<0.01	<0.01		92.59	30.0617	0.08766		
KB2-1	M43	Ⅲ-2区		楕形鍛冶滓	7c後半	18.96	0.11	7.49	18.63	45.68	9.46	1.83	0.64	2.48	0.93	0.10	0.17	0.01	0.03	0.20	0.50	<0.01	<0.01		61.02	3.21835	0.00897				
KB2-2	M44			楕形鍛冶滓		30.04	0.10	23.36	16.85	36.50	9.24	1.86	0.72	1.71	0.40	0.08	0.19	0.02	0.04	0.13	0.75	<0.01	<0.01		50.43	1.67876	0.00632				
KB2-3	M46			楕形鍛冶滓		36.60	0.12	39.30	8.48	33.56	7.00	2.83	0.58	1.92	0.48	0.11	0.18	0.02	0.02	0.12	0.35	<0.01	<0.01		46.37	1.26694	0.00492				
KB2-4	M52			楕形鍛冶滓		40.71	0.10	39.27	14.42	26.21	5.34	3.57	0.82	1.39	0.35	0.14	0.15	0.02	0.03	0.15	0.52	<0.01	<0.01		37.68	0.92557	0.00368				
KB2-5	M57			楕形鍛冶滓		50.14	0.09	21.83	47.30	16.71	3.16	0.28	0.18	0.65	0.23	0.03	0.09	0.02	0.05	0.06	0.46	0.46	<0.01	0.02	0.02		21.21	0.42302	0.00179		
KB2-6	M60			楕形鍛冶滓		46.66	0.10	29.86	33.39	17.94	4.42	2.38	0.65	0.73	0.17	0.10	0.19	0.02	0.06	0.17	0.68	<0.01	<0.01		26.29	0.56344	0.00407				
KB2-7	M45			楕形鍛冶滓		43.78	0.15	30.63	28.34	21.47	4.23	3.83	1.06	1.29	0.24	0.16	0.10	0.02	0.08	0.13	0.58	<0.01	<0.01		32.12	0.73367	0.00228				
KB2-8	M58			流動滓		45.66	0.12	51.53	7.84	24.12	5.47	1.92	0.51	1.22	0.26	0.09	0.18	0.02	0.05	0.09	0.44	<0.01	<0.01		33.5	0.73368	0.00394				
KB2-9	M59			流動滓		42.80	0.11	40.59	15.93	31.07	5.79	0.83	0.31	1.64	0.52	0.03	0.19	0.02	0.02	0.05	0.29	<0.01	<0.01		40.16	0.93832	0.00444				
KB2-10	M51			楕形鍛冶滓 (ガラス質)		23.88	0.09	20.77	10.93	49.70	9.00	1.60	0.57	3.05	0.87	0.04	0.23	0.02	0.02	0.09	0.25	<0.01	<0.01		64.79	2.71315	0.00963				
KB2-14		羽口	1.38	0.11	1.29	0.38	69.98	13.42	0.15	0.12	3.90	0.74	0.04	0.26	<0.01	0.05	0.03	I _{gloss} 7.72	<0.01	<0.01		88.31	63.9928	0.18841							
KB3-1	M65	Ⅲ-3区	含鉄滓	楕形鍛冶滓	7c後半	43.27	0.11	22.49	36.72	25.98	5.51	0.42	0.21	1.13	0.30	0.03	0.15	0.02	0.06	0.05	0.35	<0.01	<0.01		33.55	0.77536	0.00347				
KB3-2	M68			楕形鍛冶滓		54.15	0.45	50.22	20.97	16.87	3.35	1.79	0.43	1.10	0.20	0.07	0.14	0.02	0.08	0.10	0.23	<0.01	<0.01		23.74	0.43841	0.00259				
KB3-3	M74			製錬系含鉄滓		62.30	21.67	23.28	32.22	9.36	1.98	0.63	0.22	0.37	0.07	0.10	0.06	0.02	0.23	0.10	1.12	<0.01	<0.01		12.63	0.20273	0.00096				

Table 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	掲載番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)										所見
							Total Fe	Fe ₂ O ₃ 成分	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分	Cu			
KB1-1	M12	見城山	III-1区	椀形鍛冶滓	7c後半	F+微量 W+MeFe	40.39	12.96	3.57	0.12	<0.01	0.07	41.53	0.01	鉱石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)		
KB1-2	M14			W+F+M		51.51	20.38	1.90	0.10	<0.01	0.04	27.18	0.01	鉱石系高温押し鍛接・鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB1-3	M27			F+W		29.18	10.81	4.11	0.22	<0.01	0.08	56.18	<0.01	鉱石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB1-4	M15			Ga+F		3.08	3.11	6.61	0.27	<0.01	0.17	92.59	<0.01	鍛打後低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB1-5				外層H, 中間層M, 内層W (非晶質)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打後半段階派生剥片 (3層分離型)	
KB1-6				擬粒状滓		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	高温押し鍛接・鍛冶滓の球状化 (空中派生)	
KB1-7		粒状滓				外層H+W 凝集傾向 (内部空洞化)	-	-	-	-	-	-	-	鍛打前半段階派生粒状滓			
KB2-1	M43	III-2区		椀形鍛冶滓	7c後半	F+W	18.96	18.63	2.47	0.17	<0.01	0.10	61.02	<0.01	鉱石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)		
KB2-2	M44			F+Ga		30.04	16.85	2.58	0.19	<0.01	0.08	50.43	0.01	鉱石系低温素延と火造との中間的排滓			
KB2-3	M46			外周部風化浸食, F+W		36.6	8.48	3.41	0.18	<0.01	0.11	46.37	0.01	鍛石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB2-4	M52			外周部風化浸食, F+W		40.71	14.42	4.39	0.15	<0.01	0.14	37.68	0.01	鍛石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB2-5	M57			滓: W+F, 銹化鉄, MCI 痕跡		50.14	47.30	3.03	0.09	<0.01	0.03	21.21	0.02	下げ脱炭素延鍛冶滓の可能性 (Low Mn 傍証)			
KB2-6	M60			F+W		46.66	33.39	3.03	0.19	<0.01	0.10	26.29	0.01	鍛石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB2-7	M45			椀形鍛冶滓		43.78	28.34	4.89	0.10	<0.01	0.16	32.12	<0.01	鍛石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB2-8	M58			流動滓		45.66	7.84	2.43	0.18	<0.01	0.09	33.50	0.01	鍛石系低温素延鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB2-9	M59			流動滓		42.80	15.93	1.14	0.19	<0.01	0.03	40.16	<0.01	下げ脱炭素延鍛冶滓の可能性 (Low Mn 傍証)			
KB2-10	M51			椀形鍛冶滓 (ガラス質)		23.88	10.93	2.17	0.23	<0.01	0.04	64.79	<0.01	鍛石系低温素延火造的組織 (温度高低差有)			
KB2-11				鉄塊系遺物		-	-	-	表面スラグ: F, 金属鉄: Ba, 介在物: Ga	-	-	-	-	-	-	粗鉄: 鍛鉄 (塊状鍛) 製鋼滓付着鉄塊	
KB2-12		鉄塊系遺物	-	-	-	表面スラグ: なし, 金属鉄: Ba, 介在物: W+Ga	-	-	-	-	-	-	-	除滓された鉄塊, 組織はKB2-11に準じる			
KB2-13		鉄塊系遺物	-	-	-	表面スラグ: W, Pe 地に網状初析 Ce, Fe	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶屑による微熱鉄塊 (下げ途中塊か)			
KB2-14		珪口	1.38	0.38	0.27	胎土粘土鉱物セリサイト鱗片状, 石英クラックなし	0.26	<0.01	0.04	88.31	<0.01	耐火度1320°Cの珪口, 134.2% Al ₂ O ₃ 組成					
KB2-15		鍛造剥片	-	-	-	外層H, 中間層M, 内層W (非晶質)	-	-	-	-	-	-	-	鍛打後半段階上時派生剥片 (3層分離型)			
KB2-16		擬粒状滓	-	-	-	Ga	-	-	-	-	-	-	-	粘土汁塗布からの溶融球状化滓			
KB2-17		粒状滓				外層H+W 凝集傾向 (内部空洞化)	-	-	-	-	-	-	-	鍛打前半段階派生粒状滓			
KB2-18		鍛造剥片				外層H, 中間層M, 内層W (非晶質)	-	-	-	-	-	-	-	鍛打後半段階派生剥片 (3層分離型)			
KB3-1	M65	III-3区		含鉄鉄滓	7c後半	表面スラグ: W+F, 銹化鉄: Pe 地に fg, MeFe	43.27	36.72	0.63	0.15	<0.01	0.03	33.55	<0.01	鋼鉄からの下げ脱炭素延鍛冶滓の可能性 (Low Mn 傍証)		
KB3-2	M68			W+F		54.15	20.97	2.22	0.14	<0.01	0.07	23.74	0.01	鍛石系高温押し鍛接・鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)			
KB3-3	M74			成長F 表面スラグ, 金属鉄: Pe 地に初析 Ce		62.30	32.22	0.85	0.06	<0.01	0.10	12.63	0.02	製鉄遺物導入鉄塊の存在を証明する, 鍛鉄塊状鉄原料鉄			
KB3-4				鍛冶滓		-	-	-	W+F, Fe 粒	-	-	-	-	-	-	-	鍛石系高温押し鍛接・鍛冶滓 (鍛鉄: 塊状鍛)
KB3-5				鍛造剥片		-	-	-	外層H, 中間層M, 内層W (非晶質)	-	-	-	-	-	-	-	鍛打後半段階派生剥片 (3層分離型)
KB3-6				粒状滓		-	-	-	外層H+W 凝集	-	-	-	-	-	-	-	鍛打前半段階派生粒状滓
KB3-7				粒状滓					外層H+W 凝集	-	-	-	-	-	-	-	鍛打前半段階派生粒状滓

F: Fayalite (2FeO·SiO₂), W: Wüstite (FeO), MeFe (Metallic Fe), M: Magnetite (Fe₃O₄), Ga: Glass (珪酸塩), H: Hematite (Fe₂O₃), MCI: (Mottled cast iron)
 He: Hercynite (FeO·Al₂O₃), Ba: Baimite (微細フェライト中にさらに小さなセメンタイトが分散している組織), Fe: Pearlite (フェライトとセメンタイトの共析組織), Ce: Cementite (Fe₃C), Fe: Ferrite (純鉄, α鉄), fg: flake graphite (片状黒鉛)

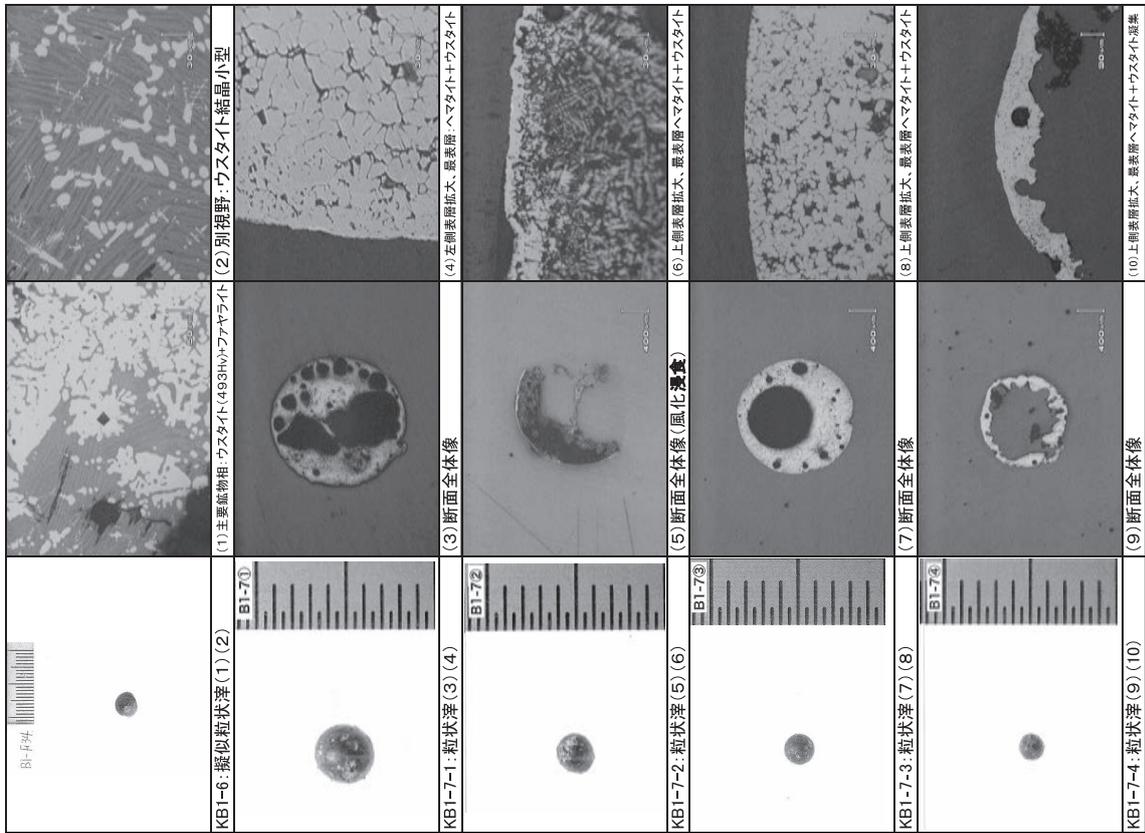


Photo. 3 擬似粒状滓、粒状滓の顕微鏡組織

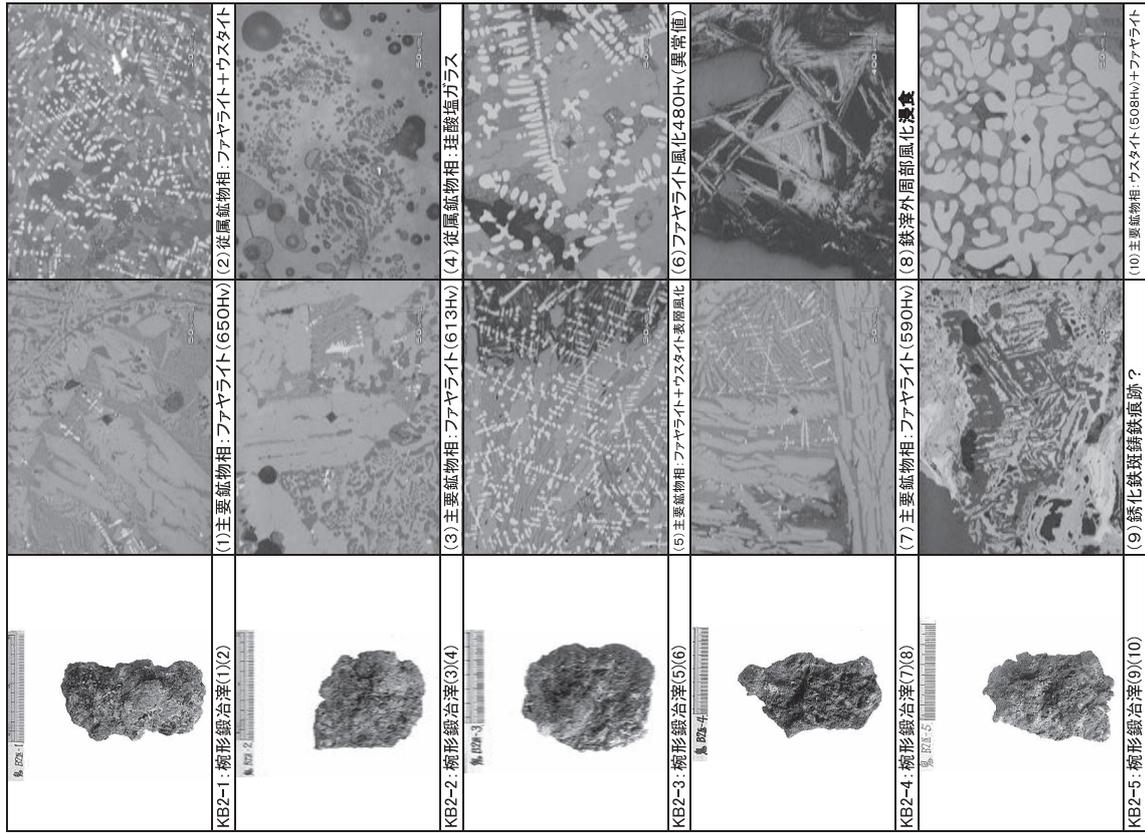


Photo. 4 梃形鍛冶滓の顕微鏡組織

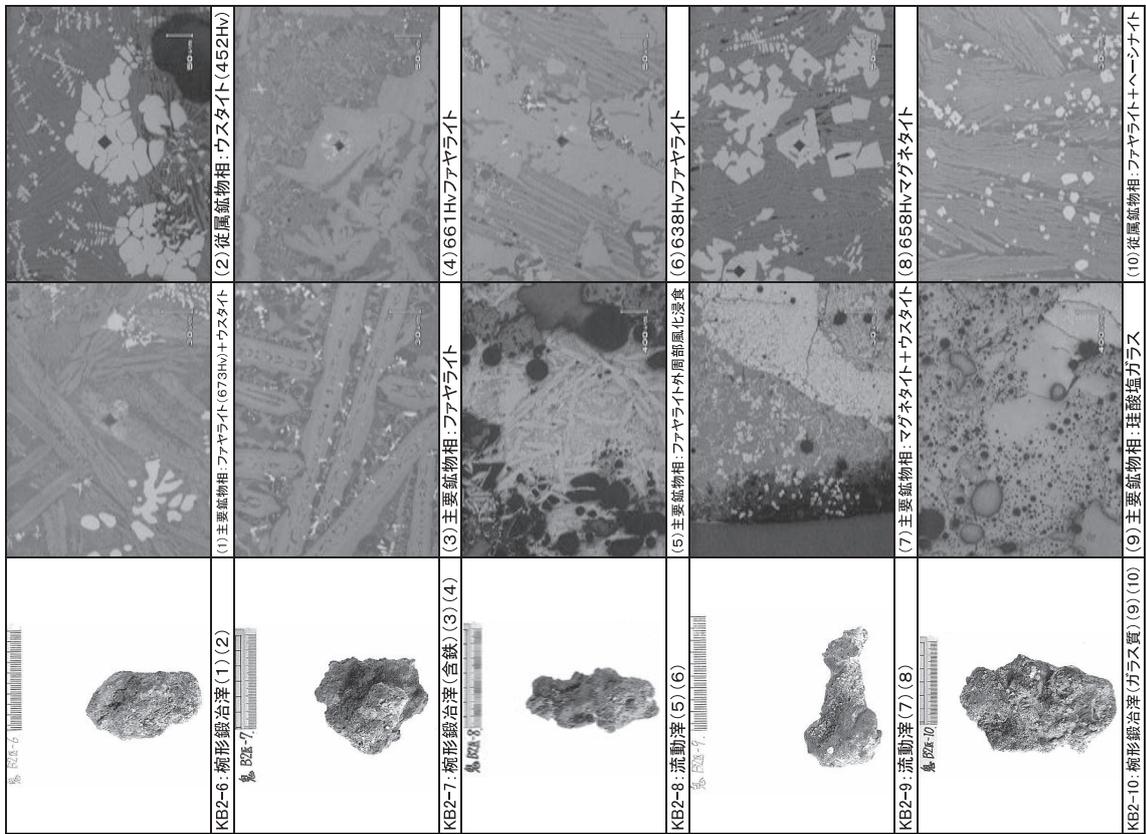


Photo. 5 梶形鍛冶滓、流動滓の顕微鏡組織

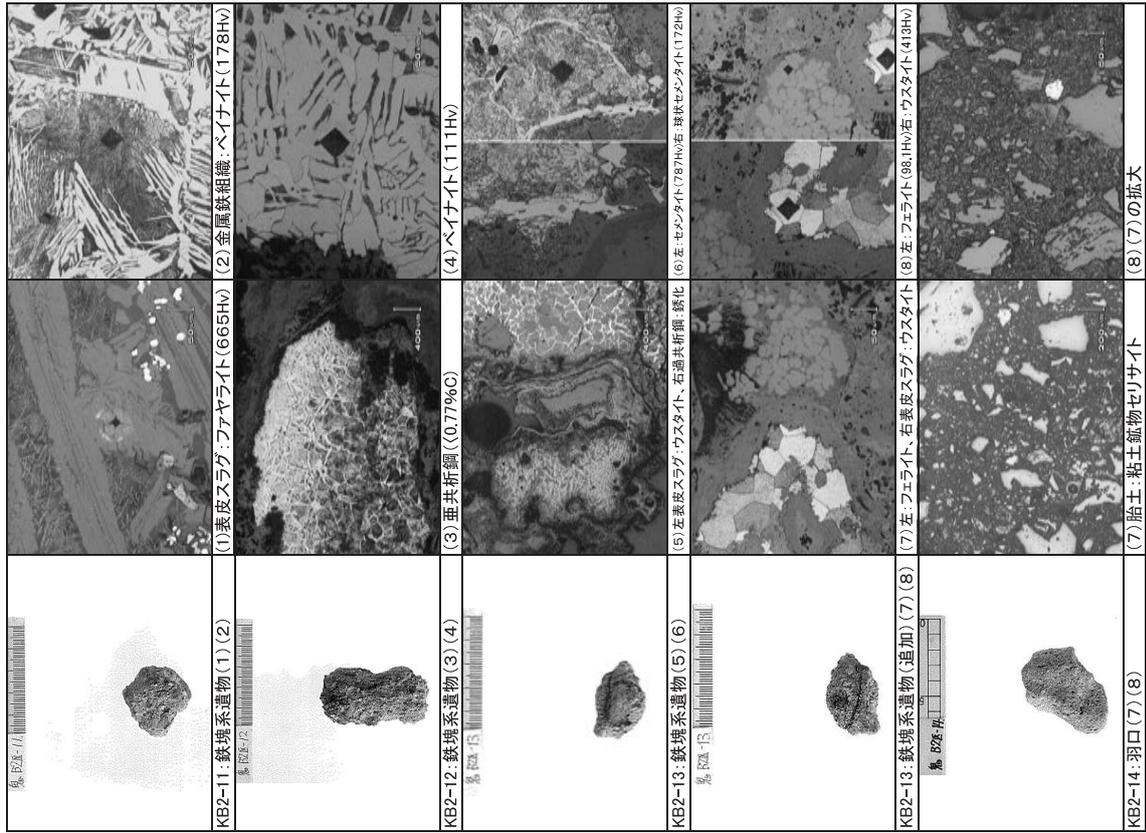


Photo. 6 鉄塊系遺物、羽口の顕微鏡組織

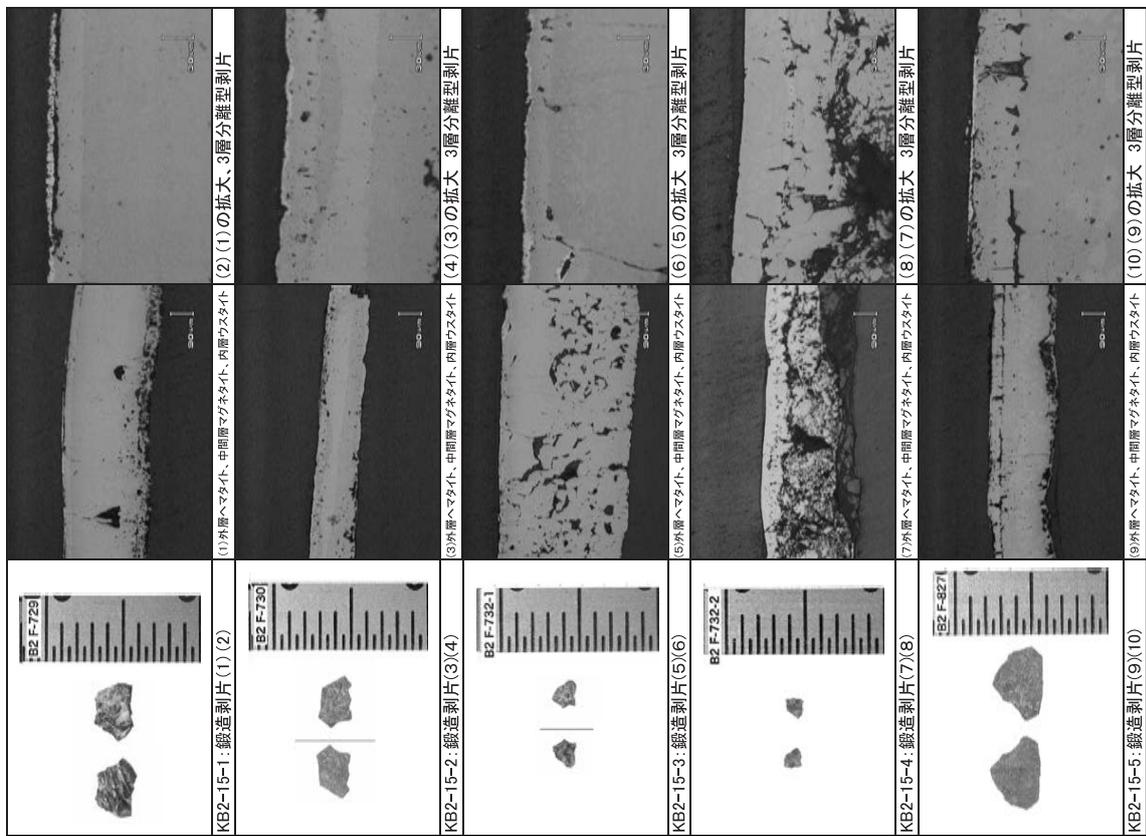


Photo. 7 鍛造剥片の顕微鏡組織

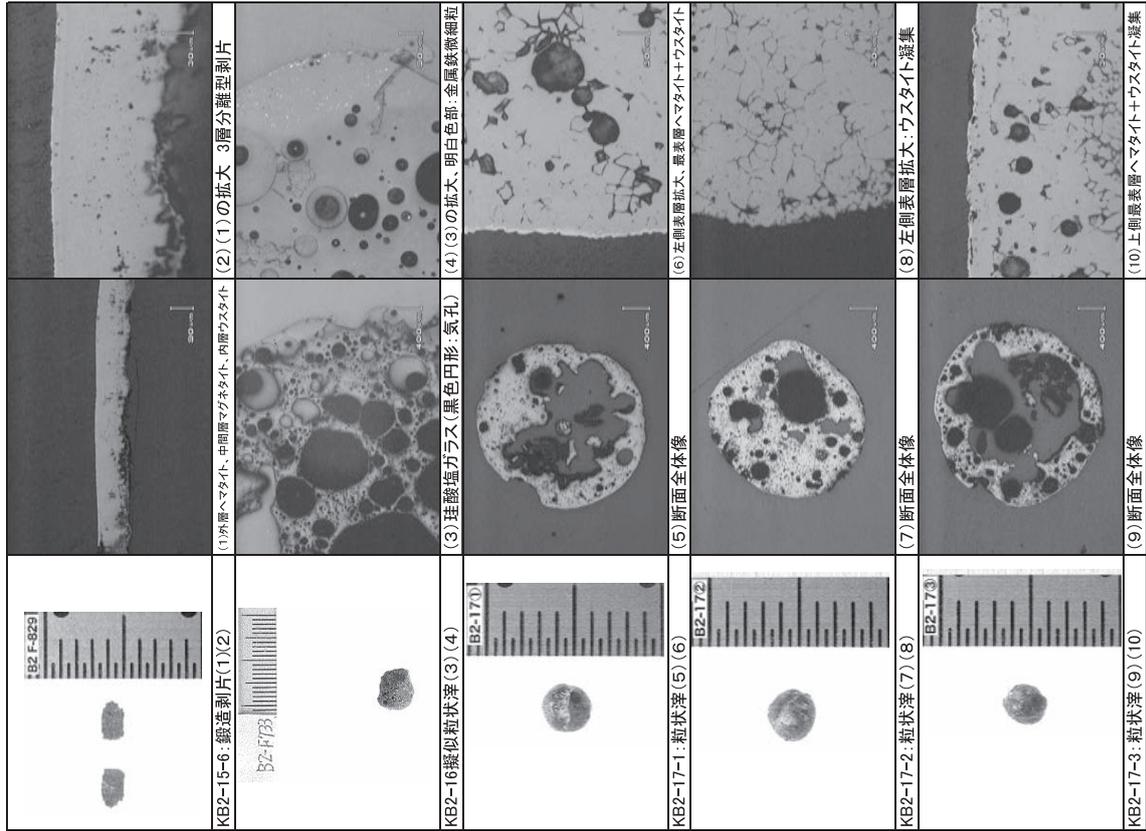


Photo. 8 鍛造剥片、擬似粒状滓、粒状滓の顕微鏡組織

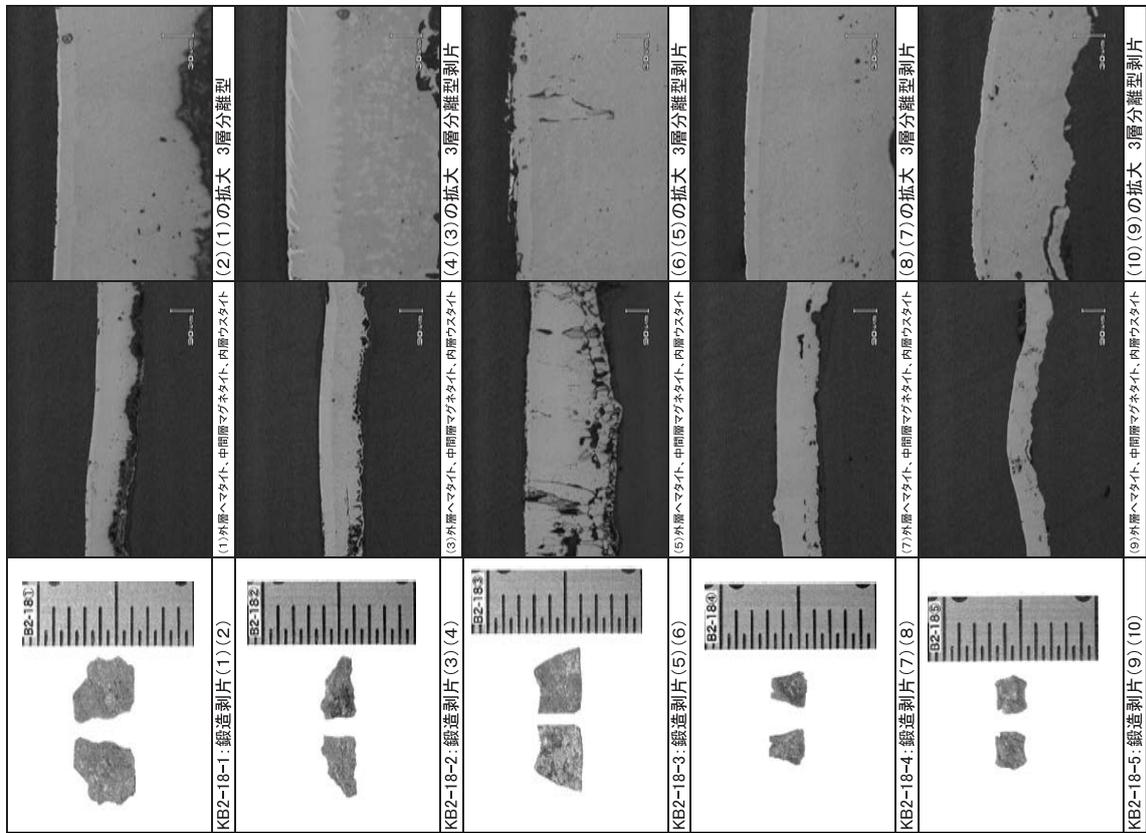


Photo. 9 鍛造剥片の顕微鏡組織

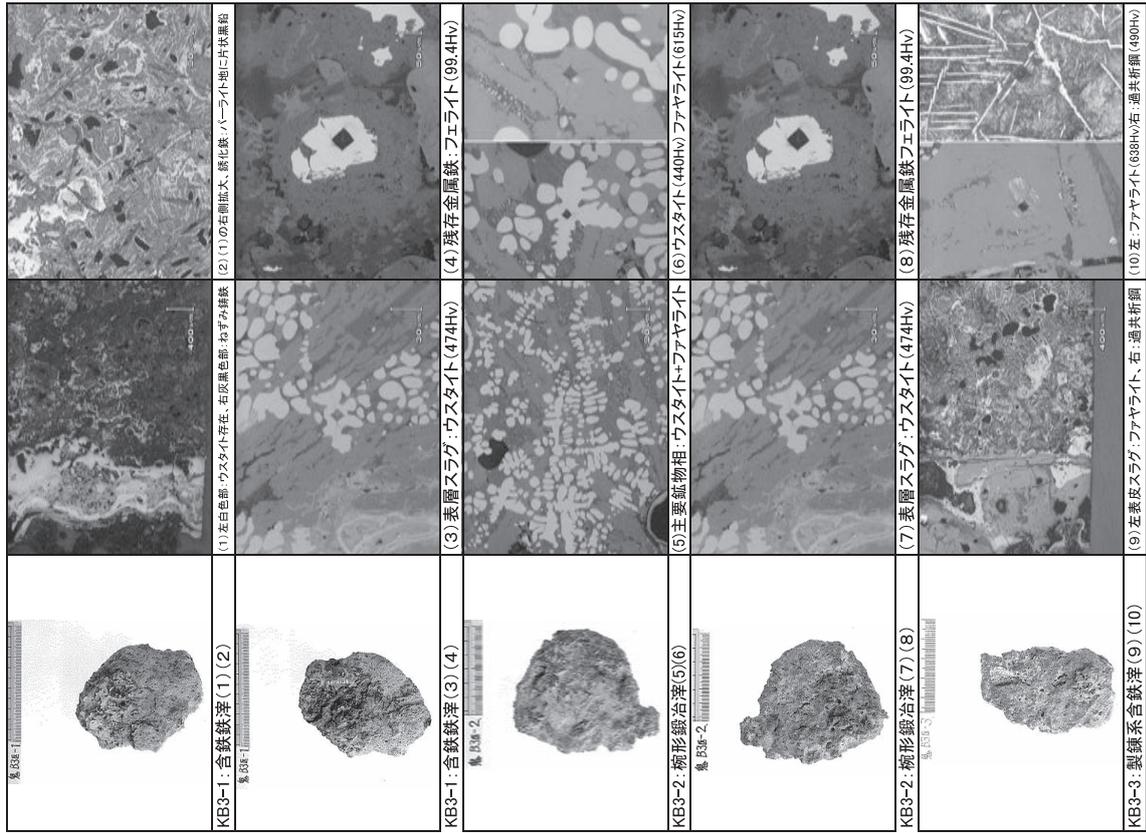


Photo. 10 含鉄鉄滓、楕形鍛冶滓、製錬系含鉄滓の顕微鏡組織

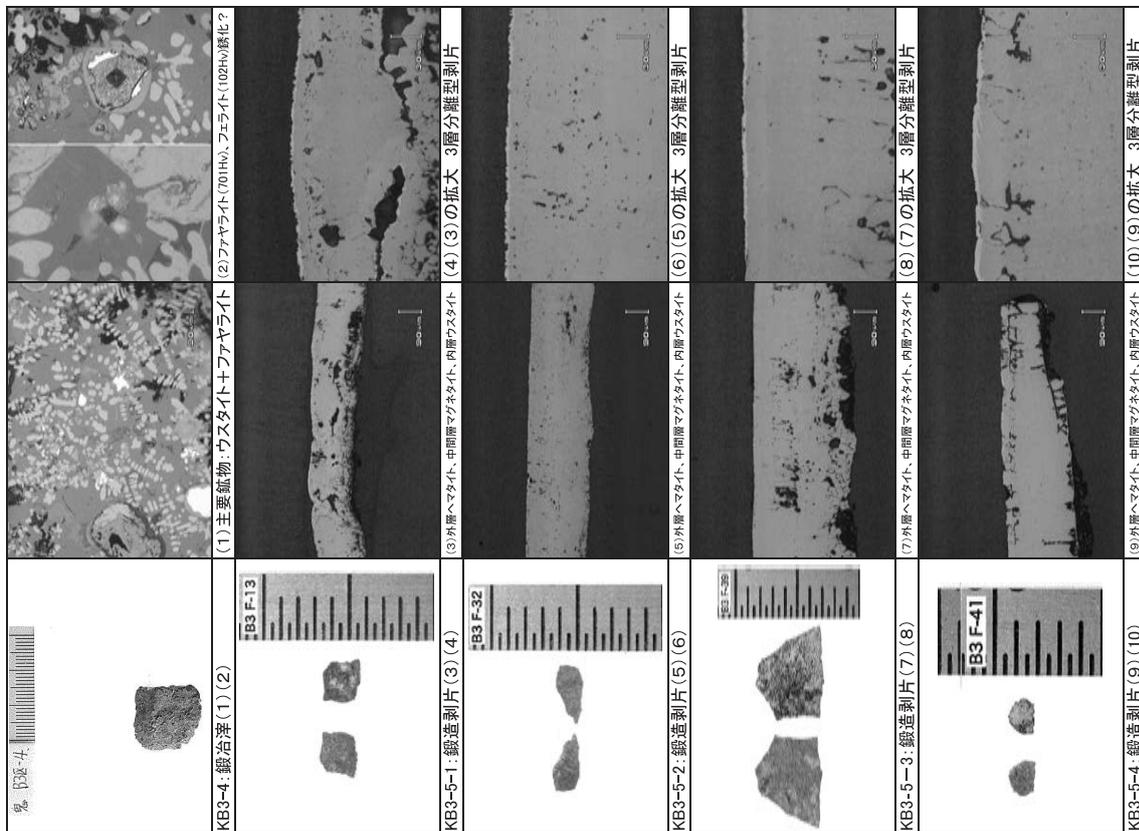


Photo. 11 鍛冶滓、鍛造剥片の顕微鏡組織

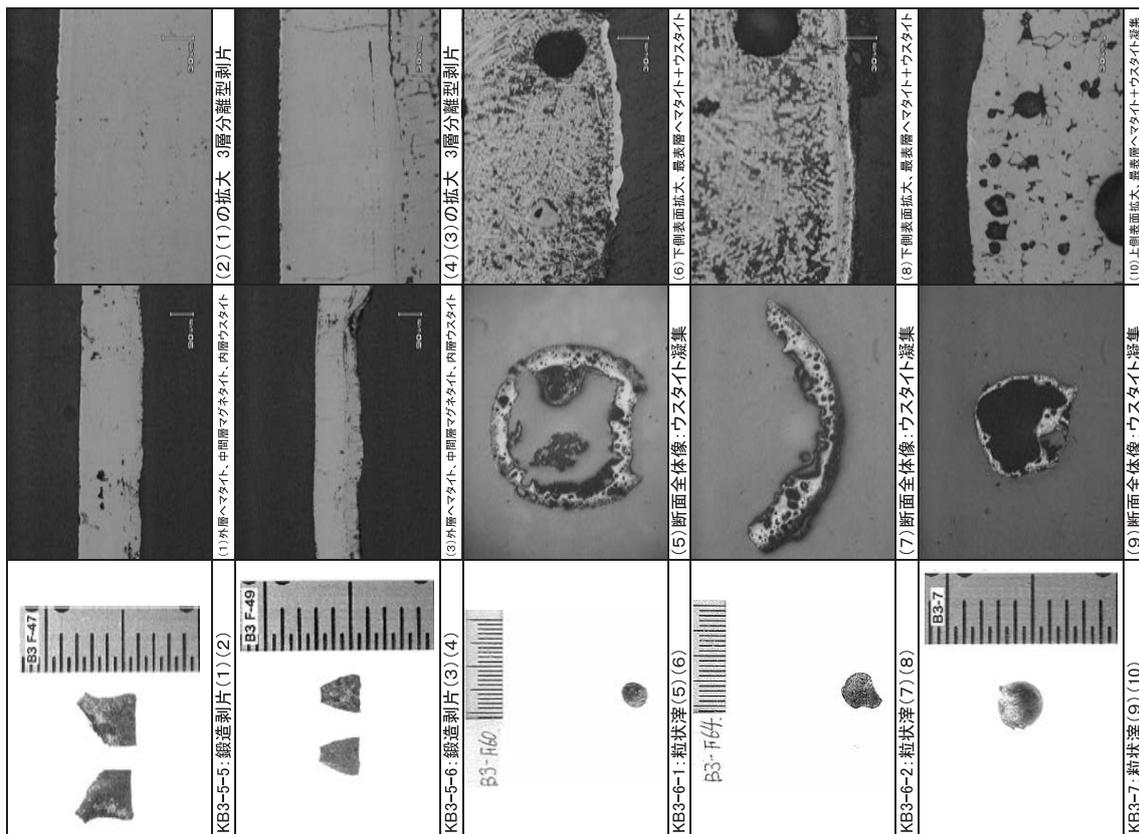


Photo. 12 鍛造剥片、粒状滓の顕微鏡組織

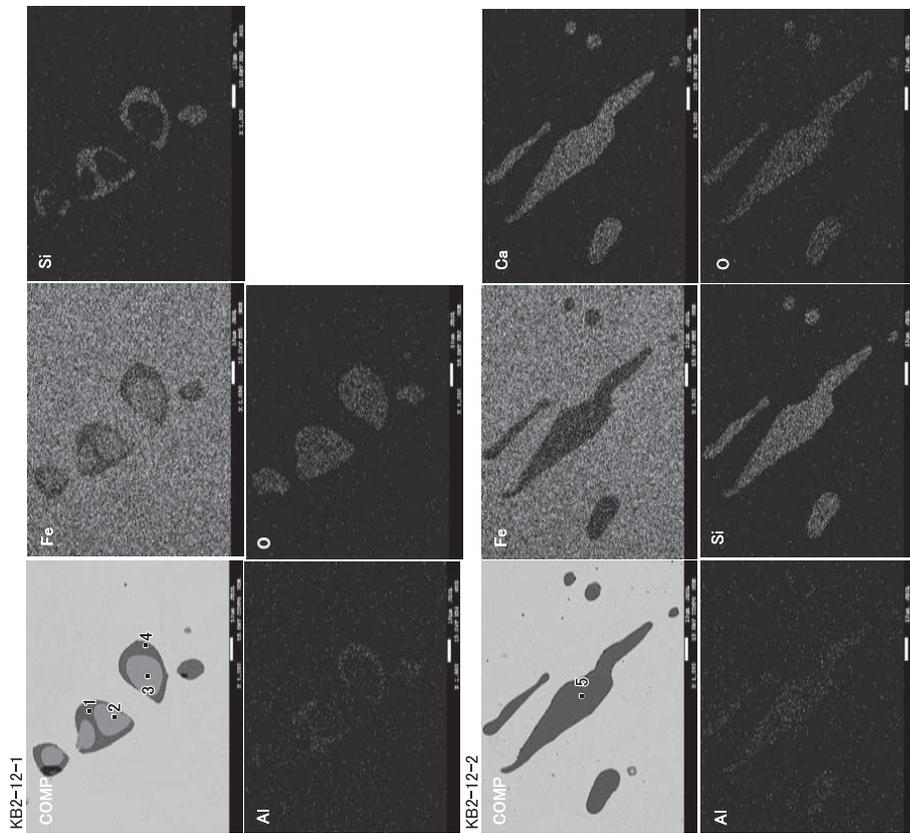


Photo.13 EPMA 調査

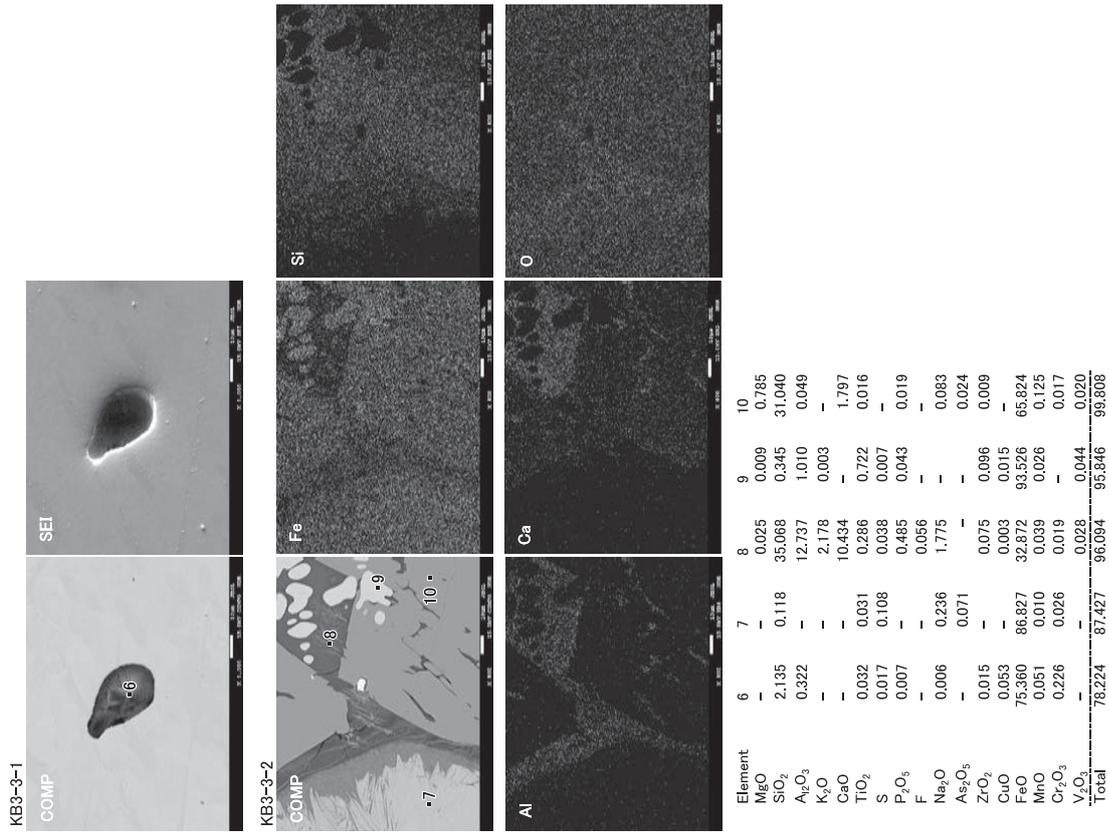


Photo.14 E P M A 調査

遺構一覽表

建物一覽表

遺構名	調査区	規模 (間)	桁行 (cm)	梁行 (cm)	柱間距離		柱間尺		桁基準尺 (cm)	梁基準尺 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱配置	時期	備考
					桁 (cm)	梁 (cm)	桁 (尺)	梁 (尺)							
礎石建物 1	-	3×3	745	580	248	193	8	6	31.0	32.2	43	N-44° -E	総柱	飛鳥～ 奈良	
礎石建物 2	II-9	3×3	525	525	175	175	6	6	29.2	29.2	27.5	N-9°-E	総柱	飛鳥～ 奈良	雨仕舞い溝
礎石建物 3	-	4×3	715	610	178	203	6	7	29.6	29.0	44	N-63° -E	総柱	飛鳥～ 奈良	
礎石建物 4	-	4×3	767	660	191	220	6	7	31.8	31.4	51	N-46° -E	総柱	飛鳥～ 奈良	
礎石建物 5	II-4	6×2	1760	650	293	325	10	11	29.3	29.5	114	N-87° -W	側柱	飛鳥～ 奈良	基壇、南側に石列を伴う、雨仕舞い溝
礎石建物 6	II-2	6×2	1752	642	292	321	10	11	29.2	29.2	112	N-70° -E	側柱	飛鳥～ 奈良	雨仕舞い溝、礎石に柱痕跡
礎石建物 7	II-12	3×3	708	(525)	236	175	8	6	29.5	29.2	38	N-62° -E	総柱	飛鳥～ 奈良	雨仕舞い溝、礎石に柱痕跡
掘立柱建物 1	II-5	3×2	770	480	257	240	8	8	32.1	30.0	37	N-85° -E	側柱	平安	基壇、南側及び東側に石列を伴う
掘立柱建物 2	V-2	2×1	358	251	172	245	6	8	28.7	30.6	8.6	N-76° -E	側柱	平安?	

土坑一覽表

遺構名	調査区	平面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
土坑 1	I-1	楕円形	椀形	86	(41)	17	375.71	飛鳥	被熱土坑
土坑 2	I-1	円形	皿形	80	77	12	374.95	飛鳥?	
土坑 3	I-1	楕円形	椀形	101	(51)	33	374.54	飛鳥	被熱土坑
土坑 4	I-1	円形	逆台形	64	61	81	373.37	飛鳥	
土坑 5	I-2	隅丸方形	逆台形	155	102	26	372.12	飛鳥	木炭焼成土坑
土坑 6	I-2	隅丸長方形	椀形	142	75	35	373.05	飛鳥?	木炭焼成土坑?
土坑 7	I-2	隅丸方形	逆台形	(160)	120	52	373.33	飛鳥以降	木炭焼成土坑?
土坑 8	I-2	楕円形	箱形	158	116	67	372.79		落とし穴?
土坑 9	I-2	不定形	不定形	222	95	21	373.24	飛鳥?	
土坑 10	I-2	楕円形	皿形(2段)	92	76	12	372.52		被熱土坑
土坑 11	I-2	方形	椀形	(109)	-	27	372.19		被熱土坑
土坑 12	I-2	楕円形	皿形	107	92	17	370.64		被熱土坑
土坑 13	I-2	楕円形	椀形	105	80	25	370.82		被熱土坑
土坑 14	I-2	円形	皿形(2段)	76	69	19	373.35		被熱土坑
土坑 15	I-2	円形	皿形	70	58	15	373.39		被熱土坑
土坑 16	I-2	楕円形	椀形	120	105	29	372.20		被熱土坑
土坑 17	I-2	隅丸方形	逆台形	(106)	(100)	29	372.40		被熱土坑
土坑 18	I-2	不整形	逆台形	130	(89)	28	372.56		木炭焼成土坑
土坑 19	I-2	隅丸方形	逆台形	115	112	20	372.56		被熱土坑
土坑 20	I-2	不明	皿形	(137)	-	25	372.58		被熱土坑
土坑 21	II-2	不整円形	椀形	76	71	27	363.21	平安	被熱土坑
土坑 22	II-2	不整楕円形	逆台形?	88	72	22	363.25	平安	被熱土坑
土坑 23	II-2	不整円形	逆台形	124	116	20	363.20	平安	被熱土坑
土坑 24	II-2	不整円形	椀形	73	63	16	363.42	平安	被熱土坑
土坑 25	II-2	隅丸方形	不定形	91	90	21	363.09	平安	
土坑 26	II-3	不定形	不定形	157	142	12	366.77	平安	被熱土坑
土坑 27	II-3	楕円形	逆台形	166	110	19	365.88	平安	被熱土坑
土坑 28	II-3	不整円形	皿状	85	77	6	366.24	平安	被熱土坑
土坑 29	II-4	不整楕円形	皿状	(113)	(56)	10	365.83	平安	
土坑 30	II-4	不整楕円形?	不定形	137	(61)	38	363.82	平安	被熱土坑
土坑 31	II-4	不整楕円形?	不定形	100	(47)	30	363.62	平安	被熱土坑
土坑 32	II-4	円形	逆台形	97	90	30	363.62	平安	被熱土坑
土坑 33	II-5	不明	不明	(400)	(280)	16	363.02	平安	
土坑 34	II-4	不定形	不定形	-	-	20	363.03	平安	
土坑 35	II-6	円形	椀形	33	31	4	360.32	平安	被熱土坑
土坑 36	II-9	隅丸方形	逆台形	(134)	119	(19)	350.87	平安	被熱土坑
土坑 37	II-9	隅丸長方形	逆台形	140	75	38	350.51	平安	木炭焼成土坑
土坑 38	II-12	隅丸方形	不定形	128	113	27	354.33	平安	被熱土坑

遺構名	調査区	平面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
土坑 39	Ⅱ - 12	不整楕円形	不定形	147	(70)	10	354.36	平安	被熱土坑
土坑 40	Ⅲ - 1	不整円形	不定形	120	113	56	326.76	飛鳥	
土坑 41	Ⅲ - 2	不整楕円形	逆台形	(101)	51	17	306.43	飛鳥	
土坑 42	Ⅲ - 2	不定形	皿形	(420)	(285)	18	306.60	中世	
土坑 43	Ⅲ - 3	隅丸方形	逆台形	76	(62)	16	300.28	飛鳥	
土坑 44	Ⅲ - 3	不整楕円形	逆台形	(165)	(112)	10	300.37	飛鳥	
土坑 45	Ⅲ - 3	不整楕円形	逆台形	137	64	22	300.16	飛鳥	
土坑 46	Ⅲ - 3	不整円形	椀形?	(75)	60	(13)	300.13	飛鳥	
土坑 47	Ⅲ - 3	不整長方形	逆台形	147	(51)	17	300.42	飛鳥	
土坑 48	Ⅲ - 3	円形	皿形	71	70	11	300.53	平安	被熱土坑
土坑 49	Ⅳ - 1	楕円形	逆台形	(140)	112	35	315.35	飛鳥	被熱土坑
土坑 50	Ⅳ - 1	楕円形	椀形	84	76	20	317.10	平安	被熱土坑
土坑 51	Ⅳ - 1	楕円形?	椀形	82	-	21	317.30	平安	被熱土坑
土坑 52	Ⅳ - 1	不整楕円形?	椀形	(80)	(48)	42	320.80	平安	被熱土坑
土坑 53	Ⅴ - 1	楕円形	椀形	116	92	21	373.65	平安以前	被熱土坑
土坑 54	Ⅴ - 1	楕円形	箱形	76	(47)	36	372.96	平安	
土坑 55	Ⅴ - 1	不定形	椀形	227	92	21	373.26		被熱土坑
土坑 56	Ⅴ - 2	不整楕円形	皿形	296	184	19	361.92	平安	被熱土坑
土坑 57	Ⅴ - 2	楕円形	皿形	69	51	5	361.93	平安	
土坑 58	Ⅴ - 2	不整楕円形?	逆台形	(75)	(71)	33	360.93	平安	被熱土坑
土坑 59	Ⅴ - 2	隅丸長方形	逆台形	103	76	25	360.93	平安	被熱土坑
土坑 60	Ⅴ - 4	楕円形	逆台形	(108)	92	25	351.03	平安	被熱土坑

鍛冶炉一覧表

遺構名	調査区	平面形	断面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
鍛冶炉 1	Ⅲ - 1	不整円形	不明	-	34	-	-	飛鳥	底部のみ残存
鍛冶炉 2	Ⅲ - 2	不整楕円形	椀形	35	27	8	306.52	飛鳥	
鍛冶炉 3	Ⅲ - 2	不整楕円形	椀形	30	25	4	305.80	飛鳥	
鍛冶炉 4	Ⅲ - 3	不整楕円形	椀形	32	24	8	300.54	飛鳥	内部に炉底滓と羽口
鍛冶炉 5	Ⅲ - 3	不整楕円形?	椀形	(22)	-	5	300.55	飛鳥	鍛冶炉 4 に切られる
鍛冶炉 6	Ⅲ - 3	不整楕円形?	椀形	27	-	8	300.39	飛鳥	内部に炉底滓、西側に土手状高まり
鍛冶炉 7	Ⅲ - 3	不整楕円形?	皿形	(19)	-	2	300.24	飛鳥	
鍛冶炉 8	Ⅲ - 3	不整楕円形	椀形	26	(19)	8	300.19	飛鳥	
鍛冶炉 9	Ⅲ - 3	不整楕円形	椀形	33	28	8	300.07	飛鳥	
鍛冶炉 10	Ⅲ - 3	不整楕円形	椀形	30	22	9	299.78	飛鳥	
鍛冶炉 11	Ⅲ - 3	不整円形	皿形	20	18	2	299.81	飛鳥	
鍛冶炉 12	Ⅲ - 3	不整長方形	皿形	21	18	2	299.81	飛鳥	

溝一覧表

遺構名	調査区	方向	断面形	最大幅 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
溝 1	Ⅰ - 1	南北	逆台形	82	20	374.2 ~ 375.0	飛鳥	
溝 2	Ⅰ - 1	東西	椀形	21	8	374.3 ~ 374.5	飛鳥	火処 7 の北隣、排水用?
溝 3	Ⅱ - 5	南北	皿形	28	4	363.3 ~ 363.6	飛鳥~平安	礎石列 1 に平行、雨仕舞い溝?

土手状遺構一覧表

遺構名	調査区	復元全長 (m)	幅 (m)	復元高 (m)	標高 (m)	主軸	時期	備考
土手状遺構 1	Ⅳ - 1	26.5	8.00	4.7	313 ~ 317.5	N - 19° - E	飛鳥	前面(上段・下段)・背面石垣敷石、折れ構造
土手状遺構 2	Ⅳ - 2	31 ~ 35	6.05	3.5	326.5 ~ 331	N - 15° - E	飛鳥	前面・背面石垣堤頂部に溝

遺物観察表

土器観察表

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
1	土坑4	須恵器 杯蓋	-	(1.6)	-	-	灰白 (N7/1)	2.5mm以下少	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯（墨痕あり）
2	土坑5	須恵器 杯	-	(1.7)	9.3	-	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
3	土坑6	須恵器 杯蓋	-	(1.9)	-	-	灰 (5Y6/1)	1mm以下 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
4	土坑13	須恵器 杯蓋	(19.3)	(1.4)	-	-	灰白 (5Y6/1)	1mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
5	火処3	須恵器 杯	(16.0)	(2.9)	-	-	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
6	火処5	須恵器 甕	21.0	(4.8)	-	-	灰白 (5Y7/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
7	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	7.6	2.7	-	10.0	灰白 (N7/)	2.5mm以下多 黒色粒多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	完形
8	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	9.6	(1.5)	-	10.2	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	胎土分析
9	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	13.6	2.5	-	-	灰白 (N7/)	3.5mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	転用硯？ 胎土分析
10	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	13.6	2.4	-	-	灰白 (5Y7/1)	2mm以下少	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	転用硯 胎土分析
11	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	12.3	(1.8)	-	13.9	灰 (N6/)	2mm以下少	外・内：ヨコナデ	胎土分析
12	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	(14.5)	(1.1)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下少 黒色粒	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	
13	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	-	(1.4)	-	-	灰白 (5Y6/1)	3mm以下	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯 胎土分析
14	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	(14.4)	1.8	-	-	灰 (N6/)	3mm以下	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯 胎土分析
15	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	15.2	3.0	-	-	灰白 (N7/)	2mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	胎土分析
16	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	15.4	(2.2)	-	-	灰 (N6/)	2mm以下	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	胎土分析
17	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	(15.2)	(2.4)	-	-	灰 (N5/)	3mm以下少	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	胎土分析
18	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	16.8	(1.9)	-	-	灰 (7.5Y6/1)	1mm以下少	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯？ 胎土分析
19	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	15.7	3.3	-	-	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下多 黒色粒多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯
20	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	(16.5)	2.6	-	-	灰 (N6/)	2.5mm以下	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯 胎土分析
21	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	(17.2)	(1.9)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	3mm以下多	外・内：ヨコナデ	
22	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	15.8	3.5	-	17.8	灰 (N5/)	4mm以下 黒色粒多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	ほぼ完形 焼成不良
23	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	(17.6)	(3.0)	-	-	灰白 (5Y7/)	2.5mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	転用硯？ 胎土分析
24	土器溜まり 1	須恵器 杯蓋	(18.0)	(2.1)	-	-	灰白 (N7/)	1mm以下多 角閃石	外：ヘラケズリ？、ヨコナデ 内：ヨコナデ	焼成不良
25	土器溜まり 1	須恵器 杯	10.0	4.0	-	-	灰白 (N7/)	2.5mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラ切り未調整 内：ヨコナデ	胎土分析
26	土器溜まり 1	須恵器 杯	(13.0)	(3.2)	-	-	灰白 (N7/)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
27	土器溜まり 1	須恵器 杯	12.0	4.1	8.2	-	灰 (N6/)	1mm以下少	外：ヘラ切り未調整 内：ヨコナデ	胎土分析
28	土器溜まり 1	須恵器 杯	12.9	4.1	8.8	-	灰 (N5/)	3mm以下	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	胎土分析
29	土器溜まり 1	須恵器 杯	-	(2.2)	8.6	-	灰白 (2.5Y8/1)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	
30	土器溜まり 1	須恵器 杯	13.2	4.8	9.6	-	灰白 (2.5Y7/1)	3mm以下多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	転用硯？ 胎土分析

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
31	土器溜まり 1	須恵器 杯	13.2	4.8	8.5	-	灰 (N6/)	3mm以下少	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ	胎土分析
32	土器溜まり 1	須恵器 杯	13.7	4.7	8.9	-	灰 (N6/)	3mm以下	外：ヘラ切り未調整、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯 胎土分析
33	土器溜まり 1	須恵器 杯	14.6	4.3	10.4	-	灰白 (2.5Y7/1)	2mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	ほぼ完形 転用硯 (墨痕あり)
34	土器溜まり 1	須恵器 杯	15.5	4.5	10.4	-	灰白 (N7/)	2mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	ほぼ完形 転用硯 胎土分析
35	土器溜まり 1	須恵器 杯	15.0	(4.7)	9.8	-	灰 (N6/)	2mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	転用硯 胎土分析
36	土器溜まり 1	須恵器 杯	15.6	5.5	8.5	-	灰 (N5/)	4mm以下多	外：ヘラ切り未調整、ヨコナデ 内：ヨコナデ	胎土分析
37	土器溜まり 1	須恵器 杯	18.8	5.3	13.4	-	灰 (N6/)	4mm以下多	外・内：ヨコナデ	胎土分析
38	土器溜まり 1	須恵器 杯	17.5	4.5	-	-	灰白 (N7/)	2mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯？ 胎土分析
39	土器溜まり 1	須恵器 皿	18.8	3.0	-	-	灰白 (5Y7/1)	2mm以下少	外：ヘラ切り後ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	転用硯？
40	土器溜まり 1	須恵器 椀	12.8	(5.5)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	2mm以下少 黒色粒	外・内：ヨコナデ	
41	土器溜まり 1	須恵器 高杯	9.7	(3.0)	-	-	灰白 (2.5Y7/1)	2.5mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
42	土器溜まり 1	須恵器 高杯	10.4	5.2	5.1	-	灰 (5Y6/1)	3.5mm以下多	外・内：ヨコナデ	胎土分析
43	土器溜まり 1	須恵器 高杯	9.4	6.0	6.0	-	灰 (N6/)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	
44	土器溜まり 1	須恵器 高杯	14.8	(7.0)	-	-	灰白 (2.5Y8/2)	2mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	焼成不良
45	土器溜まり 1	須恵器 高杯	14.6	10.1	9.0	-	灰 (N5/)	3mm以下少	外・内：ヨコナデか	ほぼ完形 焼成不良 胎土分析
46	土器溜まり 1	須恵器 高杯	17.2	7.0	10.1	-	灰 (N4/1)	5mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	焼成不良
47	土器溜まり 1	須恵器 高杯	-	(2.6)	-	-	灰白 (2.5Y8/1)	2mm以下多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	胎土分析
48	土器溜まり 1	須恵器 高杯	-	(7.8)	10.5	-	灰 (N6/)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ 脚部：凹線、透かし孔2方向	胎土分析
49	土器溜まり 1	須恵器 高杯	-	(7.3)	9.7	-	灰 (N4/)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	焼成不良 胎土分析
50	土器溜まり 1	須恵器 高杯	-	(9.2)	10.8	-	灰 (N4/)	2mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ 脚部：透かし孔3方向	焼成不良
51	土器溜まり 1	須恵器 長頸壺	-	(18.2)	-	16.5	灰 (N6/)	4mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 沈線、列点文	胎土分析
52	土器溜まり 1	須恵器 長頸壺	-	(10.0)	9.3	15.0	灰 (N6/)	3mm以下	外：ヨコナデ、ヘラケズリ、沈線 列点文2段 内：ヨコナデ	
53	土器溜まり 1	須恵器 壺	-	(2.1)	8.8	-	灰 (N5/)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	
54	土器溜まり 1	須恵器 壺	-	(2.0)	(11.8)	-	灰黄 (2.5Y7/2)	2.5mm以下	外：ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ？ 内：仕上げナデ	転用硯？ 胎土分析
55	土器溜まり 1	須恵器 壺	-	(2.9)	12.3	-	灰白 (N7/)	2mm以下少 黒色粒	外・内：ヨコナデ	胎土分析
56	土器溜まり 1	須恵器 平瓶	5.5	(3.0)	-	-	灰 (N6/)	1.5mm以下少	外：ヨコナデ、沈線1条 内：ヨコナデ	
57	土器溜まり 1	須恵器 平瓶	8.9	(3.4)	-	-	灰白 (7.5Y7/1)	3.5mm以下多 黒色粒多	外：ヨコナデ、沈線(螺旋状) 内：ヨコナデ	
58	土器溜まり 1	須恵器 横瓶	-	(13.1)	-	-	灰 (N6/)	3mm以下	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円当て具痕	
59	土器溜まり 1	須恵器 円面硯	-	(8.3)	(20.9)	-	灰白 (N7/)	1mm以下少	外：ヨコナデ、沈線 内：ナデ 透かし孔推定26個	胎土分析
60	土器溜まり 1	須恵器 円面硯	-	(8.2)	(22.0)	-	灰 (N6/)	1mm以下	外・内：ヨコナデ 透かし孔推定24個	胎土分析
61	土器溜まり 1	須恵器 円面硯	-	(3.2)	-	-	灰 (N6/)	1mm以下 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	胎土分析
62	土器溜まり 1	須恵器 甕	19.8	(48.7)	-	45.4	灰 (N6/)	5mm以下	外：ヨコナデ、平行タタキ後カキ目 内：ヨコナデ、同心円当て具痕	胎土分析

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
63	土器溜まり 1	須恵器 甕	21.4	(22.3)	-	41.0	灰 (5Y6/1)	5.5mm以下少	外：カキ目、平行タタキ後カキ目 内：ヨコナデ、同心円当て具痕	胎土分析
64	土器溜まり 1	須恵器 甕	(24.8)	(29.7)	-	42.9	灰 (5Y6/1)	2.5mm以下 黒色粒	外：ヨコナデ、格子ふうタタキ後カ キ目 内：ヨコナデ、同心円当て具痕	胎土分析
65	土器溜まり 1	土師器 椀	11.8	4.6	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1.5mm以下少 赤色粒	外：ナデ、ユビオサエ	
66	土器溜まり 1	土師器 杯	11.7	3.0	-	-	橙 (5YR6/6)	0.5mm以下少	外：ヘラミガキ 内：放射状暗文2段	畿内産土師器 胎土分析
67	土器溜まり 1	土師器 甕	13.9	(5.5)	-	-	明赤褐 (2.5YR5/6)	3mm以下 雲母少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ、ケズリ?	
68	土器溜まり 1	土師器 甕	(25.0)	(5.0)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ハケ	
69	土器溜まり 1	土師器 甕	(25.0)	(3.5)	-	-	明赤褐 (2.5YR5/6)	1.5mm以下 角閃石少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ	
70	土器溜まり 1	土師器 甕	(30.3)	(8.6)	-	-	橙 (2.5YR6/6)	1.5mm以下	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ	
71	土器溜まり 1	土師器 甕	(25.8)	(6.6)	-	-	明赤褐 (5Y5/6)	1mm以下	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ、ハケ	
72	土器溜まり 1	土師器 甕	(25.6)	(5.5)	-	-	橙 (2.5YR6/8)	1.5mm以下少	外・内：ヨコナデ、ハケ、ユビオサ エ	
73	土器溜まり 1	土師器 甕	(27.0)	(5.5)	-	-	にぶい赤褐 (5YR5/4)	2mm以下多 雲母多、角閃 石少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ	
74	土器溜まり 1	土師器 甕	23.6	(15.0)	-	28.5	にぶい黄橙 (10YR7/3)	4mm以下 角閃石少、雲 母少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ	把手あり
75	土器溜まり 1	土師器 甕	(30.8)	(13.5)	-	(34.0)	明赤褐 (5YR5/6)	1.5mm以下少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ後ユビオ サエ	把手あり
76	土器溜まり 1	土師器 甕	-	(11.6)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1.5mm以下多	外：ハケ 内：ハケ、ユビオサエ後ナデ	把手あり
77	土器溜まり 1	土師器 把手	-	(7.9)	-	-	にぶい黄褐 (10YR5/3)	1mm以下多 赤色粒少	外：ハケ、ユビオサエ 内：ハケ、ユビオサエ	
78	土器溜まり 1	土師器 把手	-	(4.0)	-	-	にぶい黄橙 (10YR5/3)	1.5mm以下多	外：ハケ、ナデ、ユビオサエ 内：ユビオサエ、ナデ	
79	土器溜まり 2	須恵器 甕	22.5	(22.6)	-	45.2	灰 (N5/)	2mm以下多	外：ヨコナデ、平行タタキ後カキ目 内：ヨコナデ	胎土分析
80	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.2)	-	-	灰 (7.5Y6/1)	2.5mm以下	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	胎土分析
81	I-1区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(2.2)	-	-	黄灰 (2.5Y5/1)	2.5mm以下 黒色粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	転用硯 (墨痕あり)
82	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	10.9	(1.8)	-	-	灰 (N6/)	1mm以下	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	胎土分析
83	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	11.0	2.1	-	-	灰 (N6/)	1.5mm以下多 黒色粒多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	ほぼ完形 胎土分析
84	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	11.0	(1.9)	-	12.8	灰 (N5/)	2mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	胎土分析
85	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.9)	-	-	灰白 (5Y7/1)	1.5mm以下少 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
86	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.7)	-	-	浅黄 (2.5Y7/3)	1.5mm以下多 角閃石、雲母 少	外・内：ヨコナデ	焼成不良
87	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	14.9	(2.9)	-	-	褐灰 (7.5YR4/1)	2.5mm以下	外・内：ヨコナデ	胎土分析
88	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	16.0	(2.7)	-	-	灰 (N6/)	1mm以下	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ?	転用硯 胎土分析
89	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	(16.0)	(1.5)	-	(18.2)	灰 (N5/)	1mm以下 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	焼成不良 胎土分析
90	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰白 (N7/)	1.5mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	胎土分析
91	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	16.8	(1.3)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	2mm以下多 黒色粒多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
92	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	(17.8)	(2.1)	-	-	灰白 (5Y6/1)	2mm以下	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	転用硯 胎土分析
93	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	(20.7)	(1.9)	-	-	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下 黒色粒	外・内：ヨコナデ	

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
94	I-2区 包含層	須恵器 杯蓋	(20.0)	(2.1)	-	-	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	
95	I-1区 包含層	須恵器 杯	10.0	3.2	6.4	-	灰黄褐 (10YR6/2)	1.5mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラ切り未調整 内：ヨコナデ	
96	I-2区 包含層	須恵器 杯	11.4	3.9	5.2	-	灰 (N5/)	1.5mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラ切り未調整 内：ヨコナデ	胎土分析
97	I-1区 包含層	須恵器 杯	12.0	3.5	-	-	灰白 (N7/)	2.5mm以下少 黒色粒少	外：ヨコナデ、ヘラ切り未調整 内：ヨコナデ	
98	I-2区 包含層	須恵器 杯	12.4	(3.2)	-	-	灰 (N5/)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
99	I-2区 包含層	須恵器 杯	13.8	(3.7)	-	-	灰 (N6/)	2mm以下少 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	焼成不良
100	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(2.1)	-	-	灰 (N5/)	2.5mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	胎土分析
101	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(1.8)	8.2	-	灰 (N6/)	2mm以下少 黒色粒	外・内：ヨコナデ	焼成不良
102	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(3.3)	9.7	-	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	転用硯？
103	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(1.4)	10.2	-	黄灰 (2.5Y7/1)	2mm以下	外：ヨコナデ、ヘラ切り未調整 内：ヨコナデ	
104	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(1.9)	10.0	-	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
105	I-2区 包含層	土師器 杯	-	(1.8)	(9.9)	-	橙 (5YR6/6)	1.5mm以下少	外・内：ヨコナデ、仕上げナデ	胎土分析
106	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(1.4)	10.8	-	浅黄 (2.5Y7/4)	1mm以下多 角閃石	外・内：ヨコナデ、仕上げナデ	焼成不良
107	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(1.3)	11.4	-	灰 (N6/)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	
108	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(1.4)	(11.4)	-	灰 (N5/)	2.5mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
109	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(3.1)	(10.8)	-	灰 (7.5Y6/1)	1.5mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
110	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(2.3)	(11.3)	-	灰 (N4/)	2mm以下	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	胎土分析
111	I-2区 包含層	須恵器 杯	-	(1.4)	12.2	-	灰 (7.5Y5/1)	2mm以下少	外・内：ヨコナデ	
112	I-2区 包含層	須恵器 杯	(16.3)	(5.3)	-	-	灰白 (2.5Y8/2)	1.5mm以下	外・内：ヨコナデ	胎土分析
113	I-1区 包含層	須恵器 壺	-	(4.6)	9.2	-	灰 (5Y6/1)	1.5mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
114	I-2区 包含層	須恵器 高杯	-	(3.5)	-	-	灰白 (2.5Y8/2)	1.5mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ 脚部：透かし孔2方向	
115	I-2区 包含層	須恵器 高杯	-	(1.9)	(8.3)	-	灰白 (10YR8/2)	2mm以下少	外・内：ヨコナデ	
116	I-1区 包含層	須恵器 甕	(25.0)	(3.8)	-	-	灰白 (10YR7/1)	2.5mm以下少 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
117	I-1区 包含層	須恵器 横瓶	-	(4.3)	-	-	灰 (7.5Y5/1)	2mm以下少	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円当て具	
118	I-1区 包含層	須恵器 甕	-	(4.3)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下少	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円当て具、ヨコナデ	
119	I-2区 包含層	須恵器 甕	18.2	(23.9)	-	(32.9)	灰 (N4/)	3.5mm以下 黒色粒多	外：ヨコナデ、平行タタキ後カキ目 内：ヨコナデ、同心円当て具痕	胎土分析
120	I-2区 包含層	須恵器 短頸壺	(18.0)	(3.3)	-	-	灰 (N5/)	2.5mm以下少	外：ヨコナデ、カキ目 内：ヨコナデ	
121	I-2区 包含層	須恵器 短頸壺	(18.8)	(3.7)	-	-	灰 (7.5Y6/1)	2.5mm以下	外：ヨコナデ、カキ目 内：ヨコナデ	
122	I-1区 包含層	須恵器 甕	-	(4.5)	-	-	灰 (N6/)	3mm以下 黒色粒少	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円当て具痕	
123	I-2区 包含層	土師器 椀	(10.9)	(4.7)	-	(11.9)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	2.5mm以下 雲母	外・内：ユビオサエ、ナデ	
124	I-2区 包含層	製塩土器	(17.3)	(8.5)	-	(19.0)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下多	外・内：ユビオサエ、ナデ	
125	I-2区 包含層	土師器 甗	(19.4)	(7.6)	-	(20.8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2.5mm以下多 雲母少	外・内：ハケ、ユビオサエ	
126	I-2区 包含層	土師器 鍋	(42.0)	(12.3)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	5mm以下多 雲母少、赤色 粒少	外・内：ハケ、ユビオサエ	

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
127	I-2区 包含層	土師器 甕	22.5	(6.0)	-	-	にぶい赤褐 (5YR5/4)	1mm以下	外：ヨコナデ、ハケ 内：ハケ、ナデ	
128	I-2区 包含層	土師器 甕	(24.8)	(5.5)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下多 雲母多	外・内：ヨコナデ、ナデ	
129	I-2区 包含層	土師器 把手	-	(3.5)	-	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下多	外：ユビオサエ、ナデ 内：ハケ?	
130	礎石建物2	須恵器 横瓶	13.0	(5.8)	-	-	灰 (N6/)	1mm以下多 黒色粒少	外：平行タタキ後カキ目 内：同心円当て具痕	
131	礎石建物2	土師器 甕	15.6	(8.1)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下多 角閃石少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ナデ?、工具痕	外面煤付着
132	礎石建物 5 関連	須恵器 壺	(14.2)	(2.5)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
133	礎石建物 5 関連	土師器 椀	(11.2)	3.9	(6.8)	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2.5mm以下少 黒色粒、赤色 粒多	外・内：ヨコナデ	
134	礎石建物 5 関連	土師器 椀	15.4	5.6	8.5	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	5mm以下多 赤色粒多	外：ナデ	
135	礎石建物 5 関連	土師器 椀	-	(1.6)	3.8	-	にぶい橙 (7.5YR5/4)	1mm以下多 赤色粒少	調整不明瞭	
136	礎石建物 5 関連	土師器 椀	-	(2.1)	5.6	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下多 角閃石、赤色 粒多	内：ユビオサエ、ナデ	
137	礎石建物 5 関連	土師器 椀	-	(2.3)	6.1	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下多 角閃石、赤色 粒多	外・内：ヨコナデ	
138	礎石建物 5 関連	黒色土器 椀	-	(2.7)	8.8	-	明赤褐 (5YR5/8)	2mm以下少	外・内：ヨコナデ	内面黒色
139	礎石建物 5 関連	土師器 椀	-	(1.3)	10.0	-	黄灰 (2.5Y5/1)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ、ナデ	
140	礎石建物 5 関連	手捏土器	8.4	(3.0)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ、ナデ	内面煤付着
141	礎石建物 5 関連	土師器 杯	(11.2)	2.9	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
142	礎石建物 5 関連	土師器 杯	11.7	2.5	8.4	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下多 黒色粒少、赤 色粒	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
143	礎石建物 5 関連	土師器 杯	(13.2)	(2.6)	-	-	にぶい赤褐 (5YR5/4)	1mm以下多 角閃石、赤色 粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
144	礎石建物 5 関連	土師器 杯	14.4	3.0	-	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
145	礎石建物 6	須恵器 短頸壺	8.6	8.5	11.0	13.8	灰 (7.5Y6/1)	1mm以下多 黒色粒多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	ほぼ完形 県報告203-56 と同一
146	礎石建物 6	須恵器 杯蓋	(18.8)	(2.5)	-	-	灰 (N6/)	2mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯 (墨痕あり)
147	礎石建物 7	土師器 椀	10.0	5.4	-	-	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下少 角閃石、赤色 粒少、胎土精 良	外・内：ナデ、ユビオサエ	内外面丹塗り
148	掘立柱 建物1	須恵器 杯蓋	12.4	2.6	-	-	灰 (N4/)	2mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	転用硯
149	掘立柱 建物1	須恵器 杯蓋	14.6	(1.9)	-	-	灰白 (5Y6/1)	1mm以下 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
150	掘立柱 建物1	須恵器 杯蓋	(19.4)	3.9	-	-	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	焼成不良
151	掘立柱 建物1	須恵器 杯	-	(1.4)	11.8	-	浅黄橙 (10YR8/3)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	焼成不良
152	掘立柱 建物1	須恵器 壺	-	(4.6)	-	-	灰白 (10Y7/1)	1mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
153	掘立柱 建物1	須恵器 杯蓋	-	(1.0)	-	-	灰白 (5Y7/1)	1mm以下多 黒色粒少、赤 色粒少	外：ヘラケズリ? 内：ヨコナデ	転用硯
154	掘立柱 建物1	土師器 皿	7.6	1.9	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧	

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
155	掘立柱 建物 1	土師器 杯	9.6	2.3	6.2	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下多 赤色粒	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
156	掘立柱 建物 1	土師器 杯	(9.8)	2.3	7.8	-	にぶい赤褐 (5YR5/4)	1mm以下少 黒色粒少、赤 色粒	外・内：ヨコナデ、ナデ	
157	掘立柱 建物 1	土師器 杯	(12.7)	2.3	10.5	-	にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下多 角閃石、赤色 粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧？	
158	掘立柱 建物 1	手捏土器	8.6	5.0	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下多	外・内：ナデ、ユビオサエ	内面煤付着 完形
159	掘立柱 建物 1	土師器 台付鉢？	-	(2.3)	2.9	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下多 赤色粒多	外・内：ヨコナデ	内外面丹塗り 穿孔
160	掘立柱 建物 1	平瓦	残存長 (11.5)	残存幅 (16.6)	厚さ 2.3	-	浅黄橙 (10YR8/3)	3mm以下多 赤色粒	凹面：布目 凸面：縄タタキ目	
161	土坑 33	土師器 椀	-	(4.4)	7.1	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下多 赤色粒少	外・内：ヨコナデ、ナデ	
162	土坑 33	土師器 杯	(11.8)	2.2	(6.8)	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下 黒色粒、赤色 粒少	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り	
163	土坑 33	土師器 杯	12.4	2.3	8.4	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1.5mm以下多 赤色粒多	調整不明瞭	煤痕跡
164	土坑 34	土師器 椀	13.5	3.7	6.4	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	
165	土坑 38	土師器 杯	-	(1.5)	7.0	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下 胎土精良	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り	
166	土坑 38	土師器 椀	7.7	3.0	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下多 赤色粒	外・内：ナデ	
167	Ⅱ-2区 包含層	須恵器 杯蓋	17.6	(2.1)	-	-	灰 (5Y7/1)	2.5mm以下 黒色粒	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	
168	Ⅱ-2区 包含層	須恵器 杯蓋	16.6	2.7	-	-	灰 (N5/)	2.5mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	焼成不良
169	Ⅱ-2区 包含層	須恵器 杯蓋	15.2	(1.9)	-	-	灰白 (10Y7/1)	2mm以下多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	
170	Ⅱ-2区 包含層	須恵器 高杯	-	(4.0)	-	-	灰白 (2.5Y8/2)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	
171	Ⅱ-9区 包含層	土師器 椀	-	(1.1)	(5.5)	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ、ナデ	早島式土器
172	Ⅱ-2区 包含層	土師器 椀	-	(2.1)	(6.0)	-	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下 赤色粒、胎土 精良	調整不明瞭	
173	Ⅱ-2区 包含層	土師器 椀	-	(1.6)	6.5	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下多 赤色粒多	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ	
174	Ⅱ-9区 包含層	黒色土器 椀	-	(1.5)	8.3	-	明赤褐 (5YR5/6)	1mm以下多	外：ヨコナデ、ナデ 内：ナデ	内面黒色
175	Ⅱ-2区 包含層	黒色土器 椀	-	(1.8)	10.0	-	明黄褐 (10YR7/6)	1mm以下多 赤色粒	外・内：ナデ	内面黒色
176	Ⅱ-2区 包含層	土師器 椀	-	(4.6)	9.0	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下 赤色粒、胎土 精良	調整不明瞭	
177	Ⅱ-2区 包含層	土師器 皿	(8.0)	2.1	(5.9)	-	明黄褐 (10YR7/6)	2mm以下少 赤色粒	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧？	
178	Ⅱ-7区 包含層	土師器 皿	(7.9)	1.9	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下多	外・内：ヨコナデ、ユビオサエ	
179	Ⅱ-2区 包含層	土師器 皿	9.9	2.2	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下多	外・内：ナデ、ユビオサエ	
180	Ⅱ-2区 包含層	土師器 杯	(13.2)	(3.2)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下少 角閃石、赤色 粒	外・内：ヨコナデ	口縁煤付着
181	Ⅱ-2区 包含層	土師器 杯	(11.2)	2.5	(8.0)	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下多 赤色粒多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧？	
182	Ⅱ-2区 包含層	土師器 杯	12.0	3.1	9.3	-	橙 (7.5YR7/6)	2mm以下多 赤色粒	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
183	Ⅱ-2区 包含層	土師器 杯	(13.6)	2.5	-	-	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下多 赤色粒多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧？	
184	Ⅱ-2区 包含層	土師器 杯	(14.1)	(3.2)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2.5mm以下多 赤色粒多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧？	

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
185	Ⅱ-2区 包含層	土師器 甕	(21.4)	(5.4)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下多 赤色粒多	調整不明瞭	
186	Ⅱ-12区 包含層	土師器 甕	25.0	(9.6)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	4mm以下多 赤色粒多	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、工具痕？	
187	Ⅱ-2区 包含層	瓦塔	残存長 (28.0)	残存幅 (26.8)	厚さ 6.9	-	灰白 (2.5Y8/2)	4mm以下多 黒色土粒少	瓦表現、沈線	188・189と同一か
188	Ⅱ-2区 包含層	瓦塔	残存長 (5.7)	残存幅 (5.3)	-	-	灰白 (10YR8/2)	4mm以下多	沈線による格子目	187と同一か H11年度T123
189	Ⅱ-2区 包含層	瓦塔	残存長 (8.0)	残存幅 (6.4)	-	-	灰白 (10YR8/2)	4mm以下	沈線による格子目	187と同一か H11年度T123
190	Ⅱ-2区 包含層	瓦塔	残存長 (8.1)	残存幅 (5.7)	厚さ 4.0	-	灰白 (5Y7/1)	2.5mm以下多	外：ナデ 内：布目	
191	Ⅱ-2区 包含層	丸瓦	残存長 (15.5)	残存幅 (11.0)	厚さ 1.0	-	灰白 (5Y7/1)	2mm以下多	凹面：布目 凸面：ナデ、ケズリ	
192	Ⅱ-1区 包含層	丸瓦	残存長 (10.9)	残存幅 (6.0)	厚さ 1.7	-	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下多	凹面：布目、イトキリの痕跡？ 凸面：ナデ	
193	Ⅱ-2区 包含層	丸瓦	残存長 (13.3)	残存幅 (9.3)	厚さ 1.9	-	灰 (N6/)	2mm以下多 黒色粒	凹面：布目 凸面：ナデ	
194	Ⅱ-8区 包含層	丸瓦	残存長 (13.8)	残存幅 (6.8)	厚さ 1.4	-	黄灰 (2.5Y5/1)	3mm以下多	凹面：布目 凸面：ナデ	
195	Ⅱ-2区 包含層	丸瓦	残存長 (10.3)	残存幅 (5.7)	厚さ 1.1	-	淡黄 (2.5Y8/3)	4mm以下多	凹面：布目、ナデ	
196	Ⅱ-2区 包含層	丸瓦	残存長 (10.5)	残存幅 (12.2)	厚さ 1.9	-	灰 (5Y6/1)	3mm以下多	凹面：布目 凸面：工具による調整	
197	Ⅱ-2区 包含層	丸瓦	残存長 (17.0)	残存幅 (7.3)	厚さ 1.7	-	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下多 赤色粒	凹面：布目 凸面：ナデか	
198	Ⅱ-2区 包含層	丸瓦	残存長 (6.3)	残存幅 (5.2)	厚さ 2.2	-	灰 (7.5Y6/1)	3mm以下多	凹面：布目 凸面：タタキ目	
199	Ⅱ-2区 包含層	丸瓦	残存長 (7.6)	残存幅 (4.8)	厚さ 1.7	-	灰 (N6/)	2mm以下多	凹面：布目 凸面：タタキ目	
200	Ⅱ-2区 包含層	平瓦	残存長 (12.8)	残存幅 (11.5)	厚さ 2.5	-	灰黄 (2.5Y7/2)	3mm以下多	凹面：布目 凸面：縄タタキ目	
201	Ⅱ-2区 包含層	平瓦	残存長 (14.4)	残存幅 (12.3)	厚さ 2.1	-	灰白 (5Y7/2)	3mm以下多 黒色粒多	凹面：布目 凸面：縄タタキ目	
202	Ⅱ-6区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(2.0)	-	-	灰 (N5/)	1mm以下 黒色粒少	外：ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
203	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯蓋	16.3	(1.7)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下多 赤色粒少	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	焼成不良
204	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯蓋	(17.6)	2.2	-	-	灰 (7.5Y5/1)	2mm以下少	外：ヘラ切り後ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯 (墨痕あり)
205	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.9)	-	-	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
206	Ⅱ-12区 包含層	須恵器 杯蓋	(11.2)	(0.8)	-	(13.4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下 角閃石	外・内：ヨコナデ	
207	Ⅱ-5区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.1)	-	-	灰白 (7.5Y7/1)	1mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	転用硯 (墨痕あり)
208	Ⅱ-5区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.4)	-	-	灰黄褐 (10YR5/2)	1mm以下 黒色粒多	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	転用硯 (墨痕あり)
209	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯	15.0	4.3	11.0	-	黄灰 (2.5Y6/1)	1.5mm以下多	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ	
210	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯	16.0	4.6	11.6	-	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下少	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、仕上げナデ	
211	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯	12.1	3.6	-	-	灰 (N6/)	3mm以下	外：ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ 内：ヨコナデ	
212	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯	12.6	4.6	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1.5mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ 内：ヨコナデ	焼成不良
213	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯	12.5	5.2	-	-	灰 (5Y4/1)	2mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラ切り 内：ヨコナデ	焼成不良
214	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯	14.3	4.0	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	2mm以下	外：ヨコナデ、ヘラ切り 内：ヨコナデ	
215	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 杯	17.0	3.5	-	-	灰白 (2.5Y8/1)	2mm以下 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
216	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 水瓶	4.8	(23.9)	7.0	12.0	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下多 黒色粒多	外：ヨコナデ 内：絞り、ヨコナデ	
217	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 壺	-	(11.8)	-	10.4	灰 (N4/)	3mm以下少	外・内：ヨコナデ	
218	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 壺	-	(7.1)	-	22.1	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下少 赤色粒少	外・内：ヨコナデ	

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
219	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 平瓶	10.0	(5.4)	-	-	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
220	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 壺	-	(3.0)	10.8	-	灰 (5Y5/1)	2mm以下少	外・内：ヨコナデ	
221	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 壺	-	(3.2)	9.8	-	灰 (5Y6/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
222	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 高杯	-	(1.9)	(11.8)	-	暗灰 (N3/)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
223	Ⅱ-5区 包含層	須恵器 壺	(15.9)	(3.5)	-	-	灰白 (5Y7/1)	1mm以下 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
224	Ⅱ-4区 包含層	須恵器 甕	-	(6.2)	15.2	-	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下少 赤色粒	外：平行タタキ、ナデ 内：ナデ	
225	Ⅱ-5区 包含層	土師器 椀	(19.0)	4.5	(7.4)	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下 赤色粒多	外・内：ヨコナデか	
226	Ⅱ-5区 包含層	土師器 椀	(16.0)	4.8	(7.6)	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下少 黒色粒、 赤色粒多	外・内：ヨコナデ	
227	Ⅱ-5区 包含層	土師器 椀	-	(2.6)	7.4	-	にぶい橙 (7.5YR5/4)	1mm以下多 赤色粒多	外・内：ヨコナデ	
228	Ⅱ-5区 包含層	土師器 椀	-	(3.0)	7.6	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下多 赤色粒少	外・内：ヨコナデ、ナデ	
229	Ⅱ-4区 包含層	土師器 椀	-	(1.9)	7.9	-	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下少 赤色粒	外・内：ヨコナデ、ナデ	
230	Ⅱ-4区 包含層	土師器 椀	-	(1.7)	7.2	-	にぶい黄橙 (10YR5/4)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
231	Ⅱ-4区 包含層	黒色土器 椀	-	(3.8)	9.1	-	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下少	外：ヨコナデ 内：ヘラミガキ	内面黒色
232	Ⅱ-4区 包含層	土師器 椀	-	(4.0)	10.2	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下 赤色粒多	外：ヨコナデ、ナデ	
233	Ⅱ-4区 包含層	土師器 椀	-	(2.5)	(8.2)	-	橙 (5YR6/6)	1mm以下	外・内：ヨコナデ	
234	Ⅱ-4区 包含層	土師器 椀	-	(1.8)	9.9	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下 角閃石	外・内：ヨコナデ	
235	Ⅱ-5区 包含層	黒色土器 椀	-	(1.8)	6.2	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下多 黒色粒、赤色 粒	内：ナデか	内面黒色
236	Ⅱ-5区 包含層	土師器 椀	-	(2.9)	5.5	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下少 黒色粒、赤色 粒		早島式土器
237	Ⅱ-4区 包含層	手捏土器	7.3	2.7	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下多	外・内：ナデ、ユビオサエ	わずかに煤付 着、ほぼ完形
238	Ⅱ-4区 包含層	手捏土器	8.6	(3.0)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下多	外・内：ナデ、ユビオサエ	
239	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	8.3	(2.6)	-	-	明赤褐 (5YR5/6)	1mm以下多 角閃石	外・内：ナデ、ユビオサエ	内面煤付着
240	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	9.0	(2.6)	-	-	明赤褐 (5YR5/6)	1mm以下多	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ	内面煤付着
241	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	8.6	2.3	7.0	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下多	外：ヨコナデ、ヘラ切り 内：ヨコナデ、ナデ	
242	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	(10.0)	1.9	(8.1)	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下多 黒色粒少	外・内：ヨコナデ、ナデ	
243	Ⅱ-5区 包含層	土師器 杯	9.8	2.8	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下 赤色粒少	外・内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
244	Ⅱ-5区 包含層	土師器 杯	9.8	2.4	-	-	橙 (5YR6/6)	1mm以下 赤色粒	外・内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
245	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	10.4	3.6	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下 角閃石	外・内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	内面煤付着
246	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	10.9	3.3	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下多 角閃石、雲母	外・内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	ほぼ完形
247	Ⅱ-5区 包含層	土師器 杯	-	(1.6)	-	-	明褐 (7.5YR5/6)	1mm以下少 赤色粒多、胎 土精良	底部：ヘラ切り後押圧	
248	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	11.9	(2.8)	-	-	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
249	Ⅱ-5区 包含層	土師器 杯	-	(1.4)	7.8	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下多 角閃石、黒色 粒多、赤色粒 多	外：ヘラ切り後押圧 内：ナデ	内面煤付着

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
250	Ⅱ-5区 包含層	土師器 杯	-	(2.2)	7.6	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下多 赤色粒多	底部：ヘラ切り	
251	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	12.8	3.1	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下少 赤色粒少	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ 底部：押圧	
252	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	12.4	3.0	-	-	にぶい黄橙 (10YR5/4)	1mm以下少 赤色粒少	外・内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
253	Ⅱ-4区 包含層	土師器 杯	12.4	3.1	8.6	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下少 赤色粒多	外・内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	内面煤付着
254	Ⅱ-5区 包含層	土師器 杯	(14.8)	2.4	(10.4)	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm前後 角閃石、赤色 粒多	外・内：ヨコナデ、ナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
255	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	12.8	1.7	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下多 黒色粒少、赤 色粒少	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ 底部：押圧	
256	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	13.4	1.4	-	-	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下少 赤色粒多	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り	
257	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	(13.9)	1.3	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下少 胎土精良	外・内：ヨコナデ、ナデ	煤付着 内面丹塗り
258	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	13.6	1.4	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下少 赤色粒	外：ヘラミガキ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	外面丹塗り
259	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	(16.4)	1.4	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下少 赤色粒少	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	内外面丹塗り
260	Ⅱ-4区 包含層	土師器 皿	18.0	1.3	-	-	橙 (5YR6/6)	1mm以下少 赤色粒少、胎 土精良	外・内：ナデか 底部：ヘラケズリ	内外面丹塗り
261	Ⅱ-4区 包含層	土師器 甕	23.0	(5.8)	-	-	明褐 (7.5YR5/6)	2mm以下多	外：ヨコナデ、ハケ 内：ナデ、ハケ	
262	Ⅱ-4区 包含層	土師器 甕	(25.8)	(5.2)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下多 赤色粒少	外・内：ヨコナデ、ハケ	
263	Ⅱ-4区 包含層	土師器 甕	(30.2)	(6.7)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	2mm以下多 角閃石	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ナデ	
264	Ⅱ-4区 包含層	土師器 甕	(19.4)	(5.4)	-	-	にぶい橙 (7.5YR7/4)	3mm以下多 雲母、赤色粒 多	外・内：ヨコナデ、ハケ	
265	Ⅱ-4区 包含層	土師器 甕	29.2	(22.1)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下多	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ナデ、ハケ	
266	Ⅱ-4区 包含層	土師器 把手	-	(2.7)	-	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1.5mm以下多	外・内：ナデ	
267	Ⅱ-4区 包含層	土師器 把手	-	(4.7)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1.5mm以下多	外・内：ハケ、ナデ、ユビオサエ	
268	Ⅱ-5区 包含層	瓦塔	残存長 (12.2)	残存幅 (11.1)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	3mm以下多 黒色粒少	瓦表現	県報告203-60 と同一か
269	Ⅱ-5区 包含層	瓦塔	残存長 (9.4)	残存幅 (9.3)	-	-	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下多	工具による調整	
270	Ⅱ-5区 包含層	瓦塔	残存長 (6.6)	残存幅 (5.1)	-	-	灰白 (10YR8/2)	3mm以下多	沈線	
271	Ⅱ-3区 包含層	丸瓦	残存長 (9.1)	残存幅 (6.9)	厚さ 1.7	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下	凹面：布目 凸面：ナデ	
272	Ⅱ-5区 包含層	平瓦	残存長 (10.1)	残存幅 (12.5)	厚さ 2.5	-	灰白 (2.5Y7/1)	1.5mm以下 黒色粒多、赤 色粒少	凹面：布目 凸面：縄タタキ目	
273	Ⅱ-3区 包含層	平瓦	残存長 (11.4)	残存幅 (7.1)	厚さ 2.1	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下多 赤色粒	凹面：布目 凸面：縄タタキ目	
274	Ⅱ-5区 包含層	平瓦	残存長 (8.7)	残存幅 (11.0)	厚さ 2.1	-	灰黄 (2.5Y7/2)	3mm以下多 赤色粒少	凹面：布目 凸面：縄タタキ目	
275	Ⅱ-5区 包含層	平瓦	残存長 (17.0)	残存幅 (14.7)	厚さ 2.6	-	灰白 (2.5Y8/2)	3mm以下多	凹面：布目 凸面：縄タタキ目	
276	土坑40	須恵器 杯蓋	12.4	2.4	-	13.5	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	県報告203-89 と同一 278と同一？ 胎土分析
277	Ⅲ-1区 包含層	須恵器 杯蓋	12.1	(2.4)	-	14.2	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	県報告203-98 と同一 胎土分析
278	Ⅲ-1区 包含層	須恵器 杯蓋	12.0	(1.4)	-	13.8	黄灰 (2.5Y6/1)	2mm以下少 黒色粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	県報告203-97 と同一 276と同一？
279	Ⅲ-1区 包含層	須恵器 横瓶	10.4	(10.2)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	4mm以下多 黒色粒多	外：ヨコナデ、格子目タタキ後ナデ 内：同心円当て具痕	280～282と 同一？

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
280	Ⅲ-1区 包含層	須恵器 横瓶	-	(9.5)	-	-	灰黄褐 (10YR6/2)	3mm以下 黒色粒少	外：ヨコナデ、格子目タタキ後ナデ 内：同心円当て具痕	279、281、282 と同一？
281	Ⅲ-1区 包含層	須恵器 横瓶	-	(7.4)	-	-	灰黄褐 (10YR6/2)	3mm以下 黒色粒少	外：ヨコナデ、格子目タタキ後ナデ 内：同心円当て具痕	279、280、282 と同一？
282	Ⅲ-1区 包含層	須恵器 横瓶	-	(6.8)	-	-	灰黄褐 (10YR6/2)	3mm以下 黒色粒少	外：ヨコナデ、格子目タタキ後ナデ 内：同心円当て具痕	279～281と 同一？
283	Ⅲ-1区 包含層	土師器 杯	-	(4.8)	-	-	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下多 赤色粒多	外・内：ヨコナデ、ユビオサエ	
284	土坑 41	土師器 甕	(25.5)	(14.8)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下多 雲母、赤色粒 少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ、工具による調 整	
285	土坑 41	土師器 甕	18.6	(19.7)	-	20.2	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下多 角閃石	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、工具による調整	
286	土坑 42	土師器 椀	11.5	(3.4)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1.5mm以下少 赤色粒少	外・内：ヨコナデ	
287	土坑 42	土師器 椀	-	(1.4)	6.0	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下少 赤色粒多	外・内：ヨコナデ	早島式土器
288	土坑 42	土師器 椀	-	(1.4)	5.9	-	浅黄橙 (10YR8/3)	1.5mm以下少	調整不明瞭	早島式土器
289	土坑 42	土師器 甕	-	(4.2)	-	-	灰黄褐 (10YR6/2)	3mm以下多	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ？	
290	土坑 42	土師器 甕	-	(5.4)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1.5mm以下多 角閃石、赤色 粒少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ？	
291	Ⅲ-2区 包含層	須恵器 高杯	-	(1.9)	-	-	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下	外・内：ヨコナデ	焼成不良
292	Ⅲ-2区 包含層	須恵器 平瓶	-	(13.1)	-	25.0	灰白 (2.5Y8/2)	3mm以下多 角閃石	外：ヨコナデ後カキメ 内：ヨコナデ 底部：ヘラケズリ	焼成不良
293	Ⅲ-2区 包含層	土師器 甕	-	(3.5)	-	-	にぶい赤褐 (5YR5/4)	1mm以下多 角閃石	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	
294	Ⅲ-2区 包含層	土師器 甕	(27.1)	(8.1)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	4mm以下多 赤色粒少	外：ヨコナデ、ハケ 内：ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ	
295	鍛冶工房	須恵器 杯	(9.7)	(2.5)	-	-	褐灰 (10YR6/1)	1mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
296	鍛冶工房	須恵器 杯	(12.4)	(3.0)	-	-	灰白 (N7/)	1mm以下	外・内：ヨコナデ	
297	鍛冶工房	須恵器 杯	-	(2.0)	-	-	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下多	外・内：ヨコナデ	
298	鍛冶工房	須恵器 杯	-	(2.1)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下多	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り未調整	
299	鍛冶工房	須恵器 杯	-	(1.6)	-	-	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	
300	鍛冶工房	須恵器 高杯	-	(2.3)	-	-	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下多 黒色粒	外・内：ヨコナデ	焼成不良
301	鍛冶工房	須恵器 甕	-	(6.8)	-	-	灰黄 (2.5Y6/2)	2mm以下 黒色粒	外：平行タタキ後ナデ 内：同心円当て具痕	
302	Ⅲ-3区 包含層	土師器 甕	22.8	(7.1)	-	-	にぶい黄褐 (10YR5/3)	3mm以下多 赤色粒	外：ヨコナデ、ハケ 内：ハケ、工具による調整	
303	Ⅳ-1区 包含層	弥生土器 甕	15.5	(30.0)	7.7	23.4	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下多 雲母、赤色粒	外：ヨコナデ、ヘラミガキ、刺突文 内：ヨコナデ、ヘラケズリ	底部穿孔
304	Ⅳ-1区 包含層	弥生土器 甕	(12.6)	(6.7)	-	-	にぶい黄 (2.5Y6/3)	1mm以下多 黒色粒少、赤 色粒少	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	
305	Ⅳ-1区 包含層	須恵器 壺	-	(7.4)	-	(17.6)	灰白 (N7/1)	1mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
306	Ⅳ-1区 包含層	須恵器 壺	-	(9.1)	-	(19.2)	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下少 黒色粒少	外：ヨコナデ、ナデ、波状文 内：ヨコナデ	
307	Ⅳ-1区 包含層	須恵器 壺	-	(11.0)	-	(16.8)	灰 (N5/)	2mm以下多	外・内：ヨコナデ	
308	Ⅳ-2区 包含層	縄文土器	-	(4.5)	-	-	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下多 角閃石	外：条痕？ 刺突文 内：条痕？	
309	Ⅳ-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.6)	-	-	灰 (N6/)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
310	Ⅳ-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.7)	-	-	灰白 (5Y7/1)	1.5mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
311	Ⅳ-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.6)	-	-	灰 (N6/)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
312	Ⅳ-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.1)	-	-	灰白 (5Y7/1)	1mm以下少 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
313	土手状 遺構2	須恵器 杯	-	(1.5)	(8.9)	-	灰白 (10Y7/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
314	Ⅳ-2区 包含層	須恵器 杯	-	(2.3)	(8.5)	-	紫灰 (5P6/1)	2.5mm以下少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
315	土手状 遺構2	須恵器 甕	-	(2.6)	-	-	灰 (N4/)	2.5mm以下少	外：格子目タタキ 内：同心円当て具痕	焼成不良
316	Ⅳ-2区 包含層	土師器 皿	(8.6)	1.7	(5.8)	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下 角閃石、雲母、 赤色粒少	外・内：ヨコナデ 底部：ナデ	
317	Ⅳ-2区 包含層	土師器 椀	(13.8)	(3.4)	-	-	明黄褐 (10YR7/6)	2.5mm以下 角閃石少	外・内：ヨコナデ	内面弱い炭素 吸着あり
318	土坑 54	土師器 杯	11.4	2.9	8.0	-	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下 角閃石、赤色 粒多	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧、板目？	
319	V-1区 包含層	須恵器 甕	-	(8.3)	-	-	灰 (7.5Y4/1)	1mm以下少	外：平行タタキ後ナデ 内：同心円当て具痕	
320	V-1区 包含層	土師器 皿	-	1.9	-	-	明黄褐 (10YR6/6)	1mm以下少 雲母	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデか	
321	V-1区 包含層	土師器 皿	-	2.1	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1.5mm以下	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデか	
322	V-1区 包含層	土師器 皿	8.4	1.7	6.0	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	
323	V-1区 包含層	土師器 皿	(7.4)	2.4	(4.2)	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下 角閃石	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	
324	V-1区 包含層	土師器 杯	10.8	3.0	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	2mm以下多 角閃石、雲母、 赤色粒多	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧	
325	V-1区 包含層	土師器 杯	11.6	3.2	9.2	-	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1.5mm以下少 角閃石、雲母、 赤色粒多	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り後押圧	内面煤付着
326	V-1区 包含層	土師器 椀	10.7	3.4	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	2mm以下 角閃石、赤色 粒	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ハケ 底部：ヘラ切り	
327	V-1区 包含層	土師器 椀	-	(2.6)	7.0	-	にぶい褐 (7.5YR5/4)	2mm以下少 雲母、赤色粒 少、胎土精良	外・内：ヨコナデ、ナデ	
328	V-1区 包含層	土師器 椀	11.7	3.9	6.5	-	にぶい黄橙 (10YR6/3)	2mm以下少 雲母	外・内：ヨコナデ	内面煤付着
329	V-1区 包含層	手捏土器	6.3	(3.6)	-	-	にぶい褐 (7.5YR6/4)	1.5mm以下 角閃石	外・内：ナデ、ユビオサエ	
330	V-1区 包含層	手捏土器	7.5	2.7	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下多 角閃石少	外・内：ナデ、ユビオサエ	
331	V-1区 包含層	手捏土器	-	(3.1)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2.5mm以下多 赤色粒多	外・内：ヨコナデ、ナデ、ユビオサ エ	
332	土坑 57	土師器 椀	-	(3.4)	-	-	暗灰黄 (2.5Y5/2)	1mm以下 赤色粒多	外・内：ヨコナデ	内面弱い炭素 吸着あり
333	V-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(2.2)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下	外・内：ヨコナデ	
334	V-2区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.2)	-	-	灰 (5Y5/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
335	V-4区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰黄 (2.5Y6/2)	1mm以下 黒色粒	外・内：ヨコナデ	
336	V-4区 包含層	須恵器 杯蓋	-	(1.5)	-	-	灰 (5Y5/1)	1mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ	
337	V-2区 包含層	須恵器 杯蓋	13.3	(1.9)	-	-	灰 (5Y6/1)	2mm以下多 黒色粒少	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ	
338	V-2区 包含層	須恵器 蓋	9.8	(1.1)	-	-	灰 (5Y6/1)	1mm以下少 黒色粒	外・内：ヨコナデ	
339	V-2区 包含層	須恵器 杯	11.9	4.1	-	-	灰 (5Y7/1)	2mm以下多 黒色粒多	外・内：ヨコナデ 底部：ヘラ切り未調整	胎土分析
340	V-2区 包含層	須恵器 壺	-	(2.6)	10.2	-	灰 (7.5Y6/1)	1.5mm以下 黒色粒少	外・内：ヨコナデ	
341	V-3区 短頸壺 包含層	須恵器 短頸壺	(6.0)	(2.7)	-	-	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	
342	V-4区 包含層	須恵器 平瓶	8.0	(6.5)	-	-	灰 (7.5Y5/1)	1mm以下	外・内：ヨコナデ	

掲載 番号	出土遺構	種別 器種	計測値(cm)				色 調	胎 土	調 整	備 考
			口径	器高	底径	最大径				
343	V-2区 包含層	須恵器 壺	-	(2.7)	-	-	灰白 (5Y7/1)	1mm以下少	外・内：ヨコナデ	把手あり
344	V-4区 包含層	須恵器 皿	(18.4)	(2.1)	-	-	暗灰黄 (2.5Y5/2)	1mm以下	外・内：ヨコナデ	
345	V-4区 包含層	須恵器 甕	-	(8.0)	-	-	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下多	外：格子目ふうタタキ後ナデ 内：同心円当て具痕	
346	V-4区 包含層	須恵器 壺	16.8	(9.8)	-	-	灰 (5Y6/1)	1mm前後多 黒色粒少	外：ヨコナデ、平行タタキ後カキ目 内：ヨコナデ、同心円当て具痕	
347	V-4区 包含層	須恵器 壺	-	(4.2)	-	-	灰 (5Y5/1)	2mm以下少	外・内：ヨコナデ	
348	V-2区 包含層	須恵器 壺	-	(5.4)	-	(21.4)	灰白 (5Y7/1)	1mm以下少 黒色粒	外・内：ヨコナデ	
349	V-4区 包含層	須恵器 壺	-	(5.2)	-	-	灰 (5Y6/1)	2mm以下	外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	
350	V-2区 包含層	土師器 杯	15.8	(5.8)	-	-	明赤褐 (5YR5/6)	胎土精良	外：ヨコナデ、ヘラミガキ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ	畿内産土師器 胎土分析
351	V-3区 包含層	土師器 椀	-	(2.3)	7.2	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2mm以下多 赤色粒多	調整不明瞭	
352	V-4区 包含層	土師器 椀	-	(1.8)	7.1	-	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下多 赤色粒多	外：ヨコナデ、ナデ	
353	V-2区 包含層	黒色土器 椀	(15.5)	(4.5)	7.2	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下 赤色粒	内：ナデか	内面黒色
354	V-2区 包含層	土師器 杯	(13.0)	(2.5)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下多	外・内：ヨコナデ、ナデ	
355	V-2区 包含層	土師器 甕	-	(6.4)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下多 黒色粒、赤色 粒	外：ハケメ後ナデ 内：ナデ、工具による調整	
356	V-2区 包含層	土師器 甕	(14.2)	(5.7)	-	-	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下多 赤色粒	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ヘラケズリ	
357	V-2区 包含層	土師器 甕	16.0	(5.1)	-	-	にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下多 赤色粒少	外：ナデ、ハケメ、ユビオサエ 内：ナデ、ハケメ	
358	V-2区 包含層	土師器 甕	-	(5.5)	-	-	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下多 黒色粒、赤色 粒多	外・内：ナデ、ハケメ	
359	V-4区 包含層	土師器 把手	-	(2.8)	-	-	明褐色 (5YR5/6)	1mm以下多 赤色粒	ユビオサエ	

土器観察表凡例

- ・口径の（数値）は、その残存率が1/6以下であることを示す。その他の項目の（数値）は、残存最大値を示す。
- ・色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
- ・胎土は次の例のとおり省略して記してある。
（例）1mm以下の砂粒（長石・石英）を多く含み、赤色土粒を多く含む。 → 1mm以下多、赤色粒多

石製品観察表

掲載 番号	調査区	遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	石 材	時 期	残存状況	備 考
				長さ	幅	厚さ					
S 1	Ⅲ-1	包含層	スクレイパー	70.5	34.5	9.5	17.1	サヌカイト	縄文	完形	
S 2	Ⅲ-1	包含層	石鏃	22.0	21.0	6.0	1.5	サヌカイト	縄文	完形	
S 3	Ⅲ-1	包含層	石鏃	(16.5)	17.0	3.8	0.7	サヌカイト	縄文	欠損	
S 4	Ⅲ-2	包含層	石鏃	31.5	16.0	3.0	1.1	サヌカイト	縄文	完形	
S 5	Ⅲ-3	包含層	石鏃	20.5	19.5	5.0	1.2	サヌカイト	縄文	完形	
S 6	V-2	包含層	砥石	(123.0)	66.5	48.0	649.1	流紋岩	不明	欠損	

土製品観察表

掲載 番号	調査区	出土地点	器種	計測値(cm)				重量 (g)	色 調	備 考
				長さ	幅	最大厚	孔径			
C 1	I-2	包含層	土錘	(2.4)	(1.9)	(1.8)	0.7	4.9	浅黄橙 (10YR8/4)	
C 2	Ⅲ-1	表採	炉壁	(11.2)	9.2	3.8	-	288.5	-	
C 3	Ⅲ-2	旧流路	輪羽口	(11.0)	7.5	2.0	3.8	396.5	灰黄褐 (10YR6/2)	簧巻状成形痕、スサ混入
C 4	Ⅲ-2	旧流路	輪羽口	(5.6)	-	1.9	-	32.0	灰白 (5Y7/1)	うね状の成形痕
C 5	Ⅲ-2	旧流路	輪羽口	(2.8)	-	-	-	6.7	灰白 (2.5Y7/1)	うね状の成形痕
C 6	Ⅲ-2	旧流路	輪羽口	(13.5)	6.8	2.5	3.0	511.7	根元：灰黄 (2.5Y7/2) 先端：淡黄 (2.5Y8/4)	

掲載番号	調査区	出土地点	器種	計測値(cm)				重量(g)	色調	備考
				長さ	幅	最大厚	孔径			
C 7	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(4.4)	(5.3)	1.8	2.3	62.9	先端：褐灰 (10YR6/1)	簧巻状成形痕？
C 8	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(5.8)	(7.3)	2.8	2.8	173.0	灰黄 (2.5Y7/2)	簧巻状成形痕、スサ混入
C 9	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(5.7)	7.4	1.9	3.8	186.2	先端：橙 (7.5YR7/6)	
C10	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(7.1)	6.8	2.0	3.0	262.1	灰白 (5Y7/1)	簧巻状成形痕、スサ混入
C11	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(5.9)	6.8	2.3	3.0	177.3	先端：にぶい黄橙(10YR6/3)	
C12	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(7.0)	(6.0)	1.8	2.4	227.3	根元：灰黄 (2.5Y7/2) 先端：黄灰 (2.5Y6/1)	
C13	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(4.5)	6.2	1.8	3.2	114.3	灰白 (2.5Y8/2)	簧巻状成形痕
C14	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(7.2)	6.7	1.5	(4.2)	145.0	根元：灰黄 (2.5Y7/2) 先端：にぶい黄褐(10YR5/4)	簧巻状成形痕
C15	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(4.9)	5.8	1.6	2.8	103.3	灰黄 (2.5Y7/1)	簧巻状成形痕
C16	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(6.7)	6.1	2.1	2.4	186.2	根元：にぶい黄橙(10YR7/4) 先端：灰黄 (2.5Y6/2)	簧巻状成形痕
C17	Ⅲ-2	包含層	鞆羽口	(6.1)	-	2.2	-	90.9	先端：にぶい黄褐(5YR4/1)	
C18	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(6.4)	5.9	1.8	3.0	120.5	にぶい黄橙 (10YR6/3)	簧巻状成形痕
C19	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(5.8)	-	1.6	-	75.3	先端：灰 (7.5YR6/1)	
C20	Ⅲ-2	旧流路	鞆羽口	(4.5)	-	1.8	-	50.3	先端：浅黄 (2.5Y7/3)	
C21	Ⅲ-3	土坑 45	鞆羽口	(13.0)	6.9	2.6	2.6	398.4	根元：にぶい黄橙(10YR6/4) 先端：にぶい黄橙(10YR7/3)	簧巻状成形痕、スサ混入
C22	Ⅲ-3	包含層	鞆羽口	(10.3)	6.4	1.9	2.8	297.0	根元：にぶい黄橙(10YR6/4) 先端：灰黄褐 (10YR4/2)	簧巻状成形痕、スサ混入
C23	Ⅲ-3	包含層	鞆羽口	(7.7)	7.6	2.4	3.2	284.6	根元：にぶい黄橙(10YR7/3) 先端：にぶい黄橙(10YR7/4)	簧巻状成形痕
C24	Ⅲ-3	鍛冶炉 4	鞆羽口	(9.2)	6.5	1.7	3.3	207.2	根元：にぶい黄褐(10YR5/3) 先端：黄褐 (10YR5/6)	
C25	Ⅲ-3	包含層	鞆羽口	(4.0)	7.2	2.8	2.4	163.7	先端：にぶい黄橙(10YR7/4)	簧巻状成形痕
C26	Ⅲ-3	鍛冶炉 4	鞆羽口	(5.7)	6.8	1.8	3.3	155.8	先端：浅黄 (2.5Y7/3)	
C27	Ⅲ-3	鍛冶工房	鞆羽口	(4.8)	-	2.8	-	83.3	先端：にぶい橙(7.5YR6/4)	
C28	Ⅳ-1	包含層	不明	(10.9)	(5.6)	(6.1)	3.5	183.7	淡黄 (2.5Y7/3)	

金属製品観察表

掲載番号	調査区	遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	残存状況	備考
				長さ	幅	厚さ			
M 1	Ⅰ-2	包含層	釘	(30.5)	8.6	4.9	3.6	先端部	
M 2	Ⅰ-1	包含層	釘	(61.2)	(5.1)	(3.0)	6.4	両端欠損	
M 3	Ⅱ-2	礎石建物 6	鈍？	(48.6)	19.5	3.8	9.4	欠損	
M 4	Ⅱ-5	掘立柱建物 1 - P 1	銅銭	24.5	24.5	2.0	1.8	完形	隆平永寶 (796年初鑄)
M 5	Ⅱ-5	掘立柱建物 1	釘	(58.0)	8.0	7.0	13.7	欠損	
M 6	Ⅱ-5	掘立柱建物 1	釘	(53.0)	10.0	-	4.5	欠損	
M 7	Ⅱ-2	包含層	釘	(69.1)	16.8	6.3	27.2	欠損	
M 8	Ⅱ-2	包含層	不明	36.8	28.0	6.1	6.5	欠損	
M 9	Ⅱ-5	包含層	釘	(46.5)	7.0	-	3.2	欠損	
M10	Ⅱ-4	包含層	火打金	29.0	53.0	2.5	15.2	欠損	穿孔 1 か所あり
M11	Ⅱ-5	包含層	不明	(167.0)	11.0	5.0	43.1	完形？	カギ状
M12	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	97.0	78.0	35.0	190.8	-	試料 KB1-1 (椀形鍛冶滓)
M13	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	73.0	71.0	32.5	172.4	-	ガラス質で礫を多く含む、炉底土付着
M14	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	78.0	68.0	30.5	166.1	-	試料 KB1-2 (椀形鍛冶滓)
M15	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	75.0	62.0	21.5	52.2	-	1~4mmの砂礫多く含む、全体にガラス質 試料 KB1-4 (椀形鍛冶滓)
M16	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	73.0	56.0	31.0	79.9	-	礫を含む、炉底土付着
M17	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	59.5	56.5	25.5	64.1	-	礫を含む、炉底土付着
M18	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	70.0	62.0	33.5	72.3	-	
M19	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	64.0	60.0	20.0	51.4	-	
M20	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	62.0	52.5	31.0	66.9	-	礫を含む、炉底土付着、ガラス質化
M21	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	64.0	46.0	23.5	51.7	-	
M22	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	49.5	48.0	22.0	50.2	-	礫を含む
M23	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	53.0	46.0	21.0	41.1	-	
M24	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	50.0	40.5	23.5	45.5	-	炉底土付着
M25	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	62.0	50.0	21.5	65.7	-	
M26	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	53.5	36.5	18.5	38.2	-	礫を含む
M27	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	50.0	38.5	18.0	29.3	-	底面に1~2mmの砂粒多 試料 KB1-3 (椀形鍛冶滓)
M28	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	43.0	40.0	13.0	47.1	-	礫を含む
M29	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	54.0	39.0	21.0	38.8	-	
M30	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	49.5	41.5	15.0	35.6	-	炉底土付着

掲載 番号	調査区	遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	残存状況	備 考
				長さ	幅	高さ			
M31	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	47.0	36.5	16.5	31.8	-	
M32	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	39.0	34.9	12.2	20.7	-	炉底土付着
M33	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	52.0	30.5	22.4	19.4	-	炉底土付着
M34	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	41.5	34.0	15.5	16.2	-	礫を含む、炉底土付着
M35	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	43.0	37.5	19.0	14.8	-	炉底土付着
M36	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	35.5	25.5	11.5	11.9	-	
M37	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	31.0	30.0	15.0	11.4	-	
M38	Ⅲ-1	包含層	鉄滓	43.0	36.0	16.5	15.3	-	
M39	Ⅲ-1	包含層	鈍	42.0	38.0	5.0	16.6	欠損	意図的に折り曲げられている
M40	Ⅲ-1	包含層	釘?	(23.0)	8.0	8.0	2.6	欠損	
M41	Ⅲ-1	土坑40	不明	(30.1)	6.0	2.0	1.7	欠損	
M42	Ⅲ-2	鍛冶炉3	釘?	(20.0)	7.0	5.0	1.6	欠損	
M43	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	155.5	90.0	47.5	573.5	-	礫・木炭含む 試料 KB2-1 (椀形鍛冶滓)
M44	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	120.0	105.0	51.0	392.7	-	礫・木炭含む、試料 KB2-2 (椀形鍛冶滓)
M45	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	71.5	48.0	51.0	208.9	-	試料 KB2-7 (椀形鍛冶滓)
M46	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	97.0	79.0	36.5	224.1	-	試料 KB2-3 (椀形鍛冶滓)
M47	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	118.5	84.5	31.0	262.7	-	礫を含む
M48	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	149.0	128.0	39.0	379.2	-	礫を多数含む、炉底土付着
M49	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	100.0	93.5	55.0	361.3	-	礫を含む、炉底土付着
M50	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	143.0	101.0	37.5	370.7	-	礫・木炭を含む、ガラス質、炉底土付着
M51	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	119.0	75.5	25.5	195.7	-	試料 KB2-10 (椀形鍛冶滓 ガラス質)
M52	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	109.0	64.5	23.5	126.9	-	試料 KB2-4 (椀形鍛冶滓)
M53	Ⅲ-2	包含層	鉄滓	80.5	62.5	36.0	172.5	-	炉底土付着
M54	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	76.5	67.0	25.0	105.7	-	
M55	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	72.5	64.0	30.0	121.8	-	ガラス質
M56	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	89.5	86.0	60.0	339.1	-	二段椀形滓、ガラス質
M57	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	67.0	47.0	21.0	64.8	-	試料 KB2-5 (椀形鍛冶滓)
M58	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	89.0	30.5	23.0	84.8	-	試料 KB2-8 (流動滓)
M59	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	61.0	33.5	25.0	34.2	-	試料 KB2-9 (流動滓)
M60	Ⅲ-2	旧流路	鉄滓	57.0	35.0	16.0	32.1	-	試料 KB2-6 (椀形鍛冶滓)
M61	Ⅲ-2	包含層	鉄滓	45.0	36.5	22.0	27.3	-	
M62	Ⅲ-2	包含層	釘	(34.0)	8.0	9.0	6.6	欠損	
M63	Ⅲ-2	包含層	釘?	(25.0)	8.0	5.0	1.6	欠損	
M64	Ⅲ-2	包含層	釘	(24.0)	8.0	4.0	1.2	欠損	
M65	Ⅲ-3	鍛冶工房	鉄滓	109.5	132.0	48.0	624.7	-	試料 KB3-1 (含鉄鉄滓)、県報告203再録(第113図M2)
M66	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	142.5	94.0	39.0	400.5	-	木炭を含む、炉底土付着
M67	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	86.0	85.5	46.0	334.8	-	炉底土付着
M68	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	109.0	93.0	42.0	472.3	-	試料 KB3-2 (椀形鍛冶滓)
M69	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	87.5	69.0	22.5	101.0	-	
M70	Ⅲ-3	鍛冶工房	鉄滓	49.5	48.0	24.5	46.3	-	礫を多く含む、炉底土付着
M71	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	71.5	69.5	41.5	150.4	-	
M72	Ⅲ-3	鍛冶工房	鉄滓	92.5	79.5	29.0	243.0	-	礫・木炭を含む
M73	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	72.0	54.0	27.5	66.7	-	礫を含む、僅かにガラス質、炉底土付着
M74	Ⅲ-3	土坑46	鉄滓	71.0	45.5	25.5	74.1	-	試料 KB3-3 (製錬系含鉄滓)
M75	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	66.0	50.0	29.0	92.7	-	
M76	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	83.5	49.5	28.0	115.4	-	炉底土付着
M77	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	70.5	52.5	25.5	90.8	-	炉底土付着、裏面に木炭付着
M78	Ⅲ-3	包含層	鉄滓	67.5	48.0	30.0	99.2	-	炉底土付着、裏面に礫多数付着
M79	Ⅲ-3	包含層	鈍	(27.5)	14.0	3.0	2.7	欠損	鎌の可能性もあり
M80	Ⅲ-3	包含層	鈍	(15.0)	11.5	2.5	1.2	欠損	
M81	Ⅲ-3	包含層	刀子	(18.0)	10.0	4.0	1.7	欠損	茎、目釘穴あり
M82	Ⅲ-3	包含層	刀子	(21.0)	14.0	5.5	1.7	欠損	茎
M83	Ⅲ-3	包含層	石ノミ?	74.0	18.0	14.0	54.8	完形	石切道具?
M84	Ⅲ-3	土坑45	釘	(14.0)	13.0	4.0	3.9	欠損	
M85	Ⅲ-3	表土	釘	(21.5)	4.5	4.0	2.3	欠損	
M86	Ⅲ-3	土坑44	釘	(15.5)	7.5	4.0	1.4	欠損	
M87	Ⅲ-3	包含層	釘?	(10.0)	5.0	4.0	0.6	欠損	
M88	Ⅲ-3	鍛冶工房	鑿?	21.0	16.5	4.0	3.1	完形	
M89	Ⅲ-3	包含層	不明	13.0	17.0	5.0	2.1	完形	
M90	Ⅲ-3	包含層	不明	(15.5)	16.0	4.0	1.7	欠損	
M91	Ⅲ-3	包含層	鉄鏝?	(26.0)	18.0	3.0	2.9	欠損	
M92	Ⅲ-3	包含層	不明	43.0	13.5	5.0	5.4	完形?	切断痕?あり
M93	Ⅲ-3	包含層	不明	(23.0)	29.0	3.0	3.7	欠損	
M94	Ⅳ-2	表土	楔	45.0	17.0	6.0	11.7	完形	
M95	V-2・3	表採	鉄滓	58.0	45.8	22.0	65.0	-	底面に礫・砂付着

ガラス製品観察表

掲載番号	調査区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	時期	残存状況	備考
				長さ	幅	厚さ				
G 1	V - 1	包含層	ガラス棒	116.4	19.2	19.2	80.1	現代	完形	

遺構名称新旧対照表

掲載遺構名	調査区	旧調査区	旧遺構名	掲載遺構名	調査区	旧調査区	旧遺構名
礎石建物 1	-	-	-	土坑43	Ⅲ - 3	B 3	No.1 土坑
礎石建物 2	Ⅱ - 9	A 2 - 10	No.1 礎石建物	土坑44	Ⅲ - 3	B 3	No.5 土坑
礎石建物 3	-	-	-	土坑45	Ⅲ - 3	B 3	No.6 土坑
礎石建物 4	-	-	-	土坑46	Ⅲ - 3	B 3	No.4 土坑
礎石建物 5	Ⅱ - 4	A 2 - 9	No.1 礎石建物	土坑47	Ⅲ - 3	B 3	No.3 土坑
礎石建物 6	Ⅱ - 2	A 2 - 2	No.2 礎石建物	土坑48	Ⅲ - 3	B 3	No.2 土坑
礎石建物 7	Ⅱ - 12	A 2 - 5	No.1 礎石建物	土坑49	Ⅳ - 1	C 1	No.6 土坑
掘立柱建物 1	Ⅱ - 5	A 2 - 3	No.6 掘立柱建物	土坑50	Ⅳ - 1	C 1	No.2 土坑
掘立柱建物 2	V - 2	C 2	No.5 掘立柱建物	土坑51	Ⅳ - 1	C 1	No.4 土坑
土坑 1	I - 1	A 1 - 2	被熱土坑 1	土坑52	Ⅳ - 1	C 1	No.1 土坑
土坑 2	I - 1	A 1 - 2	No.1 土坑	土坑53	V - 1	C 5	No.1 土坑
土坑 3	I - 1	A 1 - 2	被熱土坑 2	土坑54	V - 1	C 5	No.2 土坑
土坑 4	I - 1	A 1 - 2	柱穴 1	土坑55	V - 1	C 5	No.3 土坑
土坑 5	I - 2	A 1	No.1 土坑	土坑56	V - 2	C 2	No.3 土坑
土坑 6	I - 2	A 1	No.10 土坑	土坑57	V - 2	C 2	No.4 土坑
土坑 7	I - 2	A 1	No.4 土坑	土坑58	V - 2	C 2	No.2 土坑
土坑 8	I - 2	A 1	No.16 土坑	土坑59	V - 2	C 2	No.1 土坑
土坑 9	I - 2	A 1	No.19 土坑	土坑60	V - 4	C 4	No.1 土坑
土坑10	I - 2	A 1	No.17 土坑	鍛冶炉 1	Ⅲ - 1	B 1	No.3 鍛冶炉
土坑11	I - 2	A 1	No.20 土坑	鍛冶炉 2	Ⅲ - 2	B 2	No.2 鍛冶炉
土坑12	I - 2	A 1	No.23 土坑	鍛冶炉 3	Ⅲ - 2	B 2	No.1 鍛冶炉
土坑13	I - 2	A 1	No.22 土坑	鍛冶炉 4	Ⅲ - 3	B 3	No.11 鍛冶炉
土坑14	I - 2	A 1	No.14 土坑	鍛冶炉 5	Ⅲ - 3	B 3	No.15 鍛冶炉
土坑15	I - 2	A 1	No.15 土坑	鍛冶炉 6	Ⅲ - 3	B 3	No.9 鍛冶炉
土坑16	I - 2	A 1	No.31 土坑	鍛冶炉 7	Ⅲ - 3	B 3	No.8 鍛冶炉
土坑17	I - 2	A 1	No.29 土坑	鍛冶炉 8	Ⅲ - 3	B 3	No.7 鍛冶炉
土坑18	I - 2	A 1	No.30 土坑	鍛冶炉 9	Ⅲ - 3	B 3	No.10 鍛冶炉
土坑19	I - 2	A 1	No.24 土坑	鍛冶炉10	Ⅲ - 3	B 3	No.12 鍛冶炉
土坑20	I - 2	A 1	No.33 土坑	鍛冶炉11	Ⅲ - 3	B 3	No.13 鍛冶炉
土坑21	Ⅱ - 2	A 2 - 2	No.5 土坑	鍛冶炉12	Ⅲ - 3	B 3	No.14 鍛冶炉
土坑22	Ⅱ - 2	A 2 - 2	No.1 土坑	溝 1	I - 1	A 1 - 2	No.1 溝
土坑23	Ⅱ - 2	A 2 - 2	No.4 焼土面	溝 2	I - 1	A 1 - 2	No.2 溝
土坑24	Ⅱ - 2	A 2 - 2	No.4 焼土面	溝 3	Ⅱ - 5	A 2 - 3	No.10 溝
土坑25	Ⅱ - 2	A 2 - 2	No.9 土坑	火処 1	I - 1	A 1 - 2	火処 1
土坑26	Ⅱ - 3	A 2 - 8	No.1 土坑	火処 2	I - 1	A 1 - 2	火処 2
土坑27	Ⅱ - 3	A 2 - 8	No.3 土坑	火処 3	I - 1	A 1 - 2	火処 3
土坑28	Ⅱ - 3	A 2 - 8	No.2 土坑	火処 4	I - 1	A 1 - 2	火処 4
土坑29	Ⅱ - 4	A 2 - 9	No.5 土坑	火処 5	I - 1	A 1 - 2	火処 5
土坑30	Ⅱ - 4	A 2 - 9	No.2 土坑	火処 6	I - 1	A 1 - 2	火処 6
土坑31	Ⅱ - 4	A 2 - 9	No.4 土坑	火処 7	I - 1	A 1 - 2	火処 7
土坑32	Ⅱ - 4	A 2 - 9	No.9 土坑	土器溜まり 1	I - 2	A 1	No.26 土器溜まり
土坑33	Ⅱ - 5	A 2 - 3	No.11 土坑	土器溜まり 2	I - 2	A 1	No.2 土器溜まり
土坑34	Ⅱ - 4	A 2 - 9	No.13 土坑	土手状遺構 1	Ⅳ - 1	C 1	土手状遺構
土坑35	Ⅱ - 6	A 2 - 4	No.4 土坑	土手状遺構 2	Ⅳ - 2	D	土手状遺構
土坑36	Ⅱ - 9	A 2 - 10	No.5 土坑	基壇状遺構	I - 2	A 1	基壇状遺構
土坑37	Ⅱ - 9	A 2 - 10	No.7 土坑	石列 1	I - 2	A 1	No.21 石列
土坑38	Ⅱ - 12	A 2 - 5	No.4 土坑	石列 2	Ⅲ - 1	B 1	No.2 石列
土坑39	Ⅱ - 12	A 2 - 5	No.5 土坑	礎石列 1	Ⅱ - 5	A 2 - 3	No.2 礎石列
土坑40	Ⅲ - 1	B 1	No.1 土坑	柱穴列 1	Ⅱ - 6	A 2 - 4	No.3 柱穴列
土坑41	Ⅲ - 2	B 2	No.4 土坑	集石遺構	V - 1	C 5	集石遺構
土坑42	Ⅲ - 2	B 2	No.3 土坑				



1 I-2区 北半部全景 (南から)



2 I-1区 西部全景 (北西から)



3 I-1区 南部全景 (北東から)



4 I-2区 南部全景 (北西から)



5 I-2区 南部全景 (北から)

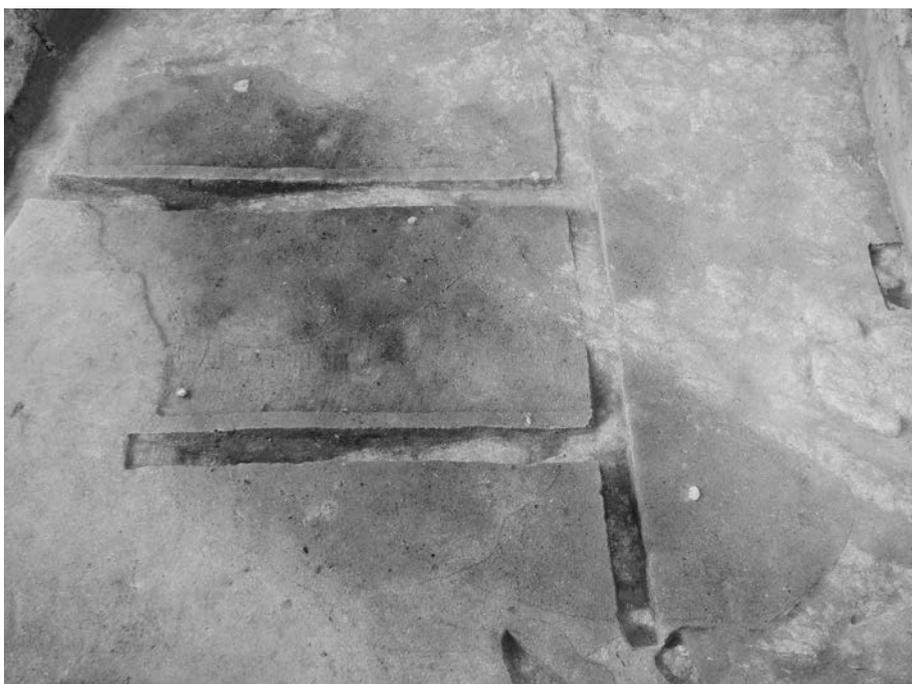
図版 2



1 I-2区
土坑 16 (西から)



2 I-2区
石列 1 (北東から)



3 I-1区
火処 1~5
(南東から)



1 I-2区 土器溜まり1 (西から)



2 I-2区 土器溜まり1 (南東から)



3 I-2区 土器溜まり1 (北から)

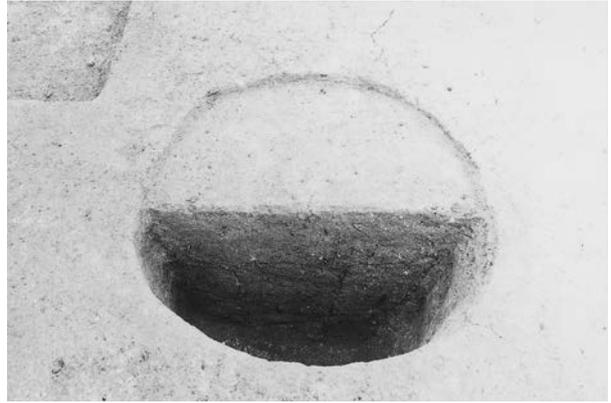


4 I-2区 土器溜まり1 (南東から)

図版 4



1 I-2区 柱穴1 (南西から)



2 I-2区 柱穴4 (南から)



3 I-2区 柱穴5 (南東から)



4 I-1区 土坑1 (南から)



5 I-1区 土坑3 (北西から)



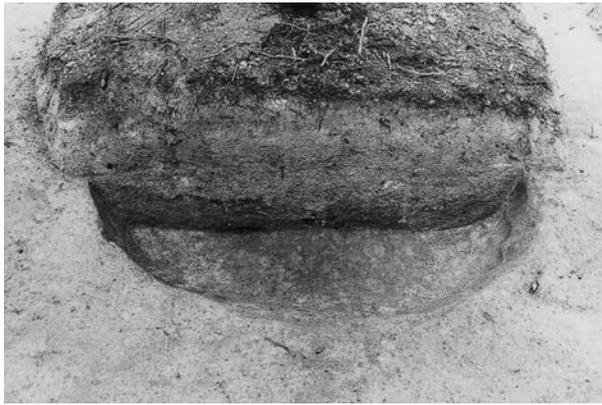
6 I-1区 土坑4 (南西から)



7 I-2区 土坑5 (南から)



8 I-2区 土坑6 (南から)



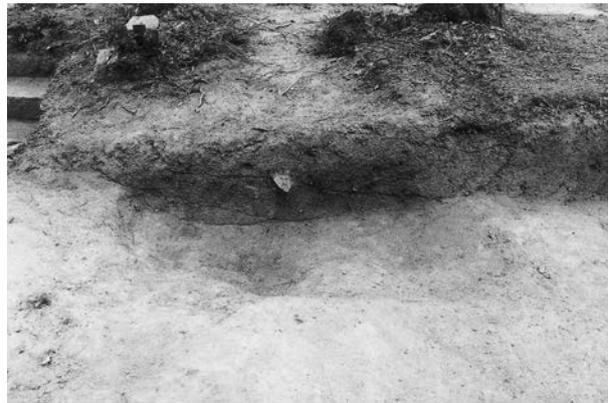
1 I-2区 土坑7 (南西から)



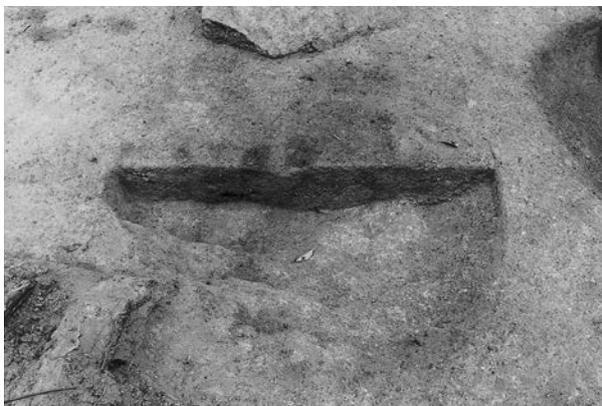
2 I-2区 土坑8 (西から)



3 I-2区 土坑10 (西から)



4 I-2区 土坑11 (南東から)



5 I-2区 土坑12 (南東から)



6 I-2区 土坑13 (南西から)



7 I-2区 土坑14 (左)・15 (右) (東から)



8 I-2区 土坑18 (西から)

図版 6



1 II-9区 礎石建物2 (北から)



2 II-9区 礎石建物2 礎石8 (南から)



3 II-9区 礎石建物2 礎石10 (南から)



4 II-9区 礎石建物2 礎石11 (東から)



5 II-9区 礎石建物2 雨仕舞い溝 (東から)



1 II-4区 礎石建物5 (西から)



2 II-4区 礎石建物5 西半部 (東から)

図版 8



1 II-4区 礎石建物5 石列 (南東から)



2 II-4区 礎石建物5 礎石1 (南から)



3 II-4区 礎石建物5 礎石3 (東から)



4 II-4区 礎石建物5 礎石16 (南西から)



5 II-4区 礎石建物5 雨仕舞い溝 (南東から)



1 II-2区 礎石建物6 (北西から)



2 II-2区 礎石建物6 礎石11 (北から)



3 II-2区 礎石建物6 礎石12 (北から)



4 II-2区 礎石建物6 礎石14 (北東から)



5 II-2区 礎石建物6 礎石15 (東から)

図版10



1 II-12区 礎石建物7 (北西から)



2 II-12区 礎石建物7 礎石5 (北西から)



3 II-12区 礎石建物7 礎石9 (東から)



4 II-12区 礎石建物7 礎石12 (北東から)



5 II-12区 礎石建物7 雨仕舞い溝(北西から)



1 II-5区 掘立柱建物1 基壇と石列（東から）



2 II-5区 掘立柱建物1（北東から）

図版12



1 II-5区 礎石列1 (北西から)



2 II-2区 土坑21 (南から)



3 II-2区 土坑25 (南から)



4 II-3区 土坑26 (南東から)



5 II-3区 土坑27(手前)・28(奥) (南西から)



6 II-4区 土坑30 (西から)



7 II-9区 土坑36 (南から)



8 II-12区 土坑38 (南西から)



1 II-2区 調査前 (東から)



2 II-4区 調査前 (東から)



3 II-9区 調査前 (南東から)



4 II-12区 調査前 (西から)



5 II-1区 土層断面 (北西から)



6 II-2区 土層断面 (北西から)



7 II-2区 土層断面 (北東から)



8 II-5区 土層断面 (南東から)

図版14



1 II-4区 土層断面 (南東から)



2 II-10区 土層断面 (東から)



3 II-11区 土層断面 (北東から)



4 II-12区 土層断面 (西から)



5 II-13区 土層断面(礎石建物7裏) (南西から)



6 II-3区 全景 (南西から)



7 II-8区 全景 (南西から)



8 II-13区 全景 (東から)

1 Ⅲ-1区 全景
(東から)



2 Ⅲ-1区
鍛冶炉1 (東から)



3 Ⅲ-1区
鍛冶炉1 平断面
(南東から)





1 Ⅲ-1区
石列2 (北から)



2 Ⅲ-1区
石列2土層断面
(東から)



3 Ⅲ-2区 全景
(南東から)

1 Ⅲ-3区
全景(北から)



2 Ⅲ-3区
鍛冶工房(東から)
↓鍛冶炉位置



3 Ⅲ-3区
鍛冶工房(南から)
↓鍛冶炉位置



図版18



1 III-1区 土坑40 (西から)



2 III-2区 鍛冶炉3 (南から)



3 III-2区 轡羽口出土状況 (南東から)



4 III-2区 土坑41土器出土状況 (東から)



5 III-3区 鍛冶炉10 (西から)



6 III-3区 鍛冶炉11・12 (西から)



7 III-3区 土坑43 (南東から)



8 III-3区 土坑48 (北西から)

1 IV-1区 調査前
(北東から)



2 IV-1区
土手状遺構 1
崩落石材
(東から)



3 IV-1区
土手状遺構 1
(東から)





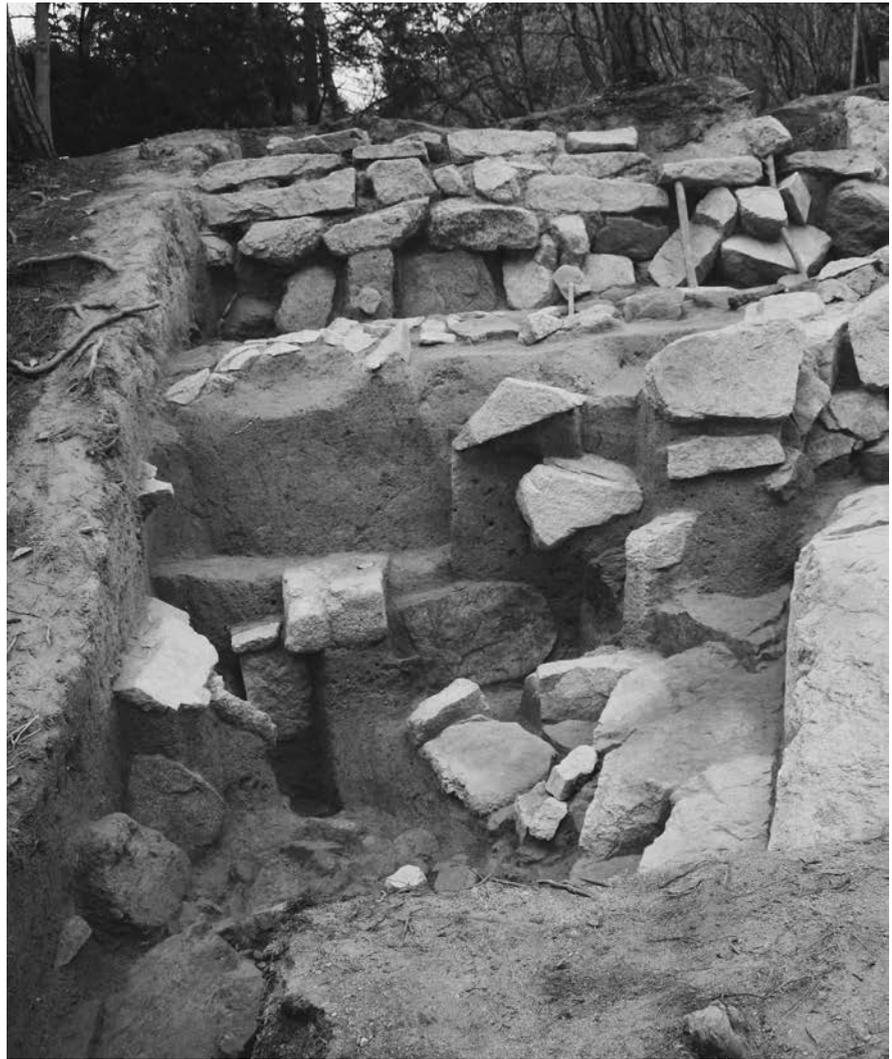
1 IV-1区
土手状遺構1
上段石垣
(北東から)



2 IV-1区
土手状遺構1
敷石
(北から)



3 IV-1区
土手状遺構1
下段石垣
(北東から)



1 IV-1区
土手状遺構1
前面石垣
(東から)



2 IV-1区 土手状遺構1 背面石垣 (西から)



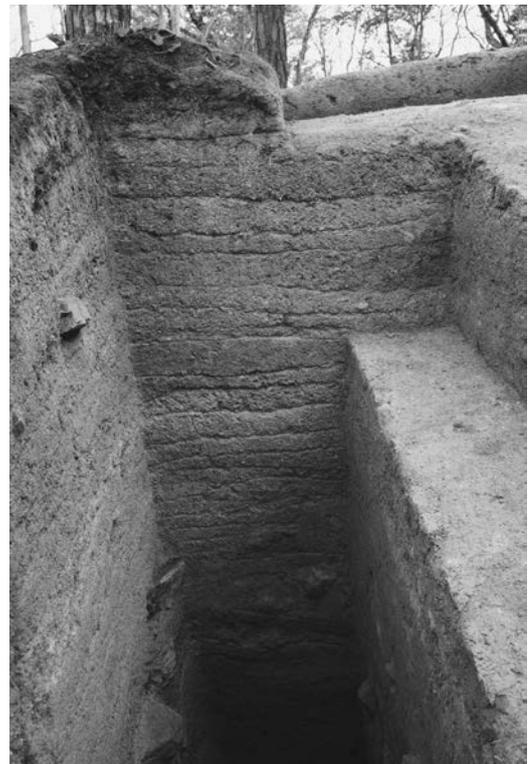
3 IV-1区 土手状遺構1
背面石垣 (西から)



1 IV-1区 土手状遺構1 T2南 土層断面（北東から）



2 IV-1区 土手状遺構1 T2南
南端土層断面（東から）



3 IV-1区 土手状遺構1
T2西 土層断面（西から）



4 IV-1区 土手状遺構1 全景（南東から）



1 IV-1区 T1全景 (南から)



2 IV-1区 T1北半部 (南西から)



3 IV-1区 T1南半部 (北西から)



4 IV-1区 土坑49 (北から)



5 IV-1区 土坑50 (南から)



1 IV-2区 調査前
(南東から)



2 IV-2区
土手状遺構2
調査前 (東から)



3 IV-2区
河道内石垣
(東から)

1 IV-2区
土手状遺構2
前面石垣
(北東から)



2 IV-2区
土手状遺構2
前面石垣
(東から)



3 IV-2区
土手状遺構2
前面石垣
(南東から)





1 IV-2区
土手状遺構2
前面石垣
(東から)



2 IV-2区
土手状遺構2
前面石垣
(東から)



3 IV-2区
土手状遺構2
前面石垣
(東から)

1 IV-2区
土手状遺構2
背面石垣
(西から)



2 IV-2区
土手状遺構2
背面石垣
(南西から)



3 IV-2区
土手状遺構2
被熱痕跡
(北東から)





1 IV-2区
土手状遺構2
溝（南から）



2 IV-2区
土手状遺構2
T1土層断面
（北東から）



3 IV-2区
土手状遺構2
T2土層断面
（北東から）

1 V-1区 全景
(南から)



2 V-1区 全景
(北西から)



3 V-1区
集石遺構
(南から)





1 V-2区 全景
(東から)



2 V-2区
掘立柱建物2
(北東から)



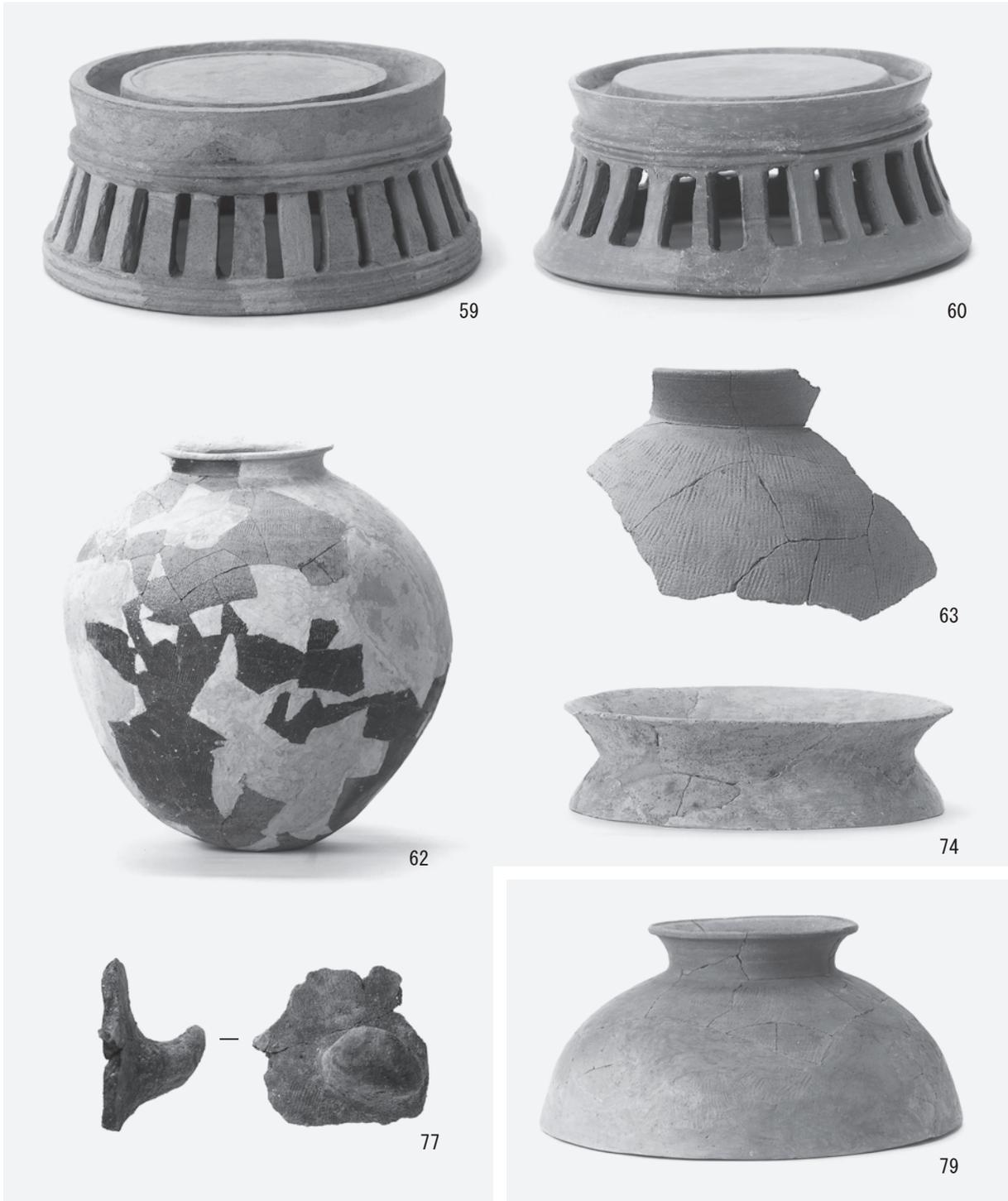
3 V-4区 全景
(東から)



I-2区 土器溜まり1出土遺物①



I-2区 土器溜まり1出土遺物②



1 I-2区 土器溜まり1出土遺物③

2 I-2区 土器溜まり2出土遺物



3 I区 遺構に伴わない遺物



1 II-9区 礎石建物2出土遺物

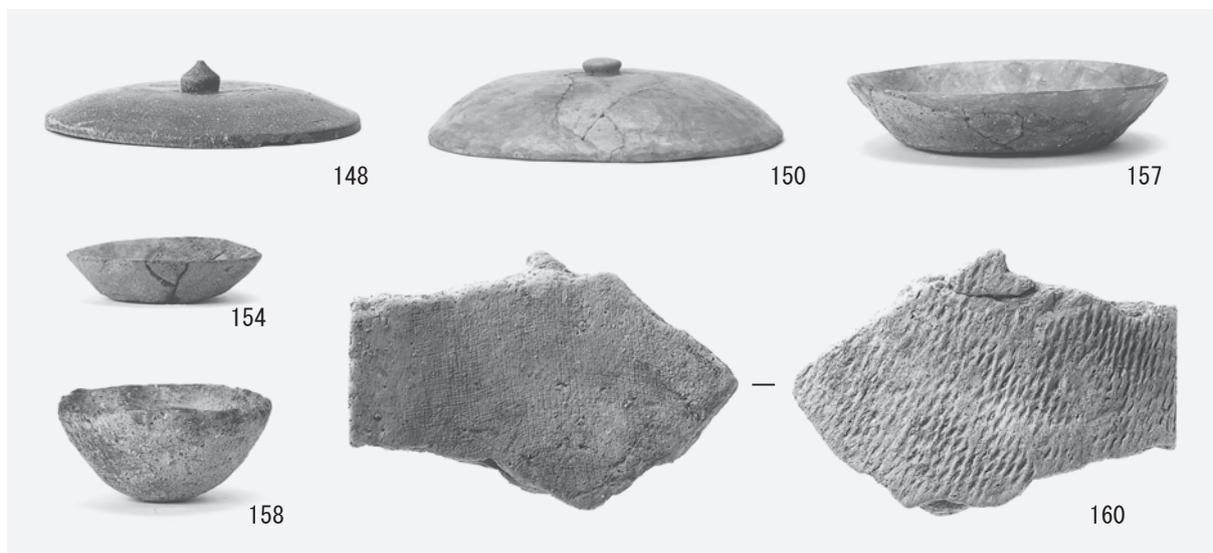


2 II-4区 礎石建物5平安期造成土・礎石抜き取り穴出土遺物



3 II-2区 礎石建物6出土遺物

4 II-12区 礎石建物7出土遺物



5 II-5区 掘立柱建物1出土遺物



164

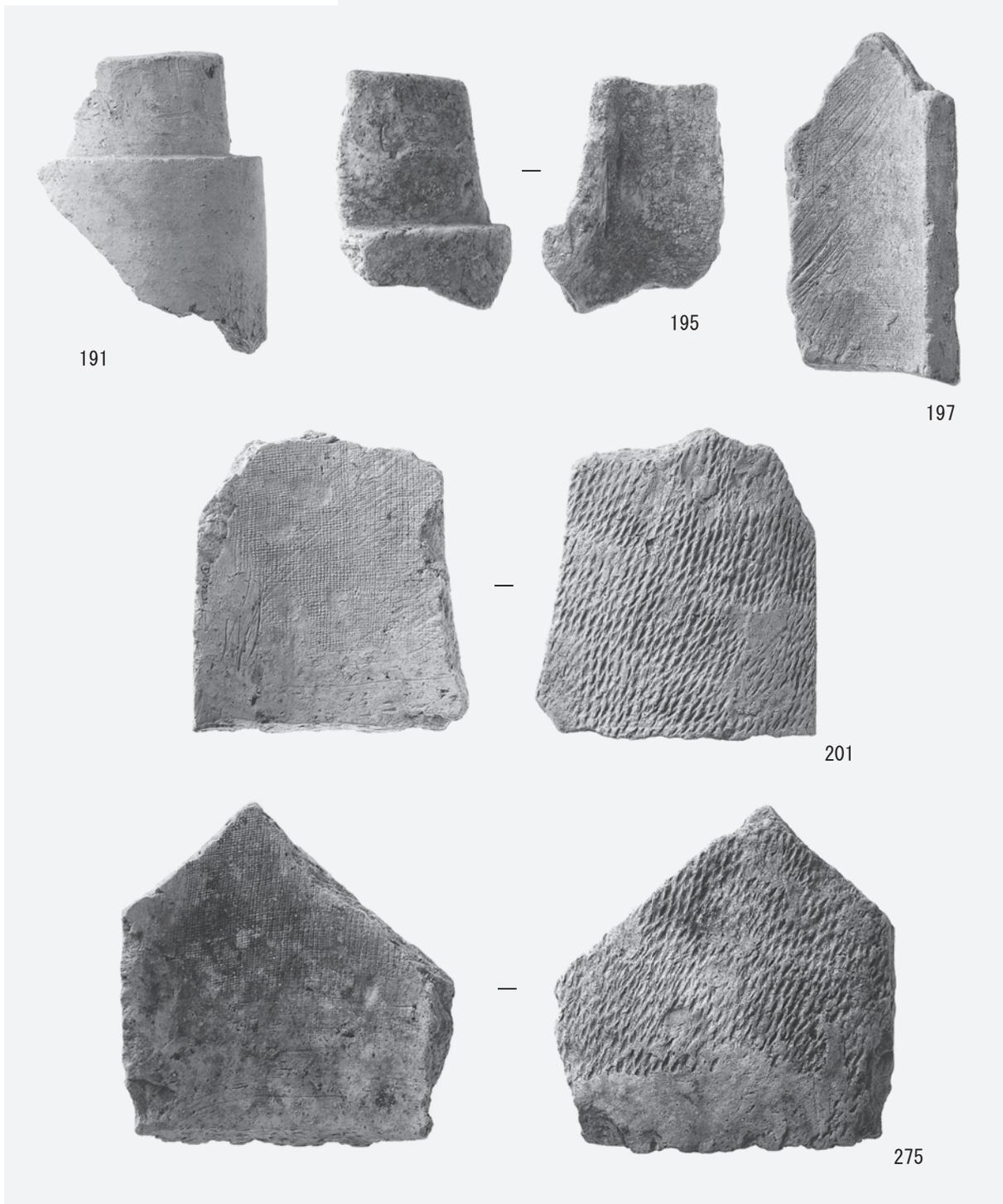


168



182

1 II-4区 土坑34出土遺物



191

195

197

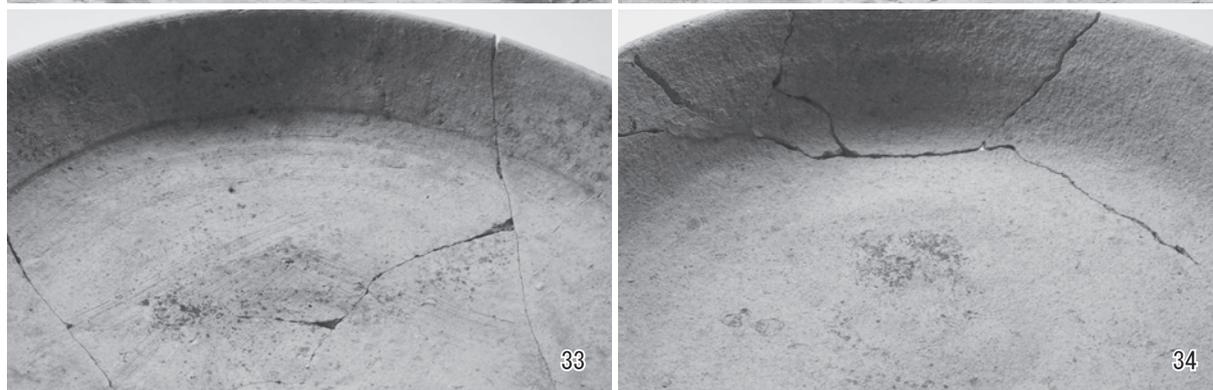
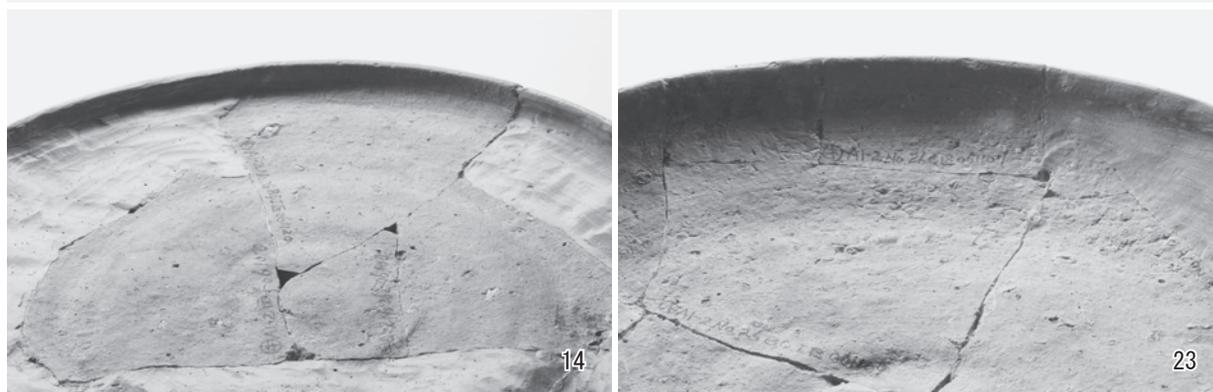
201

275

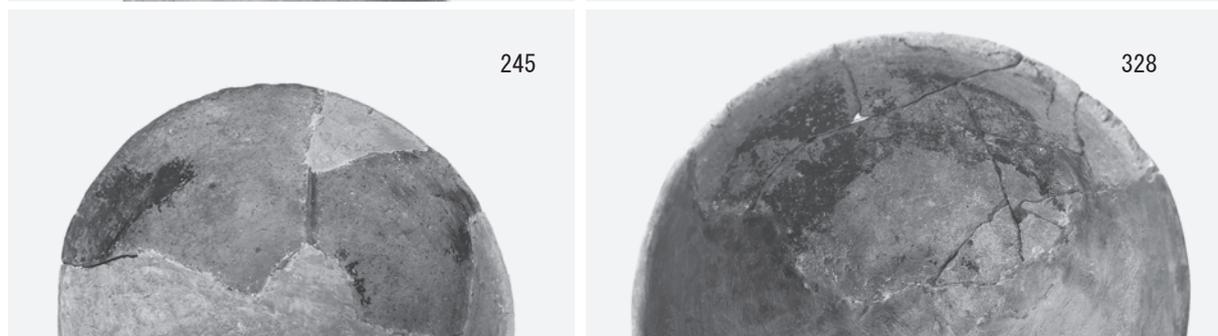
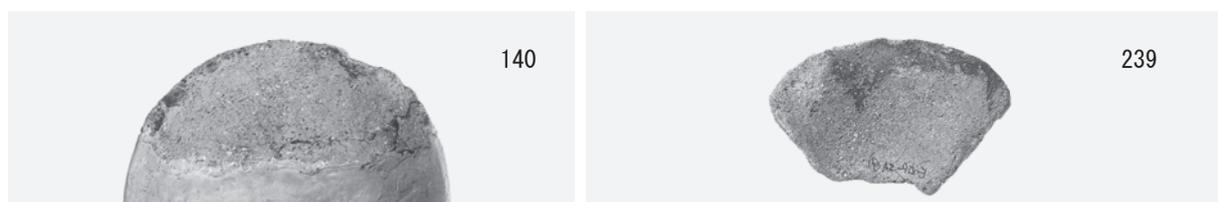
2 II区 遺構に伴わない遺物①



Ⅱ区 遺構に伴わない遺物②

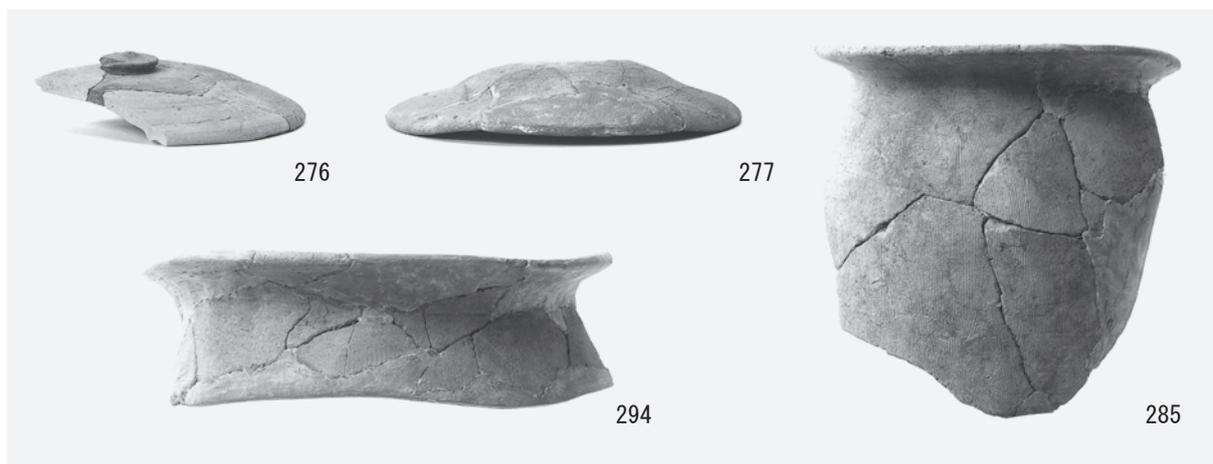


1 I·II区 転用硯

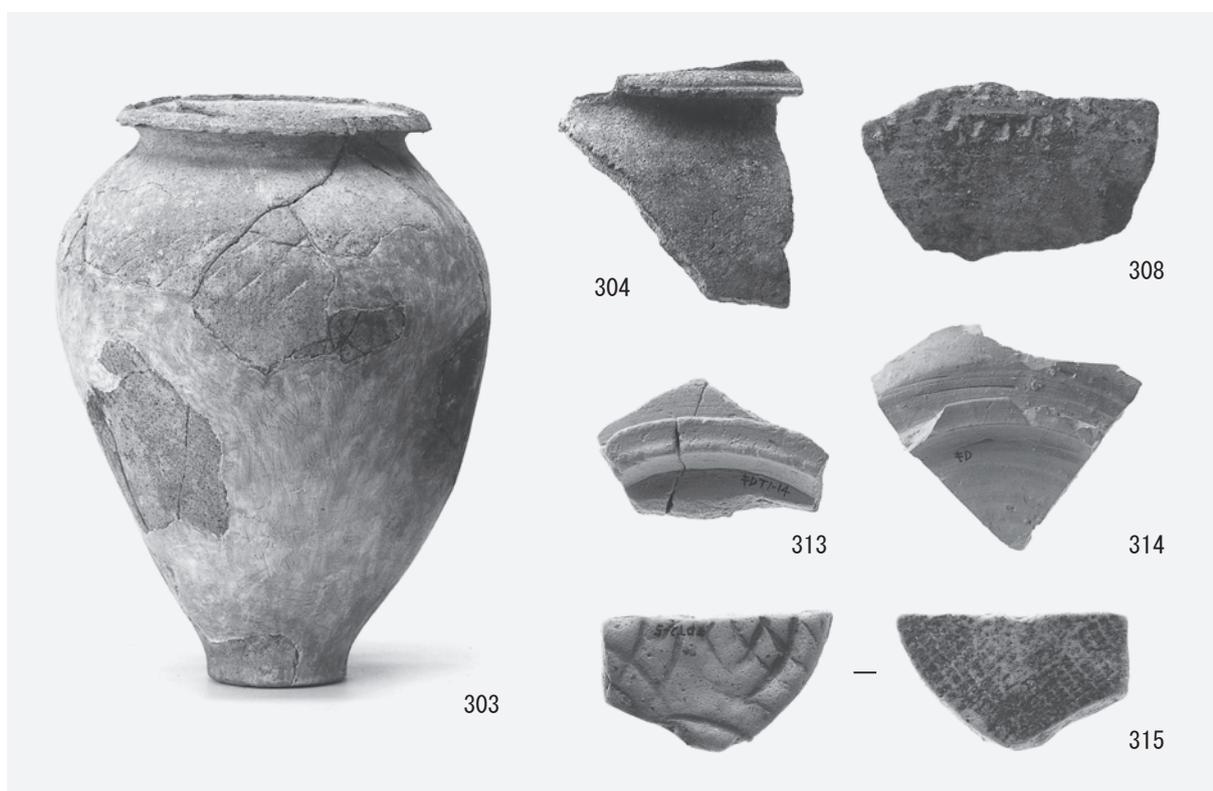


2 II·V区 煤付着土器

图版38



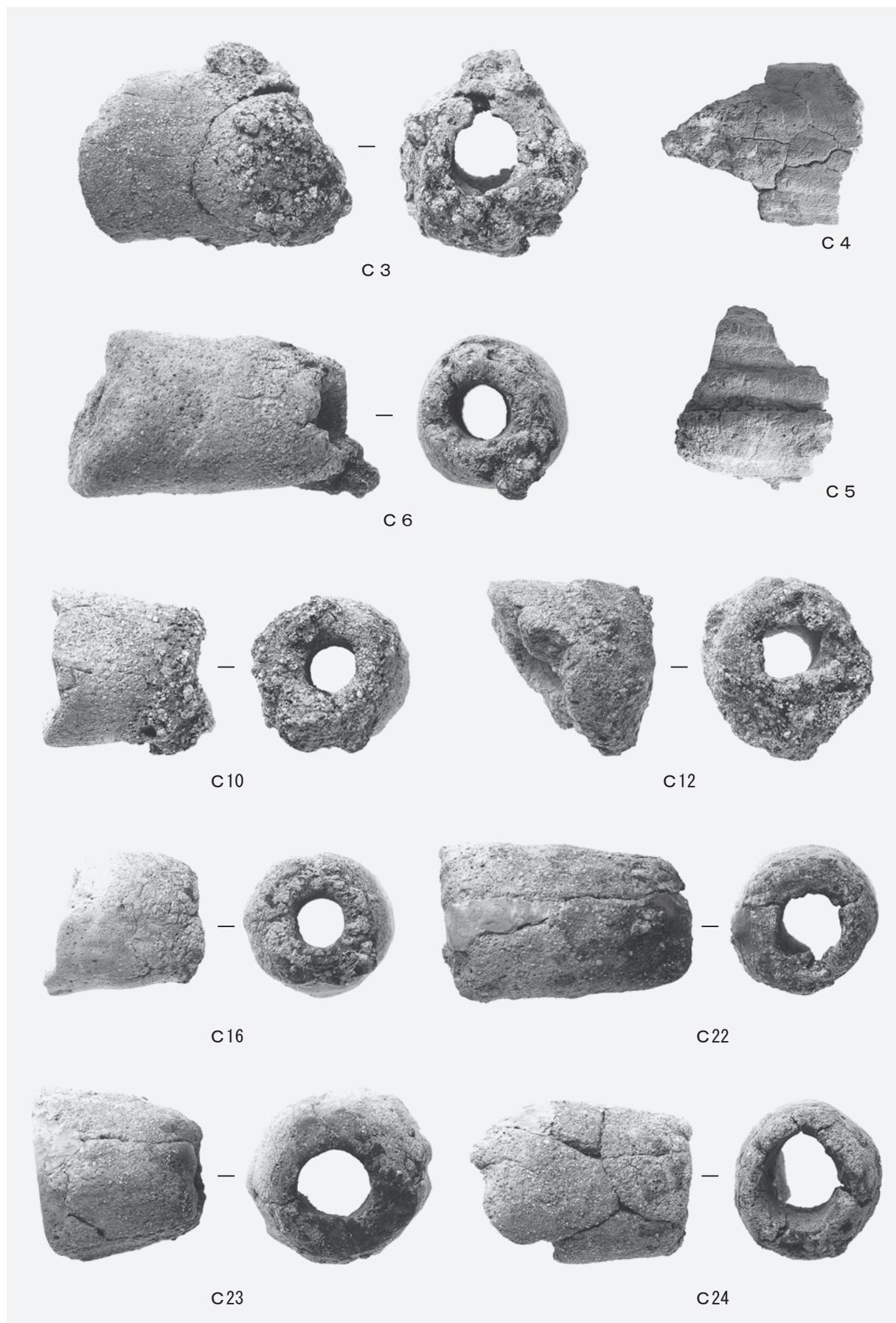
1 Ⅲ区 出土遺物



2 Ⅳ区 出土遺物

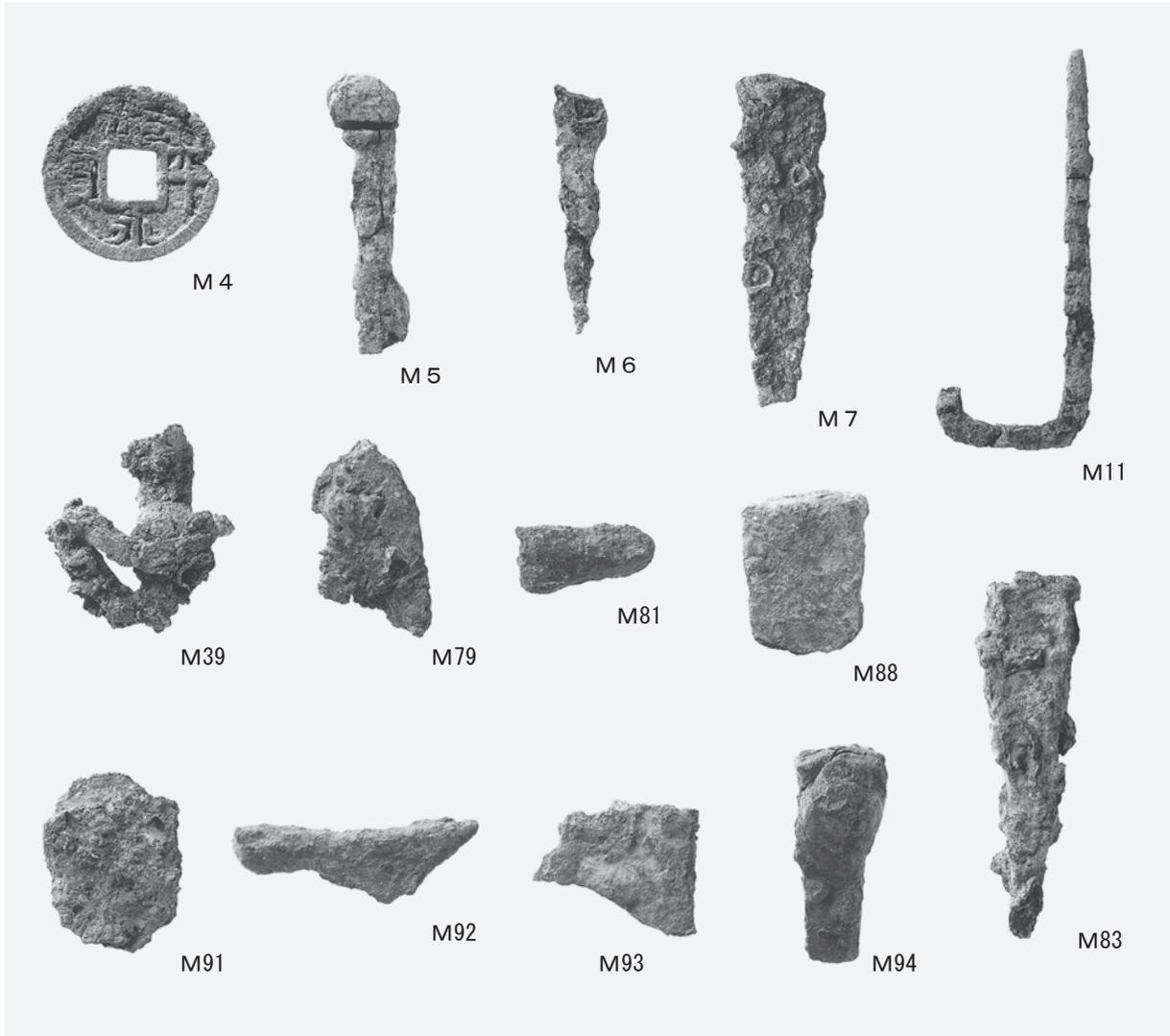


3 Ⅴ区 出土遺物

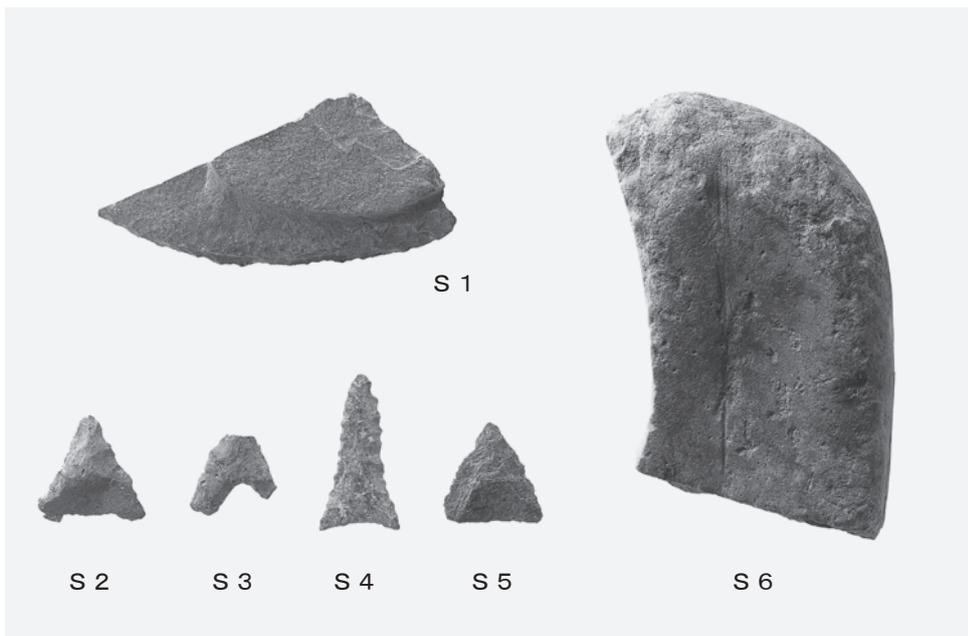


Ⅱ区 鞞羽口

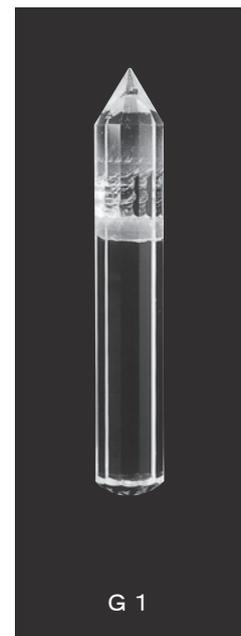
図版40



1 金属製品



2 石製品



3 ガラス製品

報告書抄録

ふりがな	しせき きのじょうざん							
書名	史跡 鬼城山2							
副書名	「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	236							
編著者名	金田善敬 岡本泰典 大橋雅也 尾上元規 河合 忍 上栴 武 石田爲成 三輪宜生 中原香織 大澤正己 白石 純							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142 http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2013年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きのじょうざん 鬼城山	おかやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市 おくさか 奥坂	33208	332080488	34° 43' 26"	133° 45' 50"	20060701～20061227 20070701～20071227 20080701～20081225 20090701～20091228 20100701～20101228 20110701～20111228	7,800	保存目的調査 活用目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
鬼城山	集落	縄文時代				縄文土器、 石鏃、スクレイパー		
		弥生時代				弥生土器		
	城館	飛鳥～ 奈良時代	古代山城 礎石建物4、基壇状遺構1、鍛冶工房1、 鍛冶炉12、土手状遺構2、土器溜まり2、 火処7、土坑16、柱穴9、溝3				土師器、須恵器、 畿内産土師器、 転用硯、瓦塔、 金属製品、 鉄滓、鞆羽口	
社寺	平安時代	山岳寺院 掘立柱建物2、集石遺構1、土坑30				土師器、須恵器、 黒色土器、瓦、 金属製品、 銅銭（隆平永寶）		
要約	<p>鬼城山（鬼ノ城）は、7世紀に築造されたと考えられる古代山城である。城内施設の解明を目的に調査を実施した。その結果、Ⅰ区では基壇状遺構や柱穴等を検出し、ここに城内施設が存在したことが分かった。また、土器溜まり1でまとまった須恵器・土師器が出土し、鬼城山の時期を考える上で貴重な資料を得た。Ⅱ区ではこれまでよく分かっていなかった礎石建物群を調査し、新たに4棟の礎石建物の構造が判明した。Ⅱ区は平安時代にも山岳寺院の一部として利用されたと考えられ、関連する遺構・遺物が出土した。Ⅲ区では計12基の鍛冶炉とあわせて鍛冶関連遺物（鞆羽口、鉄滓、鉄製品など）を検出し、この地区が鍛冶工房であったことが分かった。Ⅳ区では第5水門背後と第3水門上流の土手状遺構を調査した。城内の土手状遺構の調査は今回が初めてで、ともに石垣をもつ堰堤であった。Ⅴ区は北門背後の丘陵に設定、平安時代の集石遺構や掘立柱建物を検出した。</p> <p>今回の調査で鬼城山の城内利用の変遷を明らかにすることができた。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236

史跡 鬼城山 2

「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」
城内確認調査

平成25年 1月25日 印刷

平成25年 1月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社
岡山市北区富吉3098-1

